平城宮発掘調査報告Ⅵ

奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所学報第23冊

平城宮発掘調査報告Ⅵ

平城京左京一条三坊の調査

奈良国立文化財研究所

1974

序

奈良国立文化財研究所において，平城宮跡の発掘調査を継続的に開始して以来，既に15年の歳月を数えるに至った。発掘面積は23万平方メートルに達し，数々の遺構遺物が検出され，宮跡の姿は年を逐うて明らかになりつつある。しかしながら，特別史跡の指定面積124万平方メートルに比べ発掘を了した面積はその二割弱に過ぎず，また発掘の進行につれて既知の事実についても新たな検討を要する問題も提起されつつあり，今後もさらに心を奮い起こし常に心を新たにして発掘調査に取り組む必要が痛感される。

思えばこの発掘調査に取りくんだころに比べ，調査の機構は充実し，発掘・記録・保存等の技術も一段と進歩した。担当者の努力もさることながら，この宮跡の持つ意義に対する大方の認識や関係の方々の力に負うところが大きい。さらにこの宮跡の発掘調査が全国の遺跡の調査に及ぼした有形無形の影響を考えるとき，その任務の重さを改めて感ぜずには居られない。

発掘調査の成果については，逐次年報などにより速報するほか，慎重な検討の結果を学報として公表することとし，これまで5冊の刊行を了し，ここに第6冊を刊行するはこびとなった。まだ刊行に至らぬ調査成果が相当残されており，今後鋭意続刊すべく努力をつづけている。

このたびの報告は，平城宮と表裏一体をなす平城京の地域に属するものである。平城宮の範囲が八町四方の正方形ではなく，東方に張り出し

ていたことが発掘調査の結果明らかとなり，かねて計画されていた国道24号線バイパスの位置を変更することになった。このため新しい道路予定地を事前に発掘調査した結果の報告であり，主として昭和44年に実施したものである。この道路変更の問題は平城宮跡はもとより各地の重要遺跡の保存に大きな影響を及ぼしたものとして今なお記憶に新しいが，このたび報告書の刊行に当って当時の関係者の努力や遺跡保存のために犠牲をはらわれた各方面に対し，敬意の念新たなるをおぼえる。

この報告書をまとめるにあたって，平城宮跡発掘調査指導委員会の諸先生方をはじめ，石野博信，梅田敏見，江本義理，岡　邦祐，田辺昭三，楢崎彰一，山崎一雄，松田権六の諸先生に何かとお世話になった。ここに記して厚く御礼を申し述べる次第である。

昭和49年12月18日

奈良国立文化財研究所長

小　川　修　三

目　次

頁

Ⅰ　序　　言……1

Ⅱ　調査経過……5

1　概　　要……5

2　調査日誌……7

Ⅲ　平城京の遺跡……13

1　左京一条三坊十五・十六坪……13

2　東三坊大路……22

Ⅳ　平城京の遺物……25

1　木　　簡……25

2　瓦　　塼　類……33

3　土　　器……38

4　漆　　器……75

5　木　製　品……78

6　銭　　貨……97

7　金属器他……104

Ⅴ　古　　墳……109

1　ウワナベ古墳東外堤……109

2　平塚1号墳……118

3　平塚2号墳……122

4　古墳の検討……125

Ⅵ　考　　察 …… 128
1　遺　　跡 …… 128
2　遺　　物 …… 136
3　結　　語 …… 161

跋 …… 165

別　　表
1　6AFB区発見主要建物一覧表 …… 168
2　軒丸瓦分類表 …… 169
3　軒平瓦分類表 …… 172
4　軒平瓦・軒丸瓦編年表 …… 174
5　SD485出土土器新旧分類表 …… 176
6　漆器観察一覧表 …… 177
7　木製品計測値一覧表 …… 179
8　銭貨計測値分布図 …… 189
9　銭貨計測値一覧表 …… 190

English Summary …… 197

図　面

1　平城京左京一条三坊付近地形図
2　6AFB区遺構配置図
3　6AFB-J区実測図
4　6AFB-I北区実測図
5　6AFB-I南区実測図
6　6AFB-H区実測図
7　6AFB-H区上層実測図
8　6AFB-G•H区実測図
9　6AFB-H区西方トレンチ実測図
10　6AFB-F区実測図
11　6AFB-E•F区実測図
12　6AFB-D•E区実測図
13　6AFB-D区実測図
14　6AFB-C•D区実測図
15　6AFB-B•C区実測図
16　6AFB-A•B区実測図
17　6AFB区井戸実測図
18　ウワナベ古墳地形図
19　ウワナベ古墳K区実測図
20　ウワナベ古墳L区実測図
21　ウワナベ古墳東外堤土層図
22　平塚１号・２号墳地形図

彩色図版

巻首　木　　簡
1　遺　　構　1　SB470建物と平塚１号墳
　　2　SG520園池
2　遺　　物　1　施釉陶と磁器
　　2　緑釉陶と青磁
3　遺　　物　1　漆　　器
　　2　灰釉陶
4　遺　　物　　人　　形

図　版

1　6AFB区　　全　景
2　ウワナベ古墳　全　景
3　6AFB-I•J区　1•2　全　景
4　6AFB-J区　1　全　景
　　2　SB437建物
　　3　SD441溝・SB444建物
5　6AFB-I区　1　SD453溝・SB455建物
　　2　SB455建物
6　6AFB-I区　1　SB470建物
　　2　SB470建物・SD485溝
7　6AFB-I区　1　SB471建物•SB482建物　SD477溝
　　2•3　SD485溝
8　6AFB-H区　1　上層遺構全景
　　2　中層遺構全景
　　3　下層遺構全景

9	6AFB-H区	1	SB501建物・SB502建物・SB504建物
		2	同　上
		3	同　上
10	6AFB-H区	1	SB480建物・SB490建物・SD485溝
		2	同　上
		3	同　上
11	6AFB-H区	1	SB481建物・SB482建物
		2	SB490建物
12	6AFB-H区		SD485溝全景
13	6AFB-H区	1	SD485溝部分
		2	同　上
14	6AFB-H区	1	SB510建物
		2	同　上
		3	同　上
15	6AFB-G区	1	SG520園池
		2	同　上
16	6AFB-G区	1	SG520園池部分
		2	同　上
17	6AFB-F・G区	1	全　景
		2	SB530建物
		3	SB550建物
18	6AFB-F区	1	全　景
		2	SA553柵・SA554柵 SB556建物
		3	SB560建物・SB565建物
19	6AFB-H・I区	1	SE495井戸
		2	同上細部
		3	SE466井戸
20	6AFB-F・G・I区	1	SE545井戸
		2	SE464井戸
		3	SE525井戸
21	6AFB-G・F区	1	SX600大路 SD650溝
		2	SX600大路
		3	SX600大路部分
22	6AFB-A~E区	1	SD650溝
		2	SX600大路 SD650溝
23	6AFB-C・D区	1	SX600大路
		2	SD611溝 SA617柵
		3	同　上
24	6AFB-A・B・D区	1	SD650溝部分
		2	同　上
		3	同　上
25	ウワナベ古墳	1	全　景
		2	全　景
26	ウワナベ古墳P区	1	外　堤
		2	同上葺石
27	ウワナベ古墳O区		外　堤
28	ウワナベ古墳L区		外堤・外濠
29	ウワナベ古墳L区	1	外堤・埴輪列
		2	同上据付痕跡
		3	埴輪列
30	ウワナベ古墳L区	1	外堤・埴輪列
		2	埴輪列細部
		3	埴輪列据付細部
31	ウワナベ古墳K区	1	外堤・外濠
		2	同　上
		3	埴輪列
32	平塚1号墳	1	墳丘・北濠
		2	墳丘・くびれ部
		3	墳丘・南濠
33	平塚1号墳	1	墳丘・南濠
		2	くびれ部埴輪列
		3	墳丘北斜面葺石
34	平塚2号墳	1	墳丘・周濠
		2	墳丘・西濠
		3	同上部分
35	平塚2号墳	1	墳丘西斜面葺石
		2	墳丘北斜面葺石
		3	同上部分
36	SD485　木　簡		
37	SD485　木　簡		

38 SD485 木 簡
39 SD485 木 簡
40 SD485 木 簡
41 SD650 木 簡
42 SD650 木 簡
43 SD650 木 簡
44 SD650 木 簡
45 SD650 木 簡
46 軒丸・軒平瓦
47 軒丸・軒平瓦
48 軒丸瓦
49 軒丸瓦
50 軒丸瓦
51 軒平瓦
52 軒平瓦他
53 緑釉水波文塼
54 鬼 瓦
55 SD485 土師器
56 SD485 土師器
57 SD485 土師器
58 SD485 須恵器
59 SD485 須恵器
60 SD485 須恵器
61 SD485 須恵器
62 SD485 須恵器
63 SD485 須恵器
64 SD485 硯・土馬
65 SD485 墨書土器
66 SD650A 土師器
67 SD650A 土師器
68 SD650A 須恵器
69 SD650A 須恵器
70 SD650A 黒色土器
71 SD650A 灰釉陶器
72 SD650A 緑釉陶器
73 SD650 緑釉陶器・磁器
74 SD650B 土師器
75 SD650B 須恵器
76 SD650B 黒色土器
77 SD650B 灰釉陶器
78 SD650B 緑釉陶器
79 SD650 硯・土馬
80 SD650 墨書土器
81 SD650 漆 器
82 SD650 漆 器
83 SD485 木製品
84 SD485 木製品
85 SD485 木製品
86 SD650 木製品
87 SD650 木製品
88 SD650 木製品
89 SD650 木製品
90 SD650 木製品
91 SD650 木製品
92 SD650 木製品
93 SD650 木製品
94 SD650 木製品
95 SD650 木製品
96 SD650 木製品
97 SD650 木製品
98 SD650 木製品
99 SD650 銭 貨
100 SD650 銭 貨
101 SD650 銭 貨
102 SD650 金属器
103 SD650 金属器
104 SD650 石製器
105 ウワナベ古墳 埴 輪
106 ウワナベ古墳 埴輪・土器
107 平塚2号墳 埴 輪
108 平塚1号墳 埴 輪
109 平塚2号墳 埴 輪

挿　図

1　ウワナベ古墳東外堤発掘状況…… 3
2　ウワナベ古墳地区割図…… 6
3　6AFB区地区割図 …… 6
4　移設した奈良時代の庭園……12
5　平塚１・２号墳整地土層図……14
6　SD485土層図……17
7　SG520実測図……19
8　SD566土層図……21
9　SD650Bの護岸状況……24
10　土師器杯・皿の法量による分類図……41
11　須恵器杯Aの法量による分類図……46
12　須恵器杯Bの法量による分類図……46
13　6AFB-H•I 地区出土施釉陶器実測図 ……50
14　土錘実測図……74
15　大型人形復原図……83
16　車輪推定復原図……94
17　銭貨X線分析元素強度比較図…… 102
18　鉄製品実測図…… 107
19　車軸頭形鉄製品実測図…… 107
20　ウワナベ古墳復原図…… 113
21　SD732・734出土土器実測図 …… 117
22　平塚１号墳葺石実測図…… 118
23　平塚２号墳葺石実測図…… 122
24　古墳出土須恵器実測図…… 125
25　平城京条坊図…… 129
26　6AFB-F～J 地区主要遺構変遷図…… 133
27　緑釉水波文埦実測図…… 142
28　土管実測図…… 143
29　SD485土師器新旧比較図…… 144
30　SD650土師器杯・皿の分類図…… 148
31　削掛け型式分類図…… 151
32　人形型式分類図…… 151
33　帯金具型式分類図…… 155
34　帯金具A細分図…… 156
35　銅鈴法量分類図…… 160
36　石鈴法量分類図…… 161
37　6AFB区変遷図(1)…… 162
38　6AFB区変遷図(2)…… 163

表

1　調査期間と発掘面積一覧表…… 5
2　6AFB-F～J 地区整地期別遺構分類表……22
3　SD485出土土器個体別数量表……40
4　SD485墨書土器一覧表……52
5　SD485箆書き土器一覧表……53
6　SD650A様式土器個体別数量表……54
7　SD650緑釉陶器釉薬成分構成表……63
8　SD650B様式土器個体別数量表……66
9　SD650墨書土器・箆書き土器一覧表……73
10　漆器材質一覧表……77
11　帯金具法量表…… 104
12　石鈴法量表…… 108
13　ウワナベ古墳東外堤の海抜高…… 113
14　曲物容器分類表…… 153
15　下駄の分類と鼻緒孔…… 154
16　巡方・丸鞆分類表…… 157

平城宮発掘調査報告 Ⅵ

平城京左京一条三坊の調査

Ⅰ 序　　言

この報告書は，国道24号線バイパス路線予定地のうち，左京三坊大路の一条大路以北２坪分の路面および側溝と，その北北西に接する左京一条三坊十五・十六坪の一郭および「ウワナベ古墳」の東外堤部の工事にともなう事前発掘調査を実施した成果を一括収録したものである。

発掘調査は工事の進行順序および用地取得の進行状況によって出入りがあったが，1969年春のウワナベ古墳後円部東側外堤の第54次発掘にはじまり，同年春から秋にかけての左京一条三坊十五・十六坪の第55・56次発掘，夏から年末にいたる東三坊大路路面および側溝の第57次発掘，11月におこなった東三坊大路の一条通以南部分での第61次発掘，および10月から翌1970年１月にかけてのウワナベ古墳前方部東外堤の第60次発掘の順に実施した。その後，道路建設とは別に周辺の宅地造成にともなう若干の部分を調査したが，1970年５月には調査を完了した。

24号線バイパス問題　京都から奈良を通過して和歌山にいたる国道24号線は，奈良市に入るや奈良坂をへて，そのかみの東京極大路を南下し春日大社一鳥居前で三条大路に右折する。さらに左京三坊と五坊の中間に位置する現在の国鉄奈良駅前で左接して南下している。この道路は現在の奈良市の中心部を縦貫している幹線道路であるが，現在の交通量の増大にはとうてい応じきれない。このための国道24号線バイパスの建設が急がれ，早くから建設省近畿地方建設局奈良国道工事事務所が調査設計にあたっていた。1964年，奈良国道工事事務所から，磐之媛陵の濠の西をぬけ水上池に橋をかけ東一坊大路にそって南下する「東一坊大路」復原案をもって平城宮跡発掘調査部に内意が伝えられていた。これとは別に，平城宮跡発掘調査部では1963年から，平城宮跡の範囲確認の調査を実施していた。南面中央の朱雀門，西面南の玉手門，中央の佐伯門などの確認調査をおこなってきたが，道路が予定される東辺の調査については買収の進行とも関連し，その時点ではほとんど調査ができていなかった。その後東面北門推定地の発掘（第22次北―1964年11月～1965年５月），続いて東面中門推定地（第22次南―1965年２月～1965年７月）を調査したが，その位置で北門および中門の遺構を検出することはできなかった。そればかりでなく北門推定地には『造酒司』の遺構があり，平城宮の内部である疑いがはじめて生じてきた。この疑問を解明するため宮の東南隅推定地を発掘（第32次―1965年12月～1966年４月），ここでは二条大路と左京一坊大路の交叉点を明確に検出することができた。つぎに東面南門をさぐる発掘（第29次―1966年７月～1967年５月および39次―1966年12月～1967年５月）を実施したところ東面南

24号線バイパス

平城宮の調査

門が実は一坊大路をさえぎる形で，大路の上に南面して建てられていたことが明らかとなり，この門から築地大垣がさらに東に続いていることが判明した。つまり，この間の発掘調査を通じて南面する宮城門以北の地域には東一坊大路がおよばず，平城宮内にとりこまれる可能性がきわめて濃厚にただよってきたのである。一方奈良国道工事事務所は工事に伴う発掘届を1965年11月30日文化財保護委員会宛に提出した。これをうけて1965年12月1日に奈良でおこなわれた第1回の平城宮跡保存対策準備協議連絡会議でバイパス問題がとりあげられた。出席した関係者は，つぎの通りである。

当初の計画

奈良国立博物館次長	浦谷吉雄	
奈良国立文化財研究所長	小林剛	
同平城宮跡発掘調査部長	榧本亀治郎	
奈良県副知事	下位真一郎	
奈良市助役	長谷米次	代理　都市計画課長
奈良市教育長	上松宗平	
近畿財務局奈良財務部長	中田守夫	代理　総務課長
近畿地方建設局道路部長	山川尚典	
同奈良国道工事事務所調査課長	佐川光彦	
文化財保護委員会事務局長	村山松雄	
同　記念物課長	柳川寛治	

この会議では平城宮跡の買収，発掘調査及び整備経過の説明と問題点を討議し，さらに国道24号線バイパス問題もとりあげられた。国道工事事務所側からは東一坊・東三坊の両案を検討した結果，東一坊案を採用し，3万台ほどの交通量を予定し26mの幅員の平面道路で，近鉄，阪奈道路(現新大宮)までの間の高架部分には側道をつけ，まっすぐに南下したいとの説明があった。

翌1966年2月近畿地方建設局計画課，奈良国道工事事務所，奈良県計画課，同道路課，奈良市都市計画課，大和郡山市建設部，奈良県文化財保存課と文化財保護委員会記念物課が奈良市において協議した。その結果，路線が平城宮跡に平行する地域では，計画路線の西端で平城宮跡東外濠東端の線に一致させて中心線を決定すること，保存すべき遺構のある時は高架として残すこと，事前の遺構調査の費用は事業者負担とすること，宮跡以外の地域における埋蔵文化財も県と協議して事前に調査することなどのとりきめをした。これにもとづいて国道事務所に対し記念物課から発掘届に対する回答が1967年3月になされ，曲折をへたバイパス建設が建設大臣によって計画決定されることになった。建設省と文化財保護委員会との協議にもとづき，バイパス予定路線地域内の調査費を算定し，奈良県教育委員会と契約し，その発掘の実際は平城宮跡発掘調査部があたることになり，第39次発掘地点に北接する3.5a の地域を1967年9月より1968年4月にかけて発掘し(第43次)，その費用として1,222万円を要した。

事前調査

第43次の発掘調査が完了する以前に，第39次発掘において検出した南門の東側築地塀の延長部をさぐるため第39次発掘地の東方200m の地点で第44次の発掘調査をおこなった。この調査は1967年12月から1968年5月におよび，その結果，東院の東南隅を示す築地塀の曲がり角および壇地・大路などを検出し，その内側すなわち隅の西北側に池や遣水を伴う従来の類例にみない庭園遺構のあることも明らかになった。

路線の変更

これらの発掘の成果が明らかになるにつれ全国の有識者の間で東院の保存運動がはじまり，平城宮を分断せずに保存するようにとの声が各地でおこった。1966年に「奈良バイパスの平城宮跡通過に反対する協議会」が結成され，1967年4月から5月にかけて相継いで日本建築学会，関西文化財保存協議会，日本考古学協会，美術史学会等がバイパス通過反対と早急に保存対策をたてるようにとの声明を公表した。同年10月参議院建設委員および同文教委員が平城宮跡の実情を調査，その結果が委員会でそれぞれ報告された。これらの結果を受けて11月22日の文教委員会で剣木文部大臣は，文化財保護委員会が建設省に路線変更につき申入れをしたと答弁した。その後文化財保護委員会と建設省の間に種々の交渉がもたれ1968年3月9日の衆議院予算委員会，同月13日の衆議院文教委員会，同月14日の衆議院予算委員会で，バイパス問題がとりあげられて活発に論議された。同月27日の参議院予算委員会で，保利建設大臣が「路線を強行することは，適当ではなかろうと思っております」と答弁し，同年4月4日の参議院建設委員会で保利建設大臣はルートの変更問題について「これはやはり未来へのわれわれの義務を果していく上におきましても，貴重な文化財というものは損傷なく保存し，これを伝えるところの義務があると私は思う。そういうことで避けなければならないんじゃないかと考えておるわけでございます」と答え，しかしそのためには地元の御理解と御協力をいただきたいと結んだ。このような過程をへて，全国的な問題に展開した平城宮跡保存の大きな懸案が解決した。その間の全国有識者の努力はいうにおよばないが，新ルートによる地元の財政負担増という犠牲の上に保存が決定したことも忘れてはならない。以上の経過を受けて国道24号線バイパスの新しいルートが設計された。新路線は北から奈良市に入ってくる付近の変更はなかったが，自衛隊幹部学校北側で西に曲るのを関西線ぞいに東にふり，ウワナベ古墳の東外堤を南下し，東三坊大路に乗り，一条大路を南にこえた付近で西に曲り，平城宮の東南隅付近で当初予定した東一坊大路にのって近鉄路線をこえるというルートであった。路線予定地を事前に分布調査をしたが，ウワナベ古墳の東外堤全線と，それに南接する東三坊大路推定地域に京に関連する遺構が予想された。一条大路以南では地表面で何等の遺物も採集することができず，事前調査は一条大路以北の地域を対象とすることになった。

再度の事前調査

新路線内の発掘調査　1968年12月建設省近畿地方建設局奈良国道事務所と総額2,600万円で契約し，発掘は用地取得の順をまっておこなうことになった。発掘調査の最初は北方のウワナベ古墳外堤からで，ウワナベ古墳の濠の水を排出した冬期に実施しなければならなかった。そこで法華寺町の耕地整理組合との交渉に入ったが，交渉は伸々進捗

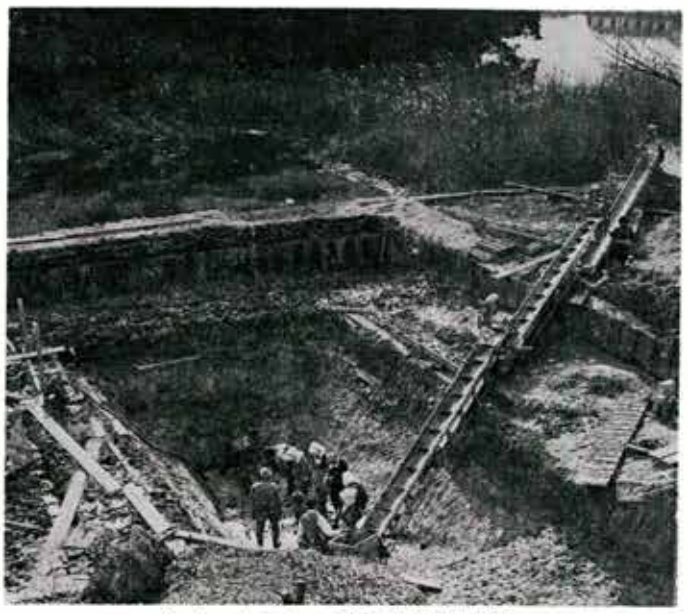


fig. 1　ウワナベ古墳東外堤発掘状況

せず，用水のたまりはじめた1969年2月上旬になってようやく発掘開始の話合いがついた。早速2月12日から発掘準備に入ったが1968年中に開始の予定が遅れたため，トレンチ周辺に土嚢を積むやら鉄矢板を打込むやらで発掘面積はきわめて圧縮され，ようやく外堤部裾の葺石を確かめる程度にとどまり，これの実測も写真測量にたよらざるを得ない状況に追い込まれた程であった。ほぼ同時に継続してはじめたウワナベ古墳外堤東南隅に南接する左京一条三坊十五・十六坪の発掘では京内の街衢の実態を明らかにするとともに，京の造営で破壊された2基の古墳の前方部の調査を実施した。1969年夏にはじまった東三坊大路の発掘では大路とその東側溝の有様が明らかとなったが，特に東三坊大路が平安時代になっても道路として用いられたことが東側溝出土品から明らかとなり，「告知板」など稀有の出土品がみられたことも道路の意味を考える上で重要な資料を提供した。1969年秋から翌年にかけて再びウワナベ古墳外堤の調査にかえり，外堤における埴輪樹立の実態を明らかにすることができた。

調査員　今回報告する第54・55・56・57・60・61・66次にわたる調査関係者はつぎの通りである。

調査責任者	奈良国立文化財研究所長	小林　剛
	奈良国立文化財研究所長	松下隆章
	平城宮跡発掘調査部長	坪井清足
調査員	第一調査室	沢村　仁　宮沢智士　猪熊兼勝　高島忠平　阿部義平　小笠原好彦　宮本長二郎　木下正史
	第二調査室	田中　琢　牛川喜幸　本村豪章　三輪嘉六　石井則孝　横田義章　村上訒一　稲田孝司　田辺征夫
	第三調査室	佐原　真　松下正司　藤原武二　伊東太作　石松好雄　安達厚三
	第四調査室	八賀　晋　細見啓三　工楽善通　森　郁夫　西谷　正　栗原和彦　田中哲雄　西村　康　甲斐忠彦
	保存整理室	横山浩一　河原純之　町田　章　佐藤興治　山沢義貴　黒崎　直　沢田正昭　八幡扶桑　佃　幹雄
	史料調査室	田中　稔　狩野　久　横田拓実　鬼頭清明　加藤　優

この報告書は1972年5月から整理・編集を開始し，1974年3月に完了し，その後に出版にとりかかった。遺構関係の整理検討は遺構調査室・計測修景調査室がおこない，木製品・金属製品等については考古第一調査室，土器類については考古第二調査室，瓦塼類については考古第三調査室，木簡および文献史料については史料調査室がそれぞれ担当した。文章化の段階における執筆分担はつぎの通りである。I坪井清足，II・V・VI1・3町田　章，III1藤原武二，III2・VI1宮本長二郎，IV1・VI2横田拓実，IV2・VI2田辺征夫，IV3・VI2小笠原好彦，IV3・VI2吉田恵二，IV4小野　昭，IV5・VI2黒崎　直，IV6沢田正昭，IV6・IV7・VI2佐藤興治，V西口寿生。英文要旨については山本忠尚が翻訳原稿を作成し，プリンストン大学のアフリダJ・マーク女史が翻訳した。遺構および遺物の写真撮影と印刷用複製は佃　幹雄，渡辺衆芳，藤村礼子が担当した。ただ，PL.1の写真は毎日新聞社から提供をうけた。以上のような整理過程をへて，調査部全体の討議をおこない，坪井清足の指導のもとに町田　章が編集した。

II 調査経過

1 概　　要

奈良盆地の北辺で東西約5Kmにわたって展開する奈良山丘陵は，海抜100m前後の小山塊からなり，洪積世佐保累層に属する。丘陵は東部・中部・西部に区分されている。そのうち西部丘陵は，丘陵を南北に横断する国鉄関西本線から秋篠川に至る地域をふくみ複雑な起伏に開析された地形を呈する。南方に多くの舌状支丘を分岐し，この支丘を利用して5世紀の佐紀盾列古墳群，あるいは8世紀の平城京が形成される。佐紀盾列古墳群の東端に位置するウワナベ古墳は，西部丘陵の東端に相当する支丘の先端を利用して築成したものであり，この古墳の西方にあるコナベ古墳も南方の法華寺境内につらなる支丘を利用したものである。東辺を奈良山中部丘陵の不退寺裏山，北方をウワナベ古墳，西をコナベ古墳から南に延びる支丘で画する一辺約450mの方形を呈する地域は，平城京左京一条三坊に属する街衢に比定されている。そのうち，東三坊大路に推定されている付近では，ウワナベ古墳東外堤の海抜が74.2m，関西本線西側のウワナベ古墳に接する水田の海抜73.1m，推定南一条大路付近の水田では海抜65.8mと北方から南方にかけてゆるやかに傾斜する地形を呈している。平城京廃都後，平安時代のある時期から水田として利用され近世に至るが，現在では奈良市法華寺東町に属し，推定南一条大路上に県道奈良生駒線があり，推定東三坊大路の東側に国鉄関西本線が縦断し，南東隅に奈良市立一条高校がある。近年になって付近の民家は急激に増加し，地貌は大きく変化した。いまや水田のつらなった昔日の面影をたどることはできない。

周辺の地形

1968年から1969年にかけて，奈良市法華寺東町で国道24号線バイパス路線内に分布する遺跡の発掘調査をおこなった。路線内における遺跡には大きくわけて3種類あり，1はウワナベ古墳の東外堤であり，2は推定左京一条三坊内の街衢，3は東三坊大路であった。調査は7次に亘っておこない，発掘総面積は94.6a。調査では，ウワナベ古墳を4PUN，京内を6AFBとよび，両遺跡内をさらに小地区に区分した。調査地区および面積はTab. 1の通りである。

バイパス路線内の遺跡

調査次数	調査地区		調査期間	発掘面積
54	4PUN-O・P	ウワナベ古墳東外堤	1969.2.13～4.3	4.0a
60	4PUN-K・L・M	〃	1969.10.22～1970.1.13	10.0
55	6AFB-I・J	左京一条三坊十五・十六坪	1969.3.5～5.16	20.0
56	6AFB-F～H	〃	1969.6.2～10.27・11.12～12.11	32.0
66	6AFB-F・H	〃	1970.5.7～5.20	2.5
57	6AFB-A～E	東三坊大路（一条通以北）	1969.7.9～12.17	24.6
61	6AFE-H・J・K	東三坊大路（一条通以南）	1969.11.14～12.14	1.5

Tab. 1　調査期間と発掘面積一覧表

ウワナベ古墳東外堤（4PUN-K·L·M·O·P）　4 PUNでは全面発掘によらず，トレンチの設置によって東外堤の旧規模をうかがうことを目的とした。発掘調査によって周濠に面する外堤内斜面に葺石が存在し，外堤に埴輪列がめぐらされていることが明らかになり，旧規模を復原する資料をえた。さらに外堤の外縁に外濠ともいうべきものの存在を確認し，それが奈良時代以降の道路として利用されていることも判明した。発掘調査と平行しておこなった分布調査によって北・南外堤における埴輪列をみとめ，全域におよぶ外堤復原の手掛りをえた。分布調査の過程で濠中からえた須恵器片は，墳丘から流出したものと認められ，ウワナベ古墳の築造年代を推測するための有力な手掛りになった。

葺石と埴輪

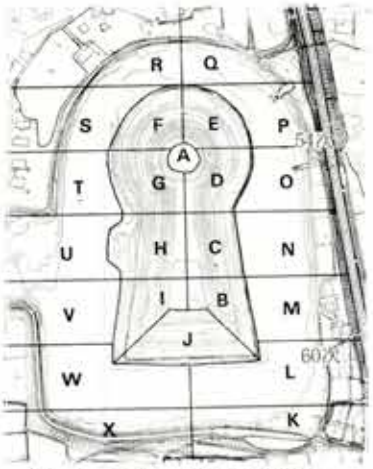


fig. 2　ウワナベ古墳地区割図

左京一条三坊十五・十六坪（6AFB-F～J）　6AFB-F～J地区は，一条高校の北辺からウワナベ古墳南外堤に接する南北長約210m，東西幅約30mの地域である。この地域においては，5世紀に築造された2基の古墳を破壊した後に建設された奈良時代から平安時代にかけての建物，溝，柵，井戸などを発見した。奈良時代の遺構は有力貴族の邸宅に比定することが可能であり，比較的保存がよく，平城京建設以後，3回にわたる改修をおこなう。平安時代の遺構は規模を縮小し，後世の耕作によって著しく削平されており，全貌を知ることはできないが，奈良時代の遺構の上に大規模な整地をおこない，以前とは性格を異にする構築物を配置していたようである。

邸　　宅

東三坊大路および東側溝（6AFB-A～E）　東三坊大路の路面とその東側溝を発見した。大路の路面は，後世に掘込まれた幾条もの水路によって攪乱され，かつ耕作などにともなう削平が著しく路面舗装などの状況をうかがう資料はえられなかった。東側溝は奈良末平安時代初期に一大改修をうけ，平安時代初期以後2回の大改修をおこなっていることが判明した。溝のなかには多数の遺物が包含されており，平安時代初期の標識的な資料となった。さらに告知札などの発見によって，この道路が廃都以後も山城国と大和国を結ぶ幹線道路として活用されていた状況をうかがうことができた。東三坊大路が南一条大路と交叉する部分では東側溝の最終的氾濫によって沼状の状況になっていることから，旧規模を確認することができなかった。同時に，部分的に検出した一条四坊の西限では街衢を画する南北にのびる柵を検出した。ただ，東三坊大路の西側溝については確実に把握することができず，一条四

幹線道路

fig. 3　6AFB区地区割図

坊内の状況についてもいま一つ判然としない状況である。

補足調査(6AFB-H・F地区)　バイパス路線敷の発掘終了後，近接した地域の2個所で工事に伴う発掘届による事前調査をおこなった。1は6AFB-H南地区の西方で設定した幅3m，全長が78mのトレンチである。2は6AFB-F西地区の西方で設定した3m四方のトレンチ2個である両地域にわたる調査では顕著な遺構は検出されなかったが，6AFB-H地区のトレンチで，東方から西方へ下がる地山の状況を把握した。

2 調査日誌

第54次発掘調査 1969年2月13日～4月3日

4PUN-O・P地区

2・12～28　発掘準備　草刈り・土嚢積み・排水。
3・1　P地区，P_1トレンチ発掘着手。濠と外堤とにわたるトレンチを設定。濠は湧水のため鉄矢板が必要となる。
3・5　P地区，P_1トレンチ，濠部を拡張。外堤部，上層に厚い2次堆積土を確認。
3・13，14　P地区，P_1トレンチ，水位が高くなるため，周囲の土嚢を強化。
3・17　P地区，P_1トレンチ，外堤部地山面までさげ，外堤が地山削出しであることを知る。
3・21　P地区，鉄板搬入。O地区，O_1トレンチ発掘開始，P地区の状況は変わらず。
3・23　P地区，P_1トレンチ，濠部で葺石が出はじめる。上面を落石が覆う。
3・25　P地区，Pトレンチ葺石精査。O地区，O_2トレンチ遺構検出完了。
3・26　実測。
3・27　写真撮影。
3・28　補足調査。
4・3　埋めもどし完了。

第55次発掘調査 1969年3月5日～5月16日

6AFB-I・J地区

3・5　発掘開始。
3・7　I南地区，遺構検出。東半部は黄褐色の地山，古墳の基底部か。西半部は整地土。J地区，耕土の排除。
3・11　I南地区，床土下の灰褐色砂質土を除去，黄褐色バラス混り土の面で遺構検出。灰褐色砂質土はバラスを含むやや硬い土層で，東部では浅く西南部で厚さを増す。瓦・土器片を含む。J地区，遺構検出。
3・13　J地区，床土下に灰色砂層が広がる。SD444の南では，灰色砂層と黄色地山層との間にバラス層があり，道路面をなすか。SD444は2層にわかれる。SB441の柱穴がではじめる。
3・14　J地区，SB441は3間×2間の東西棟建物となる。
3・15　J地区，東方部では床土の下はバラス混り灰色砂層となり，西方にくらべると1m程度高い面をなす。I南地区，南方から遺構検出。東寄りの部分で木炭層が顕著にあらわれる。
3・18　I南地区，西方での土層の堆積が上層から灰色砂層，灰褐色土(遺物多し)，地山の順であることを確認。柱穴出はじめる。
3・25　J地区，東方に多数の小柱穴あり。建物にまとまらず。
3・26　I南地区，東方では，現在の遺構検出面である黄褐色粘質土中に多数の遺物があり，遺構がみあたらないことから整地土層とかんがえられる。黄褐色粘質土を除去し再度遺構検出をおこなう必要あり。J地区，東方で南北溝2条，北西から南東に流れる小溝を検出。いずれも新しい時期のもの。依然として小柱穴が多い。それらの埋土はすべて暗褐色土で検出。
3・27　I南地区，発掘区の南寄りで，東西に延びる溝を確認。J地区，東方部の遺構検出おわる。建物としては，SB430，SB437が東西棟4間×2間でまとまる。SB437の北側には建物などの遺構がまったくない。
3・28　J区，写真撮影。I北地区，床土の排除を開始する。
4・7　I南地区　黄褐色粘質土面を精査すると5間×2間東西棟建物(SB470)が出現。南北に廂のつく可能性あり。
4・8　I南地区，SB470の南廂を確認。
4・10　I南地区，南寄りで土壙ないしは溝とおもわれるもの(後のSD485)を検出。3層にわかれる。第1層は暗褐色砂土，第2層は灰褐色含礫砂土で木炭が混入，第3層は灰色の粗砂。
4・11　I南地区，SD485が西方から東方に流れさらに南折する排水溝であることがわかる。南流するあたりは氾濫し遺物多し。「楽毅論」の木簡出現。J地区は実測。
4・12　I南地区，SB470の北廂を検出。
4・14　I南地区，平塚1号墳の南面の裾の葺石を検出。西向の前方後円墳で，後円部から前方部南面の葺石とかんがえられる。墳丘部分は削平さ

れて遺構なし。I北地区，東方で後円部葺石を確認。その北側は深い窪地となる。J地区，実測を完了する。

4・15 I南地区，古墳前方部確認のため西方に発掘区を拡張。I北地区，葺石北側の窪地の性格をあきらかにするため，トレンチを設定。奈良時代以前の窪地の上に奈良時代の溝(SD453)が東西にのびることがわかる。

4・16 I南地区，SD485の南端部を拡張。

4・18 I南地区，SD485の南折部分をさらに拡張。溝の西岸に柱穴あり(のちにSB476となる)。西方拡張区の遺構，保存状況が悪く判別困難。

4・21 I南地区，SB470よりも層位的に古い柱穴を2穴を検出(SB482)。I北地区，発掘区の北側が高く，窪地が古墳の濠であることがわかる。前方部北側の葺石が出現しはじめる。

4・22 I北地区，古墳濠の窪地でSB455およびSD453を完掘。この状況で実測。

4・24 I南地区，現在検出している奈良時代の遺構に対する写真撮影。

4・25 I北地区，濠を全面的に下げ，葺石を露呈することに専念。I南地区，実測開始。

4・28 I北地区，前方部北斜面の葺石ほぼ露呈し，後円部の葺石を検出。この付近では水鳥埴輪の破片が多い。I南地区，前方部西面を探査するため発掘区の西方に向う東西方向のトレンチを設定する。

4・30 I南地区，古墳の前方部西面および南西隅を確認。これによって前方部の規模を推定すれば，幅約30m，長さ約21mとなり，帆立貝式の古墳であったことがわかる。南面の葺石の検出にかかる。南濠の整地土層を除いた面で，SD477を発見し，現在検出している奈良時代遺構の下層に古い奈良時代の遺構があることがわかる。

5・1 I南地区，濠および下層遺構検出のため全面の排土を開始。I北地区，写真撮影。

5・7 I北地区，写真測量。I南地区，葺石検出。SD477を切りこんで建てる2間×3間の建物(SB471)を検出。

5・8 I南地区，後円部の葺石を破壊してつくる，軒平瓦を枠とする井戸(SE466)を検出。

5・9 I南地区，墳丘くびれ付近の南側で井戸(SE464)を検出。枠はなく，底にバラスを敷く。

5・10 I北地区，後円部にあたる発掘区東南部の土盛りが，墳丘の残骸であることがわかり，盛土および，辛じて残った円筒埴輪列を検出する。I南地区，発掘完了，写真撮影。

5・17 発掘調査完了。

第56次発掘調査 1969年6月2日～10月27日

6AFB-F・G・H地区

6・2 調査着手。H地区耕作土の排除。

6・18 H北地区，遺構検出開始。土層は床土下に灰褐色砂土，暗褐色土の順に堆積する。遺構は暗褐色土面で検出可能、発掘区北辺に接して柱穴がではじめる(SB501の南妻柱)。

6・20 H北地区，SB501の南側に東西に走行する溝があらわれる。

6・21 H北地区，SD499の南側に東西にならぶ4間分の柱列は，柱間が不揃であるが建物の可能性あり(のちに棟SB504になる)。暗褐色土は整地層であり，この面からの柱穴の検出は困難。

6・23 H北地区，東方では灰褐砂質土の下層に土器片を含む褐色土層がある。この面から東西方に流れる溝が数条あらわれる。発掘区の中央に南北に流れる溝(SD485)がある。西方において，東西方向の溝よりも新しい南北方向の溝を検出。それは数条あるが，いずれも近世の耕作に関連するもののようである。

6・24 H北地区，発掘区の南半部は窪地となり，柱穴などの遺構がなく，これにSD485が注ぐ状況を呈する。発掘区東限で試掘坑をいれ，底を探る。深いところまで粘土層が堆積し，古墳の濠である可能性がつよい。

6・27 H南地区，北側から床土の除去をはじめる。東方では黄褐色礫混り硬質土，西方では暗褐色小礫混りの硬質土の土層を呈する。H北地区，再度，発掘区東南隅で試掘坑をいれる。現在遺構検出面としている灰褐色砂土が約50～70cmの厚さで堆積し，その下部に黒灰色粘土・灰黄色粘質土の層があることが判明する。下層には人頭大の河原石があり，古墳の濠である可能性がつよい。F西地区，北辺から遺構検出を開始。このあたりの遺構面は削平されているらしく，床土直下の地山面で遺構が検出できる。東西にのびる柱列6間分(のちにSB530の南側柱となる)と4間分(のちにSB551の北側柱となる)が重なって検出される。重複関係からすれば，SB551の方が新しいことになる。

6・28 H北地区，発掘区東限の畦畔に添うトレンチを設定。厚さ20～30cmの灰褐色砂土の整地土層が全面に広がる。その下では中央部分で幅約6mの粗褐色砂質土(地山)を境に南北では整地層下に黒灰色粘土が堆積，底は灰色粘質土層である。中央の粗褐色砂質土の部分を平塚1号墳の外堤とするならば黒灰色粘土の部分は濠になる。南側の堆積部分の性格は不明(のちに平塚2号墳の北濠であることがわかる)。F西地区，発掘区の東限で井戸SE545を検出。内部からは須恵器片が少量でる。SB551の南側柱を検出。付近には土壙などが多く重なりあう。

6・30～7・7 H南地区，1次的な遺構検出が終る。G北地区，遺構検出開始。

7・9 G北地区，西寄りに南北に走行する河原石の葺石がある，西側に傾斜し，落石とともに埴輪が黒色土中から出現。西向の前方後円墳の前方部前縁か。その東側は黄褐色土と黄褐色バラス土からなる地山。発掘区の東寄りを南北に流れる溝(SD531)，これに接合する東西に流れる溝は近世の水田灌漑に関係するもの。

7・11 G北地区，発掘区南寄に土壙状の遺構が数個ある。遺物は混入せず古墳築成時に窪地を埋立てたようである。葺石の前方部西南角には大型

の玉石を据える（のち園池SG520の石組みとなる）。G北地区における整地の大体を把握する。まず古墳築成に際し，自然地形を利用しながら一部に盛土をおこなう。つぎに黄褐色粘質土で表面を覆い玉石を葺く。奈良時代になって墳丘を削平し，褐色土あるいは灰褐色土(墳丘の盛土か)を用いて埋立てた濠のようである。F西地区，SB561の北側柱列を検出。

7・12 G北地区，葺石の検出。F西地区，南北を画する畦畔を越え，南に移動。小柱穴が多数ある。SB561の南側柱列を検出し，2間×3間東西棟建物であることがわかる。発掘区東限で南北にのびる溝(SD566)を検出，堆積からみて近世のもののようである。

7・14 G北地区，葺石の露呈，写真撮影。H南地区，南側から北に向って遺構検出開始。発掘区のほぼ中央で，10尺等間の柱穴3間分を検出する(SB510の南側柱列)。F西地区，小柱穴無数を検出。遺構検出が終わり，写真撮影開始。

7・15 F西地区，写真撮影終了。

7・16 G北地区，14日に検出した柱穴付近を再度精査。この柱穴付近から西方は柱穴よりも新しい時期に整地がなされていることを確認。この整地面には遺構がなく，褐色の粘りのない土が西方に向って厚く堆積。SB510が2間×3間東西棟建物であることを確認。F西地区，遺構実測準備。

7・17 H南地区，発掘区の西寄りで葺石の存在を確認。G北地区にある葺石の延長で，これ以西には奈良時代の整地土が堆積。発掘区の東方は，地山面。F西地区，遺構実測。

7・18 F東地区，遺構検出開始。発掘区西寄りに南北に流れる溝(SD570)がある。黄褐色バラス混り土の地山を掘込んだもの。溝中には灰色バラス混り粗砂が堆積，底には4条の溝が重なった状況をとどめる。この東側には東方で深くなる窪みがある。

7・21 H南地区，平塚2号墳の前方部前縁を検出。発掘北辺で東に折れるか。前方部は地山面まで削平されている。F東地区，SD570の精査。東方の窪みは南北に流れる溝。

7・23 H南地区，写真撮影。

7・24 H北地区，南辺から再度の遺構検出を開始。上層の黄褐色土を除くと東西にのびる葺石線が出現。葺石は北に向って下り，前方部の北斜面に相当する。濠の部分は上部から灰褐色砂土，黄褐色粘質土(砂斑入)，黒灰色粘土が堆積する。F東地区，SD570の西岸付近は土壙によって撹乱されている。

7・25 H北地区，西方の灰褐色土と暗褐色土を除去。F東地区，SD570が北上する。

7・26 H北地区，発掘区の東南隅に広がる硬い褐色土の北側は深さを増しながら，灰色砂土に覆われた褐色土層に漸移する。発掘区の中央で，土層の状況をみる。ここでは褐色土の下に褐色粘質土層(床土)があり，その下部に奈良～平安時代の遺物を包含する灰褐色砂層がある。この灰色砂層は第55次調査で検出したSD485の延長した流路とみられる。また，上層遺構面の整地層が約40cmの厚さで堆積し，その下部に遺構をともなうもう一層の整地土層が存在することを確認した。平塚2号墳の北濠に相当する部分では暗灰色砂質土が厚く堆積し，小柱穴がある。柱穴はまとまらないが，1柱穴から蛇目高台の緑釉陶片が出土し，平安時代の遺構であることがわかる。

7・31 H北地区，現在までに検出した遺構を上層遺構として，写真撮影をおこなう。

8・1 F東地区，遺構検出。床土下に直に黄色砂混り土の地山があらわれ，顕著な遺構なし。

8・2 H北地区，実測準備。G北地区，発掘区東南隅に敷詰めたような状態で玉石を検出。整地の際，葺石を濠に棄たものか。南辺東寄りで葺石の原位置を確認，この付近では幅50～60cm程残存，葺石最下段の石列と濠底の地山との比高は約20cmである。E東地区，南北に流れる溝があるが時期は新しい。

8・4 G北地区，発掘区の南側で葺石の検出につとめる。西寄りの南北方向の葺石を北に向って露呈する。G東地区，遺構検出終了。撮影準備。

8・5 G北地区，発掘区の西南にある立石は，周囲の玉石と関係しながら園池を構成する可能性がでてきた（SG520)。

8・6 G北地区，平塚2号墳前方部前縁葺石は落石状況で露出する。SG520を精査，池の存在を示す泥土の堆積はない。発掘区南辺の玉石の多くは落石につき，除去して地山面（濠の底）まで下げる。発掘区の東南隅に，方形の坑を掘り底に玉石を敷く井戸SE535がある。

8・8 H南地区，葺石の検出をはじめる。G北地区，撮影準備。

8・11 H南地区，葺石を露呈する。南・北部分は比較的よく残るが，中央部分は欠落。南濠の土層は，下から灰黒色砂質土(地山か)，灰黒色粘質土(濠の堆積土)，褐色土(奈良時代整地土)の順で堆積する。F東地区，遺構実測。

8・13 H西地区，遺構検出開始。F東地区，実測終了。H北地区，北辺から上層遺構を除き，中層遺構の検出に着手。

8・18 G北地区，SG520付近の現状実測。その後落石を除去する。H西地区，平塚2号墳の西濠の整地層を掘土。いくつかの小穴があるがまとまらず，この地区を南北に流れる溝(SD527)には灰褐土層が堆積し，他の遺構よりも古い。

8・19 H北地区，西北隅で柱穴を検出。SB482の東側柱，SB504の南廂柱が出はじめる。SB481の南妻柱を検出するが，この付近は木炭の細片を混える灰色砂質土が堆積する窪みとなる。H西地区，撮影準備。G北地区，葺石の落石除去。濠中の葺石は現在露出した面が玉石堆積の下面で，その下に玉石を混えない厚さ10～20cmの黒色粘質土の堆積があり，埴輪片が混入している。

8・20 H北地区，SB481の西側柱を2穴検出。この付近は黄褐色土の地山とかんがえられるが，その南側は，整地層らしいやや汚れのある褐色土が堆積する。発掘区の中央で，SD485の層序を調べる。最上層の第1層は褐色土と黒褐色土の混合土層で遺物を含む。第2層は黄色細砂の薄い層，第3層は有機質を含む黒色粘質土となる。H西地区，写真撮影。G北地区，葺石の検出すべて終了する。

8・21 H北地区，SD485が東西に分流して南方に流れていることがわかる。発掘区中央での南北を横断する黄褐色の土層は地山とおもわれ，平塚1号墳と2号墳が共有する外堤か。

8・22 H北地区，SD485の西流はほぼ末端ができるが，東流はさらに南下する模様。外堤部分には，暗褐色砂質が詰る不規則の小穴が多数ある。

8・25 H北地区，発掘区の西南辺に土壙があるが性格不明。

8・26 H北地区，SD485を掘り下げる。堆積土は5層にわかれ，第4層の一部まで下げる。第2層の黒色粘質土が堆積する時期には，付近一帯が水溜の状況にあったことが推測できる，発掘区西南辺で東西にならぶ2柱穴を検出（のちにSD490となる）。

8・27 H北地区，SD485は都合7層に分層できることを確認。西流は西に曲折するか。発掘区西南部分で昨日検出した柱穴にともなう柱穴を検出し3間以上×2間東西棟建物（SB490）であることが推測できる。H西地区，実測終了。SD527を掘り下げ，堆積土が4層にわかれることを確認。

8・28 H北地区，SD485の発掘。西流の第3層では両岸に杭を打込む。SB490がさらに東に延びる。H西地区，SD527の発掘。昨日第4層とした砂層は整地土の下に潜入するので再度精査。結局，第1層の灰褐色のみが堆積するきわめて浅い溝であることが判明する。第2層以下は溝に不整形に流入する別の流路のようである。

8・29 H北地区，SD485の発掘。第4，5層の排土，杭列は第5層が堆積した後に打込まれている。第6，5層の時期には，東西の2流が共存するが，それ以降第4，3層の時期には西流のみとなり，第2層の時期の氾濫によって2流を含む部分が水溜りになっている。第5層から木簡，木器などが土器に混って多く出土。SB490の北側でSB480の身舎と南廂の柱穴を検出。それらの遺構は暗褐色の整地土を除去した後にあらわれる。なお，SB480身舎南側柱の南側にあらわれる土層変換線は外堤と溝との境を示しているようである。

9・2 H北地区，SB490以東の溝部分を下げる。褐色の整地層を除くと，黒色粘土，灰色粘土，灰白色砂土が入り混る土層を呈し，北方に向って浅くなる。H西地区，古墳の外堤線をしるため，発掘区の南辺を西に拡張。

9・3 H北地区，SD485東流の堆積土のうち灰色粘土を除く，遺物多し。下層の黒茶色土は外堤付近でなくなる。SD485に接する溝部分は氾濫の状況を呈し，木質遺物や土器が多い。SB480の桁行が1間東にのび，桁行4間以上，梁行4間であることを確認。

9・5 G北地区，SG520の範囲を探るため，西方に発掘区を拡張。

9・6 H北地区，SD485は溝の部分で再び1本になり南流することがわかる。両岸の杭が多い。

9・10 G北地区，拡張部分で大型の河原石が10個ならんでいるのを確認。石はいずれも地山に据えつけている。その西側に南北にのびる溝SD548がある。

9・12 H北地区，SD485の発掘。前方部西北隅の葺石を検出。この付近でSD485は流路を西に寄せている。

9・17 H北地区，発掘終了。写真撮影。

9・19 H北地区，遺構実測開始。

10・27 H北地区実測および補足調査終了。

11・8 全域の埋もどし開始。

第56次補足調査　1969年11月12日～12月

6AFB-G南地区

11・12 表土の排土開始。

11・22 床土下の褐色バラス土を除いて，西辺から遺構検出を開始。

11・29 南辺で東西にならぶ2柱穴を検出。北側には，北東から西南に流れる溝がある。

12・1 南辺の柱穴は，E地区の北辺で検出した柱列と組合わされて東西棟建物になる模様。

12・2 東辺から遺構検出，南方に小柱穴多し。

12・3 南辺の柱列は，結局6間×2間東西棟建物であることがわかる（SB530）。その東妻に重なって，3間×2間南北棟建物（SB550）がある。重複関係からSB550の方が古い。なお，SB530の北側柱には東から2間分のみ廂がつく。発掘区の南辺中央部分に方形の掘形があり，四壁に添う底部を玉石で敷詰めている。平塚2号墳にともなう葺石か。

12・4 南辺の掘形は奈良時代の井戸SE525であることが判明。発掘終了。写真撮影。

12・5 実測

12・9 SE525完掘。

12・11 埋もどし開始。

第57次発掘調査　1969年7月9日～12月17日

6AFB-A・B・C・D・E地区

7・17 E地区，床土排除をおこない遺構検出開始。発掘区東辺で，三坊大路東側溝に推定できる幅2.4m前後の土層の異なる部分を発見。堆積土は上層が黒褐色粘質土であり，下層が灰褐色砂質土である。

7・19 E地区，西辺の床土下の地山面から遺構検出。土壙，溝などがあるが遺物はとくになし。

7・22 E地区，新しい時期の土壙・溝などを検出。南辺の土壙の北岸には木の根が埋る。

7・24 E地区，発掘区西寄りで南北に走行する幅30cmの溝がある。一部を掘り下げ中世の土釜片をえる。結局，東三坊大路(SX600)の路面敷の部分の遺構(土壙，溝など)には古代にまで遡るものがないことを確認。

7・28 E地区，東側溝(SD650)の発掘開始。溝の堆積は，上面に灰褐色砂質土が広がり，その下は黒色粘質土(Ⅰ黒)，灰白色砂質土(Ⅰ砂)の順に堆積しているようである。遺物多し。

7・29 E地区，SD650の発掘，Ⅰ砂の下にまた黒色砂質土(Ⅱ黒)が堆積することが判明。D地区，小路との交差点に推測されるD地区の一部をまず掘る。大路の路面はE地区と同様に新しい時期の溝が南北に流れる。SD650はこの地区でも存在する。土層の堆積は基本的にはE地区と変わらない。

7・30 E地区，発掘終了。D地区，SD650は西側に灰色砂が堆積する溝（部分的に東側を石で護岸）と黒色粘土が堆積する古い溝とが重なっていることをしる。なお，西溝の石列の下には杭列があり，やはり護岸用とかんがえられる。

8・1 作業工程の方針を決定。今後はSD850を追跡して南一条大路まで下ることとする。発掘範囲としては，路面をさけてSD650の部分に限ることとする。D地区，寛平大宝が60点まとまって出土した。

8・5 E・D地区，写真撮影。

8・7 E・D地区をSD650の幅のみのトレンチとし，南北に連絡。D東地区，遺構検出開始。遺構は床土直下の地山面で検出。発掘区東寄りに南北にならぶ4間分の柱穴があり，その西側に南北に流れる溝(SD611)がある。なおSD611には東岸に杭が打込まれている。

8・12 C東地区，SD611が南下するが，この地区で西方に分流することが判明。

8・13 C東地区，発掘区東辺で南北にのびる柱穴(SA620)を検出。ただ中間の3間分の柱穴が小さい。

8・18 E地区，SD650の検出終る。遺物多数。

8・12 D区，北半分の遺構検出終る。

8・25 D地区，南半分地発掘開始。

8・27 D地区，天長5年4月の告知札出土。

8・29 C地区，発掘着手。

9・1 C地区，この発掘区で，SD650が，3期に分れることがわかる。第1期は灰褐色砂（Ⅰ砂），灰褐色混礫土(Ⅱ砂)が堆積する時期で，貞観通宝の時期。第2期は溝が西側へ堆寄る時期で，寛平通宝の時期。第3期は1・2期に両溝にわたって重なる黒色粘質土の堆積する時期である。

9・13 C地区，南寄りでSD650の東岸に東から注ぐ溝(SD635)を検出。この付近から南方のSD650の黒色粘土堆積には灰色粘土が混じる。

9・18 C地区，発掘完了。

9・19 B地区，遺構検出開始。

9・20 B地区，上下に重なっていた3期間のSD650が，流路を変える現象がみられる。すなわち，SD650Aは依然として同位置で南下するが，SD650B・Cは流路を西にそらす。

9・25 A地区，遺構検出開始，発掘区東方では中世以降の小溝などを検出するが，古代の遺構はみあたらない。SD650の南延長部分では，溝の痕跡を示す程度になる。

9・29 A地区，発掘区北辺で，SD650の東側に想定する築地を探索してきたが，結局残存していないことが判明。B地区，発掘終了。

10・2 A地区，この地区一帯はSD650が氾濫し，粘土の地山上に，砂，粘土が互層になって堆積する状況が広い範囲にみられる。

10・15 A地区，発掘区南辺で推定南一条大路北側溝位置を探査した。だが，灰緑色の地山がなだらかな起伏を呈するのみで明瞭な溝の遺構確認はできない。

10・18 A地区，発掘終了。写真撮影。

11・7 A・B地区，実測終了。

11・18 全域にわたる補足調査開始，土層観察用の畦をこわし，遺物を採集する。

11・25 補足調査終了。写真撮影。

第60次発掘調査

1969年10月22日～1970年1月13日

4PUN-K・L・M地区

10・22～29 発掘準備，草刈り。現状地形実測。

10・3 K地区，土盛りを中心にK_1，K_2，K_3，K_4のトレンチを設定。盛土はバラス混り黄褐色粘質土で層の細別不能。K_4トレンチに東西にのびる溝がかかる。須恵器，瓦，磁器などが埋まり古墳とは関係ない。

11・4 M地区，M_1トレンチを設定。表土下はバラス混り黄褐色土層となる。盛土には瓦片，土師器片などをふくみ，古墳の盛土とはかんがえられない。

11・5 M地区，M_2トレンチを設定，盛土には遺物なし。

11・6 K地区，K_1トレンチでは黄褐色砂質土の地山まで下げ，西方で溝状の遺構を検出するが，古墳とは無関係。現状のトレンチでは外堤斜面の状況はつかめない。K_3トレンチでは，表土下1.7m付近に灰褐色砂質土の整地土層があり，瓦，埴輪などを包含する。K_2トレンチで，現在の耕作土の下に古い耕作土と床土の土層があり，その下層で原位置とかんがえられる埴輪円筒および東側で南北にのびる溝(SD734)を発見。

11・7 K地区，K_2トレンチの埴輪は南北にな

らび，古墳外堤にともなうものである(SX740)。SD734はおよそ3層にわかれるが，最下層から奈良，平安時代の土器を検出し，時期がわかる。トレンチの東辺では，西側が低い段をなす。

11・13 K地区，K_2トレンチを南方に拡張し，K_5トレンチとする。

11・15 M地区，現在までにM_1～M_4のトレンチを発掘するが，すべてのトレンチにおいて盛土下で旧耕作土面を検出し，若干の近世遺物を混えている。結局，盛土は近代になされたことになり，墳丘でないことがわかる。

11・18 K地区，SD734は発掘区を南北に縦断し，南方で氾濫している。埴輪列SX735は発掘区の中央以南では削平されている。SD734の東約12mをへだてて存在する段落は，ウワナベ古墳の外濠とみられる（SD732）。水が流れた痕跡をとどめるが，奈良時代になって整地がおこなわれ，のちにSD734が掘込まれたようである。

11・21 K地区，遺構検出終了。

11・24 K地区，写真撮影，実測開始。M地区，写真撮影。

11・28 K地区，補足調査。M地区，発掘完了。

12・2 K地区，発掘完了。

12・9 L地区，遺構検出開始。L_1トレンチの全長にわたって埴輪列がある。K地区のSX735と同一線上にある。

12・11 L地区，発掘区の西辺で，奈良時代以降とおもわれる南北に流れる溝を検出（SD746)。埋土は灰褐色粘質土，瓦，埴輪の破片が少量混入する。SX735の東側でSD734を検出。SX735の南方部分の埴輪は保存状態がよくないが，北方においては比較的良好。

12・13 L地区，発掘区北方の外濠SD732の所々に窪みがある。しかしSD732が貯水したことを示す材料はない。埴輪列の清掃。

12・14 L地区，埴輪片の散布状況で写真撮影。

12・16 L地区，埴輪片を整理して写真撮影。実測開始。

12・16 L地区，埴輪据えつけの掘形を掘る。幅50cm前後，深さは現状の地山から10～20cm。

12・22 L地区，埴輪は最下段以下を地中に埋めてたてたようである。

12・23 L地区，L_1トレンチ発掘完了。

1・10 L地区，L_1トレンチに南接してL_2トレンチを設定。埴輪列のみを確認することとする。昨年にひきつづき一直線上に埴輪がならぶことを確認する。

1・12 L地区，写真撮影。実測開始。

1・14 L地区，発掘完了。

fig. 4　移設した奈良時代の庭園

Ⅲ　平城京の遺跡

1　左京一条三坊十五・十六坪（6AFB-F～J地区）

A　整　地

奈良時代の平城京以前，この地には2基の古墳（平塚1・2号墳）が存在した。京の造営に際しては，古墳をふくむ地形の起伏をなくするため，削平なり埋立ての整地工事をおこなっている。奈良時代から平安時代にかけて，この地域が居住区域として活用された時期にもその時時の整地工事がおこなわれている。だが，廃都後におきた水田への土地利用の転換は，古代の生活面を著しく削平し，地貌を著しく変形している。以下，各地区ごとの整地の状況を北方から南方に向って観察してみよう。

旧地表の削平

J地区　ウワナベ古墳の南外堤が発掘区の北辺に迫っている。東南部においては，耕土・床土を除去するとただちに地山面となり，古代の地表面は削平されている。黄褐色粘土の地山面は海抜73.85mである。発掘区の西辺では地山の直上に厚さ10cm内外の暗灰色砂質土が堆積する。整地層の残存したものであろう。この面での海抜高は73m，I地区では東方から西方に向って次第に下降する地形を呈する。

I～G北地区　この地区には西面する帆立貝式の前方後円墳（平塚1号墳）と前方後円墳（平塚2号墳）が濠をめぐらして存在した。造営に際して，墳丘は削平され，濠は埋立てられる。濠を中心とする土層堆積の状況から，奈良・平安時代初期に3次にわたる整地がおこなわれていることが明らかである（fig. 5）。

第1次の整地は2基の古墳の周濠において観察できる。

第1次整地

平塚1号墳北濠では暗黒色砂土，灰色粘土，黒灰色粘土に大別される土層が，濠の堆積土と埋立てた土層である。部分的には層位をさらに細分することも可能であるが，いずれにせよそれらの埋土は濠の範囲内にとどまる。また，堤の高さまで埋立をおこなわないので，濠の範囲は窪地の状況を呈している。整地土の上面には若干の起伏があるが，海抜72.16～72.3mの間におさまる。濠の埋土には墳丘の盛土を利用したらしく，前方部では地山面が床土直下で出現する。前方部の北部と南部とでは高低差があり，SB470の後方にある東西方向の段落を境にして，北部では海抜73.5m，南部では海抜72.85mとなる。これは第1次の整地に係るものであろう。平塚1号墳南濠では葺石の下縁から暗灰色粘質土の整地層がはじまり，その上面は海抜71.9m前後である。ここでも濠の範囲が窪地を呈していたのである。平塚1号墳南濠と平塚2号墳北濠との間に在する堤では古墳時代の旧地表面に厚さ10～30cmの含礫茶褐色土を敷く部分もあるが，大半は古墳時代の地表面を削平した地山面である。この部分の海抜高は71.6m。

後述するように，平塚1号墳の前方部の西方部分は，古墳築成段階の盛土であり，古墳築成以前の溝(SD461)も検出されている。このようなことから，第1次整地は二段築が推測される前方部の上段と下段の一部におよんでいたことがうかがわれる。平塚1号墳西濠では，第1次の整地が明瞭でない。西方に向って傾斜する地形なので，もともと埋立てがおこなわれなかった可能性がつよい。

平塚2号墳北濠では黒灰色粘土を主体に，木炭が混入する灰褐色粘質土からなる整地層が40～30cmの厚さで存在する。この場合も埋立後，濠の範囲は一種の窪地となる。海抜高71.35m前後。平塚2号墳の墳丘部分はおそらく水田に変更したときになされたとかんがえられる後世の削平が著しく，旧状をとどめないが，南に向って傾斜する。西濠にも暗褐色バラス土を用いて厚さ80～50cmの埋立整地をおこなっている。H南地区での南限で海抜71.5mである。南濠の埋立ては灰褐色バラス混り土，赤褐色バラス混り土でおこなうが，現在30cm内外の厚さをとどめるにすぎない。古墳の葺石すら残存しない状況であるから，かなり削平されているようである。海抜高は70.95m前後である。G南地区では整地土がまったく削平されており，平塚2号墳の南堤は痕跡すらとどめていない。

第2次整地　第2次の整地は第1次整地土の上に重なるが，多くの部分では第1次整地と同じく墳丘部分には及ばず，濠の範囲内の埋立てに終始している。

平塚1号墳北濠では，黄褐色粘土，含礫灰色砂土を用いて埋立てをおこなう。その下部にある灰色細砂土と灰色粘質土は整地とは関係なく，第1次整地面に堆積したものである。その上面は海抜72.2m前後の平坦面をなす。南濠では黄褐色粘質土で埋立て，上面は海抜72.3m内外の平坦面を呈する。西濠での第2次整地は不明瞭である。平塚2号墳北濠は黄褐色粘質土で埋立て，その上面は海抜71.6m前後である。西濠では暗褐色土で埋立てた痕跡をとどめるが，H南地区の南辺以南では後世に完全に削平されている。

第3次整地　第3次の整地は，墳丘と濠にわたる全域についておこない，その層は比較的厚い。

平塚1号墳北濠では，含礫白色砂が堆積する部分と赤褐色土・褐色砂質土の2層部分とがみとめられるが，いずれも第3次の整地である。現状での上面は海抜73.3m内外である。墳丘部分では黄褐色含礫土，南濠中央部分では暗褐色砂土を用いて整地をおこなう。墳丘部分では海抜72.5m，南濠部分では海抜72.4mと全体にわたってほぼ平坦面をなす。なお，この整地土のなかに平安時代の緑釉陶器片などが混在しており，平安時代初期の整地であることがわかる。H北地区でもI地区と同様の整地をおこない，平塚2号墳西堤付近の海抜高は，71.95m前後である。H南地区では，第3次の整地層をほとんどとどめないが，平塚2号墳前方部西半には厚さ15～35cmの灰褐色土による整地層が残っている。G北地区では整地層はまったくみあたらなく，遺構はすべて地山で検出した。

G南・F地区　この地区での削平は著しく，整地層は残らず，バラス混り茶褐色土の地山面から遺構の検出をおこなう。海抜69.8m内外である。ただ，部分的には地山上に10cm内外の整地土をとどめる個所もあるが，層が薄くて北方地区の整地とは断絶しているため，前記のいずれの時期に相当するかは不明である。

以上のような3次におよぶ整地層にともなって遺構が存在するのであるが，整地時期を決定することが困難な遺構も多い。

B 遺 構

遺構は調査区域の全域で検出したが，とりわけI南地区からG北地区にかけての区域に集中する。発見した主要な遺構は，建物28棟，柵5条，井戸5基，溝7条，園池1である。その他に，中世以降の耕作にともなう溝，土壙などが存在したが記述の対象としない。以下，発掘区の北方から南方に向って遺構の説明をおこなうこととする(PLAN 2)。

SB 430 (PLAN 3 ,PL. 4)

J東地区。4間×2間 (9.50m×4.75m)，東西棟建物。柱間寸法は桁行，梁行ともに8尺の等間。円形の小柱穴を地山面で検出。 小建物

SB 432 (PLAN 3)

J東地区。2間以上×2間 (2.95m以上×3.84m)，南北棟建物。建物の南は発掘区外にのびる。柱間寸法は桁行5尺等間，梁行6.5尺。ただし，妻側中央柱は検出されなかった。建物方位は北で西に振れている。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 437 (PLAN 3，PL. 4)

J東地区。3間×2間 (5.4m×4.20m)，東西棟建物。柱間寸法は不揃いであるが，平均して桁行6尺，梁行7尺。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 440 (PLAN 3，PL. 4)

J東地区。4間×1間 (6.9m×3.0m)，南北棟建物。柱間寸法は桁行北3間各5尺，南端間8尺，梁行10尺。円形の小柱穴を地山面で検出。

SB 441 (PLAN 3，PL. 4)

J西地区。3間×2間 (4.85m×3.23m)，東西棟建物。柱間寸法は5.5尺等間。方形の小柱穴を地山面で検出。東妻はSD444に接している。この地区で，唯一のまとまりのある建物であり，その方位はほぼ真北と一致している。

SD 444 (PLAN 3，PL. 4)

J西地区。素掘りの溝。発掘区の北辺から7mほど南下して西に曲って発掘区外にのびる。J区西限の南北溝とは別個のものとおもわれる。西端での幅3.5m，深さ0.5mで，底は比較的平坦である。上部から褐色砂質土，暗灰褐色砂質土，灰色粗砂土の3層が堆積し，各層には若干の奈良時代の遺物を包含している。地山面で検出。 北辺の溝

SA 447 (PLAN 3，PL. 4)

J西地区。SD444の南側に位置する南北方向の柵。4間分(14.55m)を検出したが発掘区の南にのびる模様。柱間寸法は北端で10尺，その他の柱間寸法は13尺である。方形の小柱穴を地山面で検出。

SA 448 (PLAN 3，PL. 4)

J西地区。3間 (7.2m) 以上の南北柵で柱間寸法は8尺。南方の小柱穴1間と連なる可能性はあるが，柱間寸法がことなる。方位は北で東に振れ，円形の小柱穴を地山面で検出した。

SD 453A・B (PLAN 4，PL. 5)

I北地区。東西方向に流れる溝。前後2回の改修がみとめられる。最初は幅1.4m～1.8mの

素掘りの溝(SD453A)としてつくられ，後に幅0.5m前後で両岸に小杭を打込み側板を落しこむ溝に改修する(SD453B)．平塚1号墳北濠を東西に横断し，溝部分は付近よりも少しく隆起している。第2次整地面で検出。

SB 455 (PLAN 4，PL. 5)

I北地区。2間×1間 (3.6m×3.0m)，東西棟建物。柱間寸法は桁行6尺前後，梁行10尺。柱間が一定せず北で西に振れており，建物に想定するのは困難であるが，一応建物としてあつかう。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。

SB 463 (PLAN 5，PL. 32-3)

I南地区。5間×2間 (9.75m×4.5m)，南北棟建物。柱間寸法は桁行南第1間5尺，南第2・第3間は各7.5尺，北2間分は12.7尺。梁行7.5尺。ただし，南端通り1間は廂で，北端間を5尺の廂に想定すると身舎は3間×2間，7.5尺等間となる。第1次整地面で検出。

SE 464 (PLAN 5，17，14)

I南地区。素掘りの方形掘形をとどめる。井戸枠は発見されなかった。掘形の上縁で1.6m×1.95m，現状での深さが0.6mの規模である。底には拳大の玉石を敷きつめる。泉のような施設であろうか。第1次整地面から検出。

SE 466 (PLAN 5，17PL. 19-3)

I南地区。瓦を用いた小型の井戸。7734型式の軒平瓦4枚を円筒形に組合せて枠とする。直径30cm，深さ32cmの底部には小石を敷き詰める。井戸というよりは，湧水を集める施設である可能性の方がつよい。第3次整地面で検出。

SB 470 (PLAN 5，PL. 6)

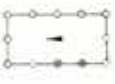
廂付建物

I南地区。5間×4間 (13.28m×10.92m)，南・北廂つき東西棟建物。柱間寸法は桁行9尺等間，身舎梁行8.5尺，南廂梁行8尺，北廂梁行11尺である。柱掘形は一辺1m前後の方形を呈し，直径1尺余りの柱根を残す柱穴が2穴ある。柱根はコウヤマキとヒノキである。建物の北半は平塚1号墳の前方部に，南半部は南濠にかかる。第2次整地面で検出した。なお，北廂側柱列の北3.5mの位置に柱筋と平行する段落があり，墳丘を切込んで建物敷地を削平した状況がうかがえる。

SB 471 (PLAN 5，PL. 7-1)

I南地区。2間×2間 (5.1m×3.6m)，総柱の東西棟建物。柱間は桁行8.5尺，梁行6尺。不定形の小柱穴を第1次整地面で検出。

SB 476 (PLAN 5，PL. 7-3)



I南地区。4間×2間 (8.4m×4.2m)，南北棟建物。柱間寸法は桁行7尺，梁行7尺。西側柱列の柱穴については直径15cm内外の柱根を2箇所残しているほか，検出できなかった。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。

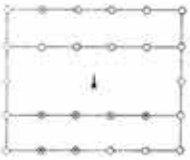
SD 477 (PLAN 5，PL. 7，fig. 5)

I南地区。素掘りの溝で，発掘区の西辺から約8m東に流れたのち，東南に向きを変える。末端は削平されて不明であるが，SD485の南流するあたりで連結する可能性がある。幅1m内外，深さ0.3mの溝中には灰褐色粘質土が堆積し，部分的に木材の断片があったが土器などの

* 模式図凡例 ●柱根 •柱痕跡 ◎柱抜取痕跡 ○柱穴のみ ……推定 ▲は北をしめす。

遺物は皆無である。第1次整地面で検出。

SB 480（PLAN 6，PL. 8-3，10）



H北地区。4間以上×4間（11.9m以上×11.9m），南・北廂つき東西棟建物。東妻柱列はSD485に接近し，西方は発掘区外にのびるが，5間程度であろう。柱間寸法は10尺等間。一辺1m内外の方形掘形に，直径30cm前後の柱痕跡をとどめる。第2次整地面で検出。 **廂付建物**

SB 481（PLAN 6，PL.11-1）

H北・I南地区。5間×2間（14.80m×5.3m），南北棟建物。柱間寸法は桁行10尺，梁行9尺。北妻中央柱および東側柱の多くは後に掘り込まれるSD485によって破壊され，柱穴の痕跡をとどめない。西側柱南端間の2柱穴には，栗石の根固め石をとどめる。一辺80cm前後の柱穴を第1次整地面で検出。

SB 482（PLAN 5，PL. 7，10，11）

H北・I南地区。6間×2間（17.8m×5.94m），南北棟建物。柱間寸法は10尺等間である。SB418とは13尺の間隔をおいて東西に平行して存在し，南側柱筋を揃える。第1次整地面で検出。

SB 483（PLAN 6，PL.10-3）

H北地区。2間×1間（3.0m×2.0m），南北棟建物。柱間寸法は桁行5尺，梁行6尺8寸程度。西南隅の柱穴に柱根が残る。東側中柱は未検出。第1次整地面で検出。

SD 485（PLAN 5，6，PL. 6，7，10，12，13，fig. 6）

I南・H北地区。I地区からH地区にかけて曲尺状に流れる溝。I南地区では西から東へ約17m流れて南に折れる。南流する溝はH北地区の中央を縦断するのであるが，南限付近で消えてしまうI地区での溝幅は2m内外で，層位も単純であるが，南流する部分では流路の変更があって，堆積土層からは大きく4時期に区別できる。 **中央の大溝**

SD485Aは最初につくられた溝で，第4層の灰色粗砂の堆積によって埋まる。南流が開始するあたりから平塚2号墳を画する堤までの間は幅1.2m内外で流れ，堤の部分では2本に分流して各々の幅を40cm内外に狭め，平塚2号墳の北濠に重なる付近では，また1本に合流して南下する。このあたりの溝中には黒色粘土が堆積する。平塚2号墳前方部西北隅の葺石を流水が破壊している。

SD485Bは，H北地区の北辺付近までSD485Aの流路を踏襲，それ以南では東方の溝を廃して西方の溝を拡幅する。この時期には溝の両岸に漏木を利用した杭を密に打込み，木枝や板をからめて護岸施設をととのえる。溝中には黒色粘土や褐色砂土などが複雑に堆積し，各種の遺物が多く存在する。

SD485CはSD485Bの流路をほぼ踏襲するが平塚2号墳の北濠で東方に著しく氾濫し，炭化物や遺物を含む砂質土や粘土が広がる。

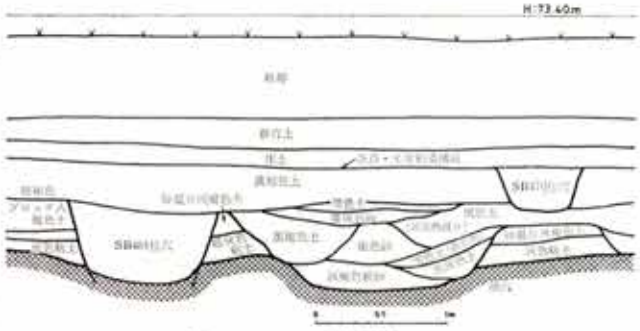


fig. 6　SD485土層図

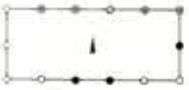
SD485Dは，SD485Cで拡大した東方部分が窪地として残り一種の水溜りの状況を呈する。

溝の年代　以上，4小期に細分できるSD485は第2次整地面から検出され，第3次整地の段階では完全に埋立てられている。なお，SD485Aは元来はSD477の下流であり，その東西方向の流路は時期的に下る可能性がある。出土遺物には和銅の年紀をとどめる土器，木簡などがあり，* 奈良時代初期の遺構であることがわかる。

SB 487（PLAN 6，PL.10）

H北地区。2間以上×2間（5.4m以上×5.4m），東西棟建物で西側は未発掘地区にかかる。柱間寸法は9尺等間。第1次整地面で検出。SB480・SB482の柱掘形を切込む。

SB 490（PLAN 6，PL.11）



H北地区。4間以上×2間（11.8m以上×5.9m），東西棟建物であるが，西側は未発掘である。柱間寸法は10尺等間。一辺1.2m前後の方形の掘形で，柱根が3本残存した。いずれも直径36cm前後のヒノキ材。第1次整地面で検出。

SE 495（PLAN 6，17，PL.10，19）

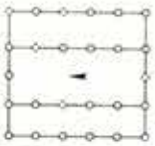
石敷の井戸　H北地区。平塚2号墳の北濠西北隅に掘込んだ方形の井戸。掘形は上縁で一辺1.8m，底部で0.8m×0.95m，深さ3.5mの規模をもつ，底には井戸枠の残材があり，枠板の大半は抜取られているが，北辺の一部に辛うじて残存する。それによると，掘形の各辺に幅20cm内外の板6枚を縦にならべ，内側に一辺6cm内外の角材で方形の枠を組んで四壁を固定する。現在，板のもっとも長いものは1.45mであり，本来は井戸の上縁までに2段ないしは3段を重ねたもののようである。井戸からは土器，木器などが出土した。

井戸掘形の北西に，井戸の周囲に敷詰めた石敷面の一角が残存する。それは人頭大の河原石を敷いたものである。井戸掘形の中軸線から復原すると。元来は一辺3m内外の石敷面であったことが推測できる。第1次整地面で検出。

SB 498（PLAN 6）

H北地区。3間×2間（8.1m×2.6m），東西棟建物。柱間寸法は桁行9尺，梁行4.3尺。確認した5個所の柱穴のうち，3個所に柱根が残存。方位は東で南にふれるが，検出状況からしてSB487と同期とかんがえられる。

SB 501（PLAN 7，PL.9）



H北地区。5間×4間（11.3m×10.0m），東・西廂つき南北棟建物。身舎は7.5尺等間で，廂の出は東廂8.5尺，西廂10尺。第3次整地面で検出。I南地区のSB476とは身舎桁行の柱筋を揃えて南北に二棟の間隔は7尺でSB476の桁行柱間と同じである。また，SB476の東面北第2柱間に対応して，東方8.5尺の位置に検出した2個の小柱穴をSB476の廂と考えれば，SB501の東廂と同じ出をもつ。SB476の西廂を検出していないが，SB476とSB501は一棟の建物として，10間×4間，東・西廂つき南北棟建物となる可能性が大きい。ただし，柱行中央で間仕切られ，北と南とでは桁行の柱間寸法が異なる。

SB 502（PLAN 7，PL.9）

H北地区。2間×1間（4.8m×3.6m），南北棟建物。柱間寸法は桁行8尺，梁行12尺。第3

---

* 堆積土から4時期に区別しえたが，出土遺物は層位と必ずも対応していない。それは水流によって遺物が攪拌されている部分が比較的広範囲におよぶからである。

次整地面で検出した。

SB 504 (PLAN 7, PL. 9)

H北地区。5間×2間か (13.8m×5.4m)，東西棟建物。柱間寸法は桁行で中央間10尺，他は9尺。梁行は東西の妻中央柱を検出していないが，9尺2間であろう。方形の小柱穴を第3次整地面で検出。柱穴の切合関係から，SB501よりも新しい。

SB 510 (PLAN 8, PL.14)

H南地区。3間×2間(8.85m×4.72m)，東西棟建物。柱間寸法は桁行10尺，梁行8尺。一辺1.4mの方形の掘形で，柱痕跡から直径30cm前後の柱が想定できる。平塚2号墳前方部のほぼ中央に位置し，上部に削平をうけており，整地時期に属するか不明。

SG 520 (PLAN 8, PL.15, 16, fig. 7)

庭園

G北地区。石組を配置した庭園遺構。平塚2号墳の周濠西南隅を利用する。東岸には前方部の斜面と葺を利用して，洲浜を造成する。これを背にして，均衡よく配置された庭石が6石ある。それらは東南から西北方向，約6mの間に3石ずつ2組にわかれる。東南の1組（1・2・3号庭石）は，岩石の片理による波状の褶曲を巧みに生じたもので，中央に小型の石を立て両脇から大型の石で挟む。西北の石組（4・5・6号庭石）は少しく原位置から移動しているようであるが，やはり小型の石を挟んで大型の石を置く。庭石には根石を詰めるものもあるが，多くは地山に直接据付けている。池の北東岸以外については不確実であるが，土層の観察によって東西18m，南北10m内外の規模で，岸が複雑に出入する園池が想定できる。池は粘土質の地山を直接に底とし，砂利などを敷いた形跡はない。石組の状況から判断すると水面はおよそ海抜70.4m内外となり，池の深さは23cm前後である。池には第3次整地土に相当する褐色系のバラス混り土が堆積していること，第1次整地層を掘込むことなどから，第1次ないしは第2次の整地時期にに遡る。1・2・3号庭石は黒雲母石英質片麻石，4号庭石は粗粒両雲母花崗岩，5号庭石は細粒両雲母花崗岩，6号庭石は石英質片麻岩で，産地は奈良市高円山周辺に推定できる。古墳の葺石は大半がチャートで，それに両輝岩，安山岩，片麻岩，花崗岩，石英斑岩などを混える。奈良坂付近の洪積層中の礫石を利用したのであろう。*

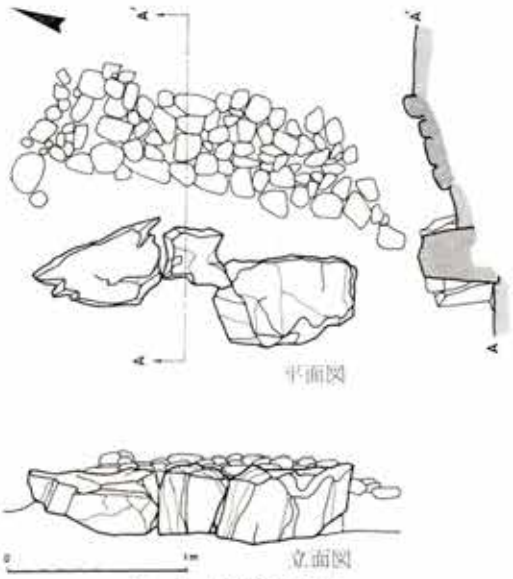


fig. 7 SG520実測図

庭石の種類

SE 525 (PLAN 8, 17, PL.20)

G南地区。浅い方形の井戸。掘形の上縁は3.5m×3.3mのほぼ方形を呈し，深さは0.6mである。掘形の四周内側に添う40cm幅の部分を河原石で敷きつめる。石敷面の上面は掘形の上縁から約20cm下降し，およそ25°の角度がある。石敷面の内縁には少しく大型の石をならべる。この内側に木枠が組まれていたか否かについては不明である。整地時期不明。

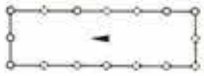
* 庭石の岩種と産地の鑑定は奈良教育大学教授梅田敏見氏に依頼した。庭石の番号は南東から北西に向って1・2・3の順でよぶ。また，発掘後石組は平城宮跡資料館へ復原移転した(fig. 2)。

SD 527（PLAN 8）

H北地区。南北に流れる素掘り溝。前後2時期にわかれる。SD527Aは下層の溝で，幅は約3m，深さ20cm。バラス混り暗褐色砂が堆積し，小量の土器片をふくむ。SD527Bは上層の溝で，幅1.8m，深さ20cm内外，黒色粘質土が堆積するが遺物はない。いずれも第1次整地土の下で検出し，平塚2号墳西濠の堆積層を掘込んでいる。北方はSD485Aに関連するようである。南方は発掘区外にのびる。

第1次整地土下の遺構

SB 528（PLAN 6）



H地区。6間×2間（15.0m×4.5m），南北棟建物。柱間寸法は桁行の北2間9尺，南4間8尺，梁行7.5尺，この建物位置でのH北区とH南区の高低差は40cm余りあって，H南区の柱穴残存状況は良くない。方位は北でやや東に振れる。第1次整地面で検出。

SB 530（PLAN10，PL.17）

廂付の建物

G南地区。6間×4間（14.4m×11.4m），南・北廂つき東西棟建物。柱間寸法は桁行8尺，梁行9尺，廂10尺。北廂は東から2間分を検出し，未確認であるが西にのびる可能性がある。身舎では一辺0.9m内外の方形柱穴で，廂の柱穴は小さく不整形である。地山面で検出したのであるが，この建物の掘形はSB550，SB551の掘形をきりこんでいる。

SE 535（PLAN10，17，PL.20-2）

G北地区。方形の井戸。掘形の上縁で一辺1.2mの方形を呈し，深さは0.25m内外で浅い。北辺に木製の側板2枚が残存する。側板は幅44cmで上部は腐食している。底には拳大の礫を敷く。平塚2号墳の南濠整地土を掘込んだものであるが，時期は不明。

SE 545（PLAN10，17，PL.20-1）

曲物の井戸

F西地区。曲物を枠とする円井戸。上縁で長径1.2m，短径1.0mの楕円形掘形を掘り，底に直径70cm，高さ30cmの曲物の枠を据付ける。掘形の上縁から底までの深さが約0.65mであるから，本来は円形の曲物を2段重ねにしていたのであろう。底にはバラスと木炭を敷詰め，埋土から和同開珎と須恵器の大甕の破片が出土した。地山面で検出。

SB 550（PLAN10，PL.17-3）

G南地区。3間×2間（4.8m×3.6m），南北棟建物。柱間寸法は不揃いである。小型の円形柱穴。東側柱の1穴がSB530の柱掘形によって切込まれている。地山面で検出。

SB 551（PLAN10，PL.17-2）

F西地区。4間以上×1間（10.03m以上×4.13m），東西棟建物。西側は未発掘。柱間寸法は桁行8.5尺，梁行14尺。一辺1m内外の方形柱穴に直径30cm前後の柱痕跡がある。北側柱穴はSB530によって切込まれている。地山面で検出。

SB 552（PLAN10，PL.18）

F西地区。3間以上×1間以上（6.3m以上×2.1m以上），南北棟建物か。柱間寸法は7尺の等間。一辺1m内外の方形柱掘形がSB553とSA554の柱穴を切込んでいる。地山面で検出。

SA 553（PLAN10，PL.18）

F西地区。東西方向に延びる柵で，4間分（8.5m）を検出した。東方にはのびないが，西

方にさらに延長する模様。柱間寸法は7尺等間。直径40cm前後の円形柱穴。SA554の柱掘形を切込んでいる。地山面で検出。

SA 554（PLAN10, PL.18）

南北を画する柵

F西地区。東西方向に延びる柵。6間分（14.4m）検出したが，西方に延長する模様。柱間寸法は8尺等間。一辺80cm内外の方形柱穴で，直径25cm内外の柱痕跡がある。地山面で検出。

SB 555（PLAN10, PL.18）

F西地区。3間×2間（6.3m×3.0m），東西棟建物。柱間寸法は桁行7尺，梁行5尺，直径45cm内外の円形柱掘形。SA554の柱掘形を切込んでいる。地山面で検出。

SB 556（PLAN10, PL.18）

F西地区。1間×1間（2.7m×2.7m），直径50cm以下の不整形柱穴。地山面で検出。

SB 557（PLAN10, PL.18）

F西地区。2間×1間（3.6m×2.4m），南北棟建物。柱間寸法は桁行6尺，梁行8尺。一辺60cm内外の方形柱掘形に直径20cm前後の柱痕跡がある。地山面で検出。

SA 558（PLAN10, PL.18）

F西地区。東西方向に延びる柵。4間分（8m）を検出したが，さらに西方に延長する模様。方形小柱穴。地山面で検出。

SB 559（PLAN10, PL.18）

総柱建物

F西地区。4間×2間(10.5m×3.3m)，総柱，南北棟建物。柱間寸法は桁行北・南端間10尺，中2間7.5尺，梁行西柱間5尺，東柱間6尺。不整形の小柱穴。地山面で検出。

SB 560（PLAN10, PL.18）

F西地区。4間×2間（9.6m×4.2m），東西棟建物。柱間寸法は桁行8尺，梁行7尺。円形の小柱穴。地山面で検出。

SB 561（PLAN10, PL.18）

F西地区，3間×2間（6.3m×4.5m），東西棟建物。柱間寸法は桁行7尺，梁行7.5尺。一辺50cm前後の小方形柱穴である。なお，東西の妻中央の柱は畦畔に重なり検出できなかった。地山面で検出。

SB 563（PLAN10, PL.18）

F西地区。2間×1間（3.0m×2.1m），南北棟建物。柱間寸法は桁行5尺，梁行7尺。不整形の小柱穴。SB561に重なっている。地山面で検出。

SB 565（PLAN10, PL.18）

F西地区。4間×2間（9.0m×4.2m），東西棟建物。柱間は桁行7.5尺，梁行7尺。北面には6尺の廂を推定しうるが，西端の柱穴のみ検出するにとどまり，他は畦畔下のために未確認。不整形小柱穴。SB560に重なって建てる。地山面で検出。

SD 566A・B（PLAN10, fig. 8）

F西地区。素掘りの南北溝。SD566Aは発掘区東辺に添って南流する溝で，北方は畦畔下に延長し，南方は発掘区外にのびる。東岸は検出していない。現状での幅は0.7mで，遺構検出面からの深さは0.5mである。内には，上から黄灰色粘土，灰

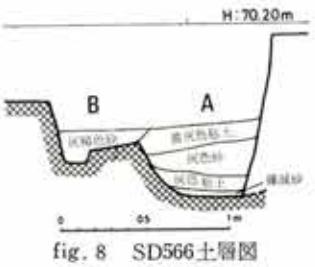


fig. 8 SD566土層図

色砂質土，灰色粘土，礫混り砂土の4層が堆積し，第4層には若干の土器・瓦片をふくんでいる。SD566BはSD566Aの西岸に重複する溝で，発掘区の東辺畦畔に添ってSE545付近から蛇行して南下する。灰褐色砂土が堆積し，遺物を欠くが中世以降の溝である。

H南地区西方トレンチ（PLAN9）

西方へ傾斜する地形

H南地区の西方に設定したトレンチでは，東方から西方に向ってゆるやかに傾斜する地形を検出した。床土下で暗褐色バラス土の整地層を検出したが，厚さ10～40cmであり第3次整地土層に対応する。この整地土と黄褐色粘質土の地山との間に厚さ10cm内外の灰黄色粘質土層があるが，これは地山の汚れともみられる。トレンチ内の遺構としては，H南地区に接する付近で，若干の小柱を検出し，所々で南北に走る溝の存在をしる程度で，とくに東方の建物群を画するような遺構はない。

F西地区西方トレンチ（PLAN10）

FaトレンチではF西地区の建物群に連続するであろう柱穴の検出をおこなったが，Fbトレンチでの遺構は皆無であり，建物群はこの付近にまでおよんでいないようである。

以上，6AFB-F～J地区発見の遺構をのべたが，それらを整地時期別に分類し表示する。

（地区） （整地）	J	I北	I南	H北	H南	G北	G南	F西
1次			SB463 SE464 SB471 SD477	SB481 SB487 SB482 SB490 SB483 SE495 SD485 SB498	SD477 SD527A・B SB528			
2次		SD453A・B	SB470	SB480 SD485	SG520			
3次		SB455	SE466 SB476	SB501 SB504 SB502				
不 明	SB430 SB432 SB437 SB440 SB441 SD444 SA447 SA448				SB510	SE535	SE525 SB530 SB550	SE545 SA558 SB551 SB559 SB552 SB560 SA553 SB561 SA554 SB562 SB555 SB563 SB556 SB565 SB557 SD566

Tab. 2　6AFB-F～J地区整地期別遺構分類表

2　東三坊大路（6AFB-A～F地区）

この地区の遺構は上部が削平され，耕作土下の床土を除去するとすぐに砂質系土壌の地山面に達する。部分的には砂利などの整地土をとどめる個所もあるが，おおむね遺構は地山面で検出した。遺構には道路・側溝などの古代のものと，それらに重複する中世から近世に至る溝などに大別できる。ここでは，必要以外は古代の遺構に限ってのべることにする。

SX 600（（PLAN11～16，PL.1，21～24）

東三坊大路

B地区からF東地区に至る267mの間で，砂質系の地山からなる平坦面を検出した。この面には中世以降の南北に流れる溝などが無数に重っているが，古代の柱穴などは検出されず，一部に砂利敷の整地面をとどめている。それは水田地割から復原する東三坊大路の想定路面敷と一致し，条坊施行時における大路に比定できる。A地区においては，後述するSD650A・Bお

よびそれ以降の氾濫が著しく，路面の痕跡をとどめず，推定南一条大路との交叉状況などについてはまったく把握することができなかった。大路の路面は旧地形に従い，北方から南方に向って緩やかに傾斜する。すなわち，発掘区北端のF東地区北辺での海抜高70.2mに対し，276m南方のB地区南辺では海抜高 65.8m と 4.4m の高低差がみとめられる。 A～E地区では後述の東側溝SD650を検出することによって路面の東限が判明しているが，西側溝の存在を積極的に示す遺構は検出できなかった。いま，西側溝に比定しうる遺構としては SD570とSD566Aとがある。SD570はSD650の西方約15mの地点に位置する南北に流れる溝で，中世以降とみられる堆積土があるが，西側溝の流路を踏襲するものとかんがえる。SD566AはF西地区の東辺にある畦畔下に存在する溝である。時期的には奈良～平安時代に比定できる堆積状況を示すが，発掘範囲が狭く直ちに路面に添って南北に流れるとは断言できない。前者の場合は路面の幅員50尺，後者の場合ならば幅員75尺となり，SD566Aが西側溝である可能性がつよい。

西側溝の位置

SD 650 (PLAN11～16, PL.1, 21～24, fig.9)

A～E地区にわたる南北約240mの間で，北方から南方に流れる溝を検出した。溝は時期をことにする2条の溝が上下に重なる状況で検出した。ここでは時期の古い下層の溝をSD650Aとよび，新しい上層の溝をSD650Bとよぶことにする。* 2条の溝はE地区北半では完全に上下に重なり，それ以南ではSD650Bが西側により，B地区南半部以南では流路を別にしている。

SD650Aは幅2.5m前後， 残存路面からの深さ1.1m内外の素掘溝である。E地区での横断面は底部の狭いV字形に掘るが，D地区以南では底部の幅が広がり逆台形の断面を呈している。路面SX600の南方への傾斜と呼応し，底も北方が高く南方が低い。すなわち，溝底の海抜高はE地区で67.2m， その南方約180mを隔てたB地区北辺では64.68mとなり， 2.52mの高低差がある。幅員は必ずしも一定せず，一時的に水溜りとなる個所では若干幅員を広げている。例えば SD601， SD635などの合流点や上流， 下流などそれぞれの場所に応じて溝の堆積状況は変化している。しかしながら，基本的には下層に灰色粗砂質土，褐色砂質土などが25～40cmの厚さで堆積し，その上に黒灰色粘土が20cm前後の厚さで堆積し，さらにまた灰色砂質土などが堆積する。このような状況は，流れの速い時期には砂質系の土砂が堆積し溝が埋まり，流れが緩慢になる時期になると粘土質系の土砂が堆積し，ついには溝の機能を消失する状況を示している。堆積土のなかには土器・陶器・瓦・木器など多数の遺物が包含されており，ある部分では土砂の量よりも遺物の量が多い状況を示した。遺物の年代は平安時代の様相を呈し，天長5年(828)の告知札が存在することから，平安時代初期の遺構であることがわかる。奈良時代とみられる遺物がまったくなくはないが，それらは，溝底に貼りついたような状況で検出された。奈良時代末期から平安時代の間に，大規模な浚渫工事がおこなわれているとみるべきである。

古い時期の溝

SD650Bは，幅2m前後，残存路面からの深さは0.5～0.9mで， SD650Aの埋没後に掘り開いたものである。底部は平坦面をなす部分もあるが，一般的には不整形の凹凸面をなす。この溝もSD650Aと同じく北方が高く，南方で低い。D地区北半からC地区にかけての区域では，約40cm 前後の間隔をおいて雑木の乱杭を打込み，河原石などをも併用して護岸施設としている。 D地区における典型的な堆積状況からすれば， 下層に褐色系の粗砂質土が15cm内外の厚

新しい時期の溝

* 発掘の段階では，SD560B上部の黒色粘土堆積を区別し，上・中・下の3期に区別した。その後の検討を通じて，この上・中は1時期内に包括されることが判明した。

さで堆積し，その上部に黒色粘土が30cm前後の厚さで堆積している。上部の黒色粘土は溝が東側に氾濫したのちに堆積したもので，SD650Aの上部を覆う。この溝からも多数の遺物が発見され，下部の時期を寛平大寶(890年)の頃，上部を延喜通寶(907年)の頃に比定することが可能である。

坊内からの排水

D地区の北辺付近とC地区の南辺付近に東方から流入する2条の溝（SD601，SD635）が，約115mの間隔をおいて存在する。いずれも素掘の溝で，東方の坊内からの排水路であろうが，今回の調査範囲では存在を確認するにとどまり，性格はさだかでない。

SD650A・BはA地区において著しく氾濫し，この地区を沼状の湿地にかえている。その範囲は広く，県道の南側で設定した6AFE区にもおよんでおり一条大路との交叉部分などはすでに流失し，痕跡すら残存しなかった。

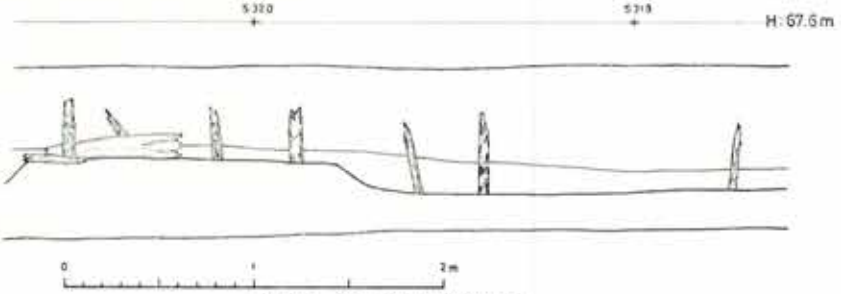


fig. 9　SD650Bの護岸状況

SD 611 (PLAN14，PL.23)

南北溝

D・C地区の東方拡張地区で検出。南北に流れる幅1.6m前後の素掘溝である。溝には小石が混入する灰黒色土と白色砂質土が堆積している。前者は厚く上層にあり，後者は薄く底に貼りついている。この付近は削平が著しく溝の深さは10cm内外にすぎず，溝に堆積する遺物は少なかったが，中世以降の灯明皿などが混在していた。東岸に平行して，約50cm前後の間隔をおく雑木の杭を打込む。C地区ではこの溝に直交する溝が西岸にとりついている。西方に平行して存在するSD650AとSD611との心心距離は約7mあり，その間に介在する南北に延びる畦畔を築地に仮定すると築地の東側の雨落溝に想定することも可能である。* しかしながら，堆積土に中世の遺物が混入しているので，ここではそのかんがえを保留しておく。

SA 620 (PLAN14，PL.23)

南北柵

D・C地区の東拡張区域で検出。南北にのびる柵で，31mにわたって存在する。C地区で約8.4mの開口部をおいて北に7間，南に1間分の柱穴を検出したが，それぞれさらに延長するようである。柱間寸法は開口部の北第1柱間13尺，その他は平均8尺である。SD650Aとの心心距離は40尺，SD611との心心距離は約5m前後（約17尺）となる。開口部には柵と柱筋をそろえる3個の小柱穴があるが，柵と時期を同じくするか否かについては判然としない。

SB 615 (PLAN14，PL.23)

D地区東拡張区。桁行2間以上，梁行2間の南北棟建物とかんがえる。西側柱は検出されなかったが，築地の存在を仮定して，西側柱は築地を利用したものとかんがえる。柱間寸法は桁行7尺，梁行10尺。

以上の遺構のほか，通称一条通以南でもトレンチを設定したが，沼状の湿地が広範囲に広がる状況を確認したにすぎず，遺物の出土はまったくなかった。

* A地区の南辺に位置する畦畔に東西方向のトレンチをいれ精査したが，畦畔下に築地の痕跡を見出すことはできなかった。しかし，柱穴も存在していないので，かって存在した築地が後に削平されたものともかんがえられる。

Ⅳ　平城京の遺物

発掘調査を通じて，溝・井戸・整地土などから多数の遺物が出土した。とくに，奈良時代一条三坊十五坪内のSD485と，平安時代の東三坊大路東側溝であるSD650からは大量の遺物が出土した。今回はこの時期をことにする2条の溝の遺物を中心として，木簡・瓦塼類・土器・漆器・木製品・銭貨・金属品他にわけてのべることにする。

1　木　　簡

A　SD485出土木簡

SD485からは33点の木簡を検出した。以下で報告するのは，28点であるが，その多くは貢進札であり，和銅・霊亀・養老など奈良時代初期の年号を記するもの5点をふくんでいる。また貢進札のうち参河国のものが多いことが注目される。

木簡1（PL. 36）　表　□残四百(卅)□文　8.2×0.8×0.3cm　6081型式*

□□

上下，左右ともに欠損。表面右半部に文字をのこす。帳簿の断簡か。

木簡2（PL. 36）　表　樂毅論(毅論)　夏

□□　17.6×4.3×0.4cm　6081型式

上端の右側面は削りの調整面，左側面は割りさき。下端は切断する。習書。「楽毅論」は書名で，中国戦国時代，燕の亜卿楽毅について魏の夏玄が論じたもの。晋の王羲之の書が小楷法帖として重じられ，正倉院には光明皇后が書写した「楽毅論」が伝わる。　**楽毅論**

木簡3（PL. 36）　表　□□(保)長□□(葛木)　□□　10.0×2.2×0.5cm　6081型式

上下端は折損，左右は調整面。5戸を保とし，1人の長をおく郷村組織の「保長」にあたり，大宝2年美濃国戸籍のように，五保と称した可能性がつよい。葛木は人名であろう。　**保　長**

木簡4（PL. 36）　表　参河國額田郡謂我郷白米五斗　17.0×2.0×0.4cm　6031型式

ほぼ完形。白米五斗の貢進札。『和名類聚抄』には「位賀」郷とみえる。　**白　米**

---

*　木簡の型式は『平城宮木簡一』に従う。今回の報告にあらわれる型式をのべる。011型式：短冊形で方頭。019型式：一端が方頭で，他端の原形を失う。021型式：011型式に似るが，小形で短い。031型式：両端の左右に切込みをいれる。032型式：一端の左右に切込みをいれる。039型式：032型式に似るが他端の原形を失う。051型式：一端を両側から削って尖らせる。081型式：原形不明。091型式：削り屑。なお，最初の6は奈良時代をあらわし，7は平安時代をあらわす。

木簡5（PL.36）　表　参河國□多郡鴨田郷厚石里□　14.3×2.1×0.3cm　6039型式

下端は折損。貢進札。郡名第1字は判読不能。『和名類聚抄』によると，参河国で鴨田郷があるのは額田郡である。

木簡6（PL.36）　表　参河國青□　6.4×1.7×0.3cm　6081型式

裏　安得米□

下半を欠く。上端は原形に近い。米の貢進札か。郡名は『新撰姓氏録』左京皇別下に「青海」とあり，『和名類聚抄』の「碧海（阿乎美）」にあたるのであろう。安得は人名か。

木簡7（PL.36）　表　参河國八名郡片山里大(伴嵆)□□□　15.8×1.3×0.6cm　6051型式

裏　庸米五斗　和銅六年

庸米

下半を欠く。庸米の貢進札。人名にあたる部分は，墨で抹消している。『和名類聚抄』には片山里をのせていない。賦役令計帳条によると，庸米は大粮として衛士・仕丁・采女・女丁らにあたえられ，雇役民雇直にもあてられる。

木簡8（PL.37）　表　参河國□(八)名郡神里飽□　12.2×2.7×0.4cm　6081型式

裏　和銅六年十月

下半を欠く。貢進札。里名「神」は『和名類聚抄』では「美和」と表記している。里の下字を人名と考えると，飽田史，飽波，飽海などの姓であろう。

木簡9（PL.37）　表　八名郡多米里多米部□(酒)庸米五斗　20.3×2.6×0.4cm　6051型式

裏　和銅六年

八名郡多米里

全体に腐蝕が著しく，墨跡が薄い。上端は当初からの切断であり，国名を記さないが完形とおもわれる。庸米の貢進札。八名郡多米里は参河国に属する。なお，刊本の『和名類聚抄』で多木里とするのは，多米里の誤りであることがわかる。

木簡10（PL.37）　表　参河國八□　8.3×2.2×0.4cm　6081型式

裏　戸主若日下部馬□

若日下部

下半を欠く。貢進札。若日下部（わかくさかべ）は，『類聚符宣抄』の永延2年（988）7月23日太政官符に「八名郡主帳外従八位上若日下部首統忠」とみえ，一族であることがわかる。

木簡11（PL.37）　表　丹波國船井郡出鹿郷曽尼里秦人(首)□□米　18.4×1.3×0.7cm　6031型式

右側面を欠損。米の貢進札。郡・郷・里という記載からみて霊亀元年（715）から天平12年（740）までの郷里制施行期間中の貢進札とかんがえられる。木簡12も同じである。

木簡12（PL.38）　表　吉備里海部赤麻呂米六斗　21.6×2.2×0.3cm　6032型式

裏　靈龜三年六月

完形。米の貢進札。郷里制施行中の里であるため，吉備里が属する国郡は不明。

木簡13（PL. 38）　表　淡路國津名郡賀茂里人　27.5×3.4×0.8cm　6032型式　人　夫

裏　夫 中臣足嶋庸米三斗 同□山□□米三斗 并六斗
（巨）（部庸）

完形。中臣足嶋・山部2人に関する庸米の貢進札。米1俵は5斗が普通であるが，これは6斗を1俵としたのであろう。人夫は唐招提寺文書や平城宮木簡にみえる用語。

木簡14（PL. 39）　表　□□郷中□里□（部）　9.0×1.7×0.4cm　6081型式　養老七年

裏　□老七年七月十八日（養）

上半と下半とを欠損する。貢進札。

木簡15（PL. 40）　表　□□□□□□□□塩三斗　18.3×1.9×0.2cm　6059型式

上半と右側面を欠損する。塩の貢進札。塩3斗は正丁1人の調の輪貢量。

木簡16（PL. 39）　表　□□□□（國）　13.2×1.9×0.2cm　6019型式

裏　□□良五□

下半は欠損。全体に墨痕が薄く，判読が困難である。貢進札か。

木簡17（PL. 39）　表　□奴婢食料米一斛（官）　12.7×2.9×0.5cm　6039型式

上半は欠損。奴婢には官に所属する公奴婢と個人に所属する私奴婢がある。ここでいう官奴婢は，官田の耕作その他の雑役に駈使される。断簡のため物品整理札か貢進札か決め難いが，後者の可能性がつよい。尾張国（天平6年），但馬国（天平10年），大倭国（天平2年）の正税帳に「官奴婢食料」を中央へ進上した例がある。この木簡では，白米（年料舂米）・庸米などの貢進札にあらわれる1俵（5斗）の単位と異なる点が注目される。　官奴婢食料

木簡18（PL. 39）　表　□□□□ 足嶋三斗五升　□石村　24.8×3.3×0.4cm　6033型式

完形。ただし表面右半および裏面が剝離し，判読不能の個所がある。□石村は人名か。貢進札であろうか。

木簡19（PL. 40）　表　□□田郡□□□（嶋郷）　10.5×3.3×0.4cm　6081型式
□王部□□□

裏　□□□

上下，左右とも欠損。表面は2行に書くが，2次的に削りとられ判読できない部分が多い。裏面には文字の左半部を一行のこすが判読不能。郡，郷の記載からみて貢進札であろうか。

木簡20（PL. 39）　表　丸子□□　□□　□　27.8×1.1×0.3cm　6081型式

裏　□　□□　□

右半部および下端は欠損。全体に墨が薄く判読が困難である。丸子（わに）は姓であろう。

習　書

木簡21（PL. 84）　直径15.8cm

表　□□□（不葛）第卌言倚椋
□（人）相日下　□（相）　飛□
首不用用　子子　子
□□□□

裏　□□□
成識□飛　飛
景景□□□（第）
□（椋）木凡

曲物の底板に習書したもの。半部は破損。

木簡22（PL. 40）　7.2×3.1×0.5cm　6081型式

表　□□（綿）
□□（綿）

裏　□□□□□（右）
□尓國

上下，左右とも欠損。表面の2行は同じ文字。裏面第1行は左半部の字画をとどめる。

木簡23（PL. 40）　17.4×2.3×0.8cm　6081型式

表　□□□城城城城我我□

左側面に調整面をのこして欠損。城と我の習書。第1・2字は視とも読める。

木簡24（PL. 40）　13.5×1.3×0.3cm　6039型式

表　□□□　□□□□（里）

右側面と下半は欠損。左上端部に切込みがあり，貢進札とおもわれる。

木簡25（PL. 39）　8.3×1.0×0.3cm　6081型式

表　□□□□□（七）

左側面のみ調整する。文字の右半部を欠き，判読不能。

木簡26（PL. 40）　12.0×2.5×0.3cm　6039型式

表　□□□□□□（物）

裏　大□

上端と右側面を欠損し，縦に2折する。墨痕薄く判読不能。

木簡27（PL. 40）　20.3×0.9×0.6cm　6081型式

表　□□□□□（料）田□田

裏　□□□□□□（申）　□□□　□

左右側面と下端部を折損。墨痕が薄く，文字の1部を欠いているため判読不能。

木簡28（PL. 41）　9.8×5.8×4.8cm

A面　論□
□[illegible]

B面　秖　[illegible]
八　[illegible]
（弦）□　秖

C面　□□　□
□義□
□□

D面　□□□□
義　義□□

直方体の一面を半円形にえぐった角材の四面に習書したもの。

B　SD650出土木簡

SD650から発見した木簡は，断片をふくめて33点ある。それらはSD650Aに限って存在したもので，SD650Bに属するものはない。そのうち，注目されるものは告知札4点，物忌札1点がある。そのほか，官司の帳簿とおもわれる木簡があり，遺跡の性格をかんがえるうえで重要である。また，告知札の1点に天長5年(828)，伝票に□(天)長7年(830)の年紀をとどめていることから，SD650Aの年代を決める有力な手掛りになっている。以下ではそれらのうちから，24点の釈文を掲げ若干の解説を付す。

木簡29 (PL. 42)　　告知　往還諸人　走失黒鹿毛牡馬一匹在験片目白額少白　　**告知札**
件馬以今月六日申時山階寺南花薗池邊而走失也
若有見捉者可告來山階寺中室自南端第三房之　九月八日
99.3×7.3×0.9cm　7051型式

長い板の下端を尖頭形に削り，表面に墨書する。文意は「往還の諸人に告知する。走り失せた黒鹿毛の牡馬を捜してほしい。特徴は片目白で額が少々白い。この馬は今月6日申時に，山階寺（興福寺）の南花園の池辺から走失した。若し見捉えるものがあれば，山階寺中室の南端から第3房の主まで知らせて欲しい」。東三坊大路を往還する人達に告知した木札である。山階寺は興福寺の別称。南花薗池は『山階流記』所引の宝字記にいう「南花薗四坊，在池一堤」にあたり，同書所引の天平記によれば，この池を「佐努作波」とよんでいる。つまり，興福寺伽藍に南接する花薗四坊と池をさしている。現在の猿沢池である。興福寺中室とは，本来あった三面僧房の東室に相当する建物である。興福寺では三面僧房の東側にさらに僧房を建て，これを東室とよんだので，元来の東室は中室とよばれるようになった。　　**山階寺**

木簡30 (PL. 42)　　(被盗)□□斑牡牛一頭　誌左右本(爪)□在歳六許
(往還)□□□□□告知
應告賜山邊郡長屋井門村　右牛以十一月卅□□聞給＝
＝人益坐必ゞ可告給
87.6×5.0×0.7cm　7051型式

さきの木簡29と同形の木札である。冒頭の五字は墨書があるが判読できない。割書右行の第1・2字は墨痕を欠くが，風化のため字形が突出しているため判読することができる。左行の日付の下は折損のため判読が困難である。文意は「往還の諸人に告知する。盗みとられた斑牛1頭，特徴は左右に本爪あり，六歳ばかり。この牛は11月30日盗まれた。所在をご存知の方は，大和国山辺郡長屋井門村まで必ずお知らせ下さい」。長屋井門村は『和名類聚抄』に山辺郡長屋郷とみえる。東大寺の庄園であった長屋庄や興福寺の文書にみえる長屋中庄，長屋東・西庄などはこの付近にあったとかんがえられる。* とくに，興福寺大和国雑役免坪付帳にみえる西井殿庄という名は長屋井門村と関係しよう。現在の天理市井戸堂に比定できよう。また，「聞キ給フ人益シ坐セバ必ズ必ズ告ゲ給フベシ」という用語用字は国語学史上貴重な資料。　　**山辺長屋門村**

＊　天暦4年11月20日　東大寺封戸荘園并寺用帳　　和国雑役免坪付帳『平安遺文』9巻　4639,4640号
『東南院文書』3—32　延久2年9月20日興福寺大

木簡31（PL.42）

告知捉立鹿毛牡馬一匹□ 験額髮□（モ） 右馬以今月一日辰時依作物食損捉立也而至干今日未來其主□件馬□可來□□□□ 天長五年四月四日

113.4×5.1×0.75cm　7059型式

天長5年

木簡29とほぼ同形の木札。最長の木簡であるが，墨が薄くて判読不能の個所が多い。文意は「告知す，捉え保管しています鹿毛の牡馬一匹。（特徴は判読できない）。この馬は今月1日辰時に作物を食い損じていたので捉えた。けれども今日に至るまで持主が来ない。（以下文意不詳であるが，現在の保管者の所在や姓名を記するのであろう）。天長5年4月4日」。

木簡32（PL.42）　表　告知往□

26.8×5.8×0.5cm　7019型式

さきの諸例と同形の木札断片。冒頭の文字3字が判読できるが，以下は欠損している。

木簡33（PL.44）　表　物　忌

14.0×3.3×0.4cm　7039型式

物忌札

上端部を尖らし，下端部は欠損する。文言はこれで完結しているとみてよい。物忌札である。物忌札は喪家の入口にたてたり，死者の枕許に置いて魔除けとする。元興寺極楽坊からは中世の物忌札が発見されたことがある。* しかし，平安時代初期の例としてはいまのところ本例が唯一である。

木簡34（PL.41）　表　□（天）長□（七）年二月二日□□（廳北）間□（垣）□＝

＝□（小）黒万呂柒拾駄　□ 将領榮井眞継□□□□□□□□□（貞）　□□□□□真安良麻呂　□愛宕麻呂　□□麻呂

37.2×3.3×0.3cm　7011型式

天長7年

腐蝕するがほぼ完形。上方右に小穴があるが2次的な加工。文字の判読できない個所が多い。天長7年（830）2月2日，将領栄井真継以下のものと某物70駄が廳北間垣を通過する証明書である場合と，某物70駄で「廳北間垣」を工作する命令書なのか決め難い。年月日が文頭にくる点は注目される。栄井姓は宝亀8年(777)4月，日置造義万呂ら8人に栄井宿祢姓を賜ったことを初見とする。このとき，栄井姓を賜った日置造道形は，宝亀4年2月，佐保川堤修理使として活躍した。将領栄井真継は道形の後裔あるいは一族とかんがえられよう。「将領」は土木工事の統率者の意味であろう。

木簡35（PL.43）　表　□冊俵　□定米拾捌斛九□

22.3×4.5×0.5cm　7081型式

上下ともに欠損。左半部に薄く墨書がみえるが判読できない。米の出入に関する伝票風の木簡であろうか。

---

*　難波俊成「元興寺極楽坊所蔵の咒符をめぐって」（元興寺仏教民俗資料研究所年報1968，p.30）

木簡36 (PL.44)　表　絹收下□　　7.4×2.7×0.5cm　7019型式

裏　□□

絹收□

八月十□□

下部は欠損。上端は圭頭形に尖らせて整形。絹の収納に関する記録，又は題籤であろう。

木簡37 (PL.44)　表　□月卅日工柒人　　11.6×2.0×0.4cm　7081型式

上下ともに欠損している。月日の下は文書の差出者名か，あるいは某月30日の工人7名を記録したのであろう。

木簡38 (PL.45)　表　□　　16.8×1.8×0.4cm　7059型式

□万呂一　□□一

裏　□□　□□一　□□

八人□仁□(小十)□□

上端と左側面を欠損。表は人名を二段に書し，その下に「一」と数え，合符を付している。裏の左半部は剝離して判読できないが，表と同じく人名を書くのであろう。八人は表記する人名の合計か。下方の小字は文意不明。

木簡39 (PL.43)　表　□□賛　□□六人□(給)　□柱　□人　□　目□　　28.6×5.6×0.4cm　7081型式

帳簿風の断片である。横書き。

木簡40 (PL.44)　表　人々前　　10.2×2.7×0.5cm　7061型式

裏　人々前

軸を欠いているが，題籤の断片である。前(べつ)は『釋名』釈書契に「別也，大書中央，中破別之也」とありいわゆる「割符」のことをいう。『康熙字典』では「仏家作詩曰偈，作文曰前」といい，僧呂の文章を前という。この木簡がいずれに属するものか決し難いが，証文書のような**題籤**ものの題籤である可能性がつよい。

木簡41 (PL.44)　別當殿　　10.8×1.9×0.2cm　7031型式

物品付札。別当が所持する物品に付したのであろう。別当は本来本官のあるものが別にその**別当**ことを掌ることをいう。もちろん令にない。

木簡42 (PL.44)　鹿　宍　　5.4×1.3×0.2cm　7021型式

物品付札。宍は乾肉の意。鹿宍は当時の食用獣肉の代表的なもの。平城宮木簡にみえる。*

* 『平城宮発掘調査出土木簡概報』4・5　1967，1968

木簡43 (PL.44)　参河國加茂郡上□郷□□　15.2×2.4×0.6cm　7039型式

下半を欠く。貢進札。郷名第二字目は判読不能。『和名類聚抄』にも加茂郡に「上□」郷は見えない。

木簡44 (PL.45)　表　波羅(密)□多経巻　10.3×2.3×1.2cm　7081型式

裏　勝須(波)□羅(密)□□

□ □ □

□□ □巻巻

大般若経　下半は欠損。習書であり，経題「大般若波羅密多経」の一部がみえる。

木簡45 (PL.45)　□謹　謹　11.0×3.1×0.3cm　7019型式

左および下端を欠損。謹字の習書であろう。

木簡46 (PL.41)　表　□□□　別　□　□　46.1×3.3×0.4cm　7081型式

裏　□

□ □　□ □　□

上下・左右ともに欠損。横書きで表裏の文字の書き方は逆である。判読不能。

木簡47 (PL.45)　表　□仁□□□仁□　(彼彼)　11.6×3.0×0.4cm　7081型式

裏　仁彼□仁□□□

上下ともに欠損。上端部の内側に両側からの切込みがある。また右側面にも10個所の切込みをおこなっている。仁と彼字の楽書。

木簡48 (PL.45)　貫貫□　7091型式

習書の削くずである。

木簡49 (PL.45)　表　□□　年　冊□　13.7×1.4×0.4cm　7081型式

裏　□

上下，左右ともに欠損。横書き。

木簡50 (PL.45)　□下　3.0×1.1×0.4cm　7081型式

上下，左右ともに欠損。

木簡51 (PL.44)　□加　8.7×2.0×0.6cm　7039型式

上端欠。全体に焼痕があり墨書が判読できない。

木簡52 (PL.45)　□(清)高高清高

6個の断片となる。上方が広がり，あるいは桧扇の断片に習書したもの。

2 瓦 塼 類

6AFB区から出土した瓦塼類のうち，もっとも多数を占めるのは丸瓦と平瓦である。ついで軒瓦が467点あり，そのほかに小量の鬼瓦・道具瓦・塼をふくんでいる。それらの$\frac{2}{3}$以上は，A～E地区のSD650で発見し，F～J地区の出土例は少ない。このため，瓦塼類から検出遺構の年代などを直接導き出すことは困難である。

A 軒 丸 瓦 (PL.46～50)

軒丸瓦は201点あり，30型式47種に分類することができる。

重圏文 重圏文瓦として6011～6015がある。6011は中央に珠点のない3重圏文，各圏線は等間隔にめぐる。同型式が難波宮から2種発見されているが同笵ではない。* 6012は3重圏の中央に珠点を配す。出土例は多く全体の12.9%を占めている。3重圏の間隔によってA・C・Dの3種に区分しうる。すなわち圏線を内から第1圏線，第2圏線，第3圏線とよぶならば，Aは第1圏線と第2圏線との間隔が広い。Cは第2圏線と第3圏線との間隔が広く，第3圏線が他よりも太い。Dは各圏線の間隔がほぼ均等で，第1，第2圏線が太い。なお，この型式では瓦当裏面に布目痕を残す例が多くあり，軒平瓦6572と組み合う。6015は中央に「右」の逆字を陽刻した3重圏文。難波宮や長岡宮に同笵例がある。**

単弁蓮華文 6126は新種で，素縁，珠文縁の単弁蓮華文。弁区よりも少し突出した中房に1＋6の蓮子を配し，蓮弁は重弁風で外縁が直立する。6130は線鋸歯文縁，珠文縁の単弁蓮華文である。A・Bの2種があり，Aが出土した。中房に1＋7の蓮子を配し，内区に線刻の細手の単弁をおき，各弁は中房にとりつく間弁で分離されている。6133は素縁，珠文縁で内区に菊花状の単弁を配する。12種に細分されているが，D・G・H・Mが出土した。この4種は外縁と内縁を画する圏線がない点で共通するが，蓮子と珠文の数が相違することによって区別できる。6134も線鋸歯文縁，珠文縁の単弁蓮華文である。瓦当面が平坦で，弁は間弁によって分離されている。蓮子の数によってA・Bにわかれるが，Bは新種である。6138は線鋸歯文縁，珠文縁の単弁蓮華文である。弁端がまるく，間弁端部が三角形を呈し，蓮子と珠文が高く突出する。6種に細分されているが，そのうちB・Fの2種が出土した。2種は蓮子の数を異にするほか，Fが小型である。なお，Bは音如ケ谷瓦窯で製作され，Fは大安寺に同笵例がある。***

6225～6228は，2重圏線縁の軒丸瓦である。6225は凸鋸歯文縁，圏線縁の複弁蓮華文であり，弁端が尖がるAと弁端のまるいCの2種が出土した。6226は線鋸歯文縁で6225に比して小型。6227は素縁，圏線縁の複弁蓮華文である。A・Bの2種があり，Bは新種で間弁を4弁ごとに配置する。6228は素縁，圏線縁の複弁蓮華文。全体に小づくりで，弁端がまるい。

---

* 重圏文軒瓦の型式番号は，難波宮跡の場合と類似した番号となっているが，直接関係しない。したがって型式番号が同じでも同型式の瓦ということはできない。

** 難波宮址顕彰会・研究会「難波宮址の研究5-2」1965，p.1 小林清「長岡宮の新研究6」1972，p.52

*** 音如ケ谷瓦窯例は藤沢一夫「造瓦技術の進展」（日本の考古学Ⅵ 1967，p.306）奈良県教育委員会『奈良山』1973 大安寺例は「大安寺発掘調査概要」（奈文研年報1967，p.1）

6235は素縁，珠文縁，複弁蓮華文である。4種あり，東大寺式ともよばれる。そのうち蓮子と珠文数で区分されるA・B・Dの3種が出土した。とくにDは磨滅が顕著で瓦当面に笵の木目が浮きでている。* 6236は素縁，珠文縁の複弁蓮華文である。A・Bの2種があるが，Bが出土した。Bは中房が大きく，弁区よりも低い。さらに子葉を画する弁の中心線がなく，細い間弁が内区と外区とを画する圏線に接している。

6282～6291は間弁が独立せず，界線となって蓮弁の周囲をめぐる。6282は9種あり，祖型となるAを除くほかはすべて中心蓮子が大きい。B・F・G・Hの4種が出土した。Bは蓮弁が短く，弁区全体に盛りあがりがある。F・Gはよく似るが，Fの瓦当面が扁平であるのに対し，Gは盛りあがり，蓮子の配置を異にする。Hは構成が崩れ，蓮弁と間弁がはっきりと分離しない部分がある。6284は線鋸歯文縁，珠文縁，複弁蓮華文である。3種あるがCが出土した。Cは蓮弁の盛りあがりがなく，扁平である。6285は中房が小さく，弁が細長い。内区の全面に盛りあがりがあり，中房はわずかに凸面をなす。6291は間弁がほとんど蓮弁の輪郭に平行してめぐる。弁区には盛りあがりがあり，周縁に1条の隆起線をめぐらす。6285，6291はともに恭仁京に類例があり，焼成ははなはだ堅緻である。

興福寺式

6301は線鋸歯文縁，珠文縁，複弁蓮華文で，興福寺式ともよばれる。3種あり，小型のB・Cの2種が出土した。Bは蓮子1＋5＋9，鋸歯文30，瓦当裏面に布目痕をとどめる例が多い。** Cは蓮子1＋5＋10，鋸歯文30。ともに珠文は20である。6303にはA・Bの2種ある。いずれも中房がやや突出し，凸面をなす。間弁は蓮弁端部に平行させて界線とする。そのうちAが出土したが，Bと比べて蓮弁の盛りあがりがつよく，弁端が尖る。新種であり同笵例が船橋遺跡と難波宮にある。*** 6308は，小形の突出した中房から細い弁がでる線鋸歯文縁，珠文縁，複弁蓮華文である。各弁は盛りあがりがあり，弁と子葉とは肉彫り風に表現する。外縁は内轡する斜縁であり，上端は平坦面をなす。斜縁と平坦面との境には1条の隆起線がめぐり，線鋸歯文がこれに接する。A・Bの2種あるが，その差は小さい。Aは中房が弁区よりもやや低いが，Bは中房が突出し蓮子の配置を異にする。6314Aは線鋸歯文縁，珠文縁，複弁蓮華文の小型瓦である。

6316は線鋸歯文縁，珠文縁，複弁蓮華文である。間弁がなく，各弁が密接し子葉を分ける弁の中心線がない。9種あるが，AとFの2種が出土した。2種の違いは蓮子の数にあるが，Fでは弁端が内外を画する界線に接している。6320は凸鋸歯文縁，珠文縁で，24の単弁を配する。類例は高麗寺，山背国分寺，薬師寺，唐招提寺にある。**** 6348は線鋸歯文縁，唐草文縁，複弁蓮華文。突出した中房に1＋8の蓮子を配し，外区内縁に左回りにめぐる唐草文を配置する。類列は法華寺，法隆寺東院にある。*****

平安時代の軒丸瓦

7243は素縁，珠文縁，複弁蓮華文。突出した中房に蓮子1＋8を配する。蓮弁は先細りの複弁で，弁の中心を画する線がなく，間弁を蓮弁の輪郭にあわせてめぐらす。珠文縁の内外に配する界線は細い。新型式である。7251は素縁，珠文縁，複弁蓮華文。半球状に盛りあがる中房

---

* 奈良六大寺大観刊行会『六大寺大観興福寺』1969，p.73に6235—Dが収録されている。

** 『興福寺食堂発掘調査報告』（奈文研学報第7冊 1959，p.17）

*** 大阪府教育委員会『河内船橋遺跡出土遺物の研究』（大阪府文化財調査報告書8 1958，p.37）難波宮址顕彰会・研究会『難波宮址の研究6』1970，p.108

**** 高麗寺・山背国分寺については『夢殿』18 1938，p.201・p.229 薬師寺については石田茂作『伽藍論攷』1948，p.122

***** 法華寺は，岩井孝次『古瓦集英』1936 図版23 石田茂作『伽藍論攷』図版20 法隆寺東院は石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936 図版112，p.218

に1＋5の蓮子を置く。蓮弁は細い輪郭線で囲み，高く盛りあがった弁の中央に2枚の子葉を彫っている。外縁は内彎する斜縁である。類例は大安寺にあり，新型式である。* 7283は素縁，珠文縁の蓮華文で，弁区よりも一段低い中房と界線でかこむ複弁を配する。同笵例は法華寺にある。7297は素縁，珠文縁，単弁蓮華文。中房と弁区，弁区と珠文帯を画する界線が太く，蓮子と珠文も大きい。外縁は直立する素縁。新型式である。7349は外区に右回りの唐草文を配する。単弁13弁蓮華文。弁区にくらべて低い中房には，6弁の蓮弁を配する。いずれも焼成が悪く，軟質で大部分の瓦当面は磨滅している。軒平瓦7734型式と組み合う。不退寺式と称されるもので，F～J地区で集中的に出土した。**

B 軒 平 瓦 (PL.46•47•51•52)

軒平瓦は266点あり，25型式33種に分類することができた。

幾何学文系の瓦として，6555，6572，6574がある。6555は5重弧文であり，段顎部を辛うじてとどめる。6572は重圏文で，2種にわかれる。Aには段顎のものと直線顎のものとがある。Bは Aよりも圏線の間隔が広く，新種である。6574は内側の圏線内に，さらに1本の孤線をおく。 **重圏文**

6640，6641は偏行唐草文である。6640は右から左へ流れる偏行唐草で，上外区に珠文，脇区と下外区に線鋸歯文を配する。6641は左から右へ流れる偏行唐草文。上外区に珠文，脇区と下外区に線鋸歯文をおくが，鋸歯文は内外区を画する界線に接していない。

6663は圏線縁の均整唐草文で，9種ある。そのうちA•C•Fの3種が出土した。Aは唐草文の左右が均整。Cは左第2単位第1支葉を逆にし，右第3単位の第1支葉を欠く。Fは唐草の単位が分離し，巻きこみの強い唐草が上下の内外を画する圏線から派出する。6664は珠文縁の均整唐草文で14種あるが，C・Hの2種が出土した。Cは横位の縄叩き目を付し，Hは唐草の巻きこみが大きい。6667，6668は珠文縁，均整唐草文。6667は三葉状花頭形の中心飾が左右に開き，上外区の界線にとりつかない。内区には左右に4単位の唐草文が展開する。類例は新堂廃寺にある。*** 6668は花頭形の中心飾の各先端が尖る。 **均整唐草文**

6671は上外区と脇区に杏葉珠文，下外区に線鋸歯文をめぐらす均整唐草文。4種あるが，B・Dの2種が出土した。中心飾が上から下に巻きこむ中心葉にかこまれるこの種の瓦は，軒平瓦6301型式と組合って興福寺の創建瓦とされている。なお6671Bには段顎と直線顎の2種類があるが，Dは段顎である。6675は変形三葉状中心飾から，左右に4単位の唐草が展開する。主葉は連続しており，6640，6641に類似する。第2単位主葉の巻きこみと第3単位主葉の間に珠点をおき，上外区に珠文，下外区と脇区に線鋸歯文を配する。6681A，6682は中心飾の三葉形を単線で表現し，十字形をなす。6681Aは圏線縁で，3種あるが，そのうちAが出土した。6682は上下外区と脇区に珠文をおく。6691Aは中心飾の花頭形を三葉につくるが，基部を単線であらわす。唐草は左右に4単位展開し，外区と脇区に珠文を配する。顎は曲線顎で焼成は堅緻である。

6702は単線の中心飾花頭形がわずかにT字形に突出する。4種あり，Dが出土した。硬直し

---

* 大岡実他「大安寺南大門，中門及び回廊の発掘」(日本建築学会論文集50 1955,p.133)

** 6320，7297，7349各種は，いずれも，複弁くずれの単弁と理解して，型式番号を設定したものである『平城宮報告Ⅱ』p.60

*** 大阪府教育委員会『河内新堂・烏含寺跡の調査』(大阪府文化財調査報告書12 1961,p.26)

た3単位の唐草が左右に展開するが，各単位の大きさは均等でない。6713は逆心葉形の中心飾上端から，主葉が連続する4回反転の唐草が展開する。外区と脇区には間隔の粗い珠文を配している。同笵瓦が法華寺・海竜王寺・大安寺にある。

6721は中心飾の左右に5単位の唐草を展開する珠文縁の均整唐草文である。10種あるが，B・C・D・F・Jの4種が出土した。うち，D・Jは新種である。Dは中心飾の左下端部と左第3単位唐草付近に笵の割れ目をとどめる。Jはもっとも小さいもので，唐草の巻きこみが大きく，脇区にも珠文を配している。6725Aは三葉状中心飾から3単位の均整唐草文が展開するが，各単位は連続せず唐草先端の巻きこみもほとんどない。外区，脇区に粗い間隔の珠文を配している。この瓦は6236Aと組み合って，唐招提寺創建瓦とされている。* 6726Cは唐草先端の巻こみの強い唐草文で，珠文縁をめぐらす。上下外区の珠文は平行せず，千鳥に配している。第1単位の唐草支葉の1枚が中心飾を包むように上方に曲る点は，6732との関連を示す。6732Iは東大寺式瓦の新種である。他種とは外区の珠文の配置に相違がみとめられる。6739の中心飾は人字形につくる。中心葉は外側へ反り，左右に3単位の唐草が展開する。珠文縁の均整唐草文である。

飛雲文　6801は中心飾に「修」字をおく飛雲文。飛雲文は左右から中心に向って，各3単位とする。6802は飛雲の先端を上方に向ける飛雲文。類例が唐招提寺にある。**

7734は三葉状中心飾の基部が下外区の界線から派生し，三葉は単線でなく木葉形に近い。左右に展開する5単位の唐草は繊細で，先端の巻きこみが強い。外区と脇区に珠文をめぐらす。顎部は直線顎とするが，縄目叩き痕は不規則な横位で，瓦当面に接するまで痕跡をとどめる。焼成は軟質で，軒丸瓦7349と組む。7769は中心飾を欠くが，興福寺食堂から類例が発見されている。*** それによると，中心葉は中心飾を囲まず，左右に1単位の唐草が展開するにとどまる。外区・脇区に間隔の粗い珠文を配置する。

C　丸瓦・平瓦（PL.52）

丸瓦・平瓦については，じゅうぶんな調査を終えていない。丸瓦はすべて玉縁がつき，行基葺瓦はない。大きさは長さ35.5cm，幅14.2cm，厚さ1.7cm前後が普通である。そのほか，長さ26cm程度の小型丸瓦が数点ある。平瓦の大多数は1枚作りであるが，凹面に桶巻作りらしい模骨の痕跡を残すものが少量ある。凸面の叩き目はすべて縄目である。長さ36.0cm，広端幅26.5cmのものが普通である。平瓦の凸面に篦で線刻する特異な瓦が3点ある。1は両側縁に約2cmの幅を残し，内側に格子の篦描きをおこなう。2は幅約0.6cm長さ約1cm大の刺突を無数に施す。3は全面に格子文を描き，その1目に花弁形をあらわす部分があり，各弁に円刺突をおこなう。篦描きのある凸面に風化による磨滅がなく，凹面が磨滅する。葺きあげに際してのすべりどめか。

文字瓦　文字瓦は3点ある。1は「廣(□)」で，丸瓦の凹面下端に押印する刻印瓦。**** 2は「□海ヵ」で，丸瓦の凹面下端に押印する刻印瓦。3は「大」で，平瓦の凹面に篦書きしたもの。

---

* 「唐招提寺総合調査概要」（奈文研年報1961，p.16）

** 『六大寺大観唐招提寺』1969，p.43

*** 『興福寺食堂発掘調査報告』（奈文研学報第7冊 1959，p.17）

**** 同笵例は平城宮推定第二次内裏から出土している。

D　塼（PL.53）

長方形素文塼は瓦製品で，4種ある。Aには完形品がないが，幅15cm，厚さ8cmで1尺の方塼を半截にしたものであろう。Bは幅21.5cm，厚さ5cmのもの。Cは幅14.5cm，厚さ8.8cm，裏面が凹面をなす。Dは幅14cm，厚さ6.5cm，表裏に糸切りの痕跡をとどめる。

緑釉水波文塼

緑釉水波文塼などの施釉塼が8点ある。いずれも破片で緑釉の剝落が著しい。胎土は精良で4種にわかれる。塼aは2点。上面には平行する山形と不定形の螺線で荒磯文とも水波文ともいうべき文様を篦描きする。篦描きの後に釉薬をかける。周側面は，下面方向に斜めに篦削りし，いわゆる“逃げ”をつくる。下面には布目痕を残す。全形は不明だが，一辺16.2cm，厚さ3.5cmの方塼と思われる。なお，1点には「主」字を篦書きする。塼bは塼aと同じつくりのものだが周側面に逃げをとらない。方塼b_1と45°の隅角をもつ三角塼b_2との2点があり，厚さはそれぞれ3.9cmと4.4cmであるが，平面形は不明。なお，塼b_1の下面には「九条□」の篦書きがある。塼cは文様と緑釉をとどめないが，胎土から本来は施釉されていたものとみられる。4点あり，そのうちの2点は方塼ないしは長方塼c_1で，上面には約1cm前後の間隔をおく平行斜刻線を施している。平行斜刻線は隅を2分する対角線を境にして方向を異にする。しかしながら，1単位の平行斜刻線が塼面を2分するのか，4分するかについては明らかでない。厚さ4.2cm。塼c_1に類するようであるが，上面に刻線がなく，下面の対角線上に1本の刻線を描く塼c_2がある。厚さ3.9cm，一辺18cm以上の方塼であろう。他の1点は45°の隅角が復原できる三角塼c_3で，側面にわずかな逃げをとる。厚さ4.2cm，全形不明(fig.27)。

E　鬼　瓦・道具瓦（PL.54）

鬼瓦は2枚出土した。いずれも奇怪な鬼面をあらわしている。

鬼　瓦

鬼瓦Aは，上縁を円弧形にし下縁中央に半円形のくり形をいれる。上縁に1本，左右と下縁には2本の太い突線をめぐらす。鬼面は小づくりの肉彫り風にあらわし，全体に繊細の感を与える。眼は細く鋭く斜上し，眉も同様につりあがる。眼尻と両眼の間，さらに両眉の上には小隆起をつくる。鼻柱は高く突出し，鼻孔が大きく開く。三角形の隆起で表現する頬骨も突出する。口には門歯を上下各4枚，牙を上下各2本配し，歯は舌をかむ。細かい火炎状の頭髪をあらわす。眉間に釘穴をつくるが，貫通していない。裏面はただ平坦面をなす。

鬼瓦Bは，半楕円形につくり，下縁中央から半円のくり形をいれる。下縁を除く周縁に珠文をおき，その内側に鬼面をあらわす。鬼面は全体に大ぶりにつくり，各部分が著しく突出する。眼は円形にあらわし，眉は三角形の突起で表現する。鼻柱は細長く，鼻孔は斜めに垂下する。口の上顎に門歯4枚，太い牙2本をつくる。下顎にも牙をおくが小さい。裏面は鬼瓦Aと同様に把手をつくらず，平坦面をなす。

熨斗瓦と面戸瓦

熨斗瓦と面戸瓦　熨斗瓦は1例ある。凹面に模骨の痕跡をとどめるが，側面は篦による調整のゆきとどいた半熨斗瓦である。面戸瓦は数点ある。完形の例では，凸面に縄叩き目をとどめる丸瓦の左右を切りとったもので，丸瓦の両側面をとどめる。

3 土　　器

6 AFB区の SD485と SD650から，それぞれ奈良時代前期と平安時代前期の土器を多量に採集した。今回はそれらを一括資料として報告する。

A　SD485 出土土器　(PL.55～65，別表5)

一括資料

上述のように，SD485は4層に大別できる水路である。共伴した木簡のなかに和銅6年(713)，霊亀3年(717)，養老7年(723)の紀年をとどめる貢進付札があり，須恵器にも和銅の墨書があることなどから，この溝が8世紀の初期に存続したことはあきらかである。溝の堆積層序に対応して土器を細分すべきであろうが，流路が層位を攪拌してるため，地点によって土砂の堆積が微妙に変化し，層位ごとの適切な土器区分が容易でなかった。このことから，今回は溝出土の土器を一括品として扱い以下の記述をおこなうことにした。ただ形式的に新古を識別することは可能であり，それについては別表5に表示した。

土器には土師器と須恵器が圧倒的多数を占め，ほかに少量の施釉陶器・陶硯・土馬を混える。総量としては整理箱にして250箱程度の量であり，なかでもI～H地区にかけて西側に分流する部分から出土したものが多い。また，平塚2号墳北濠に形成された水溜り状の部分からの出土も少なくない。保存は良好で，各器種とも製作技法などの観察にじゅうぶん耐えられる。

土器の製作技法

ここで用いる用語は，原則としてこれまでの報告書に従う。新たに判明した事実あるいは変更する場合には，その都度新しい呼称を付することにした。

成形技法　土器の下部から順次粘土紐を巻き上げて成形し，表面に粘土の継目を残すものがある。土師器の杯・皿には木葉を回転の補助として利用したものがある。須恵器はロクロの回転を利用して成形する。ロクロから取り外す際に器の底部に篦を差込んで外しており，底部に渦状の篦切り痕跡をとどめるものがある。*

調整手法　成形時，もしくはその後に，撫で・篦削り・篦磨き・刷毛目などの手法を用いて器面を調整する。撫では，布・皮などを移動させて土器の表面を整える。ロクロや回転台を用いずに水平方向に撫でるものを横撫でといい，ロクロによる場合はロクロ撫でという。また，須恵器の杯・皿・蓋などの内面を多方向から撫でる場合はとくに乱撫でとよぶ。篦削りは器の厚さを減じたり，平坦面をつくるために表面を削りとる場合である。とくにロクロの回転を利用して篦削りをおこなう場合はロクロ削りという。篦磨きは先のまるい工具で器の表面を磨研する場合で，その痕跡は幾条にも走行する。多孔質の器表を緻密化することと，装飾的な効果がある。土師器に一般的にみられる手法で，須恵器ではまれである。刷毛目は，柾目板の先端で器の表面を撫でつけたものである。** 土師器に限ってよび，同手法が須恵器にあらわれる場合はカキ目とよぶことにする。

---

* 阿部義平「ロクロ技術の復原」(考古学研究第18巻2号　1971，p.21)

** 刷毛目の原体は，櫛状のものが想定されていたが，横山浩一の研究によって，柾目板の先端で土器の表面をかきならした痕跡であることが判明している。

文　様　須恵器にはとくに文様を施さないが，土師器には暗文を施す。暗文は先のまるい工具で器の表面を押圧し，篦磨きの手法を用いてつけた文様である。杯・皿・鉢・蓋などに多くみられ，放射状・連弧状・螺旋状などの単位文様を組み合せて表面を飾る。*

調整手法の細分　土師器の杯・皿・椀などの供膳形態の浅い器種では，器の内面と口縁部外面を右まわりに横撫でするものを原則とするが，それに続く外面の調整手法には a～c の3手法がある。a 手法，底部外面をとくに調整せず，成形時の凹凸面をとどめ，木葉痕や指頭痕を識別できるものがある。b 手法，底部外面に限って篦削りをおこなう。削りが徹底せず，木葉痕や指頭痕をとどめる。c 手法，底部から口縁端部に至る外面全体に篦削りをおこなう。これに篦磨きを加えるものがあり，それには，1：口縁部外面のみにおこなう。2：底部外面のみにおこなう。3：口縁部，底部ともにおこなうものがある。以上のような撫でと篦削り・篦磨きの分類を組合すことによって，土器外面の調整手法を a_0・a_1・a_2・a_3・b_0・b_1・b_2・b_3・c_0・c_1・c_2・c_3に細分することができる。

土器の群別　土師器の供膳形態の大部分は，色調や胎土の差異から2群に区別できる。Ⅰ群は黄褐色を呈し，きめの細かい胎土からなるもの。Ⅱ群は淡褐色を呈し，Ⅰ群よりやや粗い胎土を用いるものである。この差異は，高杯や鉢において製作技法や形態上の差異と重複してあらわれてくる。そのほかにⅠ群・Ⅱ群のいずれにも属さないものがある。　群別

須恵器では4群が識別できる。Ⅰ群は青灰色を基調とし，杯・Ⅲ類では底部外面に篦切り痕をとどめる。Ⅱ群は青灰色ないしは青白色を呈し，胎土に黒色の物質を含む。この物質は強いロクロ撫でやロクロ削りによって崩壊し，墨をぼかしたような状況を呈している。Ⅲ群は淡白色を呈し，きわめて硬質で磁器に近い。Ⅳ群は灰白色を呈し，軟質で焼きひずみがまったくない。そのほか，以上の4群のいずれにも属さないものがある。

土師器(PL.55～57)　土師器には，杯A・杯B・皿A・皿B・大皿・皿C・椀A・椀C・盤A・盤B・鉢A・鉢C・鉢D・蓋A・蓋B・蓋C・高杯A・壺A・小型壺・横瓶・甕A・甕B・甕C・甕X・竈などの器種がある。

1　杯A（1～17）　外傾する口縁部と平らな底部からなる。法量によって，杯AⅠ・杯AⅡ・杯AⅢ・杯AⅣの4段階に区別できる。　供膳用土器

杯AⅠ（1～4）　口径21.2～20.1cm，高さ6.0～4.8cm。口縁端部の巻きこみの大きいものと小さなものがある。a_0・a_3・b_1・b_3の4手法がある。暗文には螺旋暗文＋2段放射暗文** をおこなうものと，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文をおこなうものがある。なお，杯AI b_3には暗文を施さない。杯AⅡ（5～11）口径22.8～18.0cm，高さ4.7～3.2cm。口縁端はすべて内側に巻きこむ。a_0, a_1, a_3, b_0, b_1, b_2, b_3の7手法があるが，それらのうち b_0, a_0, a_1 が全体の86％を占めている。a_1, a_3, b_1, b_3 手法の杯AⅡは篦磨きが粗く，磨きの幅が約3mmの線状をなすものが多い。11は底部内面，口縁部外面にロクロ撫でを施し，底部外面にロクロ篦削りをお

* 暗文は一般的な篦磨きとは区別され，ここでは放射暗文，連弧暗文，螺旋暗文を呈するものに限って用いる。放射暗文は底部内面の中心から口縁端に向って車輻状につけるものが，7世紀の手法である。8世紀のものでは，底部の周縁から口縁に傾斜してつけている。いうまでもなく，SD485ではすべて後者である。連弧暗文は主として口縁部内面に連続する弧線を施すものをいう。7世紀には結節部で小さなループをなすが，8世紀ではまれにしかループがない。螺旋暗文は底部，口縁部に渦状に描くもの。SD485では主として底部中央に限定されている。

** 暗文の記述は煩雑さを退けるため，組合せを＋であらわし，内面の底部から口縁部の順にそれぞれの暗文を表記する。

土師器		個体数		%	
杯A	I	10	97	1.6	15.1
	II	65		10.1	
	III	18		2.8	
	IV	4		0.6	
杯B	II	5	13	0.8	2.1
	III	5		0.8	
	IV	3		0.5	
皿A	I	61	201	9.5	31.3
	II	90		14.0	
	III	47		7.3	
	IV	3		0.5	
皿B			4		0.6
大皿			2		0.3
皿C			1		0.2
椀A			4		0.6
椀C			29		4.5
盤A	I	1	3	0.2	0.6
	II	1		0.2	
	III	1		0.2	
盤B	I	1	4	0.2	0.7
	II	1		0.2	
	III	2		0.3	
鉢A	I	2	8	0.3	1.2
	II	2		0.3	
	III	4		0.6	
鉢B			1		0.2
鉢C			1		0.2
鉢D			1		0.2
蓋A	I	1	4	0.2	0.7
	II	2		0.3	
	IV	1		0.2	
蓋B	I	2	3	0.3	0.5
	II	1		0.2	
蓋C			1		0.2
高杯A	I		47		7.3
壺A	I	2	3	0.3	0.5
	II	1		0.2	
小型壺			1		0.2
横瓶			1		0.2
甕A	I	104	194	16.2	30.2
	II	42		6.5	
	III	48		7.5	
甕B	I	3	7	0.5	1.1
	II	2		0.3	
	III	2		0.3	
甕C			6		0.9
甕X			4		0.6
竈			2		0.3
計			642		100.0
三彩陶器			1		
二彩陶器			1		

須恵器		個体数		%	
杯A	I	20	165	4.5	37.9
	II	42		9.5	
	III	55		13.0	
	IV	41		9.3	
	V	7		1.6	
杯B	I	17	72	3.9	16.5
	II	17		3.9	
	III	17		3.9	
	IV	15		3.4	
	V	6		1.4	
皿A	I	2	15	0.5	3.4
	II	4		0.9	
	III	4		0.9	
	IV	5		1.1	
皿B	I	1	11	0.2	2.4
	II	4		0.9	
	III	5		1.1	
	IV	1		0.2	
椀A			2		0.5
椀B			1		0.2
蓋A	I	21	45	4.8	10.3
	II	11		2.5	
	III	8		1.8	
	IV	3		0.7	
	V	2		0.5	
蓋B	I	3	8	0.7	1.8
	II	5		1.1	
蓋C	I	2	7	0.5	1.6
	II	1		0.2	
	III	3		0.7	
	IV	1		0.2	
蓋X			5	1.1	
鉢A	I	2	12	0.5	2.8
	II	10		2.3	
鉢B			1		0.2
擂鉢			2		0.5
鉢C			1		0.2
盤A			6		1.4
壺A	I	2	12	0.5	2.8
	II	7		1.6	
	III	1		0.2	
	IV	2		0.5	
壺B			4		0.9
壺C			3		0.7
壺D			1		0.2
壺E			1		0.2
壺F			1		0.2
壺G			3		0.7
平瓶	I	3	8	0.7	1.9
	II	3		0.7	
	III	2		0.5	
横瓶	I	3	4	0.7	0.9
	II	1		0.2	
高杯			5		1.1
甕A			11		2.5
甕B			12		2.7
甕C			5		1.1
甕D			9		2.0
甕E			7		1.6
甕X			1		0.2
計			440		100.0

Tab. 3　SD485出土土器個体別数量表

こなう特殊な例である。暗文はほとんどすべてに施し，つぎの3種類がある。螺旋暗文＋2段放射暗文，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文，螺旋暗文＋1段放射暗文。

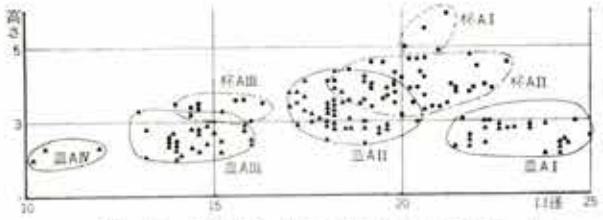


fig.10 土師器杯・皿の法量による分類図 単位cm

杯AⅢ（12・13）口径16.3～14.0cm，高さ3.6～3.0cm。口縁端部を巻きこむものと巻きこまないものとがある。a_1，b_0，b_1，b_3の4手法がみられる。暗文はすべてに施し，杯AⅡの場合と同じく3種類がみとめられる。

杯AⅣ（14～17）口径14.6～14.0cm。高さ3.5～3.2cm。口縁端部はすべて巻きこむ。a_1手法に限られる。暗文は螺旋暗文＋1段放射暗文と螺旋暗文＋2段放射暗文である。杯AⅣがⅡ群土器に限定されているのに対し，そのほかの杯Aではすべて Ⅰ・Ⅱ群土器が存在するが，群別が直ちに形態や調整手法に反映していない。

2 杯B（46～49） 杯Aの底部に高台を付したものである。法量によって，杯BⅡ，杯BⅢ，杯BⅣに区別することができる。

杯BⅡ（48・49） 口径22.8～20.4cm，高さ4.7～4.2cm。口縁端部はすべて内側に巻きこみ，高台の端部をまるくするものと，口縁端部を平坦にして，高台の外端部を張り出すものとがある。a_1，b_1の2手法がある。暗文はすべてに施して，螺旋暗文＋1段放射暗文，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文とがある。杯BⅢ（47） 口径16.6～16.0cm，高さ3.8～3.2cm。形態は杯BⅡと同じ。a_1手法に限られる。暗文には，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文がある。

杯BⅣ（46） 口径14.8～13.6cm。口縁端部を内側に小さく巻きこみ，高台の端部を平坦にして外端部を張り出すものと，口縁端部に巻きこみのないものとがある。前者はa_1手法であり，後者はa_3手法に限られる。また，これに暗文も対応し，杯B$Ⅳa_1$には螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文を施すが，杯B$Ⅳa_3$には暗文を施していない。杯BⅡ，BⅢには Ⅰ・Ⅱ群土器が存在するが，杯BⅣでは識別できない。

3 皿A（18～35） 平らな底部に外傾する短い口縁がつく。法量によって，皿AⅠ，皿AⅡ，皿AⅢ，皿AⅣの4段階に区別することができる。

皿AⅠ（23～27） 口径25.0～21.4cm，高さ3.1～2.1cm。口縁端部の巻きこみの大きいものと小さいものがあり，前者が大半を占める。さらに口縁部がわずかに内彎するものと，口縁上部で外反するもの㉗とがある。a_0，b_0，a_1，a_3，b_2の5手法があり，うちa_0手法が全体の83%を占めている。暗文はすべてに存在し，螺旋暗文＋1段放射暗文に限定される。皿AⅡ（28～34） 口径20.4～17.0cm。高さ4.4～2.4cm。口縁部の形態には3種の相違がみとめられる。すなわち，1：外反する口縁端面が内傾するもの，2：外反する口縁端部に浅い巻きこみを付するもの，3：口縁上部の外反角が小さく，端部をまるくつくるものである。そのうち，1が一般的で全体の90%を占める。調整手法には皿AⅠの5手法のほかにb_3手法が加わるが，皿AⅠと同じくa_0手法が多く，全体の49%を占めている。大多数に皿AⅠと同じ暗文を施すが，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文が少数ある。また，第3の口縁部形態をとり，a_3，b_3手法で調整する34は，底部の外面に一方向あるいは格子状の入念な篦磨きをおこない，暗文を施していない。

皿AⅡの3種

皿AⅢ（18～21） 口径16.0～13.0cm，高さ3.3～2.0cm。口縁部の形態には皿AⅡと同じく3

種類あり，1・2が多い。調整手法も皿AⅡと同じく6種類あり，そのうちa_0手法が全体の64%を占めている。暗文の状況は皿AⅡと変らない。また，口縁部の形態を3につくりa_3，b_3手法で調整する皿AⅢには暗文を施さないことも皿AⅡの場合と同じである。皿AⅣ（22）口径12.0～10.0cm，高さ2.6～2.5cm。口縁端部は内傾するものとまるいものとがあり，a_0手法に限られ暗文はない。皿AⅠ～AⅢにはⅠ・Ⅱ群土器があり，Ⅱ群土器が多い。皿AⅡ・皿AⅢのa_3，b_3手法については識別できない。

4　皿BⅠ（50～53）　皿Aに高台を付したものである。口径29.0～27.4cm，高さ4.0～3.6cm。口縁端部はいずれも浅く巻きこむが，まるくおさめるものと，平坦面に近いものとがある。a_1，b_1の2手法があり，暗文にはつぎの3種類がある。螺旋暗文＋2段放射暗文，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文，螺旋暗文＋1段放射暗文。いずれもⅡ群土器である。

ロクロ製の大皿

5　大皿（66・67）　形態は皿AⅠと変らないが，とくに大きいので別にした。口径35.8～35.2cm，高さ4.6～2.3cm。66は口縁部がわずかに内彎し，端部を内側に巻きこむ。b_0手法で，螺旋暗文＋1段放射暗文を施す。Ⅱ群土器。67は口縁部が直立し，端部で少し内傾する。内外にロクロ撫でをおこなったのち，底の内外にロクロ篦削りを施し口縁部内外に篦磨きをおこなう。また口縁部内面に左下から右上にあがる粗い1段放射暗文をつける。Ⅰ群土器。

6　皿C（62）　口径9.8cm，高さ2.4cmの小形の皿である。口縁部はわずかに外反。口縁部の内外を横撫でするにとどまり，底部外面の調整はおこなっていない。

7　椀AⅠ（60）　小さなまるみをおびた底と，わずかに内彎する口縁部からなる。口径19.5～18.2cm，高さ5.9～5.6cm。口縁端部をわずかに巻きこむものと内傾するものとがある。いずれも口縁部の横撫で以下には，成形時の凹凸をとどめ，その後の調整を加えていない。

8　椀C（43～45）　まるい底部と屈曲しながら，垂直に近い状態で立つ口縁部からなる。口径16.0～12.0cm，高さ4.1～3.9cm。口縁部の上半が短く外反するのが特徴。口縁部の横撫で以下には成形時の凹凸をとどめ，外面に粘土紐の痕跡を残すものが多い。Ⅰ・Ⅱ群土器のほかに，粗い胎土のものを混えている。

9　盤A（68～69・73）　平らで大きな底部と外傾する口縁部からなる。法量によって盤AⅠ・盤AⅡ・盤AⅢの3段階に区別することができる。

把手付きの盤

盤AⅠ（73）　口径58.0cm，高さ12.3cm。口縁部は斜上にまっすぐにのび，端部の巻きこみが浅く，端面は垂直に近い。口縁部の上寄りに対になる三角形折曲把手を付す。* c_1手法で，暗文は螺旋暗文＋2段放射暗文＋螺旋暗文＋1段放射暗文である。盤AⅡ（68）口径33.9cm，高さ5.4cm。口縁部が斜上にまっすぐのび，上端に近い部分で大きく外反する。把手をつけない。c_3手法で調整し，底部から口縁部にかけて螺旋暗文をつける。このほか，全形が明らかでないが，口縁部外面に篦削りと篦磨きをおこない，内面にも篦磨きをおこなう特殊なものがある。盤AⅢ（69）　口径29.6cm，高さ5.5cm。底部は丸底に近くて口縁部との境が不明瞭である。口縁部の上半部で外反し，端部で凹む。口縁の外反するあたりに2対の三角形折曲把手を付す。c_3手法で調整し，口縁部内面に螺旋暗文をつける。

10　盤B（70～72）　盤Aに高台のつく器形。法量から盤BⅠ・盤BⅡ・盤BⅢに区別できる。

盤BⅠ口径43.6cm，高さ約11cm。盤AⅠに高台をつけたもの。口縁部外面の中位に把手がつ

*　盤AIの把手が1対になるか2対になるかの決め手はない。

く。口縁部外面上半を横撫でとし，下半を刷毛目で調整する。内面には螺旋暗文＋1段放射暗文＋反転連弧暗文＋1段放射暗文を施す。盤BⅡ（72） 口径36cm，高さ10.2cm。深い盤で，幅が広くて低い高台を底部の内寄りにつける。口縁部はまっすぐに斜上し，端部をわずかに巻きこむ。その外面の中位に2対の三角形折曲把手をつける。b_1手法で調整し，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文＋1段放射暗文をつける。盤BⅢ（70・71） 口径31～24cm，高さ5.8～4.7cm。浅い盤で，口縁部は上部で外反し，端部を巻きこむ。71は高くて端部が平坦な高台をつける。a_1手法で，螺旋暗文＋2段放射暗文を施す。70は低くて内端部で立つ高台をつける。b_1手法で，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文をつける。盤BⅢにⅠ・Ⅱ群土器がともにあるほかは，すべてⅡ群土器である。

11 鉢A（54～58） 平らな底部とわずかに内彎する口縁部からなる。法量によって，鉢AⅠ・鉢AⅡ・鉢AⅢの3段階に区分する。

鉢AⅠ（54） 口径38.0～33.9cm，高さ10.8～10.2cm。外面はC_1手法で調整するが，内面の調整には2種類ある。1：底部から口縁下部に刷毛目をおこない，口縁上部を横撫でとする。2：右まわり横撫でののち，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文をつける。鉢AⅡ（55・56） 口径30～26cm，高さ10.8～7.2cm。56は口縁部の外傾角が小さく，深い器形。器の内外を刷毛目で調整し横撫でをおこなったのち，口縁部外面に篦磨きをおこなう。55は口縁上部でわずかに内彎し深い器形につくる。外面をC_1手法で調整し，内面には横撫でののち，1条の螺旋暗文をつける。鉢AⅢ（57・58） 口径23.5～19.2cm，高さ8.0～6.7cm。鉢AⅡと同じく深い器形には刷毛目調整をおこない，浅い器にはc_1手法の調整をおこなう。鉢AⅠ～AⅢまでのすべてにⅠ・Ⅱ群土器が存在する。

12 鉢B（61） 内彎する口縁部と高台のつく平底からなる。口縁部外面は横方向に丁寧な篦磨きを施す。a_1手法で調整。内面に螺旋暗文＋2段放射暗文＋連弧暗文をつける。Ⅰ群土器。

13 鉢C（59） 平らな底と外傾角の大きい口縁からなり，口縁端部は短く外反する。a_0手法で調整し，成形時の凹凸をとどめる。胎土が悪く，鉢Aの諸例とは明らかに生産地がことなるとみてよい。* 口径23.6～17.8cm，高さ5.8～5.4cm。 **特殊な鉢**

14 鉢D（63） 内彎する口縁部外面に一対の三角形折曲把手のつく浅い小型の器である。外面の全体に丁寧な篦磨きを施す。暗文はない。口径11.2cm，高さ4.1cm。

15 蓋A（39～42） 平坦な頂部とまるい縁部からなり，縁端部をわずかに内側に巻きこむ。頂部中央には上面がわずかに凹む扁平なつまみをつける。法量によって蓋AⅠ・蓋AⅡ・蓋AⅣに区別することができる。

蓋AⅠ（42） 直径28.3cm，頂部の高さ2.2cm。内外面ともに横撫で。口縁部外面は6区にわけて篦磨きをおこなったのち頂部につまみを狭んで井桁状に篦磨きをおこなう。内面とつまみの上面にそれぞれ1条の螺旋暗文を施す。蓋AⅡ（40・41） 直径24.8～22.4cm，頂部の高さ2.9～2.3cm。形態と調整法は蓋AⅠと同じである。ただ，外面篦磨きの手法としては，蓋AⅠと同じもののほかに，頂部から篦磨きをはじめ縁部におよぶものがある。蓋AⅣ（39） 直径12.8cm，頂部の高さ1.1cm。形態および調整法は蓋AⅠと同じである。蓋AⅠ～AⅣはそれぞ **杯Bの蓋**

* 類似の胎土の特徴をもつ鉢は，形態をやや異にするが，平城宮跡のSK820から出土している。杉原荘介・大塚初重編「土師式土器集成Ⅳ」1974，PL.132—50

れ杯BⅠ～BⅣに対応しており，組合せの関係にある。蓋AⅠ・AⅣにはⅠ群土器，蓋AⅢにはⅡ群土器がある。

16　蓋B（36・37）　平坦な頂部と高い縁部からなり，頂部と縁部との境はまるく漸移する。縁端部はわずかに外側に張り出す。法量によって，蓋BⅠ・蓋BⅡに区別することができる。

壺Aの蓋

蓋BⅠ（36・37）　直径18.0～17.0cm，頂部の高さ2.8～1.8cm。基本的な調整手法は蓋Aとかわらないが，内面に暗文がなく，縁部外面の篦磨きが頂部のそれと対応する。なかに，円形つまみにかえて，長方形のつまみを付するものがある(37)。* すべてⅡ群土器に属する。なお，蓋BⅠは壺Aと組合して用いるのであろう。蓋BⅡは直径11.5cm，頂部の高さ1.4cm。蓋BⅠと同形で，調整手法などは蓋AⅠとかわらない。暗文はない。杯BⅣと組合さるのであろう。

17　蓋CⅡ（38）　頂部がややまるく，縁部の高く長いもの。内外面ともにロクロ撫でをおこない，頂部にロクロ篦削りを施している。頂部の中央に円形のつまみをつけた痕跡をとどめる。直径14.8cm，頂部の高さ4.4cm。

18　高杯AⅠ（64・65）　口縁端部をわずかに巻きこむ平らな杯部に，縦方向に篦削りで面取りする短い脚部をつける。成形技法と調整手法の面からa・bの2種類に区別することができる。口径30.4～26.0cm，高さ9.6～9.2cm。

大型高杯

高杯AⅠaは口径30cm程度の大型に属する。杯部外面に口縁に添う数回の篦削りをおこない，そのうえに4区にわけた篦磨きを重ねる。口縁部外面上部から内面にかけての部分は，横撫でとし，内面の全体に暗文を施す。暗文は螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文である。中央の螺旋暗文は煩雑で，5重にめぐらす。放射暗文も一気に施すのではなく，6～7回のまとまりがある。脚は断面が8～10角形を呈する太い軸部と端がわずかに巻きこむ裾部とからなる。軸部の内面と裾部の内外面は横撫でによって仕上げ，軸部の外面には篦で面取りをおこなう。なお，杯部と脚部との接合は，杯の底にカキ目を施したのちに貼りあわせている。

中型高杯

高杯AⅠbは，口径26cm程度であるが，高さは高杯AⅠaとかわらない。杯部外面の口縁端から脚部方向に篦削りをおこない，その上に5区にわける篦磨きをおこなう。内面に暗文を施すが，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文と，螺旋暗文＋2段放射文のものとがある。いずれの場合も暗文は高杯AⅠaほどに密でない。脚の軸部には下から上に向う篦削りの面取りをおこない，その断面は8～11角形となる。裾端部は内に巻きこまず，まるくおさめる。裾部の上面には5区にわけて篦磨きをおこない，裾部下面および軸部内面は篦削りで調整する。篦削りは軸の上部におよばず，杯に接する部分の器壁は厚い。高杯AⅠaはⅠ群土器であり，高杯AⅠbはⅡ群土器である。なお，このほかに軸部内面を篦削りで調整し，裾部上面に篦磨きをおこなわない脚部が2例あるが，杯部と接合できるものがないのでとくに1種類をたてない。

19　壺A（74・75）　肩の張ったイチジク形の器体に，直立する短い口縁をつけ，底部に高台を付す。法量によって，壺AⅠと壺AⅡに区分できる。

壺AⅠ（74）　口径20～18cm。器の内外ともに横撫でによって調整し，体部外面に横位の篦磨きをおこなう。肩部には，上方に強く折り曲げた三角形把手がつく。底部は欠損のため不明だが，他の例からして高台がつけたことは明らかである。壺AⅡ（75）　口径11cm。高さ11.8cm。形態，調整手法とも壺AⅠと同じである。平底の底部には低い断面三角形の高台を付す。

* 長方形のつまみをもつ蓋BⅡは平城宮造酒司のSD3035，小墾田宮SK260から出土している。いずれ8世紀初期のものである。

20 小型壺 (77) 広口で丸底につくる小型の器である。内外ともに撫でによって仕上げる。内面には漆が付着している。口径6.6cm，高さ5.5cm。

21 横瓶 (76) 繭形の体部に直立する口縁部を付する。須恵器の横瓶を模したもので実用品ではない。全体を粗い撫でによって仕上げ，篦磨きなどの調整をおこなっていない。口径4.2cm，体部の長径8.2cm，高さ7cm。

22 甕A (79~86) 外反する口縁部とまるい体部からなる。法量によって，甕AⅠ・甕AⅡ・甕AⅢに区分することができる。 煮沸用土器

甕AⅠ 口径32cm，高さ30cm前後。全形を復原できるものはない。口縁部は内外を横撫でによって調整し，口縁端部は平坦面をなし上部がわずかにまるく隆起する。口縁部から体部へ移行する部分の外面は凹彎し，稜を生じている。体部外面は刷毛目，内面は撫でによって調整する。体部には煤が付着し，火熱をうけているものが多い。甕AⅡ (79~82) 口径23~20cm，高さ22~18cm。その形態から2種類に区別できる。甕AⅡaは口径に比して器高が小さく，球形に近い形態をとる (79~81)。口縁端部をわずかに巻きこみ，口縁部から体部に移行する部分が凹彎する。体部の最大径が上位にあるものと，下位にあるものがある。口縁部内面は横位の刷毛目，外面は横撫での調整である。体部の内面はとくに調整せず，外面を縦方向の刷毛目で調整する。甕AⅡbは口径に比して器高が大きいか，ほぼ等しい縦長の器である。口縁部の内外面は横撫でとし，端部が肥厚する。口縁の下部は少しく外反して立上り，体部との境に稜線がつく。体部外面は縦方向の刷毛目で調整する(82)。甕AⅢ (83~86) 口径15~13.8cm，高さ13~11cm。外面を刷毛目，内面を撫でによって調整するものが多い(85)。ほかに，体部内面を下方から上方に向って篦削りをおこなうもの(86)，内面を横位の刷毛目で調整するもの，底部外面に篦削りをおこない，内面に刷毛目を施すものなどがある。

23 甕B (87・88) 甕Aの体部の中位に三角形折曲把手をつける器形である。口径によって，甕BⅠ (32cm)，甕BⅡ(22cm)，甕BⅢ(13.6cm)に区別する。全形をしりうるものがなく，高さについては不明であるが，甕Aと同様とみてよい。いずれも体部外面を刷毛目，内面を撫でによって調整する。

24 甕C (89~91) 大口の口縁部と円筒形の体部からなる丸底の器。高さ30cmを越える大型と，高さ17cm前後の小型がある。体部外面に刷毛目を施し，内面にも横位の刷毛目を施すもの(89)，体部外面に刷毛目，内面を篦削りするもの(91)，体部の内外面ともに撫でによって調整するもの(90)などの別がある。

25 甕X (92) 短く外反する口縁部と砲弾形の体部からなる厚手の器である。口径12cm，高さ20cm前後である。92は口縁部外面に指頭痕がめぐり，体部下半に粗い叩き目をつけ，内面は撫でによって仕上げたものである。このほかに体部外面は縦方向の刷毛目をつけ，内面に撫での調整をおこなうもの。体部外面に縦に刷毛目をつけ，内面を刷毛目をつける工具でかきならしたものなどがある。* 特殊な甕

26 竈 (78) 全形を復原しうるものはなく，口縁部と焚口部分の破片がある。それらによれば截頭砲弾形の円筒の下部を大きくえぐって焚口とし，焚口の周囲に幅広の廂を貼りつけたもののようである。原形の高さは35cm前後であろう。

* 断定できないが製塩土器である可能性がつよい。類例は藤原宮跡からも発見されている。

須恵器(PL.58～63)　SD485出土の須恵器には，杯A・杯B・皿A・皿B・椀A・椀B・蓋A・蓋B・蓋C・鉢A・鉢B・擂鉢・鉢C・盤A・壺A・壺B・壺C・壺D・壺E・壺F・壺G・平瓶・横瓶・高杯・甕A・甕B・甕C・甕D・甕Eなどがある。須恵器の場合は，土師器に比して土器の群別が容易であることから，ここではⅠ～Ⅳ群土器の群別を中心に記述を進める。

1　杯A (101～133)　平らな底部に開いた口縁部がたちあがる。口径から杯AⅠ (21cm前後)，杯AⅡ (18cm前後)，杯AⅢ (15cm前後)，杯AⅣ(12cm前後)* に区別する。Ⅰ群土器は青灰色を基調とし，つぎの3種類にわかれる。Ⅰa群：濃青灰色で硬質のもの。Ⅰb群：淡灰青色で硬質のもの。Ⅰc群：淡青色で軟質のもの。Ⅰa群杯Aには底部外面に篦切痕をとどめるが，小型のものほど多い。他群の杯Aの底部外面は，ロクロ削りで調整し，器高の高いものでは口縁下端部までおよんでいる。いずれにせよⅠ群土器には器の内外に火だすきをとどめるものがある。杯AⅠ～AⅣがあり，杯AⅠについて深浅関係をみれば，径高指数34前後のもの(101～103)と，22前後のもの(104)の2区分が可能である。** つぎの諸例はⅠ群土器に属するが一般的ではない。116は口縁端を内側に巻きこみ，底部をロクロ篦削りとする。他に篦切り痕をとどめているものもある。110は土師器皿AⅡと同じ形態，口縁部を横撫でとし，内面に螺旋暗文＋放射暗文をつけ，底部外面には木葉痕をとどめる。Ⅱ群土器(114)にも硬質のものと軟質のものとがある。杯AⅡ，杯AⅢ，杯AⅣがあり，いずれも底部外面に丁寧なロクロ削りをおこなっている。Ⅳ群土器には杯AⅡ，杯AⅢ(126～128)がある。底面はロクロ削り，器高が高く口縁部の外反角の小さいものが多い。以上の3群に属さない杯Aとして，灰色を呈し焼成不十分なもの，表面がくすんだ灰黒色を呈するもの(129)がある。

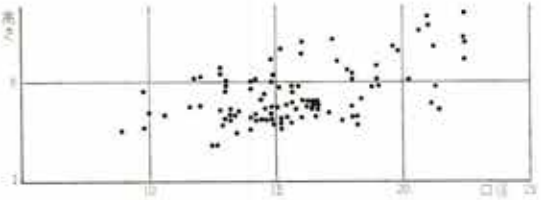


fig.11　須恵器杯Aの法量による分類図　単位cm

Ⅰ群土器の細分

2　杯B (161～177)　杯Aの底部外周に高台をつける器。口径によって杯BⅠ (21cm) 杯BⅡ (18cm)，杯BⅢ (15cm)，杯BⅣ (13cm)，杯BⅤ (10cm) にわかれる。Ⅰ群土器がもっとも多く，うちⅠa群が多数を占める。底部下面の調整は杯Aと同じ。高台は形態によって3種にわかれる。杯Ba：高台外端部が上るもの，杯Bb：内端部の上るもの，杯Bc：端部の平坦になるものである。そのうち杯Baが多い。また，深浅関係では，径高指数38・31・25の3段階にわかれる。169はⅠ群土器に属するが，口縁端が少し巻きこむ特殊な形態である。Ⅱ群土器は杯BⅡ，杯BⅢに各1例ある。いずれも底部下面にロクロ削りを施す。Ⅲ群土器として杯BⅠ (166)，杯BⅡがある。いずれも，ロクロ削りをおこなう杯Bbである。Ⅳ群土器には杯BⅠと杯BⅢ(172)とがある。以上の土器以外に，灰色で硬質，胎土に斑紋状に黒砂粒を含む杯BⅠ，篦削りが口縁内面の上半にまでおよぶ杯BⅡがある。

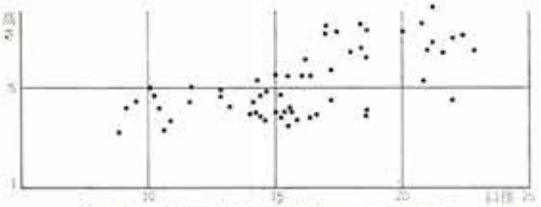


fig.12　須恵器杯Bの法量による分類図　単位cm

杯Bの3種

3　皿A (134～140)　平らな底に短い口縁がつく。口径から，皿AⅠ (32cm)，皿AⅡ(25cm)，皿AⅢ (20cm)，皿AⅣ (16cm)にわかれる。また，Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群土器がある。Ⅰ群土器には，Ⅰa，

*　以下では（ ）内の前後を略する。　　**　(口径÷高さ)×100を径高指数という。

Ⅰc群がある。Ⅰa群の1例には篦切り痕をとどめるが，他はロクロ削りをおこなう。また，口縁端部を平坦にするものと，まるくするものとの別がある。皿AⅠ～AⅣのすべてをふくむ。Ⅱ群土器には皿AⅠ(136)，皿AⅡがある(139)。いずれもロクロ削りである。底部と口縁部との境に稜角をなすものが皿AⅠにあり(134)，まるく削り落すものが皿AⅠ，AⅡにある(135・137)。135はⅡ群土器に属するが，内面にカキ目を施している。Ⅳ群土器には皿AⅢがある(140)。底部外面はロクロ削りによる調整である。

4　皿B (181・182)　皿Aの底部外周に高台をつける。口径によって，皿BⅠ(35cm)，皿BⅡ(30cm)，皿BⅢ(24cm)があり，Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ群土器にわかれる。Ⅰ群土器はいずれもⅠa群であり，皿BⅠ～Ⅲをふくむ。底部外面に篦切痕をとどめるものと，ロクロ削りを施すものがある。高台の形態からすれば，皿Ba，皿Bbがある。Ⅱ，Ⅳ群土器には皿BⅢがあり，いずれもロクロ削りを施す。これら3群に属さないものとして口縁端部を平坦にして，底部外面をロクロ撫でによって調整するもの，外面がくすんだ黒色を呈し，底部外面にロクロ篦削りをおこなうもの，外面が青灰色，内面が赤紫色を呈し，底部外面にロクロ削りをおこなうものがある。

5　椀A (141・142)　平らな底にわずかに内彎する長い口縁をつける。Ⅰ・Ⅱ群土器がある。Ⅰ群土器は底部外面に撫でをおこなう(142)。Ⅱ群土器は底部に篦削りをおこなう(141)。

6　椀B (178)　椀Aに高台のつく器形。底部外面に篦切痕をととめるⅠ群土器である。口径17.8cm，高さ7.2cm。

杯Bの蓋

7　蓋A (143～160)　偏平な頂部の中心につまみをつけ，縁端部が短く直立する。直径によって，蓋AⅠ(21cm)，蓋AⅡ(19cm)，蓋AⅢ(16cm)，蓋AⅣ(12cm)，蓋AⅤ(10cm)にわかれ，杯BⅠ～BⅤに対応する。それぞれは，頂部の形態によって，3種類に区分できる。* 蓋Aaは頂部の平坦なもの。蓋Abは頂部が笠形をなすもの。蓋Acは頂部との境が稜をなすもの。Ⅰ～Ⅳ群土器がある。Ⅰ群土器には蓋AⅠ～AⅤのすべてが存在する。頂部をロクロ削り，内面を撫でによって調整する。偏平なつまみは中央部でわずかに隆起する。蓋Aaには蓋AⅠ～AⅤがあり(143・144・150・159・160)，蓋Abには蓋AⅠ～AⅣ(146・152・153・154・156・158)，蓋Acには蓋AⅠ～AⅢ(148・149・151・155・157)がある。蓋AaⅡ，AaⅣには，頂部にロクロ削りをおこなったのち撫での調整をおこなうものがある(150)。蓋AⅠaには，頂部に篦切り後の調整をなさず，つまみもつかないものもが1例ある。Ⅱ群土器には，蓋AⅠaがある。Ⅲ群土器には蓋AaⅠがあり，断面逆台形のつまみを付す(145)。それらのほか，蓋AⅠcに環状のつまみをつけるものがある(149)。

皿Bの蓋

8　蓋B (183・184)　器形および製作技法では蓋Aとかわらないが，直径26cm以上の大型品である。直径によって，蓋BⅠ (30cm)と蓋BⅡ (26cm)にわかれて，皿BⅠ，皿BⅡに対応する。また頂部の形態によって，蓋Ba，Bbにわかれる。Ⅰ群土器(183・184)，Ⅳ群土器がある。Ⅰ群土器には，蓋BⅠa・BⅠb，蓋BⅡa・BⅡbがある。

9　蓋C (185～187・189～191)　平坦な頂部に垂直で深い縁部をつける。直径によって，蓋CⅠ(17cm)，蓋CⅡ(15cm)，蓋CⅢ(12cm)，蓋CⅣ(9cm)にわかれ，盞AⅠ～盞AⅣに対応する。いずれも頂部は篦削りで調整し，縁部の内外をロクロ撫でとし，内面中央付近を乱撫でとする。縁端部の形態は，a：外端の上るもの(186・190・191)，b：まるいもの，c：内端の上るものにわかれ

---

* 『平城宮報告Ⅱ』p.67では蓋を縁部によってA～Dに区別したが，今回は形態と蓋に対応する本体の違いによって区別し，さきの分類を変更した。

蓋 Ca が圧倒的に多い。つまみには，1：宝珠形のもの，2：偏平で中心がわずかに隆起するものとがあるが，必ずしも縁端部の形態と対応しない。蓋 C_2 がやや一般的である。Ⅰ群土器が大半を占め，Ⅱ群土器が少量ある。頂部に一本の圏線をつけるものがある。

10　蓋X(188・192・193)　上述の蓋とことなる特殊な形態をとる。192はまるみを帯びた頂部と高い縁部からなり，頂部の中心に断面T字形のつまみをおき，周縁に相対する2対の耳をつける。188は蓋Aの形態をとるが，つまみを挟む頂部に1対の小孔を穿っている。193は蓋Cと同じ形態をとり，製作技法も変らないが，直径20cm以上の大型のものである。

11　鉢A (209～214)　丸底ないしは尖り底と内彎する口縁部からなる半球形の器。いわゆる鉄鉢で丸底に対し尖底はより新しい特徴を示すものである。後者は2例のみ。口径によって，鉢AⅠ (30cm)，鉢AⅡ (23cm) にわかれる。内面はいずれもロクロ撫でによって調整するが，外面の調整手法には4種類ある。a は口縁端部を除く全外面にロクロ削りを施す(212)。b は口縁部の上半にロクロ削りがおよばない(210)。c は外面全体にロクロ磨きをおこなう (211・214)。213は外面全体に横位の篦磨きを施す。鉢AⅠ・Ⅱ・Ⅳ群土器の判別は可能であるが，形態や技法の面での区別はない。209はⅠ群土器に属するが，底部外面には静止ロクロで4回にわけて篦切りをおこなった痕跡をとどめる。

鉄鉢型土器

12　鉢B (215)　平底に内彎する口縁をつけ，口縁端の1個所を曲げて注口をつくる。いわゆる片口鉢である。底部内面，口縁部上半の内外面をロクロ撫でとし，口縁部下半以下に篦削りをおこなう。口径23.6cm。

13　擂鉢 (216)　口縁部に片口をつけた，胴長の器である。底部を欠くが，厚い平底につくるものであろう。口径16.0cm。

14　鉢C　平らな底にわずかに外傾する長い口縁を付す。底部外面と口縁下半にロクロ削りを施し，口縁上半と内面全体にロクロ撫でをおこなう。内面の口縁部下半には成形時の粘土紐痕跡を明瞭にとどめる。全体に灰をかぶり，灰釉に近い質感を呈する。口径30.2cm，高28.9cm。

15　盤A (221～224)　平底に強く外傾する口縁をつける浅い大型の器である。形態には2種類ある。盤Aa は底部外面が凸面をなし，底部と口縁部との境が不明瞭である。口縁部はわずかに内彎し，端部が幅広の平坦面をなす。盤Ab は底部外面がほぼ平坦面をなし，底部と口縁部との境が稜角をなす。口縁部はわずかに外反し，端部をまるくつくる。盤Aa，盤Ab のいずれにも，1対の三角形曲折把手や半環状把手を付するものとつけないものとがある。底部の内外に叩き目をとどめるものがあるが，通常は底部から口縁部下にはロクロ削りをおこない，口縁部外面上半から内面にかけてはロクロ撫でによって調整する。Ⅰ～Ⅳ群土器が判別できるが，必ずしも形態の相違と対応していない。

19　壺A (194～197・201・203・204)　肩の張ったイチジク形の器体に直立する短い口縁と高台をつける。法量によって，壺AⅠ (口径12.6cm，高さ20.8cm)，壺AⅡ (口径15.0cm，高さ15.8cm)，壺AⅢ (口径10.8cm，高さ13.8cm)，壺AⅣ (口径11.4cm，高さ10.5cm)，壺AⅤ (口径4.0cm，高さ4.8cm) に区別できる。形態からは2種にわかれる。壺Aa は肩部の幅が広く，内彎して口縁部に移行する。調整は丁寧で，器の内外をロクロ撫でによって整える。高台はいずれも外傾し，外端があがる。197は肩部に灰をかぶり，蓋を被せて焼成した痕跡をとどめる。壺Ab は肩部の幅が狭

薬壺型の土器

* 『平城宮報告Ⅱ』p.68では壺Aとしたが，鉢Aに改める。同時に壺の分類もささきとことなる。

く，屈曲して口縁部に移行する。この肩部以下をロクロ削りとし，肩部から口縁部にかけての内外にロクロ撫でを施す(195)。201は，壺AⅡaの肩部に1対の三角形折曲把手をつけたものである。口径13.2cm，高さ15cm前後。

17 壺B (207・208) 細長い口頸部と肩部が張り稜角を呈する体部からなる長頸壺である。平底で高台をつけるものとつけないものがある。口頸部を2段構成で体部に接合し，低い高台は外傾する。体部の下半から底部外面にかけてはロクロ削りを施し，口頸部と体部の上半はロクロ撫でで調整する。高さ20cm，最大径13cm程度のものが普通であるが，大型の器もある。

18 壺C (202) 肩部が張り稜角をなす低い体部に，外反する広口の口頸部と外傾する高台をつける。体部の下半はロクロ削りとし，体部上半から口頸部にかけてはロクロ撫でをおこなう。口径19.0cm，高さ18.5cm。

19 壺D (199) 肩部が稜角をなす胴長の体部に直立する短い口縁をつけた平底の器である。体部下半にロクロ削りをおこない，体部上半から内面全体をロクロ撫でによって調整する。

20 壺E (200) 肩部の稜が鈍く，体部径よりも小さく外傾角も小さい長めの口縁部をもつものである。体部下端部のみロクロで篦削りしている。

21 壺F (198) 壺Eに類する形態をとる。肩部以下の外傾が著しく，肩部の稜が鋭い。肩部以下はロクロ削りとし，それ以上をロクロ撫でによって調整する。蓋を被せて焼成した痕跡をとどめ，半環耳のついた可能性がある。口径8.8cm，高さ13.6cm。

22 壺G (205・206) 短い広口の口縁部をもつ扁平な体部に高台をつけたものである。口径14.2cmの壺GⅠと8.5cmの壺GⅡ(205・206)がある。いずれも体部外面は篦削り。合子か。

23 平瓶 (217～219) 扁平な平底の体部背面に，広口の口頸部と逆U字形の把手を付す。いずれも体部背面中央の開口部を円板で塞いだ後，中心をはずした部分に円孔を切り，注口をつけるものである。また把手をつけないものもある。器の最大径から，平瓶Ⅰ(26cm)，平瓶Ⅱ(20cm)，平瓶Ⅲ(14cm)にわかれ，それぞれは形態によって平瓶a，平瓶bにわかれる。平瓶aは体部の高さが直径の½を越え，底部外面が凸面をなし不安定である。底部と肩部の折曲点は鈍く，背面の盛り上りが大きい。広口の注口の直径が体部の½前後を占め，中央の閉鎖口にまでおよんでいる。把手は扁平な粘土紐を貼りつけたもの。器の上半部はロクロ撫でで調整し，底部の立上り部分には篦削りをおこなう。底部外面は粗い乱撫でで不調整である(217)。平瓶bは体部の高さが直径の½以下で，底部外面が平坦で安定する。底部と肩部との折曲点は鋭く稜をなし，背面の盛上りも平瓶aほど顕著でない。注口は体部直径の⅓程度で，中央の閉鎖口にまでおよばない。把手は長く，外面を断面長方形に面取りしている。体部の下半から底部外面にかけては，ロクロ削りをおこない，体部上半と口縁部はロクロ撫でと手による撫でによって調整する(218)。219は焼成前に把手が外れたものである。

平瓶の2種

24 横瓶 (220) 俵形の体部上面中央に，外反する口縁部をつける。体部の一端に閉鎖口があり，外面には平行叩き目とカキ目を施し，内面には同心円文のあて板痕跡をとどめる。体部の一部を篦削り，口縁部をロクロ撫でによって調整する。長径24.8cm，高さ20.5cm。

25 高杯 扁平な杯部に裾広がりの脚部を付す。破片のため杯部の形態は判然としないが，脚部では軸部に三方透し穴をいれたものといれないものとがある。杯部の底外面中央を浅くえぐって脚の軸頭を貼りあわせたもののようである。

26　甕A（229・230）　卵形の体部に，外反する口縁部をつけたもので，口縁端部は肥厚し外傾する面をなす。法量によって，甕AⅠ（口径20.6cm，高さ42.0cm），甕AⅡ（口径12.0cm，高さ30.0cm）にわかれる。体部外面は平行叩き目をつけるもの，平行叩き目をカキ目で消すものとがあり，内面は同心円文のあて板痕跡をとどめるものと消すものとがある。

27　甕B（227・228・231）　卵形の体部に外反する口縁をつけたもので，口縁端部はまるくするものである。甕BⅠ（口径24.0cm，高さ40.0cm），甕BⅡ（口径21.0cm，高さ34.2cm）にわかれる。内外面の調整は甕Aと共通するが，1例だけ外面に格子叩き目をつけたものがある。

28　甕C（225・226）　卵形の体部に，内彎気味の口縁部をつけたもので，口縁端部は内傾する。四耳がつくものもある。甕CⅠ（口径24.0cm，高さ40.0cm），甕CⅡ（口径21.0cm，高さ34.2cm）にわかれる。体部外面は平行叩き目をつけるもの，平行叩き目をカキ目で一部を消しているものとがある。内面には同心円文をとどめる。

29　甕D（232・233）　広口に開く口縁部と器高の低い体部からなるものである。甕DⅠ（口径53.0cm，高さ40.0cm），甕DⅡ（口径32.0cm，高さ24.0cm）にわかれる。頸部に四耳がつくもの(233)もある。体部外面は平行叩き目をつけるものと平行叩き目をカキ目で消すものとがあり，内面は同心円文を残すものと消すものとがある。

30　甕E（234）　甕Dに高台をつけた器形である。なかには四耳をつけるものも多い。甕EⅠ（口径38.0cm，高さ22.0cm），甕EⅡ（口径32.0cm，高さ21.0cm），甕EⅢ（口径20.0cm，高さ14.0cm）がある。甕EⅠ・EⅡは外面に平行叩き目，内面に同心円文を残すが，甕EⅢでは叩き目はない。

31　甕X　口径52cm，高さ100cm大を測る大型のもので，口縁端の下に一本の凸帯をめぐらし，凸帯の下に下向きの小型鈎状把手が四個つくものが1個ある。外面は細かい平行叩き目をつけ，内面には同心円のあて板痕跡をそのまま残している。

施釉陶器(COLOR PLATE 2 ,fig.13)　SD485から三彩陶1，二彩陶1，IQ29の整地土中から三彩陶1が出土している。SD485出土の1点は，緑と白の釉をかけた二彩陶器の小片である。器種は不明であるが，釉を内外ともにかけている。胎土は軟陶。他の1点は，口径12.4cm程度に復原できる三彩薬壺蓋である。平坦な頂部に垂直な縁部がつくものだが，つまみを欠く。その外面は剝離が進行しているが，緑・褐・白の釉薬からなる鹿の子斑をよくとどめる。軟陶(fig.13—8)。IQ29の破片は，内彎する口縁部と内傾する口縁端をもつ三彩鉢の小片である。その口径を復原すれば20cm前後になる。外面に緑・褐・白の釉薬をかけ，内面には

三彩・二彩陶

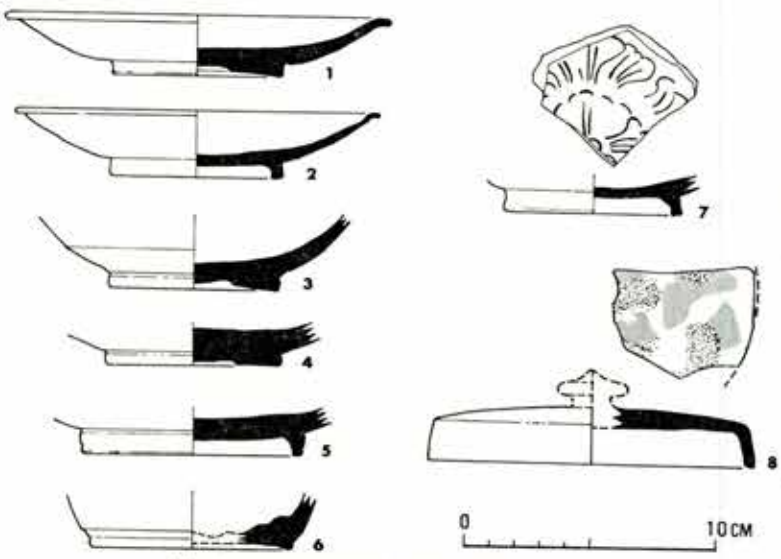


fig.13　6AFB-H・I地区出土施釉陶器実測図

白色の釉のみをかける。H・I地区の第3次整地層から緑釉陶器の破片が出土した(fig.13—1～7)。壺(6)もあるが，多くは杯Bの形態をとる。これらの緑釉陶器は，基本的にSD650A様式に属するものであり，ここではその詳細にふれない。

墨書土器(PL.65) 土器のなかには，墨で字ないしは記号を書くものがある。それらの多くは主としてSD485の土器群に混在して発見されたものである。そのほか，平塚1・2号墳の周濠など奈良時代第1次整地土のなかからも若干出土した。それらとは別に，奈良時代末から平安時代にかけての遺構からも少数発見されている。ここでは，SD485および第1次整地土出土の墨書土器のうち，判読しうるもの116点をとりあげてみることにする。なお，117はJ地区整地土，118はF地区の柱掘形から出土したもので，時期的に下る可能性がある(Tab 4)。

墨書土器を器種別にわけると，杯・皿・蓋が104点あり，その他の器種が12点となる。つまり，墨書は供膳形態の土器に圧倒的に多く，貯蔵形態である甕などにはきわめてまれにしかあらわれない現象がみられる。

つぎに，墨書の内容によって分類すれば，つぎの6種類に大別しうる。 **墨書の内容**

1 容器の名称 1は須恵器の甕の肩部に縦書きしたもので，その器物の名称「由加」に「和銅□年正月十三日」の年紀を加える。書体が他例にくらべて整っており，正月の宴会などににもちいられた器物であろうか。

2 容器に盛る物資名 2，4，16，19，20があり，杯類にいれる副食物を限定して書く。2の「苦」は羹に混ぜる野菜のことであり，7月7日の乞巧奠の行事に関係する供物であろう。4は汁漬物の意で，字の周りをまるでかこむ。

3 場所，地名，年記 3，6，7，8，13，14，18がある。3「喜尼家」は平城宮内のSD1900から「五十戸家」の墨書土器があることから，ここでは場所，もしくは地名とかんがえる。6「造物」は造物所のことであろう。7「□殿」は人名とかんがえるか，殿舎名とするか判断できないが，ここでは殿舎名とする。8「人給」は，「人給所」という役所名らしい木簡，墨書土器が平城宮内から出土している。13「右兵」は右兵衛のことか。

4 人 名 24～58である。また21，22は普通名詞であるが一応この項にまとめる。25，26は姓を書くもので，27～29は名を書く。他の1字を書くものは，姓名のいずれか判然としない。いずれも器物の帰属を表記したものである。そのうち，「倭」が6点(44～49)，「之」が5点(50～54)，「稲」が4点(55～58)，「大」が13点(59～71)，「十」が17点(72～88)ある。それらは，つぎの記号とともに同時に記されたもののようである。たとえば，倭のようにあきらかに同一筆跡とみられるものや大や十のように記入場所が固定しているものが多いからである。

5 記 号 89～115まで27点の多数にのぼる。そのうち91，92は横位によんで数字の廿，卅をまるで囲った可能性もあるが，人名「王」をまるで囲ったものであろう。97～115の渦巻を表記するものは，すべて記入場所が固定しており同時に記入された可能性がある。人名の場合と類似するが，40では人名と記号とが別筆であり，同時に書かれていないことを示す。

6 習 書 11「論語」のように意味のわかるものもあるが，多数は9，10，12のように意味の通じないものが多い。

墨書土器のほかに，製作地で箆書きした刻書ないしは記号とみられる土器がある(Tab. 5)。 **箆書き土器**
意味をとらえ難いが，119「左兵下」は墨書13「右兵」と関係するものであろうか。

番号	文字	土器	器種	記載位置	番号	文字	土器	器種	記載位置
1	□由加和銅□ □正月十三日	須恵器	甕	体部外面	59	大大大大大大	須恵器	蓋B	頂部外面
					60	大	〃	蓋	〃
2	囲七月七日芒	〃	杯A	底部外面	61	大	〃	杯A	口縁部外面
3	喜尼家	土師器	杯AII	〃	62	大	〃	〃	〃
4	汁漬刀	須恵器	杯B	〃	63	大	〃	〃	〃
5	□衾□	〃	盤	口縁部外面	64	大	〃	〃	〃
6	造物	土師器	甕	体部外面	65	大	〃	〃	〃
7	□殿	〃	杯？	底部外面	66	大	〃	〃	〃
8	人給	須恵器	杯A	〃	67	大	〃	〃	〃
9	裙など	土師器	鉢	口縁部内面	68	大	〃	杯B	底部外面
10	□磐	須恵器	杯BI	底部内面	69	大	土師器	杯？	〃
	囲母□			口縁部外面	70	大	〃	〃	〃
11	論語	〃	蓋B	頂部内面	71	大	〃	杯A	口縁部外面
12	攷白	〃	〃	〃	72	十	須恵器	蓋	頂部外面
13	右兵	〃	杯	口縁部外面	73	十	〃	杯B	底部外面
14	五月	土師器	杯B	底部外面	74	十	〃	〃	〃
15	刀日右仁	〃	不明	外面	75	十	〃	杯A	口縁部外面
16	□豆	須恵器	杯	口縁部外面	76	十	〃	〃	〃
17	□東	〃	甕	体部外面	77	十	〃	杯？	底部外面
18	囲囲	〃	杯BIII	底部外面	78	十	土師器	高杯？	杯縁部外面
19	水	〃	杯？	〃	79	十	〃	蓋	つまみ頂部
20	酒	〃	杯A	〃	80	十	〃	杯A	口縁部外面
21	僧	〃	蓋B	頂部外面	81	十	〃	〃	〃
22	僧	土師器	皿AI	底部外面	82	十	〃	〃	〃
23	囲	須恵器	杯A	〃	83	十	〃	〃	〃
24	麻囲	土師器	不明	外面	84	十	〃	杯B	底部外面
25	麻田	〃	杯？	底部外面	85	十	〃	杯？	〃
26	廣瀬	須恵器	杯	口縁部外面	86	十	〃	〃？	〃
27	石寸	土師器	皿AI	底部外面	87	十	〃	〃？	〃
28	小弓	〃	皿BI	〃	88	十	〃	杯A	〃
29	囚郎	〃	杯A？	〃	89	中	須恵器	杯？	〃
30	白	須恵器	杯	〃	90	丰	土師器	皿AIII	〃
31	圀	土師器	甕	体部外面	91	国	〃	杯？	〃
32	合	須恵器	杯B	〃	92	国	〃	〃	〃
33	囲	〃	不明	外面	93	国	〃	杯AII	〃
34	分	〃	杯B	底部外面	94	中	須恵器	杯？	〃
35	囲	〃	椀	口縁部外面	95	S	土師器	杯A	〃
36	年	〃	杯A	底部外面	96	δ	須恵器	杯A	〃
37	儀	〃	杯A	〃	97	国	〃	杯B	口縁部外面
38	夭	〃	杯AVI	〃	98	国	〃	〃	〃
39	主	土師器	杯B	〃	99	国	〃	〃	底部外面
40	信国	〃	皿AIII	〃	100	国	〃	杯A	口縁部外面
41	王	〃	杯？	〃	101	国	〃	〃	底部外面中央
42	王	須恵器	杯	口縁部外面	102	国	〃	〃	〃
43	王	土師器	杯	底部外面	103	国	〃	〃	〃
44	倭	須恵器	杯A	〃	104	国	〃	〃	〃
45	倭	〃	杯BIII	〃	105	国	〃	〃	〃
46	倭	〃	蓋B	頂部外面	106	国	〃	杯	〃
47	倭	〃	杯A	底部外面	107	国	〃	〃	〃
48	倭	〃	杯A	〃	108	国	〃	〃	〃
49	倭	〃	〃	〃	109	国	〃	〃	〃
50	之	土師器	杯？	〃	110	国	土師器	杯？	底部外面
51	之	〃	〃	〃	111	国	〃	〃	〃
52	之	〃	〃	〃	112	国	〃	〃	〃
53	囚之	〃	〃	〃	113	国	〃		〃
54	稲	〃	皿AIII	〃	114	国	〃	〃	〃
55	稲	〃	〃	〃	115	国	〃	〃	〃
56	稲	〃	杯？	〃	116	墨線	〃	甕	
57	稲	〃	〃	〃	117	安囲	灰釉陶	杯B	底部外面
58	稲	〃		〃	118	満	須恵器	〃	〃

Tab. 4　SD485墨書土器一覧表

番号	文字	土器	器種	記入位置	備考
119	左兵下	須恵器	杯AⅢ	底部外面	
120	十	〃	杯B	〃	
121	入	〃	〃	〃	
122	N	〃	壺	口縁部外面	
123	魚の戯画	〃	甕	体部外面	
124	大	〃	杯A	底部外面	Ⅰ地区　第2次整地土出土
125	大	〃	〃	〃	H地区　第2次整地土出土
126	×	〃	杯B	〃	J地区

Tab. 5　SD485墨書き土器一覧表

土製品(PL.64)　土器類以外の土製品としては，陶器硯と土馬がある。

陶硯　須恵器の硯が3点ある。241は墨をする円面の陸部とその周囲をめぐる海部，硯面を支える圏台からなる円硯。平坦な陸部と裾広がりの圏台とは1体につくり，陸部の外縁に低い内堤，圏台の上端に高い外堤をめぐらして海部をつくる。外堤の下端と裾の縁部に突帯をめぐらす。器の内外面にロクロ撫でをおこなったのち，圏台に篦で透し孔をあける。透し孔は長方形を呈して全周を4区にわけ，各区内に2個の十字形透孔を配したようである。硯面には墨痕がある。外堤径15.6cm，高さ5.8cm。242は円面硯の海部から圏台上部の破片。外堤の下端に1本の突帯をめぐらす。圏台には縦方向の約16本の方形透孔をあけたようである。圏台の内面は灰をかぶっている。外堤径10cm。243は楕円形の硯面に外堤をめぐらし，4脚をつけたもの。平坦面をなす硯面長径の約⅓のところに内堤を貼りつけて，海部と陸部を仕切る。狭い海部は陸部よりもわずかに深く，その外堤も高い。内堤の中央に小孔を貫孔させ，水が海から陸に流れるように配慮する。裏面は平坦面をなし，両側縁に板状の粘土塊を貼付け，中間を浅い弧形にえぐって四脚をつくる。後脚にはおのおの側面から小孔を穿つ。全体に粗雑な篦削りで整形する。陸部，海部ともに墨痕があり，陸部の磨滅が著しい。外堤側面および脚の外面は灰をかぶる。復原長径16cm，短径13.1cm，高さ4.7cm。これらのほかに須恵器蓋を硯に転用したものがある。

土馬　土馬は10数個体分出土した。首，足，胴，尻尾などの破片で発見され，肢体をとどめる完形品はまったくなく，意識的に破壊し棄却したもの。暗褐色ないしは黄褐色の土師質の焼きで，手づくねの粗製品。形態と成形法によって2種類に区別できる。土馬a(251,257,259,260)は全体を肉太につくる。前足，後足とも逆U字形に開き，首がたれ，胴部は長く断面円形につくる。粘土塊をのばして，首，胴，尾を決め，四足の位置を定めて粘土棒の足を差込んで貼りつける。首部は上面を扁平につまんで鬣とし，顔の部分に粘土円板を貼りつけ目鼻口を竹管であらわす。尾は先端を細くして垂下する。胸，尻，胴などの接合部分や，延して肉が薄くなった部分に粘土を貼りたし，篦削りや撫で調整する。頭部に耳，胴に鞍をあらわすものがある。251の残存長18cm，通高10.5cm。土馬b(252・258)は前足，後足はともに逆V字形に開き，首は斜め上方に立つ。胴は短く，断面楕円形の腹部に浅い溝をいれる。首はやや扁平で鬣との境が不明瞭。尾は先端を細くして垂下する。四足は胴部に窪みをつけることなく，胸と尻に貼りつけるが，土馬aのように粘土は貼りたさず，胸，尻が薄い。頭部に円板の顔面を貼りつけ，竹管で目，鼻，口をあらわすが，土馬aにくらべて面長となり，上端が鬣よりも上位になる。耳，鞍などをあらわしたのち，全体を篦削りと撫で調整する。全形のわかる252では全長19.2cm，通高14.5cm。土馬a，bの2種は，時期の前後関係をあらわし，土馬aは藤原宮出土のものに類似し，土馬bは平城宮内で発見される奈良時代後半のものと同一系譜につながる。

B　SD650出土土器

SD650溝からは土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・鉛釉陶器・磁器，および土製品として硯・土馬・模型土器等が出土した。この溝は東三坊大路東側溝を２度にわたって改修したもので，SD650A・SD650Bに区別されるが，地区によって堆積状況を若干ことにしている。すなわち，下部に位置するSD650Aと上部のSD650Bとの間には随所で攪拌状況がみられ，両溝の土器が接合する場合もあった。このため，灰釉陶器・緑釉陶器・磁器等の施釉陶器や硯・土馬・模型土器などについては調査地域全域を整理の対象としたが，土師器・黒色土器・須恵器などについては出土総数も多いので，比較的攪拌状況の少ないC・D・E地区から出土したものに限って整理をおこなった。攪乱が一部に認められるとはいえ，２時期の土器にはそれぞれまとまりがあり，ここではSD650Aの主体をなす土器をSD650A様式，SD650Bの主体をなす土器をSD650B様式とよぶことにする。*

I　SD650A様式の土器（PL.66～73）

土器の構成　SD650A様式の土器は，多種類の土器や陶器で構成される。それらを種類別に分類すると，土師器を母体にし，須恵器・黒色土器がそれを補完している状況である。灰釉・緑釉陶器はきわめて少なく，日常品としての陶器でないことを示している(Tab.6)。

	土師器	須恵器	黒色土器	灰釉陶器	緑釉陶器	計
杯　A	104 (29.6)	21 (14.2)	29 (**38.2**)			154 (**25.8**)
杯　B	40 (11.3)	6 (4.1)	19 (25.0)	5	9	79 (13.2)
皿　A	144 (**41.0**)	2 (1.4)	1 (1.3)			147 (**24.6**)
皿　B	2 (0.5)		1 (1.3)	4	3	10 (1.7)
蓋　A	12 (3.1)	12 (8.1)				24 (4.0)
蓋　B		1 (0.7)				1 (0.2)
高　杯	2 (0.5)					2 (0.3)
盤　A		1 (0.7)				1 (0.2)
鉢　A		1 (0.7)	1 (1.3)			2 (0.3)
鉢　C	1 (0.3)					1 (0.2)
鉢　D		2 (1.4)				2 (0.3)
壺　A		1 (0.7)				1 (0.2)
壺　E		5 (3.4)				5 (0.8)
壺　F		1 (0.7)				1 (0.2)
壺　G		1 (0.7)				1 (0.2)
平　瓶		1 (0.7)		1		2 (0.3)
甕　A	46 (13.1)	93 (**62.8**)	25 (**32.9**)			164 (**27.5**)
計	351 (100%)	148 (100%)	76 (100%)	10	12	597(100%)
百分比	**58.5%**	**24.8%**	**12.7%**	**1.7%**	**2.0%**	**100%**

Tab.6　SD650A様式土器個体別数量表

*　SD650出土土器については，すでに高島忠平「平城京東三坊大路東側溝出土の施釉陶器」（考古学雑誌　第57巻１号1971，p.65）で紹介した。その後の検討を通じて改めた部分がある。

土師器(PL.66・67)　SD650A様式の土師器には，杯A・杯B・皿A・皿B・皿C・蓋A・高杯・鉢C・壺A・壺B・甕・土釜・竈がある。

1　杯A（301～312）　平らな底部にやや内彎して外反する口縁部をつける。外面の調整手法から c（301～307），e（308～312）の2手法にわかれる。杯Acは底部内面に横撫でを施し，口縁端部を除く外面全体に篦削りをおこなうものであるが，口縁部の外面上半に削りが及ばないもの(301・305・306)もある。この篦削りは1回の削り面が広く，削り面が重ならない部分では成形時の器表面をとどめる。また胎土にふくまれる砂粒の移動が顕著である。杯Acには，底部が比較的小さく，外傾角の大きい口縁部が上部で屈曲しないものと，底部と口縁部の篦削りを別におこない，口縁上部がやや屈曲して削りのおよんでいないものとがある。杯Aeは，口縁外面上部に横撫でをおこないそれ以下の部分には調整を施さず，成形時の凹凸をとどめるものである。この場合，口縁上部はやや屈曲する。310は灯明皿。2手法のうち，杯Acが圧倒的多数を占めるが，法量による規格性はみとめられない。*　なお，f手法と思われるものがごく少量あるが，小片であり詳細が不明である。口径19.6～9.8cm，高さ3.1～2.4cm。

杯Aの調整

2　杯B（326～331）　口縁が広く開き，底部に低い高台のつく器形。すべてe手法でつくる。口縁部の形態に3種の相違がみとめられる。1は口縁端部が平坦面をなし，外傾する口縁端面の上端がわずかに突出するものである。この例が大半を占める。2は口縁部の上端をわずかに突出させ，まるみを帯びた端面が外傾するもの。この場合，口縁上部を少し薄くする。3は口縁端がまるく肥厚し，端面が内傾するもの。この例は少ない。高台は一般に台形の断面を呈するが，なかには外端の張り出すものがある。底部外面の調整には，篦削りの状態で放置するものと，その上に撫でを施すものがある。口径27.2～16.0cm，高さ6.9～3.7cm。

杯Bの形態

3　皿A(313～319)　平な広い底部と短い口縁部からなる。調整手法にはc(313～318)・e(319)の2手法がみられる。皿Acには，口縁端部をわずかに内側へ巻き込み，上端が突出するものが多い。皿Aeには，底部外面が凹み，口縁部は上部でやや屈折して，わずかに巻込むまるい端部につくるものが多い。量的には皿Acが多数を占め，皿Aeは少ない。口径20.4～14.0cm，高さ3.5～2.1cm。

4　皿C（320・321）器形は皿Aに似るが，一般に小型で手づくねでつくる厚手のものである。いずれもe手法でつくるが，口縁部の上部が外反するものとしないものとがある。口径9.4～8.2cm，高さ1.8～1.6cm。

5　皿B（336～338）　口端部の外傾角が大きく，底部との境が不明瞭。底部外面に高台をつける。336，338は口縁部外面に横撫でをおこなったのち篦磨きを施すものである。口縁端の上端がやや突出し，底部には直立する薄い高台をつける。337は他とことなり口縁部外面に篦磨きをおこなわず，口縁端部はまるみをおびた平坦面をなし，比較的厚い高台の外端をわずかに張り出している。口径20.8～14.4cm，高さ2.1cm。

6　蓋A（322～325）　断面形が笠形を呈する蓋である。頂部は平坦面をなすが，縁部との境をまるくする。縁部の下端は巻き込む形でわずかに突出する。頂部の中央につまみをつけるが，円柱形のものが普通で，まれに宝珠形のつまみをつけるものもある。外面全体に篦削りをおこなった後，頂部に横撫でを加えるが，この状態で放置するものと，さらに四方から入念な篦磨き

* このことから，SD650の杯皿類には法量によるⅠ・Ⅱ・Ⅲの細分をおこなっていない。

を施すものがある。口径25.1～17.2cm，高さ3.8～3.0cm。

7　高杯A(340～342)　扁平な杯部に長大な脚部をそなえるものである。脚部と杯部の接合には円筒接合のa手法と，芯棒接合のb手法とがある。*　ここではb手法を軸部内面の中空部分の状況によって，b_1手法，b_2手法に区別する。すなわち，b_1手法は軸の内径が裾部に近づくにしたがって広がっているものであり，b_2手法は軸部の内径が上下であまりかわらず，裾部への折曲点が鋭角をなすものである。

高杯製作の2手法

高杯Aa(342)には，杯部の全体をとどめるものはない。内外面に横撫でをおこない，杯部内面に連弧暗文を施す。軸部外面には裾部から上部方向への篦削りをおこない，その断面形が10角形あるいは9角形を呈する。裾部の内外面には右まわりの横撫でをおこない，裾部の横撫でと軸部の篦削りとの境に調整をへていない部分が残る。その境および裾部内面に刷毛目をとどめるものもある。胎土には砂粒の少ない精良な粘土をえらび，焼成も良好で赤褐色を呈している。裾部直径15.8cm，脚部高17.9cm。

高杯Ab_1(340・341)のうち，341は全形をとどめる例である。杯部は粘土紐でつくり，内面を横撫で，外面には外方へ向う篦削りをおこなう。外面には4区にわけた粗い篦磨きを施す。軸部には裾から上部方向への篦削りをおこない，断面は7角形を呈する。裾部は内外面を横撫でとし，外面に4区割りの篦磨きをおこなう。裾部内面の軸部との境に刷毛目の痕跡をとどめる。口径32.7cm，器高22.4cm。このほか，破片の例では杯部外面に篦磨きをおこなうもの，裾部の外面の篦磨きが7区割りのものがある。軸部の断面には6角形，7角形，8角形を呈するものがあるが，7角形の例が16例のなかで12例と圧倒的に多い。杯部内面に暗文を施すものはない。高杯Ab_2には完形品はない。この手法の高杯では軸部の篦削りに特色がある。すなわち，断面が6角形，7角形，8角形，10角形を呈する。この場合10角形以外では正多角形のものはなく，鋭角部分に数度の削りなおしをおこなっている。断面が10角形を呈するものでは，例外的に上方から下方に篦削りを施している。

8　鉢C(333～335)　浅い丸底の体部に，外反する短い口縁のつける小型の器である。体部外面を調整しないものと，刷毛目の調整をおこなうものとがある。実用品ではなく，模型土器である。口径8.2～7.1cm，高さ5.2～3.0cm。

9　盌A(339)　高台のつく平底の器で，わずかに肩部が張る体部に，やや外反する短い口縁部がつく。器の内面と口縁部に横撫でを施す。口縁端部は凹面をなして外傾し，上端がわずかに突出する。体部外面は刷毛目をおこなったのちに篦削りを施し，削り残し部分に刷毛目が残る。高台の断面は三角形を呈し，端部が外方に張り出す。口径21.8cm，高さ16.4cm。

10　盌B(332)　蓋受けのように短く内側に屈曲する口縁部と，低い高台をつけた広口の盌。高台は台形で，外方に張り出す。体部内面上半および，口縁部内外面に横撫でを施し，体部外面は篦削りの後，粗い横位の篦磨きをおこなう。口径8.0cm，高さ7.0cm。

11　甕(343～348)　外反する口縁部の端部を内側へ折り曲げるもの(甕A)と，折り曲げないもの(甕B)とがある。甕A(343～347)は，まるい体部をもち，口縁部を横撫でによって調整する。体部外面には刷毛目調整をおこなうが，刷毛目調整の後に撫でをおこなって刷毛目を消すものがある(347)。体部内面は成形時のままで調整しないが，まれに刷毛目調整をおこなうものがある

*　a手法の高杯Aについては『平城宮報告Ⅳ』p.26ですでに指摘している。

(345)。口径27.8cm～17.6cm。甕Bは，細長い体部に外反する口縁部のつくものである。348は外傾角の小さな口縁部の上端が突出し端面の垂直なものである。いずれも体部外面には粗雑な刷毛目調整をおこなう。口径26cm。

12 土釜（349・350） まるい体部にく字形の口縁部をつくり，体部と口縁部の境に鍔をつける。口縁端部を内に折りかえし，鍔としては幅広の粘土帯を延して貼りつける。口縁部と鍔部を横撫でによって調整するが，349には口縁部内面に刷毛目の調整がみとめられる。すべて破片で容量のわかる完形品はない。口径25.2～24.8cm。

13 竈(351) 輪状につくる移動式の竈である。粘土紐によって断面台形の円筒を成形し，内面は撫でによって調整するが，外面は成形時のまま放置する。上下の端部は内彎し，下部から方形の焚口を切りぬく。器の上下端面には篦削りののち，横撫でを施す。内外に火を受けた痕跡があり，内面全体に煤が付着している。最大径40cm，高さ24.8cm。口径からすれば，350の土釜とよく組合う。なお，この他に外面を刷毛目で調整したものもあるが，破片のため全形をしることができない。

須恵器(PL.68・69) SD650A様式の須恵器には，杯A・杯B・杯E・皿A・蓋A・蓋B・高杯・鉢D・擂鉢・盤A・盤B・壺A・壺C・壺E・壺F・壺G・壺H・壺K・平瓶・甕がある。

1 杯A（361～369） 口縁部の形態には，端部がまっすぐのものと端部がわずかに外反するものがある。まれに，端部が強く屈曲して外反するものもある。底部内面に撫で，口縁部内外面にロクロ撫でをおこなうのが通例である。底部外面の調整手法には，1：篦切り状態，2：篦削り，3：撫でを施すものなどの差異がある。そのうち，篦削りを施すものには，底部外面に限るものと，口縁部の下端にまでおよぶものとがある。口径15.7～10.8cm，高さ4.7～2.8cm。 **ロクロ撫で**

2 杯B（370～378） 口縁部の形態には，まっすぐ立ちあがるもの，内彎するもの，内彎して上部でわずかに外反するものがある。高台は低く，断面が台形を呈するものが多いが，比較的高く下端が外へ張り出すものがまれにある。底部内面を撫で，口縁部の内外面にロクロ撫でを施す。底部外面は杯Aと同じく，調整に3種手法ある。口径17.8～9.9cm，高さ6.4～3.3cm。

3 杯E（385） 平底の小さな底部と内彎する口縁部からなる。口縁端部は薄くわずかに外反する。内面および口縁部外面にロクロ撫でをおこない，底部外面に回転糸切り痕をとどめる。胎土は灰白色を呈し，杯Aとことなる。口径10.8cm，高さ2.8cm。 **回転糸切り痕**

4 皿A（389～391） 短い口縁端部の断面が矩形を呈し端面が外傾するもの，端面の内側が突出するもの，まるくおさまるものがある。内面および口縁部外面をロクロ撫でを施すが，底部外面は，篦切り状態のもの，篦削りをおこなうものなどの別がみられる。口径22.1～15.4cm，高さ3.1～1.9cm。

5 蓋A（379～384） 平坦な頂部に屈曲する縁部のつくものと(379～382)，頂部と縁部との境が不明瞭で，断面が笠形を呈するもの(383)とがある。379～382は頂部外面を篦切りのあとで，ロクロ撫でを施し，縁部と内面とにロクロ撫でをおこなう。縁端部下端がやや突出するものと，まるくおさめるものとがある。頂部には宝珠形つまみをつけるが，つまみをつけないもの(382)もある。383は外面の上半にロクロ削りをおこない，縁部下半および内面をロクロ撫でとする。縁端部の下端が突出し，端面が内傾する。このほかに端部をまるくおさめるものもある。口径14.6～10.0cm，高さ2.3～1.2cm。384は笠形の頂部に外反する縁部のつくもので，

縁部が下方へ折れ曲らず，通常の蓋Aとは形状がことなる。口径9.2cm，高さ2.4cm。

6　蓋B（386～388）　全形をとどめるものはなく，縁部の破片である。386は縁部が直立し，縁端面中央が突出し，断面三角形を呈する。387は縁端部が三角形を呈し，頂部との境に沈線をめぐらす。388は縁部がわずかに内傾し，縁端面の外傾するものである。口径16.6～15.8cm。

7　高杯（398）　杯部内面を撫で，外面および脚部の内外面はロクロ撫でで仕上げる。

8　鉢D（399～402）　外反する短い口縁部と上位で肩の張る体部からなる。底部は平底であるが，高台をつけるもの(399・400)と，つけないもの(401・402)とがある。高台のつくものは，肩部の内傾角が強く口縁部との境が明瞭である。高台は台形で端面は外傾する。高台のつかないものは，底部外面が平坦面をなし糸切り痕をとどめる。肩部の張りが比較的小さく，口縁部と肩部との境が不明瞭である。内外面をロクロ撫でによって調整するのがつねであるが，体部の下半に篦削りをおこなうものもある。口径20.2～13.8cm，高さ12.6～10.1cm。

9　擂鉢（392）　円板状の底部に，逆円錐形の体部のつくものである。底部と体部の下半をとどめるが，軟質で器面が荒れているため調整手法などは不明。底部外径12.6cm。

10　盤A（404）　平らな底部と大きく開く口縁部からなる。口縁端部はわずかに肥厚し，外傾する端面の中央がわずかに窪む。底部内面を撫で，口縁部内外面をロクロ撫でとし，底部外面は篦切りの後に撫でによって調整する。口径35.6cm，高さ12.1cm。

11　盤B　平底の底部に外轡する口縁部がつき，腹部に獣脚を付したものである。脚部の状況は欠失しているため不明。

12　壺A（405）　体部の破片である。まるい体部に直立する口縁部がつく。いわゆる薬壺。体部内面にはロクロ目がのこり，口肩部の内外にはロクロ撫でを施す。肩部以下の体部外面は篦削りの後，ロクロ撫での調整をおこなう。口径約10.2cm。

13　壺C（406）　肩部に稜のつく長手の器で，直立する短い口縁部と断面台形の低い高台がつく。口縁部および体部の内外面をロクロ撫でし，体部内外面はロクロ撫での上に縦方向の撫でをかさねる。底部外面中央は篦切りの状態で，調整をおこなわない。肩部外面に灰がかっている。口径9.8cm，高さ15.6cm。

ロクロ挽き

14　壺E（393・394）　平底のイチヂク形の体部に，外反する口頸部をつける小形の器である。口縁端部をまるくおさめる。器体はロクロで挽出し，口頸部内外面および体部外面にロクロ撫でをおこなう。底部外面は平坦面をなし，顕著な糸切り痕をとどめる。体部最大径7.3～7.0cm，高さ10.3～9.1cm。

15　壺F（397）　口頸部の破片であり，浄瓶とよばれるもの。口縁部は強く外反し，端部の上端がやや突出する。内外にロクロ撫でを施すが，しぼり目の痕跡がみられる。

16　壺G（395・396）　筒形で平底の体部に，長細い口頸部をつける花瓶形の器である。395は器の内外面にロクロで挽き出した時の凹凸面を明瞭にとどめ，底部外面には糸切り痕がある。体部最大径7.1cm，高さ16.9cm。396は挽き上げたのち，ロクロ撫でで外面を調整したもので，肩部に稜がつく。口頸部の内外面にはしぼり目をとどめる。体部最大径9.2cm。

17　壺H（407～410）　卵形の体部に，口縁部の外反する口頸部をつける。口縁端部をまるくおさめるものと屈曲してやや幅広の凹帯をなすもの，高台をつけるものとつけないものなどの差異がある。底部はいずれも糸切りで平坦面をなし，断面台形の高台を貼りつけるものがある。

体部と口頸部の接合は，2段構成がつねである。408・410は屈曲する口縁をつけるもので，器の内外をロクロ撫でとする。407・409は端部の丸い口縁部をつけるもので，体部の下半にロクロ削りをおこなう。体部最大径20.0～14.2cm，高さ約26.5～19.1cm。

18 壺K（411） 壺Hを大型にし，耳を貼りつけたものである。口縁部は欠失している。平底で高台はなく，肩部の対応位置に1対と，これと直交する位置の体部下半に1耳の合計3耳を貼り付け，轡に似た形態を呈する。3耳は篦で成形したもので，扁平な琴柱形を呈し，中央に円孔を穿つ。全体をロクロ挽きでつくるが，体部外面の下半に篦削りを施している。体部最大径28.0cm，残存高32.9cm。

19 平瓶（403） 把手と注口を欠き，体部のみがのこる。体部の上面と下部との境に稜をつけ凸面をなす底部に断面台形の高台をつける。体部上面をロクロ撫でをおこない，下部は篦削りの後，ロクロ撫で。底部外面は成形時の凹凸をとどめ，調整を施さない。最大径21cm。

20 甕（412～416） 口縁部の形態によって，甕A・甕B・甕Cにわかれるが，ここでは一括してのべることにする。

甕A（412・413） 叩き板で成形する卵形の大きな体部に，外反する短い口縁部がつく。口縁部にはいずれもロクロ撫でをおこなうが，412は上部でやや屈曲し，端面が水平である。413は外反する口縁部の端面が直立する。体部最大径35～33.2cm，残存高37.4～34.7cm。

甕B（415・416） 口縁部が長いものである。いずれも口縁部の破片で，叩き板で成形する体部の状況については不明である。口縁端部は屈曲し，上下に突出して，内傾する幅広の面をなす。なお，両者の内面の同心円文叩き板には中心に「十」し，同じあて板ではないがきわめて類似している。ともに口縁部径28.7cmである。

甕C（414） く字形に外反する口縁で，外傾する口縁端面の中央がわずかに窪む。体部の上部までとどめるが，器の内外面にロクロ撫での調整をおこない，叩き板を用いる甕A・甕Bとことなる。なお，外面全体に煤が付着している。口径24.6cm。

黒色土器（PL.70） 黒色土器は土師器から派生して成立する。製作手法の各段階において，土師器と共通する部分と独自の部分とがある。* 共通点の第1点としては，土器の製作に際して一切ロクロを用いないことがあげられる。粘土紐の巻き上げで成形をおこない，撫で・横撫で・篦削り・篦磨き・暗文などの手法を駆使して調整をおこなう。これは土師器とまったく同じである。第2の点としては，焼成を酸化焔でおこない，須恵器のような還元焔の窯が想定されないことである。黒色土器の胎土が，土師器に比して精良であることは特色の一つである。しかしながら，土師器と黒色土器を区別する最大の指標は，黒色土器が焼成段階で，器表面に炭素を吸着させ，漆黒色化している点にある。それは多孔質の器表に炭素の微粒子を吸着させ，器表を緻密にする役割を果しており，土師器にない利点となる。黒色化の範囲が土器の内面に限定されるものを「黒色土器A」とよび，器の内外ともに黒色化しているものを「黒色土器B」とよぶことにする。調整の最終段階で，器表面を篦で磨いて平滑にすることも，特色の一つである。とくに杯皿類では，底部内面に一方向，口縁部内面には水平方向の丁寧な篦磨きをおこなうのがつねである。これは器表面を平滑にすると同時に，炭素の吸着を促進するための工程のようであ

黒色土器の特徴

* 黒色土器に関係する包括的な研究はないが，田中琢「総説」（『日本の考古学Ⅵ』1967，p.191）と小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」（考古学研究 第18巻2・3号 1971）に製作技法に関する研究がおこなわれている。

る。器種は土師器にくらべて変化に乏しい。その形態は，一般に薄手のつくりで，緑釉陶器・灰釉陶器・漆器などとよく類似している。

黒色土器の器種

SD650A 様式の黒色土器には，杯A・杯B・皿A・皿B・鉢A・鉢B・鍋・壺A・甕A がある。杯A・杯B・皿A・皿Bなどの供膳形態の土器と，甕・壺類などの煮沸貯蔵形態の土器とがほぼ折半している(Tab. 6)。

1　杯A (421～435450)　平らな底部と内彎気味に広がる口縁部からなる。底部内面を撫で，口縁部内面と外面上部に横撫でを施す。それ以下の外面調整には，a (421～426)・b (427・428)・c (429～435)の3手法がある。a手法は調整をおこなわないもの。b手法は底部外面を箆削りを施し，口縁部外面に調整をおこなわないもの。c手法は口縁上部を除く外面全体に箆削りをおこなうものである。杯Aa と杯Ac が一般的で，杯Ab は少ない。

いずれの手法をとる場合でも，口縁部内面は，水平方向に丁寧な箆磨きをおこなう。外面にも箆磨きを施す場合があるが，内面ほど緻密でない。口縁部内面に数個の渦状暗文を配したり，底部内面に螺旋暗文を施す場合がある。渦状暗文の形は多様であり，類型化することはできない。渦状暗文は単独に用いることもあるが，螺旋暗文は単独には存せず，渦状暗文と合せて用いる。すべて黒色土器Aである。口径19.6～15.6cm，高さ6.2～4.0cm。

450は杯Aの器形をとるが大型であり，他とは用途のことなるものである。内彎する口縁部の端部は内側に巻く。口縁部の外面に箆削りをおこない，口縁部内面と口縁部外面の上半に箆磨きを施している。黒色土器A。口径27.2cm，高さ6.5cm，

2　杯B (436～444)　杯Aに高台のつく器形である。口縁端部をやや薄くし，外反するのがつねであるが，端部外端が突出して内側が窪むものや，外反せずに端部をまるくおさめるものがある。高台は粘土紐を貼りつけたもので，断面は三角形を呈するが，低いものと高いものとの差異がみられる。調整手法や暗文については杯Aとまったく同じである。黒色土器Bが2例あるが，他はすべて黒色土器A。口径22.3～13.2cm，高さ6.3～3.6cm。

3　皿A (445)　平らな底部と端部で外反する口縁部とからなる。底部内面に撫でをおこない，口縁部内面および端部の外面を横撫でとする。それの以下の外面は調整しない。口縁部内外面を水平方向に，底部内外面を一方向に箆磨きをおこなう。黒色土器Aに属する。口径18.6cm，高さ1.9cm。

4　皿B (446～449)　浅い体部に高台のつく器形である。口縁端部は外反する。高台は断面形が台形を呈する高台cと，薄づくりで端部が外傾する高台dにわかれる。調整はすべてa手法でおこない，内面に螺旋暗文と渦状暗文を施すもの，そのほかに口縁部内面に渦状暗文のみを施すものがある。すべて黒色土器Aである。口径19.7～14.3cm，高さ3.6～2.9cm。

5　鉢A (452～454)　内彎する口縁部の破片である。内面と口縁部外面上部を箆磨きし下部に箆削りをおこなう。内面に渦状暗文を旋すものがある。底部は不明であるが，須恵器鉢Aに似る尖底を呈するものとおもわれる。すべて黒色土器Aである。口径17.4～13.8cm。

6　鍋 (451)　口縁部の破片である。く字形に折れ曲る口縁部に，まるい体部のつくものである。口縁端部は矩形を呈して厚い。体部内面を撫で，口縁部の内外面に横撫でを施し，体部外面に箆削りをおこなう。口縁部及び体部の内面に箆磨きを施す。この土器は口縁部の内外面，および体部内面の一部を黒色化するのみで，普通の黒色土器とことなっている。口径32.0cm。

7　壺A（455）　肩がわずかに張る半球形の体部に外反する短い口縁と，小さな高台のつく器形である。口縁部は薄く，端部はまるい。高台は断面三角形で，下端がわずかに外方へ張り出す。口縁部の内外面を横撫でし，体部外面を撫でたのちに，体部内外面に丁寧な篦磨きを施す。底部の内外面には一方向の篦磨きをおこなっている。底部内面に花文風の渦状暗文をつけている。黒色土器A。口径19.8cm，高さ12.3cm。

8　甕（456～458）　まるい体部に外反する短い口縁部がつく。口縁部がやや長く，外傾する端面をもつ大型のもの(456)と，口縁部が短く端部をまるくおさめる小型のもの(457・458)とがある。ともに体部内面を撫で，口縁部内外面に横撫でをおこなう。体部外面に調整をおこなわないもの(456)と，篦削りをおこなうものとがある(457・458)。いずれも内外面に粗い篦磨きを施す。すべて黒色土器Aである。口径17.9～12.2cm。

灰釉陶器(PL.71)　SD650A様式の灰釉陶器には，杯B・皿B・皿D・蓋B・壺C・壺F・瓶B・瓶D・平瓶・鉢B・鉢Dがある。*　胎土には，1：灰白色を呈し水簸をおこなうきわめて硬質のものと，2：細砂粒をふくみ須恵器の色調と硬度に類似するものとがある。1は，白色が強く緻密なもの，灰色が強くあまり緻密でないもの，黄灰色に近く粗面をなすものにわかれる。器種による明瞭な胎土の相違は指摘しえないが，杯・皿の類は灰白色の胎土に限定できる。灰釉の色調は胎土や保存状況によって変るが，灰色・淡緑色・淡黄緑色を呈する。すべてロクロ製。　**胎土**

1　杯B（461～474）　やや内彎する体部に高台のつく器形である。口縁上部で外反するのがつねであるが，まれに内彎するものがある(461・474)。底部外面および口縁上面下部にロクロ篦削りをおこない，内面と口縁上部にロクロ撫でを施すもの，ロクロ撫でが口縁部外面の全体におよんでいるものとがある。また，いずれの場合にも底部外面の篦削りの上にロクロ撫でを施すものがみられる。高台はすべて「つけ高台」で断面が台形の低いもの(高台a)，外端部を面取り風に撫でて断面が三角形を呈し，やや高いもの(高台b)に区分できる。高台aには，内端部があがり端面が内傾するものがある。灰釉をかける部分によって3種類にわかれる。施釉1は内面の全面に施し，施釉2は内面の口縁部外面に施し，施釉3は口縁部の内外面に限るって施釉する。施釉1・2は刷毛で釉を塗布するが，施釉3は口縁部を直接釉薬に浸している。施釉1・2には三叉トチンの痕跡をとどめるものがあるが，施釉3の場合には三叉トチンの痕跡がなく，すべて重ね焼きの痕跡をとどめる。口径19.8～13.7cm，高さ6.3～3.5cm。　**施釉**

2　皿B（475～483）　扁平な体部に低い高台のつく器形である。口縁端部が小さく外反するものと，そうでないものとがある。高台は高台aにつくるが，端部が外傾するものをふくむ。成形調整法は杯Bとかわらない。施釉法には施釉1，施釉2，施釉3のほかに，施釉4として口縁部内面のみに釉薬を塗るものがある。口径16.7～14.2cm，高さ2.9～2.0cm。

3　皿D（484・485）　口縁部に一段の段落をつくる段皿とよばれているもの。484は狭縁のもので，口縁部中位に段をつくり，内外面に顕著な段がみられる。口径17.8cm。485は広縁のもので，口縁内部の底に接する部分に段をつくる。外面はわずかな凹面をなすにとどまり，段を呈していない。高台aをつける。いずれも施釉1。口径14.4cm，高さ2.1cm。

4　蓋B（487～489）　平坦な頂部と直立する口縁部からなり，頂部中央につまみのつくもので

＊　灰釉陶器とつぎの緑釉陶器の名称には，一般に雅名がもちいられているが，今回は土師器，須恵器と比較するために，それを退け土師器，須恵器と共通する名称を用いることにした。

ある。いずれも小片。口縁部は内外にロクロ撫でを施し，外面に淡緑色の灰釉をかける。素地は灰白色を呈して堅い。口径32.8～18.2cm。

5　壺C（490・491）　491は体部下半の破片。平らな底部に裾広がりの圏足をつける。体部の最大径が底部付近にあり，上方に向って次第に直径を小さくしている。体部上半に薄い淡黄緑色の釉をかけ，体部下半および内面は白灰色を呈し透明の吹出し釉がにじむ。素地は黄灰色多孔質であるが，堅く焼きしまっている。体部最大径19.0cm。490は器の上半部の破片である。直立する短い口縁部に，幅の狭い肩部がつき，曲折して体部に移行する。体部は下方に向って広がり，肩部に接する部分に1孔を穿った耳をはりつける。現在，一耳をとどめるが，本来は双耳をなすのであろう。器の内外はロクロ撫での調整をおこない，耳は篦で削って成形する。口縁以外の外面に淡黄緑色の釉をかける。口径11.6cm，490，491は別個の器であるが，この2片から器高を推測すると約21cmとなる。

双耳の壺

6　壺F（493・494）　いわゆる浄瓶とよばれるものの破片。494は2本の沈線をめぐらす口頸部の破片で，内面にしぼり目をとどめ，口部に筒形の注口をはりつける。493は注口の破片。ともに外面に，淡緑色の釉をかける。

7　瓶B（492）　卵形の体部に外反する口縁部と高台のつくものがある。多くは破片であるが，492はほぼ旧形に復した1例である。体部の上半にロクロ撫でをおこない，下半に篦削りをおこなう。体部と口縁部の接合は2段構成である。底部外面に回転糸切り痕をとどめ，わずかに外方に張り出す高台をつける。口頸部から肩部にかけて厚い黄緑色釉をかけるが，体部下半にはじゅうぶんにおよんでいない。内面は施釉しないが，底部内面に円形の釉薬面をとどめる。体部の最大径18.6cm，復原高約25.8cm。

8　瓶D（495）　やや長い平底の体部に小さく広がる口頸部をつける器形。高台はなく，底部外面に回転糸切り痕をとどめ，器の内外に顕著なロクロ目をのこす。ロクロで挽き出したものである。肩部から体部上半にかけて淡緑色の釉をかける。胎土は灰白色の硬質。内面に黒色の物質が付着している。最大径8.2cm，復厚高13cm。なお，ほぼ同形の器とおもわれる破片に，注口や把手をつけるものがあり，把手付のものも存在したようである。

9　平瓶（496・497）　肩部の張った扁平な体部に注口と把手をつける。体部はロクロで挽き，外面を篦で削り，底部に低い高台をつける。体部上面にロクロ撫でを施し，肩寄りの上面に円孔を穿ち，広口で直立する注口をつける。注口の後方に側面形が長方形を呈する把手を貼りつける。注口はロクロ撫でによって調整し，把手口には篦削りの面取りを施す。釉薬は注口，把手，体部上面にかけ，体部外面までおよばない。496は，最大径17.7cm，復原高11.8cm。497は最大径22.7cm，復原高15.5cm。

10　鉢A（486）　内彎する口縁からなるいわゆる鉄鉢形の器である。体部上半の破片で，底の状況については不明。器の内外面にロクロ撫でをおこない，口縁部から下を篦削りで調整する。器の内外全面に淡緑色の釉をかける。口径16.6cm。

11　鉢D（498）　低い高台をつけた平底の器。胴長の体部は上方に開き，外反する口縁部がつく。全体はロクロで挽き，高台は削り出し。体部の下半には篦削りを施し，体部上半および内面にはロクロ撫でをおこなう。底部外面を除く外面全体，内面の上半に淡黄緑色の釉をかけるが，内面には刷毛で水平方向に塗布した痕跡をよくとどめる。口径23.8cm，高さ20.0cm。

緑釉陶器(PL.72・73) 緑釉陶器は，水簸した精良な陶土を用い，器体をロクロで挽き出し，糸切りによって切り離すのを原則とする。ただ，瓶Cの把手のような場合は別に把手をつくって貼りつける。口縁部や体部外面はロクロ撫でによって調整し，さらにロクロの上で丁寧な篦削りをおこなう場合もある。底部外面は篦削りで調整するのが普通であるが，さらに撫でを施すなどして糸切り痕を消去する。調整の最終工程として器面に篦磨きをおこない，より平滑に仕上げる場合がある。杯皿類で篦磨きを施す場合は，原則して底部・口縁部の内面に限るが，口縁部外面・底部外面に篦磨きの及ぶものもある。壺瓶類では体部外面に限って篦磨きをおこなう。

軟陶と硬陶

胎土には，灰白色ないしは黄灰色を呈し，軟質のものと，灰白色ないしは暗灰色を呈し，硬質のものがある。ここでは前者を軟陶，後者を硬陶とよぶことにする。硬陶には灰白色を呈し胎土の緻密なもの，暗灰色を呈し緻密なもの，暗灰色を呈し多孔質で須恵器の胎土に似るものなどの相違がある。軟陶・硬陶をとわず，水簸した精良な陶土を用いている。硬陶の杯・皿類のなかには，釉薬の下に重ね焼きの痕跡をとどめるものがあり，素地を一度素焼した後に釉薬をかけるいわゆる「二度焼」の確認できるものがある。しかし，施釉後に重ね焼きをおこなう例はない。また，硬陶・軟陶をとわず，三叉トチンを用いた痕をとどめるものがある。

色 調

釉薬をかける範囲は器種によってことなり，必ずしも一定しないが，把手付瓶や平瓶の体部内面を別として，器体の内外面全体に釉薬をかけるのが原則である。刷毛を用いて釉薬を塗布した例があるが，すべての施釉が刷毛でなされたとは断言できない。現在，釉薬の多くは鉛黒色ないしは暗緑色を呈し，鮮やかな緑色を呈するものは少ない。このことについて，埋没中の化学変化によるものか，棄却前に火災などに遭い変化したものかのいずれかに決めがたい。しかし，2次的なゆがみなどはなく，前者の可能性がつよい。*

釉 薬

一般に緑釉は酸化鉛を含んだ鉛釉といわれ，銅化合物を添加して緑色を発色させ，鉄の化合物を加えて黄褐色を発色さす。 Tab. 7 は緑釉のベースとなる酸化鉛と，緑色の発色剤となる酸化第二銅の定量分析の結果である。硬・軟陶間での成分の差異は顕著でないが，硬陶の場合の酸化第二銅の量が0.07％～0.66％であるのに対し，軟陶では0.35%～1.74%となり硬陶の方がやや多量に含まれている傾向を示す。しかし，この緑釉成分差が1度焼(軟陶・低温焼成)と2度焼き(硬陶・高温焼成)との技術的な差異によるか否かについては，明らかになしえなかった。したがって，生産地の判別などについても釉薬分析のみからは決することはむつかしく，胎土の成分分析をも平行しておこなう必要がある。**

試　料		鉛 Pb_3O_4 %	銅 Cu_2O %	色 調	陶 質
SD650A	1	52.0	0.24	淡 緑	硬
	2	45.3	0.09	灰 黒	硬
	3	53.9	0.35	黒	軟
	4	52.1	0.37	緑	軟
	5	30.0	0.13	黒	硬
	6	48.6	0.07	灰 黒	硬
	7	51.4	0.56	緑	硬
SD650B	8	44.9	0.66	淡 緑	硬
	9	50.4	0.20	淡 緑	硬
	10	42.3	0.25	黒 緑	硬
	11	30.7	0.15	淡 緑	硬
	12	48.7	0.62	淡 緑	軟
	13	46.1	1.74	緑	軟

Tab. 7　SD650緑釉陶器釉薬成分構成表

* 施釉陶器が火災に遭た場合，釉薬は変色・熔解し器表面は粗面となる。そのようなものは，SD650の緑釉陶にはない。

** 釉薬の成分分析については山崎一雄氏の援助をえた。

SD650A様式の緑釉陶器には，杯B・皿B・鉢F・瓶C・壺A・平瓶がある。

切り高台と蛇の目高台

1　杯B（501～516・531・532）　内彎する口縁部と平らな底部からなり，底部に高台をつけ，全面に釉をかける。高台のつくり方に4種あり，それによって杯Ba・杯Bb・杯Bc・杯Bdに細分できる。すなわち，杯Baの高台は底部外面を凹面をなす円板状に削り出したもので，切り高台。杯Bbの高台は，切り高台の中央を円形に抉ったもので，蛇の目高台。杯Bcの高台は，手法の面では杯Bbと同じであるが，抉りの部分が広く，高台の断面が台形を呈する。杯Bdは貼りつけ高台。杯Ba（503・505～507・510～516）には，口縁端部がわずかに外反するもの，顕著に外反するもの，外反しないが端部の内側が凹むものがある。内面には篦磨きをおこなう。503の底部内外面に三叉トチンの痕跡があり，515の底部外面には回転糸切り痕をとどめる。口径16.7～9.8cm，高さ5.8～2.4cm。杯Bb（501・504・509・511）には口縁端部がわずかに外反するものと，しないものとがある。高台には中央円形の抉りが小さく浅いものと，やや大きく深いものとがある。509には篦磨きがないが，他はすべて口縁部外面にまで篦磨きをおこなっている。口径18.0～13.4cm，高さ4.5～3.4cm，杯Bc（502）は，わずかに外反する口縁端部をもち，内面および口縁部外面に篦磨きを施す。口径17.6cm，高さ5.3cm。杯Bd（508）は，口縁端部がわずかに外反し，底部内面のみに篦磨きをおこなう。口径13.8cm，高さ4.0cm。

531・532は杯Bdを大型にした形態をとる。532は口縁端部が外反し，貼り付け高台は外に張り出し，端面をまるくおさめる。高台と底部外面を除く全面に丁寧な篦磨きをおこなって，全面に釉を施す。軟陶。口径32.8cm，高さ103cm。531の底には断面台形の貼りつけ高台がつく。高台を除く全面に篦磨き，全面に釉を施す。軟陶。復原口径24cm，復原高7cm。

2　皿B（517～530）　浅い体部に高台のつくもので，施釉は全体におよぶ。杯Bと同じく高台によって皿Ba・皿Bc・皿Bcに細分できる。皿Ba（520～530）には，口縁上部で外反するもの，口縁端部で外反するもの，外反しないものがある。520・522・523・527は内面のみに篦磨きをおこない，525・526は篦磨きが口縁部外面までおよぶ。口径15.2～13.9cm，高さ3.2～1.9cm。皿Bb（519）は，口縁端部をまるくし，内側が凹線状に窪む。高台を除く全面には篦磨きをおこなう。口径14.2cm，高さ2.8cm。皿Bd（517・518）のうち，517は口縁端部がく字形に外反し，口縁上部との境に鈍い稜をつくり，端面が外傾する低い高台をつける。器壁が厚く，他の皿Bとは様相をことにしている。518は薄い口縁部の上部で外反し，端面の内傾する低い高台をつけ，高台以外の全面に篦磨きをおこなう。口径17.0～15.6cm，高さ2.9～2.2cm。

3　鉢F（533）　半球形の深い体部に蛇の目高台をつけるもので，直立する口縁部は端部で肥厚し，まるくおさまる。口縁上部外面に浅い1条の凹線をめぐらす。底部外面を除く全面に篦磨きを施し，全面に淡黄緑色の釉をかける。口径15.1cm，高さ10.9cm。

4　瓶C（536・537）　体部下半の破片が2個体分ある。537は口縁部と底部を欠き，把手の下端部をのこしている。全体をロクロで挽き上げ，外面をロクロ撫でした後に，肩部以下を篦で削る。肩部から頸部の間に扁平な粘土板でつくった把手がつく。器の内外面に濃緑色の釉をかける。硬陶。体部最大径17.8cm。536は切り高台風の底部をつくり，体部外面にロクロ撫でをおこなったのち，横方向の篦磨きを施す。器の外面に釉が残るが，内面は風化のため不明である。軟陶。最大径11.2cm。

5　壺A（534）　口縁部の破片である。まるい体部に直立する短い口縁部をつける。内外面を

ロクロで撫で，体部外面に篦磨きをおこなう。全面に緑色の釉をかける。硬陶。口径9.2cm。

6　平瓶（535）　注口部と体部の破片である。注口はやや開き気味で直立し，端部でわずかに外反する。体部外面下端部を高台風に削り出している。底部外面は篦で削って平坦に仕上げる。軟陶で，器の全面に濃緑色の釉をかける。肩部径21.6cm，復原高12.9cm。

磁　器(PL.73)　唐末～五代の越州青磁や南方窯白磁などの中国産の磁器が少量であるが，出土した。いずれも細片で器種のわかるものが少ないが，SD650Aには杯B・杯F・合子・壺，SD650Bには杯B・杯F・壺，SK623土壙には杯Bがある。煩瑣をさけるため，ここに一括する。*

1　杯B（541～543）　541は小さな底部に斜め上方にのびる口縁部をつける。口縁部内外面は**越州青磁**ロクロ撫でによって調整。底部外面は篦で凹面に削ったのち，中央を円形に抉る蛇の目高台につくる。全体に淡黄褐色の釉をかける。ただ，高台の外縁には釉がまわらず，焼き台の痕跡をとどめる。焼き台の痕跡は約3cmの間隔をおいて点在する6個の褐色斑で，若干の白色微砂粒が付着する。素地は灰白色，硬質である。口径14.2cm，高さ4.5cm。SK623出土。542も同形の杯Bである。釉は灰緑色を呈し，541ほどの艶がない。素地は灰白色，硬質である。復原口径13.8cm，復原高4.5cm。SD650B出土。543も同形の杯Bの底部である。高台は蛇の目。全面に灰緑色の釉をかけ，高台に焼き台の痕跡をとどめる。素地は灰白色，硬質である。底部外径5.4cm。SD650B出土。544・545は口縁部の破片。口縁部は上述の諸例とことなり，内彎する深い椀形をとる。内外面にロクロ撫でをおこない，灰緑色の釉をかける。素地は灰白色，硬質である。545は復原口径11.0cm。SD650B出土。544は復原口径14.8cm。SD650B出土。547は，底部の破片で。蛇の目高台をとどめる。高台の外面には入念な篦削りをおこない，やや**白　磁**内彎する口縁部をつくる。底部外面以外に白色不透明の釉を厚くかける。内面にくらべて外面はやや粗雑で，口縁下部には釉のかかっていない部分がある。素地は白色，硬質である。SD650B出土。546は口縁の外傾角の小さな深い器の口縁部であろうが，口縁端部が小さく外反する。素地は白色，硬質。復原口径13.1cm。SD650B出土。

2　杯F（549～551）　口縁と底部との間の折曲線が稜をなす杯。549は，わずかに内彎する平らな底部に外反する口縁部のつくものである。底部に断面台形の削り出し高台がつく。内面の口縁部と底部との境に1本の沈線をいれる。内面および口縁部外面にロクロ撫でを施し，底部外面にロクロ削りをおこなう。高台端面には部分的に焼き台の押圧痕跡がある。なお，底部外面の中心には高台削り出し時に生じた小さな突起がある。全体に厚い灰緑色の釉をかけ，小さな貫入が全面ひろがっている。素地は灰白色で，硬質の優品である。口径14.8cm，高さ3.2cm。SD650A出土。

550は平坦な底部の破片であるが，内面に口縁と底部の境にいれた沈線があることから，杯Fにいれた。高台は削り出し高台で，端面に丁寧な篦削りを施す。高台部を除く全面に白色不透明の釉を厚く施している。底部外面中央の高台内にも釉が付着し，この釉には高台に添って白色の微砂粒が部分的に付着する。素地は白色，硬質である。高台の直径6.0cm。SD650B出土。551も底部の破片であるる。高台をつけない小さな底部に内彎する口縁部のつくものらしく，内面の口縁部なかほどに1沈線をめぐらす。口縁部外面の下半はやや凹面をなし，上半との境は屈曲するにとどまり，稜線をつくらない。底部は平坦でやや上げ底状に凹む。口縁部

* 磁器の産地分類に関しては，東京国立博物館の長谷部楽爾氏を煩わせた。

内外面はロクロ撫でをおこない，底部外面にロクロ削りをおこなう。内面と口縁部外面に白色不透明の釉をかけるが，外面には釉のかからない部分もある。素地は白色，ガラス質の硬質に焼きあげる。底部の径4.5cm。SD650B出土。

3　合子（548）　合子身部口縁の破片である。内彎する体部の上端に，直立する蓋受けがつく。器の内外面にロクロ撫での調整をおこなう。全体に黄色の強い灰緑色釉をかける。素地は黄灰色，硬質である。口径9.8cm。SD650A出土。

4　壺（552・553）　553は1個体分の破片であるが，完形に復原することはできない。頸部からわずかに外方に広がる口縁部と，中位に最大径のある長い体部からなる平底の壺である。口縁端の断面は矩形を呈し，やや凹面をなす端面は外傾する。頸部外面に耳の剝落した痕跡をとどめる。体部内面にはロクロ目をとどめるが，口縁部内外面および体部外面の上半はロクロ撫でによって平滑に調整。体部外面下半に箆削りを施すが，底部外面の調整は器面が荒れているため不明。底部外面を除く全面に灰緑色の釉をかける。底部外面は火まわりが悪く，淡白褐色軟質であるが，その他は灰白色で硬質である。細砂を含む。復原最大径21.0cm。復原高24.3cm。

環耳の壺

SD650A出土。552も壺の破片である。完形にならないが，最大径が上部にある長手の体部に短く直立する口縁をつくる。下端を花弁形にかたどる環耳が肩部についていたらしい。体部内面には顕著なロクロ目をとどめるが，口縁部の内面と外面の全体にはロクロ撫での調整を施す。口縁部・肩部の内面と外面全体に淡黄褐色の釉をかける。素地は白灰色，硬質である。復原最大径15.6cm。SD650B出土。

Ⅱ　SD650B様式の土器（PL.74～78）

SD650B様式の土器類はA様式に比して少量であるが，土器類の構成をしるうえではじゅうぶんな量である。各種類の土器類の構成はTab.7の通りで，依然として土師器を母体とするが，SD650A様式にくらべて黒色土器が増加している点が注目される。

SD650B様式土器の組成

	土師器	須恵器	黒色土器	灰釉陶器	緑釉陶器	計
杯　A	48（25.0）	8（7.8）	23（24.7）			79（**18.9**）
杯　B	16（8.3）	1（0.9）	50（**53.8**）	18	5	90（**21.5**）
皿　A	78（**40.6**）	1（0.9）	1（1.1）			80（**19.1**）
皿　B	2（1.0）		1（1.1）	5	4	12（2.9）
蓋　A	3（1.6）	1（0.9）				4（1.0）
蓋　B		1（0.9）				1（0.2）
高杯	2（1.0）	1（0.9）				3（0.7）
盤　A		1（0.9）				1（0.2）
鉢　A		1（0.9）				1（0.2）
鉢　C	1（0.5）					1（0.2）
鉢　D		2（2.0）				2（0.5）
壺　A		1（0.9）				1（0.2）
壺　E		5（4.9）				5
壺　G		1（0.9）				1（0.2）
甕　A	41（21.4）	78（**76.5**）	18（19.4）			137（**32.7**）
竈	1（0.5）					1（0.2）
計	192（100%）	102（100%）	93（100%）	23	9	419（100%）
百分比	**45.8%**	**24.4%**	**22.2%**	**5.5%**	**2.1%**	**100%**

Tab.8　SD650B様式土器個体別数量表

土師器(PL.74)　杯A・杯B・皿A・皿B・皿C・高杯・鉢C・土釜・甕Aがある。

1　杯A (601～611)　c・eの2手法がみとめられる。杯Ac (601～604)はSD650A様式の場合と顕著な違いを示さない。杯Aeでは,口縁上部の屈曲が著しく,「く」字形を呈する。また口縁上部に横撫でをおこない，口縁部と底部との境が突出するものが多い。大型の器がなくなり，杯Aeが多い。口径18.0～13.4cm，高さ3.7～2.5cm。

杯Aeの増加

2　杯B (622～628)　基本的にはc手法でつくるが，624は杯Aeに高台をつけた例である。口縁部は内彎し，外面の篦削りが口縁上部の屈曲部分におよばず，篦削りが粗雑化する。小型の器がすべてを占める。口径21.2～15.2cm，高さ5.3～4.0cm。

3　皿A (612～615)　形態的にはSD650A様式と顕著な相違を示していない。c (613・614)・e (612・615)の2手法があるが，c手法の皿Aが退潮し，2手法がが折半している。皿Acでも篦削りが著しく粗雑になっている。口径17.4～14.0cm，高さ2.7～1.8cm。

4　皿B (619・620)　口縁部がほぼまっすぐに終るものと，内彎して端部がわずかに外反するものとがある。いずれも高台は断面三角形で薄く，外方へ張り出す。619は口縁部内外面に横撫でをおこない，620は口縁部外面を篦削りをおこなう。口径14.9～13.6cm，高さ2.4～1.9cm。

5　皿C (616・617)　口縁部が厚くわずかに外反するもの(616)と，口縁部が薄く大きく外反するもの(617)とがある。口径9.2～8.7cm，高さ1.4～1.2cm。

6　蓋A (618)　頂部に宝珠形のつまみがつく蓋である。内外面に横撫での調整おこなうにとどまる粗製品である。口径17cm。

7　高杯A (629・630)　高杯Aaはなく，すべて高杯Abである。高杯Ab_1 (630)は，杯部の口縁外面に篦削りを施さず，成形時における2条の輪積み痕跡を明瞭にとどめる。軸部の篦削りは浅く，かつ粗雑で断面形を6角形と7角形とに仕上げる。裾部は内外面に横撫でを施すが，外面に調整をおこなわないものもある。端部は内側に巻き込む。口径33.9cm，高さ22.3cm。高杯Ab_2 (629)も杯部と軸部の状態は高杯Ab_2と同じである。裾の縁端が屈曲し，横撫でを施す。軸部には12～8角形の篦削りをおこない，杯部内面に螺旋暗文をとどめる例がある。胎土中に黄色雲母片を多量に混えている。口径22.5cm，高さ17.3cm。

8　鉢C (621)　底部の尖った逆円錐形を呈し，口縁端部がわずかに外反する。手づくねでつくり，内外面とも不規則な凹凸面をなし。随所に指文をとどめる。実用品ではなく，模型土器である。口径6.3cm，高さ約3.0cm。

9　土釜 (633・634)　まるい体部にく字形の口縁部をつくり，体部と口縁部の境に鍔をつける。鍔は幅5cm内外の粘土板を体部に貼りつけたもので，縁端がやや垂下する。口縁部内外面および鍔部に横撫でを施し，体部外面には刷毛目を施す。体部内面には調整をおこなわず，成形時の凹凸面をとどめている。口径28.4～23.8cm。

10　甕A (631・632)　外反する口縁部の端部を折り返すもの(632)と，折り返さないもの(631)とがある。632は口縁部内面と体部外面を刷毛調整する。631は口縁部を横撫で調整するのみで，他の部分は成形時の状態で放置する。口径28.3～19.7cm。

須恵器(PL.75)　SD650B様式の須恵器には，杯A・杯B・杯D・杯E・皿A・皿B・蓋A・蓋B・高杯・鉢A・鉢D・鉢E・壺A・壺C・壺E・壺J・甕Aがある。

1　杯A (641)　口縁部がわずかに外反し，端部はまるくおさまる。底部内面および口縁部内

外面にロクロ撫でをおこない，底部外面は篦切りの後，撫での調整をおこなう。口縁部外面に「人給水」の墨書がある(PL.80)。口径19.2cm，高さ4.3cm。

2　杯B (647～649)　口縁上部でわずかに外反するものと内彎するものがある。平らな底部に高台をつける。いずれも低い台形の断面形を呈するが，外端の張りだすものがある。調整法は杯Aと同じ。口径18.8～14.8cm，高さ5.7～5.1cm。

3　杯D (646)　平底で筒形の器。底部内面および口縁部内外面にロクロ撫でをおこない，底部外面に回転糸切り痕をとどめる。胎土は灰白色を呈し，緻密である。口縁部の内外面に灰をかぶり，黄緑色を呈する。口径6.8cm，高さ6.1cm。

緑釉陶の形態

4　杯E (642)　小さい平底に内彎する口縁がつく。器壁の厚さはほぼ均等で，内面および口縁部外面にロクロ撫でをおこない，底部外面に回転糸切り痕をとどめる。器形は緑釉陶器の杯Bに近く，灰白色を呈し，砂粒の少ない精良な胎土を用いている。口径16.1cm，高さ5.0cm。

5　皿A (650・651)　口径の広い浅手のもの(650)と，口径が小さい深手のもの(651)がある。いずれも底部外面を篦で切りとったのち，撫でを施し，口縁部の内外面にロクロ撫でをおこなう。650は口径17.2cm，高さ1.7cm，651は口径9.1cm，高さ2.2cm。

6　皿B (652)　外反する口縁部のつく浅い体部に，小さな断面三角形の高台をつけたものである。器の内外面をロクロ撫でによって調整するが，底部外面には篦切り痕をとどめている。口径13.6cm，高さ2.0cm。

7　蓋A (644)　平坦な頂部と屈曲する口縁からなり，頂部には宝珠形つまみがつく。頂部外面を篦削り，内面を撫で，縁部はロクロ撫での調整。直径13.2cm，高さ2.5cm。

8　蓋B (643・645)　643は大型のもので，中心部分を欠く。平坦な頂部の口縁部との境をまるくし，直立する縁部に移行する。縁端部は内傾する。直径29.2cm。645は小型の蓋である。頂部と縁部との境をまるくし，直立する縁端部分をまるくおさめる。つまみは扁平で，中心がやや窪む。直径7.9cm，高さ2.5cm。

9　高杯 (653)　裾広がりの脚部のみをとどめる。裾部は強く屈曲し，端部が上下に突出する。全体にロクロ撫での調整。裾部直径13.8cm。

10　鉢A (654)　口縁部の破片で底部は不明。体部内面および口縁部内外面にロクロ撫でを施し，体部外面に篦削りをおこなう。灰白色を呈し，多くの砂粒を含む。口径14.8cm。

11　鉢D (659)　肩部と口縁部が大きく開く平底の器である。肩部と口縁の間で著しく屈曲し，口縁端部での断面が卵形に肥厚する。全体をロクロで挽き出し，底部外面には静止糸切り痕をとどめる。なお，口縁部と肩部の外面が黒色を呈し，同形のものを重ねて焼いた状況がうかがわれる。口径22.4cm，高さ11.0cm。

12　鉢E (655)　わずかに肩の張る深い体部に，外反する短い口縁部のつく平底の器である。口縁部の外端が下方に突出し，端面は外傾する。口縁部，体部の内外面にはロクロ撫での調整を施し，体部下端から底部外面には篦削りをおこなう。底部外面には篦削りの後，さらに撫でを施す。口径14.8cm，高さ13.6cm。

13　壺A (661)　まるい体部に直立する短い口縁部をつける。高台はいま離脱している。口縁部および体部の内外面にロクロ撫でをおこなう。底部外面は篦削りをおこなったのち，撫でる。器面の全体に小さな火ぶくれが多く，凹凸の面をなす。口径12.4cm，復原高23cm。

14 壺C (660) 肩部と体部の境に稜をつけ，直立する短い口縁のつく深い壺で，肩部に四耳をつける。体部下半を欠く。肩部は下方に下る斜面をなし，肩部中央に2本の沈線をめぐらし，それ以下に耳を貼る。耳は欠失し，痕跡のみをとどめる。内面の口縁部と肩部外面にロクロ撫でをおこない，体部外面は篦削りの後，撫での調整をおこなう。口径11.8cm。

15 壺E (656・657) 全体にロクロ挽きの痕跡をとどめる小型の壺。全体は粗いつくりで，平底の底部外面には明瞭な糸切り痕をとどめている。口縁端部は屈曲し上方に突出する。体部の最大径6.2～5.9cm，高さ10.2～9.8cm。

16 壺J (658) 底部の大きい筒形の体部に外反する口縁部のつく器形である。口縁端部の上端が突出し，垂直で幅広の端面をなす。全体はロクロ撫でによって調整し，平底の底部外面には回転糸切り痕をとどめる。体部最大径15.2cm，高さ23.8cm。

17 甕A (662) 肩部の張る卵形の体部に外反する短い口縁部のつく大型の甕である。叩き板で成形したものであるが，のちに撫での調整を全体におこない，叩き板の痕跡を消去している。ただし，体部内面下部には同心円文をとどめる。体部最大径36.7cm，高さ46.1cm。

黒色土器(PL.76) SD650B様式には，杯A・杯B・皿B・蓋・壺A・鉢C・甑・甕がある。杯皿類が多く，その他が少ないことはSD650A様式と共通するが，杯Aが少なくなり，杯Bが増加する。 **杯Aの減少**

1 杯A (671～673) 口縁端部がわずかに外反するものと，まっすぐのものとがある。調整手法にはa (673)・c (671～672)の2手法がある。篦磨きは内面に限っておこない，外面に篦磨きをおこなうものはない。内面に渦状暗文を施すものが2例あるが，螺旋暗文を施すものはない。黒色土器A。口径21.6～14.6cm。高さ5.5～3.9cm。

2 杯B (680～694) 口縁部はすべて内彎するが，上部で外反するものと，外反しないものとがある。いずれの場合でも，端部の内側を凹線状に窪ますものが多い。外面の調整手法では，c手法はきめて少なく，すべてa手法である。口縁部外面に篦磨きを施すものが少なく，総量の¼を占めるにすぎない。また内外面ともに篦磨きをまったくおこなわないものもある(693)。高台は高台aが16例，高台bが12例，高台cが1例となる。693が黒色土器Bであるほかは，すべて黒色土器Aに属する。口径19.6～13.0cm，高さ6.0～3.8cm。

3 皿A (674) 口縁部をまっすぐに開く浅い器形で，口縁端部はまるい。底部内面を撫で，口縁部内面と外面上端部を横撫で。篦磨きはない。黒色土器A。口径14.2cm，高さ2.4cm。

4 皿B (675～677) 口縁部がわずかに外反する。高台はいずれも扁平な高台dで，篦磨きが口縁外面におよぶものがある。676は口縁部内面に渦状暗文がある。677が黒色土器Bであり，675～676は黒色土器Aである。口径14.6～14.2cm，高さ2.7～2.5cm。

5 蓋A (678・679) 679はわずかに内彎する頂部に外傾する縁部がつく。頂部に宝珠形つまみをつける。縁部の内外面に横撫で，頂部外面は4区にわけて篦磨きを施す。内面は中央に一方向の篦磨き，その周辺に横方向の篦磨きをおこなう。内面中央に渦状暗文と螺旋暗文を，外周に渦状暗文を配する。黒色土器B。口径12.8cm，高さ3.4cm。678は頂部の破片であるが，大型品である。宝珠形つまみをつけ，内外面に篦磨きをおこなう。黒色土器A。

6 壺A (695・697～699) 半球形の体部に，ごく短い口縁と高台がつく。内彎する体部の上端を薄くし，屈曲させて小さな口縁とする。一般に底部は平坦だが，丸底もある。底部外面をめぐる高台は，いずれも断面三角形を呈し低い。口縁部の内外面に横撫でを施す。底部内面を一方

に，体部内面を水平方向に細かな篦磨きをおこなう。外面では体部を篦削りし，底部は不調整である。また，体部外面に調整をおこなわないもの，篦削りの後に篦磨きを施すものなどがある。697～699は内面と体部上半を黒色化する黒色土器A。695は全体を黒色化する黒色土器Bである。口径21.4～11.8cm，高さ12.4～6.1cm。

7　鉢C（696）　半球形の体部と小さな口縁部からなる。口縁部は短く，断面形は三角形を呈する。口縁部内外面を横撫で，以下の外面は調整せず，粘土紐の接合痕跡が明瞭である。底部内面に一方向，体部内面には横方向の篦磨きをおこなう。口径6.0cm，高さ3.1cm。

こしき　8　甑（701）　底のない円筒形の体部中位に相対する1対の把手のつける甑。体部は上部と下部で内彎し，上下端は篦で整え断面が矩形を呈している。把手は上反する角形を呈し，篦で削って形を整える。口縁部内外面と体部内面に横撫でをおこなう。体部外面は部分的に篦削りをおこなうが，成形時の粘土紐接合痕跡をとどめ，ほとんど調整していないことがわかる。体部内面全体に横方位の粗い篦磨きをおこなう。黒色土器A。口径25.9cm，底径10.4cm，高さ24.5cm。

9　甕（700）　まるい体部と外反する口縁部からなり，端部内側がわずかに凹む。口縁部内外面に横撫でをおこない，体部内外面には横位の篦磨きを施している。口径17.1cm。

灰釉陶器（PL.77）　SD650B様式の灰釉陶器には，杯B・皿B・皿D・皿E・蓋・椀B・瓶B・瓶C・平瓶・香炉がある。胎土と施釉については，基本的にSD650Aとかわるところがない。

1　杯B（711～724・740）　口縁端部のまっすぐ終るものと，外反するものがあるが，後者が多い。ただ，SD650A様式の場合にくらべて外反角が小さい。調整手法では，口縁部下半に篦削りを施すものが多く，内外を撫でで調整するものは少ない。底部外面に篦切り痕跡をとどめるものもあるが，多くは篦削りの調整をおこなっている。高台には，高台aと高台bがともに存在する。施釉には，施釉a，b，dがあり，施釉cはない。底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめるものがある。740は大型の杯B（口径29.0cm，高さ10.2cm）で，鉢として利用した例外的なものである。そのほかは口径18.6～13.2cm，高さ6.1～3.1cmにおさまる。

施釉Cの消滅

2　皿B（725～730）　口縁端部はすべて外反する。成形，調整手法は杯Bと同じである。施釉には，施釉a，b，c，dのすべてがある。728は施釉aの例であるが，底部内外面には，一辺約4.5cmの三叉トチンの痕跡をとどめている。口径16.4～14.5cm，高さ3.0～2.1cm。

3　皿D（734・735）　734は狭縁の皿Dで，口縁上部に段をつけたものである。外面も明瞭な段をなす。高台は高い高台bである。器の内面に釉をかける施釉aで，底部に重ね焼きの痕跡をとどめる。口径18.1cm，高さ4.0cm。735は広縁の段皿で，口縁部中ほどに段をつける。外面の段はなくやや凹面をなすにとどまる。高台は高台bであるが，皿Bにくらべて高い。施釉bに属し，底部内面に重ね焼きの痕跡をとどめる。口径16.0cm，高さ2.8cm。

4　蓋（732・733）　732は扁平な頂部と，わずかに下端か突出する縁部からなる蓋の破片でつまみを欠く。外面全体に釉を厚くかけている。口径10.8cm。733は宝珠形つまみの破片であり，外面には全面に厚い釉をかける。

5　皿E（737）　皿の口縁の両端を内側へ折りまげ，上端を波形にしたいわゆる耳皿。器の内外をロクロ撫でとし，高台bである。内面に淡緑色釉を薄くかける。長径11.8cm，高さ3.8cm。

6　椀B（731）　高台つきの椀に，一対の把手のつけるものである。把手は扁平な長方形の粘土板でつくり，篦削りで成形し，やや上反り気味で口縁部の中位に貼りつける。体部は内外面

をロクロで挽き出し，底部に高台bをつける。器の内外面に灰釉をかける。灰白色の精製品である。口径12.6cm，高さ4.5cm。

7 瓶B (742) 卵形の体部に口頸と高台をつくる壺の肩部に，1個の環耳をつける。体部内面にロクロ目をとどめるが，口縁部内外から肩部外面にはロクロ撫でを施し，肩部以下には篦削りを施している。環耳は粘土紐を半円に曲げて貼りつけたものである。口縁部内外から体部外面の上半に釉をかける。最大径20.4cm，復原高29.2cm。

8 瓶C (738・739) 大きな平底に下ぶくれの体部と細くて短い口頸部をつくり，頸部から肩部の間に板状の把手をつける。739は全体をロクロで挽き，外面にロクロ撫でを施す。ただ，底に接する体部下端はロクロ削りで斜めにそぎおとしている。底部は薄い平底で凹凸面をなす。把手は長方形の粘土板をはりつけたもので，頸部にくらべて肩部の貼付け部分が長い。底部を除く外面と頸部の内面に釉をかける。最大径15.5cm，復原高21.6cm。738は小形のもので，底部外面のロクロ撫での下に回転糸切り痕跡をとどめる。体部最大径8.1cm，高さ10.4cm。 **把手付の瓶**

9 平瓶 (741) 完形品はなく，底部，体部，把手の破片。肩部径よりも底部径が著しく小さいため，肩部が強く張り出す。体部上面にのみに釉をかけている。最大径17.8cm。

10 香炉 (736) 扁平な丸底に直立する体部をつけ，上端を屈曲させて短い蓋受けをつくる。底部外縁には，端部の外反する圏足をつけ，2個を1対とする紡錘形の透し孔を3個所にいれる。全面にロクロ撫での調整をおこない，底部を除く外面全体に淡緑色の釉を薄くかける。なお，蓋受けの部分には焼成時に蓋をかぶせた痕跡がある。口径10.3cm，高さ5.1cm。 **香 炉**

緑釉陶器(PL.78) SD650B様式の緑釉陶器には，杯B・杯F・杯G・皿A・皿B・皿E・盤B・唾壺がある。それらのうち，杯の一部・皿・唾壺などはSD650A様式に属する可能性がある。なお，SK623からは緑釉陶器香炉が1点出土しており，ここで一括して報告しておく。

1 杯B (751～757) 杯Bは杯Baと杯Bbにわかれる。杯Ba (753・755～757)には器壁が厚く口縁端部がわずかに外反するものと器壁が薄く端部の外反角の強いものとがある。753・756は内面に篦磨きをおこない，755は内面と口縁部外面に篦磨きを施す。753には刷毛で釉薬を塗った痕跡をとどめ，755の底部内面に三叉トチンの痕跡がある。全体に釉をかけた軟陶。口径16.4～12.4cm，高さ5.1～3.6cm。杯Bb (752・754)はいずれも外反しない口縁部であるが，752は端部をまるくして内側に浅い凹線をめぐらす。754は底部が厚く，口縁部が内彎せず，他とは少しく形態をことにする。全体に釉をかける。硬陶。口径16.5cm，高さ5.7cm。内面に篦描きの花弁形を施すものがあるが(766～775)，751は秋草文を篦描きした優品である。

2 杯F (758) 口縁部の中位でわずかに内に折れ，稜をつくる。口縁端部はわずかに外反する。底部には，薄い板状の高台を垂直にはりつける。口縁外面下部および底部外面には篦削りを施す。底部内面と口縁部の内面上部に花弁文様を篦描きする。全面に釉を施す。硬陶。口径16.8cm，高さ5.4cm。

3 杯G (759) 口縁端部の数個所に内側へ折曲げる輪花をつける杯B。断面台形の貼付け高台がつく。口縁部外面と底部外面に篦削りをおこなう。内面には，さらに篦磨きをおこない，全体に深緑色の釉をかける。硬陶。口径18.1cm，高さ5.3cm。 **輪花の杯**

4 皿A (763) わずかに内彎する底部と，短く立ちあがる口縁部からなる。口縁端部は矩形を呈し，端面がわずかに外傾する。底部外面は篦削りする。内面には丁寧な篦磨きを施す。

全体に濃緑色の釉を厚くかけ，素地は黄灰色を呈する硬陶。口径18.4cm，高さ2.8cm。

5　皿B（764）　口縁上部でわずかに屈曲し，端部の外反する器形。底部は破片のため不明であるが，高台がついた痕がある。硬陶で全面に釉を施す。口径15.6cm，高さ2.6cm。

6　皿E（762）　皿の口縁を折曲げて耳皿としたものである。高台は高台aのいわゆる切り高台で，外面に回転糸切り痕を明瞭にとどめる。内面および口縁部外面はロクロ撫でによって調整する。全体に深緑色の釉をかける。硬陶。短径6.7cm，高さ3.5cm。

7　盤B（765）　脚のつく盤の破片である。扁平な丸底の体部に外傾する幅広の口縁と脚をつける。内面の口縁部と体部との境には稜がつき，端部はややまるくおさめる。脚は一種の獣脚で本来は3脚のものであろう。体部は内外ともロクロ撫でによって調整し，脚は篦で整形する。全面に釉をかける硬陶。口径約16cm，高さ3.8cm。

花菱文の唾壺

8　唾壺（761）　口縁部と体部との破片があるが，同一個体ではない。端部のまるい口縁部は漏斗状に広がり，下部は小さくすぼまる。内外面にはロクロ撫での後，丁寧な篦磨きを加える。内外に厚い釉をかける。体部は細い頸部と上部のまるい半球形の胴部からなり，平底である。外面にロクロ撫でをおこない，さらに丁寧な篦磨きを加える。底部外面は篦削りの後，ロクロ撫でをおこなう。体部外面に花弁文を篦描きする。文様は体部の周囲を3分し，それぞれに四弁花菱を配し，その間隙の上部に三弁花文をおく。現在，釉薬は全く剝落しているが，本来は全面に施されたのであろう。硬陶。口径18.4cm。体部最大径9.6cm。

9　香炉（760）　扁平な底に直立する体部をつくる香炉の破片。現在口縁部を欠く。底部外面に，端部の外反する高い圏足をつけ，2個を1対とする紡錘形透し孔を3カ所にあける。全面をロクロ撫でによって調整し，底部内面には篦磨きをおこなう。軟陶で，全面に淡緑色の釉を施す。底部内面の中央に「大」の字を施釉前に篦書きする。復原口径11cm，高さ7.5cm。

Ⅲ　墨書土器（PL.80，Tab. 9）

墨　書　SD650から墨書土器が100点近く出土した。土師器や須恵器に多く，灰釉陶器，黒色土器がこれにつぐ。緑釉陶器には墨書はない。土師器や須恵器では，高杯の裾部内面，蓋の頂部内外面壺の体部外面等にも墨書をおこなう場合があるが，大部分は，杯・皿類の底部外面である。灰釉陶器では墨書範囲はさらに限定され，杯の口縁部外面におこなう場合が1例あるのみで，他はすべて釉薬のおよばない杯・皿類の底部外面である。黒色土器でも底部外面など黒色化しない部分に墨書する。その他，文字ではなく人面を描く土器もこの項にいれておく。

1　器物名・食物名に関するもの（1～4）。1は高杯の脚に書いた器物名，2はこの皿に盛るアワビ，3は壺の容量をあらわす。4は木簡や墨書土器に「人給所」という官司名らしきもの。

2　建物・地名などに関するもの（5～17）。5は「角寺」とも記し，遺跡の西方にある海竜王寺のことをいう。6～12は寺院，邸宅，官司などの場所ないしは建物をあらわすようであるが，具体的な所属は明らかでない。16，17は寺名と地名であろうが，所在地は不明である。

3　容器の配列あるいは整理番号とみられるもの（18～30）。18・19は仏式の供儀に関するものか。20～23は西をはじめに記し，配置の順序をあらわす。24・25も同様である。

4　人名に関するとみられるもの(33～66)。2字のものと1字のものとがある。

5　習書（67～72）。69は文書風のものになるかもしれないが，他は意味が通じない。

6　生産地で刻印をおしたり，篦書きしたもの（73～75）。73・74は刻印で，美濃の印について

は岐阜県の各地や，平城宮跡からも発見されている。75は筮書き。

7　人面土器(PL. 79)　粗製の土師器鉢Cの外面に，人面もしくはそれに類するものを墨で描いたものが数点ある(76～80)。いずれも鉢の胴部を顔面にみたて，目・鼻・口・耳などを描く。78は渦巻きをそえている。76は高杯の杯部上面に描いたもの。　**人面土器**

番号	文字	土器	器種	記載位置	番号	文字	土器	器種	記載位置
1	高杯　高杯壺口	〃	高杯	裾部内面	39	丹　□	灰釉陶	皿B	底部外面
2	鮑　一	〃	皿A	口縁部外面	40	保	土師器	杯A	〃
3	□(斗)四合	須恵器	壺	底部外面	41	□　萬	〃	〃	〃
4	人給水	〃	杯A	口縁部外面	42	大	〃	〃	〃
5	隅　寺	土師器	〃	底部外面	43	左	〃	〃	〃
6	一　院	〃	〃	〃	44	繼	〃	〃	〃
7	(殿)□	〃	〃	〃	45	奈	〃	〃	〃
8	(宮)□	〃	〃	〃	46	守	〃	皿A	〃
9	造　所	〃	杯B	〃	47	(ヶ)□	〃	〃	〃
10	大　炊	須恵器	蓋	頂部外面	48	大　□	須恵器	〃	〃
11	新　殿	灰釉陶	皿B	底部外面	49	太	〃	杯A	〃
12	□　殿	須恵器	壺	〃	50	方	灰釉陶	杯	〃
13	大(北)□(殿)□	灰釉陶	杯B	〃	51	尒	〃	皿B	〃
14	大北園	〃	皿	〃	52	見　□	〃	〃	〃
15	池上南	須恵器	壺	〃	53	右	〃	杯	〃
16	友田寺	灰釉陶	杯B	〃	54	高	〃	壺	〃
17	中　家	須恵器	杯B	口縁部外面	55	浄	土師器	皿A	〃
18	中　供	土師器	杯A	底部外面	56	上　上	須恵器	壺	底部外面 体部外面
19	司　供	須恵器	杯B	〃	57	吉	黒色土	杯B	底部外面
20	西　中	土師器	杯A	〃	58	村	灰釉陶	杯B	〃
21	西　二	須恵器	蓋	頂部外面	59	一　方	〃	〃	〃
22	西　二	〃	杯A	〃	60	則	〃	〃	〃
23	西　(二)□	〃	〃	〃	61	福	〃	皿B	〃
24	利　十	土師器	皿	〃	62	福	〃	杯B	〃
25	利　廿	黒色土器	皿	〃	63	嶋	〃	〃	〃
26	四	土師器	杯B	口縁部外面	64	□山井	〃	〃	〃
27	(四)□	〃	〃	〃	65	国	〃	皿B	〃
28	(六)□	〃	杯A	底部外面	66	済	〃	〃	〃
29	(船)□	〃	杯B	口縁部外面	67	奈尓尓	土師器	杯A	底部外面
30	十	〃	杯A	底部外面	68	進　進(進)□	〃	〃	口縁部内面
31	十	須恵器	蓋	頂部外面	69	□□□□ 報　納	〃	蓋	頂部外面
32	十　(四)□	〃	壺A	肩部外面	70	太可左	須恵器	〃	〃
33	川　刀	灰釉陶	杯B	底部外面	71	(北)(村)□□□	黒色土器	杯B	底部外面
34	大西　大西	〃	〃	口縁部外面	72	養楢高削務	須恵器	蓋	内　面
35	大　西	〃	皿B	底部外面	73	王	〃	甕	肩部外面
36	酒　井	〃	〃	〃	74	美　濃	〃	杯B	底部外面
37	(酒)□　(井)□	〃	〃	〃	75	大	〃	壺E	〃
38	(酒)□　(井)□	〃	皿B	〃					

Tab. 9　SD650墨書土器・筮書き土器一覧表

Ⅳ　土製品　(PL.79)

硯　SD650A・Bを通じて，円硯4個体，風字硯8個体が発見された。いずれも破片で全体をうかがえる例はない。

1　円硯(781～786)　円硯は，いずれも陸部と裾広がりの圏台とを1体につくり，圏台の上端に高い外堤をめぐらしたもので，外堤下縁に1条の突帯をめぐらしている。陸部と海部との境に低い突線をめぐらすものもある(782)が，硯面を凸面にし，とくに境をつけないのが一般的である。破片のため全形の明らかなものはないが，圏台に長方形の透しをいれるのを原則としており，なかに篦描きの文様を施したものもある。いずれも須恵質で，SD650Aから出土した。外堤の直径20.4～13.0cm。

各種の風字硯

2　風字硯(787～794)　風字硯は，長方形の硯面に陸部の両端と海部の三方に外堤をつくり，海部を深くするため陸部の裏に2脚をつける。円硯とことなり，材質には須恵器，灰釉陶器，黒色土器と多様である。硯面の海部と陸部との境に波形あるいは連弧形の内堤をつくるものもある。型押しでつくるものと手づくねでつくるものとがあるが，いずれも，撫で・篦削りなどによって全形を整えている。また，陸部には顕著な磨滅がみられ，墨痕をとどめている。787は海部の破片である。硯面には連弧形の内堤のほかに，硯面を縦断する堤をつくり，二面硯とする。791は海部と陸部との境に内堤をつくらない。790はやや高い内堤が直線的につくもので，内堤は硯面のみならず外堤上面にまで及んでいる。789は陸部の破片である。内堤は波形を呈し，陸部の裏面の後部に2脚が剝離した痕跡をとどめる。以上は須恵器製品。788は海部の破片である。連弧形の内堤をつくる。内面を型押しで作り，外面を篦で削る。792は陸部の破片で，裏面に7～8角に面取りした脚の痕跡がある。以上は灰釉陶器で，硯面以外の外面に灰釉を施している。793，794は黒色土器製品で，いずれも陸部の破片である。全体に薄手のつくりで，外堤と硯面との境が不明瞭で凹面をなす。周縁の端部内面には，黒色土器の杯皿類にみられるような，浅い凹線をめぐらし，全面に丁寧な篦磨きを施す。内外とも鈍黒色を呈している。793は柱状の脚だが，794は扁平な板状の脚につくる。787・791・788・793の諸例はSD650Aから，790・792・794がSD650Bから出土した。これらの硯のほか，須恵器の蓋を転用した硯もある。

土　馬(811～816)　破片も含めると20個体以上の土馬がSD650A・Bから出土した。土師質で，高さ6.0～3.9cm，全長7.5～5.6cmの小形のものであるが完形のものはきわめて少ない。いずれも故意に破損したもののようである。そのつくりかたは簡単で，粘土円板を二つ折りにし，首・四足，尾をつまみ出すため，四足，尾はわずかに突出するにすぎない。頭部には別の粘土板を貼り付けて側面形を三日月状につくり，さらに上端を折り返して鬣とし，顔面には竹管で両眼をいれている。811～815はSD650A，816はSD650B出土。

模型土竈(801～803)　多くは手づくねでつくる小形の模型土竈である。下底部の広い台形を呈する体部の一個所を篦で切り取って焚口とし，焚口上部に粘土紐を貼り付けて庇としたものである。801は大型のもので，高く突出した庇がつき，体部外面を刷毛で調整する。これは実用品の可能性がつよい。

土　錘(fig.14)　土師質の土錘が2点出土している。いずれも中空の管形を呈するもので，粘土の小円板を棒状の心に巻きつけ，外面を指撫でによって仕上げた粗製品である。長さ4.5cm。最大径1.4cm。

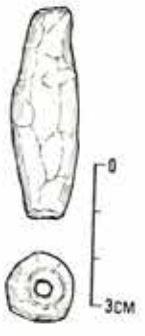


fig.14　土錘実測図

4 漆　　器

SD650Aから45点の漆器が出土した。それらは，40点の挽物と5点の板物とからなる。素地に曲物を用いた例はない。少数の完形品のほかはすべて破片である(別表6)。

挽物漆器（PL.81・82）　挽物漆器には，竪木取りと横木取りのものがある。竪木取りは心をさけた材の木口面から器を挽く。横木取りは心をさけた材の側面から器を挽き，材の状況に応じ柾目，板目のものができる。横木取りが29点，竪木取りが10点，不明1点が出土した。 **挽物の漆器**

1　杯B（1～5）　広く開く口縁部に，低い高台をつける。1は厚い底部と外傾角の小さい口縁部からなり，底部外縁に断面三角形の低い高台をつくる。内面と高台部にロクロ目がみられとくに底部内面の凹凸は顕著である。器の内外に生漆と下地粉を混合した下地塗りを施し，その上に黒漆をかける。横木取り，ケヤキ材。口径13.8cm，高さ4.2cm。2・3は全体に薄手のつくり。薄い底部と外傾角が大きく端部が外反する口縁部とからなり，底部外縁に斜めに立上る高台をつくる。ともに下地塗りはなく，素地に直接黒漆をかける。2の高台内面の1個所に鉄錆が付着している。これは黒漆を塗付したのちに付着したものであり，乾燥工程中に付着したものらしい。横木取り，柾目，モクレン科の材。復原口径13.2cm，高さ2.8cm。3の底部外面中央に，素地面に達する「東」の針書きがある。横木取り，柾目，広葉樹。4・5は細片で復原できない。4は外面を麻の布着せとし，内面は薄い土漆を下地とする。上塗りは内外ともに黒漆。横木取り，広葉樹材。5は下地塗りをおこなわず，素地の内外に黒漆をかける。内面を少し厚めに塗る。横木取り，ケヤキ材。

2　皿A（6～8）　平坦で広い底部と短い口縁部からなる。6は器の外面全体と口縁部内面のなかほどまで麻とおもわれる布着せをおこなう。布着せは外面からはじめて，内面へ折りこむようにして終る。その他の部分には下地加工をおこなっていない。黒漆を上塗りとするが，布着せ部分との境にかすかな段がつく。横木取り，板目，ケヤキ材。口径19.2cm，高さ1.8cm。 **ケヤキ材**　7も下地に布着せをおこなうが，口縁部の内外面に限り，他の部分には下地塗りをしない。また，6と同じように布着せの境に段ができる。底部内面に刃物による損傷がある。横木取り，板目，広葉樹材。復原口径18.5cm，高さ1.9cm。8は下地加工がなく，厚さ0.3～0.4mmの黒漆を内外面に塗っている。横木取り，柾目，広葉樹材。

3　皿B（9～11）　平坦な底部と外反する口縁部からなり，底部外縁に高台をつくる。9は口縁端部が小さく外反する。底部外面は刳りぬいていない。底部外面以外に下地塗りをおこない，全体に黒漆の上塗りをおこなう。横木取り，板目，ヒノキ材。10は薄手の器で，器壁が1.12mm程度の厚さである。口縁端部は大きく外反し，底部外縁に直立する高い高台をつくる。全体に布着せをおこない，その上に黒漆の上塗りをおこなう。内面に顕著な使用痕跡がみられ，スリガラス状の曇りを呈する。横木取り，柾目，ケヤキ材。口径21.6cm，高さ3.6cm。11は口縁部を欠き，断面三角形の高台のつく底部のみをとどめる。素地に直接黒漆を厚くかける。その際の刷毛目が全面にわたってのこる。それによると，塗りの方向は木目方向とことなる口縁部，あるいは高台に平行して，数回にわけて塗付したようである。底部に円孔があるが，これ **ヒノキ材**

は2次的に穿かれたもの。横木取り，柾目，ケヤキ材。現存径15.5cm，現存高2.3cm。これら以外に4点の皿の破片（12～15）がある。A・Bのいずれに分類できるか不明。

朱漆塗り　3　椀（16・17）　やや小さい底部と高い口縁部からなり，底部外縁に高台がつく。いずれも内面を朱漆，外面を黒漆の上塗り，16は全体に麻の布着せを施したのちに上塗りする。内面の朱漆塗りは，外面の黒漆塗りよりも少しく厚いようである。底部は欠損。横木取りの柾目，ケヤキ材。復原口径8.6cm，復原高4.2cm。17は下地加工を施すことなく，直接上塗りをおこなう。黒漆塗りの口縁部外面に，朱漆で横書きする文字があるが判読できない。高台の下端を欠く。横木取り，広葉樹材。復原口径17.5cm，復原高6.7cm。

4　蓋A（18・19）　平坦な頂部と直立する縁部からなり，縁部内面に身部とあわせるための段をつくる。18は縁端部に段をつくり，合せ口とする。頂部から縁部への移行部分はまるく削る。素地に直接，黒漆の上塗りを施すが，とくに縁端部分が厚い。素地の粗いロクロ目が漆膜を通して観察できる。頂部の中央は2次的に刳ぬかれている。横木取り，板目，ツブラジイ材。直径20.9cm，現存高3.1cm。19は縁部の上下に稜をつけ，頂部の中央に環状のつまみがつくもののようである。縁端内面に合せ口の段をつくる。下地加工として頂部外面から合せ口の段まで，麻の布着せを施す。内面には下地加工を施さないためロクロ目が観察できる。竪木取り，ヤマモモ材。直径17.4cm，現在高3.5cm。

5　蓋B（20・21）　全体に厚手のつくりで，縁端部内面にかえりをつけ，頂部に環状のつまみをつくる。20は頂部から縁部までほぼ水平につくり，頂部は中央付近で一段高くする。縁部内面の内よりに直立するかえりをつくる。全体に土漆の下地塗りを施すが，頂部外面では厚く，かえりの部分では薄い。そのうえに黒漆の上塗りをおこなう。つまみは欠損，竪木取り，ヒノ

環状つまみ　キ材。復原径14.4cm，現存高1.7cm。21は笠形の頂部に環状のつまみをつけ，縁端内面の内よりに低いかえりをつくる。なお，頂部と縁部との境に稜をつくる。下地塗りを施さず，直接黒漆の上塗りをおこなう。竪木取り，トチノキ材。復原径14.4cm。高さ2.0cm。

6　蓋C（22）　笠形の頂部に高い縁をつくる。いわゆる印籠蓋。つまみを欠くが，おそらく宝珠形につくるのであろう。頂部はまるみをおび，肩部が若干張出す。縁部は直立し肩部付近がきわめて薄く1.5mmの厚さである。下地加工はなく，黒漆の上塗りを全面に施す。塗りは内外ともに厚く，0.3～0.5mmである。縁部内面に使用時における線状の擦痕があり，蓋と身が深く合さっていたことが推測できる。竪木取り，ヒノキ材。復原径11.9cm，現存高8.5cm。これら以外に蓋の破片とみられるものが2点ある(23・24)。

7　鉢（25・26）　25は口縁部が大きく内彎するいわゆる鉄鉢形である。現在，口縁部上半のみをとどめる。内面のロクロ挽きは粗く，内彎部分の器壁が厚い。下地加工はなく，素地に直接上塗りの黒漆を塗る。横木取り，柾目，ケヤキ材。復原径11.6cm。

8　壺（27）　高台をもつ底部と体部の下半部をとどめ，器の上半部を欠く。鉢形になる可能性もある。素地の腐蝕が著るしく，漆膜のみをとどめる部分が多い。底部は厚く，ロクロ目の凹凸が顕著である。下地加工は施さず，内外に黒漆を直接塗る。内面の塗りは外面にくらべて粗い。竪木取り，材不明。現存径22.7cm，現存高8.7cm。

9　その他（28～40）　28は直立する口縁部をもち，端部は内面に段をつくり内傾する。下部は破損のため不明。元来は，口縁端も直立し合子の蓋である可能性もある。内面には2～3mm

間隔で斜放射状の刻み目をとどめる。内面には下地加工をおこなわず直接黒漆を塗るが，外面には麻の布着せを施す。布着せは口縁端で内面へ折り，段の部分で終る。竪木取り，ヤマモモ材。復原径11.0cm，現存高4.5cm。

板物漆器　41～45は板物素地の漆器であるが，いずれも用途を明らかにすることはできない。漆塗りには土塗りによる下地加工を施すものと，素地に直接上塗りするものとがある。塗りはすべて黒漆にかぎられる。

樹種

挽物漆器のうち，37点について素地の樹種が判明している。*　広葉樹の製品が圧倒的に多数を占め，針葉樹はヒノキに限られている。広葉樹のなかでもケヤキがとくに多数を占め，弥生時代以来の挽物素地の一般的な材であったことがわかる。**　それは沢口悟一が，現在の用材として，ケヤキを「椀類其他，上等挽物用として賞用され，専ら使用せらるるは漆下地用にして渋下地は適しない。摺漆塗には最も適する（優良）」と評価するのに，よく一致し，上質の材が選定されているとみてよい。***　ただ，蓋についてはケヤキがなく，ブナ科のツブラジイ，ヤマモモ，トチノキ，ヒノキなどの腰の強い材を用いる。全体に発見例が少なく，蓋に全くケヤキがないとは断言できないが，杯皿類にくらべて器形が複雑なことによる可能性がつよい。なお，板物漆器はすべてヒノキの材を用いる。

器種＼樹種	広葉樹 ケヤキ	モクレン科	ツブラジイ	ヤマモモ	トチノキ	不明	計	針葉樹 ヒノキ
杯	2	1				2	5	
皿	7					2	9	1
椀	1					1	2	
蓋			1	1	1		3	3
鉢	2						2	
その他（不明）	6			1		4	11	1
計	18	1	1	2	1	9	32	5

Tab.10　漆器材質一覧表

木取り

素地製作段階における器種と木取りの関係をみよう。蓋は7点出土したが，うち5点は竪木取りである。竪木取りは横木取りにくらべて口径の伸縮率が少なく，蓋と身というように2体を合せて使用する器物の素地に適している。杯・皿・椀・鉢のような無蓋の浅い器種はすべて横木取りで，竪木取りがない。これは，竪木取りの短所として材の髄方向に裂目が入り，竪方向に割れやすいということを避けるためである。壺(27)は竪木取りでつくる。壺とすればおそらく広口で口縁の短い壺Aのようなものが想定される。このような器種を横木取りで挽くと，木目方向が横位になり，器は破損しやすいからであろう。

ロクロ製作時における各種の問題については，漆塗りのため多くの場合よく観察できずここではふれないことにする。

下地

下地塗りについては，『延喜式』内匠寮式漆器，朱漆器の条に記載されている漆器20個体についてみると，19個体に下地布張用の貲布・細布が記されている。つまり，素地に直接上塗を施すものはほとんどない。しかし，SD650出土の漆器では，下地加工のあるものとないものがほぼ折半している。また，下地のない漆器がとくに光沢が悪かったり，漆の吸着が悪いという状況はみられない。ただ，下地を施す場合には，ロクロ目の凹凸面をととのえたり，布着せの場合には素地の強度を補強するという効果がある。とくに皿B（10）のような極めて薄い器壁

*　樹種の同定は，藤原武二がおこなった。

**　弥生時代の唐古遺跡では，容器の鉢類と匙にケヤキが用いられている。小林行雄，末永雅雄『大和唐古弥生式遺跡の研究』1943，p.178

***　沢口悟一『日本漆工の研究』1933，p.409

を挽き出す場合は，当然布着せは不可欠であり，ロクロ挽きの技術も高度のものが要請されるであろう。*

漆器全体の発見例は少ないが，平城京の奈良時代遺構からは，いまのところ朱漆塗りの漆器は発見されていない。今回出土した朱漆塗りの漆器は実例として古い例に属するであろう。さきの内匠寮式朱漆器の条では，原料として丹砂・布着用の貲布・黒色用の墨があげられている。朱漆器の料に黒漆の材料が記されているのは，どういうことであろうか。それは今回出土の椀（16・17）が内朱外黒であることから，朱漆器というものが器全体を朱漆塗りにするものでなく，内朱外黒漆器をさすことがあきらかになった。

5 木製品

6AFB区で出土した木質遺物は，総数6000点をこえる。それらの多くはSD485，SE495あるいはSD650から出土し，奈良時代初期と平安時代初期に属する。ここでは，多くの木質遺物のなかから，一定の目的で加工したものを木製品として選別し，そのうち約1100点について説明を加えることにする。**

A SD485出土木製品（PL.83～85，別表7）

SD485から出土した木製品は，総数200点におよぶ。それらのうち，用途を明らかにしうるものを中心に，代表的な木製品150点について記述する。記述では祭祀具・食膳具・紡織具・工具・その他の順におこなう。

祭祀具(PL.83)　祭祀関係の木製品としては人形，削掛けなどがある。

人形　1　人形（ひとがた）（1～4）　短冊状の薄板に，抉りなどの加工をおこない頭・胴・手足をあらわす人形につくる。1～3は墨で眉・目・鼻・口を描く，1・2では胸から腹部にかけて墨痕が残るが何を表現しているのかわからない。

2　組合せ人形（ひとがた）（5）　組合せ人形の脚部である。板片を削り，腿部から足先までをあらわす。脚は直線的につくり，中央やや下寄りに弧状の切込みをいれて膝をあらわし，足先を斜めに削りだす。上端を若干薄くし，円孔を穿つ。胴部と組合せるためである。長さ12.2cm，幅0.9cm，厚さ0.7cm。ヒノキ板目材。

削掛け　3　削掛け（6～19）　細長い薄板の上端を主頭形に削り，下部を剣先状に削り，主頭の両側辺に数回の切込み（けずりかけ）を施すもの。「けずりかけ」部分の状況によって2種類に分類できる。削掛けBは両側辺に各1個所の切込みをいれるもの(6～13)。削掛けCは，両側辺にそってそれぞれ2個所で切込みをいれるもの(14・15)。いずれも，1個所での切込みは1回にとどまる。14は削掛Cに分類したが，片側辺の切込みは1個所である。

---

*　皿B(10)は他の漆器にくらべて格段に薄く，漆塗りもきわめて丁寧である。その形態は時期はやや下るが宋代の漆器と通ずるところがあり，中国産の可能性がある。

**　木製品については，材質を同定できず各説明の末尾に記す一部の材質は植物学者の観察によるものでない。また，遺物の計測値は別表7にまとめて記すものが多い。

食膳具(PL.84) 食器関係の木製品には曲物容器，折敷，箸などがある。

1 曲物容器 (20～46) 厚手の円形底板に薄板を円筒形に曲げた側板を接合したもの。* 薄い側板は破損しやすく細片となり，両者をそなえるものはきわめて少ない。ここでは比較的保存のよい底板を中心にのべる。

曲 物

底板の内外面は丁寧に削って整形し，周縁を鋭利な刀物でほぼ正円形に裁ち落す。この裁ち落しには垂直におこなうものと，外方に少し傾斜をつけるものとがある。周側面には側板を接合する木釘や木釘孔をとどめている。釘孔数は一定しないが，4孔の例がもっとも多い。直径によって5種類に区別できるが，実際は側板の厚さを加えなければ，容器の外径に対応しない。曲物容器Ⅰは直径24.0cm以上，曲物容器Ⅱは直径23.0～21.0cm，曲物容器Ⅲは直径20.0～18.0cm，曲物容器Ⅳは直径17.0～15.0cm，曲物容器Ⅴは直径14.0～12.0cm。このうち，曲物容器Ⅳがもっとも多く，総数の52%を占める。木取りでは，曲物容器Ⅳの底板が柾目板に限られるのに対し，曲物容器Ⅰ・Ⅱ・Ⅲでは板目板に限られる。38の墨書は2次的に習書したもの。21は曲物容器Ⅰに属する唯一の完形品である。側板の内面に無数の垂直線と斜線の刻線をいれ，円筒形に曲げて両端を樺皮で縫いつける。縫い方は，縦に3cm前後の間隔をおいて4個所に縫い目をいれ，下部では脇に2個所の縫い目をいれる。側板上端には樺皮幅の浅い切欠きをいれ，中間の3個所の縫い目は2目を1対にする。樺皮の幅は0.6cmで，上方から縫い始め，下部の脇にある縫い目で終わる。側板の下端に，両端を樺皮で接合する幅3.4cmの箍を重ねる。箍の上から木釘を打込んで底板に固定する。木釘は16個所で打込むらしく，底板の木口方向にあたる部分を密に打つ。有機物が沈着したらしく，内面は黒色を呈している。直径29.5cm，高さ1.43cm。46は底板の中央に径1.2cm前後の孔を穿ち，周側面に釘孔をとどめる。甑の底板として転用したもののようである。

2 曲物容器蓋 (47～51) 厚手の蓋板に，低い側板を樺皮で縫いつけたもの。側板の保存状況は悪く，比較的保存のよい蓋板を中心にのべる。蓋板は表裏を丁寧に削った正円形の板で，縁部内面に側板の位置をきめた円形の刻線や側板の押圧痕，側板をとじつけた孔がある。側板の装着状況によって2種類にわかれる。

曲物の蓋

蓋A(47)は上面を甲高に削り，下面の周縁に幅1.3cmの切欠きをいれ，一段薄くして側板をはめる。とじは等間隔の4個所でおこない，各個所に1対の孔を穿つ。2孔のうち1孔は薄い外縁にあけ，他孔を厚い内縁にあけて樺皮を通して側板を固定する。内縁のとじ孔に接して外面から木釘を斜めに打込み側板を補強するが，それは側板の内面から外面に貫通している。なお，周縁の切欠きをおこなう際に目安にした円形の刻線がみとめられる。側板の幅は3.1cmであるが，縫い合せ部分が欠失している。内径16.8cm，器高3.8cm。

蓋B(48～51)は蓋板の周縁に側板装着の切欠きをおこなわないもの。2孔を1対とするとじ孔は，一蓋に4～6個所みとめられる。蓋板の内径(とじ孔位置での直径)によって3種類にわかれる。蓋BⅠは直径32.0～30.0cmで曲物容器Ⅰの蓋と思われる。蓋BⅣは直径17.5～15.5cmで，曲物容器Ⅳの蓋。蓋BⅤは直径15.0～13.0cmで曲物容器Ⅴの蓋。出土量では底板に比して蓋板の出土例が少なく，蓋がつかない曲物容器が多数存在したことが推測される。ただ，

* 曲物のすべてが必ずしも食器に用いられたとは限らない。しかしながら，遺物から使用を限定できない現状であるから，便宜的に食器としてあつかうことにした。

曲物容器Ⅱ・Ⅲに相当する蓋は出土していないが，それらに全く蓋がつかないとはいえない。また蓋の木取りは柾目と板目とが折半しており，いずれを主に用いたか判定できない。

3　折敷（52～55）　方形あるいは長方形の底板に，隅を折曲げた薄板を側板としてとじつけたもの。いずれも底板の小片で，側板の確認できるものはない。底板と側板との接合は，曲物蓋と同じように，2孔を1対としてとじ孔を底板にあけて樺皮でとじる。54は両端をとどめるもので，折敷の一辺が20.2cmであったことがわかる。

はし　4　箸（56～75）　木片を小割りにし，棒状に削ったもの。削りは粗雑で，本と末の区別はない。出土例は多いが，完形を保つものは少なく，仮りに20点をえらんで寸法を計測するならば，直径0.5cm前後，長さ26.5～17.0cmとなる。

紡織具(PL.85)　織りと編みに関係するものとして，糸巻と木針がある。

1　糸巻（76）　糸巻は数本の枠木とそれを固定する横木，さらに横木の中心に挿入する軸棒からなる。このうち枠木の1本が出土している。枠木は不整楕円形の断面を呈し，外面はほぼ直線に削り，内面は横木をうける上下の納穴部分を突出させ，その間と両端を弧状に削っている。長さ25.3cm，最大幅1.1cm，最大厚1.3cm，納穴間14.1cm，納穴直径0.6cm，同深さ0.7cm。

2　木針（77）　木片を粗く削って仕上げた木針。先端を欠く。頭部には針の耳をあけずに側面から切欠きをいれている。全体に反りがみられる。篦編みなど藁仕事に用いたものであろうか。現状の長さ12.8cm，最大径0.7cm。ヒノキ材。

工　具(PL.85)　工具としては刀子と錐とがあるが，いずれも柄のみである。

1　刀子柄（78・79）　柾目の板材を入念に削って仕上げた柄。刀身は残存しない。78は背を直線に削るが，内側では柄のなかほどから柄尻にかけて斜めに削りおとして幅を狭める。柄元の木口に茎孔がある。長さ10.1cm，最大幅1.5cm，厚さ1.0cm，茎孔長1.0cm，同幅0.3cm，同深さ5.7cm。79は著しく腐蝕している。柄のなかほどで背の方向へ「く」字形に屈曲する。現状の長さ16.4cm，幅1.8cm，厚さ1.4cm，茎孔長8.0cm，同幅0.4cm，同深さ7.5cm。

2　錐柄（80・81）　80は柾目材を粗く削った丸棒に加工し，柄元を納風に一段細くして突出させる。柄元の突出は口金をつけるためのものか。茎孔はなく未成品。長さ22.4cm，直径1.4cm。81は小板を棒状に加工したもので，柄尻の部分をとどめる。

その他の木製品(PL.85)　上記の木製品のほかに雑多な木製品がある。

1　杵（82）　杵の断片とかんがえられるもの。原材は直径8cm前後の心持ち丸太材。一端を削って半球状につくるが，この部分は著しく磨滅している。他端は2次的に円錐形に削り込んで切断している。現存長37.9cm，長径8.0cm，短径7.0cm。

たも　2　攩網（83）　2股に分枝する小枝を利用したもの。柄部と輪状の網枠からなる。全体に樹皮を去った程度の簡単なつくり，柄部は長さ35.8cm，直径1.5cm前後で，枝の彎曲をとどめる。柄の上面に約0.7cm間隔で刻み目をいれるのは，すべり止めか。網枠部分は柄から2方向に分枝する小枝をたわめて，先端をくくり合せたもののようであるが，欠失部分が多く不明。

3　刷毛柄（84）　扁平な細板の一端に割り目をいれ，刷毛を植えたもの。柄は若干彎曲するが，丁寧な削り整形を加える。柄尻の下部は幅，厚さともに次第に減じ，匙先状につくる。刷毛は欠落している。刷毛を植える割り目の深さは5.2cm。刷毛の厚さは0.2cm程であったことが割り目の開き状況からわかる。また柄元には刷毛をとめた巻糸がある。糸は2本をより合せ

たもので，先端から1.1cmの間を巻き，上に漆をかける。長さ19.3cm，幅1.6cm，厚さ0.8cm。

4　木札（85～91）　短冊状の薄板材を削り加工したもの。端部の加工から3種類に分類できる。Aは木簡032形式にあたるもの，Bは木簡051形式にあたるも，Cは木簡033形式にあたるものである。Aに属する87には抉り部分の下方に楕円形の穿孔がみとめられる。いずれも墨書はないが，本来は付札などに用いたものであろう。

5　琴柱形木製品（92）　柾目の小板片を横木にとって琴柱形に加工したもの。弦をあてる溝を刻む上辺中央部を残し，両角を斜めに裁ち落す。左右の端辺は少しく内側に削り込む。下辺は直線に削り，中央に台形の抉りをいれる。実用の琴柱に比して小型で，かつ粗製であることから，実用品でなく一種の形代である可能性もある。*　高さ2.4cm，幅4.3cm，厚さ0.7cm。　**ことじ**

6　部材（93～98）　93は長方形の板の両端を円形に削り，中央部の両側から弧状に削り込む。幅広の両端の中央には穿孔がある。部品としては完形であるが，用途不明。把手の可能性もある。長さ10.0cm，最大幅3.0cm，中央幅1.6cm，厚さ0.9cm，孔長径0.8cm。

94・95は木釘をとどめる部材片。94は断面楕円形の棒の両端を削りすぼめたもので，一端に木釘が残存する。木釘を打つ前に上端から切り込みを入れ，木釘穴とし，そこに木釘を打ち込んでいる。長さ9.1cm，幅1.8cm，厚さ1.7cm，木釘現存長1.4cm，直径0.3cm，板目材である。95は角棒をさらに削り加工したもので，一個所に木釘が残る。一端は切断面をとどめるが他端は折れている。現存長10.7cm，幅1.4cm，厚さ0.9cm，木釘現存長1.4cm，直径0.3cm。

96～98は円孔を有する部材。96は断面長楕円形の材に直径2.7cmの円孔を穿ったもの，一端を失う。穿孔および表面の仕上げには丁寧な削りを施す。現存長11.3cm，端部長径2.8cm。97と98は同一材とかんがえられるもので，方形の断面を持つ棒状品のなかほどに円孔を穿ったもの。両者ともに円孔の部分で折れている。97は現存長7.5cm，98は現存長6.5cm。ともに幅は2.1cm，厚さは1.5cm。

7　楔（99～102）　いずれも粗い削り面をとどめる長方形板材の一端を両面から削って斧頭状に加工したもの。頭頂部や先端部に顕著な使用痕はない。断面形が長方形のもの(99・100)と正方形に近いもの(101・102)とに区別できる。　**くさび**

8　小穿孔のある板材（103～106）　103は表面を削って整形した板材の3個所に各一対の穿孔がみられるもの。両側は割っている。木口方向の一端は弧状に切り落し，他端は直線に切断し，若干の面取りがある。現存長13.0cm，幅4.1cm，厚さ0.5cm。104は扁平な板材の下寄りに2個の穿孔がある。一端を失うがその他の面はすべて削りの整形を施している。現存長12.5cm，幅2.0cm，厚さ0.5cm，孔間1.3cm。105は板材の両端をやや尖らし気味に削り，一端の近くに一孔を穿ったもの。長さ15.6cm，幅2.2cm，厚さ0.5cm，孔径0.5cm。106は板材の周囲を削って隅丸方形に作り，中央部に粗い円孔を穿ったもの。木口方向の切断面は切り放ちのままで，整形していない。長さ8.1cm，現存幅5.5cm，厚さ0.6cm，孔径0.5cm。

9　有孔円板（107～112）　円板形にかたどり，中央に円孔を穿つ。穿孔のある曲物容器の底板と類似するが，比較的小型であり，周側縁に木釘痕跡がない点がことなる。甕など煮沸用の土器におとしこんで蒸籠の蓋に相当する役を果すのであろうか。とくに直径の大きい107・112では周側縁が著しく傾斜している。直径15.2～7.7cm。　**孔をあけた円板**

＊　沖の島5号遺跡からは銅板の琴柱形が出土している（宗像大社復興期成会『沖ノ島Ⅰ　宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和44年度調査概報』1970）。

10　円板形木製品（113～120）　厚手の円板である。丸棒の材を鋸で輪切りにしたものと板材を円形に削ったものがある。前者は切屑である可能性もあるが，一応この項にいれる。

11　棒状木製品（121～147）　両端あるいは一端を加工したもの。これらは断面形によって4つに分類できる。Aは断面が扁平な長方形のもの，Bはほぼ方形に近いもの，Cは断面が円いもの，Dは断面が台形を呈するものである。先端を削って尖らしたものも(144・146・147)ふくむ。

12　側辺に加工のある板材（148～154）　板材の側辺に数個所の切り込みを入れたり，削り込みを施したもの。148は一端及び片側面を失うが先端を尖らし2個所以上に抉りを入れる。149は平面平行四辺形の板材の一側辺に抉りを入れ，他側辺には内彎する削り込みを施したもの。150は149と類似し，一端は一方から，他端を両辺から削りおとした板材に抉りをいれる。中央に若干重複した2つの穿孔がある。151は板材の一端を削り出刃庖丁形に作り出す。152は板材を刀子状に削り出す。153は板材の一端を錐状に尖らし，他端近くに穿孔がある。154は板材の側辺に対称的な抉りを入れるもの。一端を失うが，現状で2対の抉りをとどめている。

13　その他不明品（155～159）　155は小枝を利用した丸棒の先端近くに基端部からは直に，先端からはゆるやかに削り込んで段を作り出したもの。全体に丁寧な削り整形を施す。現存長15.1cm，直径2.0cmである。156は彎曲した細棒の端部を瘤状に削り出し，さらに先端を鋭く尖らしたもの。他端は斜めに削りおとす。全面に丁寧な削り整形を加える。長さ36.5cm，基部直径0.8cm，先端部直径1.5cm。157は角棒の一端を片側から削り込んで厚味を減じ，刃部をつくりだす刀子状のもの。長さ16.8cm，刃部幅0.9cm，同厚さ0.3cm，柄部幅1.0cm，同厚さ0.8cm。158は扁平な板材から作り，下半は板状のままであるが，上半は両側辺から大きく内彎して削り込み，丸棒状につくる。先端部は焼けて欠損する。現存長20.0cm，下部3.4cm，同厚さ0.25cm，上部径0.7cm。159は柾目の板材からつくり，上部は板状にとどめ，下部は削り込んで丸棒状につくり出すもの。全体に腐蝕が著しく，下端部を欠く。現存長13.4cm，上部の長さ3.3cm，同幅1.2cm，同厚さ0.5cm，下部径0.5cm。

B　SE495等出土木製品（PL.83・84，別表7）

井戸の木器　SE495井戸からは，削掛けと曲物容器が出土した。このほかに，平塚1号墳北濠の整地層からも若干の木製品が出土している。

1　削掛け（161・162）　削掛けCの形態をとる。しかし，この2例では1個所での切込みが2回加えられている。長さ15.3～15.7cm，幅2.0cm，厚さ0.2cm。

2　曲物容器（163～165）　164は側板をとどめる完形品。柾目板の底板に，樺皮で縫った側板を木釘で固定する。縫い方は，縦に2.7cmの間隔をおいて2個所に縫い目をいれる。側板の上下端には樺皮幅の浅い切欠きをいれ，中間2個所の縫い目は1目である。樺皮幅は0.4cmで上方から縫い始め，一旦下まで縫ってから再び上へもどり下段の縫い目に差し込んで終る。木釘は3個所で打込むが，孔はない。外径17.1cm，高さ6.8cm，側板の厚さ0.3cm，曲物容器Ⅳに属する。163・165は平塚1号墳濠の整地層から検出した底板で，曲物容器Ⅲ・Ⅳに属する。

3　部材（168）　角材の一端に出枘を作り，2次的に他端を斜めに削って幅を狭めた部材。出枘と平行する方向に穿孔の痕跡がある。長さ9.5cm，幅5.7cm，平塚1号墳北濠整地層出土。

C　SD650出土木製品（PL.86～98，別表7）

SD650から出土した木製品は，総数1000余点。6AFB区の調査で出土した木製品の約85%がこの溝からの出土品である。それらのうち，用途が明らかにできるものを中心に，代表的な木製品877点について説明をおこなう。SD650Aの堆積土から出土しており，とくに明記しないもの以外はすべてSD650Aに属する。

祭祀具(PL.86～88)　祭祀に関するものとしては，人形，削掛け，各種の形代類などがある。

1　人形（1～13）　側辺に切込みを加えて人形にしたもの。1～3は頭，手，足をあらわすが，ひとがた墨描きはない。4は顔面を墨で描き，手は削出していないようである。5は2次的な転用をうけ，墨描きの鼻のみをのこす。6は顔面の各部を墨描きし，腹部に「人」の墨書。8は顔面を墨描き，左胸に墨点がある。9は顔面を丁寧に墨描きし，顎から胸にかけて1本の墨線がのびる。髭か，「人」字か不明。10は大型品で頭から胸にかけての部分をとどめる。頭髪・顔面・耳・顎を墨描きする。11も大型品の頭部の破片で，頭髪・髻・顔面・顎を墨描き。頭頂部に3本の突起があり，内に3本の墨線。頭髪は裏面におよぶ。13は大型の人形とみられるが，墨痕はない。

2　大型人形（877）　大型人形とみられる破片がある(fig.13)。頭部と脚部の破片であるが，同一の個体であり，いずれも近接して出土した。頭部は側辺から抉りを入れて頸をあらわし，片面に墨痕をとどめる。他側辺は欠損。脚部は腰部から足先までをとどめる。一側辺は直線に削り，足首の部分に抉りをいれる。他側辺は眼・膝・足先などをあらわし，削りかたに変化を加える。腰部に墨痕をのこす。それら以外にも同一材とおもわれる破片があり，いずれにも墨痕をとどめる。全形を推定すれば，長さ60cm，幅 8cm前後の大型の人形となり，現在までに平城京で発見されたもののうち最大のもの(fig.15)。

3　削掛け（15～106）　頭部を主頭にし，下部を剣先状につくる削掛けは比較的多く出土しており，4種類に区分できる。

削掛けB（15～58）主頭下部の両側辺から切込みをいれるB_1と主頭両端の上面から切込みをいれたB_2にわかれる。削掛けB_1（15～19)では1個所での切込みは1回から5～6回加えたものがある。16・18は5～6回，切込みを加え，表裏面を削り整形している。17は一部を欠くが，全長23.2cmがわかり，表裏には割り裂き面をとどめる。18は後に両側辺を削りおとし短く変形している。削掛けB_2（21～58）は1個所での切込み数が1～5・6回と差があり，最も例の多いものは3～4回である。表裏面を削るものや片面のみを削るものがある。両面ともに割り裂きの状態で放置するものは少ない。21～24は長さの判明するもので，20cm前後の全長をはかる。25は中位に一孔を穿つ。31は下方に少し幅を広くするもので，一部に焼け焦がみられる。42はこの種類のなかでもっとも

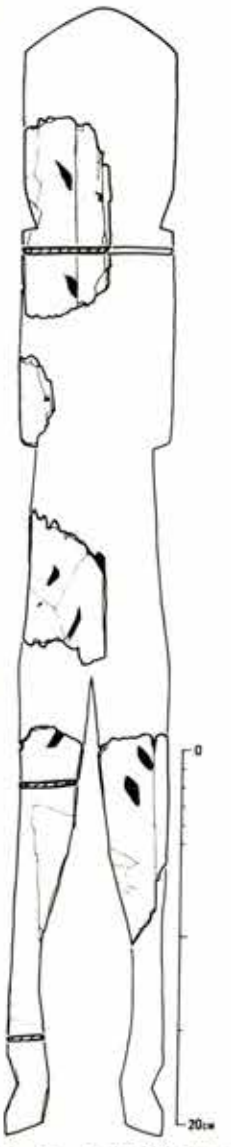


fig.15　大型人形復原図

幅の広い例で，3.0cmをはかる。下端を欠損するが，切込みが大きく，人形の可能性もある。47は頭頂部を平坦に削っている。20は左右両側辺の切込み位置に差違があり，削掛けB_1・B_2のいずれとも決しがたいものである。

削掛けD（59～70） 両側辺から各4個所以上の切込みをおこなうもの。1個所での切込み数は多く4～5回おこなっている。全形をとどめるものは1点。他は破片である。60では全長は32.5cmをはかり，切込みは8個所。65は先端部を欠くが，切込みは8個所であり，両側辺に各4個所の切込みを施すのが一般的であることがわかる。

削掛けE（71～90） 全体に細長く，両側辺の対称配置に数個のV字形の切欠きを施したもの。74は全形をとどめる例で，長さ24.8cm。両側辺に加えられたV字の切欠きは7対をかぞえ，切欠きの間隔が他のものに比して広い。この切欠き間隔は一定しないが2cm前後のものが最も多い。79は8対の切欠きをとどめるが，削掛けB_1と同様の切込みが施されていた可能性もある特異なもの。72・79・89・90は8対の切欠きをとどめて最も切欠き数の多いもの。これらは切欠き間隔が狭い。72ではわずかに0.6cmの間隔しかない。84は頭部を丸く削る。91～106は頭部を失う削掛けの断片である。これらは幅や厚さなど寸法や加工状況からみて，削掛けの断片と判断してさしつかえないものである。

物忌札　4　物忌札（107・108） 短冊形の薄板の頭部を圭頭状につくり，表面を丁寧に削って上端付近に「物忌」と墨書する（PL.44）。裏面は加工せず割裂き面をとどめる。下半は欠失している。長さ14.1cm，幅3.4cm，厚さ0.7cm板目材。108も107と同じ形態をとる木片であるが，墨書はない。長さ14.2cm，幅1.3cm，厚さ0.3cm。

形代　5　刀子形（109～115） 短冊形の薄板を削って，刀子の形に似せたもの。109～111は刀身の背部を直線に削り，刃と切先をつける。112・113は切先部分を圭頭状に削りおとす。114・115は刀身部を薄く削り，刀身と柄部とをわける。刀身には刃をつけていない。114の刃部には墨痕があるが，本来のものか否かは不明。

6　刀形（116～118） 扁平な板材を加工して刀の形に似せる。116は先端を斜めに削りおとして切先とするが，刀身を削って刃をつけていない。柄と刀身との間を削りのこして鍔をあらわす。柄は側辺を若干内彎させて削り，柄尻は撥形に近い。全長36.4cm，厚さ0.6cm，刀身の長さ22.4cmである。板目板。117は柄部を直線に削り，柄尻を若干尖らす。柄から刀身への移行は一側辺を内彎気味に削り込むが，鍔などはつくらない。先端を斜めに削って切先とし，刃ははっきりと削り出さない。全長25.6cm，柄長13.1cm，刀身幅1.5cm，柄幅1.8cm，厚さ0.8cm，板目板。118は柄を装着しない刀身の半分をとどめる。刀身より幅の狭い茎を削り出し先端を若干尖らす。茎と刀身の境には明瞭な関を作る。刀身の背は若干稜をとおす程度に削るが，刃部には鋭い稜をつけている。現存長28.8cm，柄長11.0cm，刀身幅3.2cm，厚さ0.5cm。柾目材。類例は平城宮内からも発見されている。

7　鎌形（119） 鎌の柄を模倣したもの。細い角棒を加工する。柄身・柄元とも若干内彎気味に削り，く字形に近い形態をとる。柄尻は山形に削りのこす。柄元は両面から平滑に削り，先端を切先状にし，木口面から刃をうける縦の割り目をいれる。割り目は先端から5.3cmまで下がり，柄に対して約108°の傾斜角をつけて刃を装着したようである。鎌の刃はなく，それを固定する目釘孔も略されているが，薄板の木製刃先を挿入したかもしれない。長さ11.8cm，最

大幅1.3cm，厚さ1.1cm。

8 矢形（120） 矢を模したもので，矢羽部分の残片である。矢柄の先端と矢筈の部分はいま欠失している。長さ11.6cm，厚さ0.5cm。

9 鳥足形（121） 板材を加工して鳥の足をあらわしたもの。上端を長方形に削りのこし，以下を丸棒状に削って足をつくる。足の中央に2本の沈線をめぐらし関節をあらわす。爪は大きく外反して削り出す。前爪は2度内轉して削り，蹴爪は大きく削り出し，ともに先端を尖らして爪をあらわす。全体の厚味は一定するが側辺の加工は変化に富み，よく鳥足を表現している。上方の突起は，胴部に継ぐためであろう。全長15.3cm，最大幅2.3cm，厚さ0.6cm。

10 火焔宝珠形木製品（122） 板を火焔宝珠形に加工したもの。下端では三枚の蓮弁をあらわし，その上に球形の宝珠とその周囲に立ち上る火焔を刻む。蓮弁と宝珠とは墨の輪廓であらわし，火焔部分は赤色の顔料で塗彩する。中央蓮弁の下端に小さな枘を削り出し，宝珠の中央部分に1対の小孔を穿つ。おそらく何物かに装着したもので，中央の小孔もそのためのものであろう。長さ14.cm，幅11.0cm，厚さ0.5cm。 仏具

11 車輪形木製品（123） 板片を車輪形につくる。円板の中心に軸受孔を穿ち，輪と幅は粗い墨描きで表現する。幅は8本あり中心から輪に向って放射状に描く。つくりは122と類似しており，ともに仏具とみられる。直径7.5cm前後，厚さ0.7cm。板目材。

服飾具（PL.92） 服飾関係のものとしては桧扇，櫛などがある。

1 桧 扇（124～128） ヒノキの糸柾目の割板を薄く削って仕上げる桧扇。いずれも断片で，完形品はない。124は要（かなめあな）孔をとどめる下半部の断片。厚手のつくりであることから，親骨に相当するもののようである。長さ15.9cm，最大幅2.6cm，厚さ0.25cm。125も要孔をとどめる下半部分の断片。側辺には抉りやくり込みはない。長さ16.7cm，最大幅2.2cm，厚さ0.1cm。126～128は小型桧扇の断片。3枚が一まとまりになって出土したもので，要孔をとどめる。長さ8.8cm，最大幅1.4cm，厚さ0.1cm。桧扇のうち墨書のある破片はすでにのべた。 桧 扇

2 櫛（129～143） 細い歯を両面から交互にひきだし，表面を平滑に研いだ横櫛。いずれも破片である。平面形は長方形を呈し，背が彎曲するものはない。ただ，肩部をまるくつくるもの（132・136・139）と直角にするもの（130・138・142）という差はある。3cmあたりの歯数は29本から34本まであり，32本のものがもっとも多い。これはさきに『平城宮報告Ⅳ』で報告した6ABO区SE311B，SE272B出土の櫛と同じ傾向を示す。ツゲ板目材。

3 箆形木製品（144） 断面長楕円形の棒の一端を圭頭に削り，他端へ片面から削って薄くして尖らしたもの。圭頭部近くの両側辺に「V」字形の抉りを入れる。長さ18.1cm，最大幅1.2cm，頭部幅1.0cm，厚さ0.5cm。板目材，（PL.92）。

食膳具（PL.89～93） 食器関係の遺物としては，曲物・折敷・杓子・箸などがある。

1 曲物容器（145～324） 作り方は基本的にSD485出土のものとかわらない。また側板の保存状況がきわめて悪く，底板のみの出土例が圧倒的多数を占めている。底板の直径から8種類に区別できる。曲物容器Ⅰは直径26.0cm以上，曲物容器Ⅱは直径24.cm前後，曲物容器Ⅲは直径22.0cm前後，曲物容器Ⅳは直径20cm前後，曲物容器Ⅴは直径18cm前後，曲物容器Ⅵは直径16cm前後，曲物容器Ⅶは直径14cm前後，曲物容器Ⅷは直径12cm前後までである。これらのうち，曲物容器Ⅶがもっとも多く，全体の41.4%を占め，これに曲物容器Ⅵをくわえると，直径

13.0～16.9cmの小型容器が全体の68.2%を占めることになる。

曲物の底板　底板の木取りには，柾目と板目がある。曲物容器Ⅰ～Ⅳの大型容器では板目材をもちいる場合が多く，曲物容器Ⅵ～Ⅷの小型容器では柾目材が多い。曲物容器Ⅴでは柾目と板目が相半ばする。底板はまづ板に円形の刻線をひき，それを基準として周縁を削りおとしているが，この際整形が粗く正円にならないもの(172・174)や，表面に粗い割り面をとどめる例(306)がある。底板のなかには補修の痕跡をとどめるものがある。たとえば，167は完形の底板に14個所の木釘ないしは木釘穴をとどめる。うち，木釘を残さない孔が5個所，木釘の先端のみをとどめる穴が6個所，木釘の頭部をとどめるものが3個所あり，製品完成後に2回の補修をうけていることが想定できる。目かくしの木釘をいれて2つに破れた底板を継ぐ例や底板に孔を穿つものがある。底板に穿孔するものには中心部に1孔を配するもの(197・267)や，周縁部にも数孔を穿つもの(205・243・264・321)がある。なかには孔が貫通していないものや，一度穿つた孔を埋木でふさぐ例もある(180)。それらの多くは製品完成後の2次的な加工であり，使途にしたがって随時加工したものであろう。このような穿孔のある底板に対しては，さきに想定した甑としての使用だけでは解決できない問題である。

のちにのべる完形品の諸例をのぞくと，側板は底板と分離して発見されている。154・177・183・236・273・277・285・286・291・298・320・324は側板の比較的原形をとどめる例である。その直径は13.5cm前後から25cmをはかり，曲物容器Ⅱ～Ⅵに分類される底板に見合う。側板の幅，つまり器高については，6cm前後から20cmのものまであるが，7cm前後のものと11cm前後のものとに区分できる。これらの中には内面全体に木目方向と直交あるいは斜めに刻線を入れたもの(154・177・236・286・291・320・236)や，とじ合せ部分にのみ刻線を施したもの(277・285・298・320)などがある。277には「平」字の線刻をとどめる。側板に方孔を穿つたもの(236・291)は杓として用いられたことがわかる。底板に接する部分にまわす箍は3点(325～327)ある。

完形の曲物　盆形曲物*　323は直径10.8cmの底板に高さ2.1cmの側板を3個所で固定した浅い盆。側板内面に刻み目はなく，縫いは2段である。171は直径19.5cmの底板に高さ5.4cmの側板をつける。下端に幅1.1cmの箍を巻き，7方向から木釘を打ち込む。側板の内面に刻線はなく，縫いは3段くぐり2列の樺皮縫いである。底板の表裏には無規則の切り目が多数刻みこまれている。底板内面に，直径約18cmの押圧痕跡があり，一回り小さな曲物容器を重ねたもののようである。

杓形曲物　297は直径13.4cmの底板に，高さ8.5cmの側板をつける。下端に幅1.5cmの箍を巻き，4方向から木釘を打込んで固定する。側板の内面に粗い刻線があり，側板の上寄りの1個所に方形の孔を穿つ。柄を挿入する孔である。側板の樺皮縫いは不明であるが，箍では上端部を少しく切りおとして2段で縫いつけ，さらに横へ1段引きだして縫い終る。236は底板をとどめないが，やや大型の杓である。直径15.3cm，高さ11.6cm。側板の対応位置に柄の孔を穿ち，内面には縦方向の刻線がある。縫いは6回くぐり1列で，箍をつけていない。

桶形曲物　252は直径14.8cm前後の不整形の底板に高さ13.8cmの側板をつける。下端に幅2.3cmの箍を巻く。側板の樺皮縫いは9段くぐり一列，箍は3段1列2回じめである。側板の

* 奈良時代の曲物蓋はすべて側板を蓋板に樺皮とじとし，いまのところ木釘でとめるものはない。このことから一応蓋とは別物としてあつかう。ただ現代の民俗例では蓋の木釘どめは多くあり，この種の蓋とするなれば，古い例となる。

内面全体に縦の刻線をいれ，部分的に斜刻線をいれる。側板上部の対称位置に幅広の樺皮が装着されているのは，一種の把手か。なお，器の内面には黒色の有機物の沈着がみられる。180は直径17.3cmの底板に，高さ15.4cmの側板をつけ，5方向から木釘を打込む。箍はない。側板の重複する部分の2個所で樺皮縫いをおこない，それぞれ7段くぐり1列と8段くぐり1列である。ただこの場合，各列は1回ではなく，2回にわけて縫っている。

曲物の蓋

2 曲物蓋（328～352） 曲物蓋の場合も蓋板と側板とが分離している。円形の蓋板には，縁端部からやや内寄りの円周上に円形刻線や側板の押圧痕，側板のとじ孔があり，曲物蓋Bに属する。蓋板の内径によって，7種類にわかれる。曲物蓋BⅠは直径26cm以上の大型品。曲物蓋BⅣは直径20.5cm前後，曲物蓋BⅤは径18.5cm前後，曲物蓋BⅥは直径16.5cm前後，曲物蓋BⅦは直径14.5cm，曲物蓋BⅧは直径12cm前後までの小型品である。木取りは板目と柾目が折半するが，小型の蓋板には柾目材を主として用いる。蓋板は底板に比して出土例が少なく，多くの曲物容器には蓋がなかったことになる。339は曲物蓋BⅦに属するもので，側板をとどめる完形品である。器高は5.4cmと高い。板目材を曲げて側板とする。側板の樺皮とじ部分は一部欠損しているが，復原すれば1列2回くぐり3段とじであろう。蓋板との接合は4個所でおこない，樺をねじって2回まく。335は外面を甲高に作る蓋板である。349は周縁部を外面から大きく，内面からはやや小さく面取りしたもの，とじ孔位置には直径方向に短い刻線がある。この刻線は340・346にもみられる。338の内面は墨塗りである。331は内面の周縁部に幅1.2cmの段をめぐらしているが，現状でとじ孔はみられない。351・352の2点は蓋板の小破片。

折 敷

3 折敷（353～433） 扁平な角板の上に薄いへぎ板を側板としてとじつけたもの。底板の破片がのこり，側板をふくむ完形品はない。底板は平面形で2種類にわかれる。折敷Aは隅丸方形につくる。折敷Bは隅角を削りおとして全体を楕円形に作る。折敷Aに分類したものが34点，折敷Bに分類したものが3点あり，他は隅をうしなっているので分類できない。木取りについては板目材と柾目材を混用するが，前者がやや多い。全形をとどめるものはなく，ようやく復原できる355では，一辺27.6cmの方形を呈する。これは平城宮6ABO区で出土したものと同じである。353～366の14点は辛じて一辺の長さが判明する。一辺の長さは最大41.6cmから，最小15.7cmまで種々の寸法を示すが，最も多いのは28cm～35cm前後である。側板を接合するとじ孔は曲物蓋の場合と同じく，2孔を1対としており，輪郭刻線に添って外側の孔をあける。一辺35cm前後の折敷の場合とじ孔数は木目平行方向の一辺に各2対，それ以上の大型品では各3対のとじ孔を穿っている。364は高さ1.6cmの側板の一部をとどめる。一辺は割れているが，そこに若干の削り整形を加え，さらに2孔の樺皮ととじ孔があり，底板の破損を補修した痕跡とみられる。367は周縁部に側板を立てる「U」字形の溝を削り込んだもの。2次的な加工をうけている。368・369は折敷Bに分類される底板。いずれも小破片で，寸法や形態などの詳細は不明である。418～433は折敷の側板とみられる。すべて破片で一辺の長さすら明確に知りえない。側板の幅は1.8cm前後のものと，3.2cm前後のものが多く，とじ孔はほぼ一辺の長さをとどめるとみられるもので2孔あり，折敷底板のとじ孔数と一致する。木取りについては，柾目材と板目材があるが，後者の方が多い。

4 木盤（434～470） 板材をロクロにかけてつくる円形の盤。器の内面と縁部外面をロクロで挽き，短い縁部を外方に開く。底部内面は，ロクロ目のうえに削りの整形が加わる。底部外面

にはロクロ挽きをおこなわず，削って整形する。また，底部外面にはロクロに装着したときの爪痕をとどめるものがある。ロクロ爪痕の原体は2枚が対応する4枚刃であり，木目方向に平行して装着している。しかし，大小の違いや4枚刃の中心にいま1つの刃をつけるなどの相違があり，刃形の共通するものはない。

434～465はヒノキの柾目板を挽いたものである。それらは直径によって3種類に区分することができる。すなわち，木盤Ⅰは径22.0～20.5cm，木盤Ⅱは直径20.2～18.5cm，木盤Ⅲは直径18.0～16.0cmである。高さは0.9～1.7cmの間にある。435・458は内面に黒色の付着物がある。447の底部外面中央に「工」の焼印がある。450は底部外面に判読できない墨書がある。457の中央には2次的に穿った小孔がある。466～470は広葉樹材でつくる。木盤Ⅰに属するものが多いようであるが，いずれも縁端部が腐蝕している。現存高で最も高いものは1.6cmであり，ヒノキ材の盤より少し深いようである。

ロクロ挽の容器

5　挽物容器（471～478）　盤以外にもロクロ挽きの容器がある。*　それらには保存がわるく，全形をしりえないものもあるが，縦木取りのものと横木取りのものがある。471は心材を縦に木取りしてロクロで挽き出した合子の蓋。頂部外面はわずかに甲高につくる。口縁との境は稜角をなし，直線的な口縁をつくり出す。口縁端部は内側にやや傾斜つけて削る。全面にロクロ挽きをおこない，内面を磨研して仕上げる。直径7.7cm，内径7.1cm，高さ1.5cm。472は外面を円形に削って，内面をロクロでくりぬいたもの。非常に小型のもので器形は不明である。直径2.6cm，高さ0.9cm。473は心材から縦木取りして，全面をロクロで挽き出した皿物。底部の一部をとどめており，台状の突起を挽き出すが，保存が悪くその詳細は不明である。復原直径約12cm，現存高0.9cmである。474はロクロ挽きでつくった椀であろう。口縁の一部をとどめる小破片で直径を復原することはできない。厚手のつくりで現状の高さ7.6cm。475～478はいずれも心材から縦木取りした挽物容器の断片で，器形は桶状を呈する。

6　杓子（479～484）　扁平な板材を加工してつくる杓子。表裏の別はなく，後述する匙形木器に比して大型のもの。身と柄の形状によって3種類に分類できる。杓子A（479・480）は大型で身の先端を半円形にするもの。杓子B（481・482）はやや小型で身の先端を尖らすもの。杓子C（483・484）は形態的にA・Bに分類できないものである。杓子A・Bでは身の両側辺から頸部に移る折曲点は稜角をなし，頸部を撥形に削って柄とし，柄は両側辺から削る。481以外のものでは身の先端がよく摩滅している。483～484では頸部を明瞭につくらず，身の両側面を直線的に削り，しだいに幅を狭めて柄とする。484の柄には面取りがあり，さらに柄端部は拡げて柄尻としている。いずれも飯しゃもじの形態に似るが，用途を限定することはできない。

7　匙形木器（485～499）　長方形の板材から身と柄をつくり出した小型の木製品。匙形木器と仮称したが，箆や篦のような機能もじゅうぶん推定できる。匙形木器は身や柄の形状から4種類に分類できる。匙A（485～491）は薄板の表裏とも均等に削る。身から柄への移行はやや内反り気味に削り，頸部とする。身の先縁は丸味をもつ。匙B（492～494）は身と柄との境が明確でなく，側辺をしだいに削り込んで，柄部とする。表裏で削り方がことなり，一面は平坦につくるが他面は甲高に削っている。身の先縁は剣先状につくる。匙C（495・496）は小型のもので，身と柄の境は両側辺を直角に削り込んで段をつける。表裏とも平坦に削るが身の先縁では片面

* 挽物容器のうち，漆をかけるものについては別項であつかった。ここでとりあげるものは，いずれも漆塗りのない白木のものである。

から強く削りおとしている。身の先縁は半円状を呈する。匙D(497～499)はさらに小型のもので鋤の模型である可能性もある。

8 箸(500～549) 木片を小割りにしたのち，棒状に荒く削ったもの。削りは粗雑で本と末の区別はみられない。出土例は多いが，完型のものは少ない。一応完形品のうち50点をえらぶと直径は0.5cm内外，長さは25.5cm～15.0cmということになる。

紡織具(PL.93) 織り物や編み物の道具として，糸巻，紡錘車，梳の子などがある。

1 糸巻(550～556) 糸巻の部材として横木と枠木が出土している。 いとまき

550～553は横木である。板目の長方形板材を加工したもの。中央に板材短辺幅の切り欠きをいれ，相欠きの仕口をつくる。両端に向けて側辺を削り，先端を丸棒状にする。横木の中央には軸棒を通す円孔を穿つ，この2枚の横木を十文字に組み，上下2段で枠木を支える。4点は大きさをことにしており，1個体をなすものではない。553は中央に孔がなく，仕口も浅く糸巻の横木でないかもしれない。*

554～556は枠木である。554・555は断面を半截楕円形につくる。枠木内面の上下2個所に横木を挿入する枘穴があり，枘穴間の内面を内反りに削り込む。枘穴は一孔しか残存しないが枘穴間を復原すると10.3cmとなる。555は現存長9.7cmの小破片である。枘穴が一孔残り，なかに横木の先端が残る。幅1.6cm，厚さ1.0cm。556は断面8角形の棒に上下2孔の枘穴を穿つ。枘穴は方形で1孔には横木の先端が残存する。全長28.1cm，径1.3cm，枘穴間13.4cm。

2 紡錘車(557・558) 円板の中心に一孔を穿ったもの。いずれも板目材でつくる。557は直径4.3cm，厚さ1.3cm，孔径0.3cmをはかる。片面の縁は稜角を削りおとし，断面台形につくる。558は直径4.7cm，厚さ0.6cm，孔径0.5cmをはる破片である。両面とも平坦に削り，面取りなどの加工はない。

3 梳の子(595～563) 短い棒材の中央を削り込んで細め，両端を削り残したもの。広葉樹の枝，あるいは細い幹から作り，部分的に樹皮をとどめている。断面は円形あるいは8～10角の不整多角形を呈する。563は板材の両側にV字形の大きな抉りをいれる。席などを編むときの鍾である。

工 具(PL.94) 工具関係のものとしては，各種工具の柄，物差し，槌などがある。

1 刀子柄(565～568) 柾目材を入念に削ってつくる刀子の柄で，いずれも刀身は残存しない。565は断面楕円形で柄元を削り込んで若干細め，柄尻は一方向から斜めに削りおとす。566は柄の背部を平坦に削り，腹部を楕円形に削り断面が半截円形を呈す。柄尻は一方から強く削って幅を狭める。柄元部分は欠損。567・568は断面楕円形の棒状を呈し，全体にほぼ均等な太さを呈する。567は柄元部には口金を着装したとみられ，幅0.8cm，深さ0.1cm程度のくり込みがある。菱形の茎孔をとどめ，茎を焼き込んで挿入したことがわかる。

2 鎌柄(569・570) いずれも柄元部分を失う。柄端部を山形に突出させ柄尻とする。全面を丁寧に削って，稜を落しているため楕円形の断面を呈す。柄の背部を若干内反り気味に削る。570は鎌の刃先を装着する目釘孔部分で折れ，目釘穴一孔をとどめる。刃の押圧痕が若干認められる。569は現存長12.5cm，柄身幅2.3cm，柄尻幅3.4cm，厚さ2.1cm。570は現存長30.4cm，柄身幅3.0cm，柄尻幅3.9cm，厚さ2.2cm。 かま

* 糸巻きがすべて紡織具に関するものではない。紐などを巻きとっておく場合も，この種の糸巻きが用いられた可能性がある。

3　鑿柄（571・572）　枝あるいは細い幹を利用して作る柄。丸棒の両端を切りおとし木口面を削って整形し，柄元の周囲を少しく削りこむ。571は茎を焼いて柄に挿入した断面方形の痕跡をとどめる。長さ10.1cm，直径4.1cm，茎孔は一辺0.6cmの方形。572の柄元部には口金を着装した痕跡がみられる。茎孔は広がって，楕円形を呈して茎の明確な痕跡はみられない。現存長7.8cm，長径3.5cm，短径2.7cm。

のこぎり　4　鋸柄（573・574）　573は完型の鋸柄である。刃は残存しない。カシの材を削って加工したもの。柄身全体に反りをもち背が内彎している。断面形は柄元で楕円，把部で円形を呈する。柄端部には山形の突起を作り柄尻となし，さらにその上部にも円筒状の突起をつくる。これは手のすべりを前後で止める工夫であろう。柄元の側辺を貫通する幅の広い茎孔があり，これは柄の軸に対し130°傾いている。茎孔の上下には各一孔の目釘穴を穿っている。全長29.8cm，柄元幅2.5cm，厚さ1.9cm，茎孔長7.5cm，同幅0.4cm。623は鋸柄が半分に割れたもの。断面は鋒をおとした長方形を呈する。柄尻には突起をつくるがさほど明瞭でない。茎は柄の主軸と平行に焼き込みで挿入するが，茎孔はひろがって柄尻部までおよぶ。全長16.1cm，柄元幅3.9cm，柄尻幅4.2cm，現存の厚さ1.2cm。

5　物差し（575）　板目材を削って整形し，片面に刻線を入れて物差しとしたもの。一端を失い全体に腐蝕が著しい。目盛を示す刻線は幅，深さとも0.5mm程度で，現在7本残っている。刻線の位置は材の端部から第1線まで3.0cm，同じく第2線まで5.95cm，以下同様に8.9cm，

一寸の長さ　11.8cm，14.7cm，17.75cm，20.65cmとなる。刻線の間隔は平均2.94cmとなり，1寸刻みで7寸分残っていることになる。1寸をさらに細分する目盛りは表現していない。現存長22.4cm，幅2.6cm，厚さ0.8cmである。

6　横槌（576～578）　太い丸棒の半分を削りのこして頭部とし，下半分を細く削って柄にしたもの。576は完型品で頭部には鋭利な刃物で刻まれた細線が多い。とくに中央部は切刻んだ刃痕が多く，対称位置の2辺がすりへって凹面をなす。577は小型の横槌である。加工していない丸太材を利用したもので頭部には樹皮が残存している。

7　木槌（579）　細い幹を頭部に分岐した小枝を柄部に利用する木槌。柄の下半は欠損する。頭部は樹皮を取り，表面を削って仕上げ，木口面を丁寧に削る。柄部は樹皮を取り去る程度で削りの整形は加えない。頭部長4.1cm，直径1.5cm，柄部現存長3.6cm，径0.7cm。

8　臼形木製品（580）　臼の断片かと考えられるもの。心材を加工してつくるが上部外面は樹皮を取り去る程度で削らない。下部は削り込んで直径を小さくする。内面は斜めに削り込んで凹面をなす。円周から復原すれば全体の5分の1程度が残っていることになる。現存長14.2cm，幅4.7cm，現存高22.6cm。復原すれば臼部外径23cm，内径20.5cm，高10.8cm，臼内面の深さ約8cm，台部径18cmとなろう。

調度具（PL.92・94・95）　調度具として完形品はないが，断片から原形を推測できるものがある。

1　箱（581～584）　箱の側板とみられるもの。581は柾目の長方形板材を平坦に削ってつくる。両端中央には側板を組み合わすための出枘があり，出枘には木釘穴を穿つ。枘には4個の釘穴があり，数度の補修をうけていることがわかる。出枘の上下の木口面には各々1個所木釘穴があり側板の組合せ方がわかる。側板下にも底板を固定した釘穴がある。長さ14.7cm，高さ5.8cm，厚さ1.1cm，出枘幅2.7cmである。582～584は1個体をなす箱の側板である。582～583は同形

の側板。短冊形の板目材でつくり，上下の辺を斜めに削るため断面形は平行四辺形を呈している。両端には出枘をつくり，各1孔の釘穴を穿つている。582では釘穴に木釘が残存する。長さは12.6～12.8cm，高さ2.9cm，厚さ0.8cm，枘幅0.7cm，同長1.5cm。584は582・583に組合う側板である。両端には出枘をうける切欠きをいれ，その内側に円孔を穿つ。長さ12.0cm，高さ2.9cm，厚さ0.7cm，枘幅0.7cm，同長1.6cmである。582～584の側板から復原できる箱は，一辺12cm，高2.9cmの桝形となる。底や蓋の有無については不明(PL.94)。

机などの脚

2 几脚（585～589） 机あるいは腰掛けの脚とみられる部材。585～588はいずれも長方形角板材の上端に出枘をつくり出した脚。出枘は主軸方向に対し，約80°の角度をもつ。出枘の頭に割り目があり，楔が打ち込んで本体からの離脱を止めている。585には中央やや上寄りに枘穴がみられる。枘穴は長さ0.95cm，幅1.0cmをはかり，脚相互を連結する横桟を挿入したものであろう。出枘の角度と同様約80°の角度で穿たれている。587は楔を打ち込んだ際の割れが脚の下端まで達している。588は楔が現存しない。589は脚と台の接合部を補強する横材である。長方形角板材を削り加工し，両端近くに方形の枘穴を各一孔穿ったもの。枘穴は脚の出枘にみられたように約80°の角度をもって斜めに穿たれ，枘穴周辺は磨滅している。589の横材に組み合う脚材として588がある。両者の枘穴の寸法は一致しており出枘の長さも横材の上に重ねた台板を貫通するに必要な高さをもつ。こうして復原される机あるいは腰掛けの法量は，長さについては不明だが，幅26cm，高さ24.6cm，台板の厚さ2.5cmとなる(PL.95)。

燈明台

3 燈明台（590） 広葉樹の板目材からロクロ挽きでつくる受皿状の木製品。底部に円孔を穿つ。短く外反する厚手の縁をつくり，外高の縁部から底部に移行するあたりに一本の凹線をめぐらす底部内面に直径7.0cm，深さ0.9cmのくり込みがあり，中心に直径約3cmの穴が貫通している。また縁部には器外面から内面に貫通する小孔が7個所にみられ，もとは棒状のものを差込んだらしく。2個所に残片がある。器の内面は全体に焼け焦げて，とくに中心のくり込み部分については顕著である。直径19.8cm，高3.9cm。以上の形態から長い脚台がつく燈明台が推測できる。ただ現存する木製品を燈明台の杯部にあたるか，軸を支える台部にあたるかが問題になる。しかし焼き焦げの状況や底部内面のくり込み，7個所の小円孔などからみて杯部とかんがえるのが妥当である。底部中央のくり込みが燈明皿を置く際の安定をはかる工夫であり，小円孔が3方向に偏して1方向にみられないことは風よけの紙を貼る軸棒を立るためであろう。中央の円孔は脚軸をうけるため孔である。現存直径19.8cm，高さ3.9cm(PL.92)。

履　物(PL.96・97) 下駄の出土量は多かったが，靴や草履などは存在しなかった。

げ　た

1 下駄（591～672） 広葉樹材や針葉樹材からつくる2枚歯の下駄，大多数は前幅が広く後幅の狭い隅丸長方形を呈する。歯は両側に広がり下端の幅が台幅よりも広い。前後2枚の歯は鑿でくり抜いたり，鋸びきでつくる。鑿で切欠く場合には歯の縦断面形は逆台形を呈し，鋸の場合では長方形の断面となる。さらに丁寧に仕上るものでは鋸の切断面を削って整形したり，歯の四隅を面取りしたものがある。台には前方に1孔，後方に2孔の鼻緒孔を穿つ。孔は錐や鋭利な刃先で穿つのが普通であるが，ほかに焼火箸であけた孔もある。大半の下駄では，台の中心に前壺が配され，左右いずれかに偏して穿つものは少ない。木取りは板目材からつくるものが大多数を占め，少数ではあるが心材や柾目材を用いたものがある。板目材を使用する場合，も木表を台にあてるなどの規則性はみられない。使用痕跡として歯の磨滅や鼻緒ずれ，台上面

の「足ずれ」がある。歯の磨滅はすべての下駄にある。著しいものでは歯を失ない磨滅が台の下面にまで及んでいる。歯の磨滅には平均的に減るものや，片減りの違いがある。鼻緒孔の全体に磨滅がみられ，とくに鼻緒がよくすれる部分の孔縁の磨滅は著しい。約半数の下駄台の上面には，指や踵があたる部分が磨滅している。とくに親指や親指のつけねの部分は窪み，著しい例では約0.4cmの窪みを呈する。下駄のうち，全長を知りうる40点について，その長さから6種類に分類することができる。下駄Ⅰは24cm以上，下駄Ⅱは24未満～21cm，下駄Ⅲは21未満～18cm，下駄Ⅳは18未満～15cm，下駄Ⅴは15cm以下。それらのうち下駄Ⅱ・Ⅲが全体の約65%を占めることとなり，これが当時最も一般的な大きさであったことがわかる。591は下駄Ⅴの代表的な例。後歯は折れるが前歯は原形をとどめ，高さ4.5cm。長さに比して歯が高い。592は隅丸長方形の平面形を呈し，前幅と後幅が等しく他の下駄と形態をことにする。歯は著しく磨滅する。594は平面形が長方形を呈し，台の下面に鎬をつくる。597は前端部を直線に後端部を尖らし，前壺は左に寄せて穿つ。右足用の下駄。歯は極端に片減し，右足で履くと外側が減ることになる。603・604・607は後歯の磨滅が著しく台の下面にまで及ぶ。608の鼻緒孔は焼火箸で穿つ。609は前壺をやや左側に寄せるが，歯の磨滅は左右で平均する。611は木心を歯部に木取りする。木心部の磨滅が少なく歯の下面が3角形を呈する。612は長さに比して幅の広い下駄。614は方形の鼻緒孔を穿つもの。歯は片減りする。615は前壺を斜めに穿って前歯の一部を抉っている。後端部は失う。616は前壺を左側に偏して穿つ。歯は台に対して若干斜めにつくる。618の前壺は左に偏して穿つが，歯の磨滅は左右均等。619は大型の下駄Ⅰ。前壺が右側に寄り，親指のあたりを明瞭にとどめる。624は前歯から台上面に貫通する孔を穿つ。638の歯は四隅を大きく面取りする。舟型を呈し歯は外側に広がらない。鼻緒孔は焼け焦げており，焼火箸で穿孔した可能性がある。

下駄の分類

棒状木製品(PL.98)　加工した木のうち，棒状を呈するものをまとめる。

1　樺まき棒（673～678）　薄板や細棒を樺皮で束ねた断面円形あるいは楕円形の棒状製品。いずれも薄板一枚と断面が半截楕円形や方形などの棒を2～3本あわせて，幅約0.6cmの樺皮を8cm前後の間隔でまきつけて束ねている。

2　穿孔のある棒（679～691）　扁平な棒状品に1個所から数個所の孔を穿つもの。679～685は端部近くに1孔を穿ち，686～690は2孔以上を穿つ。691は1孔を中央付近に穿つ。679は両面を荒く削り，片面に墨書がある。681・682は端部を圭頭に尖らす。686は一側辺から抉るように孔を穿ち，火鑽臼に近い形態である。687は方孔を穿つ。689は3個所に穿孔があり，うち1孔に木釘をとどめる。中ほどから一側辺に削りを加え稜をつくる。690は断面がほぼ正方形に近い角棒。同一面から2孔を穿ち，さらに端部の木口面に木釘が残る。

3　尖頭棒（692～725）　棒の先端を2方向あるいは4方向から削って尖らしたもの。長短・太細・丸角などの差があるが一応先端が尖る棒という類似点だけでここに一括した(PL.92)。

4　端部を広げた棒（726～728）　扁平な棒状品の端部を広く削って柄尻状につくるもの。すべて一端を失っているが，匙形・杓子形製品の柄であった可能性が強い。726・727は断面長方形であり，728は片面の中央をやや高くした甲高の断面をもつ(PL.92)。

5　棒状品（729～775）　端部や側辺に削り以外特利の加工を施さない棒。長短・太細など差があるが一括する。断面形で5種類に分類した。Aは円形(PL.94)，Bは楕円形，Cは長方形，

Dは方形，EはA～Dのいずれにも属さないもの。Eの多くは断面8角形を呈する棒である。なおこのほかに多くの棒状品が出土したが両端を失うものは除外した。

6　その他の棒（776・777）　断面が8角形の棒の3個所に抉りをいれたもの。一端は周囲から削って尖らし他端は丸く削る。抉りは全周にV字形にいれる。のは切断するためであろうか。長さ43cm，直径2.5cm。抉り間隔16cmと13cm。777は全体に削りを加え丸棒につくる。さらに両端へ均等に削り込んで細くするが一端はとくに細い。先端には端滅がみられる。現在長さ42.6cm，最大径2.1cm，先端径0.7cm。

板状木製品（PL.95・98）　加工した材のうち，板状のものをまとめる。

1　小型円板（778～794）　板材の周辺を削って円板につくる。曲物容器底板に類似するが，小型であることや，側縁辺に木釘痕がないことで区別できる。直径5.7cmから13.2cmの大きさであるが，6.5cmから8cmまでのものが多い。780は2分の1をとどめ，片面に渦巻を墨描きする。他にも墨書があるが判読できない。中央に小孔を穿った痕跡がある。781・793は中央に2孔を穿つ。鏡をかたどったものか。794は厚手の円板で片面にロクロの爪痕跡がある。挽物の木屑であろう。

2　有孔木板（795～799）　795～797は長方形板材の四隅近くに各々1孔を穿つ。795は表裏とも丁寧に削って仕上げ，片面に墨書がある。796は片面の中央に鎬をつくる。798は甲高の板材板の一端に4孔を一列に並べる。799は板の中央高くを両端を薄く削り込む。中央に1孔を穿つ。

3　鳥絵のある板（800）　板目板材の断片で，片面に墨で雀ないしは鶴とみられる小さな鳥を描いている。2側辺を失う。表裏面とも削りの整形をおこなう。板は中央を厚く周辺部へは薄く削る。現存長17.2cm，幅2.2cm，厚さ1.0cmである。　**鳥の絵**

4　側辺に加工のある板（801・802）　801は板目板材の一側辺に刻みをいれたもの。板材の全面を削って整形し四隅の角は斜めに削りおとす。一側辺の中央に抉りをいれ，その片側に刻みがみられる。刻みは7.7cmの範囲にあり現状で20個所をかぞえる。長さ31.4cm，幅3.7cm，厚さ0.3cm。802は両端を失う板目板材であるが一側辺に刻みがみられるもの，表裏とも整形を施し墨書がある。刻みは不規則で間隔は一定しないが，現在8.3cmの範囲に12個所みられる。長さ11.7cm，幅2.8cm，厚さ0.4cm。

5　端部を尖らす板（803～820）　均等な厚味をもつ細板の一端あるいは両端を加工して尖らしたもの。用途は明らかでない（PL.92）。

その他の木製品　上記の分類に属さない各種の木製品がある。

1　車輪（821～826）　車輪の部品が6点ある。ナラの板目材からつくるが，破損し完形のものはない。全体に丁寧な加工を施し両面に一定の曲率をもって仕上げる。部品は形態によって3種類に区別できる。部品A（821・822）は一端に出枘をつくり，原形で中央部とみられる位置に方孔がある。現状では方孔の部分で折損する。彎曲する外面はほぼ平坦に削るが，内面は中央に鎬を削り出す。さらに，側面は外面へのりをつけて斜めに削り，断面形は5角形となる。出枘を作り出す木口面も側面と同じく外面へのりをつける。出枘は木口面中央にあって長さ1.2cm，厚さ2.1cm，幅1.0cmである。中央の方孔は幅2.0cm，長さは現状で3.7cmをとどめるがもとの長さは不明。孔の長辺面はほぼまっすぐに削るが，短辺面は外面へ広げて削る。いわゆる蟻枘である。出枘とその周辺部は磨滅が著しい。しかし，それ以外の部分はあまり磨滅していない。821　**車輪**

は現存長13.7cm，厚さ2.3cm，幅は一定せず方孔部分で最大幅5.4cmをはかり，端部へは側面をしだいに削り込み，端部では幅4.7cm。端部から方孔端辺までの長さは9.1cm。822は現存長15.8cm，幅4.8cm，厚さは端部が2.2cm，方孔部分で3.2cm。端部から方孔短辺までの長さは10.6cm。部品B(823~825)は一端に入枘を作り，

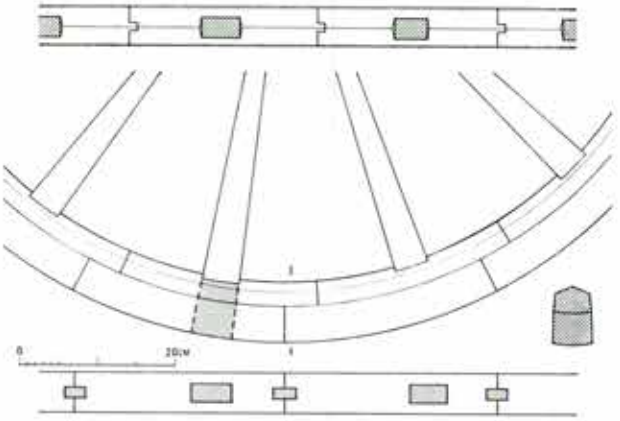


fig.16　車輪推定復原図

原形で中央部と考えられる位置に方孔を穿つ。部品Aと同様に方孔の部品で欠損する。内面は平坦あるいは若干弧状に削り，外面は著しく磨滅する。両側面はのりをつけずに削る。ただ木口面では外面へのりをつけて斜めに創る。入枘は木口面の中央にあって，長さ1.5cm，厚さ2.8cm，幅1.1cm。方孔は幅2.0cm，長さは5.0cm程度である。孔の長辺面はほぼまっすぐに削るが短辺面は外面へ広がり蟻枘をなす。前述したように外面には著しい磨滅がみられ，両側面や入枘の周辺も磨滅する。弯曲する内面に磨滅はない。823は長さ13.7cm，厚さ2.8cm，幅については一定ではなく，方孔の部分で5.5cm，木口端部で5.2cm。木口面から方孔短辺まで8.3cm。824は片側を失う。現存長14.8，現存幅4.2cm，厚さ3.1cm。方孔の位置は木口面から6.8cm。825も片側面及び入枘の周辺を失う。現存長12.2cm，現存幅4.1cm，厚さ4.3cm，方孔の位置は不明であるが，一応7.3cmに推定できる。部品C（826）は破損が著しく詳細な構造が不明である。構造的には部品Bに近い。現存長38.8cm，現存幅3.5cm，現存厚2.5cm残存する側縁面はまっすぐに削る。外面に磨滅があり，片側が著しく減る。現存する中央には長さ5.0cm，現存幅1.8cmの方孔がある。

車輪の復原　以上の部品から復原できる車輪を若干考えてみたい。ただ，部品A・Bの部分と少しく形態を異にする部品Cについては，復原からは除外した。部品A・Bの部品はいずれも同形の方孔と端部に継手仕口をもち，全体に弯曲する。弧状に削るが，外面には著るしい磨耗がある。この特徴から，方孔は幅をうける枘穴とかんがえ，部品Aを内側に部品Bを外側とする2枚重ねの車輪が復原できよう。ただ外輪と内輪の組み方については完形の部品がなく，遺物によって寸法が若干ことなるため詳細は明らかでない。部品A（内輪）と部品B（外輪）が組合うものと仮定して車輪の組み方を推定してみよう。部品A（822）と部品B（823）を方孔部で重ね合わすと，822が端部で4.3cmはみだす。部品Aの全長を26.0cm(部品の中央に長さ約4.8cmの方孔があるものとしての復原値)とすると，はみだす部分は全長の約$\frac{1}{6}$にあたる。また，823の端部から方孔中央までの長さは8.7cmであり，同じく約$\frac{1}{3}$にあたる。さらに，823の全長を一応822と同程度（直径が大きくなるため長さは若干長くなる）とすると，方孔は全長の$\frac{1}{3}$に位置することになる。この場合内輪と外輪が部品長の$\frac{1}{6}$ずつずれて組合う。以上不確定な要素を多く含むがこれを図示すると fig.14 のようになる。車輪の直径は各部品のもつ曲率が不明なので決定できない。しかし，上記の復原部品を14枚組合せて輪にすると直径は約117cmになり，輪幅5.4cm，組合せた輪の厚さ7.5cm，幅の幅5.0cm，幅の厚さ2.0cmの車輪に復原できる(PL.98)。

2 琴柱（827・828） 柾目板材の上辺中央を削り残して頂部となし，両肩を弧状に削って山形 ことじ
につくるもの。827の下辺及び両木口面は腐蝕するが，両肩の稜線は表裏から面取り風に削る。頂部に弦をうける溝はない。幅6.3cm，厚さ0.6cm，高さ2.2cm(PL.88)。828は背が底く裾が広がる。両端に方孔を穿つ。裾部の両木口面は尖頭状に削りおとす。下辺中央には逆V字形の抉込みがある。幅5.9cm，高さ1.4cm，厚さ0.4cm。

3 弓（829） 細い自然木を利用してつくる弓の断片。弓弭の周辺に削りの整形をおこなうが他の部分は樹皮を取り去る程度で整形を加えない。先端は2側面から切込んで断面長方形の弓弭につくる。長さ30.8cm，直径1.9cm，弓弭長1.9cm，幅1.3cm，厚さ1.0cm(PL.95)。

4 火鑽臼（830） 細長い板材の側面に，約3cmの間隔で8個所の切込みをいれた火鑽臼。下 ひきりうす
端部には火鑽臼と無関係な加工痕跡があり，2次的に火鑽臼に転用したことがわかる。臼部は直径1.3cm，深さ0.6cm前後で焼き焦げている。8個所の切込みのうち1孔は未使用である。現存長28.1cm，幅2.5cm，厚さ1.2cm，板目材(PL.95)。

5 木札状木製品（831～845） 831～842は短冊状板材の表面を削り整形し，さらに上部の両側辺に抉りを入れたもの。いずれも形態的には厚手の付札に似る。板目材が多い。柾目材の832・837では頭部を半円形や圭頭状につくる。837には穿孔があり(PL.98)，839の抉りは各辺に3個所と多い(PL.98)。842は全体のつくりが大型である。長さ10.6～12.5cm，幅2.5～6.5cm。843は短冊状板材の頭部を圭頭に作るが側辺に抉りはみられない。長さ22.9cm，幅3.6cm，厚さ0.5cm。844は短冊状板材の両辺を先端にむけて細め，頭部を台形につくる。現存長8.4cm，最大幅3.6cm，厚さ0.5cm。845は前記のものと少しくことなり五角形の頭部と断面方形の軸部からなる。頭部の先端は両側から斜めに削りおとして圭頭に作り，軸部は四方から削り込んで細くしている。軸の大半はすでに折損している。題籤の頭部である可能性がある。現存の長さ6.6cm，頭部長5.4cm，幅3.8cm，厚さ1.3cm，軸部一辺0.6cm(PL.95)。

6 部材（846～860） 846は板目の長方形板材を加工し一端に出枘をつくる脚状のもの。平面形は台形を呈し，出枘の上端は約70°の傾斜角で斜めに切りおとす。長さ6.5cm，最大幅4.2cm，厚さ2.0cm，出枘長さ2.4cm，幅1.5cm，厚さ1.8cm。

847・848は心持ち材を角材に加工し，枘穴を数個所に穿つ。847は枘穴が3個所あり，うち2孔は同一方向に穿つが，1孔はそれと直交方向に穿つ。前2者の枘穴は心心で5.6cm離れ，上方は枘穴のなかほどで段をつけ，穴をわずかに小さくする。現存長13.5cm，一辺4.0cmの角材。848は上端を失うが，下方から3.3cmの位置に枘穴を穿つ角材。枘穴には枘が残存する。

849は長方形板材の一辺中央に半円形の切込みをいれたもので，両端部から2.7cmの位置に各々径0.5cmの木釘をとどめる。現状では木釘をどちら側から打ち込んだかは不明である。長さ23.7cm，幅3.3cm，厚さ0.9cm。

850は長方形板材の一端の隅を斜めに削りおとしたもの。部材片というよりは，切り屑である可能性が強い。長さ21.9cm，幅4.5cm，厚さ3.0cm。

851は2本の扁平な棒を十字に組合せたもの。穿孔のある材は断面楕円形を呈し，一端を失う。先端は二面から削りを加え厚さを減じて尖らす。枘穴は先端から3.6cmの位置にある。現存長11.9cm，幅1.3cm，厚さ0.8cm。孔に挿入する材は，断面が長方形を呈し両端ともに折れる。両者を組合せたのち孔の上下に楔を打ち込んで接合を補強する。現存長5.9cm，幅1.2

cm，厚さ0.3cm。852は板材の周縁に浅い段をめぐらし，そこにいくつかの円孔を穿つ。現存長5.9cm，現存幅2.0cm，厚さ1.4cm。853は角棒の一端を断面円形にしたもの。中央部分に両側面から抉る不整形な孔があり，さらに断面円形の端部木口面に孔を抉った痕跡がある。長さ10.9cm，最大幅2.3cm，最大厚2.2cm。854は角材の一端に枘を切り，その上方に直交方向の枘穴を穿ったもの。他端は折れ，端部につくる枘穴は若干斜めに穿つ。現存の長さ7.2cm，幅1.7cm，厚さ1.7cm。855は断面長楕円形の棒に枘穴を穿つ。木口面は鋸で切断。枘穴は端部から7.2cmの位置に始まり，現状で3.6cmを残す。枘穴は中央部分が拡がり最大幅1.8cm。この枘穴に直交して枘穴に挿入する出枘を固定する一辺0.8cmの方形孔がある。現存長10.9cm，最大幅3.5cm，最大厚2.8cm(PL.98)。

856は両端に出枘をもつ断面8角形の角棒。現存長12.7cm，直径1.1cm。両端の枘出は，長さ0.6cm，厚さ0.3cm。857は相欠きの仕口をもつ板。材の中央に長2.2cm，深さ0.3cmの仕口をくりぬく。この仕口に円孔を穿ち，両側面を内彎気味に削り，先端をまるくつくり出せば糸巻の横木となろう。長さ11.2cm，幅2.2cm，厚さ0.8cm(PL.95)。

858～860は厚手の板材の一辺に偏して溝状のくり込みを施す。858・859は同一の形態をとり幅8.3cm，厚さ1.8cm。長さは両者とも一端あるいは両端を失い不明。858の溝中央に直径0.3cmの円孔がある(PL.98)。860の平面形は台形を呈し短辺に偏して，幅1.0cm，深さ2.6cmの溝をきる。現存長11.9cm，長幅4.8cm，短幅2.2cm，厚さ3.0cm。

7　木栓（861・862）いずれも断面5角形を呈し，一端に頭部をつくり他端を楔状に尖らしたもの。背はまっすぐに通し，他辺に加工をおこなう。頭部と栓の先端部との境には幅約0.8cmのV字形のくり込みを入れる。861は少しく大きく，長さ12.2cm，幅2.0cm，厚さ1.9cm。862は，長さ8.8cm，幅1.9cm，厚さ1.6cm(PL.98)。

くさび　8　楔形木製品（863～866）長方形板材の一端を表裏から削りおとし，斧頭状に加工したもの。頭頂部や先端部に顕著な使用痕はみられない。863は，長さ12.2cm，幅2.3cm，厚さ1.0cm。864は，長さ11.0cm，幅2.4cm，厚さ0.8cm。865は，現存長16.6cm，幅1.7cm，厚さ1.7cm。866は，長6.0cm，幅2.0cm，厚さ1.2cm。

9　その他木製品(867～876)　867は扁平な板材を左右対称形に加工したもの。板材の両側辺に3個所の抉りをいれる。中央の抉りは大きく上方から内彎気味に削り，下方からは直截する。上部端は円頭形を呈し，側辺に抉りを一つ入れる。下端は両側から斜めに削りおとして尖らす。上部の抉り部分及びその周辺に横引の墨線があり，下端部には刻線がある。* 長さ9.8cm，最大幅1.8cm，最小幅0.7cm，厚さ0.5cm(PL.98)。868は年輪にそって割りとった材の一辺をまっすぐに削り半截楕円形の断面形を呈している。その平坦面に横方向で8本の溝状の切込みをほどこす臼歯状の木製品である。溝の切込みは一端では密にいれるが，他端へはしだいに間隔を広げる。長さ11.3cm，最大幅3.3cm，厚さ2.4cm(PL.88)。

869は柾目板材の側辺に削り加工を施して，穿孔のある元部と大きく彎曲した嘴状の先端部を作り出したもの。元部の中央には長径0.7cmの楕円形孔をいれる。先端部の背面は大きく外彎して端部に至る。腹部は内彎気味に削り，なかほどで切込んで段をつける。段から端部へはまっすぐに削り，端部付近に一孔を穿つ。同様な材2材を重ねて鳥の嘴をあらわしたもので

* 時期的には遡るが，藤原宮から類似のものが出土している。装飾した剣をあらわした形代かもしれない（奈良県教育委員会『藤原宮』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告　第25冊 1969，p.70）。

あろうか。元部の孔で材2枚を固定し，先端部の孔に紐を通して上下に引き，嘴を開閉することによって口の動きを表現したものであろう。全長23.3cm，最大幅5.0cm，厚さ1.0cm(PL.88)。870は薄板の一端を斜めに削りおとし，一側辺に斜めのえぐりを入れたもの。他側辺には2方向から削りを加えており，全体として馬の形をあらわしたともみられる。筆を整えたような1条の墨線があり，「手綱」ないしは「鞍」を表現したものであるかもしれない。一端は欠損している。現存長7.6cm，幅1.9cm，厚さ0.4cm。柾目材(PL.88)。

871は，板材の側辺を削って円板状に仕上げたもの。一側辺は直線に削る。厚さは直線の辺が最も薄く，他辺へはしだいに厚味を増している。表裏とも丁寧に削り整形を施している。木目方向の長さ18.6cm，木目直交方向の幅14.2cm，最大の厚さ1.4cm，最小の厚さ0.8cmである。872は半円形の断面をもつ円板である。全体に腐蝕し，周辺部は焼き焦が著しい。中央には刃物でえぐって穿つ径1.2cmの不整楕円形孔がある。復原直径17.5cm，最大厚1.7cmである。873～876は材の一端近くに切込みを施したもの。873・874は棒材の全周にくり込みを施している(PL.92)。874は焼けて下端を欠損する。875・876は板材の両側辺からV字形の切込みを入れるもの。875には2つの方孔を穿つ。孔一辺の長さ0.4cm，孔間9.2cm。

6 銭　　貨

6AFB区から総数で13種 729枚の銅銭が出土し，うち12種 725枚はSD650から出土した。

SD650は2時期にわたり，SD650A・SD650Bとよぶが，銅銭はこの2期にわたって出土する。しかし大多数はSD650Aから出土した。銭種別にみるとSD650Aには和同開珎から貞観永寶までの9種，SD650Bには和同開珎から延喜通寶までの10種類がある(別表8・9)。 **出土状況**

これら大量の銅銭は各小地区ごとの多寡はあるが，とくに一個所にまとまることはなく調査区のほぼ全般にわたって出土した。また銭種別にみた場合もC・D地区のSD650Bからの寛平大寶63枚と承和昌寶2枚の計65枚が“銭差”にさし貫いた状態で一括出土した場合を除くと，そのほかでは全般に数種の銅銭が混在しており，種類別にまとまってはいない。

SD650出土以外の4枚は，和同開珎3枚と元豊通寶1枚である。和同開珎はSD485の氾濫部分とSE545井戸から出土し，元豊通寶はD地区の床土から出土した。

つぎに出土銭をその発行年次順にあげて説明することとし，記述にあたって便宜上銭文，銭型の大・小などで分類する。ただ分類は規準の多くを従来からの方法に負う。したがって同じ分類に属するものが必らずしも同一の笵型に結びつくものではない。*

和同開珎（PL.99） 総数119枚，うち完形品31枚，外径などの計測に耐える程度のものが33枚余り。過半数が完形もしくはほぼ完形に近い。他の銭種にくらべて全体に腐蝕・錆化が顕著で保存度はよくない。

1 和同開珎A 銭文は全体に角張った文字であり，画線は比較的細字。開は“開”につくるが他の文字は字画の配置などに多少の違いがある。表面が粗雑なものを除くと，いずれも文字の鋳上りがよく鮮明なものが多いという共通性がある。85枚。

* 銭種の判別については，岡 邦祐氏の手を煩わし，数々の有益な教示をえた。

2　和同開珎B　銭文は和同開珎Aにくらべて小字。字体は丸味をもつ。各文字の縦画の末端が細まる。開は"開"につくる。一般に，古和同と称するもの。本例は内郭の穴が小さく「狭穿不隷開笹手」に属する。同・開の字を残す破片が1枚。

3　和同開珎C　文字のつくり，銭形は和同開珎Aに同じだが，珎が他字に比して小さい。「小珎」とよばれているもの。7枚。

4　和同開珎D　銭文は和同開珎Aに類似。背面の内郭縁が幅広で「背広郭」と呼ぶもの。10枚。SD485出土例はこの型式に属し，この種の銭が奈良時代初期のものであることがわかる。

5　和同開珎E　銭文は和同開珎Aと共通するが，背面内郭の外縁の四隅が丸いもの。10枚。

6　和同開珎F　和を内郭寄りに配置し，和の第三画がやや短い。この型では珎が太字であることが多い。背面の内郭縁が広い点で和同開珎Dに似る。「降和」とよばれる。1枚。

萬年通寶（PL.99）　総数32枚。うち完形品21枚。銭型にはあきらかに大・小がある。いずれも和同開珎にくらべて保存がよい。

1　萬年通寶A　普通の銭型である。萬はすべて「𠀋」につくり"𠀋"につくらない。また，通の変化形，とくに甬の各画の配置に変化がある。17枚。

2　萬年通寶B　外縁幅が広いもので「濶縁」とよばれる。銭型は萬年通寶Aよりもやや大きい。2枚出土したが，うち1枚は表裏の型合せが悪く，齟齬を生じており外周の仕上げも粗く不整円型を呈する。

3　萬年通寶C　銭文・銭型は萬年通寶Aに類似するが，背面内郭の外縁四隅がまるい。銭文の細部には多少の相違がある。5枚。

4　萬年通寶D　銭文は萬年通寶Aと同じであるが内郭穴に鏨痕を明瞭に残す。一般の萬年通寶では鑢で仕上げるが，この銭型では鏨でバリを削り取るのみで鑢の仕上げをしていない。なかに鏨の刃幅が観察できるものがある。4枚。

5　萬年通寶E　通のつくりが他の銭型とことなり，甬の「マ」が大きく「用」が小さい。年も字画が他にくらべて直線的である。「狭通萬年」とされているが，通の「甬」は漸移的な変化が認められ，萬年通寶Aに分類したもののなかにも萬年通寶Eに近い通があって截然と区別できない面がある。1枚。

6　萬年通寶F　年の第四画が横位置につく。「横点萬年」とよばれる。銭型はやや小さく，文字も小さい。横点であるとともに通の「辶」の末画の跳ね方もこの型の特徴。2枚。

7　萬年通寶G　年の第四画が横点であるのは萬年通寶Fと同じ。外縁内径がやや小さく，外縁幅が広い。文字はやや肉太。1枚。

神功開寶（PL.99）　総数59枚。うち完形品とほぼ完形品は46枚。

大様神功　1　神功開寶A　銭型は神功開寶のうちもっとも大きい。銭文も銭型に比例して大きく，他と区別される。文字の特徴は功の旁を「刀」につくり，功が大きく横広である。また開は「開」につくる。すべて内郭穴は鏨の打ち放なし。4枚。

2　神功開寶B　銭型は神功開寶Aよりも小さい。功の旁を「力」につくり，「開」につくる。「力功神功」とよばれる。11枚。うち1枚は鋳造の際に型がずれ，文字が重複する。

3　神功開寶C　銭文は功の旁が「刀」になるほかは神功開寶Bと同じ。「力功不力」とよばれる。3枚。

4　神功開寶D　銭型は神功開寶B・Cとほぼ同大。銭文は神功開寶Aに似る。すなわち功の旁は「刀」につくり，開は「開」につくる。功は神功開寶Aと同じように角張り，寶の「貝」が小さい。「側功神功」とされる。なお，内郭の穴が他にくらべて大きい傾向がある。3枚。

5　神功開寶E　銭文は「功」につくることは神功開寶A・C・Dと同じ。開は「開」につくり，寶の「貝」は神功開寶Dよりもさらに小さい。また，功は各辺が丸味をおび第2画が内郭側辺と平行しないことは神功開寶Cに類似し，とくに刀の第2画が長く延びるところから「長刀」とよばれる。出土した神功開寶のうち過半を占め，文字の配置など細部にわたって酷似するものが多く，なかには同笵とかんがえられるものがある。35枚。

6　神功開寶F　銭文，銭型ともに神功開寶Eと同じであるが，外縁幅が広い。したがって文字面がやや小さくなる。3枚。

隆平永寶(PL. 99・100)　総数92枚。完形品と完形に近いものが80枚。上述した和同開珎，萬年通寶，神功開寶の3種には同種の間における銭型の大小差はあまりなく，個体差に含まれるようであるが，隆平永寶では銭型の大小は比較的明瞭で，「大様」と「小様」とに区別され，銭文の大小ないしは太字，細字の変化が加わる。また神功開寶にくらべて縮少，軽量化するが，表裏の型ずれは少ない。内郭の仕上げは丁寧で，鏨痕跡をとどめるものが多い。型式不明2枚。　**大様と小様**

1　隆平永寶A　銭型，文字ともに大きい。各文字の配置はよく均衡を保つ。なかに表裏の型ずれが著しく，笵型の合せかたを観察できるものがある。2枚。

2　隆平永寶B　銭型，文字は隆平永寶Aとおなじく大きい。ただ永と寶が他の2字に比して小字で均衡を欠く。1枚。

3　隆平永寶C　銭型は隆平永寶A・Bに比べて小さく中型。文字はやや細字。平の第1画と4画の間隔が狭く，末画が長い。「長平」とよばれる。2枚。

4　隆平永寶D　銭型は中型。内郭穴がやや広い。平の末画が長いことは隆平永寶Cと同じであるが，文字がさらに小さい。とくに永，寶が小さい。細部にわたる文字のつくりや配置は，隆平永寶Cに酷似する。8枚。

5　隆平永寶E　銭型は中型。銭文の鋳出しが浅く，文字の画線が細く鈍い。「細字」とよばれる。字形のつくりは隆平永寶A・B・C・Dに類似したものを含んでいる。今回出土の隆平永寶Eには，文字の画線外側にそって刃痕のような刻線が顕著にあらわれている。26枚。

6　隆平永寶F　銭型は大型と中型があり，文字は大きい。銭文については隆平永寶Aに近いものと平，寶がやや小さく隆平永寶Bに近いものがある。「平」の第1画と第4画の間隔が広く末画が短い。「短平」とよばれる。3枚。

7　隆平永寶G　銭型は大型と中型。外縁の内径が他よりも小さく，文字も小さい。「中字」とよばれるが，字形から3種にわけられる。すなわち，平が縦長で末画が長く隆平永寶Cに類似するもの。永，寶が他文字より小さく，隆平永寶Bに類似するもの。4文字ともに均衡のとれた隆平永寶Aに似るもの。22枚。

8　隆平永寶H　銭型は小型。銭文は隆平永寶Gよりさらに小さく，外縁は隆平永寶Gと同じように幅広である。「小字」とよばれるが，字形は一定でなく各部分の小異を含む。26枚。

富壽神寶(PL. 100)　総数103枚。うち完形品およびほぼ完形品は96枚。銭型は隆平永寶よりも小型化し，大小の区別がはっきりする。大型は2種，小型は銭文ほかの特徴から4種ある。

1　富壽神寶A　銭型は大きく，隆平永寶Hの大きさに相当する。銭文も大字である。「富」の冠を「宀」につくり，また第三画が省略されて「冨」となる。2枚。

2　富壽神寶B　銭型は富壽神寶Aにくらべて1割弱小さい。富の冠は「宀」となり，第4画が加わり「富」につくる。壽の第2画が長くなって「壽」につくる。細部では変形がいくつかあるが一括する。47枚。

3　富壽神寶C　外径の平均値は富壽神寶Bとほぼ同じであるが，周縁が幅広である。銭文は周縁の幅を広くすることによって文字面が狭くなり，やや小字となる。字形は富壽神寶Bと同じである。13枚。

4　富壽神寶D　銭型は小型。銭文は富壽神寶Bと似ているが富の「田」第4画横線が短く「口」がまえに接していない。「不接堷」とよばれるもの。38枚。

5　富壽神寶E　銭文のつくりは富壽神寶Dと共通するが，周縁が幅広である点がことなっている。「不接堷闊縁」とよばれる。2枚。

6　富壽神寶F　銭型は小型。銭文の大きさは富壽神寶Aと富壽神寶Bとの中間にある。富を「冨」につくり，寶の「貝」がやや小さい点は富壽神寶Aと同じであるが，壽の第2画縦線が長くのびて第9画に接する。「竪貫」，「壽貫」とよばれる。一般に竪貫といわれるものはいずれも富壽神寶Aと変形品とにあり，小型銭にはあまり例がない。1枚。

7　富壽神寶G　上述のいずれにも属さないもの。銭型は大型で銭文も大きく。富・壽・寶の一部をとどめる破損品。富のつくりは富壽神寶Aと同じ。また壽のつくりは富壽神寶Bと同じ。富壽神寶A・Bの特徴をもつが文字の均衡を欠き，銭文の鋳出しは浅い。背面内郭面が凹凸を呈するが，これは他にみられない。1枚。

承和昌寶(PL. 100)　総数75枚。うち完形品とほぼ完形品は40枚。承和昌寶には「大様」とよばれる大型銭と，「小様」という小型銭がある。今回出土したのはすべて小型銭に限られる。

1　承和昌寶A　銭型は小型の富壽神寶の外縁幅をはぶいた程度に縮少する。他銭種ほどの相異がなく一括するが，細部については多少の違いがある。すなわち承の大きいもの，昌が大きいもの，寶が大きいもの，1字のみが他の3字よりも小さいものなどの差異が認められる。

小様承和

長年大寶(PL. 100)　総数92枚。うち完形品およびほぼ完形品は81枚。銭型には大・小2種ある。大型銭は承和昌寶Aとほぼ同大で，小型銭はさらに外縁幅だけ小さい。銭型に対して内郭の穴がとくに大きくみえる。

1　長年大寶A　銭型は大きく承和昌寶の小型銭Aとほぼ同大。銭文はやや大きい。2枚。

2　長年大寶B　銭型はやや小型。銭文もやや小さい。字形は長年大寶Aと大差ないが細部にわたる字型の変化が認められる。長の第5画横線の太・細，おなじく長の末画の長いもの，短いもの，大の横画が太く長いもの，寶が他字にくらべて大きいものなどがある。以上の小異を含めて「小様」としてあつかう。86枚。

3　長年大寶C　銭型は小型，年の幅が狭く，第5画横線が長年大寶Bにくらべて短く第4画とほぼ同じ長さのもの。4枚。

饒益神寶(PL. 100)　総数38枚。うち完形品およびほぼ完形品は34枚。長年大寶にくらべてわずかに小型となる。「小様」といわれる小型銭のみが出土。字画が多いため銭文の鋳出しは不鮮明なものが多く，表裏の笵の合せは長年大寶よりもさらに悪い。

1　饒益神寶A　銭型は小型。銭文には細部で多少の違いがあるが一括する。37枚。

2　饒益神寶B　銭型，銭文ともに饒益神寶Aとよく似るが，神が中心から向かって右側に寄るもの。「左神」とよばれる。1枚。　左神饒益

貞觀永寶(PL. 100)　総数40枚。うち完形品およびほぼ完形品は32枚。銭型は饒益神寶A・Bとほぼ同大。個体差はあるが大・小型にわけるほどの差異はない。銭文の大・小で「大字」,「小字」にわけられる。今回出土のものは「小字」に限られる。なお，銭文の鋳出しが良好なものときわめて悪いものがあり，その差は顕著である。型ずれするものも多い。

1　貞觀永寶A　字形に小異があるが「小字」として一括されるもの。なかに貞の第8，9画が斜外方に強く張り，いわゆる「張足貞」とよばれるものに近いもの。貞の字幅が狭い「狭貞」とよばれるもの。永の第2・3画が長い「長頭永」とよばれるもの。寶が比較的大きいものなどがある。39枚。

2　貞觀永寶B　銭文は「小字」に属する。貞の第8・9画が下方に垂下し，永の幅がせまく「狭永」とよばれるもの。1枚。

寛平大寶(PL. 101)　総数74枚。うち完形品とほぼ完形品は73枚。銭型は貞觀永寶よりもさらに縮少する。貞觀永寶と同じく銭型の大小の差は少なく，直径は比較的よく揃っている。型合せは極度に悪く外縁内郭部分に型ずれを生じている。このため内郭穴の大きさが不揃いで，不整形になるものが多い。銭文の鋳上りは悪く不鮮明なものが多い。字形の変化は多い。

1　寛平大寶A　寛の末画が長く延びて上方に跳ねる。「延尾寛」とよばれる。1枚。

2　寛平大寶B　平の第1画と第4画の間隔が広く，字幅が狭い。「狭平」とよばれる。4枚。

3　寛平大寶C　銭型は寛平大寶A・Bと同大。銭文が大きく内郭穴がやや大きい。「濶大」とよばれる。表裏の型合せは比較的よい。18枚。

4　寛平大寶D　銭文が寛平大寶A・Bにくらべてやや小字である。銭文においてとくに平，大，寛が小さい。5枚。

5　寛平大寶E　銭文が小字であることは寛平大寶Dと同じ。寛の「見」の第4画横線が短く，「見」につくり第一画縦線から左方に出ない。「無爪寛」とよばれる。なかに大，年が比較的筆書の線をよくとどめるものと硬直するものなどがある。46枚。

延喜通寶(PL. 101)　文字面が腐蝕して不鮮明。銭型は「小様」とよばれるものが2枚出土。1枚は赤褐色を呈し，他は灰白色を呈する。後者は鉛の含有量が多いことによる。

開元通寶(PL. 101)　ほぼ完形に近いが周縁部に一部欠損がある。鋳上り，仕上げは良好。寶がやや小さく元の第2画は向って左側が斜上に跳ねる。背面上方に仰月「⌣」の鋳印がある。1枚のみ出土。

元豊通寶(PL. 101)　隷書体で銭型はやや小型。外縁は幅広い。銭文の鋳上りが悪く銭文は不鮮明である。背面は内郭・外縁ともに表面にくらべて広郭・広縁である。全体に鉄錆色を呈し，銅質は悪い。1枚。

そ の 他(PL. 101)　以上のほかに腐蝕が著しく銭文が不鮮明な1枚がある。銭型は富壽神寶小型銭と承和昌寶との中間である。銭文は4文字のうち上方が「富」と読める。下方の文字は「本」とも「大」とも読めるがやや不鮮明，左右の文字は不明である。暗褐色を呈する。内郭，外縁部とも鋳出しは浅い。薄手。

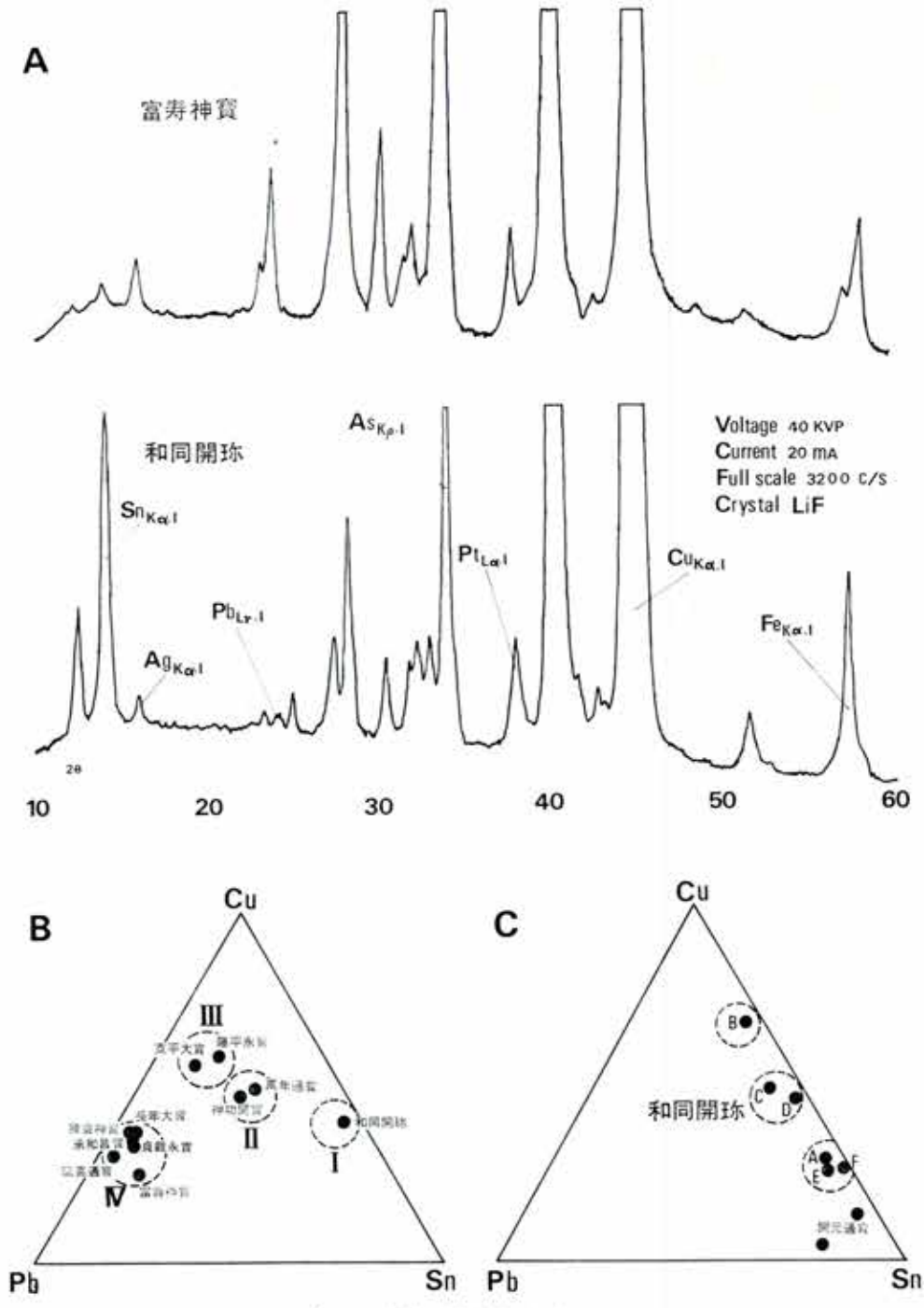


fig.17　銭貨X線分析元素強度比較図

銅銭の螢光X線分析　今回おこなった分析の目的は，皇朝十二銭各種類の材質および形状等の経年的変化を理化学的に確認することであった。

1　分析試料　6AFB区出土銅銭729枚のうち，保存状態の良好なもの126枚を対象とする。分析に際しては，各種銅銭のうち，銭文の分類にしたがって，1～12枚を抽出した。

2　分析方法　試料126枚の表面には，多少の差はあれ一様に錆が付着している。それらは主として塩基性炭酸銅などの銅化合物であるが，なかには地金銅の再析出している部分も認められた。分析方法には螢光X線分析を採用し，銅銭の表面部分のみの分析をおこなった。

装置は理学電機製螢光X線分析装置を利用した。白金対陰極のX線管球を使用，印加電圧：40KV，印加電流：20mA，分光結晶・弗化リチウム（LiF），検出器はシンチレーションカウンター，試料の照射面積は必要に応じて小部分に絞って測定した。なお，X線強度は分析された各元素相互の相対的な割合比を求める程度にとどめたので，定数計数については，分析の対象となった元素の種類に応じてX線のピーク強度を計測しやすいように適宜変化させた（1600～6400カウント）。

比較分析の対象としてとらえた元素は，鉄（Fekα-Ⅰ），銅（Cukβ-Ⅱ），砒素（Askβ-Ⅰ），銀（Agkα-Ⅰ），錫（Snkα-Ⅰ），および鉛（PbLr-Ⅰ）の6種である。そのほか，コバルト（Co），亜鉛（Zn），そしてアンチモン（Sb）なども痕跡程度にみとめることができた。しかし，それらは定量測定に耐えうるだけの量をもたず，今回の比較分析の対象からはずした。なお，定量分析を意図しながら非破壊的分析方法という制約のなかで，錆の付着したままの表面部分の分析をおこなったこと，螢光X線分析の際により有効な定量値をえるために必要な銅銭成分に類似した合金の標準試料などの不足から精度のよい定量分析値をえられなかった。それゆえ，X線分析チャート(fig.17-A)にあらわれた各元素のX線強度をそのまま数値化して，銅銭相互間の比較資料に供する。使用した螢光X線分析装置のX線管球が白金対陰極であったことから，X線チャートには白金のスペクトルもみとめることができ，PtLα-Ⅰをそれぞれの試料測定条件に対応する最も安定した基本スペクトルとみなし，このピーク強度を100として，他の元素の相対強度比を算出，数値化した。

3　分析結果　fig.17-Aは和同開珎のA型式および富壽神寶の螢光X線分析チャートの一例である。fig.17-BはX線分析した6種の元素のうち，銅・鉛・錫について，X線ピーク強度比をそのまま相対的な定量値とみなし，これら3元素相互間の比を図式化したものである。

この図から，皇朝十二銭のうちの乾元大寶を除いた十一種の銅銭について，Ⅰ：和同開珎，Ⅱ：萬年通寶，神功開寶，Ⅲ：隆平永寶，寛平大寶，Ⅳ：富壽神寶，承和昌寶，長年大寶，饒益神寶，貞觀永寶，延喜通寶の4群に大別することができる。その特徴的な経年変化は概して，鉛の含有量が時代の下降とともに増え，錫の量が減少する傾向である。だが，第Ⅲ群に属する寛平大寶はそれとはことなる。すなわち，富壽神寶以後の銅銭中の錫の含有量が減少しているのに対し，寛平大寶では隆平永寶と同じような成分構成にまで回復していることである。錫を豊富に使えるようになったためか，使わざるをえなくなった事情が存在するのであろう。ちなみに，唐代に鋳造された中国の銅銭「開元通寶」2点の分析結果をfig.17-Cに付載した。和同開珎のA，E，F型式などにみられるような錫の含有量が多く，銅・鉛のそれがかなり少ない傾向を示している。この傾向をもって材質上から良質の銅銭と決めつけられるのかどうか興味深いところである。

今回の分析結果からは，第Ⅳ群に属する6種の銅銭における顕著な差異を認めることができなかった。また，同一種銭貨でも銭文などによる型式分類と，それぞれの分析値にもとずく分類結果との間には，かなりの隔りがあった。たとえば，和同開珎の場合，銭文などによって6型式に分類しているが，材質の分析からは，Ⅰ：A，E，F型式，Ⅱ：C，D型式，Ⅲ：B型式の3群に類別できるにとどまり，それ以上の差異を見出すには至らなかった。

＊　分析は東京国立文化財研究所においておこない，江本義理氏の協力と助言をえた。

7　金属製品他

6AFB区出土の金属関係の遺物には銅製品と鉄製品，および銅滓，ガラスなどがある。その大部分はSD650から出土し，SD485からは小量の釘などが出土した。SD650の金属製品には，鋳造，鍛造，挽物があり，それらの大半は破損品，鋳損じたものや破砕品を混える。近傍に鋳造あるいは鍛冶工房が存したのであろう。SD650出土の石製品としては砥石などが多い。ほかに，馬頭骨が2体分出土したが，保存が悪くとりあげることができなかった。

A　銅製品（PL.102・103）

1　銅帯金具（1～22）　朝服に用いる腰帯の金具。銙帯の鉸具のほか飾り板金具，鉈尾がある。さらに板金具，鉈尾には帯をはさんで裏から固定するための裏金具をともなって出土している。鉸具と表金具は鋳造でつくり，裏金具は板金でつくる。

鉸　具　鉸具（1・2）　1は外枠を一体につくり，刺金軸をはめこむ大型品。帯の端部につなぐ板金具はない。刺金軸と外枠軸とにはさまれた内両側には顕著な「内べり」が生じる。現在表面は錆化のために粗面を呈するが鋳造後，全面に鏨をかけ稜をつくるなどの丁寧な整形をおこなう。2は鉸具の軸部と外枠の一部をのこす破損品。「C」字形の外枠の一端に軸棒を通し，刺金を取付けるが，刺金と帯つなぎの軸と一体につくる。外枠に黒漆がのこる。

丸　鞆　丸鞆（3～11）　表金具と裏金具がある。表金具は半円形を呈し，下寄りに長方形の透しをいれ，裏面の三方に細い鉚足がつく。3は断面を台形につくり，裏面を窪ませ，厚みをもたせる。4～6は表周縁に面取りを施す平板。7～11は表金具と同形の裏金具である。板金から作り，三方に鉚受けの小穴をあける。表面周縁は鏨で面取りを施す。7・10は表金具と同じく長方形透がある。3と8・9・10，4と11が組合う。

	（種類）	（横幅）	（縦幅）	（厚さ）	（透孔）	（備　考）
				cm	cm	
1	鉸　具	4.17	4.40	8.9		鋳造
2	〃		2.46			〃・漆塗
3	丸鞆表	2.77	1.98	3.6	1.77×0.52	〃・〃
4	〃	2.59	1.52	1.7	1.36×0.59	〃
5	〃	2.08	1.37	1.7	1.58×0.62	〃
6	〃	(1.97)	1.32	1.6	1.58×0.48	〃・腐蝕顕著
7	丸鞆裏	4.21	2.90	1.3		板金
8	〃	(2.47)	1.81	1.0		〃・漆塗・破損
9	〃	(3.03)	(1.23)	0.8	(1.80)	〃
10	〃	(2.88)	2.11	0.9	1.78×0.60	〃・漆塗
11	〃	2.56	(1.48)	1.0	1.60×？	〃
12	巡方表	3.70	3.48	7.6	2.55×0.34	鋳造
13	〃	2.90	2.38	3.7	1.82×0.43	〃・漆良好
14	〃	2.15	(1.29)	1.7	1.68×？	〃・破損
15	巡方裏	2.88	1.99	1.1		板金
16	〃	2.63	2.16	1.0	1.94×0.65	〃・破損
17	〃	2.51	1.98	1.1	0.74×0.68	〃
18	〃	2.12	(1.56)	0.8	1.63×0.63	〃
19	鉈尾表	2.98	2.56	3.8		鋳造
20	〃	1.90	2.08	3.0		〃
21	〃	2.03	2.19	2.2		〃
22	鉈尾裏	2.69	2.72	0.8		板金・帯金具？

Tab.11　帯金具法量表　　単位cm

巡方 (12～15)　表金具と裏金具がある。表金具(12～14)は横長の矩形を呈し，裏面の下寄りに鋲足をうえる。13はやや横長で上辺が山形を呈する。いずれも下方寄りに透し孔があり，裏面の四隅に鋲足を取付け裏面を窪ませ，腰高につくる。14は四辺に面取りを施す平板。なお13には黒漆膜がよくのこっている。巡方裏金具(15)のつくりは丸鞆の場合とほぼ同じ。15は長方形透しはなく，表金具 (13) とほぼ同大。　巡　方

鉈尾 (19～22)　表金具と裏金具がある。表金具(19～21)はすべて裏面を窪ませ，三方に鋲足をつける。19の尾端中央の1孔は使用中に鋲がとれたため，後補として穿ったもの。22は一応裏金具とするが，留め穴が1孔であること，周縁部が切断状態のままの粗面を呈していることから鉈尾の裏金具とするには少し疑問がのこる。

2　銅鏡 (23・24)　素文凸面の小型儀鏡である。* 23は鋳造品で，六花形の背面中央に長方形薄板を熔接して鈕とするもの。直径6.7cm，通高0.83cm，厚さ0.5mm。24は破損の著しい粗雑な円鏡。延板を切りぬいたもので，鈕として円孔を穿った小板を熔接する。直径3.85cm，通高0.4cm，厚さ0.95mm前後。　祭祀用の鏡

3　銅鈴 (25・26)　球形を呈する鈴の上半分で，下半部を欠失する。いずれも鋳造でつくるものである。半球体の下縁は下部の半球をうけるため外反する。鈕は球頂に円孔を穿ち，ここに長方形小板金の一端を貫通させてかしめる。25の表面には漆塗りの痕跡があり，直径2.4cm，通高1.64cm，厚さは0.3mm。26は25と同じつくりであるがやや小さく，直径1.65cm，通高1.16cm，厚さは0.14mm。『延喜式』造仏作物解では，銅鈴を周長で示している。それによると4寸・3寸・2寸5分・1寸6分・1寸1分などがあり，25は周長でいえば2寸5分にあたり，26は1寸6分のものに該当する。

4　銅容器 (27～35)　すべて断片で完形を復原しうるものはない。27は口縁部もしくは台脚部とみられるもの。端部近くで「く」字に強く内轉する。頸部もしくは体部への移行部は直立気味に曲折し，縁端の周囲を鏨で整形する。外面にはロクロ痕が顕著で，内面は鋳放しに近く，気泡が多い。暗褐色を呈する。復原口径12.6cm，現高1.55cm。28は深鉢あるいは鉢の口縁部の破片。口縁端は内方に肥厚し丸味をもつ。口縁部外面に二条の平行沈線をめぐらす。内外面の腐蝕は著しいが，内面は鋳放し，外面も粗面を呈してロクロ目はない。口径，器高ともに不明。他の口縁部破片5例はさらに小片である。なかに2次的に穿孔を受けたもの(32)がある。以上のものと銅質が全くことなる器形不明の小破片(35)がある。わずかに曲面をもつ一辺2.8cm程度のもので，厚さは0.6mm。両面とも滑面で緑色を帯びた光沢のある暗褐色を呈する。　金　鋺

5　銅飾鋲 (36～52)　頭部と脚を一体に鋳出す飾鋲。17点ある。鋲頭の形態によって花弁頭，円頭にわかれ，さらに花弁頭には5弁形と6弁形があり，円頭には笠形と平形がある。

花弁頭鋲は各弁端方向に中心から高い稜をつけるが，36は5弁で弁間の刳りが深いものである。長径1.09cm，頭高0.36cm。37は弁間の刳りが浅いもの。長径1.46cm，頭高0.28cm。39は6弁形で弁間の刳りが深く，金鍍金の痕跡をとどめる。長径1.13cm，頭高0.23cm。43は弁間の刳りが浅いもの。長径1.42cm，頭高0.43cm。

円頭鋲のうち笠形をするものは鋲頭が半球を呈する。44は鋲頭のもっとも高いもので，黒漆を塗る。直径1.1cm。頭高0.5cm。45はもっとも低いもので，直径1.05cm。頭高0.3cm。平形は

* 平城宮内でも類似のものがあり，各地の祭祀遺跡からも時折り発見される。

鋲頭頂部が低く平らなもの。49は金鍍金の痕跡があり，直径1.2cm。頭高0.3cm。なお，脚の先端までをとどめる完形品は少ないが，46は全長が2.72cmありもっとも長い例である。

6　飾金具（53～94）　調度品などに装着する各種の飾金具，刀装具，その他がある。53～57は櫃や箱などの隅金具の残片。いずれも端部を花弁形につくる。53・54は反転する花文を毛彫りし，間隙を魚子で埋める。53は幅1.32cm，厚さ0.07cm，長さ5.75cm。54は金鍍金の金具であり，幅1.6cm，厚さ0.1cm，長さ5.05cm。55は花文のみを毛彫りとするもので金鍍金の痕跡がある。幅0.73cm，厚さ0.08cm，長さ4.03cm。56は小型，薄板金で毛彫りと魚子を組み合せて連続菱形文を打出す。金鍍金の痕跡がある。幅0.7cm，厚さ0.06cm，長さ3.4cm。57は強く反転する唐草文を線彫りしたもので，釘穴を上下端に三対あける。幅0.98cm，厚さ0.11cm，長さ4.07cm。このほかに同じつくりの隅金具が小片を含めて22個体ある。いずれも文様はないが，表面に鍍金するもの5例，黒漆を塗るもの3例，釘穴に鋲頭の痕跡があるものなどがある。84は環座や釘座として用いる四葉金具で，中央に方形の釘穴がある。周囲に面取りを施して，縁どりをする。金鍍金をおこなう。径2.83cm，厚さ0.15cm，内方穴の一辺は0.54cm。

文様金具

85は花文，花弁文，円文を打ち抜いた長方形透飾り板金具。透し文の輪郭内には毛彫りを施す。短辺の一側辺を折損しているが，表面に鍍金をとどめる。現状では彎曲するが，本来は板状のものであろう。短辺長3.8cm，長辺10.1cm，厚さ0.1cm。86も同様の透金具の縁辺部断片で，蕨手風の唐草文を打抜く。腐蝕のため表裏ともに旧状をとどめない。長辺4.3cm，厚さ0.93mm。88・89は刀装金具である。88は鞘口金具で鯉口の形につくる。口は背の側をやや広く，刃の側を狭くする。内壁の刃側には刃痕が無数にある。口縁部のみに仕上げの磨きをかける。口幅3.82cm，口厚1.34cm。89は楕円形の鞘責金具で断面形はカマボコ型を呈する。外面は鋳造後とくに整形せず，使用による磨滅痕がある。幅0.3cm，厚さ0.15cm，短径2.15cm，長径3.2cm。

90は円環を2個連接した「8」字形を呈する小型の鋳造品。一面は曲面をなし，他面を平坦面とする。表面は錆化が著しい。円環部の外径1.32cm，長径2.35cm，円孔の一辺は0.7cm。91は細長い板金にほぼ等間隔に円孔をならべたもの。一端を斜めに切りおとして尖頭形とし，他端は折損する。鍍金があったらしいが，表面錆化が著しくて判然としない。幅0.75cm，長さ6.8cm，厚さ0.15cm。92は極めて薄く細長い板状金具で一端を丸くし他端は折損する。長辺の両側2個所に対応する楔形のくり込みをつける。長さ10.3cm，最大幅0.8cm，厚さ0.46mm。同形の小片が他に2点ある。

7　円環（95～97）　95は断面が円形を呈する小円環で，腐蝕が著しいが鋳造品とおもわれる。直径1.02cm。96は丸針金を曲げた小円環で一部を欠損する。いずれも鎖の小環であろうか。97は薄板を卵形に曲げたもの。打ち重ねの両端は薄くして他の部分との厚味を等しくする。外面に僅かに鍍金が残る。幅0.4cm，厚さ0.8mm，最大径1.34cm。

8　針金（98～108）　断面形に丸形と角形があり，太さも各種ある。98は断面が丸形で表面を研磨する。もっとも太いものであり，一端は尖がり気味に削っており，他端は折れている。径3.2cm，長さ11.9cm。102は断面丸形で一端近くを直角に折り曲げ，他端を鋭く尖らせる。径1.2cm。108は丸形で最小径の細い針金。両端を尖らす。長さ3.83cm，最大径0.1cm。

以上のほかに木葉形の延板，鑿痕のある截屑片，板金，棒状品，鉛の小塊などがあるが，量的にあまり多くはない。

B　鉄製品 (PL.103, fig18・19)

1　鎌先(128)　刃の先端部と刃部を欠失する。基部を折返し，柄に対して刃を鈍角に装着することになる。背の弧線からみて先端近くで刃幅を増して強く内彎する種類であろう。上述の木柄と組合さるものではない。長さ10.4cm，背の厚み0.31cm。

2　刀子 (129)　やや大形の刀子の切先部分の破片。刃幅に対して薄手のつくりである。刃の腐蝕が著しいほかはほぼ旧形をとどめている。刃幅2.1cm，背厚さ0.2cm。

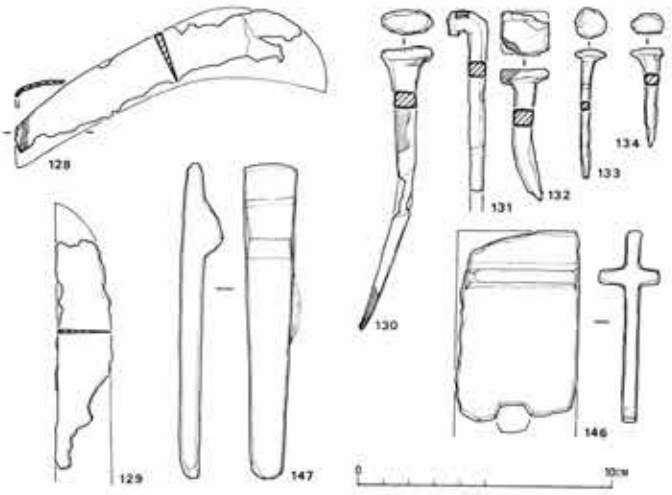


fig.18　鉄製品実測図

3　釘 (130～134)　鍛造の角釘で保存はよくない。130は頭の幅が狭く長方形を呈するもの。長さ11.5cm。131は折り釘でとくに頭をつくらず端部を折り曲げる。現状では足の先端を折損する。長さ7.2cm。132は方形の角頭を呈するもの，長さ5.0cm。133は頭部が笠形を呈する丸頭のもの。長さ5.1cm。134は角頭で，足の一方によせて頭を打ち出す。長さ3.8cm。

車軸頭形鉄器

このほかに鉄製品には用途不明品が二，三ある。144・145はともに外側面に突帯をもつ円筒形をした鋳造品である。144は円筒部のほぼ½円周をのこす。上縁部は薄く，下半は外反気味に厚さを増して下縁部は肉厚になる。全体に湯まわりが悪く内外壁面は凹凸面となる。下端面は磨耗したような平滑面を呈する。高さ5.93cm，上縁の厚さ0.58cm，下縁の厚さ1.23cm，復原の直径は約11.5cm。突起部分の高さ1.3cm，厚さ0.7cm。145も同形のもので，体部に四角の小孔がある。高さ，復原直径ともに144にほぼ等しい。146も類似品で，長方形の板状のものの両面に突帯と角穴をつくる鋳造品である。一端を折損する。幅4.7cm，長さ7.25cm，厚さ0.66cm。両突帯の頂点間は2.35cmである。表面の腐蝕・錆化は著しい。以上3点の鉄器について，積極的な根拠はないが，形状からして車輪の轂に埋めた車軸受けの金具ともかんがえられる。

147は楔形をした鍛造品。頭部近くの片面に隆起部があり，先端はやや細くなる。止め栓ようのものであろうか。長さ12.36cm。ほかに両端を細めて鋭く尖らせた断面が不整円形の針状のものがある。現在折れ曲っているが，本来は直線状のものであろう。長さ8.1cm，最大径は0.28cm。

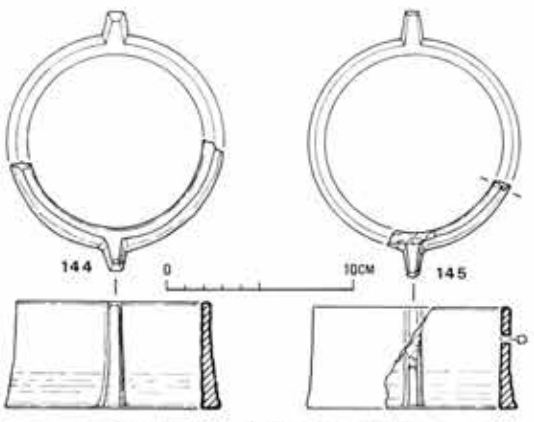


fig.19　車軸頭形鉄製品実測図

C　石製品（PL.104）

1　石銙　銅製の帯飾具と同形のものであり，巡方5点，鉈尾1点がある。

巡方（1～5）　大小あるがいずれもやや横に長い矩形の石板である。四縁に面取を施し，その断面は台形を呈する。裏面をのぞいて各面は平滑に研磨する。1～4は裏面の四隅に2孔1対の帯装着のための小孔をあける。1対の孔は錐で斜め方向に穿って連結する潜り孔で，1には1孔中に金属質の銹が付着している。5は2辺の長さ不明の断片であるが方形の透し穴を穿ち，帯装着のための表裏に貫通する円孔を穿っている。銅製巡方と同じように鋲留めとするためのものである。

	種類	横幅	縦幅	厚さ	色調・石質	備考	
1	巡方	4.06	3.88	0.67	黒斑灰白色	透孔なし	潜り孔
2	〃	4.02	3.82	0.70	淡黄緑色縞入暗灰色	〃	〃
3	〃	3.82	3.68	0.58	暗緑色縞入灰色	〃	〃
4	〃		3.57	0.80	半透明灰色	〃	〃
5	〃			0.57	黒色斑入淡緑色	透孔あり	鋲留
6	鉈尾	4.90	4.06	0.72	黝黒色粘岩系頁岩		潜り孔

Tab.12　石銙法量表　　単位cm

鉈尾（6）　巡方と同様に矩形の一辺を弧状につくり，裏面の3方に潜り孔をつける。光沢のある黝色を呈している。

2　砥石（7～11）　水成岩，砂岩，安山岩製の砥石。使用面も1面，2面，4面のものがある。形は一定でなく，すべて破砕品である。7・8には磨耗面に円錐形の凹みと磨き溝がある。窪みの大きさは最大1.38cm，最小0.9cmと一定しないが，内壁面にそって横方向の磨耗痕跡が顕著である。銅製鋲頭などを鋳造後に回転研磨したものとおもわれる。

3　ガラス玉（14・15）　14は緑色半透明の丸玉でやや青味が強い。孔の周囲は両面ともに磨滅する。二次的な網状の亀裂が全面にはいっている。径1.21cm，高さ1.05cm。15は淡黄色不透明の丸玉で，風化のため一部は灰褐色を呈する。14とほぼ同大であるにもかかわらず，非常に重い。直径1.33cm，高さ1.23cm。

4　柱状片刃石斧（12・13）　12はやや丸味をおびた角柱状の一端を片刃につくり，着柄のために抉りをつけた石斧であり，刃先の一部が欠ける。長さ11.7cm，最大幅3.04cm。13も同じつくりの石斧でありであるが，大形品である。刃部は折損する。折損面は磨滅が著しく，折損後，槌として使用されたものであろう。長さ14.9cm，最大幅4.6cm。

以上のほかに顔料素材の赤色塗料の小塊がある。

V 古　　墳

1　ウワナベ古墳東外堤

A　遺　　構（PLAN18～21，PL. 2・25～31）

ウワナベ古墳東外堤の調査に際しては，後円部の北縁の東延長線から南方に60m間隔の地区割りをおこない，濠をふくめてK・L・M・N・O・P の6地区に区分した(fig. 2)。第54次調査ではP・O地区に各1本のトレンチを設定し，第60次調査ではK～M地区に3個所のトレンチを設けた。ここでは，便宜上北方からP・O・M・L・Kトレンチとよび，各トレンチが2本以上になる場合には枝番号を付することにした。

外堤の現状

Pトレンチ　Pトレンチは，後円部のEN-WS方向直径のほぼ延長線にあたる。この付近は南の畠地よりも約4m高く，南北10m，東西30～10mの小丘状の高まりを呈している。陪冢の可能性を考えて調査の対象にした。トレンチは長さ26m，幅6.5～8mで，外堤から濠に向って設置したが，東限は国鉄関西本線のため調査できなかった。外堤と濠には古墳築造後に造成された厚い堆積土があり，それらは大きく4層に大別できる。

第1層　現在の外堤である。もっとも高い部分は海抜78m，現在の濠からの比高は約4.5mである。黄色砂質土を基調とする盛土で，土砂の汚れや粘土の混入状況に応じて数亜層に細分することが可能である。盛土は短時期になされており，なかでも西方の汀線に向ってのびる淡白色粘質土の堆積は厚い。

この外堤にともなう濠は現在もなお泥土の堆積を進行しており，上層の腐蝕土層と下層の赤褐色土斑入青白色粘土層とにわかれる。2層にわたってヨシの根が著しく張りこんでいる。

第2層　第1層よりも一回り規模が小さく，断面形がカマボコ形を呈する築堤。その西限は現状の汀線から約4.5m 東に寄り，頂部での海抜76.5m，基底幅約6m，頂部の幅約2.5mの規模で，頂部には南北にのびる浅い溝があった。盛土に小量の奈良・平安時代の土器細片をふくみ，暗褐色土や茶褐色土に識別できる部分もあるが，亜層として細分することはできない。

濠は第1層外堤の下部に幅約6.5m，厚さ1～0.5mの堆積土をとどめる。西方は第1層濠の浚渫によってえぐりとられている。堆積土は粘土と砂の互層で，4亜層にわかれており，小量の瓦器片を混入する部分もあった。

第3層　第2層外堤の前身にあたる築堤で，その規模はさらに小さい。頂部は海抜75.5m，幅4.5m，高さ0.7m前後。この築堤は一時の盛土ではなく，少なくとも3次にわたる盛土であり，頂部につくる南北方向の溝が次第に持上っている。築堤から一段低くなる東方の堆積層は上・下2層にわかれ，地山に接する下層には埴輪片を混えている。

濠の堆積は1.5～0.4mの厚さで，第1，2層の下部に広がっている。堆積土は，1：青灰色

粘土と灰黄褐色砂の互層，2：黄灰色粘土，3：灰白色粗砂からなり，少量の奈良・平安時代の土器片を混えている。

古墳築造時の外堤

第4層　古墳築造時の外堤。海抜74.7m付近で地山削り出しの外堤上面を検出した。外堤は幅9mにわたって平坦面をなし，黄褐色バラス土の地山からなる丘陵を削平したもののようである。東方はトレンチ外にのびるが，西方は第2層築堤の西裾付近からえぐられ，内斜面の基底部分を濠中にのこしている。基底部分に拳大の河原石をふくが，約2m四方しか検出できなかった。残存葺石面は海抜71.2mあたりを下縁とし，海抜71.9m付近までのこり，約26.0°の傾斜角度を呈する。最下縁の基石は不明であったが，葺石は下部から上部に向ってふき，上下を通じて一列にならべる仕切り石も存在する。濠には厚さ0.6m前後に黒色粘土あるいは灰色バラス土が堆積し，そのなかに落下した葺石や埴輪片が混在する。

Oトレンチ　OトレンチはPトレンチの土盛りの南端に接する畠に設定した。現在，汀線に接して，高さ0.9m，幅約1.5mの畦畔があり，それを境にして東方では平坦面をなし西方では濠となる。トレンチは長さ24m，幅4mで，濠と堤にかけて設定した。

東方の平坦面では，最近まで耕作がなされ厚さ20cm前後の耕土下に，厚さ50cm前後の黄灰色砂質土の床土がある。床土の下，海抜74mあたりで黄褐色粘質土の地山面があらわれ，これが古墳築成時の外堤である。外堤内斜面は濠中にあり，最下縁は海抜69.9mとなる。その上部に，厚さ3mにわたる土砂が堆積する。堆積土は粘土あるいは砂質土からなり，数層にわかれ部分的に遺物をともなうが，堆積時期の識別はできなかった。内斜面の基底部付近には，葺石がのこる。葺石は幅0.8m，長さ1.6mの部分しか検出できなかった。傾斜角は24.0°。葺石はPトレンチの場合よりも少し小粒の河原石で，仕切り石や基石については不明である。また，Pトレンチの場合とおなじく，葺石面から濠底にかけて，落石と埴輪片をふくむ灰色バラス層が堆積する。

Mトレンチ　前方部東方外堤上に，南北60m，高さ3m前後で北半が大きく南半の小さな土盛りがあり，一見前方後円墳の陪冢にみえた。トレンチは，北半と南半の各々に東西方向にいれ（M_1.M_3），両者をつなぐ南北方向にも設定した（M_2.M_4）。

調査の結果，この土盛りは墳丘でなく，Pトレンチの場合と同じく黄褐色バラス土を基調とする後世の盛り土であることが判明した。たとえば，M_3トレンチでは，頂部から約3.5m下降した個所に褐灰色粘質土と暗灰色粘質土からなる2次にわたる耕土がある。耕土の下には褐色粘質土の床土があり，トレンチの西方では海抜73.5mあたりから青灰色粘土の地山となり，これが古墳にともなう外堤である。現在の汀線の東方約14.2m以東では，海抜74.3m付近で黄色バラス土の地山となり，保存がよい。このような状況は，M_3以外のトレンチでも確認できた。

Kトレンチ　外堤の東南隅は，北側の畠よりも約2.5m高く，南北約40m，東西約25mの台状地形を呈している。ここでも，陪冢をかんがえトレンチを設定した。トレンチは東西を横断するK_1，K_2，南北を縦断するK_3，K_4をまず設けた。台状の部分は近年まで茶畑として利用され，最上層に耕土がある。耕土以下の土層は，P・Mトレンチと同じく黄色粘質土や，黄色バラス土を基調とする後世の盛土であり，墳丘ではなかった。盛土の下部に旧水田面とかんがえられる黒色ないしは暗褐色の粘質土があり，その下に灰褐色の床土がある。床土の下，海抜74.1mあたりから黄褐色粘質土の地山となるが，これが古墳にともなう外堤である。

汀線の東方約30mをへだてたK_2，K_5トレンチにおいて，地山面を南北に布掘りし，埴輪を

据えつけた状況を検出した。外堤の周囲をとりまく埴輪列(SX740)である。K_3，K_4をふくむ SX740以西はいくぶん後世の攪乱を受けているとはいえ，おおむね平坦面をなし，現在の汀線以西は下降する。内斜面の葺石などの状況については，すでに水位が上ってきたため，調査を断念せざるをえなかった。発掘範囲内では，現在の畦畔の西方6.5mで内斜面の変換点があり，その傾斜角は約25°である。しかし，池水によってかなりえぐりとられていることは確かで，必ずしも旧状を伝えるとはいえない。 **埴輪列**

SX740の東約1.5mを隔てて，地山は約20cm下がってSD732となる。溝幅は10m内外あり，東岸でまた一段高くなっている。溝には上下2層の堆積があり，上層の暗褐色土には奈良時代の遺物をふくんでいることから，少なくとも奈良時代までは存続していることがわかる。東岸には小柱穴が1列，南北に走る(SA730)。奈良時代以降の小規模な柵である。 **外　濠**

SD732の上層の堆積土から，南北に流れるSD734を掘りこんでいる。SD734は，SX740の東約2mを隔てて存在する幅70cm前後の素掘り溝である。堆積土は3層に区分され，その中層の暗灰色粘質土には炭化物や埴輪，奈良時代の土器片を混在しているので，奈良時代に開穿したの溝とかんがえられる。

SD732，SD734はSX740に平行しており，少なくとも，SD732は古墳築成時に設けられた外堤を囲繞する外濠というべきものである。

Lトレンチ　Kトレンチで確認した埴輪列SX740を追跡するため，L地区において南北57m，東西6～11mのトレンチを設定した。

耕土と床土を除去すると，海抜74.8mあたりで黄色粘質土の地山面となり，Kトレンチで発見したSX470の北延長線上に埴輪片が散在する。それらは，埴輪の上部が崩壊したものであり，1個ずつのまとまりをもって散在し，若干の奈良時代土器片を混えていた。SX740は一直線に南北にのびる。埴輪列はKトレンチの場合よりも保存がよく，幅45cm，深さ30cm前後の掘形を掘り埴輪を樹立している。埴輪は鍔付円筒埴輪を主とし，発掘区南北長59mの間で114本を検出し，10mの間に22本の埴輪を配置していることになる。また，1個体分の蓋形埴輪も検出したが，それがどの位の間隔で配置されていたかは明らかでない。個々の埴輪によって多少の違いはあるが，最下段の第1凸帯を掘形の上縁に揃えて据える。また，埴輪の口縁部で揃えるためか，掘形の底に若干の土を埋戻した後に樹立するものもある。さらに，樹立に際しては円筒の内部にも土を詰め，固定に留意している。SD732とSD734が埴輪列の東側に平行する。このトレンチでは遺構の保存がよく，SD732は約60cmの深さをとどめる。しかし，SX740の西側は，耕作のためかなり削平されていた。 **蓋形埴輪**

ウワナベ古墳外堤の復原　ウワナベ古墳東外堤の調査に関連し，南外堤のA点と西北外堤のB点において埴輪列の存在を確認した。その後，奈良県教育委員会は航空自衛隊の構内で，西北外堤を調査してその外周にめぐる埴輪列と外濠とを確認した(C点)。* 他方，空中写真測量によって従来の墳丘測量図を補正した。このような資料を併用しながら，ウワナベ古墳の旧規を復原しようとするのであるが，不確定の要素も多く，この復原は絶対的ではない。

発掘調査などでえた外堤に関する資料はTab.13の通りである。5地点のうち，旧地表面にもっとも近い外堤上面は，Lトレンチである。このトレンチの南北長57mを隔てる間の比高で

* 1973年12月奈良県教育委員会は自衛隊構内で工事に伴う事前調査をおこなった。今回の報告に際しては，奈良県教育委員会から発掘資料を提供され，種々の教示を受けた。

	外堤上面海抜高	外堤内斜面下縁海抜高	内斜面傾斜角
Pトレンチ	75.25m	70.8m	26.0°
Oトレンチ	74.20	69.9	24.0
Mトレンチ	73.50		
Kトレンチ	74.10		
Lトレンチ(北)	74.835		
Lトレンチ(南)	74.645		
A 点	73.20		
C 点	74.30		

Tab.13 ウワナベ古墳東外堤の海抜高

古墳築成以前の地形

は，北方のほうが19cm高い。この傾斜を北方に延長すると，Pトレンチでの旧地表は海抜75.678m，Oトレンチでは海抜75.328mとなる。Kトレンチの海抜74.10mは旧地表に近いことから，北部から南部にかけてゆるやかに傾斜する外堤の状況がうかがえる。検出した外堤がすべて地山を削り出したものであるから，この傾斜は古墳築成以前の旧地形にもとずくのであろう。

外堤内斜面の葺石は，P・Oトレンチで確認した。最下縁に残存する葺石は，墳丘のそれに比して小粒であり，発掘範囲が狭いとはいえ，落石の量は少ない。Pトレンチの葺石は後円部の仮想中心から107m東北方に位置し，26.0°の傾斜角で葺石をふく。この葺石面を延長して外堤上面に接する上縁を求めると，下縁の東約9.7mにあたり，その比高は約4.9mとなる。Oトレンチの葺石最下縁は，後円部の仮想中心の東方約109mに位置し，24.0°の傾斜角で葺石をふく。この葺石面によって内斜面の上縁を求めると，下縁の東方約11.7mとなり，その比高は約5.4mである。外堤南端のKトレンチでは内斜面の葺石を検出していないので，外堤上面の勾配と下縁の勾配が比例すると仮定するならば，Kトレンチにおける下縁は海抜68m前後になる。この推定内斜面下縁を発掘で検出した外堤地山面の傾斜変換点にあわせると，東南隅での外堤上面幅は約30mとなり，その外方に10m幅の外濠がめぐることになる。

北西方の外堤

北西方の外堤B点では，6個の埴輪が現在の路肩に残存する。Pトレンチで推測した外堤の内肩を後円部仮想中心から折りかえすとほぼ埴輪列の1.5m内寄りに相当し，これが外堤の内周をめぐる埴輪列であることがわかる。C点では，長さ約10mにわたって埴輪列を検出し，同時にその外方に外濠がめぐる外堤を確認している。B点との位置関係からして，その埴輪列が外周をめぐるものであることがわかる。そうしたことから，西北方での外堤上面幅は約24mであることがわかり，外堤の北部と南部では，幅員がことなることになる。

南外堤

南外堤のA点において，東西にならぶ2個の埴輪が存在する。それは，当初の位置を保っており，Kトレンチの埴輪列SX740を南に延長し，A点の埴輪と直角に結ぶ線が墳丘前方部の南縁とほぼ平行している。さらにその西延長線上に台形の水田があり，それを外堤の西南隅の痕跡とすることができる。このことからA点の埴輪を南堤の外周をめぐる埴輪の残存とみなすことにした。A点の埴輪位置に東南隅で推測した外堤上面幅を加えた点が外堤の内肩となる。A点の埴輪の第1凸帯の高さ(海抜73.2m)を外堤上面の旧地表とするならば，東南隅の心からおよそ100m西方のところで，約90cm低くなる。つまり，南外堤は西方に向って傾斜し，漸次低くなる。南外堤にともなう外濠の痕跡は，6AFB-J地区において検出していない。しかし，J地区の西北隅にあるSD444がSD734と連結するようであるから，一応この付近に外濠位置を想定することもできる。しかし，J地区の遺構検出面は，推定南外堤上面から約2m下っており，平城京造営に際して確実に破壊されていることになる。

さて，以上の推定にもとずき外堤全体の旧規を復原するとつぎのようになる。南外堤外肩と北外堤外肩との最大距離422m，南外堤上面最大距離305m。この外堤の周囲に10m前後の幅で外濠がめぐる。つぎに，外堤に樹立した埴輪の総数を算出しよう。Lトレンチにおいて長さ10m

の範囲に22本の埴輪を樹立することを基礎にすれば，内周は長さ1,129mで2,483.8本，外周は1,306mで2,873.2本，合計では5,357本を樹立する。

墳丘部分に対する写真測量での観察をのべよう。後円部と前方部が接するあたりの西側に「造出し」がある。この部分は貯水時には水面下に沈み，干水時に露出する。その上面は最高で海抜73.6m，南北長23m，東西幅12mの台形を呈する平坦面をなし周縁は濠に向ってゆるやかに傾斜する。南辺と北辺の墳丘に接する付近に埴輪列があり，その高さは海抜74m前後で造出しの上面とほぼ一致する。後円部の汀線にも埴輪列が露出している部分があり，その高さは海抜75m前後である。このようなことから3段築成墳丘の第1段の上面が海抜75～74mの間にあり，造出しの上面もそれに対応していることになる。さらに墳丘第1段の高さと外堤上面の高さをくらべると，わずかに外堤が高い状況になる。推測を加えるならば，古墳の東北方が高く西南が低い現象は丘陵の旧地形によるもので，前方部および外堤の西南部が盛土であろう。

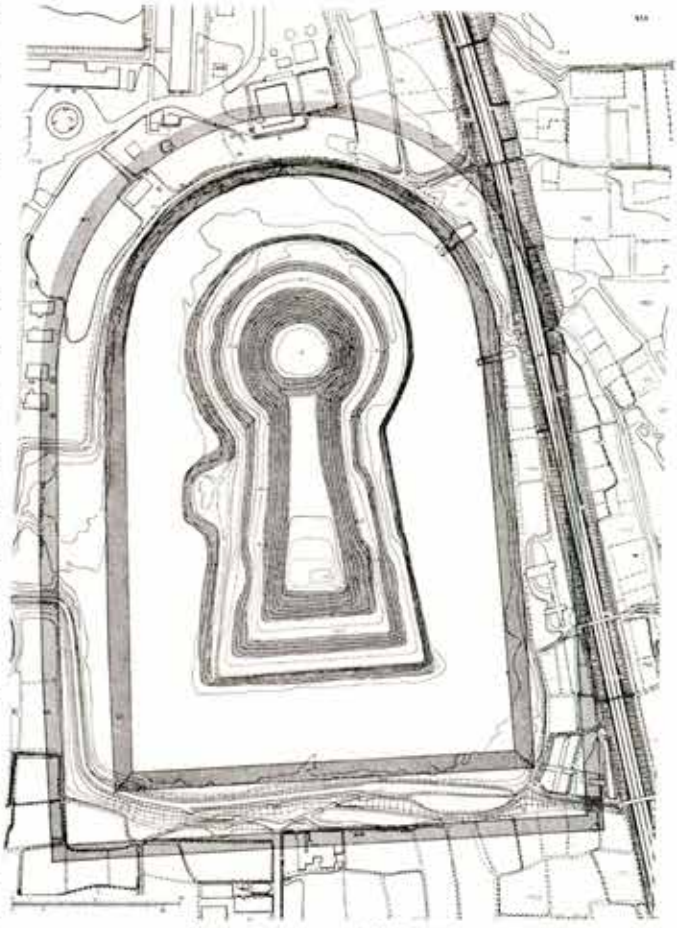


fig.20　ウワナベ古墳復原図

墳丘

外堤の変貌　発掘調査の結果，東外堤上に隆起する土盛りがいずれも後世の所産であることが判明した。土盛りがきわめて短期間におこなわれているので，明治29年(1896)に開通した奈良鉄道（現在の国鉄関西本線）の開設工事にともなう残土であろう。

その後のウワナベ

Pトレンチで検出した第Ⅱ・Ⅲ層の築堤は，いずれも周濠の水位と直接に関係していない。江戸時代に描かれた法華寺領域図には，Pトレンチの北東部に新池と称する溜池が描かれており(fig.37)，この池の堤に属する可能性がつよい。第Ⅱ層築堤以後，外堤内斜面は著しく浸蝕を受け，ヘドロが厚く堆積していることから，定期的な水位の増減，つまり溜池としての利用がかんがえられる。外堤の東北方の山間部からの導入水路がとりついている関係から，とくにP地区で浸蝕と土砂の堆積が進行したのである。第Ⅱ層築堤に属する堆積土中に平安時代の土器が混入する。これは溜池利用の開始が平城京廃絶後にあり，古墳築成時にまで遡らないことを物語る。SD732は奈良時代に埋立てられ，そのかわりにSD734が外堤に平行する。SD734は6AFB-J地区にあるSD444と結び，道路の側溝にかんがえられ，南外濠は北京極大路に変じ東外堤の外濠は山城国と大和国を結ぶ道路に利用されたのであろう。他方，SD374の開穿および溝のなかの遺物は，奈良時代の陵墓祭祀と関係するかもしれない。

B　遺　物（PL.105・106）

ウワナベ古墳の東外堤の発掘を通じて検出した遺物には，外堤上に樹立した埴輪，8世紀に開穿されたSD734出土の土器類，さらに周辺の分布調査で採集した墳丘遺出し付近の土器類などがある。

埴　輪　埴輪列は鰭付円筒埴輪，円筒埴輪，蓋形埴輪からなる。* しかし，朝顔形円筒埴輪に類するものはない。そのうち，鰭付円筒埴輪が大多数を占め，他はきわめて少数である。埴輪列はK・L地区で検出したが，多くは下から第2段程度しか残存せず，** それ以上は片々となって周囲に散布していた。L地区北半では比較的保存状況が良好で，崩壊した状態のものもあり，全形をしりうるものも少なくない。整理の都合上，これらの埴輪のすべてについて検討する時間はなく，今回はL地区出土埴輪のうちから代表的なもの数点をえらんで報告する。

蓋形埴輪　1　蓋形埴輪　今回の調査で検出した形象埴輪は蓋形埴輪のみである。L地区北半で検出した1個体(1)と，K地区および6AFB-J地区で発見した細片とがある。1は基台部・笠部・頸部からなるが，各部分は直接に接合しない。埋没状況や胎土，製作技法からみて同一個体に属するものとみてよい。基台部は底径にくらべて口径の大きい断面逆台形の筒形につくる。幅約8cmの粘土帯を輪状に貼りあわせて基部となし，その上に粘土紐を巻上げて円筒部分を成形する。粘土紐の幅は約10cmで，内・外面に成形・調整時の相違があり，数回の巻上げ単位が確認できる。内面は指撫でと横位の刷毛目，外面は断続する斜位の刷毛目で調整する。基台の上寄りに右まわりで穿孔する一対の円孔がある。笠部の中心部はほぼ平坦に近いが，外周はわずかに外反しながら下がる。縁はほぼ垂直に近い立上りを呈している。笠部は基台部の上端に貼り足したもので，その接合部分の裏面に粘土紐をあてて補強する。縁は帯状の粘土を貼付し，その外面には横刷毛目をおこなうが，約5cmの間隔で強くおしつけて，ひだをあらわす。なお笠部の外周に右から左方向に施文する筆描きの円弧文があるが，その全体を知ることはできない。頸部は斜めに立上り，上端の鍔状部分の断面をコ字形につくる。外面には丁寧な横刷毛目をおこない，内面には横方向の指撫でをおこなう。全体に焼成が良好で淡黄色を呈し，黒斑はない。付近から四方飾板の破片は発見されておらず，もともと四方飾板を挿入していない可能性がある。いずれにせよ，このような形態をとる蓋形埴輪は，5世紀の少数の古墳に類例をみる程度で，特異な形態といわざるをえない。復原高55cm，最大径64cmである。

7段の円筒埴輪　2　円筒埴輪　円筒埴輪としては1個体を復原することができた(2)。ただ，口縁部とそれ以下は直接に接合しない。しかし調整手法が連続する状況などから同一個体とみてよい。その形態は，底径にくらべて上部2段の直径がわずかに大きい円筒形を呈している。外面は6条の凸帯で等分し，7段にわける。*** 底部から第3段，第5段にそれぞれ相対する1対の円孔を開き，上下2段の円孔の方向は対角線上に位置する。粘土を巻上げて成形し，第2段，第4段，

---

*　鰭付円筒埴輪は，円筒埴輪の概念に属するが，ここでは記述上両者を区別する。

**　円筒埴輪の部分名称。凸帯は下方から上方に第1凸帯，第2凸帯，……とよぶ。円筒底部から第1凸帯の間を第1段，第1凸帯と第2凸帯の間を第2段とよび，凸帯の条数が増加するごとに段数も増すことになる。ただ，最上段は口縁部とよぶこともある。

***　『奈文研年報1970』p.36で凸帯4条とするのは訂正する。

第6段，第7段に巻上げ単位の痕跡をとどめる。* 内面の調整は巻上げ単位の幅に対応して，第2段：指撫で，第4段：斜刷毛目，第6段：縦刷毛目＋指撫で，第7段：横刷毛目と変化している。外面は縦刷毛目の調整後に凸帯を貼付し，各段の全幅または半幅を横刷毛目で調整し，その後に再度凸帯に横撫での調整をおこなう。ただ，第3凸帯と4段目の接する部分では，調整の順序が逆になり，横刷毛目調整をあとにおこなう。これは，まず下部の成形・調整が第4段まで達し，ある程度かたまった状態で，それ以上の段についてさきの工程をくりかえすことを示す。第4段に見る巻上げ単位痕跡は他とことなり円筒の上下をわかつことになる。口縁部外面は断続する縦刷毛目の調整にとどまり，端部の外周に粘土紐を巻き凸帯状につくる。淡黄色を呈する軟質の埴輪であるが，焼成は均一である。なお，第2凸帯以上の外面全体に赤色塗彩をおこなう。復原高97cm，口径45cm，底径32.2cm。

蓋と円筒の組合せ

円筒埴輪が底部の一段しか残存しないときには，後述の鰭付円筒埴輪との区別は容易でない。しかし，L地区では2に類似するものはなく，また，蓋形埴輪(1)は円筒埴輪(2)と近接して存在し，2の口径と1の基台部分の直径とほぼ合致しているので，2の上に1をのせたことがかんがえられる。

3　鰭付円筒埴輪　鰭付円筒埴輪は上述の円筒埴輪に比して小さく，また，器高が低く，底径と口径の差があまりない。円筒部は6条の凸帯で7段にわけ両側に鰭を付す。その形態および透孔の形状などからA・Bの2種類にわかつことができる。

鰭付円筒埴輪A(3)は第7段，つまり口縁部の幅を他の段よりも狭くする。まず幅8cm程度で輪状の基部をつくり，その上に左回りに粘土紐を巻上げる。円筒部の外面には縦刷毛目をさきにおこない，ついで凸帯をつけて，その間に横刷毛目をおこない，凸帯に横撫でを施す。その際，口縁部の横刷毛目は連続せず，周囲を数回にわけておこなう。内面は丁寧な縦刷毛目で調整するが，それは7段にわかれ，外面の調整の区切り及び断面の継ぎ目とも対応し，巻上げ単位の痕跡として理解できる。口縁部内面のみは横刷毛目をおこなう。円筒の両側には数条の縦に長い刻み目をいれて鰭を貼りつける。鰭は粘土板を口縁端部から第2凸帯までの長さで，上端を長方形に下端を斜めに篦で裁ちおとす。その表裏には内方から外方への斜刷毛目をおこない，端面は指撫でで整えている。透孔は鰭部を左右に置く場合，円筒部の前後で1対をなす位置に穿孔しており，その位置と孔の形はつぎの通りである。第2段中央：円形孔，第4段中央：長方形孔，第4段右：円形孔，第5段左：三角形孔，第6段中央：長方形孔，第7段左右：三角形孔。この場合，三角形孔は他の孔よりも小さい。第5段外面の鰭に近い部分に4本の直線からなる篦描き文様があるが，全形不明である。茶褐色を呈し，軟質であるが黒斑はなく，外面の第2凸帯以上には赤色塗彩をおこなっている。高さ82cm，円筒底径35.5cm，円筒口径38.7cm，最大幅（鰭を含む）52cm。

もう1個の鰭付円筒埴輪A(4)はおおむね3と同じ形態をとるが，円筒内面の調整と透孔の位置がことなる。内面には粘土紐の痕跡をとどめ，下位から指撫で，斜刷毛目，縦刷毛目，横撫での順に調整する。およそ第3凸帯，第5凸帯，第6凸帯に巻上げ単位の痕跡がみとめられるが，第3凸帯の部分がとくに顕著である。透孔は第3段中央：円形孔，第4段中央：長方形

* 円筒の検討を通じて，成形に際しては下方から上方まで一気に粘土紐を巻上げたのではなく一定の幅を巻きあげた段階で一旦休止し，その後に上方部分をつぎたしている。ここでは一気に巻上げた部分を巻上げ単位とよぶことにする。

孔，第5段左：三角形孔，第5段右：円形孔，第6段中央：長方形孔，第7段左右：三角形孔とする。第5段右の円形孔は筮描き沈線で下半を囲む。鰭のつくりは3と変らないが，下端が第2凸帯に接していない。高さ78cm，円筒底径33cm，円筒口径40.5cm，最大幅50.5cm。

鰭付円筒埴輪Aは埴輪列の大半を占めるが，内面調整を縦刷毛目のみでおこなう3と，指撫でを混用する4との相違，さらには透孔位置などが全体のなかでどのような位置を占めるかなどについては検討をおこなっていない。

鰭付円筒埴輪Bについては1個体を復原した(5)。5は口縁部とそれ以下とは直接に接合できない。3・4に比べて全体に大作りである。円筒部は6条の凸帯をめぐらし，7段にわける。第7段が他よりも狭いことは3，4と同じである。外面の調整は，縦刷毛目をさきにおこない。のちに横刷毛目をおこなう。内面の調整は，下から指撫で，斜刷毛目，縦刷毛目の順であるが，上部の縦刷毛目の凸帯裏にあたる部分は，凸帯貼付時の指撫でによって消去している。鰭は大きく，第1凸帯からはじまり口縁端にまでおよぶのであろう。その下部はおよそ第3段に相当するあたりから斜めに裁ちおとす。また，鰭の片面には2条の沈線による縁取りをおこなっている。淡黄色を呈し，比較的軟質である。復原高90.7cm，円筒底径32cm，円筒口径36.6cm，最大幅56.6cm。外堤の埴輪列のなかでは異例に属する。*

舟の線刻　鰭付円筒埴輪のなかに，舟を筮で描いたものがある。6は4に類する埴輪の第5段中央やや右寄りに描いたものとみられる。絵は1本の弧線を配し，それに9本の斜線を交叉するもので，舟体と櫂を表現したものとみられる。

須恵器　Pトレンチの葺石上で，須恵器蓋の破片を発見した。頂部の稜線が鈍く，頂部との境に凹線をいれる。口縁部はほぼ直立し，端部をまるく仕上げている。硬質で暗灰青色を呈する。形態からすれば，陶邑古窯址群のTK10型式に類似する(fig.24-4)。

SD732・SD734出土の土器　外堤にそって南流するSD734の堆積層は大きく3層にわかれ，各層から土器片や埴輪片を発見した。埴輪は別として，遺物の多くは平城京造営以後のものであり，その出土量は比較的多い。最下層の第3層からは奈良時代前半の土師器・須恵器を発見し，上層の第2・1層からは奈良時代後半から平安時代中頃に至る土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などが出土した(fig.21)。

7・8・10は第3層の土器である。7・8はa_0手法で調整する土師器の小型皿。10は底部外面に筮切痕をとどめる須恵器の皿BIIで，第I群土器に属する。9は第2層，11は第1層から出土した灰釉陶器である。9は盌の底部で，体部の内外をロクロで仕上げ，外底面に糸切痕をとどめる。11は体部外面は平行叩きをカキ目で消し，内面に同心円のあて板痕がある。緑釉陶器としては，杯Bの破片がある。断面三角形を呈する付け高台をつけ，底部外面には糸切り痕，内面には三叉トチンの痕跡がある。釉薬が底部外面以外の全面にかかっている。硬陶。

SD734の東側に位置する外濠SD732の埋立土からも，奈良時代前半の土器が出土している。1～6はその主な須恵器である。いずれもSD485土器の特徴とよく一致している。2を除いた以外はすべてI群土器に属する。二彩陶器の細片が2点ある(COLOR PLATE 2)。器形のわかるものは，口径10.1cm前後の小型皿に復原できるもので，口縁端部はまるくおさめ，内外面に緑と白の釉をかける。軟陶。

---

* 他の古墳の場合での鰭付円筒埴輪では，この種が一般的で，鰭付円筒埴輪Aのほうが異形である。

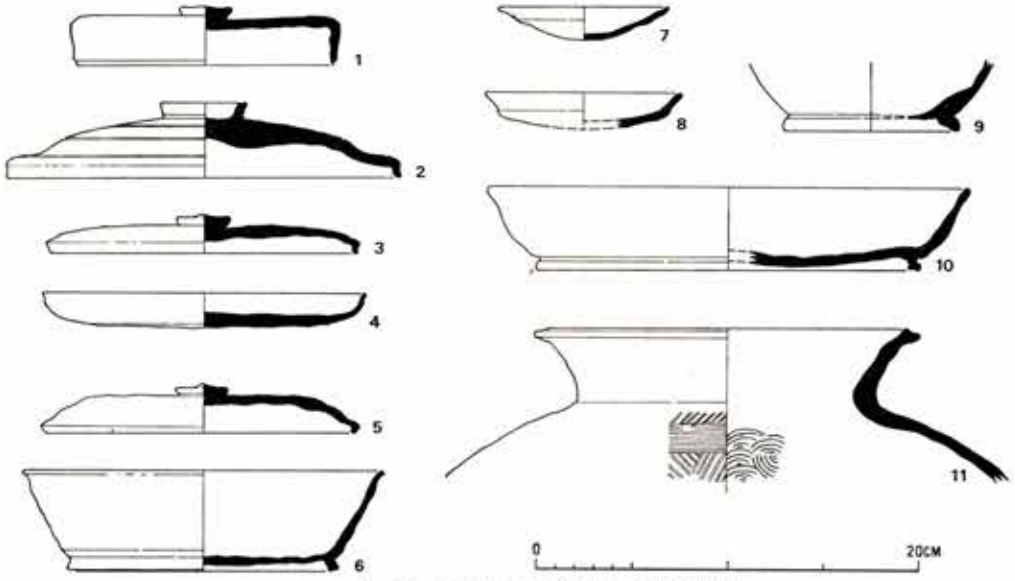


fig.21　SD732・SD734出土土器実測図

造り出しの土器　墳丘の造出し裾付近で，若干の土器片を採集した。それは，須恵器片を主とし，少量の土師器片と土製品を含む。土器片は，いずれも細片でかつ池水で洗われているため表面が著しく風化している。全形を復原しうるものはないが，明らかに同一個体とみられるものがあり，本来は造出しに供献されていた土器類が水中に転落したものであろう。

須恵器

1　須恵器　胎土はいずれも粗い砂をふくみ，良好ではない。焼成の良好なものと悪いものがあり，焼ひずみもみられる。1：灰褐色を呈し，硬質のもの。2：明褐灰色を呈し，やや硬質のもの。3：明褐白色を呈し，軟質のものが存在する。いずれも窖窯で焼成したものである。破片数からすれば1が少なく，2が多い。ほとんどの土器には焼成前に丹塗りを施している。焼成段階で温度が高くなったものはくすんだ暗褐色を呈し，温度の低いものは明調の丹色を呈している。器はいずれもロクロで成形している。ロクロ撫でを基本とし，櫛描き波状文，櫛描き列点文，カキ目などで表面を調整するが，きわめて鋭い輪郭を呈している。器種としては，器台・鼈・壺・蓋などがみとめられる。7，8，9は蓋杯で，直立する口縁をつける。高杯の全体をしるのは困難であるが，杯部口縁と底部との境に稜をつくるもの(11)，境が不明瞭のもの(12)がある。17は大型の高杯であろう。小型の壺(10・13～16)は比較的多いが，いずれも口縁と頸との間でくびれ，口縁が外傾する。頸部と肩部に櫛描き波状文をいれるものもある。18は大型の壺。頸と肩に櫛描き波状文を配する。器台は2個体以上ある。19はほぼ全形のうかがえるもの，杯に台を貼りあわせた筐の刻み目が明瞭にみえる。櫛描き波状文，櫛描き列点文，凹線文などで飾り，裾ひろがりの台脚に長方形の透孔をあける。なお，実測図はすべて図上復原のため，必ずしも正確でない。*

魚形土製品

2　土師器　土師器としては，小高杯の脚部や底部の突出する鉢の破片がある。少量でしかも細片であるため，細部については不明である。土師質の土製品が3点(22～24)ある。そのうち，2点は小魚をあらわし，1点は棒状の器である。いずれも手づくねでつくり，素朴な表現であるが，特徴をよくとらえている。

* 須恵器の観察にあたっては奈良大学助教授田辺昭三氏の教示をえた。

2　平塚1号墳

A　遺　構（PLAN22，PL.32・33）

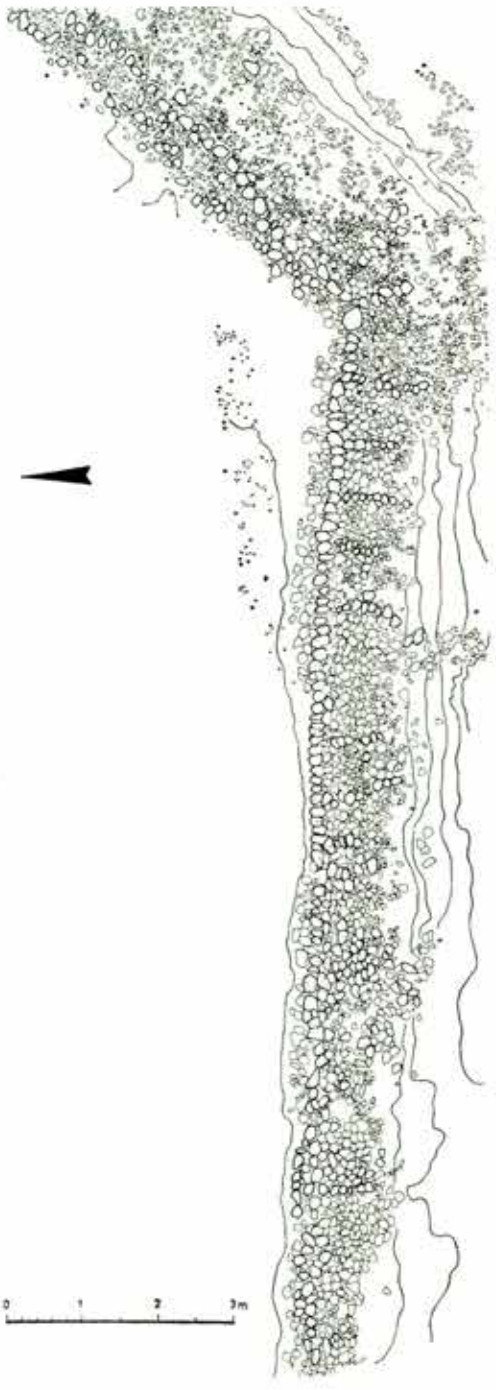


fig.22　平塚1号墳葺石実測図

6AFB-H・I地区において，西面する帆立貝式の前方後円墳の残骸を発見した。遺構は奈良平安時代の整地面下に存在し，墳丘の前方部から後円部にかけての一部，墳丘を囲繞する周濠からなる。古墳の破壊は，平城京造営に際しての条坊設定の段階，つまり第1次整地時期におこなわれ，前方部の削平と周濠の埋立てが同時になされている。しかし，北濠はその後も窪地として残る。

周濠は前方部の北・南・西面部分で検出し北濠の最大幅（くびれ部上縁と北岸の間）は21.m，最小幅（前方部南西隅付近上縁と北岸との間）が15.5mである。南濠の最大幅（くびれ部上縁と南岸の間）22.5m，最小幅20mである。西濠については幅6.5mを発掘したが，西岸は発掘区外にあり確認していない。周濠南北両岸の最大距離は68mである。周濠は素掘りの濠で，南北両岸には築堤や内斜面に設ける葺石は存在しない。濠の底には多少の凹凸が存するが，基本的には平坦面に掘っている。ただ旧地形に従うのか，南西に向って少しく低くなる。濠には黒灰色の粘土ないしは灰褐色砂質土が，30cm内外の厚さで堆積し，堆積土には水性植物の毛根がみられ，一応の帯水状況がかんがえられる(fig.5)。

周濠に向って下降する墳丘斜面には葺石が残存する。河原石を用いて墳丘の裏込土の上に葺く。葺石面は前方部で26°30′前後，後円部で33°40′前後の傾斜角をもつが，北面にくらべて南面の傾斜角の方が強い。葺石は墳丘最下縁に径25cm内外の大型石を基石としてならべ，その上部に下方から上方に河原石を小口積にして葺くのであるが，およそ1.2～1.5mの間隔で中型の仕切り石を基石に直交してならべ，その間を径15cm内外の小型石で埋める。葺石をたどっていくと墳丘の平面形がわかる。それによれば，前方部の規模は東西全長18m，くびれ部幅26.8m，前縁付近の幅28.6mとなる。後円部の下

縁は南面くびれ部から東南方へ18.5m，北面くびれ部の東方へ6m分の長さを検出した。周濠底部の高低差によるためか，正円弧を描いていない。発掘範囲も狭く復原の困難なところであるが，およそ直径50m前後の規模が想定できる。以上のようなことから，墳丘の全長が約70mで，その周囲に馬蹄型の濠をめぐらす帆立貝式前方後円墳がかんがえられるのである。 **墳丘の復原**

前方部西北隅と南面くびれ部を結ぶ線を境にして遺構検出面の土層が相違する。すなわち，東北部では黄色粘土の地山となり，西南部では暗褐色バラス混り土による整地土である。前方部地山部分と整地土の部分にわたって墳丘築成以前に属する蛇行状素掘溝（SD461）が存在していることから，この整地が古墳造営前におこなわれていることがわかる。

後円部の西北部が一段高く残存しており，前方部にくらべて墳丘の状況を比較的よくとどめている。ここでは，後円部盛土の一部とそれをめぐる円筒埴輪列を検出した。後円部付近の地山は海抜73.5～73.6mで，その上部は盛土で築成する。まず，黒色粘土，つぎに暗褐色土と含礫黄褐色土を盛って築成するのであるが，現在では1.5mの封土をとどめるにすぎない。円筒埴輪列は墳丘第2段の裾をめぐる。埴輪位置を壺掘りにして据えつけたのであろうが，掘形は検出できなかった。後円部をめぐる円筒埴輪7本，前方部にのびる円筒埴輪1本をとどめる。埴輪はいずれも基部しか残存していないけれども，円筒埴輪の凸帯を墳丘第1段の高さとするならば，その海抜高は74m前後となる。

後円部に残存する盛土が，囲繞する埴輪列よりも高いことから，後円部が2段築であったことがうかがえる。他方，埴輪列が後円部の西南にまでめぐっていることから，前方部が1段であったことがわかる。前方部北面の葺石の傾斜角を海抜74mまで延長すると第1段築の高さは1.7m前後となり，葺石の幅は約3.3m，後円部南面葺石傾斜角を74mまで延長すると葺石の幅は約3.5mとなる。

検出した周濠の岸は，北岸と南岸とで約1mの高低差を示している。しかし，本来墳丘第1段の高さ程度の築堤をめぐらしたものか，旧地形に従う北高南低の低い岸にとどまるものであったかについては明らかでない。なお，復原しうる墳丘第1段の高さは，ウワナベ古墳の外堤上面とほぼ等しい。

B　遺　物（PL.107・108）

平塚1号墳の周濠および残存葺石の直上には，形象埴輪や円筒埴輪片が散在し，若干の土器片も混じっていた。後円部をめぐる円筒埴輪6本を原位置で検出したほかは，いずれも原位置を遊離していた。しかし，北くびれ部の葺石付近から水鳥形埴輪を集中して検出し，家形埴輪や蓋形埴輪などを前方部の南北斜面及び濠中で検出した。このことから，北くびれ部付近に水鳥形埴輪をおき，前方部頂上に家形埴輪などが配置されていたことが推測できる。

形象埴輪　形象埴輪としては，家形埴輪・蓋形埴輪・水鳥形埴輪・馬形埴輪などがあった。しかし，いずれも細片であり全形をしることが困難である。説明にあたっては個々の寸法は略することとする。

1　家形埴輪(25～40)　家形埴輪の破片には屋根・破風・軒・裾台・壁・柱などの部分があるが，それらをあわせて全体をうかがうことはできない。25は棟に接する破風板頂部の断片であ **家**

る。上端をまるくつくる扁平な板で，正面の合掌部に棟端を貼りつけた痕跡があり，他面には丸棟の一部をとどめる。26は破風からのぞく棟端である。断面が半円形を呈する木口をそぎおとし，木口面にはカマボコ型の周縁にそって一条の沈線文を施す。27は丸棟の一部である。押縁を扁平凸帯であらわし，その間を縦刷毛目で調整する。25・26とともに同一個体をなす入母屋造りの屋根部分を構成するものであろう。

28・29は入母屋造りの四柱屋根部分の破片である。28は四柱屋根の上方切妻屋根に近い部分であり，29は軒先に近い部分で裏面は壁と接するために厚さを増している。ともに2条を1組とする横線を2段にいれ，その間を直線で区切る格子の箆描き文様を施す。

30は一応切妻造りの破風板に想定する。縁が弧状を呈する板の表裏に箆描き沈線文をいれるが，一面の外縁に1線をおき，その内側に2条1組の沈線文をいれる。他面は縁取りの1線だけである。31は丸棟にのせた棟飾り，ないしは押縁をあらわすものであろう。丸棟の頂部にそって横長の2条の粘土帯を人字形に貼りあわせたもので，先端の両面から刻目をいれて格子文様をあらわす。30・31は黄褐色を呈する軟質の埴輪片で同一個体とかんがえられる。

32は切妻の梁をを扁平な凸帯で表現したものであろう。33は壁と柱の部分である。壁には箆できりとった部分をとどめ，入口ないしは窓に接する位置にあたることがわかる。柱は扁平な凸帯を貼りたしてあらわす。34は裾台部と柱部分の破片である。柱は33と同じく扁平な凸帯であらわすが，入口にあたるらしく框をあらわす部分をとどめる。上面の平坦な裾台部は柱を貼付けたのちに，貼合したものである。37は柱を箆描き沈線であらわす隅角部でそれに接する壁に2条の箆描き沈線をいれるのは，壁の横桟をあらわしているのであろう。35・36も壁の破片であり，横桟を3条沈線で表わす。38は左右を吹放ちにする柱の破片である。

40は裾台の隅角部分である。壁に接する部分は上面を平坦にし，側面を斜めに垂下する。外面は丁寧な刷毛目で調整する。39も垂下する裾台部の破片で，沈線文で飾る。

蓋　2　蓋形埴輪（45～50）　蓋形埴輪の破片は比較的多く，頸部および笠部で3個体以上，四方飾板でも3個体以上を確認した。基台部については，円筒埴輪と識別できず，不明である。

49は北濠で検出した。各部分が直接に合致しないが，胎土，焼成，曲率などから同一個体とみられる。半球形の笠部の頂点に円筒形の頸を付す。頸の上端と下端には各1条の扁平凸帯めぐらす。笠部の中程に1条の扁平凸帯をめぐらし，凸帯と縁との間を2条の横線で画し，その間に2条1組の縦線を上下千鳥に配する。成形は基台部からつくりはじめ，笠部の上半部におよび，その後笠部の下部を貼りたしている。頸部の内外および，笠部外面は横刷毛目をおこない，笠部内面は横撫でによって調整する。なお，頸部外面に丹塗痕跡を残す。高さ（笠から頸まで）29.4cm，直径63cmが推定できる。50は小片であるが，頂部の側面に鰭をつけた痕跡があり，49と異なる形態の笠部の存在が推測できる。45はほぼ全形がうかがわれる四方飾板である。受皿を中心にして，翼形の飾板を十字形に貼合したもので，各板の上下には鰭状の飾りを小粘土帯を貼りたしてあらわす。受皿以下の軸部は欠失してない。四方飾りの各側面は箆削りによって形を整える。板の表裏は刷毛目の調整をおこなったのち，箆描きの沈線文様を施す。板と上鰭は弧線で縁取りをおこない，板の中央には内部を3区画する曲長方形を描く。下鰭には縁取りがなく，直線で全体を3区画する。推定高32cm，最大幅74cm。46は類似する四方飾板の破片だが，板中央の曲長方形の中央区に透孔をつくる。これに類する破片は多い。

3　水鳥形埴輪（51～56）　頭部6個，頸部3個，羽部4個の破片があるが，いずれも粘土紐で巻上げてつくる。いずれも破片で接合できるものはない。51・52・53は首を立てる水鳥を表現したものである。直立する頸部に中空の頭部をつけるが，嘴は欠失する。表面を刷毛目と撫でによって調整し，両眼を竹管であらわし，両側に円形浮文で耳らしきものをあらわす。54は首を前方にのばす水鳥を表現したものである。頭部と首との境は不明瞭であり，嘴は基部を残して欠失する。頸が胴に接する胸の付近はわずかに残存するが，胴部は欠失している。表面は指撫でで調整し，竹管文で両眼をあらわすが耳らしきものはない。頭・胸の部分に黝黒色の黒斑があるほかは黄褐色を呈する。胴部の破片では，頸まわりの羽毛を沈線で表現したもの，尻・脇腹部分とかんがえられるものがある。それらの外面はいずれも横撫でで調整する。半楕円形を重ねて羽根を表現したもの(55)と，平行線で尾羽根を表現したものとがある(56)。　水鳥

4　馬形埴輪（57～59）　鞍・鐙・脚の部分の破片である。いずれも北溽から出土した。57は脚の部分である。粘土紐を巻上げて断面が卵形を呈する筒をつくり，下端に蹄をあらわす。58は鞍の後輪から尻繋の部分である。凸帯を貼付けて後輪をあらわし，後輪の磯付近から尻にかけて4条の凸帯を貼りつけて尻繋の革帯をあらわす。内側の2条は交叉する。馬の背から尻にかけては刷毛目で調整し，尻繋は撫で調整したのち，篦で側面を切りおとしている。59は鐙の部分の2片である。輪鐙の部分をを粘土板に貼りつけた表現であるが，粘土板には篦で裁ちおとした側面をとどめており，障泥板上に鐙をおいたものであることがわかる。なお粘土板の剝離面には胴に貼合した際の沈線をとどめている。輪鐙の一部に丹塗痕跡をとどめる。これらのほかに鐙の小片が3片あるが，いずれも障泥板に貼付したものである。このことから，少なくとも2頭以上の馬形埴輪が存在したことがわかる。他に扁平な板に2個を1組とする刺突文をあらわすものがあり，馬形埴輪の部品の1部であろうか。　馬

5　不明形象埴輪（41～44）　42・43は長方形の粘土板に竹管文を施したものである。原形はゆるやかな弧形を呈していたらしく，外縁が内彎する。共に外彎する内縁に剝離面があり，本体へ貼りつけたことがうかがわれるが，41の両側縁には剝離面がなく，縁が雲形の凹凸を呈するようであるから，先端の部分とおもわれる。また剝離面の状況からすれば，42と43は連続する部分の破片ではなく，左右にわかれる。いずれも一面に4個を1組とする竹管文を施し，丹塗り痕跡をとどめる。44は板の端部をとどめるものである。端部はわずかに弧を描くようであり，外面に2条の沈線と綾杉文の描き文様をいれる。盾形埴輪の外縁であろうか。

円筒埴輪　全形をとどめる円筒埴輪はない。60は上下の破片を一体に組あわせたもので，必ずしも同一個体ではない。4条の凸帯で5段にわける円筒の第3段と第4段に一対の円形孔を穿ち，各段の孔は互に直角方向に位置する。外面には縦刷毛目をおこなったのち凸帯をつけ，横刷毛目を施す。刷毛目は粗く，比較的乱雑で，横刷毛目は約5cmの間隔をおいて強弱をつけている。内面の調整は乱雑な斜方向の指撫でおこなうが，第4・5段の内面は左回りの横または斜め方向の刷毛目で調整する。全体に黄褐色を呈する軟質で黝黒色の黒斑の部分がある。復原高62cm，口径33cm，底径20cm。63は肩部から頸にかけての朝顔形埴輪の破片である。頸部に貼付した凸帯の痕跡をとどめる。円筒部と肩部との境に一凸帯を貼りつけ，その下段に1対の円孔を穿つ。内外の調整は円筒埴輪とかわらない。円筒部直径29.5cm。

須恵器　北溽の第2次整地層から8世紀初頭の甕が出土している(fig.24-1)。

3　平塚2号墳

A　遺　　構（PLAN.22，PL.34・35）

前方後円墳

6AFB-G・H地区で西面する前方後円墳の前方部，およびそれを囲繞する周濠を検出した。墳丘の削平は著しく，もっとも保存のよい部分で高さ70cm前後をとどめるにすぎない。墳丘前方部の葺石は辛じて痕跡をとどめるにすぎず，南濠は削平されて痕跡すらとどめていない。

周濠は前方部の北面と西面で検出した。西濠の幅（前方部中央の残存葺石上縁と西岸上縁を結ぶ距離）は10m内外であるが，南方になるにしたがって濠幅を増している。北濠の幅（前方部北面残存葺石上縁と北岸上縁を結ぶ距離）は8m内外である。濠の西北隅角は直角にならず，北岸が約80°の角度で西岸にとりつき，東方に向うにしたがって南に振れている。さらに，北岸は平塚1号墳南岸と共有し，地山で幅約6.5mの外堤をもっている。周濠の底部はほぼ平坦面をなすが，東北方が高く，西北方が低い。底には20cm内外の厚さで褐色粗砂や黒灰色粘土が堆積し，滞水した状況をとどめる。また，墳丘に接する部分には落下した葺石と埴輪片が混在した(fig. 5)。

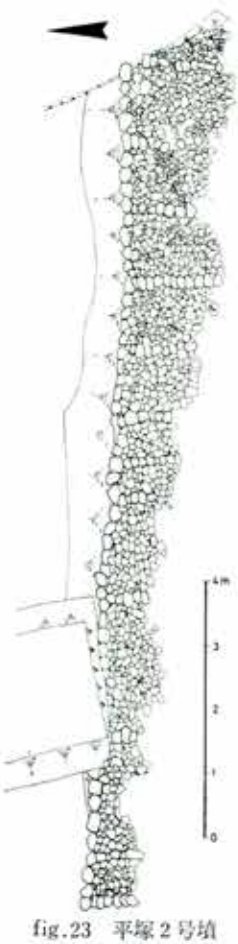


fig.23　平塚2号墳葺石実測図

墳丘の裾部には，河原石でふいた葺石が残存する。葺石は斜面に褐色土と黒灰色の裏込め土を敷いたのち，1号墳と同じ方法でふく。すなわち墳丘下縁に径25cm内外の大型の河原石を基石としてならべ，その上部に1～2mの間隔をおいて基石に直交する1条の仕切り石を積みあげる。この仕切り石と仕切り石の間は，径15cm内外の小型石で埋める。西面葺石下縁はほぼ全長分を検出したが，北西隅付近では奈良時代のSD485によって大きくえぐられている。また南方ではSG520の洲浜として再利用しているため，比較的保存がよかった。南面葺石は破壊が著しく辛じて残石をとどめるにすぎない。前方部北西隅の角度は約74°30′であり，北面葺石の傾斜角29°，西面葺石の傾斜角は約28°である。

前方部墳丘の西面下縁の全長は41m，北面下縁は21mを検出したが，前方部はさらに東方と南方にのびる。北濠と同規模の南濠を想定するならば，墳丘下縁で東西長21m以上，南北幅42.5m(復原値)の前方部に，8m内外の幅で周濠がめぐっていたことになる。前方部の遺構は地山面で検出したが，西面葺石付近で古墳築成以前の溝を確認している。なお，平塚1号墳後円部北葺石下縁が海抜72.2m前後にあり，2号墳前方部北葺石下縁が海抜71.0m前後にあることからして，2号墳の墳丘が全体的に1号墳よりも1m前後低くかったことが想像できる。

後円部についてはまったく手掛りをつかんでいないが，おそらく東三坊大路付近がほぼ中心たにあたるめ，平城京造営時に壊滅的に破壊されているであろう。

B　遺　物 (PL.109)

平塚2号墳からは，形象埴輪，円筒埴輪，須恵器を検出した。それらは，前方部の北面，西北隅，西面，南面にわたる濠ないしは葺石上面で破片になって発見されたものであり，原位置で検出したものはない。出土地点別の埴輪の種類は平塚1号墳と同じような傾向を示す。すなわち，前方部西面には動物及び盾の埴輪があり，南面くびれ部付近には水鳥が多い。家形・蓋形埴輪や円筒埴輪は各所に散在していた。

埴　輪　形象埴輪としては，家型埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・短甲形埴輪・水鳥形埴輪・動物形埴輪があり，ほかに円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪などがある。それらはいずれも細片であり全形をうかがうことはできない。

1　家形埴輪 (63～68)　63は切妻屋根の破風板の剝離した部分である。沈線で網代と押縁をあ　家
らわす。棟木端は欠落するが，妻通り壁の痕跡をとどめる。他の屋根の破片に，押縁を扁平な凸帯であらわすものがある。そのほか格子文様で網代をあらわすものもある。屋根はまず壁の上端から棟方向に粘土紐を貼りたしのちに軒先を貼ったようである。軒裏には往々にして軒先の荷重を維持するために，粘土紐の補強がみられる。屋根の外面には刷毛目の調整を施す。

64は高床式建物床部分の破片である。下の柱部分と床以上の壁体とを一枚の粘土板につくり，柱部分は扁平凸帯を貼りつけてあらわすが下柱は篦で切りぬいてあらわす。外面中程には上面が平坦な，く字形の縁をつける。また，縁よりも下位の内側に横位の粘土帯を貼りつけて床をあらわす。上・下の柱および縁側の外面には幾何学的な篦描き文様を施す。なお，縁側の裏に位置する部分に下柱の位置を決める際の篦描きをとどめている。65も高床縁部の破片である。剝離痕跡から，それが柱位置にあたることがわかる。縁側面には65と同様の幾何学的文様を篦描きで施している。つくり方は64とかわらない。66は据台部の隅角部分の破片である。ほかに妻通りと側通りの破片がある。その形は上面を平坦にし，側縁を斜めに垂下し，その外面には篦描きの格子文様を施す。67は壁体部分の破片であり，柱を沈線によってあらわす。68は厚手で扁平な破片である。篦描き文で円弧をあらわす。裏面に剝落の痕跡があって疑問もあるが，壁体の一部にかんがえておく。

2　蓋形埴輪 (69～75)　蓋形埴輪としては，笠部，四方飾板，軸部のなどの破片があるが，1　蓋
個体にまとまるものはない。72～75は笠部の破片である。頸部の状況は不明であるが，それによると，まず基台部の上端から粘土紐を貼りたして笠の上半をつくり，その後に下半部をつくることがわかる。笠部の外面には横刷毛目を施し，内面は指撫でによって調整する。縁部はほぼ直立し，外面にひだをあらわすが，刷毛目の強弱によってあらわす(74)ものと，沈線であらわす(75)ものとがある。71は四方飾板を支える軸部である。受皿の縁部を欠くが，その内面には飾板の位置を示す2本1組の刻線を十字にいれている。69・70は四方飾板の破片であるが全形を知ることはできない。両面に篦描き文様を描くが，構図は平塚1号墳とことなる。

3　盾形埴輪 (76・77)　いずれも円筒に粘土板を貼りつけたものである。76は側縁部分の破片　盾
である。縁端部を篦で裁ちおとし，撫でによって調整する。内面は指撫での調整をおこない，円筒に接する部分の間隙に別の粘土を充塡する。また側縁を補強するためにある間隔をおいて

横位の粘土帯を貼りつける。表面には，綾杉文，鋸歯文などの文様を施している。淡白黄色を呈する硬質で，内外ともに丹塗をおこなう。77も76と同じつくりの側縁部分の破片である。ただ文様が76に比して簡略であり，別個体のものである。

三角板式短甲

4　短甲形埴輪（78）　短甲と草摺の接する部分と草摺部の細片がある。78は甲部に連らなる扁円筒形の基台部に草摺を貼りたしている。表面には三角板式の短甲を推測しうる箆描き文と，腰帯を示す斜格子文をあらわす。草摺部の破片は，横線をいれ，その間に線鋸歯文を施して鉞しの状況をあらわすものである。

水　鳥

5　水鳥形埴輪（79～81）　各部分の小片で，全形をうかがうことはできない。80は翼部分の破片である。粘土板の側縁を翼形に削りおとしている。羽根は表現せず，胴部との接合状況は不明である。淡黄色を呈し，硬質。81は足爪部分の破片で，基台とおもわれる粘土板の上に3爪を貼りつけているが1爪を欠失している。79は頭部の破片である。断面が楕円形を呈する頸部に球形の頭部と，突出する嘴をつくる。嘴は横線で上下にわかち，基部は刺突文で2鼻孔をあらわすしている。顔面の中央に竹管で両眼をあらわしている。粘土紐巻上げで中空につくる。胎土は黄白色を呈し，軟質である。

6　動物形埴輪（82～85）　動物をあらわす埴輪片があるが，その種類を確定することはできなかった。82は左後脚腿部の破片である。残存する下部はほぼ腰部に位置するのであろうが，ここでは断面を卵形とし，それ以上を円形に粘土紐を巻上げている。外面は指撫でで調整する。83は腰部から足先に至る管状の破片である。粘土板を断面卵形に折曲げてつくる。外面は上から下への指撫でで調整する。85も断面円形を呈する脚の破片であるが，足先をつくりだし，三

猪

角形の切込みをいれており，偶蹄目の動物であることがわかる。鹿の脚であろうか。84は頭部の破片である。中空の頭部の正面は平坦をなして粘土でふさぎ刺突文で2個の鼻孔を刻線で口をあらわす。目は杏種形に切込んで表わしている。色調・土質から85と同一個体をなす可能性もあるが，表現からは猪の頭部であろう。

円筒埴輪（86・87）　普通の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪とがある。いずれも破片で全形をしることができない。ともに底径20cm前後，約13cmの間隔で凸帯をめぐらしているようである。

円筒埴輪（87）は，第3段までしかとどめないが，本来は4条の凸帯で5段に区画するものであろう。透孔は円形で第2段に配するものと第3段に配するものとがある。まず，粘土帯で第1段の基部をつくり，それ以上を粘土紐巻上げでつくる。外面は縦刷毛目の後，凸帯を貼り，各段を横刷毛目で調整する。その際，第2段以上は約5cmの間隔をおいて強弱をつけるが，第1段は横刷毛目は連続せず工具を器面から離し，さきの刷毛目に重ねる。また，第1段の横刷毛目を略するものもある。そのほか，第2段以上で，横刷毛目のあとで，再度部分的に縦刷毛目を施すものがみられる。内面は左上方から右下方への指撫でによって調整するが，第2凸帯を境にして上下が不連続を呈する。全体に粗い作りで，淡黄色を呈する軟質であり，黒斑はない。

朝顔形埴輪（86）は，口縁部を欠き円筒部と口縁部との境をとどめる破片によって存在をしるにすぎない。頸部に凸帯をめぐらし，口縁部は外反する。肩部は弧線を描いて円筒部の凸帯に至る。肩部外面にはさきに縦刷毛目をおこなったのちに断続する横刷毛目をおこない内面は撫で調整する。口縁部外面は縦刷毛目で，内面は斜刷毛目を施す。肩部下の凸帯の下段に円形孔を穿つものがあり，箆描沈線文を入れるものもある。86は砂粒が多く赤褐色を呈する極硬質である。

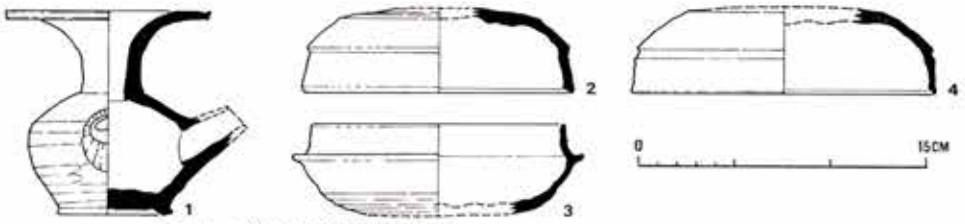


fig.24　古墳出土須恵器実測図　1:平塚1号墳，2・3:平塚2号墳　4:ウワナベ古墳

須恵器　前方部西濠から埴輪類に混って須恵器を検出した。蓋(2)と杯(3)がある(fig.21)。

蓋（2）　頂部と口縁部との間へ稜線は鈍く，比較的扁平な頂部には左回りのロクロ削りをおこなう。口縁端部は少しく内傾する。直径14.2cm。

杯（3）　やや内傾する口縁端部と蓋受部の端部とをまるくおさめる。平らな底部外面は左回りのロクロ削りとする。口径19.3cm，高さ4.8cm。

須恵器はいずれも表面に青灰色を呈する部分もあるが，内面は暗赤紫色を呈し風化が著しい。硬質である。これらの須恵器が平塚２号墳築成時のものか，否かについては決め手はないが，おそらく墳丘上に置かれたものであろう。陶邑古窯群ＴＫ10型式に類似する。

4　古墳の検討

今回の発掘調査で検出した古墳に関連する遺構は，いずれも局部ないしは残骸にとどまり，３古墳を比較するじゅうぶんな資料をえていない。

古墳の構造　ウワナベ古墳東外堤の調査によって，外堤の両肩に埴輪列をめぐらし，その内側の斜面に葺石を配し，外側に素掘りの濠を一重にめぐらしていることが判明した。埴輪列には原則として鍔付円筒埴輪を用い，処々に蓋形埴輪をのせた円筒埴輪をおいた状況がうかがえた。これはかつて調査されている陪冢大和５号墳の埴輪列の状況とよく一致している。*　外側の濠は，奈良時代に埋立がおこなわれ，外堤に添って新しい溝(SD734)が開穿された。この溝は奈良時代の道路の側溝としてかんがえることもできるが，施釉陶器などを含む比較的多い遺物からすれば，奈良時代における陵墓の修築ないしはその祭祀に関連する遺構かもしれない。いずれにせよ，今日の調査でウワナベ古墳の規模を推測しえたことは大きな収穫であった。

ウワナベ古墳

平塚１号墳・２号墳は西面する帆立貝式前方後円墳と前方後円墳であり，ともに周濠をめぐらしている。また，墳丘には葺石と埴輪を配するが，外堤にはそのような施設がなかった。破壊状況からすれば，平塚１号墳のほうがよくのこっている。すなわち，平塚２号墳は平城京条坊設置時に壊滅的に破壊されたが，平塚１号墳は前方部および周濠の破壊にとどまり，後円部は十六坪の居住地内に築山風にとりこまれている。この後円部の一部が，1869年の鉄道開設時まで存続したであろうことは，江戸時代の法華寺領田図，1925年に作成された「奈良市法華寺町字限地図」によって明らかである。このような観点からすれば，現在近傍の不退寺境内に保存されている凝灰岩の石棺棺身や，横浜市三景園に保存されている伝法華寺出土の石棺蓋が，この古墳に属する疑いもでてこよう。

平塚1・2号墳

* 奈良県『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第４輯』1949

埴　輪　ウワナベ古墳東外堤で検出した円筒埴輪および鰭付円筒埴輪は，陪冢群の1基である大和5号墳の埴輪，調査時に採集した墳丘部から流出した埴輪片とよく一致しており，ウワナベ古墳築成時のものとみてよい。

円筒埴輪・鰭付円筒埴輪はともに，口径と底径との差があまりない7段の円筒形につくる。その製作工程はつぎのように推測した。まず粘土帯で基部をつくり，その上に粘土紐を巻上げ，円筒を形成する。円筒埴輪では2段分を巻上げ単位とし，全体を4巻上げ単位で仕上げる。その成形は一気におこなったものではなく，第2巻上げ単位をつみあげたのち一旦乾燥をおこない，その後に第3巻上げ単位以上をつみあげる。外面の調整ではさきに縦刷毛目をかけ，その上に一定の間隔をおいて休止する断続横刷毛目をおこなう。内面の調整は指撫でを主とし，縦刷毛目と横刷毛目を併用する。鰭付円筒埴輪もおおむね円筒埴輪に準じてつくるが，その一部に巻上げ単位が凸帯と対応して，7巻上げ単位でつくるものがある(鰭付円筒埴輪A)。外面調整は縦刷毛目と断続横刷毛目とでおこない，内面調整は巻上げ単位ごとの縦刷毛目である。こ

技法の新旧　のような成形・調整技法は，円筒埴輪と鰭付円筒埴輪Bのそれにくらべてより古い要素であり，ウワナベ古墳の埴輪には新旧の技法が共存していることになる。

平塚1号墳の円筒埴輪は小型であるが，口径と底径との差があまり大きくない円筒形を呈する。全体を5段につくる円筒埴輪は4巻上げ単位によって成形され，内外の調整法はウワナベ古墳の円筒埴輪と同じである。しかし，胎土には粗い砂をふくみ，刷毛目の密度が粗く，ウワナベ古墳の埴輪に比して粗雑なつくりである点はまぬがれない。大きさや胎土などに相違点があるとはいえ，この2古墳の埴輪がほぼ同じ時期に共存する可能性はつよい。

平塚2号墳の円筒埴輪については全形をしりうるものがなく，巻上げ単位をたどることはできなかったが，1号墳の円筒埴輪とほぼ同じつくりである。ただ，2号墳の場合では内面調整の主流が指撫でであり，刷毛目が口縁部付近に限定されていること，口径が底径よりも大きいなどの点において相違する。このようなことからすれば，平塚1号墳よりも平塚2号墳の埴輪のほうが少しく新しい傾向を示しているといえよう。

黒　斑　埴輪の検討に際して，焼成時に黒斑を生じているか否かが重大な問題となる。すなわち，黒斑を生じる比較的軟質の埴輪は，土師器などと同じく窖窯を用いずに焼成したものであり，黒斑を欠く比較的硬質の埴輪は，窖窯によって焼成した可能性が強いからである。* この相違は，埴輪生産における一つの大きな画期としてとらえることもできる。さて，平塚1号墳では，すべての埴輪に黒斑現象がみられる。しかしながらウワナベ古墳と平塚2号墳の埴輪には，黒斑は皆無であり，淡黄色ないしは灰黄色をおびた硬質のものをふくんでいる。さらに，それらのなかには，従来から「須恵質埴輪」とよばれてきた赤紫色を呈する硬質の埴輪をふくんでいる。この種の埴輪はウワナベ古墳の造出し付近で採集した一群の須恵器片ときわめて類似しており，両者があたかも同じ窖窯で焼成したかの感をうける。黒斑のない埴輪は，須恵器窯の導入および普及という段階の所産とするのが至当であろう。このようなみかたからするならば，時期を接して存在する3古墳の前後関係は，平塚1号墳，ウワナベ古墳，平塚2号墳という順序になる。そうして，ウワナベ古墳の年代は，須恵器窯の開始とされる5世紀中葉を遡らないことになる。しかしながら，上述のように平塚1号墳とウワナベ古墳とがほぼ同時期に築成された可能

* 川西宏幸「埴輪研究の課題」(史林　第56巻4号　1973，p. 108)

性もつよい。というのは，さきにのべたように，成形・調整の面でより古い手法を一部にとどめるウワナベ古墳の埴輪が，新しい焼成技法を採用し，古い成形・調整手法をとどめていない平塚1号墳の埴輪が古い焼成技法にもとずいているからである。それは1種の過渡期現象とみることができるとともに，新技術の採用みられる時期差は造墓者のもつ権力の優劣に起因するのであろう。

ウワナベ古墳の埴輪が優秀で大型品であることや製作数量がきわめて多数にのぼることからすると，平塚1号墳の場合とはことなる隔絶した埴輪製作体制を維持していたとみるべきであろう。その体制内には，成形・調整手法にみられる保守的な伝統性を温存する。と同時に，革新的な新しい焼成の技術が初期須恵器の場合と同じように独占的に保有されたのである。平塚1号墳の埴輪製作の体制はあらゆる面でウワナベ古墳のそれよりも劣っていたとみなければなるまい。そのことから，成形・調整手法の面で新しい手法を導入しえても，焼成段階での新技術を享受する体制になかったのである。 **製作体制**

近接して築造するウワナベ古墳と平塚1号墳の間における埴輪製作には緊密な技術交流は存在しない。だが，平塚2号墳とウワナベ古墳との間には若干の類似関係がみとめられる。それは2号墳において，新しい焼成法を採用していることや，蓋形埴輪の類似という点である。すなわち，蓋の笠部に凸帯をつくらず，縁部を直立させ，篦描き沈線または押圧痕でヒダをあらわす形態が，平塚1号墳になく，ウワナベ古墳に存在するからである。つまり平塚1・2号墳の埴輪が同一系統上の埴輪製作体制内でつくられたとすれば，2号墳の段階になってウワナベ古墳の埴輪製作体制との交流がおこなわれたことになる。

古墳群　佐紀盾列古墳群中におけるウワナベ古墳については，主として古墳の平面規格の側面から多くの研究者が言及している。しかし，今回の調査では積極的に古墳群の問題を論じる資料がないので，ここではそれにふれないことにする。

平塚1・2号墳の前駆的な古墳としては不退寺裏山古墳があり，この古墳との位置関係からすると，3基の古墳が同一系譜につながる可能性はつよい。他方，墳形の状況からすれば，ウワナベ古墳はコナベ古墳におくれて築成されたとする通説は妥当的なところであろう。つまり，佐紀盾列古墳群の西端に不退寺裏山古墳群とでもいうべき1群の古墳群が接している状況を呈している。平塚1号墳はウワナベ古墳に先行する可能性もあろうが，平塚2号墳は明かにウワナベ古墳の築成後につくられている。さらにウワナベ古墳と平塚2号墳との間には埴輪製作の面で類似性があり，両古墳が主従関係にあることを示している。要するに平塚2号墳の段階になって不退寺裏山古墳群は佐紀盾列古墳群にくみこまれ陪冢になったのではあるまいか。ウワナベ古墳の北方の陪冢群については発掘された例があり，* 埴輪からすれば，陪冢群には2種類がある。大和5号墳のように主墳とまったく同じ埴輪を樹立する場合と，大和3号墳のように小型で粗雑な埴輪を樹立する場合とである。これは，ウワナベ古墳の陪冢群に，主墳と同じ技術集団によって築成されたものと，墓域のみの割譲をうけそれ以外の面では独自に築成したものとの2系列が存在したことを示している。平塚2号墳が後者の系列にはいることはいうまでもない。そして，この前方後円墳の築成が，佐紀盾列古墳群の終焉でもあった。

* 奈良県『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報　第4輯』1949

VI 考　　察

1 遺　　跡

6AFB区の発掘調査を通じて，平城京における条坊制，および坊内居住地に関する資料をえた。ここでは，まず京全体のなかにおける東三坊大路の位置にふれ，つぎに一条三坊十五・十六坪に形成された居住地の検討におよぶ。

A 条坊の復原

大路の発掘

大　路　6AFB区の発掘調査によって東三坊大路の位置が決定し，平城京条坊制に関する新知見を加えることになった。平城京の条坊制については，さきに1800尺の方格地割りをきめ，この条坊計画線にもとずき，大路幅８丈，小路幅４丈，さらに朱雀大路幅28丈，二条大路幅16丈，一坊大路幅12丈と推測したことがある。* それらの数値は水田の形状や畦畔の状況から割り出したもので，発掘調査による遺構上の計測値ではなかった。その後の調査によって，平城宮西面中門，同南門，朱雀門，および宮の東南隅に接する二条大路，東一坊大路，二条条間大路，朱雀大路などの遺構が明らかになり，条坊に関する資料が豊富になっている。各地域の発掘調査では，宮城諸門が1800尺の条坊計画線上に位置することが立証されたが，大路の幅員については推測とことなる結果をえた（PLAN 1，fig. 25）。

東一坊大路　平城宮跡第32次調査と第39次調査において，二条大路と東一坊大路との交叉点と平城宮東院南門外で東一坊大路の全幅を検出した。** 大路の東西に添って側溝があり，西側溝幅８尺，東側溝幅４尺で，両側溝の心心距離は80尺であった。側溝の外側には居住区を画する築地があるが，二条大路の南では築地間心心距離が110尺となる。二条大路の北では平城宮大垣と西側溝の間に幅40尺の塁地を設けているので，築地間心心距離は130尺余りとなる。側溝間の中軸，つまり大路中軸線は東院南門の中心にあたり，中軸線は朱雀門心から532.78m（0.296m×1800尺）となる。その後，五条条間大路付近で朱雀大路の調査をおこない，路面幅約70m，東西側溝心心幅74mを確認した。***

二条大路　第32次調査で，平城宮の東南隅に接する二条大路を検出した。北側溝幅８尺，南側溝幅４尺，側溝間心心距離が126尺であり，路面幅は120尺となる。築地間距離は宮の南面塁地をふくみ，心心距離の計測値は179尺であるが，造営方位の振れなどによる誤差を見込むと計画尺としては180尺といえる。二条大路の条坊計画線は朱雀門心，つまり宮南面大垣心の南方80尺の線にあり，塁地として40尺を設定するので，条坊計画線が二条大路北側溝心の南40尺の線にあることになる。このようなことから，二条大路自体の中軸線は条坊計画線から南方へ23尺

* 「平城宮の四至と条坊」『平城宮報告Ⅱ』p. 99　　1967. p. 37）
** 「昭和41年度平城宮発掘概報」（奈文研年報　　*** 『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974

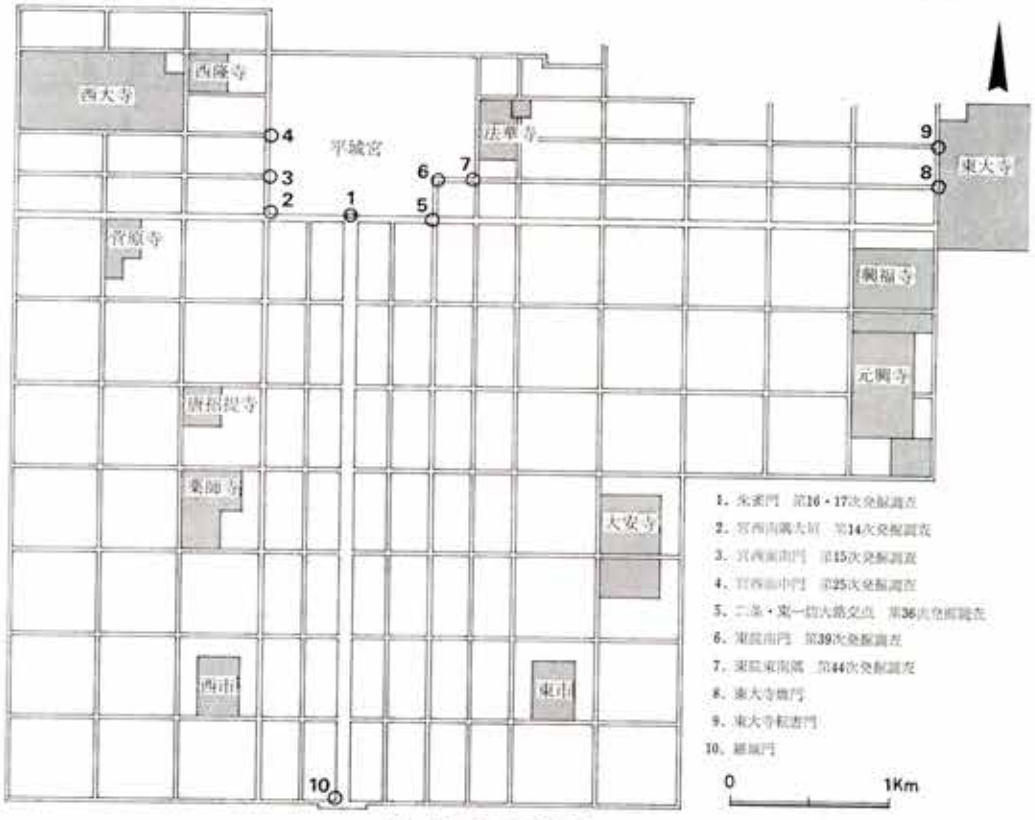


fig.25　平城京条坊図

〔(126尺÷2)−40尺〕ずれることになる。東一坊大路以東の二条大路の幅員については，南側溝と築地が東一坊大路以西の延長線上に位置することが判明しているにとどまり，北側溝については調査がおよんでいない。南側溝の線を東一坊大路以西と同じ位置に揃えていることからすれば，北側溝についても同様にかんがえることができ，幅員は126尺とすべきであろう。以上のことから二条大路設定の方法についていえば，平城宮の南面塁地40尺幅を確保するため，北側溝を条坊計画線の北40尺の位置におき，南側溝を条坊計画線の南86尺の位置に設けたのである。

二条条間大路　第39次調査で西部を調査し，第44次調査で東部を調査した。この大路の側溝は，2回ないしは3回の改修を受けている。平城京造営当初の側溝として確認できたものは，第39次調査で検出した東院南門外を流れる北側溝 SD4999 と第44次調査で検出したところの南側溝SD5785である。二条の側溝はともに東院南門が構築される養老〜神亀年間に埋立てられたとみてよい。側溝幅はともに8尺である。対応位置で遺構検出をおこなっていないため数値に正確を期しえないが，側溝間心心距離は80尺と推定できる。この条間大路中軸線と条坊計画線との関係については，北側溝と二条大路北側溝との心心距離が900尺（264.4m÷0.2938）となり，造営尺の短いうらみはあるが大路中軸線と条坊計画線とが一致することになる。

路面数の変更

平城宮東院成立後の条間大路幅は，造営時の幅員に比して狭くなる。すなわち，第2期には40尺，第3期には50尺に変更する。第2期の東院南面大垣は，南門の梁行中央柱にとりつく掘立柱塀である。この塀は大路の旧北側溝SD4999の北方40尺に位置している。しかしながら，塁地の幅を広くしたために大路北側溝が約2.2m南へ寄り，路面幅を減じることになった。第3期では大垣を築地に改修し，南門の梁行のうち北の柱間にとりつける。このとき，東院東南隅の位置は第2期の位置を踏襲したため，築地の方位が東で南に大きく振れ，塁地の幅が東部で

狭く西部で広くなる状況をまねいている。

以上のように，二条条間大路は東院の造営に影響されながら変化をたどるが，平城京造営当初の大路は東一坊大路と規模を同じくしている。少ない例であるが実際に検出した大路から，以下のような共通点を見出すことができよう。東一坊大路と二条条間大路は，条坊計画線を中軸として左右に40尺振りわけた位置に側溝を設け，二条大路では条坊計画線に対して北へ40尺，南に80尺（実際は86尺）の位置に側溝をおく。いずれも条坊計画線から40尺の倍数値で振りわけられている点に注目しなければならない。従来は平安京の例にならって大路幅員を築地心心距離としてきたが，平城京の遺構では側溝の心心距離を基準とすべきであろう。つまり，大路の両側溝は，条坊設定時における縄張り的な役割りを負っているのである。

条坊の方位　現在までに確認しえた平城京の条坊計画線の位置は，fig.25の通りである。それらの計測値にもとずき，国土座標を軸とする条坊方位の振れをみてみよう。

朱雀大路の振れ

朱雀大路　羅城門心と朱雀門心とを結ぶ朱雀大路中軸線の振れは，北で西に0°15′41″である。他方，朱雀門と平城宮推定第1次内裏中心を結ぶ平城宮の中軸線は0°15′20″となり，朱雀大路の振れとほぼ等しく，同一の規矩によっていることが類推される。

南一条大路　南一条大路については発掘調査で確認していないが，平城宮の西面中門と東大寺転害門とを結ぶ中軸線の振れをしることができる。東で北に0°05′09″振れている。

二条条間大路　東院南門心の南80尺（23.6m）に大路中軸線をおき，これと平城宮西面南門および東大寺焼門を結ぶ中軸線の振れを算出する。平城宮西面南門と東院南門外との間では0°03′45″東で北に振れ，東院南門外と東大寺焼門の間では0°15′08″東で北に振れている。

二条大路　二条大路の中軸線は宮の東南隅で確認しているが，軸線の振れを算出しうる距離での発掘はおこなっていない。だが，その北方で平行する宮の南面大垣については，朱雀門をはさむ東西の隅が確認されている。その振れは，朱雀門から西では東で北に0°04′23″，朱雀門から東では東で北に0°03′23″となる。南面大垣と二条大路が平行するものとかんがえ，東西の平均値3′53″を宮南面における二条大路の振れとみることができよう。

以上のべたように，南北方位は朱雀大路中軸線の振れ15′弱，東西方位は宮の周辺部で4′前後，東大寺焼門まで離れると15′余りの振れとなる。つまり，現在確認できる範囲内において京の造営方位をみるに，国土座標系を軸にして逆時計廻りに3′台から15′台の角度で振れていることになる。*

東三坊大路　発掘調査で確認した東三坊大路に関する遺構は，路面敷と東側溝である。大路の東と西に位置する築地については，これまで東三坊大路に比定した水田の左右にのびる畦畔を想定し，その東西幅は22m前後であった。調査に際して，この畦畔を発掘することはできなかったが，東側溝の東にのびる畦畔を築地の痕跡に推定することは可能である。

---

* これらの平城京造営方位を真北基準に換算して唐長安城外郭城基の方位と比較すればつぎのようになる。（「唐長安城地基初歩探測」考古学報1958—3）

平城京			長安城		
朱雀大路中軸	22′30″	北偏西	東城基	15′41″	北偏西
平城宮中軸	22′09″	〃	西城基	22′02″	〃
二条条間大路	21′57″	東偏北	南城基	7′32″	東偏北
宮南面大垣	10′42″	〃	北城基	20′12″	〃

長安城の実測基準が真北であるとすると，その方位は7′～22′，平城京の場合は10′～22′となって，それぞれに施工程差はあるが，極めて類似した方位を示している。

西側の畦畔を坊の東面築地に仮定するならば，その東方約4mに位置するSD570を大路の西側溝に比定することもできよう。この場合，大路の幅員(SD650とSD570との心心距離)は50尺となる。他方，西側の畦畔に接するSD566Bを西側溝に比定するならば，その幅員は75尺程度になる。SD570が中世の氾濫をうけ9世紀以前に遡る証拠がないこと，SD566Bの検出範囲がきわめて狭いことから，現在はいずれともきめ難い。しかし，京の大路幅を上述の諸例でみたように80尺とするならば，SD566Bを西側溝に比定するのが妥当である。

西側溝の決定

東三坊大路の正確な中軸線を求めることができない現在，方位を明確にすることはできない。東側溝の振れを測定するならば，北で西に40′弱振れることになる。40′の振れは，他の条坊方位にくらべて大きい。このことは，検出した東側溝が9世紀初頭に大規模な改修を受けた後のものであり，平城京造営当初の方位を失ったためであろうか。朱雀門心から東三坊大路東側溝心までの距離は1599.63mである。これを条坊計画線にあてはめ，〔(1800尺×3)＋40尺〕で単位尺を換算すると0.294mとなる。

平安時代の東三坊大路

発掘調査の結果，東三坊大路東側溝SD650はA・Bの2時期に区分できる。いずれも平安時代の遺物を包含し，奈良時代末期ないしは平安時代初期に大改修を受けたのちに土砂が堆積したものである。* 流路の変化や堆積層の相違から識別しうるSD650の時期について，鋳造年次をことにする銭貨の出土状況が有力な手掛りとなる。ただ，注意しなければならないのは，発掘区の随処で確認した三層の分離が，延長240mにおよぶ全域において均一に存在しないということである。場所によっては，層位の攪拌や逆転があった。SD650Aからは，和銅開珎から貞観永寶に至る9種の銭貨を検出した。そのうち，870年に鋳造された貞観永寶がもっとも新しく，溝の下限の1点を示す。上限については，この溝に存在した告知札の年紀によって，天長5年(828)を一つのよりどころにすることができる。銭貨の出土量からすれば，和銅開珎から隆平永寶までの量が少い傾向であるのに対し，富壽神寶から承和昌寶にかけての銭貨が多くなる。このことは，下層の堆積開始が富壽神寶の鋳造年である818年に近い時点であることを暗示しているとみてよい。他方，SD650A様式の土器は，平城宮のSE272B様式土器に後続する様式であることからすれば，遺物堆積の盛時が835年以降になる。SD650Bはさらに上下2層にわかれる。下層からは萬年通寶から延喜通寶に至る9種の銭貨を検出した。その上限については，貞観永寶以後，寛平大寶の鋳造年である890年の間におくことができよう。最下限は延喜通寶の存在によって，その鋳造年である908年頃におくことができる。上層からもほぼ下層と同種の銭貨を検出したが，そこでは延喜通寶を欠いていた。とはいえ，他の遺物については下層との間に極端な時間差がみとめられないことから，908年に後続する短期内に埋没したものとして差支えなかろう。

以上のようなことから，8世紀初頭に開通した東三坊大路が9世紀全般を通じて活用維持されていたことがわかる。

北京極大路　東三坊大路は水田の地形によって，ウワナベ古墳の南外堤線までたどることができる。推定南一条大路中軸線の北方1800尺の位置が北京極大路の心となるが，その位置はウワナベ古墳の周濠にあたり，設定不能である。実際東外堤の発掘を通じてもそれらしき遺構は検出

* 『延喜式』左右京式に「凡京路，皆令当家毎月掃除」とか「凡宮城辺朱雀路溝，皆令雇夫掃除」とあり，道路と側溝を維持するため定期的な掃除がおこなわれていることがわかる。また，東一坊大路側溝においても側溝の堆積は奈良時代末の最終段階のものであった。

されていない。6AFB-J地区で検出したSD444は，ウワナベ古墳外堤の東南隅をめぐる奈良時代につくられた溝であり，この溝の南側が京造営時の整地を受けている。SD444とI地区のSD451の間約24m幅の部分は，奈良時代では顕著な遺構はなく空地であり，むしろ奈良末・平安時代の小規模建物が集中している。このあたりが，北京極大路であろう。約24m幅の水田地形はウワナベ古墳の南外堤に添って西進し，西南隅で北上する。おそらく，これが北京極大路の姿であろう。いうなれば，ウワナベ古墳の南外濠を拡幅して大路に利用しているのである。北京極大路の北側溝に想定できるSD444は北上してSD734と結び，東外濠を路面とする道路の側溝となって北上するようであるが，京外に出た東三坊大路が西に迂回するか否かは不明である。

このほか，F地区には北一条大路，A地区には南一条大路が存在ないしは近接することになる。しかし，発掘区内では築地や側溝で画する実際の遺構を検出していない。

小　路　6AFB-C地区の東寄りに存在するSA620には，開口部を設けている。この部分は，ちょうど左京一条四坊三坪と四坪との間に存在する小路に相当するようである。いま開口部の中心をA点とよび，南一条大路と二条大路からの距離をみてみよう。

南一条大路中軸線が平城宮西面中門心と一致し，二条大路の条坊計画線が朱雀門心の南80尺の位置にあることはすでにのべた。そこで，A点から，平城宮西面中門心，朱雀門心までの国土座標系における南北距離を求めると，それぞれ135.17m，642.64mとなる。これをさきの造営方位で修正すると，南一条大路からA点間の距離は132mとなり，二条大路とA点までの距離は640.87mとなる。一方，条坊計画線による小路の位置は2大路間の$\frac{1}{2}$であるから，南一条大路とA点までの距離は450尺，朱雀門心からA点までの距離は 1800尺＋450尺－80尺＝2,170尺となる。これにより，それぞれの単位尺を求めてみると，前者では0.2933m（132.0m÷450尺），後者は0.2953m(640.87m÷2,170尺)となる。0.2953mは造営尺として適当であるが，0.2933mはやや短い。しかしながら，仮りに0.2953mを造営尺とすれば，450尺×0.2933m＝132.88mとなり，1m以内のずれにとどまる。南一条大路の条坊計画線の振れが5′以内ならば，A点は小路の中軸線に一致することになる。だが，ここには小路の存在を明示する側溝などは存在しない。遺構面がかなり削平されており，西方のSD611との関係についても明らかでない。また，時期を決定する遺物も発見されていないので，ここでは，しばらく坊内を区画する柵とかんがえるにとどめておきたい。

B　左京一条三坊十五・十六坪の検討

6AFB-F～J地区の遺構のうち，大規模建物を中心とするG～I地区と小建物が累重するJ・F西地区とは性格がことなる。ここでは，各地区の時期別の遺構配置からのべよう。

G北～I地区の遺構　この地区では，整地土層の相違から検出遺構を前後3期に類別できる。

第1次整地面で検出した遺構は，建物7棟（SB471・SB481・SB482・SB483・SB490・SB498・SB528），溝2条（SD477・SD527），井戸2基（SE464・SE495）であり，I期に属する。第1次整地面で検出した遺構がすべて同時に存在するわけではない。SB471，SB482，SD477は重復して存在し，同時のものではない。つまりI期は3小期に区分できるのである。重複して検出された3遺構のうち，SD477が2棟の建物の柱穴を破壊しているので，時期的にはもっとも後出

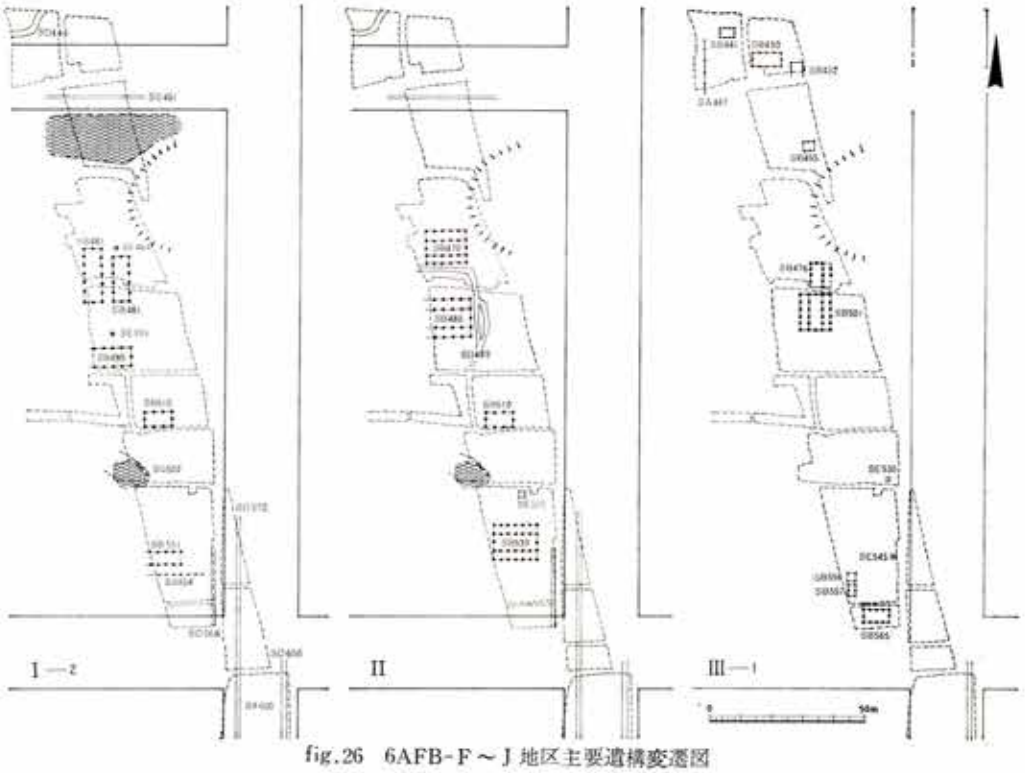


fig.26　6AFB-F～J地区主要遺構変遷図

のものであることがわかる。SB471とSB482との前後関係は不明であるが，SB482がSB481などと組合う大型の建物であることを考慮するならば，SB471を古くすることができる。このようなことから，第1次整地面検出の遺構は，I—1期（SB471），I—2期（SB482），I—3期（SD477）に区分できる。SB481の西側柱筋とSB482の東側柱筋との間隔は12尺，両建物の心心距離30尺で，南妻柱筋を揃えている。SE464はSB482の東側柱筋から20尺東に，SB481北妻柱筋から10尺北にあり，同一計画にもとずくものであろう。SB481，SB482の南方48尺をへだてて存在するSB490は，桁行を5間に想定することができ，その東西の妻柱筋は，SB481・SB482の側柱筋に揃えている。同様にSB490の北10尺をへだててつくるSE495にも同時性がある。このようなことから，SB481，SB490，SE495EはI—2期に属することとなる。SE495の東北にある小建物SB483が，井戸に関連する建物とすれば，I—2期に属するが，I—1期に遡る可能性もある。SB510は平塚2号墳の前方部を削平した部分に構築したものであり，整地層による分期はできない。しかし，SB490の南側柱筋とSB510の北側柱筋との間隔では50尺，柱掘形の大きいことなどを考慮するならば，I—2期に比定しうる。確実にII期に存在するSG520も，I期にその築造が遡る可能性がある。

第1期の細分

第1次整地以前に平塚2号墳西濠を掘込んだSD527は，埋立整地以前の排水溝とみられ，仮りに平塚1号墳と2号墳との間に濠埋立の時間的小差があるとすれば，I—1期に相当するであろう。I—3期のSD477の下流はSD485にあたり，第2次整地面からの検出であるがI—3期に遡る可能性がつよい。SD527に重複するSB528は方位が北で西に振れ，これと方位を同じくするSB498とともにI—3期に属するであろう。また，平塚1号墳北濠を横断するSD453Aが，I期の当初から存在した可能性がある。I—2期においては，建物や井戸で構成される居住空間としてのまとまりがあるが，その前後の遺構は希薄になる。このことからI—1期遺構は平城京造営時，ないしは直後の仮設的なもの，I—3期遺構はつぎの第2次整地をおこなう

事前の施設とも考えられよう。

第2次整地面で検出した遺構は，建物2棟（SB470，SB480），溝2条（SD453，SD485），園池1（SG520）であり，Ⅱ期としてまとまる。これらの遺構は重複して存在せず，とくに小期に細分する必要はない。また，Ⅰ期遺構SB510はこの時期にも存続している可能性がある。

第3次整地面で検出した遺構には，建物5棟（SB455，SB476，SB501，SB502，SB504），井戸1基（SE466）があり，Ⅲ期にまとまる。それらの遺構のうち，SB476とSB501は重複しており，同時存在はありえない。このことから，第3次整地面で検出した遺構はⅢ－1期とⅢ－2期とに区別される。柱筋の方位によって区分するならば，SB476，SB501，SB502はⅢ－1期，SB504はⅢ－2期に属することができよう。ただ，SB455とSE466については小期を決めることができない。また，G地区のSE535もこの時期にいれておく。

J地区の遺構　この地区での主な遺構は，建物6棟（SB430，SB432，SB437，SB440，SB441），柵2条（SA447，SA448）と溝1条（SD444）である。いずれもすでに削平された地山面で検出したものであり，層位的に前後関係をたどることはできない。次善の策として遺構の方位で分類するならば，2群に大別することができる。第1群は真北に近い方位をとるもので，SB430，SB432，SB441，SA447，SD444がこれに属する。それらの造営尺は0.295mである。第2群は北で東に約8°振れる遺構で，SB437，SB440，SA448であり，その造営尺は0.30mとなる。いずれもⅢ期に属するのであろうが，第1群を奈良時代末期の遺構，第2群を平安時代の遺構にかんがえることができよう。また，第2群の遺構はSB437とSB440－1とが重複することから，2期に細分しうることができる。しかしながら，SD444だけは北京極大路の北側溝に比定しうることからすれば，Ⅰ－1期に遡る可能性がつよい。

F・G南地区の遺構　両地区には建物13棟（SB530，SB550，SB551，SB552，SB555，SB556，SB557，SB559，SB560，SB561，SB562，SB563，SB565），井戸2基（SE525，SE545），柵3条（SA553，SA554，SA558），溝1条（SD566A）がある。しかし，削平が著しく整地層による時期別は不可能である。ここでは，SA553とSA554を境にして，その南北では遺構の状況がことなっている。すなわち，北部のSB550，SB551が比較的大型の建物であるのに対し，南部では多数の小建物が累重する。このことから，両者は別に考慮しなければならない。

切合い関係による分期　SB530はSB550とSB551に重複して構築しており，両建物よりも後出の建物である。SB550とSB551とは同時存在もかんがえられるが，方位をことにするため，2期にわけるべきで，一応SB550を古くかんがえる。建物の南方を画する2条の柵（SA553，SA554）にも重複関係があり，SA554の方が古い。SB530とSB551との関係に対応するのである。G北～Ⅰ地区の時期別をここにあてはめてみると，SB550がⅠ－1期，SB551とSA554がⅠ－2期，SB530がⅡ期ということになり，SE525については所属時期を定め難い。SA553とSA554以南の遺構は，真北に近い方位をとる建物（SB555，SB556，SB557，SA558，SB562，SB563，SB565）と，わずかに東で南に振れる建物（SB559，SB560，SB561）とにわかつことができる。柵以北の建物と柱筋を揃えるものはなく，北方の分期に合せるとⅢ期に属する。しかし，Ⅲ－1期内でもSB563，SB560，SB561とSB565との重複関係からすれば，真北方位に近い建物群が古く，仮にⅢ－1期とし，他をⅢ－2期とする。SA554，SA553とSB555，SB556の間には同時存在がありえず，さらに細分しうる。なお，SD566Aは東三坊大路西側溝である可能性がある。

遺構配置と3期の年代　すでにのべてきたように，6AFB－F～J地区は左京一条三坊十五・十六坪に想定される条坊内の東半分におさまる。しかし，この坪をめぐる築地や柵などの遮蔽物に関する遺構は検出していない。さて，C地区のSA620の開口部の中心A点が東西小路の中軸線に相当するものとして，A点から2坪分である900尺（基準尺0.2954m）北上した地点，つまり十五坪と十六坪との境を求めると，SB470の身舎北側柱筋に一致する。また，坪と坪との間に存在したのであろう小路の痕跡などはなく，十五坪と十六坪とは併合して利用されていることがわかる。G地区西方に設けたトレンチは十五坪を東西に横断するが，トレンチの範囲では坪を細分する溝や柵などを検出しておらず，1坪の東西幅であるSB566Bの西方約400尺の付近まで同一地割り内に包括されていたとみてよい。つまり，水田地形に残る十坪と十五坪間に存在する南北小路が，今回検出した遺構群の西限となる。南限については，北一条大路の遺構を検出していないが，仮りにSB470の身舎北側柱筋から南方へ1坪分の距離（450尺－40尺＝410尺）である121mの地点を求めて，南限とする。十六坪は1坪分のすべてを存在するのではない。北辺がウワナベ古墳によって限定され，さらに北京極大路を確保するために，南方の約¼をとどめるにすぎないのである。このことから，北限はSD451付近になる。

居住区域の設定

以上のようなことから，南北約180m，東西約118mの長方形区画を坊内居住区域として想定することが可能である。この区画のなかで，今回検出の遺構がどのように位置ずけられるであろうか。G地区の西方トレンチでは，建物などの遺構は検出されていないが，その後方のH地区西方では調査の前後に柱根や土管が発見されており(fig. 28)，H地区の建物に関連する遺構が西方に予想される。検出した奈良時代の建物の多くが東西棟建物であることから，南を正面とする建物配置であろうが，それらは坪の東方に偏しており中心的な建物とはかんがえられない。いま坪内遺構のすべてをふくむ中軸線を知る手掛りをもたないが，たとえば，SB470程度の東西棟建物ならば東西に3棟並置することは可能である。このように仮定すれば，今回検出した建物群は東翼を構成する脇殿的な施設で，H地区西方で存在が予想される建物は中軸上に位置する建物になるのであろう。*

以上のべたのようにⅠ期とⅡ期とで建物配置が相違し，空間利用に変化がある。しかし，第Ⅰ期のSB481，SB482，SB490が井戸を中心にまとまる建物であり，Ⅰ期からⅡ期にわたって存在するSD485に多量の食器類が投棄されていることからすれば，厨房的な性格が濃厚である。しかし，SB490以南にはSG520などがあり，後方とは性格をことにしている。南方のSB551やSB530の用途については知るすべがないが，SA554，SA553は存在したであろう北一条大路に面するの築地ないしは柵と対応し，坊内の仕切りをなしているとみてよかろう。

年　代

SD485出土の木簡，土器などのなかには，遺構の年代をしる手掛りがある。木簡では和銅，霊亀，養老など奈良時代初頭の年紀をとどめるものがあるが，いずれも貢進付札であり，遺構の下限を限定しない。他方，土器には和銅の年紀を墨書するものがあり，木簡の年紀と矛盾しない。また，Ⅱ期のSB470の柱掘形からは養老年間に比定しうる軒丸瓦6301Cが出土している。第3次の整地層中には奈良時代の遺物に混って平安時代の緑釉陶器片などが混在している。

うえのようなことから，Ⅰ期の開始を和銅3年（710）の平城京遷都の時点におき，Ⅱ期の開始はSB470および，SD485の遺物から，養老～神亀の間におくことができる。Ⅱ期の終末につ

* 1974年に調査した奈良市庁建設地など坊内の発掘により，東西棟建物が主屋をなし，南北棟の建物が少ないことが判明している。

いては決め手を欠くが，一応木造建物の耐用年数から逆算して天平初年において大過なかろう。Ⅱ期とⅢ期との間には，大きな空白がある。つまり，Ⅲ期では確実に奈良時代に属する遺構が存在しないからである。Ⅲ期の年代については，漠然と奈良時代末期から平安時代にかけての時期にするほか，年代を限定する資料をえていない。この時期にも奈良時代初期に画された条坊地割りが存続するが，建物の規模が小さくなり，北一条大路と北京極大路の路面敷に小建物が群在するようになり，ここに平城京は終幕を迎えることになる。

2 遺　　物

A　SD485出土木簡

SD485から出土した判読可能な木簡28点のうち，米（白米），庸米に関する貢進付札が多数を占めていた。貢進地のわかるものでは，参河国額田郡，青海郡，八名郡が7点(4～10)と多く，ほかに丹波国船井郡(11)，淡路国津名郡（13)が各1点ずつある。このうち，年紀の判明するものは「和銅6年」3点，「霊亀3年」「養老7年」各1点で，奈良時代初期に集中している。

ところで，このように国郡を通じて平城宮に貢進された物資の付札が，宮外の坊内居住地から発見されたことについて，かんがえてみよう。まず庸米は仕丁，衛士等への大粮，あるいは雇役民や雇直の食料として支給されたものである。また白米は諸司の常食に充てるというのが令の建前であった。諸司常食と大粮，雇役の直やその食料とみると，当所においてある程度の規模をもった労働がおこなわれたとみてよい。また，「官奴婢食料一斛」(17) が注目できる。官奴婢は官の労役に従事する奴婢で，その食料の木簡が発見されたことは，この地に官奴婢を労役に従事させ食料を支給した事実があったことを推測できる。庸米・白米の貢進札，また，これらにみられる奈良時代初期の年紀，さらに「官奴婢食料」などを総合して考えると，この地域で奈良時代初期に仕丁・衛士をはじめ雇役も含めて，さらには官奴婢らを使役してある程度の労働が行なわれたとみることができる。つまり，仕丁をはじめ官奴婢を支配し，あるいは人民を雇役することのできる人物の邸宅を想定することができよう。*

つぎに，木簡とは少し離れるが，左京一条三坊十五・十六坪に居住する人が，どれほどの階層に属するかという点について，文献史料でのあらわれかたをみてみよう。

平城京の建設とともに京内に居住する官人層への宅地班給がはじまるのであろう。しかし，この宅地班給の実体を直接に示す資料はない。そこで，藤原京・難波京における宅地班給の基準をみてみることにしよう。

藤原京の班給

『日本書紀』持統5年(691)12月乙巳の条に「詔曰，賜右大臣宅地四町直廣弐以上二町，大参以下一町，勤以下至無位，随其戸口，其上戸一町，中戸半町，下戸四分之一，王等亦准此」とある。ここでの班給基準は，官職・位階および戸口の多少によっている。すなわち，官職では右大臣のみを特別に4町とする。位階ではこれを2大別し，直広弐

* 平城京造営に関連する，造京司，木工寮などの官司である可能性もあるが，遺物が坊内の建物に付属したSD485から出土していることを考えると，木簡も坊内の建物を使用した人物との関連において把握すべきである。

（従四位）以上に2町，直大参（従五位）以下を1町とする。勤位（6位）以下無位に至る者は，その戸口の多少により，上戸1町，中戸½町，下戸¼町とした。この場合，戸の等級は『令集解』田令所引の慶雲3年(706)2月16日格によれば，戸口数にもとずき，大戸は8丁以上，中戸は4丁以上，下戸は2丁以上という。『続日本紀』天平6年(734)9月戊辰条に難波京での班給基準が決められ，「班給難波京宅地，三位以上一町以下，五位以上半町，六位以下四分一町之一以下」という。ここでの基準は，位階によるもので，三位以上が1町以下，五位以上は½町以下，6位以下は¼町以下と定めている。

難波京

さて，平城京での班給基準は不明であるが，藤原不比等や新田部親王の例によって宅地を想定することができよう。藤原不比等の邸宅は後に法華寺の寺地となり，新田部親王の邸宅は唐招提寺に施入された。このことから，法華寺旧境内に想定する四町，唐招提寺の旧境内に想定する4町をもとの邸宅区域と想定してよかろう。藤原不比等は，平城京遷都時には，右大臣であり，没した養老4年(720)10月には太政大臣，正一位を贈られており，かれの宅地は4町であったとみてよい。新田部親王は，平城京遷都時には，三品であり，神亀元年(724)2月に一品に叙せられる。『唐鑑真和上東征伝』に，鑑真が新田部親王の子である氷上真人（塩焼王）の宅を訪れ，寺地としての福地であることを覚ったという記事をのせており，新田部親王の宅地が子の塩焼王に伝領されていることがわかる。塩焼王は天平宝字元年(757)7月，橘奈良麻呂の事件に坐し，臣籍に降下して氷上真人の姓を賜わる。ともに橘奈良麻呂事件に坐する弟の道祖王が「右京の宅」に囲まれていることから，新田部親王の宅地に塩焼王と道祖王がともに居住した可能性がある。いずれにせよ，事件後に「没官地」となり，ここに唐招提寺が占定されたのである。藤原仲麻呂の田村第については有名であるが，岸俊男は田村第を左京四条二坊の4町に推測している。* また平安時代の記録であるが，多治比弟笠が佐保川の付近に家地1町をもち，紀勝長が左京二条五坊七町に家地1町を所有していたことが判明している。** 以上のような諸例によって平城京においても藤原京に準じる宅地の班給がおこなわれたとみてよいであろう。

平城京の班給

今回検出した遺構は，すでにのべてきたように，左京一条三坊十五・十六坪にまたがる2町分の敷地に設けられたものである。藤原京に準じれば，従4位以上の貴族の邸宅になるのであろう。左京一条三坊の住人としては，大原真人今城ほか3名が知られ，*** そのなかでは，大原今城の邸宅の可能性もある。しかし，彼の経歴は奈良時代前期に活況を呈し，中期に断絶し後期になって再び大規模な整地をおこなうという遺構が示す事実と呼応しない。かりに彼の父が穂積親王であって，その宅地を伝領したとしても同じように奈良時代中期に断絶するという遺構の事実と呼応しない。また，彼の位階が従五位であったことを考えるとこの可能性はきわめて少ない。それでは，この2町の宅地の主は誰であろうか。前述したように，奈良時代初期に，仕丁・衛士，また官奴婢らを使役することによって，この地で労働をおこない得た人物のひとりとして，いま長屋王を推定することができる。つまり，長屋王の作宝宮である。長屋王は，和銅3年4月に，式部卿，従三位とみえ，平城遷都時は従三位で，前の班給基準からすると宅地2町にあたり検出の遺構と合致する。彼は，神亀元年，正二位，左大臣に昇進するが，天平元年(729)2月，自尽する。ところで，神亀5年，彼の発願による神亀経の奥書には「検校使作宝宮判官従

長屋王

* 岸俊男「藤原仲麻呂の田村第」（『日本古代政治史研究』所収　1966, p.401）

** 延暦23年6月10日僧綱牒『平安遺文』第1巻24号　延暦23年6月20日東大寺家地相換券文『平安遺文』第1巻25号

*** 大井重二郎『平城京と条坊制度の研究』1966

作宝宮 六位上勲十二等次田赤染造石金」とみえるのが注目できる。*「作宝宮判官」とあって，一個人の家政機関ではなく，宮として四等官をもっているのである。このことは，作宝宮が半ば公的な機関に相当することを意味し，前述の庸米・白米・官奴婢食料などの木簡も，この点から合理的に解釈できよう。また，この地域で出土した緑釉水波文塼は宝殿らしきものを類推するにたる貴重な遺物であるが，これも作宝宮と呼ばれる長屋王の邸宅にふさわしいものといえよう。いま，長屋王の作宝宮をうたった詩が『懐風藻』に多数収められている。そのなかで，長屋王自身の詩三首についてみよう。** 宝宅に新羅客を宴したときの情景として「桂山余景下り，菊浦落霞鮮らけし」と菊のかおる浦をよみ，また，初春に酒宴をした作宝楼の宅の風景はうるわしく，積草の池の如き林泉に初春の年はあけたと述べている。菊浦といい積草池といい，いずれも池をもった作宝楼であったことが述べられており，池をもった庭園の遺構の事実とよく合致している。ところで，作宝（さほ）は佐保に通じる。この発掘地周辺から東方にかけての一帯は後世佐保田庄となった地域で，*** 長屋王宅がここに推定できれば，それはまさしく佐保宅と呼ぶにふさわしいのである。一名「作宝楼」とも「作宝宮」ともいうことから，長屋王が自からの邸内に「宝殿」をつくったことはじゅうぶんかんがえられる。

B　SD650出土木簡

SD650出土木簡には，天長5・7年（828・830）の年紀をもつものがあり，その廃棄の一時点をしることができる。23点の木簡のうち，意味不明のものを除くと，記載内容によって，人の往来関係を示すもの(29～32)，官司の物資・人夫などを記するもの(34～40，43)，あるいは経典など寺院に関係するもの(41，44)にわけることができる。

告知札　4点の告知札(29～32)は，形態や文章内容によって，人々の往来する場所に掲示する一種の牓示であることがわかる。

ところで，告知札にみえる牛・馬などの拾得について厩牧令では「国郡の得たらん闌畜は皆当界の内に仰せて主を訪わしめよ」とある。また，奴婢が逃亡して捉えられた場合にも同様に奴婢が主を知らなければ牓告せよという（捕亡令官私奴婢条）。闌畜，奴婢いずれの場合もその主人を捜索する手段として牓札が用いられたとみてよい。

牓　示　平安時代になると，禁制を内容とした太政官符が，その伝達手段として交通の要衝などに牓示されるようになる。たとえば，京の喪儀が僭奢になることを禁じた太政官符には，「所在の条坊および要路に於て 明らかに牓示を加えよ」（『類聚三代格』延暦11年7月22日太政官符）といいまた僕隷が病を患って路次に追い出されて看護人もなく餓死する弊害をいましめる太政官符には，「仍て要路に牓示し，分明に告知せよ」（同上弘仁4年6月1日太政官符）という。今回の告知札は，太政官符などの禁制の牓示とはいえないが，盗難に遭った斑牛や走失した馬などの特徴を記し，公開捜査をおこなう点はまったく同じである。そうしたことから，告知札の立てられた東三坊大路が，人々の頻繁に往来する要路であったことを物語っている。今の規定によれば，「闌畜は当界の内に仰せてその主を訪わしめよ」という。山辺郡長屋井門村で盗難に遭っ

*　大般若経巻第267（根津美術館蔵）

**　『懐風藻』には長屋王の詩三首を収める。訓読・解釈は日本古典大学大系本（岩波書店）に従った。

***　永島福太郎「平城京址と荘園」（大和文化研究　第8巻8号　1953，p.1）

た斑牛に対して，郡界を越え添上郡にきて勝示をおこなうことは，またこの道路が交通の重要な要路として利用されていることを裏づけるであろう。

平城京の東三坊大路が，なぜ平安時代の要路として存続するのか。それはほかでもなく，この道路が大和と山背を結ぶ重要な幹線道路にかんがえられるからである。

古代の大和と山背を結ぶ要路としては，下ツ道，中ツ道，上ツ道の三道が比定されている。* **幹線道路** しかしながら，平城京遷都後，下ツ道は朱雀大路となり，その北部は宮城内にとりこまれてしまった。つまり，奈良時代になるとこの道によって山背へぬけることはできなくなる。もう1本の道，中ツ道は北上して平城京東四坊大路に接続する。この場合，山背にぬけるには，一条大路と交叉するあたりで西に回って現在の関西本線沿いの谷をぬけるか，東に回って現在の奈良坂，つまり国道24号線沿いに北上するかのいずれかである。後者の場合は，上ツ道の延長線にあたる。ところが，東三坊大路を北上すれば，ウワナベ古墳の東側の谷に遭遇し，中ツ道の西迂回路と同じである。ウワナベ道は谷間をぬけると比較的平易な道であるが，奈良坂の場合は難渋な山道となる。さらに，平城宮との関係からいえば，一条大路をへて東三坊大路を北進して山背国というコースの方が利用しやすいといえよう。この仮定からするならば，かっての奈羅関が平城京造営以降，東三坊大路の北上する国境線に設置された可能性がつよいことになる。

東三坊大路を北上して山城へぬける通路は，平安時代の公家日記や物語などにあらわれる。たとえば，寛弘4年（1007），藤原道長の金峯山参詣では，中ツ道を南下し，井外堂（木簡にみえる山辺郡長屋門村）に宿している。** また，平安宮からの春日祭に遣された使者の通路もこの道で，『江家次第』によって図式化するとつぎのようになる。***

平安京――……→泉　津→不退寺→一条大路→梨子原→二条大路→春日大社

以上のように，平城京の東三坊大路は平安時代にもなお大和と山背を往還する道路として存続し，中ツ道と合体して大和盆地を縦断するもっとも重要な幹線道路に変貌したのであった。

官営工事　木簡34から天長7年頃，栄井真継を将領とする造作が発掘区の近傍でおこなわれたと理解するならば，木簡35～40も同類である。他方，「別当殿」(41)については，木簡44や墨書土器に「寺所」「造物（所）」あるいは僧侶の人名と思われるものがあり，寺院の長官とみてよい。つまり，官が介入する寺院の建設がおこなわれた可能性を物語る。

寺院の造立に係る工事とするならば，東三坊大路に隣接する不退寺との関係が注目されよう。帝都を平城京に移遷しようとした平城上皇には，阿保親王，高岳親王(のちの真如)があり，両親王はともに大和と深い関係をもつ。すなわち，2人の親王の子女はそれぞれ在原姓を賜り，高岳親王の子である在原善淵は，貞観4年(862)に父親王が構えた堂舎を修旧している。**** 高岳親王の堂舎は超昇寺で，その寺域は平城宮推定第1次内裏後方地域に推定されている。

阿保親王の子には，在原仲平，行平，守平，業平があり，かれらのうちとくに在原業平が不退寺を創建したという伝承がある。すなわち，『大和志料』には「寺伝ニ平城帝大同四年祚ヲ嵯峨帝ニ譲リ平城ニ幸シ萱葺ノ殿ヲココニ造リテ徒御ス之萱御所ト称ス，上皇ノ皇子阿保親王及ヒ其子在原業平相承テコレニ居ル，承和十四年業平詔ヲ奉シ旧宮ヲ以テ精舎トナシ観音ヲ安置シテ不退転法輪寺ト称スト云フ」とある。現在の不退寺については，まだ発掘調査などがな **不退寺**

* 岸俊男「大和の古道」(『古代の日本近畿』1970, p.93)

** 『御堂関白記』

*** 『江家次第』巻第五　上申日春日祭事

**** 『三代実録』貞観4年12月25日

されておらず，その旧規などについても確認されていない。史料の初見は，貞観2年（860)に超昇寺とともにあるが，承和14年（847)創建の確証はない。もし，かりに現在の寺地が平安時代の創建以降変更されていないものとして，木簡史料をもふくめて推測をたくましくするならば，天長元年（824)の平城上皇没後，彼の離宮であった萱御所が寺院に変更された可能性がきわめて強いとみてよい。

C 屋 瓦

軒瓦の編年 出土した軒瓦のなかには，平城宮や周辺寺院の調査によって時期を限定しうるものがいくつかある。平城宮における造営期に準拠して，ここでは奈良時代の軒瓦をⅠ～Ⅴ期に区分する(別表4)。

第Ⅰ期 第Ⅰ期 和銅3年の平城遷都から，養老年間に至る期間(708～720年代)。軒丸瓦では6284C，6301B・C，軒平瓦では6671B・D，6675がこの時期に属する。6301B・Cは興福寺創建瓦である6301Aよりも小型で，文様の細部も若干ことなる。6301A—6671Aが興福寺中金堂の一郭が建立された和銅年間に製作されたものとすれば，はたして6301B・C—6671B・Dを同時期におくことができるであろうか。この点で注目されるのは，養老4年（720）の円堂院建立を契機にして10月に「造興福寺仏殿司」が設置されたことである。造興福寺仏殿司の設置によって，藤原氏の私寺であった興福寺が官寺と同格の扱いを受けることになるのであるが，それにともなって造瓦組織にも官窯としての改変があったものとおもわれる。6301Bの瓦当裏面に布目痕のあること，6671Bに段顎と直線顎の2種があることは，いずれも6301A—6671Aとの一致を示す。また，6301B・Cの瓦当面が6301Aに比して小型であることは，たとえば平城宮出土の6235Bが東大寺創建瓦6235Aよりも小型であることと共通している。今回の調査区が京内の邸宅に関連する地域であることをかんがえると，興福寺の造作に関与した官窯から支給された可能性がつよい。したがって，6301B・C—6671B・Dをこの時期におくことができる。

6284Cは平城宮第41次調査で，SD3765の下層から和銅の紀年木簡と伴出しており，その時期を平城宮造営当初におくことができる。*

6675は均整唐草文であるが，外区・脇区の線鋸歯文，唐草文の様式などが藤原宮式の偏行唐草文の流れを汲むもので，この時期に比定する。

第Ⅱ期 第Ⅱ期 聖武天皇即位に関係する造営から，平城還都に至る時期(720～745年代)。

軒丸瓦では，6011，6012A・C・D，6015，6225A・C，6226，6227，6228，6285，6291，6303A，6308A・B，6314がある。6285，6291，6303A，6308A・B，6314の各型式の瓦当文様は，平城宮で神亀6年（729）の木簡が発見されたSK2102から出土した6311，6313の文様を基準にしており，様式的，技法的な関連からこれと相前後する時期におく。** 6303Aは様式的には6311，6308に近似するが，難波宮に同笵瓦があり，それは聖武朝造営の時期に比定されている。6015も同様である。*** 6225A・Cは，聖武天皇の即位を契機に造営された平城宮推定第2次朝堂

---

* 「第41次調査」(奈文研年報1968p.37)

** 「昭和39年度平城宮跡発掘調査概要」（奈文研年報1965 p.33)

*** 難波宮址顕彰会・研究会(『難波宮址の研究4』1961，p.85）中尾芳治「重圏文軒瓦の製作年代と系譜についての覚書」(『難波宮跡研究調査年報1971』p.35)

院所用瓦である。6226，6227，6228はこれとあまり隔たらぬ時期のものであろう。6012Aは，唐招提寺講堂下層遺構から出土している。* 6012Aの特徴は，瓦当裏面に布圧痕を残していることである。6AFB区出土の6012A22点のうち，8点に布圧痕をとどめている。圧痕は瓦当と丸瓦の接合粘土が剝離した部分にも残り，布圧痕が瓦当と丸瓦の接合前に押圧されていることがわかる。つまり，笵型に粘土を詰めて押圧する際に布が用いられているのである。この技法は，上述の興福寺式に属する6301，平城宮の6311，6308にみられるところであり，第Ⅰ期末から第Ⅱ期にかけて共通する技法として理解できる。6012Aの流れを汲む6012C・Dもそれと余り時期を隔たらないものであろう。

布目痕跡

軒平瓦には，6572A・B，6574，6663A・C，6664H，6667，6691A，6681A，6682がある。軒丸瓦との組み合せは，6664H—6311，6663A・C—6225，6572A・B—6012である。6572Aには段顎のものと直線顎のものとがある。その段顎は上述の興福寺式6671Bに比して，顎幅が小さく，なかにはわずかな段をとどめる直線顎に近い形状をとるものもあり，一種の退化型式である。このことからも6671Bに後続する時期におくことができる。同様の顎につくる平城宮6682についても同じである。6681Aは6663と6682との様式的な関連から，この期に入れる。6667は中心飾の形状が6664Cに最も近く，段顎である点から，第Ⅰ期に遡る可能性もあるが，一応第Ⅱ期にいれる。6691Aは様式的に6667に後続するものである。

第Ⅲ期　平城遷都から天平勝宝年間（745～756年代）。

第Ⅲ期

軒丸瓦では6134A・B，6235A，6282B・F・G・H，6316Aがある。6235Aは東大寺創建瓦で，西塔の調査などによって天平勝宝頃に比定できる。6282の各種は平城宮大膳職から，6134Aは平城宮推定第1次内裏北域から出土しており，この時期にあてることができる。6316Aは同系統の瓦が各地の国分寺にみられることから，この時期に属する。**

軒平瓦には6721の各種，6732Ⅰがある。6721各種は，6282と組み合う。6732 Ⅰは6235と組む。

第Ⅳ期　天平宝字前後から神護景雲年間に至る時期（757～769年代）。

第Ⅳ期

軒丸瓦は6133の各種，6235B・D，6236B，軒平瓦は6725A，6739，6801，6802である。6235Bは西大寺，西隆寺の創建瓦であり，*** 天平神護1年(765)～神護景雲1年(767)に年代の1点をおくことができる。6236B，6739もまた西隆寺造営に関する瓦であることが判明している。6725Aは唐招提寺創建瓦であり，天平宝字3年(759)頃におく。6801，6802は飛雲文の軒平瓦である。6801は中心飾に「修」字を配する。従来，この「修」は修理に関する官司，平安時代の「修理職」の略称とされていた。他方，奈良時代にも神護景雲2年～宝亀5年の時期に幾度か修理長官・次官の任命があることから，「修理職」の前身にあたる官司の存在が予想されていた。西隆寺東門の調査において，「修理司」と記載する木簡が出土し，平城宮出土の「修」「理」「司」の刻印瓦も修理司を表わす可能性が強くなった。このようなことから，6801の年代を神護景雲年間におくことができる。類似の6802もほぼこの頃であろう。

第Ⅴ期　宝亀年間以降（770年～？）であるが，この時期に属する瓦は明らかでない。

第Ⅴ期

平安時代　実年代を決め難いが平安時代初期に属する軒瓦として，7349—7734，7769がある。7349—7734の瓦は従来から，不退寺式とよばれてきた瓦であり，6AFB区—F～J地区に

平安時代

* 沢村　仁「瓦」（『奈良六大寺大観唐招提寺』1969，p.43）

** 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門発掘調査報告』1972，p.34

*** 浅野清「西大寺東西両塔」（『建築学会論文集60』1957，p.781）

わたって多く出土した。不退寺の創建時に用いたものであろうか。7243，7251，7283，7297も平安時代のものである。

鬼　瓦　2種の鬼瓦については，同笵関係など，他遺跡出土の鬼瓦との比較資料を欠き，年代を限定することは困難である。ここでは漠然と，鬼瓦Bを奈良時代末期に比定し，鬼瓦Aは文様の繊細な表現などの類似性からは7349と共通しているので，平安時代に比定しておく。

緑釉水波文塼　緑釉水波文塼としては，川原寺，興福寺東金堂，東大寺二月堂，伝法華寺からかつて発見されている。また，類似の三彩異形塼が今回の発掘区に接する一条高校運動場で発見されている。それらのうち，川原寺，興福寺のものは上面に半肉彫りの水波文をあらわし，下面に布目痕跡をとどめその厚さは平瓦とほぼ等しく，今回の緑釉水波文塼とは直接関係しない。東大寺二月堂以下の諸例は，刻線で水波文をあらわし，今回のものときわめて類似する。さらに，伝法華寺，一条高校例は出土地点が近接することから，本来は同一構造物にもちいた可能性がつよい。そのことから，この2例を観察した。*

従来の出土例

伝法華寺例は，一辺14.5cmの方塼で，上面に水波文を筆描きし，緑釉をかけたものである。刻線の文様，塼の寸法，胎土，焼成は今回出土の緑釉塼aにきわめて類似している。さらに「十三条十」と刻する下面の刻書も緑釉塼aの「九条」と同筆跡のようでもある。近年になって，断続的におこなっている法華寺旧境内の発掘調査では，緑釉水波文塼が出土したことはない。おそらく，法華寺領であった6AFB区付近の「字法華寺」で採集されたものだろう。

一条高校例は，側面の厚さ3.5cmで135°の隅角をとどめる三彩塼の破片である。上面の隅角に近い部分，およびその後方をヒダのある山形に隆起させ，廻まわりに線刻の波文をほどこす。三彩釉は上面と側面に限り，下面におよんでいない。下面は側部が平坦面をなし，上面の隆起に対応する部分が凹面をなす。三彩と緑釉との胎土や施文については，今回の緑釉塼a・bにきわめて類似している。**

なお，今回出土の緑釉塼も，SD650，F～I区にかけての広範囲に分布しており，おそらく第3次整地をおこなったときに四散したものとおもわれる。現在，採集地の北限がI南地区であることから，本来は左京一条三坊十五・十六坪の邸宅内に存在したものとおもわれる。

さて，以上のような諸例をふ

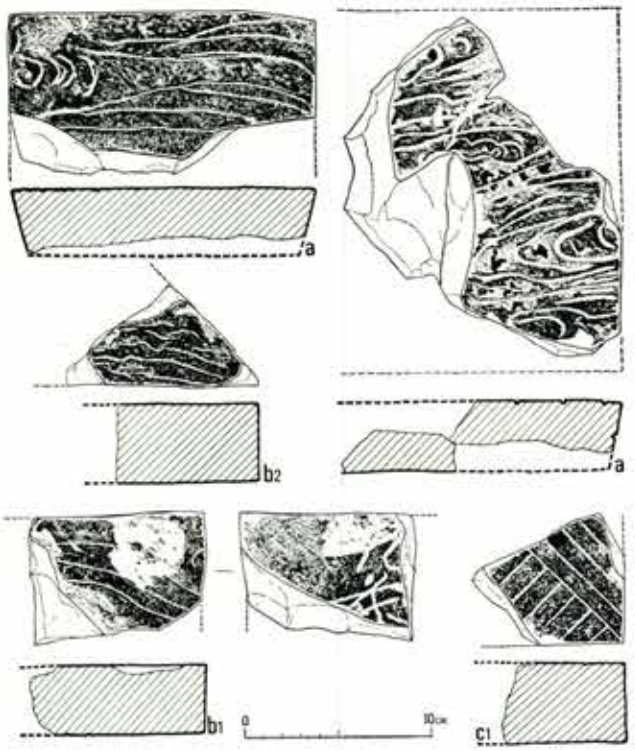


fig.27　緑釉水波文塼実測図

*　観察にあたっては，東京国立博物館の本村豪章氏と奈良国立博物館の稲垣晋也氏の援助をえた。

**　文化財保護委員会「奈良市法華寺町出上三彩陶片等」(『埋蔵文化財要覧3』1963，p.96)

くめて，この種の塼を再度分類すればつぎのようになる。

a　上面に水波文と緑釉を施し，側面に逃げのある方塼。1辺0.5尺を基準とする。

b　上面に水波文と緑釉を施し，側面に逃げをとらないもの。方塼 b_1 と三角塼 b_2 とがある。

c　上面に平行斜刻線文を施し，側面に逃げをとらないもの。上面に文様を施さないものをも含むが，すべて緑釉をとどめない。有文方塼 c_1，無文方塼 c_2，無文三角塼 c_3 がある。

d　上面に立体的な隆起と水波文，緑釉を施す。135°の隅角をのこすが，全形不明。

以上，4種の塼のうち，a・b・dは一連のものとみて差支えなかろう。もしそれらを用いて舗塼するとすれば，塼dを隅におく八角形の平面形となる。隅以外には塼a・b_1を四半敷あるいは布敷にして，辺縁を塼b_2でおさめる壇状の施設が想定できる。水波文がスタンプではなく，塼ごとにことなっていることや，下面の刻書が舗塼時の番付けをあらわしていることから，各塼の位置は全体の造形を構成する部分として固定していることになる。なお塼aの一辺の長さが0.5尺であることと，刻書から縦方向に10枚以上，横方向に13枚以上の塼が存在することになる。つまり八角形の直径は6.5尺（1.95m）以上ということになる。塼cについては，八角の舗塼を支える基壇の羽目に用いたの塼として考慮することも可能である。

宝殿

このような緑釉水波文塼の八角基壇の原形を想定する資料として，東大寺「阿弥陀悔過料資財帳」(大日本古文書5巻　p. 673) にいう宝殿がある。それは阿弥陀浄土変一鋪をおさめる厨子のようであり，天平13年3月に完成したものである。資財帳にはその形状をつぎのようにいう。

宝殿一基　漆　八角　高一丈六尺三寸

蓋　頂居金花形一枝　八角居金鳳形八口　各咋雑玉幡
裏着大蓮花形一枚　並以金銀墨畫飛菩薩鳥雲花等形

柱八枝　並以金銀墨畫鳥花等形

基二階　上階池磯敷瑠璃地辺着金銅鏤腎金並畫飛菩薩等形
下階在連子着金銅鏤腎端裏等高欄上居金花八枝

東大寺二月堂付近出土と伝えられる緑釉水波文塼は，もしかするとこの宝殿の上階に舗塼し，瑠璃の池磯を構成するものであったのかもしれない。同様に，今回の水波文塼も，八角形基壇に復原しうることや，水波文が池磯をあらわすとみてよいことなどから，八角二重基壇の上階に舗塼したものとみて大過あるまい。

土　管　I地区の西方約10mの地点で，家屋新築の際，瓦製土管が出土しているので，この項を借りて紹介しておく。北東から西南方向に連らなるというから，旧平塚1号墳西濠の窪地から排水するためとみられ，奈良時代に属する。数個体分あり，玉縁丸瓦を2個連結した形態。完形品は外径約14.5cm，内径約10cm，全長72.3mで，一端に接合用の差込みをつくる。胎土に砂粒を多く含み，焼成は悪く軟質。差込み部分を除いて外面は縦方向の調整。差込み部分は横方向の調整。内面には布目痕があり，それが全長に切れ目なくおよんでいるので，生丸瓦を2本接合したものではないことがわかる。両端の内面は篦削りで整えている。

fig.28　土管実測図　0　10　20CM

D　SD485出土の土器

6AFB—H・I地区にわたって掘鑿されているSD485は，第Ⅰ期の終り頃からはじまって，第Ⅱ期を通じて利用される排水溝である。その年代については，すでにのべたように，和銅，霊亀，養老の紀年木簡から実年代の1点を把握することができる。また，土器片のなかにも和銅の墨書を記すものがある。他方，この溝と共存するSB470の掘立柱建物の掘形から，養老4年前後から製作を開始する軒丸瓦6301Cが出土しており，SB470が少くとも養老4年以降に建築され，SD485もそれに伴うとかんがえられる。以上のようなことから，SB470の耐用年限をも考慮して，第Ⅱ期の終りを天平初年頃に推定したのであった。このような前提にもとずき，SD485出土の土器の問題を検討してみよう。

土器の編年　平城宮跡で実年代を把握している土器は，つぎのような遺構から出土している。平城宮SD1900（下限710年），SD3035・SD4951（724年頃），SK820（749年頃），SK219（763年頃），SK2113（780年頃）で，それらは伴出した木簡，および遺構相互の関係からの年紀によって年代の一端が判明したものである。

SD485土器について，資料の多い供膳形態土器を中心とし，前段階のSD1900の土器および後段階のSK820土器と比較してみよう。ただ，両遺構の土器についても現在整理が終っていないことから概念的にならざるをえない。

SD1900土器との相違

SD1900土師器とSD485土師器と対比すれば，器種，形態，成形技法，調整手法の面で共通する部分が多い。これをSD485土師器の古い要素とすれば，SD1900土師器にはみられない新しい要素もある。すなわち，形態では杯口縁端部の巻込みが突出して大きいこと，高杯AIbが存在しないこと，壺甕などの三角形折曲把手が若干薄くなっていることなどである。さらに，杯類の場合，螺旋暗文＋1段放射暗文＋連弧暗文が一般化しているのは，SD485の特徴である（fig. 29）。須恵器でみると，縁部の屈曲する蓋A，実底につくる鉢B，平瓶bなどはSD1900土器にない新しい要素である。また平瓶aでも把手を付さないものが一般的である。以上のように，相違点はそう多くないが，SD485の須恵器にはSD1900にない新しい器種や形態が出現している点に注目しなければならない。

SK820土器との相違

SK820土師器の器種では，a_3手法による椀Aが新たに登場し，杯Ⅲ類は全般的に小型化する。形態では杯AIが浅くなる傾向にあり，杯Ⅲ類の口縁部巻込みがまるみをおびている。SD485の高杯AIa•bのような低い高杯はなく，壺甕などの三角形

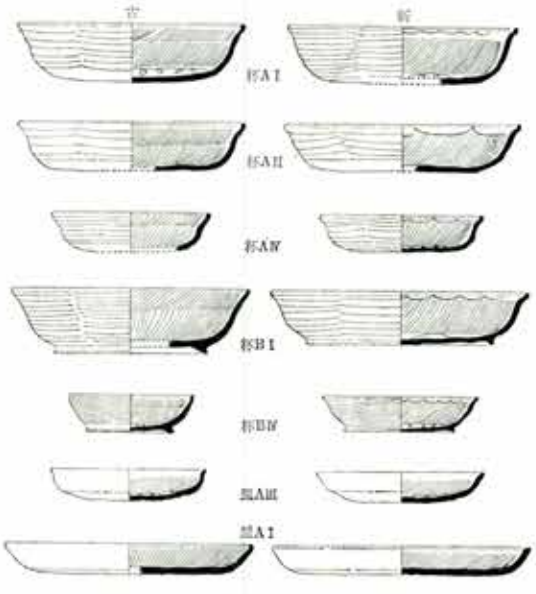


fig. 29　SD485土師器新旧比較図

折曲把手は矮小化し，蓋のつまみも比較的小さい。杯Ⅲは主としてａ手法で調整するが，暗文を施すものは少なくなり，その文様も簡略化する。須恵器では鉢Ab が一般化することになり，鉢Aa，横瓶などがなくなる。また平瓶ｂが一般化し，その形態も洗練されている。杯Ⅲ類でも土師器の杯Ⅲと同じように小型化する。さらに蓋Aのうち縁端部が屈曲するものが盛行する。このように，SD485土器とSK820土器との間では，土師器・須恵器を問わず相違点を見出すことが容易である。

以上のようなことから，SD485土器がSK820土器よりもSD1900土器により近い特徴をもつものであることが明らかであろう。他方，SD1900土器とも明らかに相違する部分があり，SD485土器のなかからSD1900土器的な部分を差引いた部分をSK485様式として設定する必要がある。つまり，和銅の年紀をとどめる土器の存在から類推できるように，SD485土器のなかにはSD1900土器の年代である和銅年間の土器が包括されているからである。SD485様式と仮称する一群の土器に類似するものは，平城宮跡SD3035,* SD4951,** 小墾田宮推定地SK260,*** 坂田寺跡SD050・051,**** 船橋遺跡Ｂ地区新型式などにある。平城宮跡の例では，伴出の木簡から年代の１点を神亀年間におくことができ，平城宮跡土器の第２段階に想定できる。現在，他遺跡とのじゅうぶんな比較検討をおこなっておらず，さらに将来に期したい。

土器の使用形態　SD485土器は左京一条三坊十五・十六坪の居住地で使用され，廃棄された土器である。この面からその使用状況を類推してみよう。

SD485土器を用途別にわけると，土師器において供膳形態66.3%，煮沸形態32.6%，貯蔵形態1.1%となり，須恵器では供膳形態81.4%，貯蔵形態18.6%となる。土師器，須恵器ともに供膳形態が大半を占め，両者をあわせると総量の72.2%が供膳形態ということになる。供膳形態の土器のうち，須恵器と土師器との比率は4.5：5.5である。平城宮跡SK820土器では4：6，SK219土器では１：５であり，奈良時代の終りに近づくに従って土師器が増加する傾向がある。他方，田中琢が推算した宝字３～４年の20個月における奉写一切経所の須恵器と土師器の損耗比率をみるに,***** 須恵器２器種の用口が567個，土師器４器種の用口が1052個であり，その損耗比率は1.08：1であるからほぼ同率で消耗したものとみられる。このような観点からすれば，SD485土器における須恵器と土師器との量的関係は使用時の状況とみてよい。

供膳形態

供膳形態の土器には盤Ａ・Ｂや鉢Ａ・Ｂなど大型器種を含むが，それらはごく少数であり，大部分は食膳にならべる杯・椀・Ⅲの類であり，数個で１膳を構成する。SK820土器ではこのような供膳形態の土器が92%を占め，SK219土器では89.6%を占めている。絶対量でも多く，それらが多人数の饗応に対処している様子がうかがえる。SD485土器では供膳形態が多いとはいえ，平城宮の場合ほどではない。時期は少し下るが，天平宝字年間における東大寺写経所の例では，土師器と須恵器で構成する一膳の食器が４～６個であったことが推測されている。それは陶枚坏，陶盤，土枚坏，土銙坏，土盤，土鋺形，塩坏などとよばれるものであるが，同時期の平城宮跡 SK2113 土器の杯ＡⅠ，椀Ａ，ⅢＡⅡ，杯ＡⅡ，杯ＡⅢ，ⅢＡⅠの組合せとほぼ一致している。しかし，SD485土器には椀Ａがなく，杯ＡⅢ・杯ＡⅣ，ⅢＡⅢ・ⅢＡⅣなど

*　「昭和39年度平城宮発掘調査概要」（奈文研年報1965 p.38）

**　「昭和41年度平城宮発掘調査概報」（奈文研年報1967 p.42）

***「飛鳥藤原宮跡の発掘」(奈文研年報1974)

****「飛鳥藤原宮跡の発掘調査」（奈文研年報1973 p.40）

***** 田中琢「土器はどれだけこわれるか」(考古学研究　第12巻４号1966,p.16)

の小型品が多く杯ＡⅠが少いなど，後のような規格化が進行していない。そうしたことから，単純に写経所と比較することはできない。出土量からすれば杯ＡⅠ・杯ＡⅡ・杯ＡⅢ，ⅢＡⅠ・杯ＡⅡ・杯Ⅲ，杯ＢⅠ・杯Ⅱ・杯Ⅲ・杯Ⅳの組合せが成立するが，これをもってただちに常時の1膳分に想定することはひかえるべきであろう。墨書土器は供膳形態の杯・蓋に集中している。須恵器の杯に汁漬物(4)，□豆(16)，水(19)，酒(20)があり，用途の一端をうかがうことができる。人名や記号(24～58)を記するものには同一のものが比較的多く，使用者や用途に応じて土器が分類管理されていた状況をうかがうことができる。

平城宮土器とSD485土器

平城宮跡では，供膳形態の土器に比して小型の貯蔵形態の土器が少い傾向にある。SD485土器では小型貯蔵形態の土器が多く，器種も多岐にわたり，須恵器ではこの時期の須恵器窯で発見される器種をほぼ揃えている。SD485の煮沸形態の土器には，甕ＡⅠ・甕ＡⅡ・甕ＡⅢ，甕ＢⅠ・甕ＢⅡ，甕C，竈がある。この形態と法量による相違は，対象員数はもとより，飯・羹など用途を限定した使いかたがなされたものであろうが，詳細は不明である。また，甕類の一時に炊飯する容量に関する検討はまだおこなっていない。SD485の煮沸形態土器が全出土量の33.1%を占めるという現象は，SK820，SK219土器の場合にくらべておよそ2倍の出土比率を示すことになる。このSD485の出土比率が船橋遺跡の場合と大差ないことからすれば，煮沸形態土器が比較的多い状況が一般的な現象とみてよいであろう。平城宮でとくに少ないのは，さきの『平城宮報告Ⅱ』でものべたように，煮沸を必要としないものを供したか，東大寺写経所の例のような鉄釜を併用したからであろう。また，SD485では他遺跡からしばしば発見される堝，甑，釜が出土していない。甑については，板の中心に円孔をあけた木製円板が同時に出土しており，それが甕と組をなして甑に利用した可能性が大きい。従来発見されている竈や釜の例からすれば，竈の内径は21cm以上あり，甕ＡⅢ，甕ＢⅢ，甕Cは竈にのらないことになる。その際，築竈や土製支脚，五徳などの使用が考慮されるが，確証がない。

SD485土器を主として平城宮の土器と比較し，かなり相違する部分が存在することをしった。それを一口にいえば，平城宮の土器が多人数の給食を前提とする集団に供するものであることに対し，SD485土器には私的な厨房の性格がつよいことによるのであろう。このような傾向は，近年比較的調査が進行している平城京の坊内遺跡と多くの点で共通するところである。しかし，2片とはいえ三彩陶器片があり，常時に多量の土器を用意する状況がうかがわれることなどから，単なる一般の坊内居住者ではなく，相当高位の人達が残した厨房関係の遺物とみる。

産地

土師器，須恵器にみられる2群，4群の存在は，土器生産をおこなった場所の異同として理解している。この群別はさきにおこなったSK820土器の整理過程で検出したものであり，理化学的な分析もおこなった。しかしながら，現段階において特定の産地を指定することはきわめて困難である。須恵器Ⅰ・Ⅱ群土器は陶邑古窯の製品に類似することが指摘されている。* しかし，陶邑古窯群で用いる大阪層群の粘土層は和泉，河内，大和の広範囲に広がっているため，この地域内で共通する製作技法で須恵器をつくるならば，産地の識別はきわめて困難なものとなる。たとえば，北俣古窯は大和の生駒山東麓に位置する奈良時代の須恵器窯であるが，その製品は外見上陶邑古窯の製品ときわめて類似している。**

土師器では2群が抽出された。判別できたものではⅡ群土器が供膳形態の各器種ともに量的

* 沢田正昭「遺跡・遺物の保存科学(2)」(考古学研究 第19巻第3号 1973 p.92)

** 「生駒市須恵器窯出土の土器」(奈文研年報1973 p.51)

にまさっている。土師器は須恵器ほどに粘土を選択しないという。その製作跡が発見されていないこともあり，製作場所を限定することは困難である。Ⅰ群，Ⅱ群土器は色調，胎土の差異に加えて製作技法もこれに呼応している。つまり，この差異は製作地の相違によるものとかんがえられ，少なくともSD485に遺棄された土師器の大部分が2個以上の所生産地から供給されたものとする見方が成立するであろう。とくにⅡ群土器は，胎土，色調，製作技法などの諸点において船橋遺跡の土器に共通する点が注目される。このことから，なお検討の必要があるが，ここではⅡ群土器を大阪府の河内地方でつくられたものとして提唱したい。

いずれにせよ，日常雑器に類するSD485の土器が複数の生産地から供給されたことだけは確かなところである。その場合，東市・西市などから購入した可能性をまったくすべて消去するわけにはいかない。しかし，一方には右兵の墨書や筆書き土器(13・119)が存在しており，官司を媒介にする供給が当然かんがえられよう。

E　SD650出土の土器

さきに平安時代初期の土器として，かつて平城宮の平城上皇時代の遺構にともなうSE311B，SE272B，SK234土器の報告をおこなった。* 今回報告するSD650A，SD650B土器は時期的にそれらに後続するものである。

SD650A土器とSE311B土器

SE311Bからは土師器，須恵器，黒色土器，および少量の灰釉陶器，緑釉陶器が出土している。SD650Aからはそれらの土器や陶器のほかに，中国製磁器と模型土器なども発見した。SE311Bに比して出土量が圧倒的に多いことから，土器・陶器の量的な構成や，器種のあり方についても両者の間で微妙に変化するところがある。また，土器や陶器にみられる形態，手法，法量についてはも差異を識別することができる。

1　土師器　器種の構成ではSD650A土器の方が変化にとむが，基本的にはSE311B土器と変わるところがない。調整手法では，杯B・蓋にみられる筆磨き手法が消滅あるいは衰退する。SE311B土器の段階で，すでに粗雑になった器外面の筆磨き手法は，SD650A土器では高杯や蓋の一部に施されるにすぎず，杯Bにはまったくない。杯A，皿Aの調整手法としてのc手法とe手法との比率は，SE311B土器の場合では83：13と圧倒的にc手法が多い。これに対してSD650A土器では77：23とe手法が増加する傾向にある。杯皿類の法量における杯Aの場合は，SE311B土器が口径19.4～12.3cm，高さ4.3～3.1cmであったのに対し，SD650A土器では口径17.8～12.4cm，高さ3.9～2.4cmとなり，小型化する傾向にある。皿AではSE311B土器の口径が20.9～12.0cm，高さ3.0～2.0cmであるのに対し，SD650A土器では口径20.4～12.4cm，高さ2.7～1.3cmとなり器高が低くなっている。杯皿以外の器種に対する法量の比較はできないが，杯皿類についていえば，SE311B土器にあらわれる製品の矮小化と規格性の喪失という傾向が，SD650A土器においてさらに促進されている。

2　須恵器　SE311B・SE272B土器では須恵器が少なく，厳密な比較をなしえないが，器形・手法ともに共通する要素が多い。「美濃」刻印須恵器や壺Kの例から，畿外の製品を混えているとおもわれるが，じゅうぶんな識別はなしえなかった。

* 『平城宮報告Ⅳ』p.51

3　黒色土器　SE311B土器と基本的に変らない。ただ，杯類の外面調整に篦削りを用いずに未調整のまま放置するものは，SE311B・SE272B土器にない。

4　施釉陶器　SE311B土器では，施釉陶器が少なく比較は困難である。緑釉陶器の杯では両者の間に顕著な差異を見出すことはできない。ただ，瓶Cは，SD650A土器の段階で出現するのであろう。さらに，須恵器の技法から脱皮した灰釉の精製品が大幅に進出するのはSD650A土器の段階である。

以上のように，SD650A土器とSE311B土器との比較には不備の点が多い。しかし大雑把にいえば，SD650A土器は基本的にはSE311B土器に共通する要素を保持しながら他方ではSE311B土器にない新しい要素を加味しているといえよう。

SD650A土器とSD650B土器

つぎに下層に位置する古いタイプのSD650A土器と上層に位置する新しいタイプのSD650B土器との比較をおこなってみよう。

1　土師器　器種構成では大きく変化しない。しかし，SD650B土器では杯Bの大型品や高杯Aaが消滅している。甕類の外面の調整手法では刷毛目を施さないものが出現し，増加する。杯A・皿Aでは，c手法とe手法の比が，SD650Aでは77：23であったのに対し，SD650Bでは55：45とe手法が著しく増大している。SD650Bでは従来c手法でのみ調整した杯Bに，e手法で調整するものがあらわれる。高杯ではb_2手法のものがSD650Bで一般化する。法量では杯A・皿Aの場合，多少の差はあるが基本的に変化していない。しかし，SD650Aに内在する規格性の喪失という傾向は一段と促進され，SD650Bでは杯と皿の間に明瞭な区別をなしえない。とはいえSD650Aの杯Aでは，口径15cm（5寸），高さ1.5cm（0.5寸）を中心にこれより大きいものと小さいものとにわかれる傾向はある。

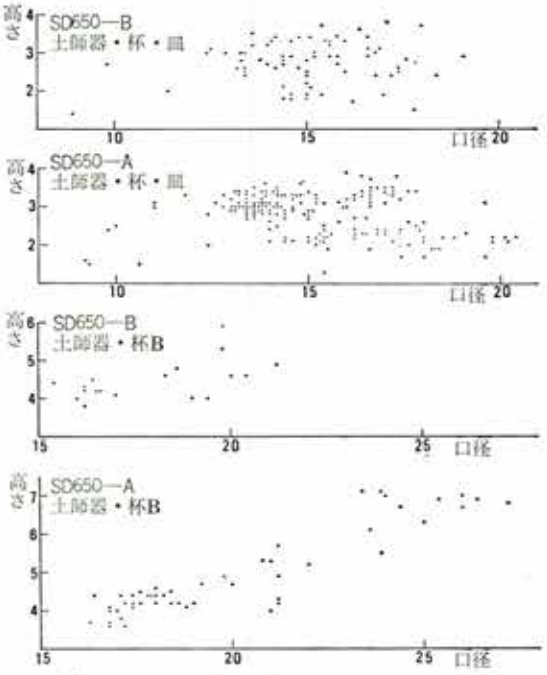


fig.30　SD650土師器杯・皿の分類図　単位cm

2　須恵器　SD650Bにおいて杯，皿類が減少化傾向にある。とくに皿Aは，すでにSD650A土器で減少化傾向を示しているが，SD650Bではほとんど消滅する状況である。SD650Bでは，盤Eの体部が縦長になり口縁端部が上方に突出する。鉢Dの高台を付すものが消滅する。このように須恵器の器種は少なくなり，形態も単純化の一途をたどる。

3　黒色土器　SD650A土器のなかで多数を占めた杯Aが，SD650B土器では減少し，相対的に杯Bが増加する。調整手法では，外面を調整しない手法が増加する。SD650A土器に存在した鉢Aが，SD650B土器ではなくなる。

4　灰釉陶器　量的に多い椀・皿類では，断面三角形の高台がSD650B土器で増大する。施釉法では刷毛塗りが減少し，釉薬のなかに直接器体を浸す方法が一般化する。それと同時に，三叉トチンを用いて焼くものが少なくなり，器と器とを直接重ねて焼く方法のものが多くなる。

器種としてはSD650B土器に皿E，瓶C，瓶Bが加わる。このような傾向は，灰釉陶器の量産化が一段と進行した状況を示すものとして理解できよう。

5　緑釉陶器　SD650B土器では，新に杯F，皿E，盤，唾壺が加わり，平瓶，鉢F，壺A，瓶Cがなくなる。しかし，製作技法の面では，両者の間に差異を見出すことが困難である。

以上のような，SD650A・B土器の相違は，SE311B土器とSD650A土器との差異よりも格段に大きく，時代様式の変遷を端的に理解することができる。

SD650土器・陶器の構成　奈良時代に比して多様化する土器,陶器が，実際に使用する場合，どのような用いられ方をしているかについては，興味のあるところである。しかし，道路の側溝という遺構の性格上その復原はかならずしも容易でない。ここでは，量的な面から一応の推測を試みてみることにする。

1　SD650A土器・陶器の場合　SD650Aでは土師器58.5%・須恵器24.8%・黒色土器12.7%・緑釉陶器2.0%・灰釉陶器1.7%の比率で出土した。緑釉陶器と灰釉陶器の占める割合はきわめて小さく，土師器・須恵器が食器の主流を占めている。土師器の増加，須恵器の減少という傾向は8世紀後半から存続し，それが一段と顕著な現象としてあらわれている。黒色土器は，土師器の系譜をひくとはいえ，形態もあきらかに施釉陶器を指向するものがみとめられる。そのためか，日常生活に使用されているとはいえ土師器ほどの普遍性をもっていない。同様に，緑釉陶器，灰釉陶器の使用はきわめて特殊であり，漆器や中国製磁器においてはなおさらである。ただ，注目すべきことは，灰釉陶器に比して緑釉陶器が多量であるということで，これが後のSD650Bでは逆転する。

須恵器の退潮

供膳形態では，土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器が，それぞれ81%，9.1%，4.6%，3.8%，1.5%を占める。供膳形態では土師器が圧倒的多数を占め，須恵器は一段と限少する。貯蔵形態では須恵器，土師器，黒色土器，灰釉陶器が，それぞれ49.4%，36%，13%，1.7%を占め，須恵器の占める割合は依然として高い。灰釉陶器はいずれも供膳形態に準じる小型貯蔵形態であり，食事の場にあらわれない大型貯蔵形態は灰釉陶器・緑釉陶器の分担するところではない。またここでは，貯蔵形態にふくめた土師器・黒色土器の甕が煮沸形態に属することからすれば，大型貯蔵形態の主役は依然として須恵器の分担するところであった。

2　SD650B土器・陶器の場合　SD650Bでは土師器，須恵器，黒色土器，灰釉陶器，緑釉陶器が，それぞれ46.8%，27.2%，18.2%，5.3%，2.2%の比率で出土した。ここでは土師器が大幅に後退し,黒色土器と灰釉陶器が進出している。この関係は形態の上でも顕著にあらわれ，供膳形態では土師器，黒色土器，灰釉陶器，緑釉陶器，須恵器が，それぞれ60.7%，25.6%，5.8%，4.1%，3.7%となり，土師器と黒色土器が供膳形態の基本になっている。貯蔵形態では須恵器の占める割合は依然として高く全体の51.2%を占めている。このように，SD650Bでは土師器と須恵器の形態分化が一段と促進される反面，土師器に潤落のきざしがあらわれ，黒色土器の占める比重が大きくなる点が注目される。また灰釉陶器と緑釉陶器との逆転は，上述の灰釉陶器量産化に対応するものとして理解することができよう。

灰釉陶の増加

以上のように，灰釉陶器の生産面に改良がみられる程度で，その他の製作技法の面ではきわめて変化の乏しい土器，陶器類ではあるが，その使用の側面からすれば著しい変化を認めねばならない。すなわち，SD650B段階における土師器緑釉陶器の後退，黒色土器，灰釉陶器の進

出は，つぎにくる瓦器と灰釉陶器の増大という時期を直前にひかえた過渡期的な様相ともいえよう。いずれにせよ土器，陶器類が多様化するSD650A・Bの時期においては，それらを使用する社会的階層によって，種類の選別がなされたとみるべきであろう。すなわち，それらのうち**奢侈製品**もっとも奢侈的なものは，磁器，漆器，緑釉陶器，灰釉陶器である。それらを合計しても全体の10%を越えるか越えないかの量にすぎないのであるが，それぞれで供膳形態や小型貯蔵形態をそろえることは可能である。とはいえ，灰釉陶器以外の陶磁器量はさらに僅少であり，使用者はきわめて限定される。陶器類における高級品の存在に比して，食器にともなう折敷，盆などの木製什器には貧素である。つまり，木製品はいずれも白木づくりのものであり，漆塗の什器などは発見していないのである。このような点からすれば，そうした高級陶器は貴人の食器とするよりも，仏式や神事などに用いる祭祀の儀器であった可能性のほうが強いといえよう。

緑釉陶器と灰釉陶器とは，器種・形態の面で共通する部分が多い。たとえば，杯類では緑釉陶器が口径18.0～9.6cm，高さ5.8～2.4cmであるのに対して，灰釉陶器においては口径19.8～11.1cm，高さ6.3～3.0cmというように法量の面でも類似している。皿においても同じである。この状況と灰釉陶器が緑釉陶器を次第に凌駕するという傾向は期を一にするものであり，実用に際しては一段と優れる灰釉陶器が量産化を確立する段階になると緑釉陶器はその位置を灰釉陶器に譲ることになるのであろう。このような日本産の陶器の指向するところが中国産の磁器類にあったことは，少量ではあるが同時に発見した磁器類に対比すれば一目瞭然である。現在までの平城宮跡の発掘を通じて，中国産の陶磁器の発見はほとんど皆無に近い，それに対して，今回の中国産磁器の発見は破片とはいえ，決して少なくない。それらの磁器が越州窯などの華南地方の製品であることを考慮するならば，遣唐使のような政治的な交流によってもたらされたものではなく9世紀初頭から活潑化する民間貿易を目的とする唐船の来航によってもたらされたのであろう。

SD650出土土器類は9世紀の所産であり，A・B様式の区分は9世紀の前期と後期になる。灰釉陶器と緑釉陶器の産地については，かつて高島忠平が報告したことがあり，基本的には彼の報告と大きく変るところはない。* ただ，整理期間の関係で各地の古窯で出土した陶器類との比較ができなかったため，あえてふれないことにした。

F 木 製 品

SD485からは8世紀前半，SD650からは9世紀前半の木製品が出土した。この時期と性格をことにする2本の溝からは，ともに祭祀具や食膳具が多く発見され，そのほかSD650の下駄のごときも注目すべき遺物であった。木製品全体にわたる考察をここでなしえないが整理の過程で判明した二三の事柄についてふれることにする。

祭祀具の形態 祭祀具として概括したものには形状および使途の不明なものが多いが，大雑把にいえば，削掛け，人形，形代などが主要な遺物となる。ここでは，比較的まとまりのある削掛けと人形についての変遷をみることにしょう。

---

* 高島忠平前掲論文p.79。ここで，SD650出土土器と共通の形態をとる猿投窯の灰釉陶器と緑釉陶器との間におよそ100年の落差が生じることを指摘した。

1 削掛け 削掛けは近年各地で発見されており，井戸，溝などから出土する場合が多い。しかしながらその意味，使用法などについて，ごく一部の例を除いていま明らかにすることはできない。しかし，SD485とSD650との間に存在する約100年間の時間差が，その形態にどのような変化をおよぼしたかという形式編年については，類推することが可能である。

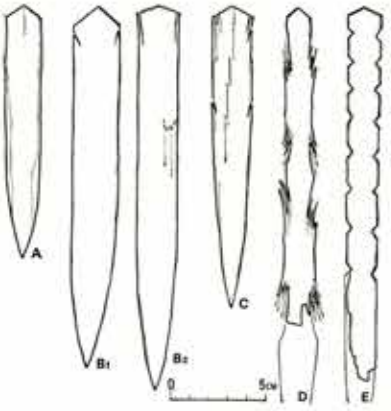


fig.31 削掛け型式分類図

削掛けの分類

すでにのべたように，削掛けは頭部付近の両側辺におこなう切込みによって，A～Eの5種類に分類できる。削掛けAは主頭の両側に切込みをいれないもので，6AFB区からは出土していない。しかし，平城宮6AAI区に存在する。SD485・SE495からは削掛けB・Cが出土し，他の種類を含んでいない。ただ，削掛けCは平城宮の同時期遺構から検出されていないので，SD485の例はその古い例に属することになる。SD650からは，削掛けB・D・Eが出土している。

藤原宮および，平城京の初期遺構からは削掛けB・Cが出土し，この形態が7世紀後半にまで遡ることになる。削掛けB・CがD・Eへと変化するのであるが，SD485の削掛けB_1では両側に各1回の切込みをいれるにすぎないが，SD650の削掛けB_2では同1個所に4～5回と切込みの数を増加する。それがさらに正反逆に2回繰返したものが削掛けDとなるのであろう。その変化は切込みの単純なものから，繁雑なものへの変化であり，さらに発達したものが民俗例にみられる「削り花」などへ移行するのであろう。削掛けEは両側の切込みの数からすれば，削掛けDと関係するかもしれないが，形態からすれば全く別系統にかんがえるべきであろう。しかし，いまのところ，その原形らしきものを摘出することはできない。平城宮の出土例からすれば，削掛けEは奈良時代後半に出現し，削掛けDは奈良時代末から平安時代初頭におくことができよう。ただ，新形式の出現によって，削掛けBのような単純な形が消滅するという状況はみられず，新旧2形式は依然として平行して存在するのである。

2 人 形 現在，奈良時代から平安時代にかけての人形の形態的な変化を適確に明示することはできないが，大雑把な変遷を見通すことは可能である。

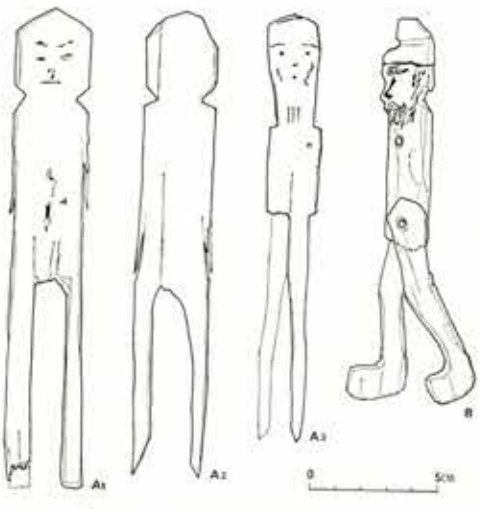


fig.32 人形型式分類図

人形の分類

SD485における人形には2形態ある。人形Aは短冊形の板を加工して人の正面の全身像をあらわす。首部は両側辺から三角形の切欠きをいれてあらわし，頭部を三角形にするもののほか，円頭にするものがある。顔の表現は個体によってことなるが，目・鼻・口・眉を墨で描く。首と足の表現を主とし，手は両側辺からの切込みによって表現し，なかにはこの手を両端から

切落して胴部を誇張するものがある。足の表現によって人形A_1・A_2に区別できる。人形A_1は板の下端の2個所から切込みをいれ，中央部分を折り取って両脚をつくるもので，股は逆U字形を呈する。長さ19cm内外の大型のものである。人形A_2は下端の2個所から内側に向う斜めの切込みをいれ，逆V字形の股につくる。この場合，腿部や脛部を区別するものもあるが，足は細い三角形を呈する。長さ10cm内外の小型である。人形Bは組合せ人形と称したもので，人の側面形を表現する。頭部から胴部にかけての部分，手部，脚部の3部分からなるが，SD485から脚部が発見されていることから，その存在をした。平城宮6AAI区の例によれば，その表現は人形Aに比して写実的で，とくに頭部側面形は入念に刻している。SD650には人形Aと人形Bとがある。人形AとしてはA1がなく，A_2・A_3があるが，多くはSD485に存在しない人形A_3である。人形A_3は脚部の加工では人形A_2と変らないが，首の切込みの上方が大きく，倒卵形の顔面を呈する。頭頂は三角形を呈するもののほかに，平頂をなすものがある。また，手をつくらずに胴を誇張したものがある。長さ17cm内外の小型のものから33cm以上の大型品まであるが，つくり方は基本的に変らない。また，腹部に「人」字を墨書し，人形であることを強調するものがある。墨描きによる顔面の表現には，簡単なものと，口髭や顎髭を描く写実的なものがある。人形Cは大型の板に人面を描くものでSD650から出土した。破片のため全形をうかがえないが顔面の表情は豊かである。奈良時代における同じ形態のものはしられない。しかし小型であるが，頭部の輪郭を帽子をふくめて写実的に切りぬき，正面形や側面形の人形があり，SD650の祖形に相当するのであろう。

人形の大型化　平城宮の人形をふくめて一般的にいえば，時期が下るにしたがって大型化し，顔の表現が写実的になる。人形Aは単体で存在するのではなく，数枚あるいは十数枚を単位にして用いた場合が多いようである。また，多くの場合は性別が判然としないが，髭や髪形によって性別がわかる場合はすべて男性であることが注目されよう。他方，首部の表現に対して身部の表現が粗雑なことから，使用に際しては紙や布の衣を被せた可能性がある。人形B・Cは個々の形態差が大きいことから，単体で用いた可能性がつよい。その場合，土馬とか刀子，琴などの形代類と組合せて用いるのであろう。

曲物容器　SD485から32点，SD650から206点の曲物容器が出土した。それらの大半は破損しており，全形をうかがえるものはきわめて少ない。そうしたことから，ここでは両溝の曲物容器を一括して扱い，それぞれの特色についてふれることにする。

SD485の曲物容器は，直径で3cmの間隔をおいてⅠ～Ⅴの5種類にわかれ，SD650の曲物容器は，直径で2cmの間隔をおいてⅠ～Ⅷの8種類に分類した。両者を通じて直径13.5～16.5cm前後の曲物容器が最も多く，全体の70%に近い。蓋の出土例は少なく，身の15%程度である。おそらく曲物容器の大多数が蓋を被せずに用いたことによるのであろう。この状況は平城宮SK820の場合でもみとめられた。側板の多くは遊離して破損しており，直径と高さとの関係について分類することはできなかった。つぎに，製作技法についてふれよう。側板は主としてヒノキの薄板でつくる。木取りは柾目と板目とが相半ばしている。側板の表裏の削りは入念で，刳板を鉋などで削ったものであろうが，その刃痕をほとんどとどめていない。その厚さが均一であることもいうまでもない。小型の側板や蓋の側板には施していないものがあるが，中型以上ではその内面に刻み目(けびき)をいれる。これは「曲物」に曲げるためであり，垂直方

向ないしは斜め方向の刻み目を，厚さの約½程の深さにまで切込む。側板を縫合する樺皮ぬいには，桜皮を用い，種々の方法がみられるが，現状では明確に分類できない。底板は主としてヒノキである。板目のものと柾目のものとがある。SD485の底板では，Ⅰ～Ⅲに属する直径18.5cm以上の大型の場合はすべて板目取りであり，Ⅳに属する直径15.0～17.5cmのものはすべて柾目取りという区別がある。Ⅴに属する小型底板では板目・柾目が共に存在する。SD650の底板でもⅠ～Ⅳに分類した19cm以上の大型底板は板目取りが圧倒的に多く，Ⅴ～Ⅷの底板では柾目木取りが多い。Ⅷの小型底板では板目・柾目木取りが相半ばする。このようなことから，大型品では板目，中型品では柾目，小型品では板目と柾目の混用という原則をしる。底板の円周をきめる方法は，民俗例によると2つの方法がある。その1は，型板をあて，外周に添って刻線をつける。2は曲げおわった側板を底板にあて，内径に添って刻線をいれる。SD650の底板にとどめる円形の刻線がそのいずれに属するかあきらかでない。しかし，1例ではあるが，側板の重なる部分とおもわれる刻線の段をとどめるものがあり，後者の手法で円周を決めた可能性がつよい。底板と側板との固定は木釘でおこなう。木釘の数は4～6本の例が多く，4本程度が一般的である。木釘を打つ際，一層強固にするため，一条の割板を側板の基部にめぐらして固定するものがある。蓋板も主としてヒノキでつくる。SD485では，Ⅰに属する大型蓋板に板目を用い，Ⅳには板目・柾目木取りが混在し，Ⅴでは柾目木取りであった。SD650でもほぼ同じ傾向を示す。他方，平城宮SK820では蓋板のすべてに板目板を用い，底板にはすべて柾目板を用いる現象があるが，それは内裏に供するためにとくに精製品を選んだためであり，SD485・SD650の場合が一般的であろう。蓋板はA・Bの2種類に分類した。SD485には2種を混在するが，SD650では蓋板Bに限る。蓋板Aはその周縁に側板をたてる凹線を刻み，樺皮と木釘で側板を固定する。この技法は藤原宮や平城宮の7世紀末から8世紀前半のかけての遺物にある。蓋板Bは凹線を刻まず直接側板を樺皮でとじるものであり，8世紀後半から9世紀の例はほとんどこれに属する。

曲物の分類

1　SD485出土曲物

	寸　法	数 (%)	板目(%)
底　板（直径）			
Ⅰ	25cm前後以上	3 (11)	3(100)
Ⅱ	22cm前後	3 (11)	3(100)
Ⅲ	19cm 〃	3 (11)	3(100)
Ⅳ	16cm 〃	14 (52)	0(0)
Ⅴ	14cm前後以下	4 (15)	2(50)
蓋　板（内径）			
Ⅰ	25.5cm以上	2 (40)	2(100)
Ⅱ	22.5cm前後	0 (0)	
Ⅲ	19.5cm 〃	0 (0)	
Ⅳ	16.5cm 〃	2 (40)	1(50)
Ⅴ	14.5cm前後以下	1 (20)	0(0)

2　SD650出土曲物

底　板（直径）			
Ⅰ	26cm前後以上	9 (5)	9(100)
Ⅱ	24cm前後	5 (3)	(不明1) 4(100)
Ⅲ	22cm 〃	4 (2)	3(75)
Ⅳ	20cm 〃	10 (6)	9(90)
Ⅴ	18cm 〃	13 (7)	4(31)
Ⅵ	16cm 〃	74 (41)	(不明1) 10(14)
Ⅶ	14cm 〃	48 (27)	(不明6) 15(36)
Ⅷ	12cm前後以下	16 (9)	(不明1) 7(47)
不明		4	
蓋　板（内径）			
Ⅰ	26cm前後以上	3 (13)	3(100)
Ⅱ	24.5cm前後	0 (0)	
Ⅲ	22.5cm 〃	0 (0)	
Ⅳ	20.5cm 〃	3 (13)	0(0)
Ⅴ	18.5cm 〃	1 (4)	1(100)
Ⅵ	16.5cm 〃	2 (9)	2(100)
Ⅶ	14.5cm 〃	11 (48)	5(45)
不明	12.5cm前後以下	3 (13)	0(0)

3　SK820出土曲物

	曲物底板		曲物蓋板	
	数(%)	板目(%)	数(%)	板目(%)
Ⅰ	0(0)		2(29)	2(100)
Ⅱ	0(0)		0(0)	
Ⅲ	4(21)	0 (0)	4(57)	4(100)
Ⅳ	11(58)	0 (0)	1(14)	1(100)
Ⅴ	4(21)	0 (0)	0(0)	

Tab.14　曲物容器分類表

SD650の下駄　鼻緒孔のうち前壺の位置によって，下駄Aと下駄Bにわかつことができる。下駄Aは前壺を左右のいずれかに偏して穿ち，左履き右履きを区別して製作したものである。下駄Bは前壺を台の中心に穿ち，履き方の左右を区別しないものである。下駄Aは古墳時代以来の形態であるが，SD650での出土例は少なく鼻緒孔位置のわかるもの30例のうち5例にすぎない。下駄Bは8世紀にあらわれはじめる新しい形態であり，SD650では出土例が多く下駄Aを凌駕する傾向にある。平面形は個々によってかなりことなるが，全体に細長い平面形を呈し，四隅をまるく落し，前縁付近を広く，後部を狭くつくる。歯は多くの場合磨滅しているが，残存するものでは高く，下端部で左右に張り出している。このような状況は古い時代の下駄にみられない新しい傾向といえよう。下駄の高さが高いとはいえ，いずれも連歯下駄であり，台と歯を別にする差歯の下駄はない。

さきに全長によってⅠ～Ⅴの5段階に分類した。この分類にしたがって鼻緒孔から鼻緒の長さをみると，いうまでもなく大型で長く小型で短い。6世紀の川原寺下層遺構から出土した例では前壺と後孔との長さが後孔の幅とほぼ等しかった。SD650の例では後孔の幅が前壺と後孔との長さのおよそ½におさまり，鼻緒が長くなっている。このような傾向は8世紀の平城宮出土の諸例にもみられるところである(Tab.15)。

(分類)	(番号)	(全長)	(後孔幅)	(前壺～後孔の長)
BⅠ	619	24.3	6.2	10.2
AⅡ	616	23.4	5.5	12.6
〃	618	23.0	6.7	12.2
BⅡ	600	21.0	5.4	11.7
〃	601	22.2	4.0	8.6
〃	602	21.2	6.4	10.8
〃	603	21.8	5.8	9.8
〃	604	22.0	6.3	9.9
〃	605	22.1	6.1	11.1
〃	606	22.6	5.9	11.1
〃	607	22.0	7.2	11.8
〃	608	22.7	5.5	10.5
〃	609	22.7	6.5	10.5
〃	610	22.8	5.8	11.3
〃	611	22.8	7.2	9.9
〃	612	21.8	5.5	9.0
〃	613	22.5	6.2	10.0
〃	614	22.0	5.6	10.5
〃	615	22.0	6.4	10.4
〃	617	23.7	5.6	11.4
〃	629	22.5	6.1	12.3
AⅢ	597	19.5	5.3	8.7
〃	599	19.8	5.6	10.8
BⅢ	596	18.7	6.3	8.1
〃	598	19.8	4.3	10.9
AⅣ	594	16.9	5.0	7.6
BⅣ	595	17.5	4.2	8.3
BⅤ	591	12.0	3.0	5.2
〃	592	13.0	4.1	6.7
〃	622	13.5	4.5	6.0

単位cm

Tab.15　下駄の分類と鼻緒孔

F　金　属　器

SD650出土の金属器は多くない。それらはいずれも廃品であり，銅滓・砥石などを伴出していることから，鋳造や鍛冶をおこなった工房の遺物である可能性がつよい。そのような廃品のなかで，比較的まとまりのあるのが帯金具であり，同時に出土した石銙をもふくめて，銙帯に関する若干の検討を試みてみることにする。

帯金具　奈良時代の官人が用いた腰帯の制度をまずみてみよう。「衣服令」によれば，腰帯は金銀装と烏油装とにわかれ，前者は文官五位以上，武官の衛門督と佐，兵衛督が締める。後者は文官六位以下，武官の尉・志，兵衛，主帥が締めるという。また無位官人は烏油腰帯（くろつくりのこしおび）であった。2種の腰帯はいずれも金属製の銙を革帯にとりつけたいわゆる銙帯であり，* 前者は銙に金銀を鍍金し，後者は銙に黒漆を塗ったものとされている。このような銙帯の開始については，『扶桑略記』慶雲4年（707）の条に「天下始用革帯」とあるのが初見である。大宝令では「綺帯（かんはたのおび）」，すなわち組紐の帯であったが，このときに服制を唐風に改めて鉸と銙を装着する革帯を採用したのであろう。その後，官人の腰帯は一貫して銙帯であったが，延暦15年（796）に

腰帯の制

* 「衣服令」ではつぎのように規定する。朝服：王・親王一金銀装腰帯，諸臣一位～五位一金銀装腰帯，諸臣六位～初位一烏油腰帯，衛府督・佐・兵衛督一金銀装腰帯，尉・志・兵衛・主帥一烏油腰帯，衛士一白布帯。礼服：王・親王～五位一条帯，衛府督・佐・兵衛督一金銀装腰帯。制服：無位一烏油腰帯。

なって変化を生じる。『日本後紀』延暦15年12月条，および弘仁1年(810) 9月条には，この間の経緯がのべられている。* それによると，延暦15年には銅銙を廃して石銙にかえるが，大同2年(807)になって再び銅銙にもどし，弘仁1年にまた石銙(雑石腰帯)に変更する。この流動的な改廃の理由としては，平城上皇の復古政策の一環として大同2年の変更があり，それが嵯峨天皇によってまた旧に復したとみるのが至当であろう。ともかく，制度上では延暦15年から弘仁1年の間に銅銙から石銙に変化したのである。ただ『日本紀略』延暦4年 (795) の「聴参議以上着白玉帯」や，『日本後紀』延暦18年 (799) の「勅，玳瑁帯者先聴三位以上著用，自今以後五位得同著」などの記事からすれば，延暦以前から高官貴族の間では，玉や玳瑁で飾る腰帯が流布していた可能性がある。延暦年間における玉石帯への変更は，そうした一般の流行を追認することにあったとみられる。

さて，今回発見した銅銙には金銀の鍍金をほどこしたものはなく，漆膜をとどめるものが存在するから，6位以下の官人が用いた烏油腰帯の銙とみてよい。烏油腰帯の伝世品は正倉院にある。また，各地の古墳などから一帯分の銙鉸が発見されており，それらによると，鉸具と鉈尾の間には丸鞆1，巡方2，丸鞆6，巡方2，丸鞆1の順序で銙を配列する。各銙には鋲足があり，同形の裏金具を帯裏で鋲留にする。1帯に用いる銙の大きさは，均一に揃えている。 **烏油腰帯**

銙の数　このように奈良時代の銅銙帯および平安時代の石銙帯の銙の数は従来から銙具と鉈尾の間に12銙を想定している。ただ，正倉院銅銙帯**のうちにも丸鞆7，巡方4の11銙の例もあり，大阪府・道明寺天満宮蔵の銀製銙帯は長方形銙14が備わり，もっとも銙数が多い。出土品の場合は鉸具，鉈尾および12銙を持つ完帯は山口県・見島例*** に限られる。宮城県・猿飛来古墳****では鉸具を含む丸鞆7，巡方3が革帯に装着されていたかの状況であった。ただし，この場合には鉈尾を欠く，他の出土例ではさらに不完全であってこれから決定することはできない。したがって正倉院の銅銙帯をもとに銙を通例とする考えに従いたいが，唐制では銙の形質とともに銙の数が官位によっていることが注意されなければならない。すなわち，『唐書』車服志には「…三品金玉帯銙十三　四品金帯銙十一　五品金帯銙十　六品七品銀帯銙九　八品九品鍮石帯銙八　流外官及庶人銅鉄帯銙七」といい，位階に準

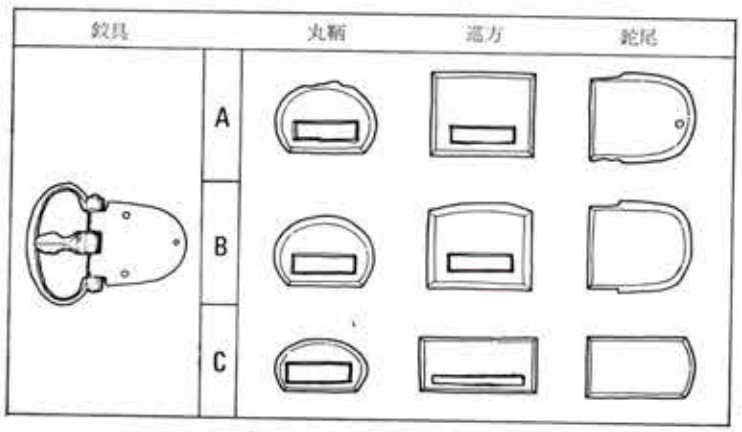


fig.33　帯金具型式分類図

*　『日本後紀』延暦15年12月辛酉条，「禁銙帯以支銭貨也」『日本後紀』弘仁1年9月乙丑条「又去大同二年八月十九日下弾正台例言，雑石腰帯。画飾太刀…等一切禁断者，臣等商量　雑石易得，造売多人，至于著用，亦復難損。銅銙具者，以漆塗成，動易剝落，今難易各異。価直是同，為弊一也。…悉聴用之」

**　正倉院の銅銙帯のうち2帯の鉸具に「東大寺」の刻銘がある。舞楽用の装束だが，黒漆塗りで官人の烏油腰帯と同じである。(『正倉院図録』第7輯)

***　山口県教育委員会『見島綜合学術調査報告』1964

****　栗駒町教育委員会『宮城県栗駒町鳥矢崎古墳調査概報』1972，p.5 この例では金塗金の痕跡があり，同様の例は三重県鳥羽市荒島贄遺跡からも出土している。

じて銙数が13から7までに至る。唐制を採用した奈良時代の銙帯について文献で銙数を規定したものはなく，限られた伝世品や出土品からのみ決定するには難点がある。

垂　飾　垂飾について，銅銙および石銙には下方に長方形の孔がある。すべての銙にはないが，この方孔は本来は腰飾・佩飾を垂下するためのものである。佩飾については『唐書』車服志に，「…初職事官三品以上　賜金装刀礪石　一品以下則有手巾・算袋・佩刀・礪石　至睿宗時罷佩刀礪石而武官五品以上佩帖蝶七事　佩刀・刀子・石契・苾眞・噦厥・針筒・火石是也」とあり，五品以上に帖蝶即ち垂飾を佩用することを記す。この他に，西域胡服図にみると同じ小革帯を銙の下方に垂下するともあった。*　また正倉院の小合子・牙小尺・玉・魚形・刀子などがこの帖蝶に類するものである。

銅銙帯と垂飾との関係についてみると，正倉院革帯の4帯のうち「東大寺」銘の1帯には丸鞆・巡方のすべてに長方形孔があるが，うち2銙では裏金具には長方形孔はなく，帯にも孔はない。他の革帯も同様に裏金具に孔のないものがあり，裏金具の長方形孔と垂飾とは直接関連しない面がある。出土例でも鋲留されたままの表裏金具があるが，長方形孔のない裏金具と対になる場合も多い。山口県・見島の場合，12の銙のうち裏金具に長方形孔をもつものは丸鞆2，

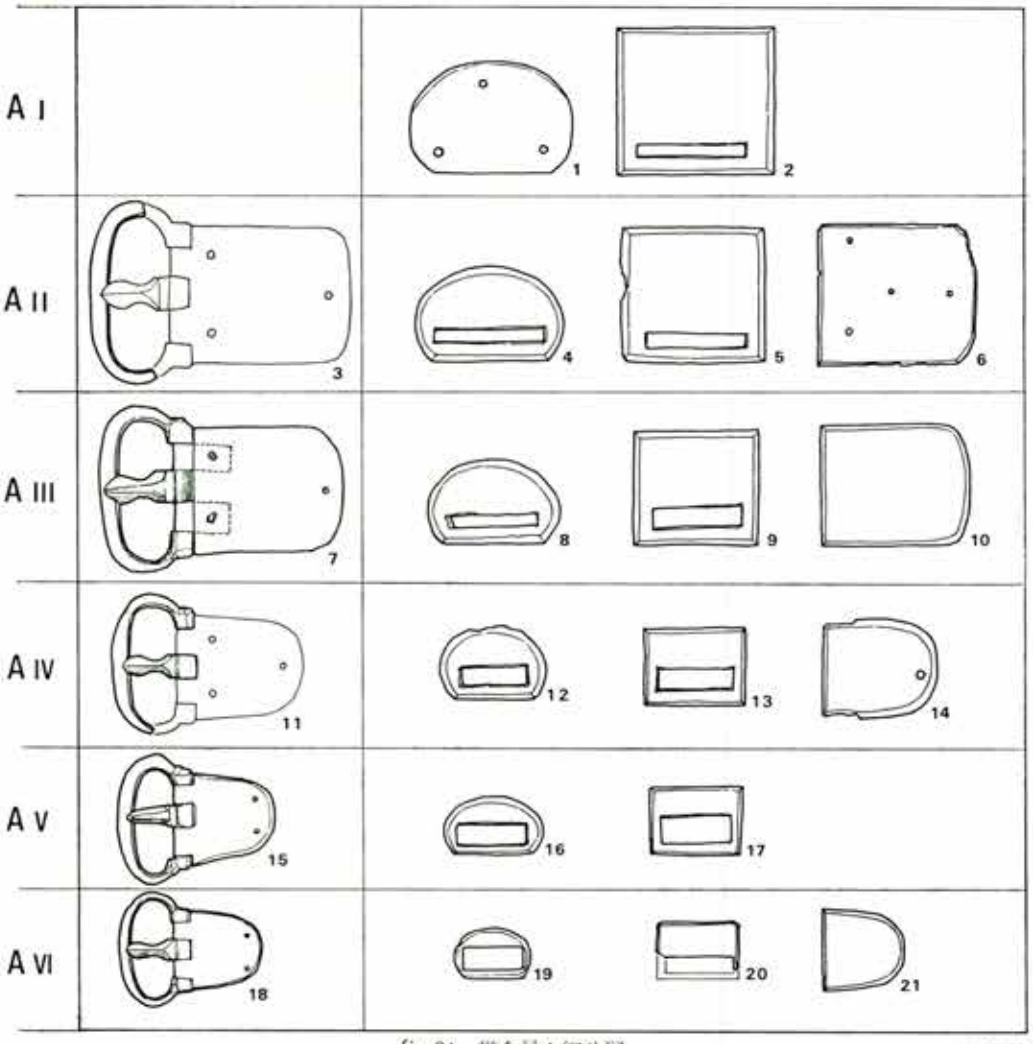


fig.34　帯金具A細分図　　縮尺1：2

*　新疆省ベゼリックス壁画の人物像に，方形もしくは円形の小銙をつけそれに数条の垂飾をつけるものがある。同様の例は永泰公主墓，韋洞墓，懿徳太子墓など唐代壁画にみられる。

巡方2である。宮城県・猿飛来古墳では10銙すべてが裏金具に長方形孔を欠く。このように銅銙帯ではすべての表金具に長方形孔があるが，裏金具に長方形孔のないものが多い。おそらく垂飾を垂下した場合もすべての銙に伴うものでなく，また，型式的なものであったとみられる。石銙の場合にはあきらかにこの長方形孔が省略された例が出現する。後述するように，鉸留めとする銙では長方形孔をもたないものが少数ある。宮城県・多賀城出土丸鞆* がこれであり，正倉院紺玉帯も長方形孔が省略されたものである。さらに潜り穴で革帯に綴じつける石銙ではむしろ長方形孔のない場合が多く，次第に省略，退化していく様子がうかがわれる。

つぎに「衣服令」などでは，金銀装腰帯と烏油腰帯とを区別するにとどまり，その形質や寸法について記していない。** しかし，遺物では大小の違いが厳然として存在しており，それが位階などに応じて規格された可能性が強い。

銅銙の分類　6AFB発見の帯金具を中心にして平城宮出土例をもふくめて，革帯を構成するところの鉸具，巡方，丸鞆，鉈尾は形状に応じて以下のように分類することができる。　**銅銙分類**

鉸具a：C字形の外枠をもち，基部に軸孔をあけて軸棒と刺金をつける。一般的にみられるもので，SD650(2)がこれにあたる。

鉸具b：外枠と軸とを一体につくるもの。鉸具aに比して古式をとどめる。SD650(1)であるが，三重県・高向C遺跡からも一例出土している。***

巡方a：方形に近い横長の巡方である。出土例の多くはこれに属する。SD650(12，14，15～18)。

巡方b：巡方の上辺が弧形を呈するもので，いわば山形とも称せられるもの。SD650(13・15)がそれであり，平城宮6AAI区でも出土している。しかし，類例は少ない。

巡方c：長方形を呈する横長のもの。縦横の比が1：2となる。平城宮6AAI区で出土したが，類例は少ない。

丸　鞆：いずれも楕円形の下辺を直截した形状をとる。縦幅の広いもの(a)と横幅の広いもの(c)との別があるようであるが，巡方のように明瞭な差異を見出すことはできない。

鉈尾a：平面形を半楕円形につくり，直線の方を基部とし弧線の方を先端にする。

鉈尾c：長方形の先端を弧形につくる横長のもの。平城宮6AAI区から出土している。

つぎに，それぞれの形をとる銙の組合せの問題がある。巡方にあらわれる形状の差異によって，つぎのようなA～Cの3種類の銅銙帯を想定することができよう。

銅銙帯A：鉸具b＋巡方a＋丸鞆（a）＋ 鉈尾a

銅銙帯B：鉸具b＋巡方b＋丸鞆（a）＋ 鉈尾a

銅銙帯C：鉸具b＋巡方c＋丸鞆（c）＋ 鉈尾c

3種類の各銙帯は，銙の縦と横幅によって細分できる。

銅銙帯AI　帯幅が3.9cm以上のものである。平城宮6AAF区からは巡方が出土している。丸鞆の表金具はないがSD650の裏金具(7)によって存在を想定することができる。これに相当する鉸具と鉈尾の出土例はまだない。

	巡　方			丸　鞆		
	縦	横		縦	横	
A-I	3.9	4.2	(1)	2.9	4.2	(1)
A-II	3.3	3.7	(5)	2.5	3.7	(6)
A-III	2.8	3.2	(6)	2.3	3.2	(4)
A-IV	2.3	2.7	(9)	1.9	2.7	(5)
A-V	2.0	2.4	(5)	1.6	2.6	(0)
A-VI	1.7	2.2	(5)	1.4	2.2	(5)

単位cm

Tab.16　巡方・丸鞆分類表 ( )内は個数　　**銅銙帯Aの6段階**

*　帝室博物館『天平地宝』1937

**　『延喜式』内匠寮に馬脳腰帯料として「銙具石一顆方四寸」の記載があり，方4寸のメノウから数個の銙をとったことがうかがわれるが，それ以上のことはわからない。

***　三重県教育委員会『南勢バイパス埋蔵文化財調査報告』1973　p.60

銅銙帯AII　帯幅が3.3cm以上のもの。SD650においては巡方(12)のみが出土しているが，平城宮6AAI区から鉸具の破片と丸鞆が，6AAG区から鉈尾の裏金具が出土している。

銅銙帯AIII　帯幅が2.8cm以上のものである。この例は比較的多く，SD650には丸鞆8，9があり，山口県・見島からは鉸具・猪目金具を含めた好例が出土している。この例では鉈尾の縦幅は巡方の縦幅よりも4mm大きい。正倉院の革帯でも，同様に鉈尾の縦幅は革帯幅に等しい。すなわち鉈尾の縦幅を示しているとみてよい。

銅銙帯AIV　帯幅が2.3cm以上のものである。巡方，丸鞆ともに裏面が窪まない板状の表金具があり，鉈尾にも横幅の長いものがある。SD650(3)。

銅銙帯AV　帯幅が2.0cm以上のものである。巡方，丸鞆ともに表金具は板状につくっている。SD650（4・11・17)。これに該当する鉈尾の発見はまだない。

銅銙帯AVI　帯幅が1.7cm以上でもっとも小さなものである。鉈尾をのぞくすべてを板状につくっている。SD650（5・6・14・18・20・21)。

以上銅銙帯Aは6段階にわかれるが，他の2種については，銅銙帯Bの3段階，銅銙帯Cの1段階を確認するにすぎない。銅銙帯Bの大きさは，銅銙帯AのIV・V・VIに準じている。銅銙帯BIVはSD650から出土した13・15であり，長野県・福島遺跡から裏金具が出土している。* 銅銙帯BVとしては，裏面が凹面をなす厚手精製品が平城宮6AAI区から出土している。銅銙帯BVIは，表金具を板状につくった巡方が長野県・姥塚古墳から出土している。** 銅銙帯Cでは AVI帯に相当する帯幅をもち，平城宮6AAI区からは裏面が凹面をなす厚手の精製品が出土している。この銅銙帯B・C帯の現在発見されていない大きさのものについては，いまのところ銅銙帯Aに準じて存在するものとかんがえたい。

銅銙の寸法　Tab.16は比較的例数の多い銅銙帯Aにおける巡方と丸鞆の寸法を表示したものである。これによると，巡方の縦幅，横幅，丸鞆の横幅が，I～IV・VIの間では各5～4mmずつ減少し，IVとVの間では3mm減少していることがわかる。このような，大小の違いはどのようにして生じたのであろうか。もっとも大型の銅銙帯AIの巡方は縦3.9cm，横4.2cmの大きさであり，0.9：1の比率を呈している。これを天平尺に換算すると，横幅の4.2cmは1寸5分に近く(1.5寸×2.94cm=4.410cm)，縦幅の3.9cmは1寸3分5厘(1.35寸×2.94cm=3.969cm)に近い。つまり，横幅から1割を減じた数値を縦幅にしたものである。また，AIには出土していないが，AIIIなどの例から予測される鉈尾の縦幅は巡方縦幅よりも4mm程大きい数値すなわち巡方横幅と等しいものとみられる。つまり銅銙帯の最大帯AIの帯幅は1寸5分であったとみられる。さらに銅銙帯AI～AIVの各段階の減少数値である4～5mmは1分5厘(0.15×2.94cm=0.441cm)ということになる。つまり，銅銙にはおよそ1寸5分を基準とする格差が存在することになる(fig. 35)。

官位の比定　烏油腰帯に6段階の規格があることが判明した。この規格が，帯を締める官人の位階に相当するとするならば，銅銙帯AI＝6位，銅銙帯AII＝7位，銅銙帯AIII＝8位，銅銙帯AIV＝大初位，銅銙帯AV＝少初位，銅銙帯AVI＝無位に比定することができよう。ただ，令では朝服色・袋などは正従上下階を一括して位ごとに定め，4階の細分は緒と結に限っている。したがって，令の規定にしたがえば，初位は1に扱うべきで2分するのは不当ということ

* 国士館大学文学部考古学研究室『長野県伊那市福島遺跡（資料編)』1968，p.55

** 藤森栄一「信濃諏訪地方古墳の地域的研究」（考古学　第10巻1号，1939 p.45)，

になる。このことから銅銙帯については，2通りの解釈をのべ，将来の問題としたい。第1の解釈は，銅銙帯AVが他とことなり中間的な大きさであることから，銅銙帯AIVに付随してつくられたものとかんがえる。この場合，大初位と小初位の銙帯は銅銙帯AIVということになる。第2は，銅銙帯AVの丸鞆が明瞭に区分できないことから，製作上の誤差範囲内にふくめる場合である。したがって，銅銙帯AVというのは実在しなくなる。

銅銙帯A・B・C　巡方にみられる種類の形態の違いからそれぞれの銙帯の存在を想定した。銅銙帯Aは前述したようにもっとも遺例が多く一般的なものである。銅銙帯Bは銅銙帯Aに似るが少数である。銅銙帯Cに至ってはさらに少ない。衣服令によると烏油腰帯を着用する範囲は文官6位以下無位まで，武官の尉以下主帥までである。つまり，文官と武官の2用があるのであるが，両者の銙帯の形態に差異があったか否かについては不明である。しかし，文官の銙帯は位階で規定し，武官は官職で規定する。さらに武官は朝会に臨んで錦褊襠・赤脛巾・弓箭(将・志)や挂甲・槍・紺洟(兵衛)，挂甲・弓箭・縹洟(主帥)など文官とは装束をことにする。それらのことからすれば，銙帯についても文官とことなることが推測できる。このようなことから，銅銙帯Aをその遺例の多い点で文官銙帯，銅銙帯Bを武官銙帯に比定することができよう。銅銙帯Cについては，いまのところ不明な部分が多く，その着用階層を想定することができない。後述するところのように，非公式の銙帯ともかんがえられようが，奈良時代に公式帯と私帯とを両用した史料はない。

衣服令

銅銙帯の製作　以上のように，衣服令に定める官人腰帯のうち6位以下の銅銙帯についてその分類及び官位比定を試みた。まだ完全ではないが大要としては官位に準じた一定規格の銙帯が用いられたとみてあやまりはなかろう。同時に銙帯の性格からみて，銙帯の製作・管理については官の統轄のもとにあったことがあきらかであり，官人の任用，授位を所掌した式部省がこれにあたったものと考えられる。また製作に関しても官の工房での一括生産が推測されるところである。平城宮第32次調査6AAI区で宮東南隅大垣外方の東一坊大路側溝，およびこれに流入する宮内の溝から多量の木簡，木製品と銭貨・鉱滓などの金属製品が出土した。このなかに多数の銅銙帯の破損品があった。これにつづく第32次補足調査では，宮東南隅大垣に接して規模の大きな炉の遺構がみつかっている。出土木簡に式部省に関連する木簡が多いことから，近傍に式部省を想定することもあながち見当ちがいではなかろう。とすれば，6AAI区出土の銅製銙は式部省によって回収された破損品の一部であった可能性もある。官人に授与された銅銙帯は一方で，地方官衙，墳墓，住居址，祭祀関係の遺跡から出土する。個々の遺跡名およびその分析についてはここでは省略するが，その内訳は地方官衙2，古墳12，火葬墓1，住居址6，祭祀遺跡2，その他3の26例あまりがあり，今後も増加の傾向がある。これらの多くは完帯にはならないものであるが，被葬者及び，居住者が直接間接に中央官衙ないし地方官衙に関係したことを示す遺物であり，将来この面での研究が必要であろう。

式部省

石銙帯　石銙帯とは銅銙にかえて石銙を装着した銙帯のことである。石銙帯には玉石帯，瑪瑙帯のような五位以上のものと，6位以下の雑石腰帯の別がある。6位以下の銙帯については，『延喜式』弾正台の条に「烏犀帯」がみえ，上引の『日本後紀』弘仁1年9月条に「雑石腰帯」がある。SD650出土した石銙は石質からみて，すべて「雑石腰帯」に属するのであろう。このような石銙帯については，他遺跡の例をふくめて装着方法によって2区分することができる。

ただ，石銙の形態は銅銙帯Aに相当し，銅銙帯B・Cに対応するものはない。また鉸具は銅製品である。

石銙の分類

石銙帯a　各石銙の四隅ないしは三方に裏面にまで貫通する丸孔を穿つ。これは革帯に銙を鋲で留る孔であり，さらに銙の下方に長方形孔を穿つ。

石銙帯b　各石銙の裏面の四隅ないしは三方に2孔を1対とする潜り孔をあけ，革帯に銅細金を用いて綴じつけるものであり，多くの場合，下方の長方形孔が省略されている。

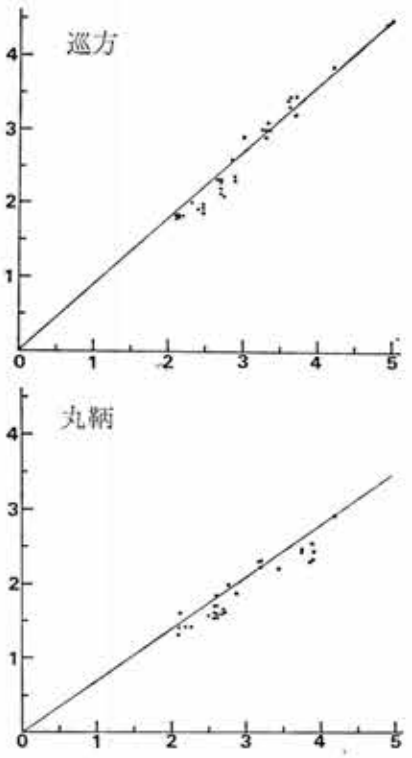


fig.35　銅銙法量分類図　単位cm

さて，石銙帯aは銅銙帯と同じような鋲留に準じており，石銙帯bはその簡略されたものであろう。石銙帯aは例が少なく，SD650出土例のほかには，正倉院の紺玉帯，京都府・西野山古墳，* 宮城県・多賀城，山口県・見島遺跡の4例に限られる。正倉院と西野山古墳の場合は玉銙帯であり，石銙帯は見島遺跡のものである。それに対し，石銙帯bは石銙帯のほとんどを占めており，石銙帯aが石銙帯bに先行する疑いが強い。つまり，石銙帯aの装着方法は延暦15年(796)の銅銙帯廃止以前における玉帯の装着法にもとずくものと解せられるからである。このことからすれば，796年から807年におこなわれたものが石銙帯aであり，810年の復活したものが石銙帯bである可能性が強い。

つぎに石銙帯においても大小の別があるか否かの検討を加えてみよう。この場合，石銙帯aについては資料が限定されているため，石銙帯bについてみてみることにしよう。やはり，石銙の巡方を基準にして帯幅をみると以下の3段階にわかれ，その寸法は銅銙帯AⅠ・AⅡ・AⅣに対応している。

石銙帯bⅠ：帯幅が4cmのもので，巡方の場合には縦横の比が0.9：1となり，正方形に近い。SD650(1・2)がこれに相当する。

石銙帯bⅡ：帯幅が3.3cmのものである。SD650(3)がこれに相当する。

石銙帯bⅣ：帯幅が1.9cmのものである。いまのところ平城宮6AB0区から巡方のみが発見されているが丸鞆，鉈尾は発見されていない。

なお，石銙帯a，bの鉈尾では，1：横幅の狭いもの(縦横比，1：0.7前後)，2：ほぼ正方形に近いもの(縦横比，1：1.1前後)，3：横幅の広いもの(縦横比，1：2前後)の3種類に区別できる。それらはいずれも上述の帯幅には対応しているが，3種の意味についていまのところ解釈の方策をもっていない。ともかく，以上のような規格性を見出しうることから銅銙帯のように位階による区分の存在がかんがえられるが，いまのところ各位階に比定するには手掛りを見出していない状況である。

796年以降，玉銙帯，石銙帯は広範におこなわれ，変化をたどることになる。上級官人は玉銙

* 梅原末治「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ発見ノ遺物」(『京都府史蹟調査会報告第2冊』1919)

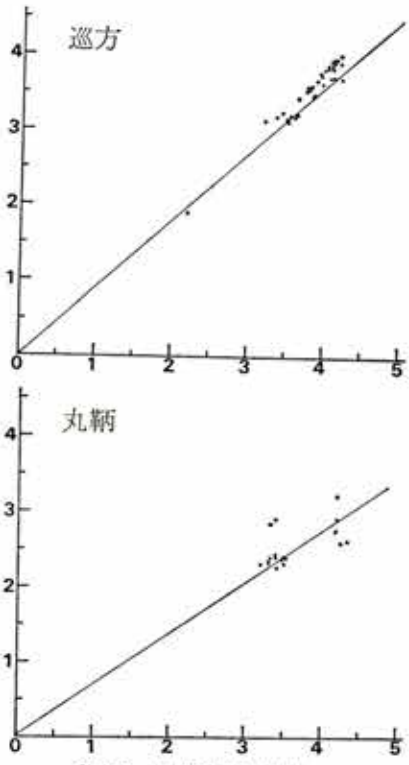


fig.36 石銙法量分類図 単位cm

のほかに，角（斑犀帯），瑪瑙・玳瑁・瑠璃の銙など珍貴な材を求める風が強く，* その影響をうけて下級官人も角(烏犀帯・牛角帯)を多用し，選石をおこなうようになる。つまり，官位の象徴としての意義が次第に薄くなってくるのである。** この傾向が促進される平安時代後期になると，鳥・花・獣形などおもいおもいの意匠をあしらった銙が出現し，それは装身具の位置にとどまってしまう。*** 朝廷貴族の失権過程である鎌倉時代になると，銙帯は根本的に変化する。すなわち，1帯の銙数を11に減じ，巡方のみの公式帯や丸鞆のみの略式常用帯が出現し，公私によって銙帯をことにする慣習が成立する。**** 高級貴族の間でこのような銙帯が流行するにしたがって，下級官人の銙帯の制は急速に廃退した。近世に至って，銙帯はきわめて儀礼的な存在となり，着用すら稀となる。『装束図式』や『箋注和名類聚抄』の段階では銙のない紐結びの帯に退化し，もう銙帯という名に値しない。

石銙帯の衰退

3 結　　語

国道24号線バイパス地域の発掘を通て明らかになった個々の事柄については，すでにのべてきたところであるが，その概略をいま一度まとめておく。

A 古　　墳

今回の調査でのもっとも古い遺跡は5世紀代の3基の古墳であった。

ウワナベ古墳では東外堤を調査し，現存の外堤がほぼ旧規をつたえており，築成時には内と外とに二重の濠をめぐらしていたことがわかった。外濠は奈良時代に埋立てられ，外堤寄りに新たな溝（SD734）を開穿する。外堤の内斜面には河原石を葺き，両肩に埴輪を樹立する。内外2列の埴輪列には，鰭付円筒埴輪を基本とし，要所要所に蓋形埴輪を配したようである。発掘

5世紀

---

* 『延喜式』弾正台「…玳瑁・瑪瑙・斑犀・象牙・沙魚皮・紫檀五位已上通用」 『和名類聚抄』腰帯「白犀帯」 『桃華蕊集』玉帯色々事「…治承四年四月十九日 …有文玉帯 …有文瑠璃玉ちいさき御帯 …保元三年内宴日 関白（法性寺殿）赤色袍・馬脳帯」などがみえる。

** 『西宮記』臨時八に「紀伊石無文玉等公卿 映玉雖有文 四位五位用之 出雲石六位用之，近代六位上官著用 有用角帯輩未為可」（注略）

*** たとえば，『年中行事秘抄』四月賀茂祭使では「故経長卿落雀形時預石見物 侍以他帯令著用恐落石也 鴛通天・鵜形・隠文」『江談抄』雑事「唐暈・落花形・垂無・鵜形・雲形・鵜通天・露通天」という。

**** 『朝野群載』文筆「帯必用巡方，但石角等并以通用…」『円太暦』文和5年2月16日の条の丹後守宛書状に慶賀帯として巡方帯を用いることを記す。このほか，『桃華蕊集』，『愚記』，『台記』などには丸鞆帯がみえる。

の所見によって外堤に樹立する埴輪の数量を試算すると5,357本という莫大な量になる。埴輪はすべて窖窯で焼成したものと考えられ，造出し付近で採集した初期須恵器とほぼ同時期とおもわれ，年代決定の拠となった。

ウワナベ古墳が5世紀代の大王級の墓であるならば，南方に築成されている平塚1・2号墳は超大型古墳に従属する陪冢的な性格をもつ。2古墳はいずれも前方後円墳の形態をとるが，1号墳は佐紀盾列古墳群のなかに例をみない帆立貝式の前方後円墳である。両古墳とも平城京造営時に壊滅的に破壊されており，削平された前方部の基部とそれをとりまく周濠を発掘したにすぎない。墳丘から転落した埴輪片によって古墳の内容の一端にふれることができた。それによれば，両古墳は時期を接して築成されるが，1号墳のほうが若干古い要素をそなえる。平塚1・2号墳とウワナベ古墳とのあいだには，墳丘の規模だけでなく，葺石や埴輪の大小あるいは埴輪製作技法の面など，あらゆる面で格差がある。

B　奈良時代の居住地

8世紀　和銅3年（710）の平城京遷都後，付近の景観は一変した。条坊制にもとずき縦横の街路をつけ，丘陵の裾部にあたる6AFB区は宅地と道路に変貌する。平塚1・2号墳は前方部が左京一条三坊十五・十六坪となり，後円部の中心を東三坊大路が貫通する。造営当初における道路と宅地との造成規模は意外に大きいが，北辺にウワナベ古墳の南外堤が位置するため，北京極大路を南へ寄せざるをえず，その結果，十六坪は北の$\frac{3}{5}$地域を失っている。24号線バイパスは十五・十六坪の東部をかすめ，中央部には調査がおよんでいない。調査範囲内では南北につながる2坪を1つの敷地となし，北方に建物群をおき，南方に園池

fig. 37　6AFB区の変遷(1)
A：4世紀以前，B：5世紀，C：8世紀

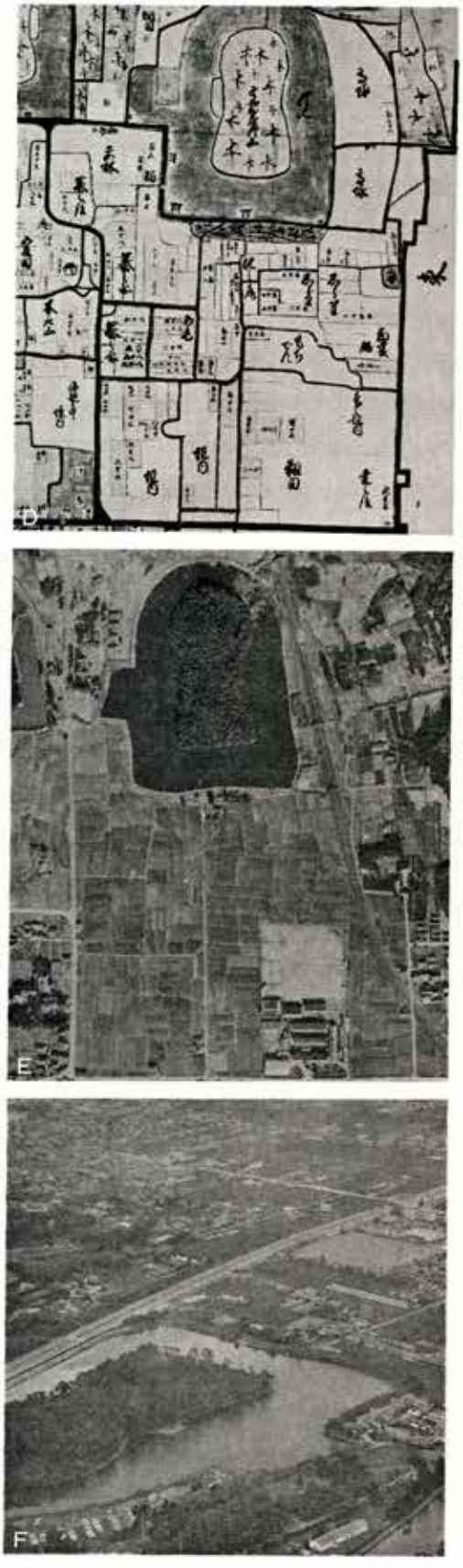


fig. 38 6AFB区の変遷(2)
D:江戸時代, E:1962年, F:1974年

をつくる住宅の一端を垣間みることができた。奈良時代初期の遺構は数期にわかれ，大きくは2時期に区分することができる。その第2の時期である720年代後半の建物には平城宮と同じような瓦当文の瓦が葺かれ，殿舎の一郭には緑釉水波文塼で基壇を築く八角形のかつて東大寺に存した宝殿に類似したものがあった。6AFB区の調査後，京内でおこなった坊内調査によって，敷地の後方に数棟の東西棟建物を配列し，正殿・脇殿・雑舎・井戸などで構成される状況が次第に明らかになりつつある。このような他の遺跡と比較するならば，6AFB区で検出した建物はいずれも正殿になりえず，脇殿・雑舎の類であろう。

建物群のなかを流れるSD485から出土した遺物は，この地域の性格を具体的に示している。木簡によれば，710年代から720年代にかけての頃，この地には政府の官司が造作を主導する親王級の住宅が存在したことが推測できる。奈良時代初期における政権のなかで活動する長屋王はその有力な候補となりうる。一般の遺跡ではまれにしか発見されない三彩陶器を用い，規格制のつよいまとまりのある土器類を大量に保有する状況も，この地の住人像をうかがう一つの手掛りである。他方，これらの土器群によって，8世紀初期の土器編年に有力な例証を加えることになった。

8世紀初期の諸施設は720年代で廃絶し，8世紀末までこの地は空地となる。没官地となり，邸宅などに利用されなかったのであろう。大規模な盛地工事が8世紀末から9世紀初頭にはじまるが，この時期の建物相互の関係などをしることは困難であった。ただし，北京極大路と北一条大路の路面に小建物が乱立し，すでに街路としての条坊の機能を失っている状況は判明した。なお，一条高校付近の字名を「堂の後」というが，古代寺院の存在を裏づける遺構は存在していない。

9世紀

C　東三坊大路と東側溝

東三坊大路の路面は，後世に氾濫した多くの溝によって破壊されており，盛土や地固めの状況を示す遺構は顕著でなかった。6AFB—F 西地区の東限で西側溝らしきものを検出したが，発掘範囲が狭く不確実である。

9世紀の東三坊大路

東側溝(SD650)は延長約250mにわたって存在した。8世紀のはじめに開穿されているはずであるが，8世紀の堆積層はみとめられない。この傾向はさきに調査した東一坊大路側溝においても確認されているところであり，大路および側溝が平城京の時代，8世紀を通じて良好に保全されていたことを物語る。側溝の堆積は9世紀のはじめから開始し，いくたびかの氾濫を繰返す。結局，前後2回にわたる大改修をへて10世紀の初頭まで存続したのち，完全に埋没する。つまり，平城京の廃絶後，約100年間にわたって東三坊大路は道路としての生命を維持したのである。発掘地域の側溝が丘陵の裾部にあり，南一条大路に交叉するため，水がよどみ溝への投棄物が集中し，多くの遺物が堆積していた。遺物は前後2時期に大別することが可能であり，木簡の年紀と銭貨の種類によって実年代に一歩近づくことができた。遺物の内容は多岐にわたるが，およそ1往来関係，2食事関係，3工房関係に区分することができる。

1．往来関係の遺物としては，告知札や下駄，各種の祭祀具などがある。告知札は路肩にたてた立札であり，逃亡したり持主が不明になった畜類の捜索を通行人に依頼する書式をとる。下駄は破損したり，片方を失ったもので，その形態は鼻緒の前壺が内寄りから中央部に移動する過渡的な様相を示す。祭祀具としては削り掛け・人形・土馬・模型土器などがある。なかには人形のように8世紀のものにくらべて大型化するものもあるが，一般に退化し，矮少化する傾向にある。祭祀の内容をあきらかにしえないが，路上ないしは坊内で使用したのち，水に流したものである。銭貨も旅路の安寧を祈願して投銭したものであろう。

2．食器関係の遺物としては，土器類がもっとも多い。土師器・黒色土器・須恵器を主体にし，灰釉陶器・緑釉陶器・磁器が加わる。土器類のほかに漆器や木製品をふくんで食器を構成するが，陶磁器や漆器など高級な器物をふくむこと，官署を示す墨書土器などから，寺院もしくは官署に関連するところの公機関で用いられた可能性がつよい。

3．工房の存在を暗示する遺物としては，金属器の廃品や砥石がある。それらはまとまりがなく，雑多なものをふくんでいることから，改鋳のために寄せあつめたもののようである。

以上のほか，官がおこなう土木工事を裏づけたり，あるいは仏具に類する遺物がある。他方，これらの遺物には長距離を流れた磨耗の痕跡がなく，東側溝に接する一条四坊から投棄もしくは流出したものとみられる。この地域に存在する不退寺の位置は左京一条四坊三・四坪にあたり，これらの遺物を廃棄した場所として矛盾しない。

その後の東三坊大路

10世紀初頭以後の遺跡としては，東三坊大路の路面を北から南に流れる無数の溝に限られる。それらの溝の一部に少量の瓦器片をふくむものがあり，中世には完全に廃道になり，田地に変貌した。その後，左京一条三坊の地域は近年まで一貫して水田であったが，1960年代の後半になると西方の通称一条通り添いに宅地化が進行し，1971年にバイパスが開通したあと，かつての水田は急速に宅地化し，もはや昔日の面影はない。

跋

平城京の条坊地割りの研究は江戸時代末期に北浦定政が『平城大内裡坪割図』を著わすことによって端緒が開かれ，明治30年代に関野貞が『平城京および大内裡考証』を発表することによって大凡の骨格が作られた。彼らの考証は道路や土壇・水田などに残る地形とその地名を文献記録や平安京古図等と比較して往時の条坊の形態を推定復原したものであった。昭和になっても同じ方法での研究が続いたが，10年代になると京内寺院の伽藍配置が条坊と密接に関連することが注目され，遺構，遺跡間を測量して条坊の割付け寸法を実証する方法が加わった。

平城京の研究に戦後一つの転機をもたらしたのが，昭和29•30年におこなった大安寺•薬師寺の南大門跡の発掘調査であり，平城宮の通称一条通りでの発掘に関連して作成した平城宮跡の1/1000の地形図である。前者では六条大路に面し，左右両京に並立する２大寺の中軸線が明きらかになり，それが南北方向の小路の中心にあたることが判明した。さらに東西に５坊(約2,670m)の長さにおよぶ２地点間の距離を測量して，当時の使用尺度を始めて微細に検討する資料を得た。後者は航空写真測量によったもので，1/1000といった大縮尺地図は我国における最初であった。水田・畦畔などの微地形から遺跡を考証するには威力を発揮し，平城宮内の宮殿や官衙の配置あるいは外周の道路幅，それに関連する条坊計画等をかなり具体的に推測することが出来るようになった。すなわち，平城京の条坊が方1800尺の方眼を基本として大路心中心をこれに合わせ，平安京と同様に大路幅80尺，小路幅40尺，１坪は400尺角が一応の基準となること，朱雀大路や宮城関連道路で道幅を広くする際には隣接の坪を削り狭くしていることなどが，発掘によらず地形図から推定できたのである。当研究所は航空写真と大縮尺地図の重要性にかんがみ，昭和37年以後も逐次補完する方針をとり，条坊研究の重要な指針になっている。

京内道路の実態を発掘調査によって知りえたのは，昭和41～43年に行った平城宮跡東南隅及び東院南辺地区の調査が最初であった。調査では平城宮に東院が張り出していたという意外の成果をえたのであるが，それと共に宮城周辺の道路寸法や形状等を始めて明らかにした。路幅は築地心心で二条大路が17丈，東一坊大路が12丈あり，平安京の記録と一致する。ただし，平安京の宮城周辺部は築地の線を他と揃え，外に幅広い壇地，つぎに溝を設けたため，溝と溝との間の道路面は他より狭まって二条大路では12丈（宮城前以外の溝内距離14.6丈）となる。それに対して平城京では溝内距離を一定にして壇地を広げただけ宮城大垣を後退させ，見かけの道幅がずっと広くなっている。また，東一坊大路の側溝が二条大路と交叉する個所には木橋を架けていた。東院外周地区でも南と東は坊間大路となり，南の二条条間大路は全体幅（築地心心）が12丈，溝内の路面幅は８丈であった。

一方，京内の宅地についても戦後になってようやく実証的な調査研究が始まり，昭和28年に左京二条四坊の北側，通説では京外に当る旧奈良高等学校校庭の拡張に伴う発掘で井戸を付属させた数棟の掘立柱建物群を検出した。建物は５間×２間もしくは７間×２間と大型であり，主要部は柱筋を揃えて前後に並立

するので，普通の住宅でなく官衙的なものと推定されたが，全貌を確かめるに至らなかった。その後はしばらく大面積を発掘調査する機会がなかった。昭和43年に至って電電公社社屋新築の事前調査で，左京三条一坊十四坪に当る地域を検出した。ここでは西側の小路に沿った築地と門，その内側にある掘立柱建物24棟を見出し，それらに5～6期の建て替えが行なわれていることが判明した。廂付建物や倉などが配置されており，かなり上層階級の邸宅跡と推定され，坪を東西2区の宅地に区分した西半に当るらしく，しかも南方¼ほどは東西の柵列でまた小区画していたらしい。京内で班給される宅地の広さは藤原京や難波京の記録によって知られるのみであったが，この発掘によって宅地の区分方法や建物の実態を実際に知る手掛りをえた意義は大きい。

以上のような条坊及び宅地に関する調査研究の進展経過のなかで本報告書に収めた東三坊大路とその西側に接する左京一条三坊十五・十六坪の発掘調査がおこなわれた。大路の全幅を確認できなかったが，東側の溝と築地，さらにその東方の坪内から坊内を画する柵列らしきものを検出した。同時に実施した一条三坊十五・十六坪では坊内区画の柵を発見しなかったが，2坪を一宅地にあてたらしい。この坊内で検出した遺構は建物28棟，柵5条，井戸5基，溝7条，園池1などであり，それらは奈良時代初頭の遺構と奈良時代末から平安時代初期の遺構からなり，中間の時期が欠除している点が注目された。坊内遺構と東三坊大路側溝で発見した木簡をはじめとする遺物はきわめて豊富で，両所の遺跡の性格を一層具体化した。

平城京の発掘調査は東三坊地区の調査以後も毎年2～3個所のペースで続けられた。昭和44～47年に羅城門と九条大路，昭和46～48年に西隆寺の寺地とそれ以前の条坊跡，昭和48～49年に朱雀大路，左京三条二坊十・十五坪（奈良市役所移築予定地），左京五条一坊二坪（奈良県警柏木基地）などを実施し，大きな成果を収めた。九条大路から南へ張り出した羅城の形態や平城宮朱雀門とほぼ同大の羅城門の規模を確めたこと，朱雀大路の幅員にとどまらず下層の旧下ツ道を発見したこと，左京三条二坊では坪のほぼ7割近くを発掘し，京内の住宅や宅地割りや建物配置の好資料をえたことなど，従来の知見に一段と飛躍を加え平城京の研究は着実に進みつつある。

一方，こうした京内遺跡の発掘調査の大半は，道路や建築などの開発に伴って行う事前調査であり，当初から学術的なねらいをもって場所を選定し発掘したのは羅城門と朱雀大路の2個所に過ぎない。逆にいうと開発に伴って発掘する場合，京内である限りどこにも遺跡があり，平城京の条坊や住宅を解き明かす重要な意味をもっていることをはからずも実証したのである。平城京地域の開発は昭和37～38年頃から急速に進み従来の農地が刻々と住宅や工場に変化し，現在もなお進行している。ここでとりあげたのはその中でも幸いに開発者との合意にもとずき発掘が可能になった地点だけに限られ，この何十倍もの面積の京内遺跡が遂に日の目をみることなく破壊されてしまった。例えば左京四条二坊付近に想定された藤原仲麻呂の田村第跡は民間の建設会社による住宅団地と化し，右大臣大中臣清麻呂の邸宅跡大臣院（右京二条二坊十一・十二・十三・十四坪）も電鉄会社の車庫や住宅で覆い尽くされてしまった。この報告書の発刊を契機にして，京内遺跡の重要性はいうにおよばず，場当り的な調査ではなく学術的でかつ計画性のある調査をへなければ京内遺跡を保存しえないことを改めて提唱したい。

平城宮跡発掘調査部長
鈴　木　嘉　吉

別　　表

1 6AFB区発見主要建物一覧表

造営期	遺構	規模	棟方向	廂	桁行cm(尺)	梁行cm(尺)	廂cm(尺)	柱穴cm(廂)	cm／尺
Ⅲ-1	SB 430	4×2	E・W		950 (32)	475 (16)		0.5	
Ⅲ-1	SB 432	2以上×2	N・S		295 (10)	384 (13)		0.5	
Ⅲ-2	SB 437	3×2	E・W		534 (18)	420 (14)		0.5	
Ⅲ-2	SB 440	4×1	N・S		690 (23)	300 (10)		0.5	
Ⅲ-1	SB 441	3×2	E・W		486 (16.5)	324 (11)		0.6	29.5
Ⅲ	SB 455	2×1	E・W		360 (12)	300 (10)		0.6	
Ⅰ	SB 463	5×2	N・S	N・S	795 (32.5)	450 (15)	150 (5)	0.5(0.5)	
Ⅱ	SB 470	5×4	E・W	N・S	1330 (45)	1064 (36)	326 (11) 234 (8)	1.0(1.0)	29.6
Ⅰ-1	SB 471	2×2	E・W		510 (17)	360 (12)		0.6	29.5
Ⅲ-1	SB 476	4×2	N・S	E	840 (28)	690 (23)	270 (9)	0.6	30.0
Ⅱ	SB 480	4以上×4	E・W	N・S	1192 (40)	1192 (40)	298 (10)	1.2(1.1)	29.8
Ⅰ-2	SB 481	5×2	N・S		1480 (50)	533 (18)		1.0	29.6
Ⅰ-2	SB 482	6×2	N・S		1770 (60)	590 (20)		1.0	29.5
Ⅰ-2	SB 483	2×1	N・S		300 (10)	200 (6.7)		0.3	
Ⅰ	SB 487	2以上×2	E・W		540 (18)	540 (18)		0.5	30.0
Ⅰ-2	SB 490	4以上×2	E・W		1180 (40)	596 (20)		1.2	29.8
Ⅰ-3	SB 498	3×2	E・W		810 (27)	258 (8.6)		0.4	
Ⅲ-1	SB 501	5×4	N・S	E・W	1125 (37.5)	1005 (33.5)	300 (10) 255 (8.5)	1.0	30.0
Ⅲ-1	SB 502	2×1	N・S		480 (16)	360 (12)		0.8	
Ⅲ-2	SB 504	5×2	E・W		1380 (46)	540 (18)		0.8	30.0
Ⅰ-2	SB 510	3×2	E・W		900 (30)	480 (16)		1.4	30.0
Ⅰ-3	SB 528	6×2	N・S		1500 (50)	450 (15)		1.0	
Ⅱ	SB 530	6×4	E・W	N・S	1428 (48)	1132 (38)	298 (10)	0.9(0.6)	29.8
Ⅰ-1	SB 550	3×2	N・S		480 (16)	360 (12)		0.6	
Ⅰ-2	SB 551	4以上×1	E・W		1040 (34)	420 (14)		1.0	
Ⅲ	SB 552	3以上×1以上			630 (21)	210 (7)		1.3	
Ⅲ-1	SB 555	3×2	E・W		630 (21)	300 (10)		0.4	
Ⅲ-1	SB 556	1×1			270 (9)	270 (9)		0.4	
Ⅲ-1	SB 557	2×1	N・S		360 (12)	240 (8)		0.6	
Ⅲ-2	SB 559	4×2	E・W		1050 (35)	330 (11)		0.4	30.0
Ⅲ-2	SB 560	4×2	E・W		960 (32)	420 (14)		0.5	30.0
Ⅲ-2	SB 561	3×2	E・W		630 (21)	450 (15)		0.6	
Ⅲ-1	SB 563	2×1	N・S		300 (10)	210 (7)		0.4	
Ⅲ-1	SB 565	4×3	E・W	N	900 (30)	600 (20)	180 (6)	0.5	30.0

※棟方向：E・Wは東西方向，N・Sは西北方向
廂：Nは北廂，Sは南廂，Eは東廂，Wは西廂

2 軒 丸 瓦 分 類 表

型式番号		瓦当面 直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区 外区広	外区 内縁 幅	外区 内縁 文様	外区 外縁 幅	外区 外縁 高	外区 外縁 文様	全長	玉縁長	個体数 A～E区	個体数 F～J区	個体数 計	%
6011		177					J									2	0	2	1.0
6012-A		148		1			J									15	7	22	10.9
6012-C		153		1			J									1	1	2	1.0
6012-D		152		1			J									2	0	2	1.0
6015		186					J									1	0	1	0.5
6126		139	32	1+6	79	18	T 8	30	11	S	19	8				0	2	2	1.0
6130-A		185	39	1+8?	103	20	T12	42	19	S24	23		LV			7	0	7	3.5
6133-D		157	40	1+6	117	17	T16	23	14	S24	9	8				1	0	1	0.5
6133-G		170	35	1+8	99	15	T16	35	20	S16	15	14		443	56	2	0	2	1.0
6133-H		163	43	1+6	111	19	T16	26	16	S24	10	10				5	0	5	2.5
6133-M			37	1+6	112	16	T	28	16	S16	12					1	1	2	1.0
6134-A		161	36	1+8	96	11	T12	32	19	S16	13	13	LV16	400	59	2	0	2	1.0
6134-B		154	37	1+6	98	19	T9?	28	17	S24	11	7	LV			1	3	4	2.0
6138-B		159	39	1+5	97	16	T12	31	15	S24	16	7	LV			2	1	3	1.5
6138-F			45	1+6?		17	T12									0	1	1	0.5

※T－甲弁，F－複弁，S－珠文，GS－有葉珠文，K－圏線・界線，LV－線鋸歯文，RV－凸鋸歯文，J－重圏文，G－重弧文，U－飛雲文，KK－均整唐草文，HK－偏行唐草文，単位－mm，（　）は種類不明を加える。

型式番号		瓦当面													全長	玉縁長	個体数			%
		直径	内区					外区												
			中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内縁		外縁						A～E区	F～J区	計	
									幅	文様	幅	高	文様							
6225-A		167	68	1+8	116	36	F8	25	12	K	13	8	RV24	173	48		6	0	6	3.0
6225-C				1+8		30	F8	21	7	K	14	7	RV				1	0	1	0.5
6226						28	F6?	21	6	K	15	10	LV				1	0	1	0.5
6227-A		165	63	1+8	124	31	F8	21	9	K	12	3					3	0	3	1.5
6227-B						30		17	5	K	12	5					1	0	1	0.5
6228		142	44	1+8	108	28	F8	17	5	K	12	4					0	1	1	0.5
6235-A				1+6			F8	28		S16							2	0	2	1.0
6235-B		168	56	1+5	112	29	F8	28	17	S17	11	9					1	0	1	0.5
6235-D		182	54	1+6	112	32	F8	35	20	S19	15	10					1	0	1	0.5
6236-B						29	F8	25	14	S	11	9					2	0	2	1.0
6282-B		162	45	1+6	86	31	F8	38	20	S24	15	9	LV				1	1	2	1.0
6282-F		150	40	1+6	92	32	F8	33	20	S24	13	14	LV24				2	0	2	1.0
6282-G		160	46	1+6	90	24	F8	35	17	S24	18	11	LV				6	0	6	3.0
6282-H		174	40	1+6	96	23	F8	39	23	S24	16	16	LV22				2	0	2	1.0
6284-C		155	40	1+6	89	23	F8	33	20	S24	13	11	LV				1	1	2	1.0
6285		161	33	1+6	87	24	F8	37	21	S23	16	16	LV22				1	4	5	2.5

型式番号	瓦当面 直径	内区 中房径	内区 蓮子数	内区 弁区径	内区 弁幅	内区 弁数	外区 外区広	外区 内区 幅	外区 内区 文様	外区 外区 幅	外区 外区 高	外区 外区 文様	全長	玉縁長	個体数 A～E区	個体数 F～J区	個体数 計	%
6291	162	35	1+6	87	24	F 8	37	18	S16	19	8	LV18			4	0	4	2.0
6301-B	166	48	1+5+9	106	25	F 8	30	15	S20	15	8	LV			13	4	17	8.5
6301-C	160	48	1+5+10	102	26	F 8	29	16	S20	13	8	LV33			1	4	5	11.0
6303-A	163	37	1+6	37	22	F 8	33	16	S	17	9	LV			0	1	1	0.5
6308-A	155	35	1+6	93	28	F 8	31	16	S16	15	6	LV16			1	0	1	0.5
6308-B	162	36	1+6	93	25	F 8	37	13	S16	24	7	LV16	377	56	4	0	4	2.0
6314-A	140	30	1+6	80	36	F 4	30	15	S16	15	6	LV			1	0	1	0.5
6316-A	150	36	1+7	98	31	F 8	26	13	S16	13	6	LV20			4	0	4	2.0
6316-F	159	35	1+4	103	31	F 8	28	14	S	14					2	0	2	1.0
6320	167	38	1+8	88	9	T24	39	23	S24	16	14	RV24			5	0	5	2.5
6348	181	47	1+8	105	37	F 7	38	23	HK	15	7	LV			2	2	4	2.0
7243	164	47	1+8	110	28	F 8	27	10	S24	17	9				1	0	1	0.5
7251	173	42	1+5	115	27	F 8	29	13	S16	16	10				1	0	1	0.5
7283	167	39		87	26	F 8	40	20	S	20	7				1	0	1	0.5
7297	178	52	1+6	112	17	T15	33	14	S23	19	13				1	0	1	0.5
7349	136	33		92	14	T13	22	15	HK	7	4				1	11	12	6.0
計															115	45	160	79.9
															(142)	(59)	(201)	(100.3)

3 軒平瓦分類表

型式番号	瓦当面 上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇幅	脇区文様	文様の深さ	全長	個体数 A～E区	F～J区	計	%
6555				44		G							4		0	1	1	0.4
6572-A	271	62	277	47		J							6		26	6	32	22.0
6572-B	270	55	278	56		J					55		4		5	0	5	1.9
6574				57		J					57		3		1	0	1	0.4
6640				52	30	HK	10	S	12	LV	65	LV	2		1	0	1	0.4
6641-A				46	24	HK	11	S	11	LV		LV	3		1	0	1	0.4
6663-A	284		286	55	29	KK	14	K	16	K	62	K	2		3	0	3	1.1
6663-C	270	72	282	53	26	KK	14	K	13	K	73	K	3		6	0	6	2.3
6663-F				56	30	KK	13	K	12	K			3		6	0	6	2.3
6664-H				57	24	KK	17	S	16	S	78	S	6		1	1	2	0.8
6667	275	58	282	62	27	KK	15	S21	20	S21	58	S 3	3		2	0	2	0.8
6668	244	52	252	47	22	KK	11	S22	11	S23	56	S 3	3		0	1	1	0.4
6671-B			272	62	27	KK	15	GS14	20	LV24	68	GS3	5		20	5	25	9.4
6671-D				71	25	KK	22	GS	24	LV	89	GS	6		0	2	2	0.8
6675	275	50	282	49	26	KK	11	S15	12	LV16	58	LV2	1		1	3	4	1.5
6681-A				55	22	KK	15	K	18	K	58	K	3		7	1	11	4.1

型式番号	瓦当面														全長	個体数			多
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇幅	脇区文様	文様の深さ		A～E区	F～J区	計		
6682	245	78	273	52	24	KK	15	S17	13	S17	78	S3	5		0	2	2		0.8
6691-A	270	55	293	55	25	KK	14	S21	16	S21	58	S3	4		16	1	17		6.4
6702-D				45	32	KK	8		7		55		4		1	1	2 (5)		0.8 (1.9)
6713				76	22	KK	25	S	29		67	S2	4		1	1	2		0.8
6721-B				45	21	KK	11	S	13	S			3		7	0	7		2.6
6721-C	265	49	280	53	25	KK	15	S26	13	S32	60		3		6	1	7		2.6
6721-D				55	26	KK	15	S	14	S	55		3	398	4	0	4	23	1.5 8.6
6721-F	289	65	297	52	26	KK	13	S37	13	S37	65		3		2	0	2	39	0.8 (14.6)
6721-J	241	52	248	44	22	KK	12	S20	10	S17	45	S4	4		1	2 0	3		1.1
6725-A				62	27	KK	17	S	18	S	58	S	5		3	0	3		1.1
6726				70	27	KK	23	S	20	S			4		1	0	1		0.4
6732-I				66	31	KK	16	S	19	S	65	S3	6		1 (4)	0	1 (4)		0.4 (1.4)
6739				62	27	KK	14	S	21	S		S	3		3	0	3		1.1
6801	269	60	292	62	35	U	14		13		68		4		2	0	2		0.8
6802				50	34	U	4		12				3		1	0	1		0.4
7734	260	48	274	56	27	KK	13	S21	16	S22	58	S3	4	358	0	40	40		15.0
7769				70	38	KK	16	S	16	S			3		1	0	1		0.4
計															130 (177)	71 (89)	201 (266)		76.0 (100.4)

4　軒平瓦・軒丸瓦編年表

軒　　平　　瓦

708

6671D

6675

6671B

721

6663A

6664H

6681A

6572A

6682

6572B

6663C

6667

6691

6574

745

6721D

6721J

6721B

6721C

6721F

6732I

757

6802

6739

6801

6725

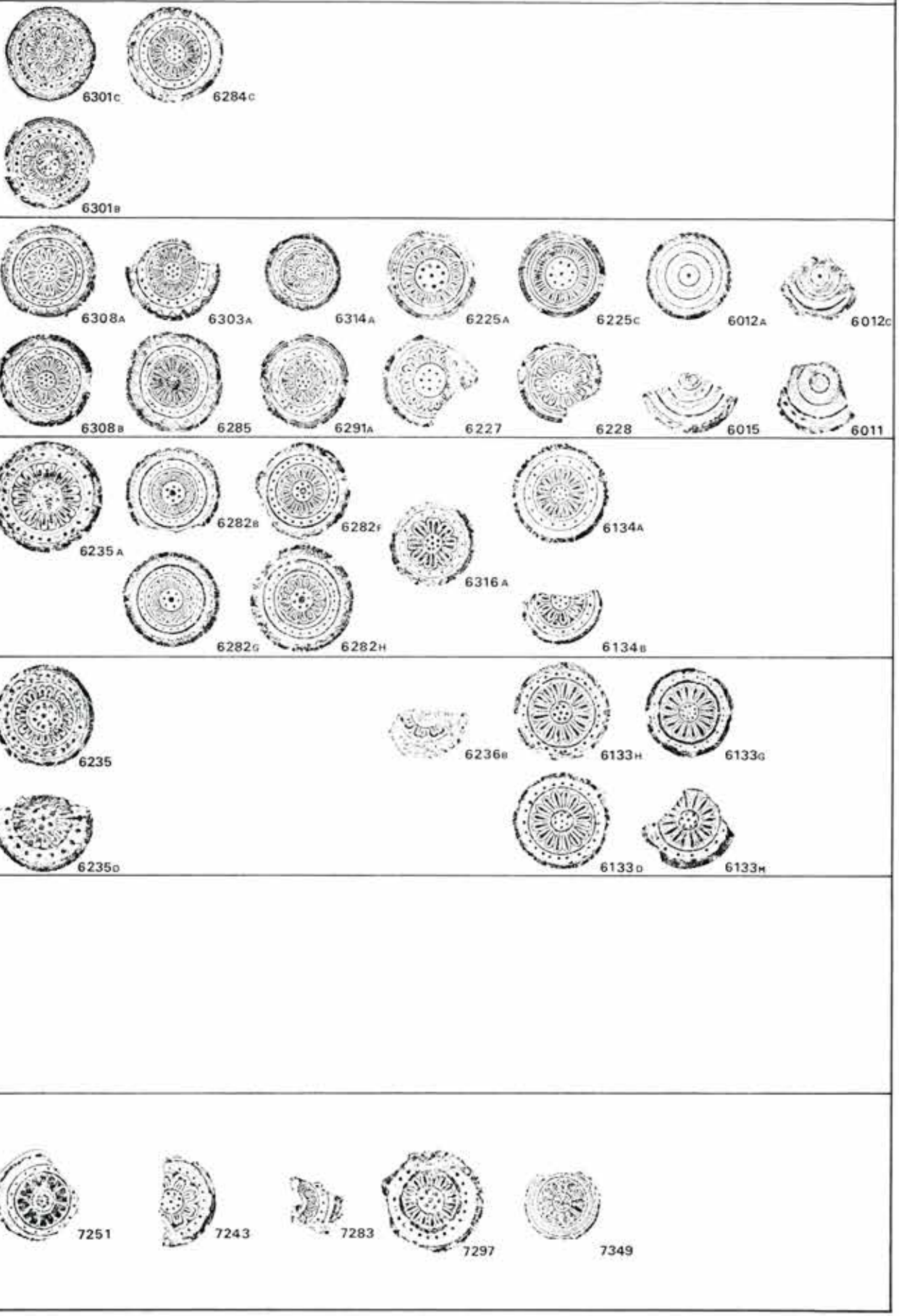
770

784

7734

7769

軒　　丸　　瓦


6301C
6284C
6301B
6308A
6303A
6314A
6225A
6225C
6012A
6012C
6308B
6285
6291A
6227
6228
6015
6011
6235A
6282B
6282F
6134A
6316A
6282G
6282H
6134B
6235
6236B
6133H
6133G
6235D
6133D
6133M
7251
7243
7283
7297
7349

5　SD485出土土器新旧分類表

土器番号	古	新	不明	PL
1		○		55
2		○		
3		○		
4	○			
5	○			
6		○		55
7		○		
8		○		55
9		○		
10		○		55
11			○	55
12		○		
13		○		55
14		○		
15	○			
16		○		
17		○		
18		○		
19		○		
20		○		55
21		○		55
22		○		
23		○		55
24		○		55
25		○		55
26		○		
27		○		
28		○		55
29		○		55
30		○		55
31		○		55
32		○		55
33		○		55
34		○		
35		○		55
36		○		56
37		○		
38	○			56
39		○		56
40		○		56
41		○		
42		○		56
43		○		55
44		○		55
45		○		
46		○		
47		○		56
48		○		56
49		○		
50		○		
51		○		
52	○			
53		○		56
54		○		56
55		○		
56		○		
57		○		56
58		○		
59		○		56
60		○		
61	○			
62	○			55
63		○		56
64		○		57
65		○		57
66		○		
67			○	55
68		○		55
69		○		55
70		○		
71	○			
72	○			
73	○			
74		○		
75		○		57
76			○	56
77		○		
78			○	
79		○		56
80		○		
81		○		
82		○		57
83		○		
84		○		57
85		○		
86		○		57
87	○			
88		○		
89			○	
90			○	
91			○	
92			○	57
101		○		58
102		○		
103		○		58
104		○		
105		○		
106		○		
107		○		58
108		○		58
109		○		58
110		○		
111		○		58
112		○		58
113		○		58
114	○			
115		○		
116	○			
117	○			58
118		○		
119		○		
120	○			58
121		○		
122	○			
123		○		
124	○			
125		○		
126		○		58
127		○		58
128		○		58
129			○	58
130			○	
131		○		
132		○		
133		○		
134		○		
135		○		
136		○		58
137		○		58
138		○		
139		○		58
140		○		
141		○		58
142	○			58
143		○		59
144		○		59
145		○		59
146		○		
147	○			59
148		○		59
149		○		59
150		○		59
151		○		59
152		○		59
153	○			59
154	○			59
155		○		
156	○			
157	○			
158		○		
159		○		59
160		○		
161		○		59
162		○		
163			○	
164			○	59
165			○	59
166		○		59
167	○			
168			○	
169		○		
170			○	
171			○	60
172			○	
173			○	
174			○	60
175			○	
176			○	60
177			○	
178		○		60
179		○		59
180		○		59
181		○		
182		○		60
183		○		
184		○		59
185		○		60
186		○		60
187		○		
188		○		60
189		○		60
190		○		
191		○		60
192		○		
193		○		60
194		○		
195	○			62
196		○		62
197		○		62
198	○			62
199		○		61
200		○		61
201	○			62
202		○		
203	○			60
204	○			60
205		○		60
206		○		
207		○		61
208		○		61
209	○			61
210		○		
211		○		61
212		○		61
213		○		61
214		○		
215		○		61
216			○	
217	○			62
218		○		62
219		○		62
220	○			
221		○		63
222		○		63
223		○		63
224	○			
225		○		63
226		○		63
227		○		
228		○		
229		○		63
230		○		63
231		○		
232		○		
233		○		
234		○		

6　漆器観察一覧表

		素地		下地加工(塗)	上塗	備考
		木材の属・種の同定	木取			
杯	※1	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	M	内外面に薄く土漆を塗る	内外面黒漆塗り	
	※2	広葉樹モクレン科	M	なし	内外面黒漆塗り	高台内側に1ヵ所赤色物質が付着する
	※3	広葉樹	M	なし	内外面黒漆塗り	底部外面中央「東」の刻線
	4	広葉樹	O	外面に一重の麻の布着せ 内面に薄く土漆を塗る	内外面黒漆塗り	
	5	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	O	なし	内外面黒漆塗り、 内面はやや厚目に塗る	
皿	※6	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	I	外面と口縁部内面に一重の布着せ、その他は下地加工なし	内外面黒漆塗り	布着せは外面からかぶせ、内面へ折り込む、SD650B
	※7	広葉樹	I	口縁部内外面に一重の麻の布着せ、その他は下地加工なし	内外面黒漆塗り	底部内面に刃物によるキズがあり、素地面にまで達する
	8	広葉樹	M	なし	内外面黒漆塗り、塗りは厚い	
	※9	針葉樹・ヒノキ科・ヒノキ	I	内外面に土漆を塗る 高台底部は下地加工なし	内外面黒漆塗り	高台底部に1ヵ所赤色物質が付着する SD650B
	※10	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	M	内外面布着せ	内外面黒漆塗り	器壁をきわめて薄く挽き出している SD650B
	※11	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	M	なし	内外面黒漆塗り 塗りは両面とも厚目	内外面に上塗り時のハケ目がみられる
	12	同上(ケヤキ)	M	なし	同上(黒漆・塗り厚目)	
	13	同上(ケヤキ)	M	なし	内外面黒漆塗り	内面にロクロ目がみられる
	14	同上(ケヤキ)	M	なし	同上(黒漆塗り)	
	15	同上(ケヤキ)	M	なし	同上(黒漆塗り)	
椀	※16	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	M	内外面に一重の麻の布着せ	外面黒漆塗り 内面朱漆塗り、黒漆より厚目	口縁部外面に朱漆が一条みられる
	※17	同上(ケヤキ)	O	なし	外面黒漆、内面朱漆塗り	口縁部外面に朱漆の文字
蓋	※18	広・ブナ科ツブラジイ	I	なし	内外面黒漆ぬり、外面に厚く、内面に薄く塗る	口縁部内面に数ヵ所赤色物質が付着する
	※19	広・ヤマモモ科・ヤマモモ	O	内外面蓋の合わせ口の段まで布着せ	内外面黒漆塗り	
	※20	針葉樹・ヒノキ科・ヒノキ	O	内外面土漆塗り、塗りはカエリの部分以外厚目	内外面黒漆塗り	
	※21	広・トチノキ	O	なし	内外面黒漆塗り	広葉樹・トチノキ科
	※22	針・ヒノキ	O	なし	内外面黒漆、塗りは厚目	内外面に1ヵ所赤色物質付着

※は図版・図面に掲載する

		素地			下地加工(塗)	上塗	備考
		木材の属・種の同定	木取				
			竪	横			
蓋	23	広葉樹	I		なし	内外面黒漆塗り	
	24	針葉樹・ヒノキ科・ヒノキ	O		外面口縁端部のみ布着せ、その他は下地加工なし	内外面黒漆塗り 内外面とも塗りは薄い	全体に剥離著しい
鉢	※25	広・ケヤキ	M		なし	内外面黒漆塗り	
	26	広・ケヤキ	I		なし	内外面黒漆塗り、塗りは厚目	SD650B
壺	※27	——	O		なし	内外面黒漆塗り、内面の塗りは外面よりも粗い	底部内面に凹凸のロクロ目を意識的に挽き出している
挽き物その他・不明	※28	広・ヤマモモ科・ヤマモモ	O		外面と口縁部内面の段まで一重の麻の布着せ	内外面黒漆塗り	内面に2~3mm間隔で斜放射状の刻目がみられる
	29	広葉樹・ニレ科・ケヤキ			内面上漆ぬり 外面は下地加工なし	不明	
	30	広葉樹	I		なし	内外面黒漆塗り	
	31	広・ケヤキ	M		内外面薄く上漆をぬる	同上(黒漆塗り)	
	32	広葉樹	I		なし	同上(黒漆塗り)	
	33	広・ケヤキ	M		なし	同上(黒漆塗り)	
	34	——	—		内面に一重の麻の布着せ 外面は下地加工なし	同上(黒漆塗り)	
	35	広・ケヤキ	M		なし	同上(黒漆塗り)	
	36	針・ヒノキ	O		なし	同上(黒漆塗り)	
	37	広葉樹・ニレ科・ケヤキ	O		内面に一重の麻の布着せ、外面は下地加工なし	同上(黒漆塗り)	
	38	広葉樹	I		なし	内外面黒漆塗り、内面は外面に比して厚目の塗り	上塗りは粗く、たて・よこにハケ目が走る
	39	広・ケヤキ	M		なし	内外面黒漆塗り	SD650B
	40	広葉樹	I		なし	同上(黒漆塗り)	SD650B
板物・	41	針葉樹・ヒノキ科・ヒノキ	I		なし	表面・側面は黒漆塗り 裏面は部分的に黒漆塗り	
	42	同上(ヒノキ)	I		なし	表面は黒漆塗り・裏面両側端は部分的に黒漆塗り	小さな円形の刳りが3ヵ所みられる、いずれも塗りの後
	43	同上(ヒノキ)	I		表面・側面に薄く上漆、裏面は欠損して不明	表面・側面は黒漆塗り 裏面は欠損	
	44	同上(ヒノキ)	I		なし	表面は黒漆塗り、 裏面は素地の白木のまま	SD650B
	45	同上(ヒノキ)	I		なし	表面・裏面・側面とも黒漆塗り	

7　木製品計測値一覧表

祭祀具　1．人　形　(SD485)

資料番号	長	幅	厚	木取	備　考
1※	18.7	2.9	0.4	I	墨描き
2※	(11.3)	1.8	0.3	I	墨描き
3※	(7.5)	1.9	0.3	I	墨描き　下部欠
4	8.7	1.1	0.2	M	

祭祀具　3．削掛け

資料番号	長	幅	厚	木取	切込	分類	備　考
6※	19.2	(1.9)	0.2	M	2	B	7と同一材
7※	(12.9)	1.9	0.2	M	2	B	6と同一材
8	(14.1)	2.1	0.5	I	2	B	
9※	(12.5)	2.6	0.3	I	2	B	
10	(6.8)	2.6	0.3	M	2	B	
11※	13.3	1.9	0.3	I	2	B	
12※	11.5	1.4	0.5	I	2	B	
13※	9.6	1.4	0.3	M	2	B	
14※	19.0	1.5	0.2	I	3	C	
15※	15.7	(1.7)	0.2	I	4	C	
16	(16.5)	1.6	0.2	M			
17	(7.4	1.4	0.2	I			
18	12.7)	(2.2)	0.2	I			9の下半か？
19	9.2	(1.8)	0.15	I			

食膳具　1．曲物容器底板

資料番号	径	厚	木釘	木取	分類	備　考
20	34.7	1.0	3	I	I	
21※	28.1	1.0	16	I	I	側板残る
22	28.0※	0.9	1	I	I	
23	23.2※	1.0		I	II	残欠
24	22.0	0.6	6※	I	II	
25	21.5	0.6		I	II	
26	19.4※	0.6		I	III	残欠
27	19.4※	0.9	9※	I	III	
28	18.7※	0.6		I	III	
29	17.3※	0.5		M	IV	残欠
30	16.6※	0.7	1	M	IV	
31	16.5※	0.6		M	IV	残欠
32	16.4	0.6	5	M	IV	
33	16.3	0.6		M	IV	残欠
34	16.3※	0.6		M	IV	残欠
35	16.2	0.8	4	M	IV	
36	15.6※	0.6	4※	M	IV	
37	15.5※	0.5		M	IV	残欠
38※	15.3※	0.6	3※	M	IV	墨書あり
39	15.0※	0.6		M	IV	残欠
40※	14.2	0.7	4※	I	V	
41	17.2	0.6		M	IV	円形孔
42	16.4	0.7		M	IV	後の転用
43※	15.7	0.9		M	IV	円形孔
44	13.7	0.6	4※	M	V	楕円孔
45	13.3	0.7	4※	I	V	円形孔
46	13.2	0.6	4	M	V	楕円孔

食膳具　2．曲物容器蓋板

資料番号	外径	内径	厚	とじ孔	木取	分類	備　考
47※	18.6	16.8	1.0	4	I	A	側板残る
48	31.0※	29.0※	0.6		I	B I	残欠
49※	31.2	28.8	0.5	8※	I	B I	
50	18.5	15.6	0.5	4※	M	B IV	
51	16.4	14.6	0.7	4※	M	B V	

食膳具　3．折　敷

資料番号	長	幅	厚	木取り	備　考
52	22.3※	2.3※	0.5	I	小破片
53※	19.2※	2.8※	0.5	I	小破片
54	20.2	1.1※	0.5	I	
55	31.5※	8.4※	0.4	I	

食膳具　4．箸

資料番号	全　長	本数	%	備　考
56～58	17.0～18.0未満	3	15	
59～61	18.0～19.0　〃	3	15	
62～64	19.0～20.0　〃	3	15	
65～69	20.0～21.0　〃	5	25	
70	21.0	1	5	
71～73	23.0～24.0未満	3	15	
74	25.8	1	5	
75	26.5	1	5	

その他　4．木　札

資料番号	長	幅	厚	木取	分類	備　考
85	11.5	2.6	0.6	I	A	
86※	20.2	1.8	0.8	I	A	
87※	20.2	2.2	0.4	M	A	上部に一孔
88	13.8	2.4	0.3	I	B	
89	15.6	2.1	0.6	M	C	
90	(10.7)	1.8	0.4	I	A・C	小破片
91	(8.7)	1.0	0.4	I	B・C	上部欠

その他　7．楔形木製品

資料番号	長	幅	厚	木取	備　考
99	16.4	3.3	1.8	I	
100	16.5	3.8	2.1	M	上端実る
101	23.7	2.3	1.8	I	
102	20.8	1.7	1.3	M	

その他　9．有孔円板

資料番号	径	厚	円孔径	木取	備　考
107	16.2※	0.6		M	
108	7.7	0.8	1.4	I	
109	7.9	0.7	1.0	M	
110※	8.2	0.8	1.2	M	
111	12.3	0.5	1.7	M	
112※	15.2※	0.8	1.1※	M	

1　単位cm
2　(　　)内の数値は現存値
3　※の数値は復原値
4　遺物番号の※は図面を掲載する。
5　木取の項Iは板目，Mは柾目を示す。

その他　10.　円板形木製品

資料番号	径	厚	木取	備　考
113	6.3	1.4	M	小破片
114	6.2	3.1	I	
115	4.3	2.3	M	小破片
116	8.5※	1.0	M	
117	2.9	1.3	I	小破片
118	5.7	1.8	I	中央に回み
119	3.5※	1.1	I	小破片
120	2.8	0.2	I	

その他　11.　棒状木製品

資料番号	長	幅	厚	径	分類	備　考
121	23.6	1.1	0.5		A	
122	14.4	1.9	0.3		A	
123	17.1	0.9	0.3		A	
124	23.0	1.3	0.4		A	
125	15.0	1.4	0.3		A	
126	(17.4)	1.0	0.4		A	
127	23.7	1.1	0.4		A	
128	23.3	1.0	0.5		A	
129	19.3	0.9	0.7		B	一端実る
130	7.9	1.0	0.6		B	
131※	19.8	1.0	0.6		B	
132	15.0			1.0	C	
133	11.3			1.7	C	
134	(11.1)			1.5	C	一端折れる
135	(13.9)			1.0	C	〃
136	39.3			1.0	C	
137	28.3			1.3	C	
138	(20.7)			1.1	C	一端折れる
139	(16.2)			1.0	C	〃
140	(34.8)			1.7	C	〃
141	19.0			1.2	C	
142	(12.6)			0.9	C	一端折れる
143	(17.1)			1.7	C	〃
144※	11.3			1.7	C	
145	(19.3)	1.1	0.7		D	
146	17.3	1.2	1.2		D	
147	8.7	1.5	1.1		D	一端実る

その他　12.　側辺に加工のある板材

資料番号	長	幅	厚	木取	備　考
148※	14.8	(2.0)	0.7	M	一端折れる
149※	13.8	2.4	0.4	I	
150	8.2	1.9	0.2	I	中央孔あり
151	8.6	2.4	0.3	M	
152※	(16.1)	1.6	0.4	M	
153※	15.0	2.6	0.4	I	孔あり
154	4.9	(3.6)	0.9	M	

祭祀具　1.　人　形　　(SD650)

資料番号	長	幅	厚	木取	備　考
1※	16.9	1.5	0.2	M	
2※	18.3	2.9	0.4	I	
3	(14.5)	3.3	0.4	I	
4※	(11.0)	1.9	0.3	I	墨描き
5	(2.9)	1.8	0.2	M	〃　頭欠
6※	(16.9)	2.5	0.2	I	〃
7	(6.1)	2.1	0.45	I	
8※	(16.7)	2.0	0.3	I	墨描き
9※	(9.1)	2.8	0.3	M	〃
10※	(16.7)	(5.8)	0.25	I	〃
11※	(12.7)	(4.5)	0.4	I	〃
12	(9.0)	(2.3)	0.2	M	
13	(10.9)	(2.3)	0.5	I	

祭祀具　3.　削掛け

資料番号	長	幅	厚	木取	切込	分類	備　考
15	(15.5)	1.7	0.2	M	2	B_1	
16	(18.4)	3.0	0.2	I	2	B_1	
17※	23.2	2.6	0.3	M	2	B_1	
18	(12.3)	2.6	0.4	M	2	B_1	
19※	(15.5)	2.5	0.3	I	2	B_1	
20※	9.7	1.2	0.2	I	2	B	
21	21.7	2.5	0.2	M	2	B_2	
22※	20.1	2.1	0.35	M	2	B_2	
23	19.5	2.4	0.35	I	2	B_2	
24	21.0	2.1	0.25	I	2	B_2	
25※	(19.4)	2.3	0.3	I	2	B_2	
26	(12.1)	2.1	0.25	I	2	B_2	
27	(5.9)	1.9	0.2	M	2	B_2	
28	19.9	2.0	0.3	M	2	B_2	
29	20.1	2.5	0.3	I	2	B_2	
30	18.7	2.3	0.3	M	2	B_2	
31	21.5	2.2	0.2	I	2	B_2	
32	15.8	2.2	0.2	I	2	B_2	
33	(5.7)	2.1	0.3	M	2	B_2	
34	(7.4)	1.6	0.25	I	2	B_2	
35	(9.5)	2.1	0.3	I	2	B_2	
36	16.2	2.0	0.2	I	2	B_2	
37	(17.8)	(1.4)	0.2	I	2	B_2	
38	(19.2)	(2.8)	0.3	M	2	B_2	SD650B
39	(11.1)	2.1	0.2	M	2	B_2	
40	(11.0)	2.5	0.2	M	2	B_2	SD650B
41	13.2	1.8	0.45	M	2	B_2	
42	(13.0)	3.0	0.4	I	2	B_2	
43	19.3	2.7	0.4	M	2	B_2	
44	(12.9)	2.1	0.3	I	2	B_2	
45	19.4	2.2	0.3	M	2	B_2	
46	(12.1)	2.3	0.3	M	2	B_2	
47	(7.8)	2.1	0.2	I	2	B_2	
48	(18.2)	(0.9)	0.2	M	(1)	B_2	
49	19.6	1.9	0.45	I	2	B_2	

資料番号	長	幅	厚	木取	切込	分類	備考
50	(9.2)	1.7	0.3	I	2	B_2	
51	(11.9)	(1.8)	0.3	M	2	B_2	
52	21.2	2.9	0.4	M	2	B_2	
53	(10.5)	1.9	0.35	I	2	B_2	
54	20.8	2.2	0.3	M	2	B_2	
55	18.9	2.4	0.5	I	2	B_2	
56	(11.0)	2.1	0.2	M	2	B_2	
57	(9.0)	2.2	0.2	M	2	B_2	
58	(20.8)	1.5	0.25	I	2	B_2	
59	(12.6)	1.6	0.45	M	(6)	D	
60 ※	32.5	2.1	0.3	I	8	D	
61	(9.8)	1.2	0.3	I	(6)	D	SD650B
62	(12.8)	1.2	0.3	I	(2)	D	
63	(16.2)	2.0	0.2	M	(6)	D	
64	(15.0)	1.8	0.2	M	(2)	D	
65 ※	(16.8)	1.1	0.2	I	8	D	
66	(13.9)	2.0	0.3	M	(6)	D	SD650B
67	(13.2)	1.6	0.3	I	(2)	D	
68	(15.7)	2.0	0.2	I	(4)	D	
69	(13.3)	(1.5)	0.4	I	(2)	D	
70	(18.3)	1.5	0.4	I	(4)	D	
71	(11.0)	1.9	0.5	I	(6)	E	
72 ※	(6.3)	1.9	0.3	I	(8)	E	
73	(20.1)	1.9	0.3	I	(7)	E	
74 ※	24.8	2.2	0.35	I	7	E	
75	(9.6)	2.2	0.3	I	(6)	E	
76	(12.1)	1.4	0.3	M	(2)	E	
77	(7.1)	1.8	0.2	I	(3)	E	
78	(15.2)	1.4	0.2	M	(4)	E	
79 ※	(16.3)	2.3	0.2	I	(8)	E	
80	(12.0)	2.1	0.4	I	(1)	E	
81	(9.2)	1.8	0.2	M	(5)	E	
82	(6.6)	(1.6)	0.2	I	(3)	E	
83	(13.8)	1.9	0.3	I	(3)	E	
84	(5.6)	2.0	0.25	I	(3)	E	円頭
85	(14.4)	2.2	0.2	I	(6)	E	
86	(7.0)	(1.5)	0.2	M	(4)	E	
87	(14.0)	2.3	0.2	I	(2)	E	
88	(11.6)	(1.2)	0.4	I	(4)	E	
89 ※	(21.3)	(1.0)	0.2	I	(8)	E	
90 ※	(19.7)	1.6	0.2	M	8	E	
91	(9.2)	1.1	0.3	M			
92	(16.0)	2.0	0.2	M			SD650B
93	(15.4)	1.6	0.4	M			
94	(10.4)	1.8	0.2	M			SD650B
95	(5.9)	1.7	0.25	M			〃
96	(10.0)	1.5	0.25	I			
97	(14.1)	2.0	0.2	I			SD650B
98	(20.6)	2.2	0.3	I			
99	(5.7)	2.3	0.2	M			
100	(15.6)	1.4	0.4	I			
101	(20.6)	2.0	0.2	I			
102	(14.5)	2.4	0.2	I			
103	(9.2)	1.8	0.2	I			
104	(7.7)	1.7	0.3	I			
105	(12.5)	1.7	0.2	M			
106	(21.2)	2.7	0.5	I			

祭祀具　5．刀子形

資料番号	長	幅	厚	刃部長	木取	刃の作出の有無	備考
109※	(19.8)	1.3	0.3	6.4	I	有	
110	(8.7)	1.5	0.3	8.6	I	有	
111	(7.7)	1.0	0.4	(7.7)	I	有	
112	(3.3)	1.7	0.3	(3.3)	M	有	残欠
113※	(18.7)	1.7	0.7	8.7	I	無	
114	(17.7)	1.6	0.5	(7.0)	M	無	刃部墨痕
115	(17.2)	1.5	0.9	(7.2)	M	無	

服飾具　2．櫛

資料番号	幅	高	厚	歯長	歯数	3cm当りの歯数
129	(2.62)	(1.25)	0.75	(0.4)	(27)	32※
130	(5.56)	3.46	0.75	2.7	(59)	34
131	(4.45)	3.90	0.65	3.28	(44)	33～34
132	(8.05)	4.15	0.70	3.2	(68)	30
133	(2.25)	3.50	0.70	2.7	(23)	30～31※
134	(4.25)	(2.90)	0.80	(2.05)	(39)	31
135	(4.35)	1.76	0.68	(1.0)	(42)	33
136	(9.95)	3.85	0.70	3.05	(103)	32
137	(5.55)	4.00	0.65	2.90	(51)	29
138	(1.80)	(2.70)	0.65	(0.24)	(15)	33※
139	(3.00)	3.90	0.70	3.15	(27)	30※
140	(2.95)	3.65	0.73	2.90	(28)	33※
141	(2.30)	(1.33)	0.64	(0.55)	(23)	32※
142	(4.25)	4.00	0.70	2.71	(43)	33
143	(4.43)	3.62	0.66	2.81	(40)	29

食膳具　1．曲物容器底板

資料番号	径	厚	木釘数	木取	分類	備考
145	42.8※	1.2	(6)	I	I	
146	40.0※	0.8	(4)	I	I	
147	39.5	1.0	(3)	I	I	
148 ※	35.7※	0.5	(3)	I	I	SD650B
149 ※	35.3※	0.8	(7)	I	I	
150	33.0※	0.9	(2)	I	I	SD650B
151	28.0※	0.8	(0)	I	I	〃
152	27.6	0.9	5	I	I	
153	25.8※	0.6	(0)	I	I	
154	24.0	—	—	—	II	側板のみ
155	23.6※	0.9	(4)	I	II	補修痕
156	23.5※	0.6	(0)	I	II	
157	23.5	0.7	4※	I	II	
158	23.0※	0.9	(5)	I	II	
159	21.6	0.7	6※	M	III	SD650B
160	21.5※	0.8	(0)	I	III	
161	21.2※	0.7	4※	I	III	2孔あり
162	21.2	0.7	4※	I	III	
163	20.5※	1.0	(0)	M	IV	一部焦痕
164	20.3	0.8	4※	I	IV	
165	20.0※	0.9	6※	I	IV	

資料番号	径	厚	木釘数	木取	分類	備考
166	20.0※	0.6	(1)	I	Ⅳ	
167※	19.9	0.8	14	I	Ⅳ	
168	19.8※	0.75	4※	I	Ⅳ	
169	19.8※	0.9	6※	I	Ⅳ	
170	19.5	0.7	6	I	Ⅳ	
171※	19.5	0.6	7	I	Ⅳ	側板残存
172	19.0	0.7	4	I	Ⅳ	
173	18.5	0.7	6※	M	Ⅴ	
174	18.3	0.6	(0)	M	Ⅴ	SD650B
175	18.1	0.6	(0)	M	Ⅴ	残欠
176	17.7	0.5	(0)	M	Ⅴ	SD650B
177	17.7	—	—	—	Ⅴ	SD650B 側板のみ
178	17.5	0.6	3	I	Ⅴ	
179	17.5	0.8	4※	I	Ⅴ	
180※	17.3	0.7	5	I	Ⅴ	側板残存 埋桧あり
181	17.2	0.7	5	M	Ⅴ	一部焦痕
182	17.2	0.7	4※	M	Ⅴ	SD650B
183	17.0	—	—	—	Ⅴ	側板のみ
184	17.0	0.8	(0)	I	Ⅴ	
185	17.0※	0.7	(0)	M	Ⅴ	
186	16.8	0.6	4※	M	Ⅵ	
187	16.8	0.6	6※	M	Ⅵ	
188	16.8	0.5	(1)	M	Ⅵ	
189	16.8※	0.5	4※	I	Ⅵ	
190	16.8※	0.7	(0)	I	Ⅵ	SD650B
191	16.8※	0.5	(1)	M	Ⅵ	〃
192	16.7	0.8	4※	M	Ⅵ	
193	16.7※	0.6	(1)	M	Ⅵ	SD650B
194	16.6※	0.7	4※	I	Ⅵ	
195	16.6※	0.5	(1)	M	Ⅵ	残欠
196	16.5	0.8	4	M	Ⅵ	
197※	16.4	0.6	6※	M	Ⅵ	中央円孔
198	16.3	0.7	6※	M	Ⅵ	
199	16.3	0.6	(1)	M	Ⅵ	
200	16.3	0.6	(0)	M	Ⅵ	
201	16.3	0.75	4	I	Ⅵ	円周刻線
202※	16.3	0.6	3※	M	Ⅵ	焼印
203	16.3	0.7	3	M	Ⅵ	
204	16.2	0.7	(1)	M	Ⅵ	
205	16.2※	0.8	4※	M	Ⅵ	小穿孔
206	16.2※	0.6	4※	M	Ⅵ	円周刻線
207	16.2※	0.6	4※	M	Ⅵ	
208	16.1	0.8	12※	I	Ⅵ	
209	16.1※	0.7	4※	M	Ⅵ	SD650B
210	16.0※	0.5	(0)	M	Ⅵ	〃
211	16.0※	0.4	3	M	Ⅵ	
212	16.0※	0.5	(0)	M	Ⅵ	
213	16.0※	0.55	4※	M	Ⅵ	
214	16.0※	0.5	(0)	M	Ⅵ	残欠
215	16.0※	0.6	(2)	M	Ⅵ	〃
216	16.0※	0.5	4※	M	Ⅵ	円周刻線
217	16.0※	0.7	(1)	I	Ⅵ	残欠
218	16.0※	0.7	6※	M	Ⅵ	円周刻線
219	15.9※	0.6	4※	M	Ⅵ	
220	15.9※	0.6	(0)	M	Ⅵ	
221	15.9※	0.4	(1)	M	Ⅵ	残欠
222	15.8	0.5	4※	M	Ⅵ	円周刻線
223	15.8	0.7	4	M	Ⅵ	
224	15.8	0.6	12※	M	Ⅵ	SD650B
225	15.8	0.55	4	M	Ⅵ	
226	15.8※	0.7	(1)	M	Ⅵ	
227	15.7	0.6	4	M	Ⅵ	
228	15.7※	0.5	(0)	M	Ⅵ	
229	15.7	0.7	4※	M	Ⅵ	
230	15.6	0.8	4	M	Ⅵ	
231	15.5	0.7	4	M	Ⅵ	
232	15.5	0.6	(1)	M	Ⅵ	
233	15.5	0.6	(0)	M	Ⅵ	中央木釘
234	15.5	0.6	4※	M	Ⅵ	
235	15.5	0.7	6	M	Ⅵ	
236※	15.4	—	—	—	Ⅵ	側板のみ 約
237	15.4	0.7	8※	M	Ⅵ	SD650B
238	15.4※	0.8	(1)	M	Ⅵ	墨痕
239	15.3	0.6	(1)	M	Ⅵ	円周刻線
240	15.3	0.6	(1)	I	Ⅵ	
241	15.3	0.6	4	M	Ⅵ	
242	15.3	0.8	4	M	Ⅵ	
243	15.2	0.6	5※	I	Ⅵ	円周刻線 小穿孔
244	15.2※	0.5	(0)	M	Ⅵ	
245	15.2※	0.6	(1)	M	Ⅵ	
246	15.2※	0.6	(1)	M	Ⅵ	
247	15.2※	0.5	(0)	M	Ⅵ	
248	15.2※	0.6	(1)	M	Ⅵ	
249	15.1	0.7	4	M	Ⅵ	
250	15.1	0.7	4	M	Ⅵ	
251	15.1	0.6	(0)	M	Ⅵ	
252※	15.1	0.7	6	I	Ⅵ	側板残存
253	15.0	0.8	8	I	Ⅵ	SD650B
254	15.0※	0.5	(1)	M	Ⅵ	〃
255	15.0	0.6	2	M	Ⅵ	
256	15.0※	0.75	(1)	M	Ⅵ	
257	15.0※	0.6	(1)	M	Ⅵ	
258	15.0※	0.6	(0)	M	Ⅵ	
259	15.0※	0.4	(0)	M	Ⅵ	
260	14.8	0.7	4※	M	Ⅶ	
261	14.8	0.6	3	M	Ⅶ	
262	14.8※	0.7	5	M	Ⅶ	
263	14.8	0.6	(0)	M	Ⅶ	
264	14.8	0.6	6	I	Ⅶ	SD650B 小穿孔多
265	14.8	0.7	(1)	I	Ⅶ	
266	14.8※	0.7	(2)	M	Ⅶ	
267	14.6	0.65	(0)	M	Ⅶ	
268	14.6	0.6	(1)	I	Ⅶ	
269	14.5	0.6	(0)	M	Ⅶ	円周刻線
270	14.5	0.8	4※	I	Ⅶ	
271	14.5	0.6	6※	M	Ⅶ	
272	14.5	0.7	7※	I	Ⅶ	円周刻線
273	14.4	—	—	—	Ⅶ	側板のみ

資料番号	径	厚	木釘数	木取	分類	備考
274	14.4	0.6	(0)	M	Ⅶ	SD650B
275	14.4	0.6	3	M	Ⅶ	
276	14.4	0.7	4※	I	Ⅶ	
277	14.3	—	—	—	Ⅶ	側板のみ 刻線あり
278	14.3	0.7	(0)	M	Ⅶ	
279	14.2	0.6	(1)	M	Ⅶ	
280	14.1	0.7	10	I	Ⅶ	円周刻線
281	14.1	0.7	(0)	I	Ⅶ	
282	14.1	0.45	(1)	M	Ⅶ	
283	14.0	0.6	(1)	M	Ⅶ	
284	14.0	0.35	(0)	M	Ⅶ	
285	13.9	—	—	—	Ⅶ	側板のみ
286	13.8	—	—	—	Ⅶ	〃
287	13.8	0.9	4	M	Ⅶ	中央穿孔
288	13.8	0.5	(1)	M	Ⅶ	
289	13.8	0.5	(0)	M	Ⅶ	
290	13.8※	0.5	(0)	M	Ⅶ	
291	13.7	—	—	—	Ⅶ	側板のみ 朽
292	13.7	0.9	5	I	Ⅶ	中央穿孔
293	13.6	0.8	4	M	Ⅶ	SD650B
294	13.5	0.8	4※	I	Ⅶ	SD650B 中央穿孔
295	13.5	0.7	(2)	I	Ⅶ	中央穿孔
296	13.4	0.4	4※	M	Ⅶ	
297※	13.4	0.6	4	M	Ⅶ	側板残存
298	13.2	—	—	—	Ⅶ	側板のみ
299	13.2	0.7	4	M	Ⅶ	
300	13.1	0.6	3※	M	Ⅶ	
301	13.1	0.7	4※	I	Ⅶ	SD650B
302	13.0※	0.7	(1)	I	Ⅶ	〃
303	13.0※	0.5	(1)	M	Ⅶ	〃
304	13.0※	0.5	(1)	M	Ⅶ	
305	13.0※	0.7	(1)	M	Ⅶ	
306	13.0※	0.9	(2)	I	Ⅶ	
307	13.0※	0.5	(1)	I	Ⅶ	
308	12.8※	0.4	(1)	M	Ⅷ	残欠
309	12.8※	0.6	(1)	I	Ⅷ	
310	12.7	0.5	4※	M	Ⅷ	
311	12.5	0.8	6※	I	Ⅷ	SD650B
312	12.4	0.4	—	M	Ⅷ	
313	12.3	0.5	4※	M	Ⅷ	
314	12.2	0.8	5	I	Ⅷ	
315	12.1	0.6	4※	M	Ⅷ	
316	12.0※	0.5	(0)	M	Ⅷ	残欠
317	11.9※	0.5	4※	M	Ⅷ	
318	11.6	0.7	9※	I	Ⅷ	
319	11.3	0.7	(0)	I	Ⅷ	
320※	11.2	—	—	—	Ⅷ	側板のみ
321	11.2	0.5	5※	I	Ⅷ	小穿孔
322	11.2	0.7	4	I	Ⅷ	円周刻線
323※	10.8	0.6	3	M	Ⅷ	側板残存

食膳具 2. 曲物容器蓋板

資料番号	外径	内径	厚	とじ数(対)	木取	分類	備考
328	31.0※	28.0※	0.5	(1)	I	BⅠ	残欠
329	28.5※	26.9※	1.1	(1)	I	BⅠ	
330※	28.2	26.0	0.6	4※	I	BⅠ	SD650B
331※	23.5※	21.0※	0.7	(0)	M	BⅣ	
332	23.0	21.0	0.7	4※	M	BⅣ	SD650B
333	22.8※	21.8※	0.7	4※	M	BⅣ	
334	20.5	19.0	0.5	4※	I	BⅤ	
335	19.0	17.4	1.2	(4)	I	BⅥ	SD650B
336	18.0※	16.4	0.5	(1)	I	BⅥ	
337	17.5	15.4	0.4	6※	M	BⅦ	
338	17.3	15.4	0.4	6※	I	BⅦ	
339※	16.9	15.4	0.9	(1)	I?	BⅦ	側板残存
340※	18.1	15.2	0.55	4	I	BⅦ	
341	18.0※	15.2	0.5	4※	I	BⅦ	
342	16.1	15.1	0.5	4※	M	BⅦ	
343	17.2	15.0	0.5	4※	I	BⅦ	
344	16.3	15.0	0.6	5※	M	BⅦ	
345	16.9	14.9	0.5	4※	M	BⅦ	SD650B 中央穿孔
346	16.7	14.5	0.5	4	M	BⅦ	
347	16.0	14.0	0.6	4※	M	BⅦ	
348	15.0※	13.4※	0.4	4※	M	BⅧ	
349※	14.5	13.3	0.6	5	M	BⅧ	
350	11.2	10.2	0.4	4※	M	BⅧ	

食膳具 3. 折敷

資料番号	長 (木目方向)	幅 (木目直交方向)	厚	木取	備考
353	15.7	(5.6)	0.7	I	SD650B
354	21.8	(7.7)	0.4	I	
355	27.6	27.6※	0.3	M	
356	28.6	(9.0)	0.5	I	
357	28.6	(7.3)	0.4	I	
358	31.6	(4.5)	0.4	M	
359	34.6	(12.1)	0.5	M	
360	34.6	(5.6)	0.6	I	
361※	34.7	(10.7)	0.5	M	
362	35.2	(3.8)	0.6	I	
363※	35.6	(23.5)	0.6	I	
364※	36.3	(4.9)	0.5	I	側板一部残
365	38.2	(10.5)	0.5	I	
366	41.6	(6.3)	0.6	I	
367※	(19.9)	(3.9)	0.9	I	
368	(26.2)	(2.4)	0.8	I	楕円形?
369	(20.8)	(3.0)	0.45	I	〃
370	(10.8)	(3.5)	0.5	I	SD650B 木釘穴
371	(14.5)	(3.7)	0.3	M	SD650B
372	(8.6)	(3.8)	0.25	M	SD650B
373	(16.1)	(6.3)	0.4	M	
374	(5.0)	(2.0)	0.2	M	残欠
375	(10.2)	(6.5)	0.4	M	
376	(21.8)	(10.3)	0.5	M	
377	(27.5)	(7.7)	0.5	I	
378	(11.0)	(1.6)	0.3	M	
379	(15.8)	(1.6)	0.5	I	

資料番号	長（木目方向）	幅（木目直交方向）	厚	木取	備考
380	(23.8)	(3.1)	0.4	I	
381	(9.9)	(4.3)	0.6	I	
382	(16.1)	(7.4)	0.4	I	SD650B
383	(23.3)	(2.3)	0.6	I	
384	(27.9)	(4.0)	0.5	I	
385	(29.0)	(7.8)	0.5	I	
386	(8.7)	(4.3)	0.5	I	
387	(15.2)	(3.6)	0.5	M	
388	(38.5)	(3.8)	0.4	M	
389	(34.7)	(4.6)	0.5	I	
390	(17.4)	(9.9)	0.4	I	
391	(6.5)	(1.2)	0.4	I	残欠
392	(20.2)	(1.6)	0.5	I	
393	(13.0)	(10.4)	0.3	M	
394	(11.8)	(7.8)	0.5	I	
395	(10.4)	(1.8)	0.7	I	
396	(9.5)	(1.3)	0.6	I	残欠
397	(15.1)	(6.6)	0.4	I	
398	(4.8)	(1.8)	0.7	I	残欠
399	(20.1)	(3.7)	0.5	I	
400	(41.0)	(8.6)	0.4	M	一部焦痕
401	(28.8)	(4.5)	0.5	I	
402	(14.0)	(3.1)	0.6	M	
403	(10.0)	(4.0)	0.3	I	
404	(24.0)	(1.2)	0.6	I	
405	(25.2)	(4.6)	0.5	I	
406	(10.8)	(1.2)	0.5	M	残欠
407	(17.4)	(5.4)	0.5	I	
408	(39.4)	(7.4)	0.5	I	
409	(10.3)	(9.5)	0.6	I	
410	(15.3)	(2.1)	0.5	I	
411	(10.2)	(2.3)	0.5	I	
412	(22.6)	(10.4)	0.5	M	
413	(15.4)	(2.0)	0.65	I	
414	(12.3)	(4.4)	0.6	I	残欠
415	(21.4)	(1.2)	0.45	I	
416	(21.2)	(4.7)	0.45	M	
417	(20.1)	(2.9)	0.6	I	
418	(24.2)	3.7	0.4	I	SD650B
419	(20.2)	3.1	0.3	I	〃
420	(20.0)	4.1	0.3	I	
421	(16.2)	4.6	0.4	I	
422	(16.5)	2.8	0.4	I	
423	(19.0)	1.6	0.3	I	
424	(26.0)	1.9	0.3	M	
425	(31.4)	3.2	0.5	M	
426	(32.0)	1.8	0.4	I	
427	(27.3)	(2.8)	0.4	I	
428※	(22.2)	(4.2)	0.4	M	
429	(12.4)	3.3	0.4	I	
430	(17.8)	(1.8)	0.4	I	
431	(24.4)	5.6	0.4	M	
432	(18.7)	(2.5)	0.5	I	
433	(11.3)	(1.7)	0.3	I	

食膳具　4.　木　盤

資料番号	径	器高	底部厚	木取	ロクロ爪の有無	備考
434	22.0※	(0.6)	0.6	M		
435	21.2	(1.1)	0.7	M	無	
436※	21.0	1.7	0.8	M	有	
437※	21.0	1.5	0.8	M	無	
438	20.5※	1.0	0.6	M		
439	20.5	(0.7)	0.5	M		
440	20～21※	1.5	0.9	M		残欠
441	20.2※	1.4	0.8	M	有	
442	20.0※	1.3	0.75	M		
443	20.0※	1.4	0.9	M		残欠
444	20.0※	1.3	0.6	M	有	
445	20.0※	1.1	0.7	M		SD650B
446	20.0※	(1.7)	0.8	M	有	
447	19.9	1.4	0.7	M	有	
448	19.9	1.2	0.5	M	有	
449	19.5※	(1.1)	1.0	M		SD650B
450※	19.5※	(0.8)	0.7	M	有	
451	19.0	1.3	0.7	M	有	
452	19.0※	1.3	0.7	M	有	
453	19.0※	(0.8)		M		
454	18.6	1.0	0.4	M	有	
455	18.0	1.2	0.6	M	有	
456	18.0※	1.1	0.5	M		SD650B
457	17.9	1.5	0.9	M	無	
458※	17.6	1.2	0.7	M	有	
459	17.5※	1.0※	0.5	M	有	
460	17.0※	1.2	0.7	M	有	SD650B
461	17.0※	(0.9)	0.7	M	有	
462	16.0	0.9	0.4	M	有	SD650B
463	16.0※	1.0	0.6	M	有	〃
464	—	(0.8)	0.6	M		残欠
465	—	(0.7)	0.5	M		〃
466	30.6※	(3.5)	2.0	M	無	
467	21.2※	(0.85)	0.55	M	無	
468	20.0	(1.5)	0.9	M	無	
469	20.0※	(1.2)	0.5	M	有	
470※	19.0※	(1.6)	0.9	M	無	

食膳具　6.　杓子形

資料番号	全長	身長	身幅	身厚	柄幅	木取	分類
479※	27.3	13.2	7.9	0.5	4.3	I	A
480	(17.9)	14.4	8.5	0.45	3.5	I	A
481	(11.7)	8.0	5.0	0.3	2.0	M	B
482	(12.5)	9.4	6.0	0.4	2.4	M	B
483※	(24.3)	11.3	5.5	0.7	4.2	I	C
484※	(22.8)	8.3	5.4	0.8	2.2	I	C

食膳具　7.　匙　形

資料番号	全長	身幅	身厚	柄幅	柄幅	木取	分類
485※	24.0	8.8	3.3	0.4	1.2	M	A
486	(15.7)	9.6	3.4	0.7	2.2	I	A
487	16.3	4.6	2.0	0.4	1.1	I	A
488	(9.8)	6.3	2.5	0.6	0.7	M	A
489	(11.2)	4.3	2.3	0.3	1.8	I	A'
490	(19.7)	(1.8)	1.8	0.3	1.3	I	A'
491※	16.5	1.8	1.4	0.2	0.9	M	A'
492	14.5	6.9	1.8	0.8	0.8	I	B
493※	21.6	10.4	1.7	0.6	1.2	I	B
494	16.0	7.0	1.3	0.4	0.6	M	B
495	(7.9)	5.0	2.2	0.3	0.8	I	C
496	(7.9)	6.0	2.9	0.6	1.2	I	C
497※	(10.7)	2.8	1.9	0.3	0.7	M	D
498	(6.3)	3.6	1.8	0.4	0.7	I	D
499	(4.6)	1.8	1.8	0.2	0.5	M	D

食膳具　8.　箸

資料番号	全長	本数	%	備考
500〜501	13.0〜14.0未満	2	4	
502	14.5	1	2	
503〜506	15.0〜16.0未満	4	8	
507〜510	16.0〜17.0 〃	4	8	
511〜512	17.0〜18.0 〃	2	4	
513〜524	18.0〜19.0 〃	12	24	
525〜531	19.0〜20.0 〃	7	14	
532〜535	20.0〜21.0 〃	4	8	
536	21.8	1	2	
537〜538	22.0〜23.0未満	2	4	
539〜544	23.0〜24.0 〃	6	12	
545〜548	24.0〜25.0 〃	4	8	
549	25.5	1	2	

紡織具　1.　糸　巻

	長	幅	厚	仕口幅	孔径	備考
550※	(12.0)	3.4	0.8	3.6	0.65	両端欠 SD650B
551※	10.3	2.8	0.8	2.7	0.7	両端磨滅
552※	(11.6)	2.2	0.8	2.3	0.9	両端欠
553	(6.5)	1.3	1.1	(1.6)	?	仕口浅い

紡織具　3.　梭の子

資料番号	長	幅	厚	径	備考
559※	12.9	4.0	2.6		断面6角形
560	(7.4)	3.7	3.6		断面不整楕円形
561	(8.3)	—	—	3.2	断面円形
562	(6.6)	—	—	3.2	〃
563※	7.5	4.0	1.9		断面長方形

工　具　1.　刀子柄

資料番号	長	幅	厚	茎孔 断面形	茎孔 幅	茎孔 厚
565※	15.6	1.4	0.95	長方形	0.7	0.5
566※	(9.7)	1.5	1.4	楕円形	0.5	0.3
567※	12.6	1.7	1.2	正方形	0.5	0.5
568※	24.0	2.5	1.7	〃	1.1	1.1

工　具　2.　鎌　柄

資料番号	長	柄身幅	柄尻幅	厚	備考
569	(12.5)	2.3	3.4	2.1	柄尻部のみ
570※	(30.4)	3.0	3.9	2.2	

工　具　3.　鑿　柄

資料番号	長	径	長径	短径	茎孔 断面	茎孔 長	茎孔 幅
571※	10.1	4.1	—	—	方形	0.6	0.6
572	(7.8)	—	3.5	2.7	楕円形		

履　物　1.　下　駄

資料番号	長	台幅	歯幅	高	木取	備考
591※	12.0	5.1	6.3	(4.5)	I	
592※	13.0	5.6	5.5	(1.9)	I	SD650B
593	16.0	7.1	7.3	(1.8)	I	〃
594	16.9	6.6	7.5	(2.8)	I	
595	17.5	6.3	7.3※	(2.7)	I	
596	18.7	7.8	8.7	(3.3)	I	
597※	19.5	7.8	(8.0)	(3.5)	I	
598	19.8※	7.0	8.2※	(1.7)	I	
599	19.8※	8.0	(8.9)	(2.8)	I	
600	21.0	8.5	9.6	(3.3)	I	
601※	21.2	7.3	13.5	(5.7)	I	方孔か？
602	21.2	8.5	9.5	(3.8)	I	
603※	21.8	8.8	10.6	(2.7)	I	焼穿孔
604	22.0	8.3	9.0	(2.3)	I	
605	22.1	8.8	9.8	(3.2)	M	
606	22.6※	8.5	10.5	(6.1)	I	
607	22.0※	8.6	9.7	(2.4)	I	
608※	22.7	8.8	10.6	(4.5)	I	焼穿孔
609	22.7	9.2	10.5	(4.8)	I	方孔
610	22.8	9.0	10.9	(3.1)	I	
611	22.8※	8.9	10.3	(3.5)	I	
612	21.8※	9.1	10.2	(3.3)	I	
613	22.5※	8.6	9.9	(4.0)	I	
614	22.0※	7.5	8.5	(3.6)	I	
615	22.0※	8.0	(8.6)	(3.6)	I	
616	23.4	8.5	10.3	(5.2)	I	
617	23.7	9.0	10.5	(4.0)	I	
618	23.0※	8.3	9.5	(2.8)	I	

資料番号	長	台幅	歯幅	高	木取	備考
619※	24.3	8.7	10.0	(3.4)	I	
620※	12~13※	(4 7)	(5.6)	(2.7)	I	
621	12~13※	(5.5)	(5.8)	(2.3)	I	SD650B
622	13.5	6.2	6.8	(2.1)	M	
623	22.7	(5.4)	(5.9)	(3.4)	M	
624	20.9	(4.6)	(5.5)	(5.0)	M	木釘痕
625	21.0※	(4.0)	4.4	(3.1)	I	
626	21.5※	(3.6)	5.3	(3.7)	I	SD650B
627	22.3※	(3.4)	(3.9)	(2.1)	I	
628	(20.0)	(5.9)	(6.2)	(1.7)	I	
629	22.5※	8.0	9.6	(3.2)	I	
630	20.0※	(3.8)	(4.0)	(2.9)	I	
631	(11.7)	(7.1)	(8.1)	(2.4)	I	
632	21.0※	(4.3)	(5.4)	(4.7)	I	
633	(15.5)	7.1	(8.8)	(3.4)	I	SD650B
634	(16.1)	(5.2)	(5.6)	(2.3)	I	
635	(12.4)	(4.8)	(5.1)	(2.7)	I	
636	(19.0)	(3.8)	(4.1)	(1.8)	I	
637	(19.3)	(4.5)	(4.7)	(2.3)	I	
638※	(19.8)	(3.5)	(3.7)	(2.8)	I	焼穿孔
639	(3.9)	(5.6)	(12.7)	8.6※	I	歯部のみ
640	(3.1)		11.0	(6.8)	I	〃
641	(3.4)		11.7	(5.3)	I	〃
642	(2.7)		13.0	(4.6)	I	〃
643	(4.1)	(5.0)	(8.4)	(5.9)	I	〃
644※	(10.8)	6.2	7.6	(4.7)	I	埋栓あり
645	(13.0)		(4.4)	(3.5)	I	SD650B
646	(4.5)		10.8	(6.6)	I	〃
647	(16.6)		(7.6)	(3.4)	I	〃
648	(13.9)	8.2	(9.3)	(2.9)	I	
649	(3.8)		(9.0)	(3.7)	I	歯部のみ
650	(22.8)	(4.2)	(5.0)	(4.3)	I	
651	(3.0)		(4.2)	(3.7)	I	歯部のみ
652	(3.3)		8.3	(3.6)	I	〃
653	(3.8)		8.9	(4.0)	I	〃
654	(5.7)		(5.2)	(2.2)	I	〃
655	(8.1)		(2.8)	(2.7)	I	
656	(14.6)		9.0※	(1.2)	I	
657	(8.2)	7.9	8.5	(1.2)	I	
658	(18.6)		(4.2)	(2.1)	I	

棒状品　1.　樟まき棒

資料番号	長	長径	短径	樟皮幅	薄板	棒
673	(12.6)	1.1	0.8	0.5	1	5
674	(6.2)	1.1	0.9	0.6	1	5
675	(12.0)	1.0※	0.7※	0.4		2
676	(8.8)	1.1	0.7	0.4	1	3
677※	(16.7)	1.0	0.8	0.6	1	3
678	(8.8)	1.0	0.6	0.3	0	3

棒状品　2.　穿孔のある棒

資料番号	長	幅	厚	木取	備考
679	(13.3)	1.8	0.25	I	墨書あり
680	(15.4)	1.4	0.4	M	
681	(6.4)	1.5	0.2	M	
682	(8.8)	1.3	0.4	I	
683	11.4	1.6	1.5	M	
684	(6.6)	3.0	0.5	I	
685	(9.5)	2.5	0.5	I	
686	(15.0)	2.1	0.75	I	
687	(8.2)	2.0	0.9	I	
688	(11.6)	1.3	0.6	I	
689	(25.2)	1.3	0.6		
690	(17.3)	1.8	1.6		SD650B
691	(9.2)	1.25	0.4		

棒状品　3.　尖頭棒

資料番号	長	幅	厚	尖端の削りの方向	他端	備考
692	(15.8)	1.5	0.8	2 方向		
693	15.6	1.9	1.1	4 〃	平坦	
694	(13.7)	1.9	0.8	2 〃		
695	19.7	1.8	1.6	4 〃	平坦	
696	(9.2)	1.1	0.7	2 〃		
697	(18.7)	1.0	0.4	2 〃		
698	21.3	0.7	0.4	2 〃	平坦	
699	(21.6)	1.2	0.8	2 〃		
700	(16.6)	1.0	0.45	4 〃		
701	28.0	1.1	0.4	4 〃	尖らす	
702	(23.9)	1.1	0.7	1 〃		
703	21.5	0.7	0.5	1 〃	平坦	
704	15.1	0.6	0.5	4 〃	尖らす両端尖る	
705	24.8	0.9	0.6	4 〃	平坦	
706	17.2	0.9	0.7	4 〃	〃	
707	(10.0)	1.1	(0.7)	6 〃	〃	
708	(14.3)	1.2	0.9	4 〃		
709	(16.9)	1.1	0.6	2 〃		
710	16.9	1.1	0.8	2 〃	尖らす	
711	17.8	1.1	0.7	2 〃	平坦	
712	21.6	1.2	0.7	2 〃	尖らすSD650B	
713	15.5	0.8	0.3	2 〃	平坦	
714	22.8	1.2	0.85	4 〃	〃	
715※	(16.0)	1.6	0.7	断面丸く削る		
716	(29.8)	1.8	1.1	〃		
717	(22.7)	1.2	0.7	3 方向		
718	21.5	0.9	0.8	断面丸く削る	平坦	
719	12.4	0.6	0.6	4 方向	尖らす	
720	(33.7)	1.4	1.2	4 〃		
721	(23.3)	1.2	1.0	4 〃		
722	(15.5)	1.5	1.3	断面丸く削る		
723	17.8	1.0	0.7	〃	平坦	
724	(8.9)	0.7	0.7	2 方向		
725	(15.0)	1.2	1.2	3 〃		

棒状品　4.　端部を拡げた棒

資料番号	長	幅	厚	端部幅	備　考
726	(9.2)	1.2	0.8	2.3	
727※	(14.0)	1.0	0.6	2.6	
728※	(5.8)	2.1	0.25	3.0	墨痕あり

棒状品　5.　棒状品

資料番号	長	幅	厚	分類	備　考
729	42.2	0.9	0.8	A	
730	19.6	1.2	1.2	A	
731	20.2	2.0	1.9	A	
732	5.5	3.8	3.8	A	
733	31.6	0.8	0.8	A	
734※	13.7	2.4	2.3	A	
735	21.9	1.5	1.4	A	SD650B
736	(4.4)	0.9	0.9	A	
737	(10.1)	1.0	1.0	A	
738	(15.3)	1.3	1.3	A	
739	(28.7)	1.7	1.7	A	
740	34.7	1.0	0.8	B	
741	12.9	1.3	0.9	B	
742	13.8	1.5	1.6	B	
743	(12.5)	2.4	1.9	B	
744	7.6	2.7	2.3	B	
745	(18.4)	1.1	0.9	B	
746	(26.6)	1.3	1.0	B	
747	(21.7)	1.0	0.8	B	
748	21.7	1.0	0.8	B	
749	15.2	0.8	0.4	B	
750	24.0	1.0	0.4	C	
751	24.4	1.4	0.6	C	
752	(17.7)	2.2	0.9	C	
753	19.4	1.1	0.5	C	
754	(25.6)	1.0	0.6	C	
755	(20.7)	1.0	0.5	C	
756	(23.0)	1.1	0.5	C	
757	(16.2)	1.1	0.5	C	
758	(16.8)	0.9	0.4	C	
759	(24.7)	0.9	0.4	C	
760	(19.3)	1.6	0.5	C	
761	17.2	1.0	0.6	C	
762	(11.7)	1.4	0.7	C	
763	18.9	1.2	0.7	C	SD650B
764	(20.0)	0.9	0.6	D	
765	(34.0)	1.6	1.3	D	
766	(16.7)	1.1	1.1	D	
767	(9.5)	1.0	0.9	D	
768	10.6	0.7	0.6	D	
769	21.8	2.1	1.1	E	
770	7.7	1.8	1.7	E	
771	(4.9)	2.4	2.3	E	
772	(7.4)	0.8	0.8	E	
773	(11.8)	1.3	1.1	E	
774	(14.3)	1.6	1.3	E	SD650B
775	(30.6)	1.2	1.0	E	

板状品　1.　小型円板

資料番号	径	厚	孔の有無	木取	備　考
778	7.8	0.5	無	M	SD650B
779	8.1	0.6	〃	I	円周刻線
780※	8.3	0.45	1 孔	I	墨書あり
781	8.5	0.6	2 孔	I	中央穿孔
782	5.7	0.5	無	I	
783	6.0	0.4	〃	I	
784	6.2	0.4	〃	M	
785	6.2	0.3	〃	I	
786	6.2	0.4	〃	M	
787	7.4	0.2	〃	M	
788	7.8	0.5	〃	M	
789	8.0	0.3	〃	M	
790	9.4	0.5	〃	M	
791	11.0※	0.85	〃	M	
792	13.2※	0.6	〃	M	周囲面取
793※	5.5	0.6	2 孔	I	2穿孔
794	5.7	1.7	無	I	ロクロ爪

板状品　2.　有孔木板

	長	幅	厚	孔の径	木取	備　考
795	13.5	5.2	0.4	0.3	I	墨書
796	16.0	5.8※	0.5	0.3	I	SD650B
797※	17.6	4.8	0.4	0.25	I	
798※	(11.5)	4.6	0.7	0.15	I	
799	10.0	2.5	1.5	0.5		

板状品　5.　端部を尖らす板

資料番号	長	幅	厚	木取	備　考
803	13.2	1.5	0.5	I	
804	15.9	1.6	0.25	I	
805	13.5	1.4	0.3	I	
806※	14.0	2.6	0.4	M	
807	(17.7)	1.3	0.5	I	
808	(12.0)	1.0	0.3	M	
809	(12.8)	1.5	0.3	I	
810	15.8	(0.7)	0.7	I	
811	(11.0)	1.8	0.4	I	
812	18.6	1.3	0.45	I	SD650B
813	8.7	0.8	0.25	M	
814	10.2	0.9	0.3	I	
815	21.6	1.6	0.3	I	
816	(30.6)	2.8	1.0	M	
817	(19.0)	2.4	0.6	I	
818	(42.8)	1.9	0.4	I	
819	(38.2)	1.1	0.5	M	
820	18.3	2.8	1.0	I	

その他　2.　琴　柱

資料番号	幅	厚	高	備　考
827※	6.3	0.6	2.2	
828	5.9	0.4	1.4	2孔あり

その他　5.　木　札

資料番号	長	幅	厚	木取	備　　考
831	(8.6)	3.1	0.5	I	平頭
832	12.3	5.0	0.6	M	圭頭
833	10.6	2.7	0.6	I	平頭
834	11.7	3.7	0.7	I	〃
835	11.8	3.5	0.7	I	若干丸味有り
836	(9.4)	3.3	0.7	I	平頭
837※	12.7	2.5	0.8	M	圭頭
838	(8.2)	2.9	0.5	I	平頭
839※	12.3	2.5	0.9	I	〃
840	12.5	2.8	1.0	I	〃
841	11.6	3.3	0.5	I	〃
842	(15.4)	6.5	1.1	I	丸味有り
843	22.9	3.6	0.5	I	圭頭
844	(8.4)	3.6	0.5	I	台形
845※	(6.6)	3.8	1.3		圭頭

その他　7.　木　栓

資料番号	長	幅	厚	備　　考
861※	12.2	2.0	1.9	SD650B
862	8.8	1.9	1.6	〃

その他　8.　楔他木製品

資料番号	長	幅	厚	木取	備　　考
863	12.2	2.3	1.0	M	SD650B
864	11.0	2.4	0.8	I	〃
865	(16.6)	1.7	1.7	I	
866	6.0	2.0	1.2	I	

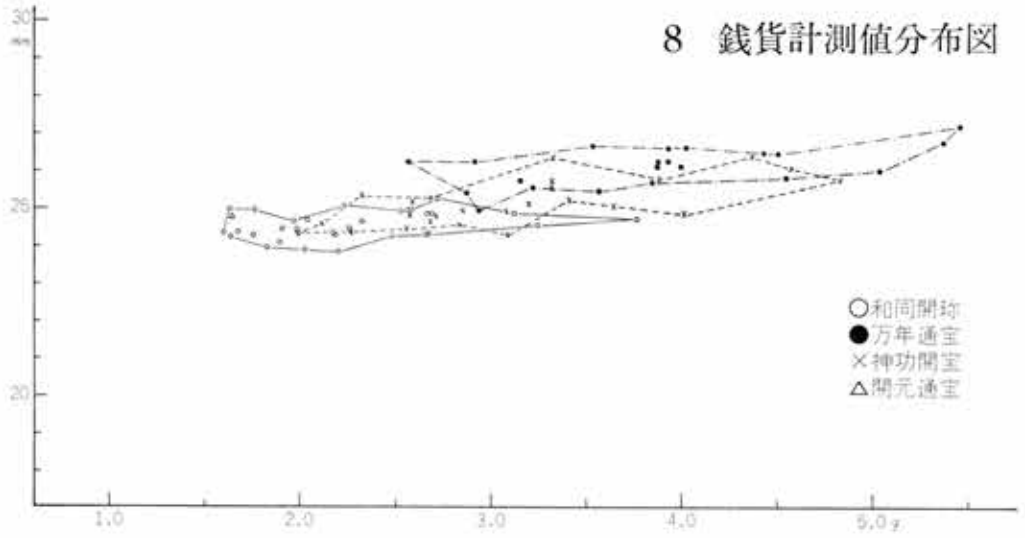
その他　9.　その他木製品

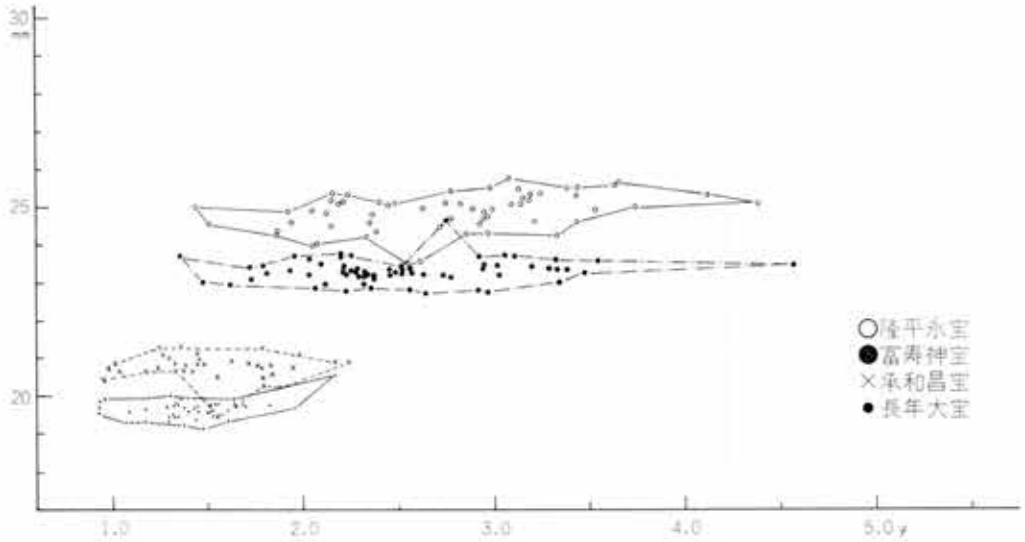
資料番号	長	幅	厚	木取	備　　考
873※	11.9	1.5	1.1		
874	(15.6)	3.1	2.3	I	
875	(29.4)	4.4	1.3	I	
876	(26.5)	1.4	0.4	I	

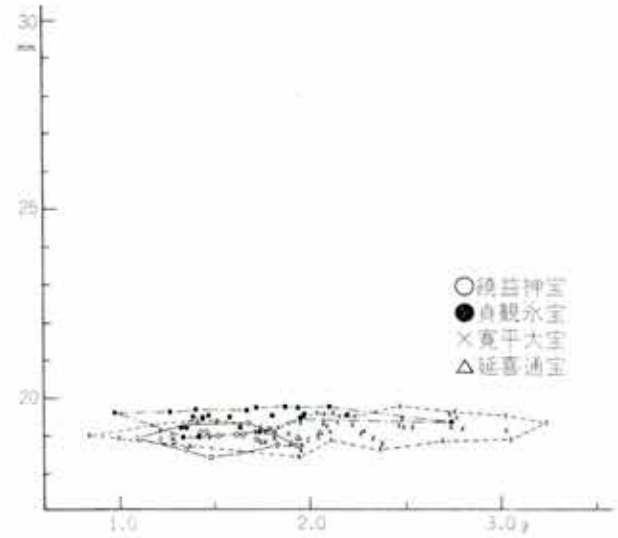
9　銭貨計測値一覧表

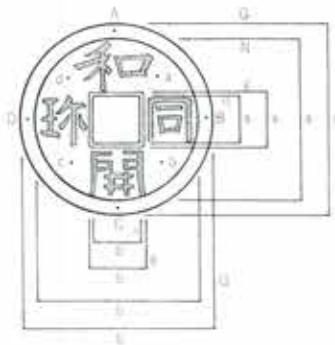
和同開珎								
番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
1	A	1.64	24.23	20.73	7.58	6.50	1.02	0.25
5	A	1.98	24.45	20.65	8.30	6.48	1.05	0.30
12	A	2.02	23.93	20.35	8.15	6.20	1.36	0.50
16	A	1.90	24.43	20.38	7.88	6.40	1.02	0.26
24	A	2.04	24.70	21.13	7.83	6.35	1.13	0.37
29	A	2.69	24.25	20.15	7.95	6.15	1.50	0.58
32	A	2.57	24.90	20.85	7.60	6.23	1.47	0.33
33	A	1.75	24.30	20.78	7.50	6.23	1.54	0.69
36	A	2.67	24.33	20.78	7.90	6.43	1.28	0.49
53	A	2.16	24.35	20.95	7.48	6.53	1.17	0.32
54	A	1.82	23.97	20.40	7.90	6.65	1.19	0.43
55	A	1.96	24.65	21.13	8.00	6.60	1.08	0.27
57	A	1.62	25.08	21.13	7.75	6.85	1.00	0.34
63	A	2.67	24.83	20.78	7.60	6.23	1.34	0.39
69	A	2.69	24.85	20.63	7.63	6.55	1.25	0.39
74	A	2.26	24.43	20.90	7.90	6.73	1.03	0.38
76	A	1.76	24.98	20.95	7.98	6.33	1.13	0.43
79	A	3.76	24.78	20.73	7.78	6.23	1.69	0.91
80	A	2.23	25.05	20.98	8.30	6.28	1.28	0.47
88	A	2.58	24.48	20.48	8.00	6.05	1.29	0.50
90	A	3.12	24.88	20.98	7.43	6.30	1.45	0.49
92	A	2.72	25.26	20.88	7.98	6.25	1.29	0.34
97	A	2.32	24.65	21.00	7.75	6.30	1.41	0.36
99	A	2.18	24.30	20.68	7.88	6.40	1.40	0.50
103	C	1.88	24.10	20.73	7.95	6.45	1.15	0.37
106	C	3.24	24.55	20.93	7.65	6.38	1.60	0.74
109	D	2.48	24.25	20.68	7.90	6.68	1.30	0.55
110	D	1.59	24.35	20.60	7.93	6.93	0.98	0.23
112	D	2.19	23.88	20.00	7.78	6.65	1.08	0.46
113	E	1.61	24.38	20.90	7.93	6.53	0.87	0.27
114	F	2.53	24.93	20.80	7.65	6.25	1.17	0.24
万年通宝								
121	A	3.16	25.73	21.73	7.85	5.93	1.28	0.63
122	A	4.43	26.45	20.98	8.00	6.00	1.47	0.74
125	A	2.91	26.23	21.45	7.95	6.13	1.43	0.61
126	A	3.57	25.45	21.90	7.95	6.13	1.35	0.74
128	A	3.87	26.10	21.78	7.70	6.10	1.51	0.85
129	A	3.93	26.25	22.15	8.15	6.25	1.38	0.70
130	A	3.99	26.13	21.60	8.08	6.40	1.37	0.63
131	A	2.56	26.25	21.78	8.38	6.13	1.28	0.32
132	A	2.86	25.43	22.03	7.68	6.28	1.38	0.50
133	A	4.34	26.08	21.90	7.88	6.20	1.56	0.82
134	A	5.03	26.00	21.60	8.08	5.75	1.97	0.87
136	B	3.93	26.60	21.63	7.75	6.10	1.34	0.47
137	B	5.47	27.20	21.80	8.03	5.88	1.51	0.64
140	C	3.23	25.80	22.08	8.25	6.40	1.24	0.49
141	C	4.51	26.45	22.13	7.93	6.20	1.73	0.77
143	D	5.38	26.83	22.13	8.13	6.35	1.90	0.97
144	D	4.02	26.65	21.75	7.93	6.46	1.39	0.51
147	E	4.54	25.80	21.50	7.75	6.23	1.62	0.92
149	F	4.15	25.78	21.18	7.85	6.08	1.63	0.89
150	G	2.94	24.95	20.15	7.78	5.95	1.39	0.66
神功開宝								
151	A	4.37	26.43	21.30	8.43	6.08	1.42	0.73
157	B	4.01	24.88	20.40	7.90	5.90	1.59	0.60
160	B	3.67	25.83	20.85	7.85	5.93	1.26	0.48
161	B	3.36	26.35	21.23	7.78	6.23	1.62	0.76
162	B	3.33	25.85	21.23	7.78	6.25	1.17	0.76
164	B	4.83	25.78	21.00	8.13	6.40	1.54	0.77
165	B	2.68	25.25	20.90	7.73	6.28	1.14	0.44
167	C	4.57	26.05	21.78	8.63	6.30	1.62	0.99
168	C	2.60	25.15	21.00	7.55	6.05	1.42	0.50
169	D	3.08	24.30	20.33	8.70	6.13	1.38	0.58
170	D	2.32	25.33	20.95	8.90	6.60	1.33	0.49
171	D	2.85	24.95	21.23	8.70	6.23	1.24	0.44
174	E	3.09	24.90	20.28	8.15	6.58	1.93	0.94
177	E	2.86	24.78	20.75	8.10	6.20	1.30	0.55
178	E	2.57	24.80	20.70	8.28	6.08	1.44	0.68
183	E	3.41	25.25	20.35	8.13	5.98	1.45	0.70
185	E	3.65	25.05	20.28	8.13	6.63	1.84	0.82
187	E	2.69	24.48	20.78	8.10	6.10	1.26	0.47
188	E	2.26	24.48	20.28	6.63	1.08	0.47	0.40
189	E	2.72	24.80	21.18	8.63	5.98	1.29	0.52
190	E	1.99	24.40	20.85	7.85	6.35	1.53	0.60
191	E	2.11	24.55	20.78	8.40	6.20	1.22	0.53
199	E	2.55	24.45	20.85	8.13	5.88	1.33	0.38
200	E	2.84	24.55	20.98	8.05	6.08	1.45	0.51

8　銭貨計測値分布図









※銭貨の各部測点については以下の通りである。

外縁外径 $G=\frac{Ga+Gb}{2}$，外縁内径 $g=\frac{ga+gb}{2}$，内郭外径 $N=\frac{Na+Nb}{2}$，内郭内径 $n=\frac{na+nb}{2}$

外縁厚 $T=\frac{A+B+C+D}{5}$，文字面厚 $t=\frac{a+b+c+d}{4}$

なお重量は化学天秤（SHIMADZu, Type12：0.1mg）を使用し、下二桁を四捨五入した数値を表記した。厚味はマイクロメーター（N・S・K：0.01mm）を使用し、下一桁を四捨五入した。

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
324	B	2.21	23.33	19.08	8.10	5.80	1.41	0.70
326	B	2.38	23.10	18.16	8.08	5.93	1.23	0.71
327	B	1.95	23.20	19.60	8.13	6.00	1.53	0.74
329	B	2.63	23.20	18.68	7.73	6.18	1.52	0.71
331	B	2.26	23.30	19.13	8.08	5.95	1.38	0.51
332	B	2.45	23.15	19.08	8.05	5.75	1.40	0.67
333	B	2.64	22.70	19.40	8.03	6.00	1.71	0.74
335	B	2.36	22.83	68.43	7.68	6.00	1.33	0.64
337	B	2.32	23.28	19.40	8.18	5.90	1.41	0.67
338	B	2.55	23.45	19.28	8.18	6.20	1.40	0.71
339	B	2.55	22.80	19.08	8.03	5.85	1.46	0.66
340	B	2.93	23.68	18.88	8.20	6.20	1.48	0.77
341	B	2.51	23.40	18.98	7.85	5.68	1.44	0.69
343	B	1.72	23.08	18.45	7.98	6.18	1.33	0.61
345	B	2.34	23.20	19.25	8.08	6.05	1.41	0.65
347	B	2.77	23.13	19.15	8.00	5.98	1.50	0.72
348	B	3.03	23.48	19.35	8.28	6.20	1.43	0.76
349	B	2.37	23.15	18.63	7.68	5.73	1.43	0.57
351	B	2.06	22.85	19.00	8.10	5.93	1.46	0.72
354	C	2.30	22.90	18.50	8.00	5.73	1.47	0.70
355	C	2.04	23.20	18.10	7.55	5.88	1.47	0.65
356	C	3.32	23.60	18.58	8.00	6.00	1.38	0.69
357	C	2.95	23.43	18.08	7.55	5.85	1.30	0.51
358	C	2.51	23.23	18.73	7.95	6.00	1.41	0.66
359	C	3.02	23.15	18.45	7.93	5.95	1.58	0.81
360	C	3.33	23.33	18.55	8.15	6.05	1.49	0.77
361	C	1.93	23.30	18.60	8.28	6.00	1.54	0.84
363	C	1.80	23.28	18.30	7.95	5.90	1.29	0.54
365	C	3.05	23.70	18.70	7.98	6.00	1.46	0.66
366	D	2.29	23.38	18.90	8.15	6.00	1.39	0.76
367	D	2.11	22.95	18.98	7.95	6.10	1.54	0.70
368	D	1.72	23.40	19.25	8.03	6.08	1.57	0.48
369	D	2.44	23.33	18.88	7.85	5.95	1.47	0.50
370	D	2.22	23.75	19.08	8.00	6.20	1.51	0.63
374	D	3.28	22.33	19.00	7.70	5.85	1.51	0.59
375	D	2.97	23.33	19.20	8.08	6.10	1.55	0.40
376	D	3.48	23.25	19.20	8.03	6.13	1.63	0.76
377	D	2.48	23.23	19.58	8.03	6.13	1.54	0.61
379	D	1.61	22.98	18.88	7.85	6.18	1.47	0.54
380	D	2.22	23.35	18.95	8.00	6.00	1.54	0.64
382	D	1.46	23.03	19.35	8.05	6.03	1.61	0.58
383	D	1.36	23.70	19.05	8.30	6.18	1.38	0.64
385	D	1.78	23.48	19.70	8.20	6.38	1.40	0.45
387	D	2.33	23.18	19.20	8.00	6.05	1.43	0.60
388	D	2.19	23.78	19.58	8.15	5.98	1.48	0.69
389	D	2.22	23.20	19.53	8.20	6.48	1.28	0.46
390	D	2.56	23.25	19.25	8.05	6.10	1.40	0.61
391	D	3.54	23.58	19.28	7.95	6.05	1.70	0.57
392	D	3.38	23.33	18.75	7.95	6.30	1.57	0.63
393	D	2.51	23.35	19.25	8.13	6.28	1.45	0.54
395	D	2.05	23.63	19.58	8.10	6.23	1.50	0.48
396	D	2.26	23.25	19.05	8.10	6.00	1.59	0.79
397	D	1.93	23.25	19.38	8.05	6.28	1.29	0.51
400	D	2.21	23.53	19.00	7.93	6.15	1.36	0.38
401	D	2.21	23.38	19.63	8.48	6.20	1.45	0.66
402	D	2.56	23.50	19.10	8.05	6.23	1.59	0.67
403	D	2.29	23.15	19.80	8.20	6.03	1.52	0.52
404	E	2.61	23.60	18.50	7.90	5.88	1.36	0.45
405	E	2.25	23.70	19.05	8.03	5.98	1.26	0.77
406	F	4.56	23.45	19.40	8.40	6.88	2.26	1.37
承和昌宝								
407	A	1.34	21.25	17.15	7.70	5.95	1.19	0.52
410	A	1.45	21.15	17.73	7.88	6.15	1.10	0.39
411	A	1.32	20.88	17.10	7.98	5.58	1.47	0.69
413	A	1.77	20.80	17.35	8.03	6.10	1.21	0.61
414	A	1.79	20.25	17.53	7.88	6.23	1.42	0.68
415	A	1.41	20.65	17.45	8.00	6.18	1.16	0.46
421	A	1.37	20.63	17.30	7.70	6.00	1.24	0.67
422	A	1.78	20.48	17.35	7.80	5.80	1.31	0.63
424	A	1.18	20.68	17.20	7.80	6.48	1.21	0.38
425	A	0.95	20.45	17.53	7.88	6.30	1.02	0.46
427	A	1.04	20.68	17.20	7.80	6.35	1.07	0.44
428	A	2.16	20.85	17.23	7.80	5.83	1.42	0.63
429	A	1.38	20.80	17.45	7.90	5.93	1.35	0.59
430	A	1.88	20.20	17.55	8.03	5.98	1.25	0.52
431	A	1.23	20.73	17.33	7.88	5.88	1.32	0.53
439	A	1.62	20.90	17.40	7.78	5.83	1.29	0.57
442	A	1.84	20.55	17.68	7.93	6.10	1.38	0.63

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
207	F	3.87	25.75	20.43	8.48	6.68	1.83	0.90
208	F	3.20	25.18	20.00	8.00	6.30	1.39	0.48
209	F	3.31	25.52	19.45	8.08	6.38	1.77	0.93
隆平永宝								
211	A	3.65	25.65	21.60	8.48	6.75	1.50	0.78
212	B	3.09	25.73	21.33	8.68	6.38	1.83	1.12
213	C	2.39	25.15	21.80	8.50	6.75	1.54	0.83
214	C	2.94	24.88	21.33	8.48	6.80	1.54	0.67
215	D	2.36	24.80	21.60	8.83	6.93	1.72	0.76
216	D	3.22	24.65	20.80	8.83	6.88	1.79	0.71
217	D	2.20	25.05	21.10	8.85	7.00	1.84	0.78
219	D	2.93	24.50	21.18	8.88	7.08	1.76	0.81
220	D	3.44	24.58	20.98	8.86	7.00	1.63	0.68
221	D	1.91	24.90	21.23	8.76	7.05	1.45	0.48
222	D	2.34	24.60	20.83	8.58	7.23	1.54	0.40
224	E	3.08	25.05	21.33	8.60	6.95	1.72	0.90
225	E	1.94	24.65	21.13	8.25	6.78	1.27	0.48
226	E	2.75	25.18	21.50	8.73	6.93	1.54	0.71
227	E	3.43	25.23	21.38	8.90	6.85	1.43	0.81
228	E	2.44	25.00	21.35	8.60	6.68	1.36	1.06
231	E	2.97	24.78	21.48	8.43	6.65	1.54	0.79
233	E	2.98	25.00	21.53	8.80	6.75	1.56	0.61
234	E	3.74	25.00	21.88	8.68	6.83	1.63	1.01
235	E	2.20	25.08	21.50	8.70	6.85	1.52	0.81
236	E	1.67	25.08	21.80	8.85	7.40	1.46	0.80
237	E	2.87	24.98	21.85	8.73	6.73	1.46	0.60
238	E	3.14	25.05	21.50	8.50	6.88	1.58	0.75
239	E	3.13	25.33	21.78	8.88	7.00	1.51	0.80
241	E	3.15	25.05	21.98	8.60	6.60	1.58	0.74
242	E	4.38	25.10	21.63	8.53	6.65	1.63	1.13
243	E	3.53	24.98	21.83	8.80	6.88	1.79	0.87
244	E	3.01	24.68	21.50	8.58	6.70	1.74	0.91
245	E	2.81	25.18	21.35	8.63	6.50	1.36	0.69
246	E	2.05	23.98	21.23	8.73	6.75	1.55	0.74
247	E	2.05	24.93	21.53	8.58	6.58	1.48	0.86
250	F	3.19	25.15	20.98	8.10	6.90	1.48	0.62
251	F	2.78	25.40	22.30	8.73	6.90	1.37	0.48
253	G	3.45	25.50	20.45	7.55	6.45	1.32	0.69
255	G	3.19	25.40	20.80	7.68	6.43	1.58	0.65

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
258	G	1.43	25.00	20.35	8.15	6.33	1.37	0.46
260	G	2.98	25.48	20.58	8.28	6.50	1.58	0.70
261	G	4.11	25.38	20.55	8.25	6.45	1.84	0.82
262	G	2.15	25.38	20.08	8.08	6.53	1.50	0.59
264	G	2.11	24.80	20.85	8.18	6.30	1.26	0.58
266	G	2.14	25.23	20.75	8.25	6.40	1.26	0.35
267	G	3.64	25.58	20.90	8.05	6.85	1.42	0.72
269	G	3.39	25.50	20.50	8.10	6.43	1.69	0.78
270	G	1.51	24.53	20.20	8.28	6.70	1.42	0.49
271	G	3.16	25.25	20.70	8.20	6.50	1.58	0.64
277	H	3.24	25.48	20.80	8.20	6.33	1.31	0.66
279	H	2.77	24.73	19.85	8.35	6.60	1.51	0.57
280	H	2.89	24.98	19.83	7.93	6.48	1.61	0.75
281	H	2.33	24.20	19.70	8.10	6.73	1.43	0.51
282	H	2.86	24.33	19.55	8.05	6.50	1.72	0.71
283	H	2.71	24.65	19.80	8.10	6.58	1.41	0.54
284	H	2.38	24.40	19.83	8.30	6.65	1.38	0.60
285	H	2.15	24.05	19.70	8.17	6.60	1.44	0.50
286	H	1.87	24.35	20.20	8.10	6.60	1.42	0.51
289	H	2.08	24.00	19.70	8.00	6.38	1.28	0.46
290	H	3.34	24.38	20.15	8.15	6.68	1.51	0.62
291	H	1.86	24.30	19.98	8.25	6.75	1.22	0.43
292	H	2.48	25.15	20.00	8.33	6.50	1.35	0.53
293	H	2.24	24.33	19.80	8.05	6.50	1.50	0.61
295	H	2.96	24.30	19.43	8.15	6.23	1.72	0.49
297	H	2.94	24.75	19.88	8.08	6.35	1.83	0.81
299	H	2.56	23.50	19.83	8.18	6.80	1.31	0.47
300	H	2.62	25.00	19.80	8.25	6.50	1.59	0.61
富寿神宝								
304	A	2.74	24.63	20.30	8.50	6.45	1.29	0.56
305	B	2.92	22.80	19.00	7.95	6.05	1.56	0.82
310	B	2.97	22.70	18.60	8.03	6.05	1.48	1.04
313	B	3.13	23.73	19.55	8.25	5.98	1.46	0.71
314	B	3.34	23.00	19.05	8.10	6.08	1.46	0.92
317	B	2.94	23.35	19.43	8.13	6.15	1.65	0.89
318	B	2.36	23.15	18.78	7.90	5.78	1.42	0.61
320	B	3.20	23.45	19.15	8.15	6.00	1.48	0.62
321	B	2.10	23.35	18.80	7.85	6.03	1.42	0.58
323	B	2.73	23.20	18.68	7.73	6.18	1.52	0.71

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	u (mm)	T (mm)	t (mm)
577	A	1.61	19.03	15.80	7.75	5.28	1.36	0.64
579	A	1.83	19.00	15.78	7.83	5.20	1.43	0.73
581	A	1.47	18.48	15.48	7.90	5.43	1.22	0.67
583	A	1.20	18.98	15.75	7.80	5.63	1.30	0.60
584	A	1.71	18.93	15.75	7.40	5.70	1.26	0.70
585	A	1.43	19.10	15.85	7.30	5.43	1.44	0.63
586	A	1.43	19.15	16.05	7.50	5.50	1.39	0.57
588	A	1.64	19.02	15.80	7.60	5.65	1.26	0.72
590	A	1.36	19.35	15.80	7.40	5.55	1.39	0.51
592	A	1.26	18.98	15.90	7.70	5.53	1.28	0.75
597	A	1.62	18.58	15.70	7.45	5.45	1.27	0.63
598	A	1.50	19.00	15.90	7.63	5.65	1.36	0.62
601	A	1.67	19.33	15.93	7.93	5.60	1.12	0.80
602	A	1.08	18.93	15.50	7.50	5.48	1.01	0.49
604	A	1.38	18.78	15.88	7.35	5.50	1.31	0.71
606	A	1.79	19.10	15.70	7.50	5.50	1.39	0.60
607	A	1.27	18.90	15.88	7.30	5.73	1.36	0.61
611	A	1.34	18.65	15.35	7.20	5.28	1.48	0.82
貞観永宝								
612	A	1.41	19.00	15.55	6.93	4.73	1.10	0.74
613	A	1.66	19.70	15.88	7.03	5.23	1.13	0.70
616	A	1.38	19.53	15.23	6.90	4.90	1.30	0.79
618	A	1.74	19.13	15.80	6.70	4.98	1.23	0.79
622	A	1.33	18.98	15.68	7.00	4.85	1.41	1.03
624	A	1.44	19.50	15.55	6.90	4.83	1.29	0.83
625	A	1.58	19.48	15.75	6.75	5.25	1.25	0.63
629	A	2.36	19.25	15.85	7.08	5.13	1.54	1.05
631	A	1.26	19.63	15.48	6.65	4.88	1.25	0.75
632	A	2.10	19.75	16.08	6.88	4.98	1.42	0.88
635	A	1.95	19.48	15.50	6.85	4.90	1.42	0.73
636	A	1.37	19.48	15.83	6.80	4.83	1.43	0.69
637	A	1.79	19.53	15.55	6.65	4.95	1.48	1.04
639	A	2.71	19.80	15.65	6.73	4.95	1.56	1.07
640	A	1.39	19.70	15.73	6.03	5.50	1.17	0.67
641	A	2.19	19.53	15.65	6.88	5.08	1.30	0.60
644	A	1.63	19.28	15.73	6.90	4.73	1.30	0.81
645	A	1.94	19.73	16.10	6.90	5.00	1.22	0.98
646	A	2.74	19.33	15.63	7.03	4.50	1.30	1.07
648	A	1.55	19.43	15.85	6.90	4.95	1.36	1.07
649	A	0.97	19.63	15.65	7.00	5.38	0.96	0.52
650	A	1.86	19.80	15.70	6.90	4.95	1.37	0.89
651	B	1.45	19.65	16.10	7.00	4.90	1.31	0.54
寛平大宝								
652	A	2.49	19.20	14.88	6.53	4.85	1.58	0.88
654	B	3.02	19.50	14.53	6.58	4.98	1.84	1.25
655	B	2.80	19.15	14.80	6.85	4.78	1.58	1.23
656	B	2.03	19.58	14.68	6.55	4.75	1.32	0.63
657	C	1.39	19.45	15.40	7.40	5.50	1.30	1.00
658	C	2.10	18.55	15.40	7.10	7.73	1.45	1.11
659	C	1.81	19.05	15.33	7.50	5.03	1.19	0.79
660	C	2.48	19.48	15.65	7.40	5.25	1.78	1.40
661	C	2.46	19.75	15.28	7.28	4.95	1.47	1.06
662	C	1.51	19.40	15.13	7.28	5.00	1.21	0.96
663	C	2.73	19.20	15.13	7.08	4.95	1.62	1.32
664	C	2.23	19.50	15.00	7.18	4.90	1.48	1.12
665	C	2.03	18.98	15.25	7.30	5.15	1.33	1.13
669	C	2.76	19.55	15.10	7.15	4.68	1.61	1.23
671	C	1.90	18.80	15.03	7.20	5.10	1.39	1.01
673	C	2.77	19.48	14.95	7.25	5.00	1.53	1.26
674	D	2.07	19.30	14.90	6.93	5.18	1.43	0.66
675	D	1.83	19.03	14.23	6.93	4.70	1.24	0.62
676	D	0.83	18.98	14.55	6.68	5.00	1.14	0.66
677	D	1.75	18.85	14.80	6.95	4.83	1.28	0.83
678	D	2.10	19.08	14.50	6.98	4.98	1.63	0.94
679	E	1.16	19.30	14.30	6.73	4.75	1.13	0.64
681	E	1.93	18.45	15.05	6.63	4.73	1.28	0.77
682	E	1.36	18.70	14.05	6.48	4.68	1.14	0.73
683	E	2.47	19.00	14.30	6.98	4.93	1.50	0.61
684	E	3.02	19.10	14.43	6.55	4.55	1.91	0.97
686	E	1.72	19.10	14.78	6.65	4.40	1.17	0.59
687	E	1.00	18.98	14.63	6.55	4.65	0.94	0.47
688	E	2.22	19.25	14.75	6.50	4.55	1.25	0.69
691	E	1.98	18.90	14.45	6.60	4.73	1.42	0.58
692	E	1.81	18.95	14.20	6.38	4.80	1.15	0.66
694	E	3.23	19.30	14.85	6.65	4.80	1.94	1.18
695	E	2.53	19.20	14.85	6.70	5.00	1.54	1.08
696	E	2.75	19.60	14.65	6.70	4.50	1.67	0.88
697	E	1.21	19.15	14.45	6.78	5.00	1.31	0.68

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
443	A	1.38	20.68	17.30	7.73	5.75	1.37	0.66
445	A	1.82	20.80	16.95	7.90	5.83	1.41	0.61
448	A	0.98	20.73	17.18	7.88	6.23	1.21	0.59
449	A	2.24	20.85	17.60	8.03	5.70	1.40	0.66
451	A	1.56	19.43	17.00	7.60	6.13	1.58	1.20
452	A	1.71	20.85	17.38	7.95	6.03	1.47	0.71
453	A	1.55	20.50	17.10	7.90	5.85	1.24	0.64
455	A	1.79	21.25	17.80	8.03	5.83	1.38	0.67
457	A	1.97	21.05	17.38	7.95	6.13	1.39	0.67
462	A	1.01	20.83	17.25	7.85	6.00	1.26	0.60
463	A	1.34	20.65	17.28	7.93	5.93	1.13	0.52
464	A	1.44	20.85	17.68	7.80	5.83	1.21	0.48
467	A	1.45	20.98	17.30	7.90	5.83	1.24	0.49
468	A	1.33	20.63	17.30	7.48	6.18	1.19	0.52
471	A	1.29	21.00	17.15	7.60	5.88	1.30	0.50
472	A	1.25	21.25	17.70	7.95	5.90	1.32	0.53
473	A	1.76	20.73	17.40	8.70	5.78	1.53	0.70
475	A	1.26	21.10	17.18	7.90	5.73	1.28	0.57
476	A	1.94	20.73	17.58	8.10	6.00	1.40	0.70
477	A	1.47	20.85	17.28	8.00	6.00	1.07	0.52
長年大宝								
482	A	2.16	20.53	17.45	8.35	6.05	1.42	0.49
484	B	1.52	19.45	16.03	7.80	5.73	1.24	0.65
486	B	1.70	19.70	16.40	7.48	5.65	1.43	0.62
489	B	1.14	19.30	16.08	7.73	5.83	1.19	0.42
490	B	1.09	19.55	16.15	7.70	5.83	1.18	0.37
491	B	1.38	19.60	15.85	7.10	5.85	1.06	0.55
493	B	1.44	19.70	16.15	7.75	5.55	1.41	0.69
498	B	1.21	19.63	16.30	8.00	5.90	1.16	0.41
500	B	1.19	19.30	15.93	7.60	5.60	1.24	0.45
501	B	1.52	19.60	15.95	7.90	5.60	1.03	0.64
504	B	1.39	19.63	16.15	7.70	5.50	1.24	0.55
509	B	1.43	19.63	16.40	8.18	5.93	1.00	0.56
514	B	1.51	19.58	16.18	8.08	5.85	1.13	0.44
515	B	1.18	19.93	16.35	7.85	5.70	1.27	0.53
517	B	1.47	19.13	15.80	7.95	5.55	1.23	0.52
518	B	1.17	19.65	16.30	7.98	5.83	1.14	0.58
520	B	1.30	20.00	16.25	7.95	5.45	1.40	0.78
521	B	1.20	19.20	16.00	7.78	5.65	1.15	0.69
522	B	1.96	19.70	16.10	7.75	5.93	1.37	0.57
526	B	1.33	19.43	16.48	7.75	5.80	1.27	0.45
527	B	0.93	19.53	16.53	7.68	5.85	1.12	0.40
528	B	0.93	19.83	16.75	7.80	5.98	1.09	0.49
530	B	1.44	19.53	16.28	8.08	5.65	1.19	0.54
531	B	0.95	19.90	16.50	8.35	5.95	1.02	0.73
532	B	1.66	19.70	16.33	7.73	5.50	1.48	0.80
533	B	1.40	19.90	16.75	7.88	5.95	1.23	0.74
534	B	1.63	19.90	16.38	7.90	5.90	1.26	0.39
535	B	1.06	19.30	16.43	7.55	5.63	1.21	0.38
538	B	1.43	19.35	16.08	7.80	6.10	1.08	0.68
539	B	1.34	19.75	16.38	7.90	6.10	1.13	0.58
541	B	1.55	19.73	16.45	7.75	5.85	1.17	0.49
542	B	1.82	19.73	16.43	7.95	5.73	1.17	0.56
543	B	1.53	19.78	16.10	7.48	5.80	1.08	0.51
544	B	1.64	19.80	16.10	7.68	5.58	1.27	0.70
548	B	1.32	19.50	16.15	7.73	6.00	1.18	0.60
549	B	1.34	19.75	16.18	7.75	5.93	1.16	0.63
550	B	1.58	19.45	16.20	7.95	5.93	1.10	0.49
551	B	1.29	19.45	16.13	7.93	5.95	1.15	0.55
552	B	1.33	19.75	16.00	7.68	6.03	1.13	0.40
553	B	1.39	19.73	16.35	7.58	5.75	1.40	0.50
555	B	1.22	19.65	15.98	8.13	5.78	1.29	0.54
556	B	1.60	19.35	16.20	8.10	5.35	1.22	0.66
557	B	1.37	19.25	16.25	7.93	5.55	1.20	0.50
558	B	1.20	19.63	15.88	8.08	6.03	1.07	0.66
560	B	1.38	19.63	15.95	7.85	6.15	1.16	0.72
563	B	1.36	19.88	16.20	7.55	5.93	1.31	0.46
564	B	1.34	19.45	15.93	8.00	5.65	1.02	0.63
567	B	1.23	19.35	16.43	7.85	5.85	1.22	0.57
568	B	1.49	19.55	16.18	7.95	5.68	1.19	0.61
569	B	1.51	19.75	16.25	8.00	5.88	1.35	0.73
570	C	1.68	19.73	16.58	7.83	6.03	1.24	0.58
571	C	1.28	19.70	16.15	7.63	5.65	1.19	0.54
573	C	1.33	19.78	16.25	7.80	5.90	1.26	0.48
鏡益神宝								
574	A	1.94	18.78	15.85	7.25	5.68	1.38	0.64
575	A	1.82	18.78	15.63	7.70	5.55	1.45	0.77
576	A	1.42	19.13	15.75	7.65	5.38	1.28	0.68

番号	種	W (g)	G (mm)	N (mm)	g (mm)	n (mm)	T (mm)	t (mm)
698	E	2.32	18.93	14.35	6.68	4.65	0.57	1.00
699	E	2.27	19.08	14.15	6.70	4.33	1.42	0.84
700	E	2.69	18.83	14.10	6.70	4.85	1.67	0.99
702	E	3.04	18.90	13.98	6.28	4.35	1.84	1.34
703	E	2.26	19.05	14.38	6.85	4.60	1.29	0.70
704	E	2.47	19.25	14.55	6.70	4.75	1.60	0.81
706	E	2.12	19.58	14.90	7.00	5.13	1.22	0.72
707	E	1.83	19.20	14.18	6.75	5.00	1.09	0.76
708	E	1.82	19.10	14.35	6.78	4.50	1.21	0.72
709	E	2.09	19.28	14.03	6.78	4.28	1.19	0.76
711	E	2.14	19.35	13.05	6.55	4.70	1.16	1.04
713	E	1.95	19.45	14.85	6.90	4.80	1.13	0.73
714	E	1.95	18.73	14.03	6.45	4.80	1.20	0.97
715	E	1.76	18.83	14.25	7.03	5.00	1.04	0.55
716	E	2.07	19.58	14.78	6.58	4.55	1.34	0.70
717	E	2.37	18.63	14.30	6.63	4.55	1.54	0.96
718	E	1.95	19.03	14.60	6.88	4.70	1.28	0.55
719	E	1.94	18.63	14.15	6.60	4.90	1.22	0.92
722	E	2.37	18.80	14.20	6.33	4.05	1.35	1.04
724	E	1.76	19.08	14.20	6.80	4.83	1.34	0.96
延喜通宝								
726	A	1.94	18.90	14.15	6.68	4.90	1.47	0.96
727	A	2.05	20.10	15.40	7.00	5.00	1.90	1.46
開元通宝								
728		1.64	24.88	20.83	8.00	6.85	1.44	0.50
元豊通宝								
729		3.50	25.05	18.40	7.95	6.35	1.26	0.82

PUBLICATIONS OF NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES
RESEARCH INSTITUTE, NO. 23

NARA IMPERIAL PALACE SITE EXCAVATION REPORT VI

SURVEYS IN THE THIRD WARD OF FIRST AVENUE, EASTERN SECTOR, ANCIENT NARA, CARRIED OUT DURING 1969-1970

ENGLISH SUMMARY

NARA NATIONAL CULTURAL PROPERTIES RESEARCH
INSTITUTE 1974

CONTENTS

Page

Chapter I. Introduction 1

Chapter II. Progress of Research Work 5
1. General Description of Research Work 5
2. Daily Record of Excavation Work and Events 7

Chapter III. Sites in Ancient Nara 13
1. *Tsubo* 15 and 16 in the Third Ward of First Avenue, Eastern Sector, Nara ... 13
2. The Third Great Avenue East of Suzaku Ôji, the Central Avenue 22

Chapter IV. Artifacts Excavated from Nara 25
1. Wooden Tablets 25
2. Roof Tiles and Bricks 33
3. Pottery and Sherds 38
4. Lacquer Ware 75
5. Wooden Objects 78
6. Coins 97
7. Miscellaneous Metal, Stone and Glass Objects 104

Chapter V. Ancient Burial Mounds 109
1. Outer Embankment of the Uwanabe Mound, Eastern Portion 109
2. Hiratsuka Mound I 118
3. Hiratsuka Mound II 122
4. Discussion 125

Chapter VI. Problems and Analysis 128
1. Sites 128
2. Artifacts 136
3. Conclusions 161

Postscript 165

Supplementary Tables
1. List of architectural remains excavated in Area 6AFB ..... Page 168
2. Classification of round roof-edge tiles 169
3. Classification of curved roof-edge tiles ... 172
4. Chronology of round and curved roof-edge tiles 174
5. Earlier and later types of pottery excavated from SD485 176
6. Observations on lacquer ware 177
7. Dimensions of wooden objects 179
8. Comparative data on variations of diameters and weights of coin types... 189
9. Dimensions and weights of coins 190
English Summary 197

PLANS AND SECTIONS

1. Topographical map of the Third Ward of First Avenue, Eastern Sector, Nara
2. Layout of structures and other remains in Area 6AFB
3. Area 6AFB-J
4. Area 6AFB-I-northern portion
5. Area 6AFB-I-southern portion
6. Area 6AFB-H
7. Area 6AFB-H-upper layer
8. Area 6AFB-G·H
9. Trench to the west of Area 6AFB-H
10. Area 6AFB-F
11. Area 6AFB-D·E
12. Area 6AFB-D·E
13. Area 6AFB-D
14. Area 6AFB-C·D
15. Area 6AFB-B·C
16. Area 6AFB-A·B
17. Wells in Area 6AFB
18. Topographical map of Uwanabe Mound

19. Area K of Uwanabe Mound
20. Area L of Uwanabe Mound
21. Cross section of the eastern portion of the outer embankment of Uwanabe Mound
22. Topographical map of Hiratsuka Mounds I and II

COLOR PLATES

Frontispiece. Wooden tablets
1. Sites
    1) Remains of structure SB470 and Hiratsuka Mound I
    2) Remains of garden pond SG520
2. Artifacts
    1) Glazed pottery and porcelain
    2) Green-glazed pottery and celadon
3. Artifacts
    1) Lacquer ware
    2) Ash-glazed pottery
4. Artifacts
    Wooden figurines

PLATES

1. Area 6AFB: General view seen from south.
2. Uwanabe mound: General view.
3. Area 6AFB-I・J: General view, 1) Seen from north. 2) Seen from south.
4. Area 6AFB-J: 1) General view seen from west. 2) Remains of structure SB437 seen from north. 3) Sites of gutter SD441 and structure SB444 seen from east.
5. Area 6AFB-I: 1) Site of gutter SD453 and structure SB455 seen from north. 2) Remains of structure SB555 seen from west.
6. Area 6AFB-I: 1) Remains of structure SB470 seen from south. 2) Site of structure SB470 and gutter SD485 seen from west.

7. Area 6AFB-I: 1) Remains of structures SB471 and 482 and gutter SD497 seen from north. 2) Site of gutter SD485 seen from west. 3) Same gutter seen from east.
8. Area 6AFB-H: General view seen from west, 1) Upper layer. 2) Middle layer. 3) Lower layer.
9. Area 6AFB-H: Remains of structures SB501, 502 and 504, 1) Seen from south. 2) Seen from north. 3) Seen from east.
10. Area 6AFB-H: Site of structures SB480 and 490 and gutter SD485, 1) Seen from north. 2) Seen from east. 3) Seen from west.
11. Area 6AFB-H: 1) Remains of structures SB481 and 482 seen from east. 2) Remains of structure SB490 seen from west.
12. Area 6AFB-H: General view of the site of gutter SD485 seen from north.
13. Area 6AFB-H: Detail of gutter SD485, 1) Seen from south. 2) Seen from north.
14. Area 6AFB-H: Remains of structure SB510, 1) Seen from south. 2) Seen from west. 3) Seen from east.
15. Area 6AFB-G: Site of garden pond SG520, 1) Seen from west. 2) Seen from east.
16. Area 6AFB-G: Detail of SG520, 1) Seen from north. 2) Seen from west.
17. Area 6AFB-F·G: 1) General view seen from west. 2) Remains of structure SB530 seen from west. 3) Remains of structure SB550 seen from south.
18. Area 6AFB-F: 1) General view seen from west. 2) Site of fences SA553 and 554 and structure SB556 seen from south. 3) Remains of structures SB560 and 565 seen from east.
19. Area 6AFB-H·I: 1,2) Well SE495. 3) Well SE466.
20. Area 6AFB-F·G·I: 1) Well SE545. 2) Well SE464. 3) Well SE525.
21. Area 6AFB-G·F: 1) Site of great avenue SX600 and gutter SD650 seen from south. 2) Great avenue SX600 seen from north. 3) Same avenue seen from south.
22. Area 6AFB-A～E: 1) Site of gutter SD650 seen from north. 2) Site of great avenue SX600 and gutter SD650 seen from south.
23. Area 6AFB-C·D: 1) Site of great avenue SX600 seen from east. 2) Site of gutter SD611 and fence SA617 seen from south. 3) Same site seen from north.
24. Area 6AFB-A·B·D: 1,2) Portion of gutter SD650 seen from

north. 3) Same seen from south.

25. Uwanabe Mound: 1) General view seen from east. 2) Same seen from south.
26. Uwanabe Mound Area P: 1) Eastern portion of outer embankment seen from west. 2) Detail of protective layer of stones.
27. Uwanabe Mound Area O: Outer embankment seen from west.
28. Uwanabe Mound Area L: Outer embankment and moat seen from north.
29. Uwanabe Mound Area L: 1) Outer embankment and remains of *haniwa* cylinders seen from north. 2) Depressions indicating placement of *haniwa* cylinders seen from south. 3) Row of *haniwa* cylinders seen from north.
30. Uwanabe Mound Area L: 1) Outer embankment and remains of row of *haniwa* cylinders seen from east. 2) Detail of *haniwa* cylinders. 3) Detail of depressions from *haniwa* cylinders.
31. Uwanabe Mound Area L: 1) Outer embankment and moat seen from west. 2) Same seen from south. 3) Row of *haniwa* cylinders seen from south.
32. Hiratsuka Mound I: 1) Mound and northern portion of the moat seen from north. 2) Waist of the mound seen from north. 3) Mound and southern portion of the moat seen from west.
33. Hiratsuka Mound I: 1) Mound and southern portion of the moat seen from south. 2) Row of *haniwa* cylinders at the waist of the mound seen from west. 3) Protective layer of stones on the northern slope of the mound seen from north.
34. Hiratsuka Mound II: 1) Mound and surrounding moat seen from north. 2,3) Mound and western portion of the moat seen from west.
35. Hiratsuka Mound II: 1) Protective layer of stones on the western slope of the mound seen from north. 2,3) Protective layer of stones on the northern slope of the mound seen from east.

36–40. Wooden tablets excavated from gutter SD485.
41–45. Wooden tablets excavated from gutter SD650.
46•47. Round and curved roof-edge tiles.
48–50. Round roof-edge tiles.
51. Curved roof-edge tiles.
52. Curved roof-edge tiles and others.
53. Green-glazed bricks with wave pattern.
54. Demon tiles (*Onigawara*).

55～57. Red pottery (*Haji* ware) excavated from gutter SD485.
58～63. Grey pottery (*Sue* ware) excavated from SD485.
64. Ink stone and terracotta horse excavated from SD485.
65. Pots and sherds with inscriptions excavated from SD485.
66·67. Red pottery excavated from gutter SD650A.
68·69. Grey pottery excavated from SD650A.
70. Proto-black pottery excavated from SD650A.
71. Ash-glazed pottery excavated from SD650A.
72. Green-glazed pottery excavated from SD650A.
73. Green-glazed pottery and porcelain excavated from gutter SD650.
74. Red pottery excavated from gutter SD650B.
75. Grey pottery excavated from SD650B.
76. Proto-black pottery excavated from SD650B.
77. Ash-glazed pottery excavated from SD650B.
78. Green-glazed pottery excavated from SD650B.
79. Ink stone and terracotta horses excavated from SD650.
80. Pots and sherds with inscriptions excavated from SD650.
81·82. Lacquer ware excavated from SD650.
83～85. Wooden objects excavated from SD485.
86～98. Wooden objects excavated from SD650.
99～101. Coins excavated from SD650.
102·103. Metal objects excavated from SD650.
104. Stone objects excavated from SD650.
105. *Haniwa* excavated from Uwanabe Mound.
106. *Haniwa* and pottery excavated from Uwanabe Mound.
107. *Haniwa* excavated from Hiratsuka Mound II.
108. *Haniwa* excavated from Hiratsuka Mound I.
109. *Haniwa* excavated from Hiratsuka Mound II.

FIGURES AND DIAGRAMS IN TEXT

Page
1. The eastern portion of the outer embankment of Uwanabe Mound during excavation 3
2. Survey map of Uwanabe Mound 6
3. Survey map of Area 6AFB 6
4. A reconstruction of a Nara period garden 12
5. Cross section showing chronological stratification of Hiratsuka Mounds I and II 14

6. Cross section showing stratification of SD485 17
7. Plan and elevation of SG520 19
8. Cross section showing stratification of SD566..... 21
9. Diagram of wooden posts protecting bank of SD650B 24
10. Classification of red pottery plates (*sara*) and shallow bowls (*tsuki*) by dimensions 41
11. Classification of grey pottery shallow bowl type A by dimensions 46
12. Classification of grey pottery shallow bowl type B by dimensions 46
13. Types of glazed pottery excavated from Area 6AFB-H・I 50
14. Pottery fishing-line sinker 74
15. Large size wooden figure 83
16. Hypothetical rendering of wooden wheel 94
17. X-ray fluorescent analysis of coins 102
18. Iron objects 107
19. Iron axle bearing 107
20. Rendering of Uwanabe Mound 113
21. Pottery excavated from SD732・SD734 117
22. Protective layer of stones, Hirastuka Mound I 118
23. Protective layer of stones, Hiratsuka Mound II 122
24. Grey pottery excavated from mounds 125
25. The grid system of avenues in Nara 129
26. Structural remains from the three main periods of construction in Area 6AFB-F～J 133
27. Green-glazed bricks with wave pattern 142
28. Clay drainage pipe 143
29. Earlier and later types of red pottery excavated from SD485 144
30. Distinction between shallow bowls and plates based on dimensions from SD650 148
31. Types of ritual wooden blades 151
32. Types of wooden human figures 151
33. Types of metal buckles and belt fittings 155
34. Buckle and belt fitting type A: subtypes 156
35. Classification of oval and rectangular metal belt fittings by dimensions 160
36. Classification of oval and rectangular stone belt fittings by dimensions 161
37. Area 6AFB from the 4th through the 8th century 162
38. Area 6AFB from the 17th century to the present 163

TABLES IN TEXT

1. Sites, dimensions in are, and period of survey 5
2. Correlation of structural and other remains and periods of construction in Area 6AFB-F～J 22
3. Quantity of various types of pottery excavated from SD485 40
4. Pottery with inscriptions from SD650A 52
5. Pottery with engraved inscriptions and marks excavated from SD650A 53
6. Quantity of type A pottery excavated from SD650A 54
7. Analysis of green glaze on pottery excavated from SD650 63
8. Quantity of type B pottery excavated from SD650 66
9. Inscribed and engraved pottery excavated from SD650 73
10. Kinds of wood used for lacquer ware 77
11. Dimensions of metal buckles and belt fittings 104
12. Dimensions of stone buckles and belt fittings 108
13. Altitude of eastern portion of outer embankment of Uwanabe Mound 113
14. Classification of round boxes of thin cypress wood (*magemono*) 153
15. Types of wooden clogs (*geta*) 154
16. Types of oval and rectangular belt fittings 157

NARA IMPERIAL PALACE

EXCAVATIONS AT THE HEIJŌ PALACE SITE : RESEARCH REPORT VI

In the period of about one year from the spring of 1969 to the early summer of 1970, the Nara Imperial Palace Excavation Department, a division of the Nara National Cultural Properties Research Institute, excavated the area to the east of the Nara Imperial Palace. The original impetus for this investigation came from the proposed construction of a by-pass designed to relieve traffic congestion on national highway no. 24 which passes through the center of present-day Nara City. According to the 1965 plan this by-pass was expected to run from north to south immediately east of the Nara Imperial Palace, but subsequent investigative excavations revealed the fact that the proposed highway was within the grounds of the Palace. Thanks to the varied efforts of the Ministry of Construction, scholars, and ordinary citizens, the by-pass was quickly shifted to the east, away from the Nara Imperial Palace. The new route was planned to follow Higashi San-bo O-ji (the third great avenue running north to south to the east of Suzaku Oji, the broad central avenue) in the eastern sector of Nara; therefore the area just north of Minami Ichijo-oji (South First Avenue) and the eastern outer embankment of the large fifth century *kofun* called the Uwanabe Mound became sites for excavation. The full costs of the excavation were born by the Kinki Regional Branch of the Ministry of Construction. The actual excavation was carried out by the Nara Imperial Palace Excavation Department. Seven areas covering a total area of 9,210 square meters were thoroughly investigated. This report is a record of those excavations; a summary of the results is presented below.

1. *Kofun*

In gutter SD650 just to the east of Higashi Sanbo Oji two columnar, single-edged stone axe heads of the Yayoi period were discovered leading to the expectation that Yayoi period sites existed in the surrounding area. However, the earliest sites discovered in the subsequent excavations were three burial mounds of the fifth century.

The largest of the three tumuli is the Uwanabe mound. Excavations of the eastern portion of the outer embankment of this mound revealed that the remains have survived in virtually their originial form. At the time of construction the mound was surrounded by both inner and outer moats, but the outer moat was filled in during the Nara period and a new gutter (SD734) was dug just outside the outer embankment. On the inner slope of the outer embankment a protective layer of stones was arranged. *Haniwa* cylinders lined the two shoulders of the embankment. These two rows were primarily composed of cylindrical vessels with fin-like projections, while cylinders with lids were placed in important positions. According to calculations made during the survey, as many as 5,357 *haniwa* cylinders may have been set up on the outer embankment. All of these *haniwa* had been kiln fired and are thought to be of the same period as the early-type grey pottery (*sue* ware) collected from the eastern lateral projection at the waist of the mound. This then is the basis for determining the date of the Uwanabe mound.

Assuming that the Uwanabe mound was the tomb of a fifth century member of the aristocracy, Hiratsuka mounds I and II to the south have the character of subordinate mounds which accompany unusually large mounds. All three mounds are keyhole-shaped, but Hiratsuka I is a shortened, scallop-shaped variaition of the keyhole shape, to the present the only one of its type to be found in the Saki-Tatenami group. Both Hiratsuka mounds were so extensively damaged during the construction of Nara that only the level, squared-off front ends of the mounds and adjacent moats could be excavated. The *haniwa* sherds which had fallen from the mounds provide an insight into the character of the Hiratsuka tumuli. Close examination of the sherds has revealed that the two mounds are contemporary, but that number I is slightly older. In comparing the Uwanabe mound with Hiratsuka mounds I and II scale is not the only point of contrast; in the case

of Uwanabe mound the protective layers of stone and the *haniwa* cylinders are larger and the technique of manufacture of the *haniwa* is superior.

2. *A Nara Period Residential District*

After the capital was transferred to Nara in 710, the appearance of the locale was drastically altered. Based on a grid system, a symmetrical criss-crossing of avenues was laid out, and area 6AFB lying at the foot of the northern hills was transformed into a cityscape of houses and streets. The front portions of Hiratsuka mounds I and II became *tsubo* 15 and 16 of the third ward of Higashi Ichijo of the eatern sector of the city and Higashi Sanbo Oji passed through the middle of the back part of the Hiratsuka mounds. During the early period of construction the roads and residential areas of Nara were of a surprisingly large scale. At the north edge of Nara, Kita-kyogoku Oji, the avenue running along the northern-most limit of the city, had to be routed to the south to avoid the embankment of Uwanabe mound. Besides slightly distorting the symmetry of the city plan, this shift to the south resulted in the loss of two-thirds of the northern part of *tsubo* 16. As the proposed by-pass for national highway no. 24 was to come close to only the eastern part of *tsubo* 15 and 16 which are contiguous north to south, the excavation was confined to the east half of the two *tsubo* and did not extend to the central area. In the northern portion of the site the remains of a group of buildings were found and in the southern portion of the site part of a garden pond was unearthed. Although the finds were fragmentary (the buildings and pond continue to the west outside the confines of the excavations), a residence of impressive size and appointments gradually emerged. The privileged rank of the master of this residence can be deduced from the use of roof tiles of the same kind as those on the Nara Imperial Palace. During the early Nara period (circa 708–729) there were two major stages of construction and the roof tiles can be dated to the latter half of the 720's in the second stage. Within the grounds of the residence there stood an octagonal treasure house with a platform terrace of green-glazed brick with a wave pattern, a building material that is also more typically found within the walls of the Imperial Palace.

After the survey of area 6AFB was completed, various other sites within the city were investigated and several buildings arranged on

an east-west axis at the north end of a plot were found providing instructive comparisons for the 6AFB structures. It gradually became clear that these newly located structures consisted of main halls (*seiden*), flanking halls (*wakiden*), miscellaneous outbuildings (*zassha*), wells, etc. Comparing these residential groupings with the 6AFB group we see that none of the buildings examined in area 6AFB resembles a main hall but rather they are of the flanking hall and outbuilding types. It is possible that the main hall lay to the west outside the province of the current excavation.

Artifacts recovered from gutter SD485, which runs through the middle of this group of buildings, concretely established the character of the site. From wooden tablets dating to the 710's and 720's one can conjecture the existence of a residence built for a prince by a government bureau. Prince Nagayao, who played an active role in the politics of the early Nara period, very likely may have been the master of this residence. A further hint as to the identity of the occupant can be seen in his possession of a great quantity of a highly standardized and uniform earthenware pottery, and in the use of three-glaze pottery, both of which are only rarely found at non-imperial sites. Beyond adding a clue as to the status of the master, these groups of pottery have also added important examples to the chronology of early eighth century earthenware.

The various facilities of the early eighth century were practically all destroyed in the 720's and after that from the end of the eighth century to the beginning of the ninth century extensive earthenwork and new construction were carried out. Several buildings are known to have existed in 6AFB during this period, but the complete nature of the buildings is difficult to determine because of the limited area of the excavation. However, on the road surfaces of Kita-kyogoku Oji and Jokan Oji, a road running through the middle of the ward, there was a profusion of casually arranged small buildings. From this it was determined that their function as roads had been lost.

3. *Higashi Sanbo Oji and its Eastern Gutter*

In the later centuries the surface of Higashi Sanbo Oji disintegrated from repeated floodings from the gutters and the features of the raised earth of the road and the depression of the gutter are no longer obvious. At the eastern demarcation of area 6AFB-f-west the area of the western gutter of the road was investigated. Within

the narrow limits of the excavation however, the results were inconclusive.

The excavated portion of the eastern gutter (SD650) extends for about 270 meters. It is thought that the gutter was dug at the beginning of the eighth century. Eighth century layers of accumulation, however, cannot be observed, a tendency that was also noted in an earlier investigation of a gutter along Higashi Ichibo Oji. Therefore we may conclude that the road and gutter were maintained in excellent condition throughout the eighth century. The deposits in the roadside gutter began to accumulate at the beginning of the ninth century and were added to by repeated floods. Finally, the road and gutter underwent two major repairs and after lasting into the early part of the tenth century, they were completely buried. Actually Higashi Sanbo Oji continued to function as a road for about one hundred years after the abandonment of Nara. In the ninth century it seems that the lack of maintenance and the foothill location of the gutter combined to block it at its intersection with South Ichijo Oji. The water stagnated and discarded objects accumulated, leaving many piles of remains. It is possible to distinguish in these remains two general periods, and relying on the dates of the wooden tablets and the types of coins one can go one further step in specifying the date of the site. The artifacts are extremely varied but generally they can be divided into the following groups: a) those related to roads and travel, b) those related to food and supplies, and c) those related to artisans' shops.

A. Those related to roads and travel include announcement placards, wooden clogs (*geta*), and every type of ceremonial and ritual object. The announcement placards were sign posts that were placed at the shoulder of a road; they informed passersby of lost and found livestock and requested assistance in locating and identifying the animals. The wooden clogs were broken or one of the pair was lost; they are of a transitional design in which the front hole through which the thong passes is shifted from near the big toe (the earlier arrangement) towards the center (the center position being the later design). Among the ceremonial objects there were ritual wooden blades, wooden human figures, terracotta horses, and miniature pottery for ritual use. Of these various items, only some of the wooden human figures are comparable in size to eighth century examples; generally the objects are smaller than and inferior to most eighth century examples. The nature of the religious ceremonies is not clear, but following ceremonies held on the road or in the ward, objects were

thrown into the water. It seems that the coins were also tossed into the water probably to pray for safe travel.

B. Earthenware pots are the most numerous item in the category of eating utensils. Red pottery, proto-black pottery, and grey pottery were the main types; ash-glazed pottery, green-glazed pottery, and porcelain were less numerous. In addition to pottery, the eating implements also included lacquer and wooden objects. The presence of such aristocratic objects as porcelain and lacquer as well as inscribed pottery indicating a connection with an official office strongly suggests that this place was a public facility associated with a temple or a government office.

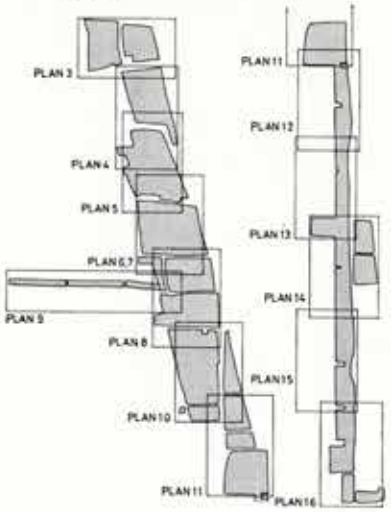
C. The existence of artisans' shops is indicated by rusted metal objects and whetstones. Among these objects there is no uniformity and the miscellany of objects included suggests that they may have been collected in order to be recast. Other than the above, there were wooden tablets which allude to public works carried out by officials and wooden objects such as Buddihst implements. These remains have no marks of having flowed a long distance in the water, so they most likely originated from the Ichijo fourth ward contiguous with the eastern gutter. Futaiji, a temple which has continued to maintain its Nara period location to the present day, is in an area which was then the third and fourth *tsubo* of the fourth ward of Sakyo Ichijo. It would not be contradictory if Futajji were the source of these discarded objects.

The remains after the early part of the tenth century are limited to numerous ditches which run from north to south on the surface of Higashi Sanbo Oji. In some of these ditches a small quantity of sherds of black pottery (*gaki*) has been found. In the middle ages the road was entirely abandoned and the land was used for farming. From that time until recent years the area of the third ward of Sakyo Ichijo was rice fields. In the latter half of the 1960's the area along what is now called Ichijo-dori in the western quarter once again became a residential district, and since 1971, when the by-pass was opened, the remaining rice fields have rapidly given way to residences and the rural landscape has been lost.

図　面・図　版

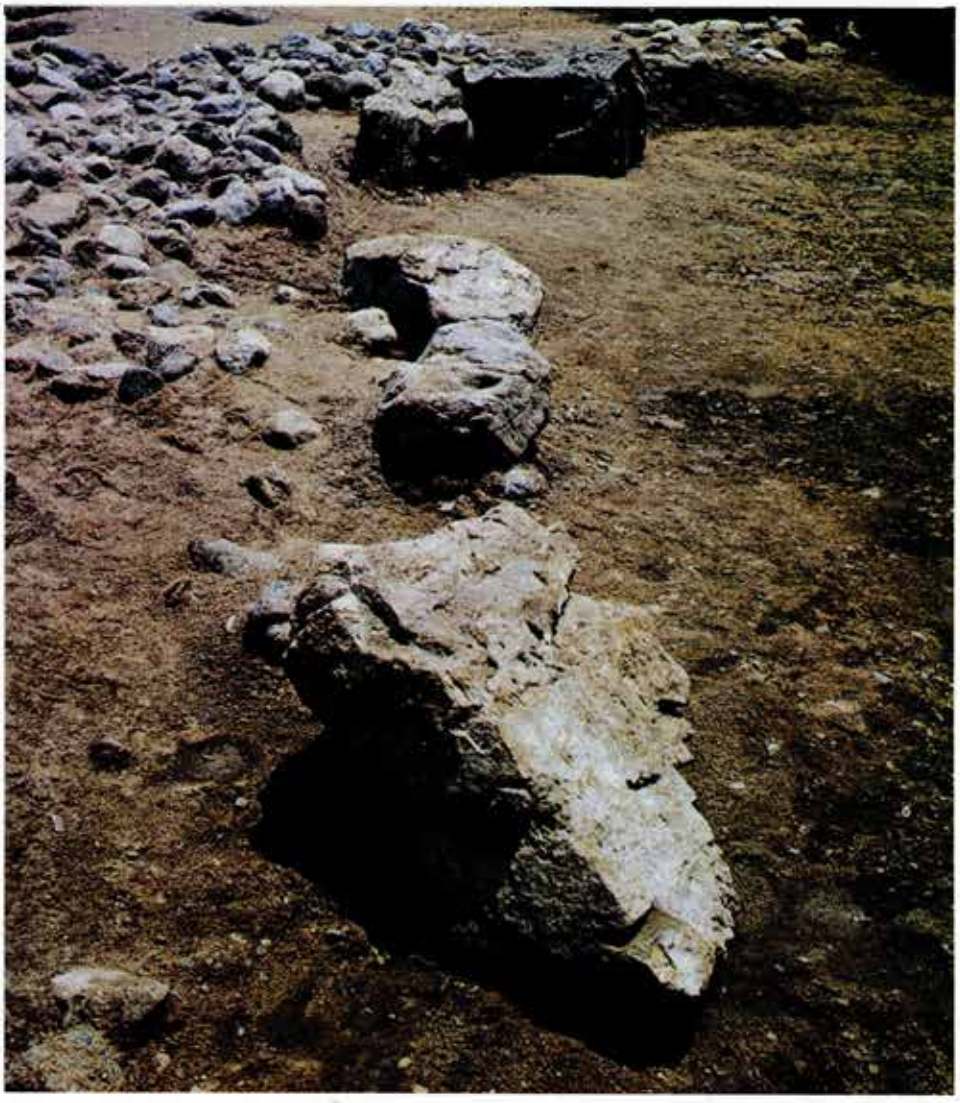
凡　例

1. 遺構には一連番号を付し，その前にSA：築地・柵・土塁，SB：建物，SC：廊，SD：溝，SK：土壙，SX：その他，SZ：不明などの分類記号を標記する。
2. 遺構の寸法数字はm単位である。
3. 実測図基準点は国土方眼座標
   X－14,502.03，Y－17,045.15
4. 高さの基準は海抜高である。
5. PLANの配置図割りは下図の通り。
6. 遺物実測図番号は対校頁の図版番号とする。



木　簡　　SD485出土 右6点
SD650出土 左2点

I　SB470建物と
平塚1号墳
西から

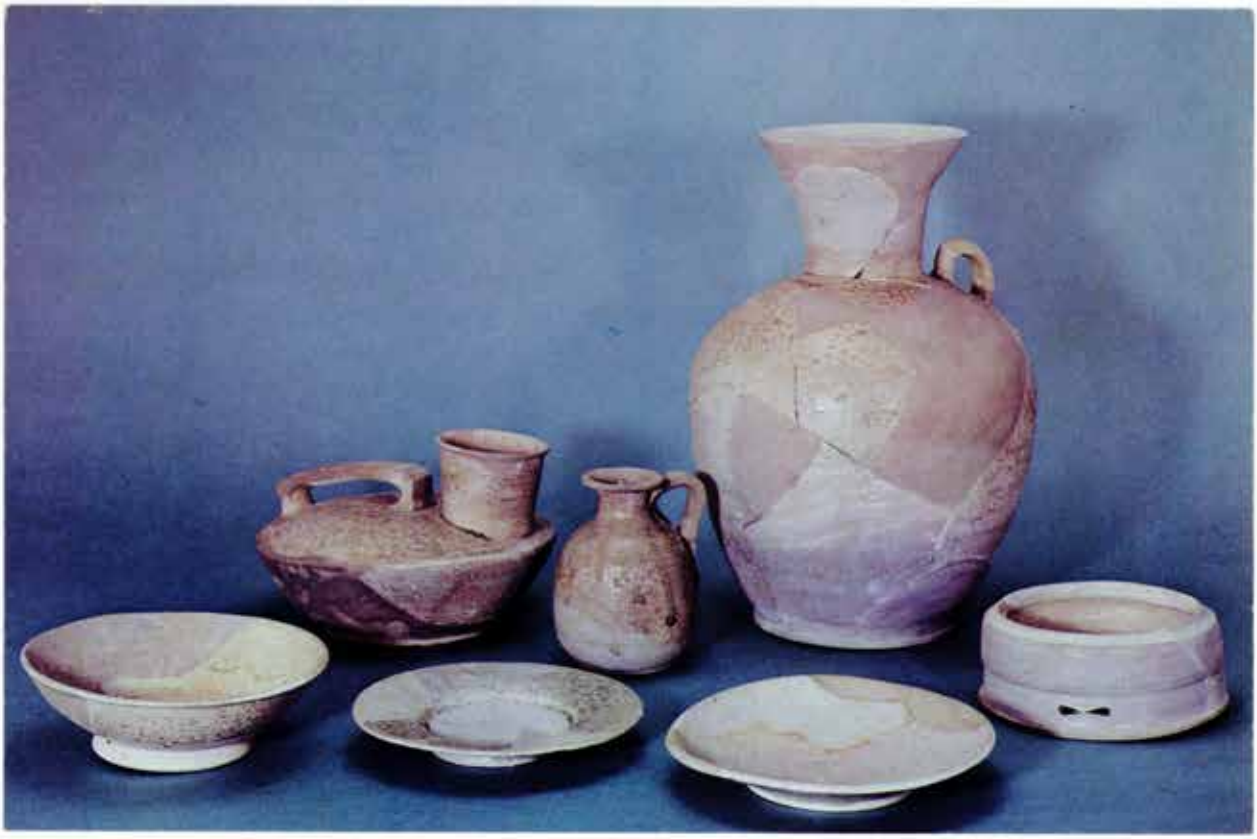


2　SG520園池
西から

1　施釉陶と磁器　　SD485出土 三彩陶　左2点
SD734出土 二彩陶　左上2点
SD650出土 白磁・青磁・緑釉陶

2　緑釉陶と青磁　　SD650出土　青　磁　左2点

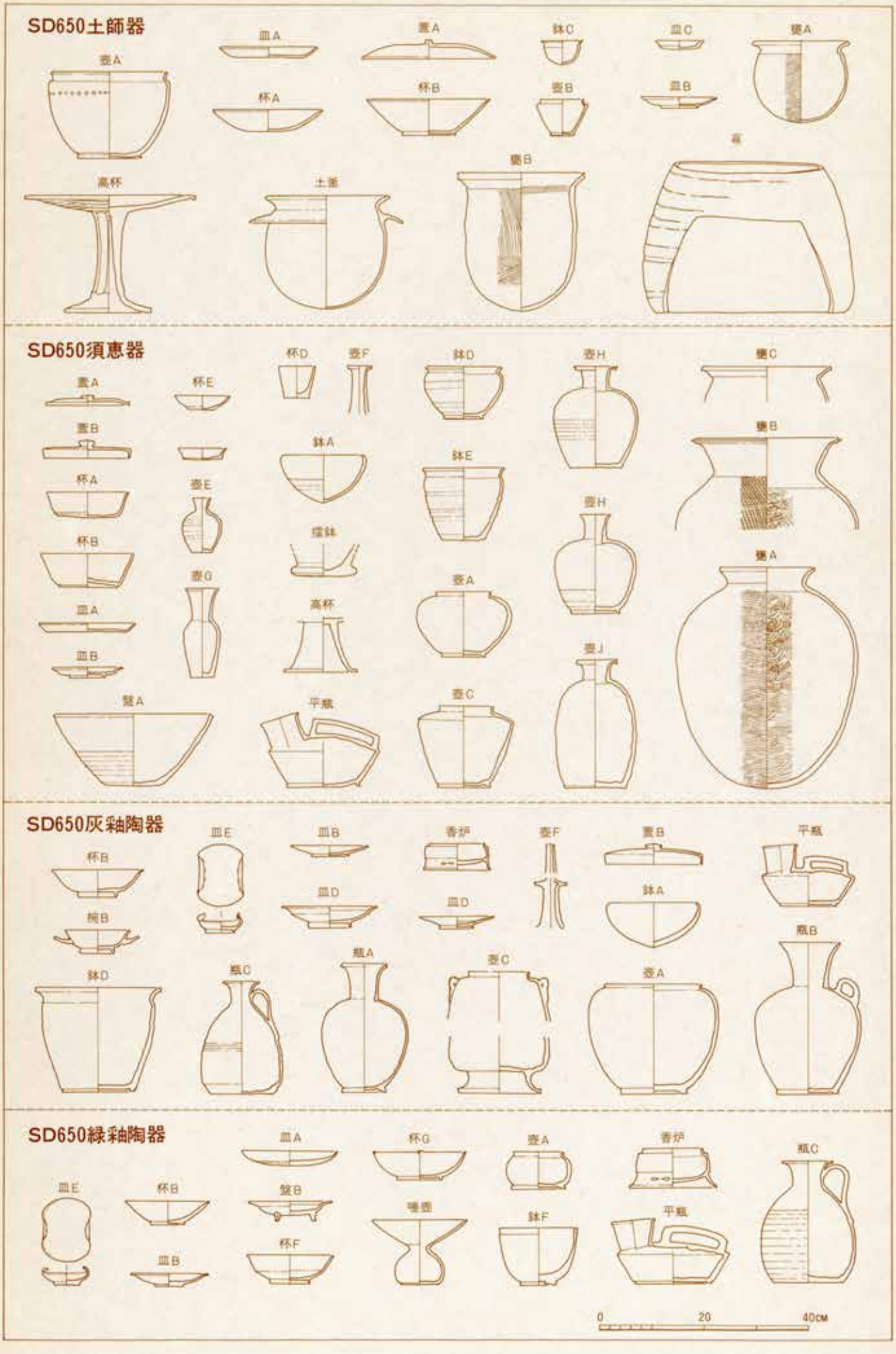
1　漆　器　　SD650出土



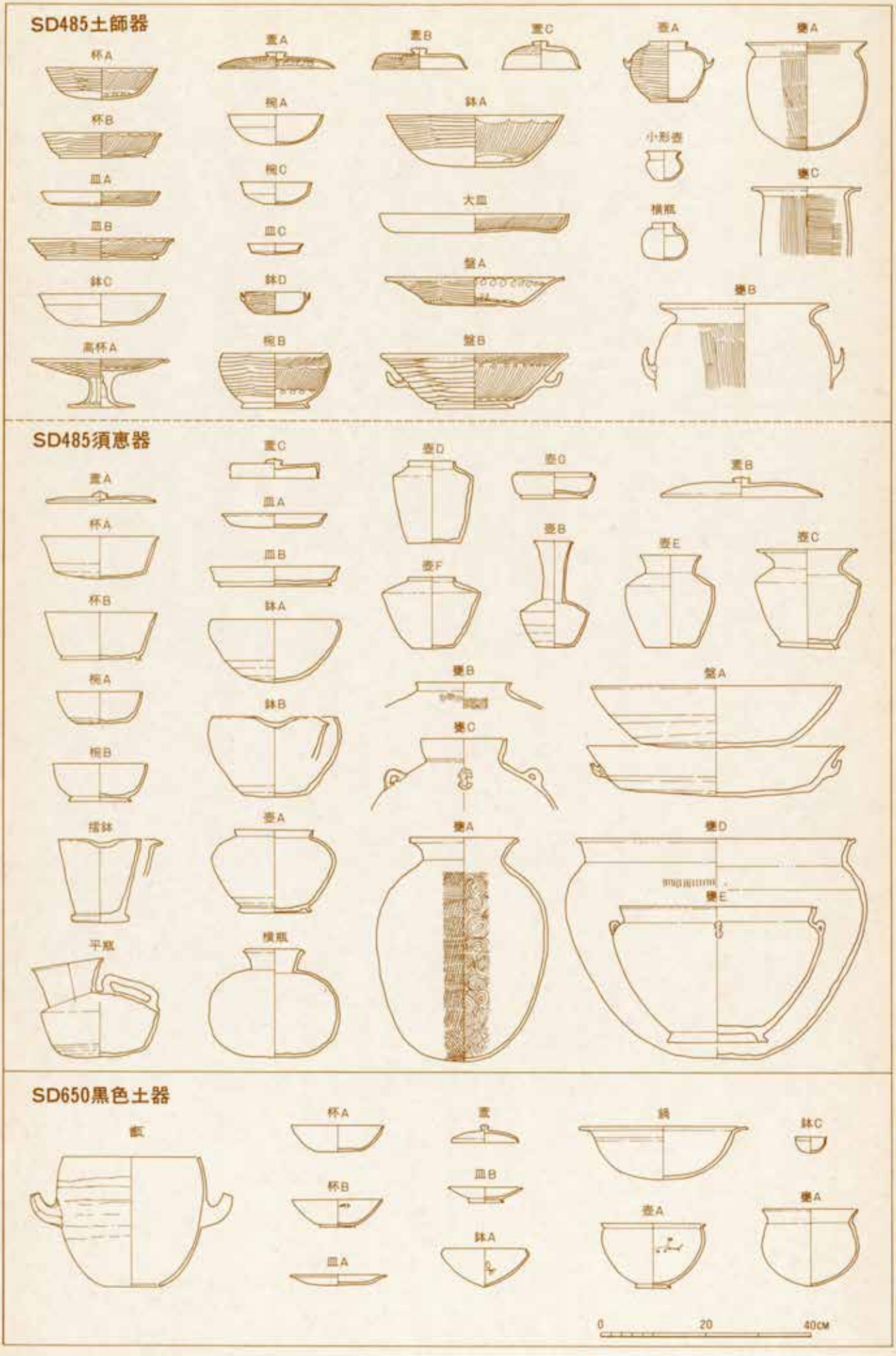
2　灰　釉　陶　　SD650出土

人　形　SD650出土

6AFB区土器器種表



6AFB区土器器種表


SD485土師器
杯A
杯B
皿A
皿B
鉢C
高杯A
蓋A
椀A
椀C
皿C
鉢D
椀B
蓋B
蓋C
鉢A
大皿
盤A
盤B
壺A
小形壺
横瓶
甕A
甕C
甕B
SD485須恵器
蓋A
杯A
杯B
椀A
椀B
擂鉢
平瓶
蓋C
皿A
皿B
鉢A
鉢B
壺A
横瓶
壺D
壺G
壺F
蓋B
甕B
甕C
壺E
壺C
盤A
甕D
甕E
SD650黒色土器
甑
杯A
杯B
皿A
蓋
皿B
鉢A
鍋
壺A
鉢C
甕A
0
20
40cm

PLAN

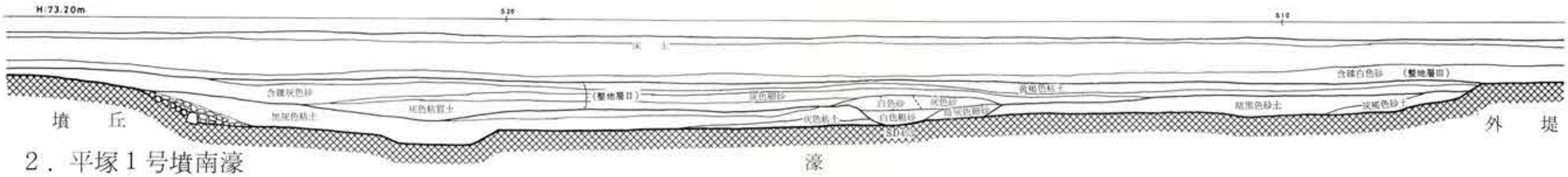
平城京左京一条三坊付近地形図

A-1

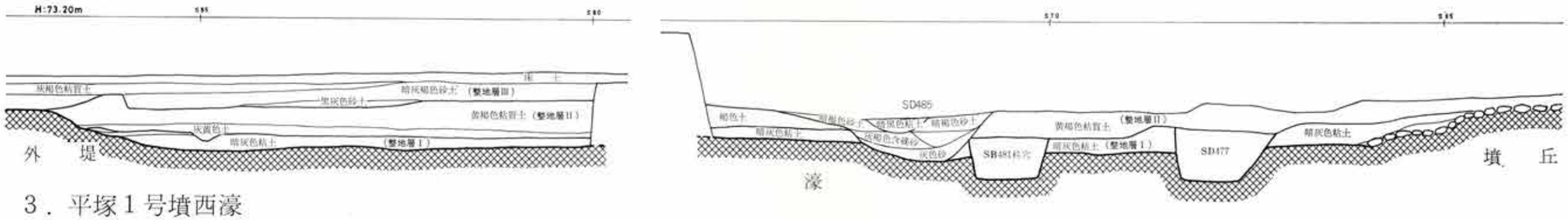
1 : 5000

0 400m

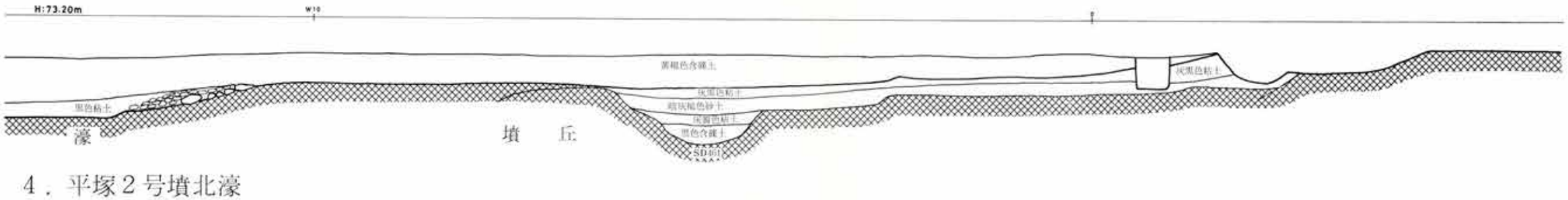
1．平塚１号墳北濠



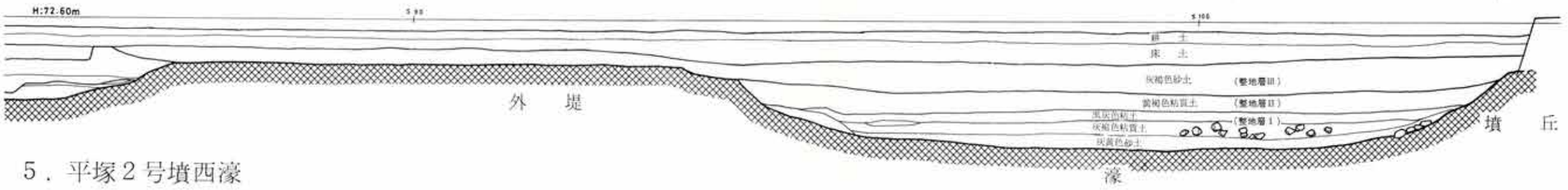
2．平塚１号墳南濠



3．平塚１号墳西濠



4．平塚２号墳北濠



5．平塚２号墳西濠

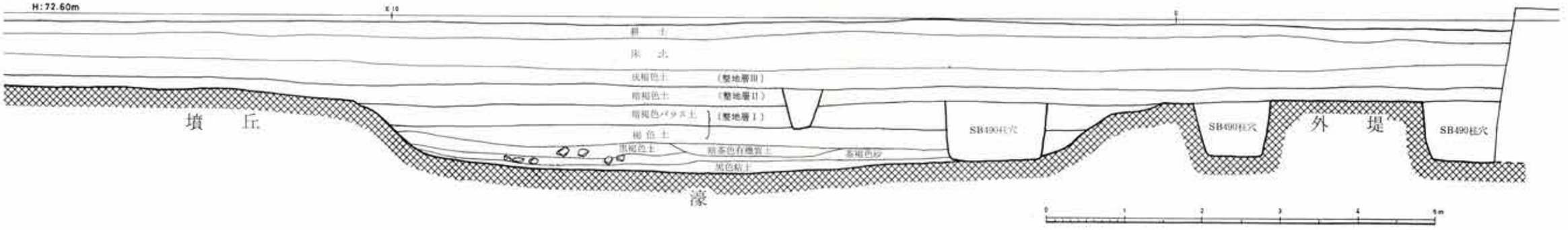
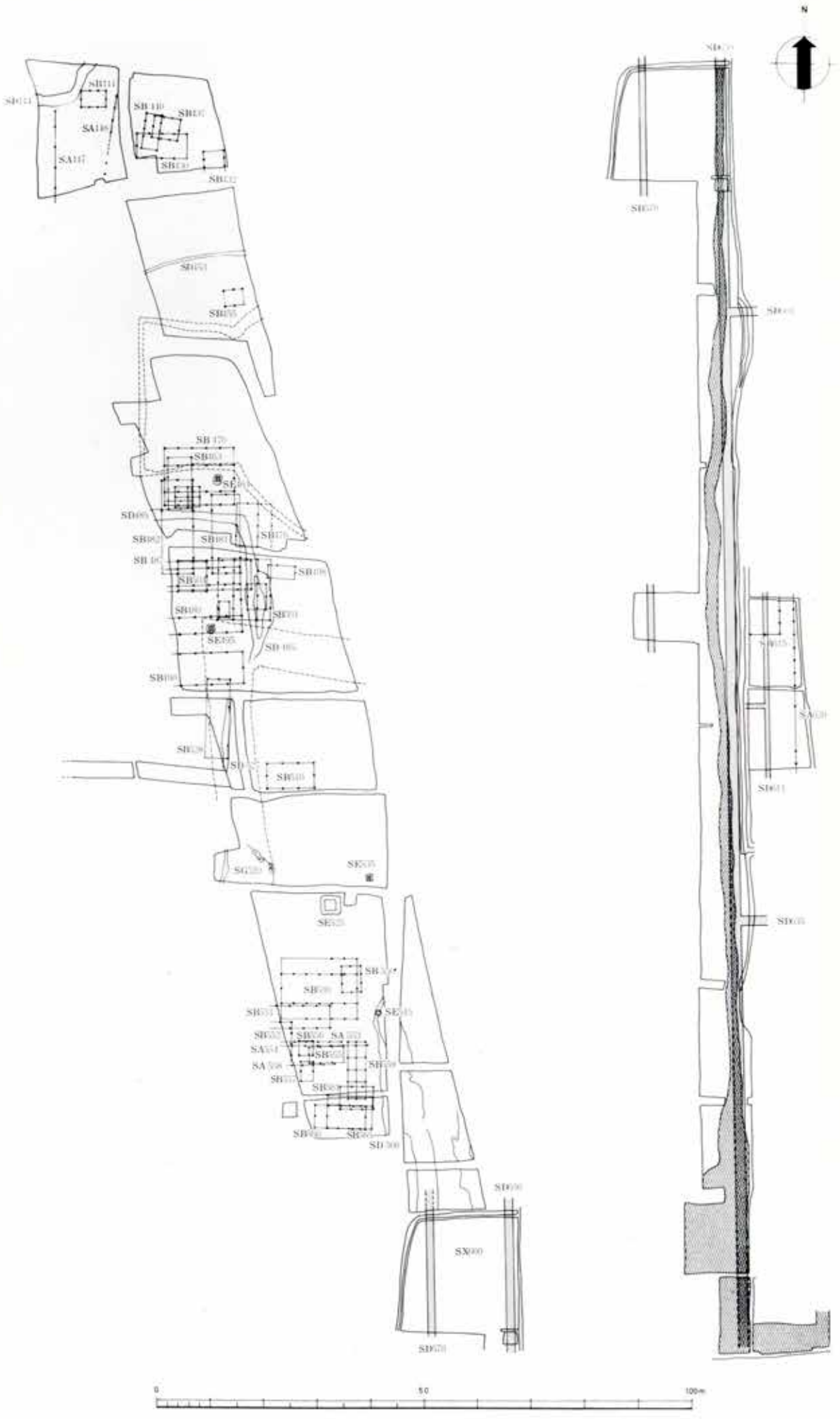
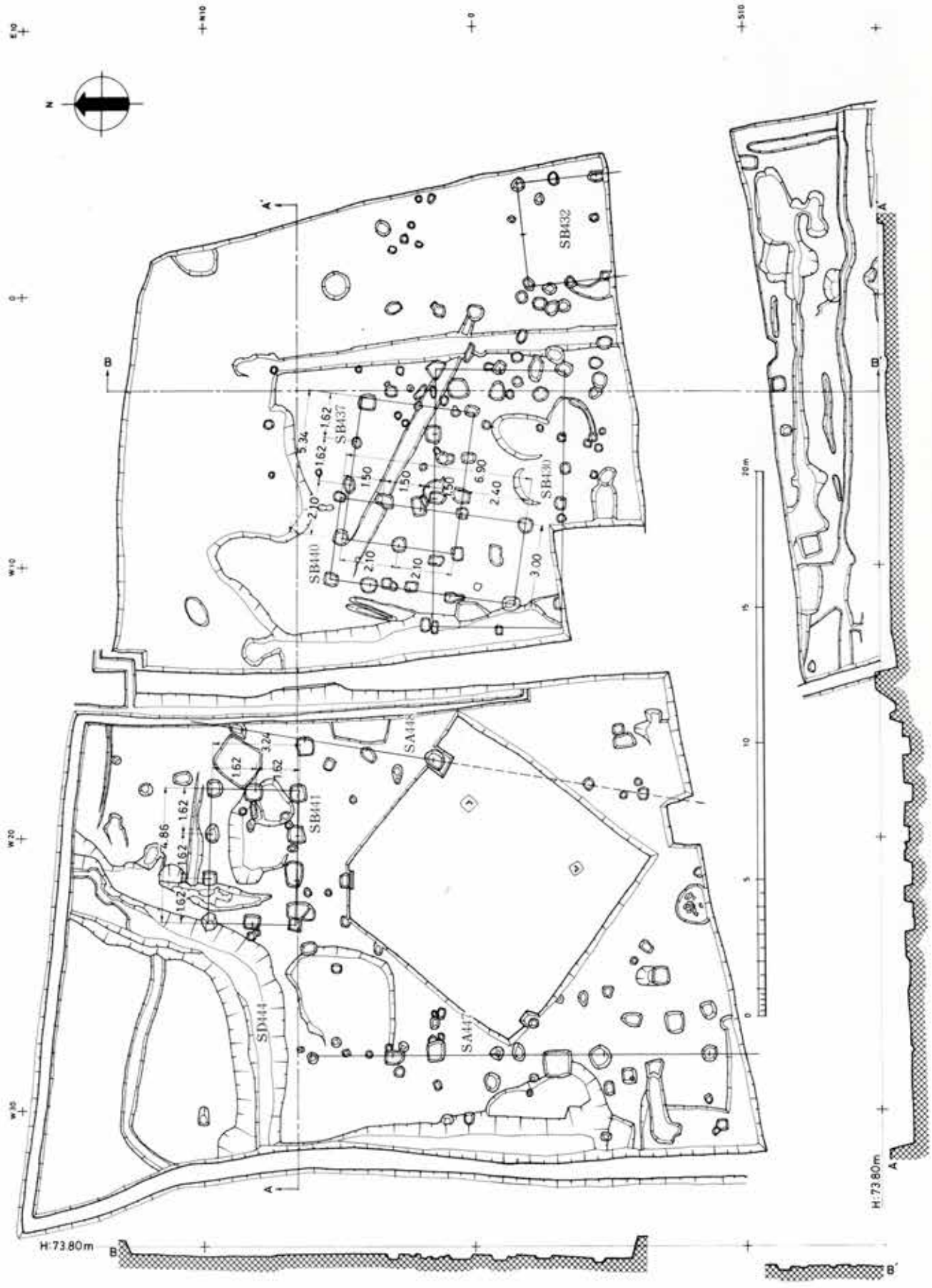
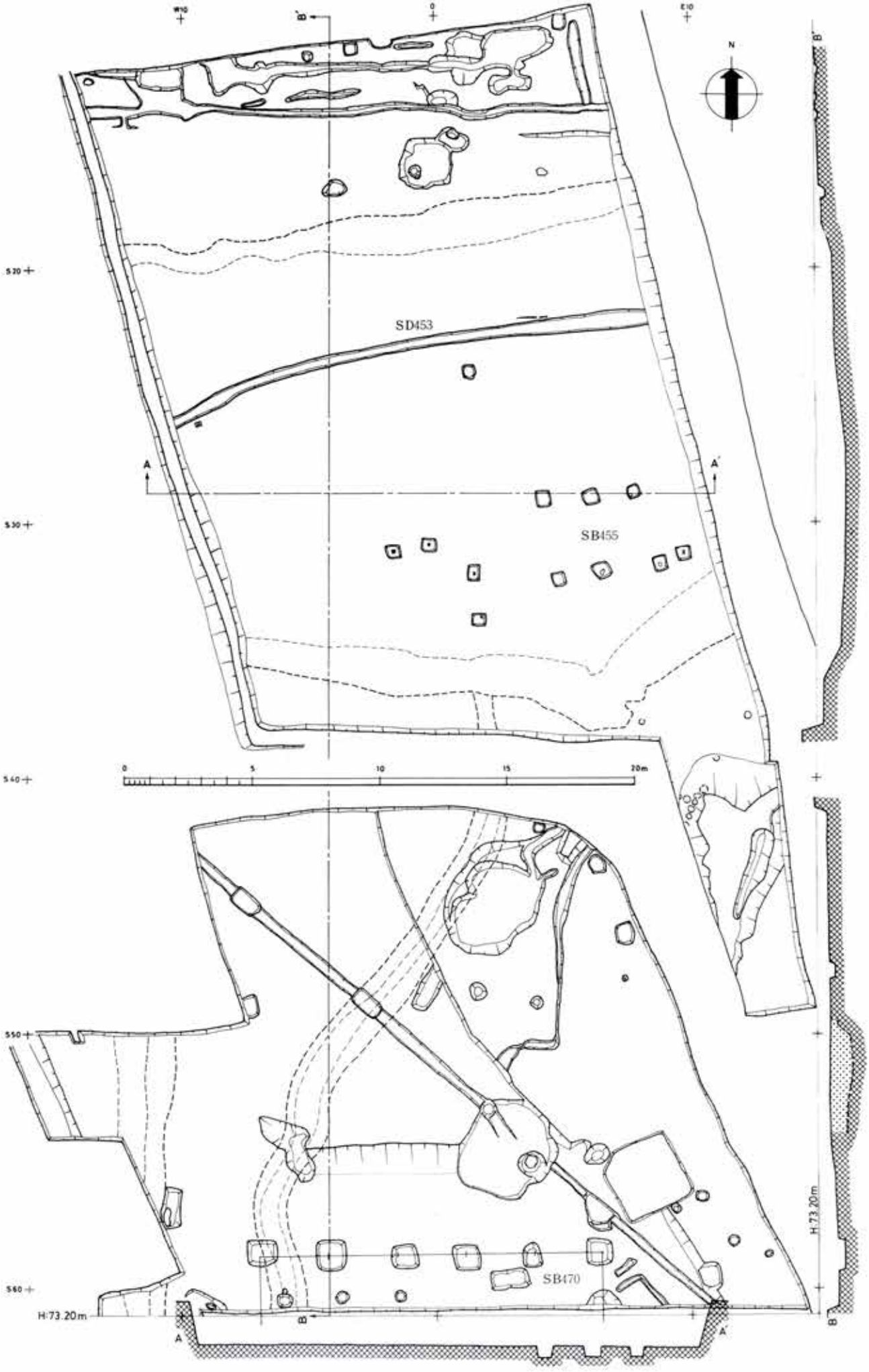


fig.5　平塚１・２号墳整地土層図

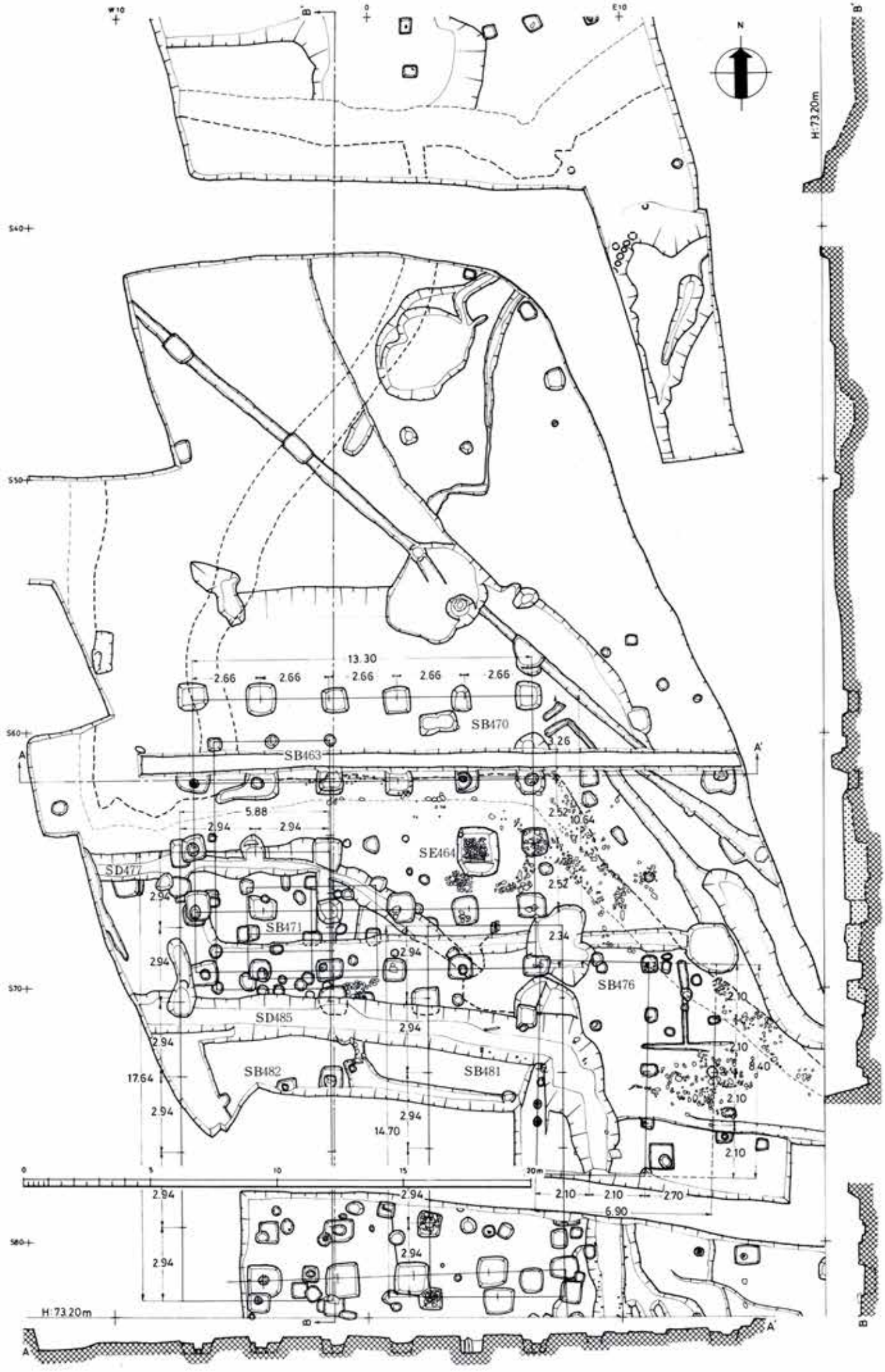

N
SB111
SB110
SB112
SA116
SA117
SB113
SB114
SB115
SB116
SB117
SB118
SB119
SB120
SB121
SB122
SB123
SB124
SB125
SB126
SB127
SB128
SB129
SB130
SB131
SB132
SB133
SB134
SB135
SB136
SB137
SB138
SB139
SB140
SB141
SB142
SB143
SB144
SB145
SB146
SB147
SB148
SB149
SB150
SB151
SB152


SB432
SB437
SB439
SB440
SB441
SA448
SA447
SD444
H:73.80m
H:73.80m


SD453
SB455
SB470
N
S20
S30
S40
S50
S60
H:73.20m
0 5 10 15 20m

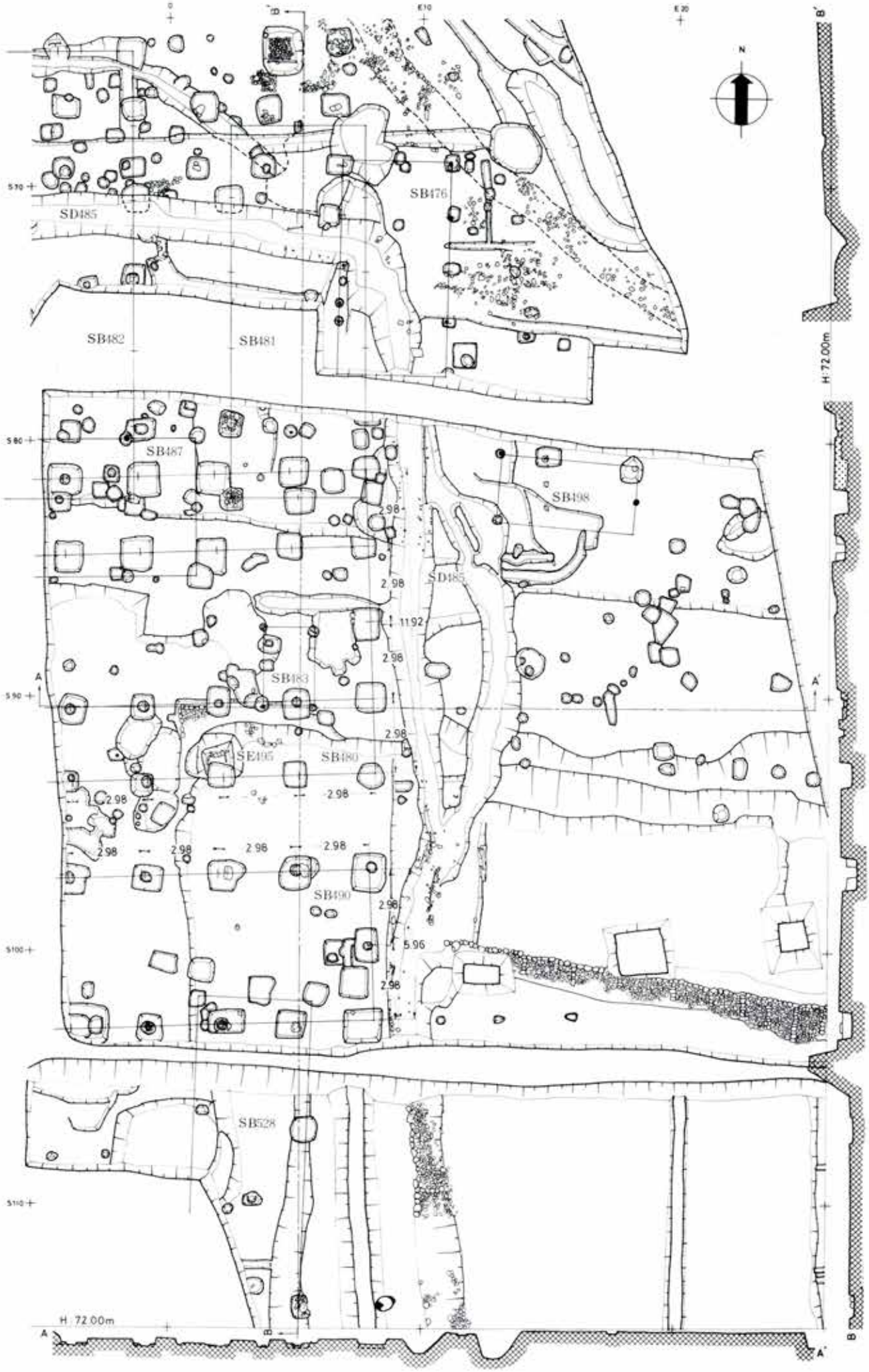
6AFB—I南区実測図

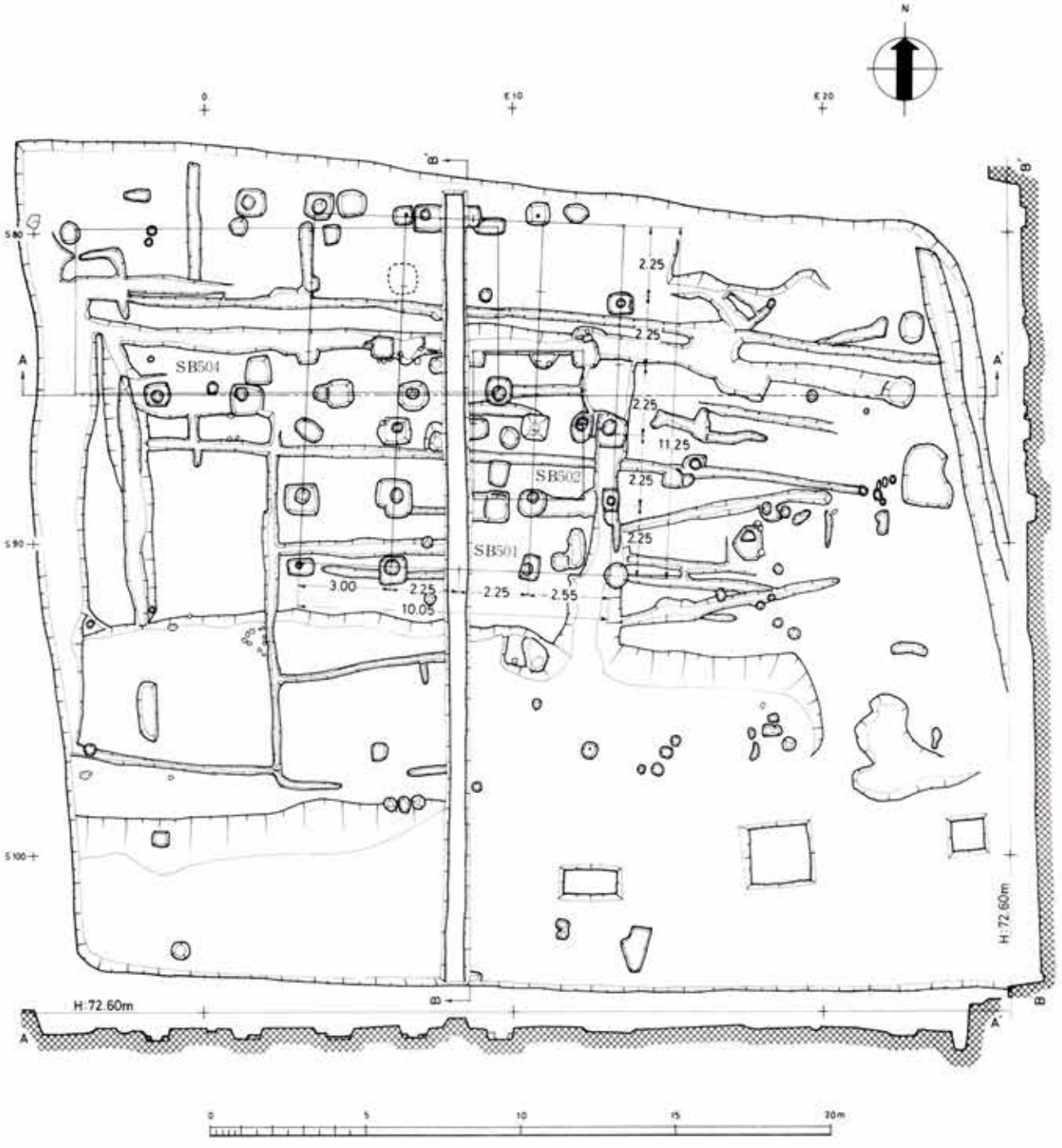
PLAN 5

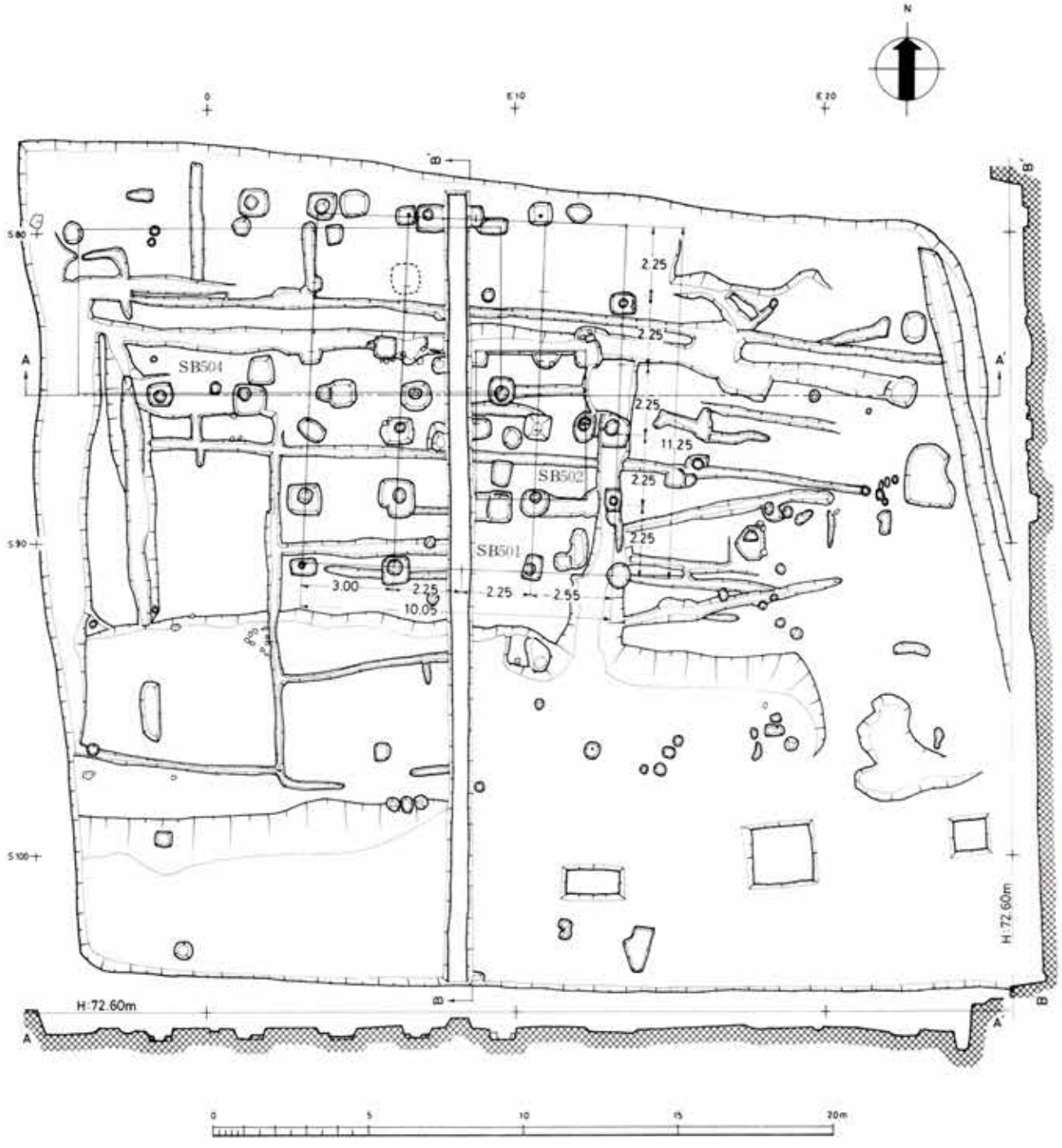


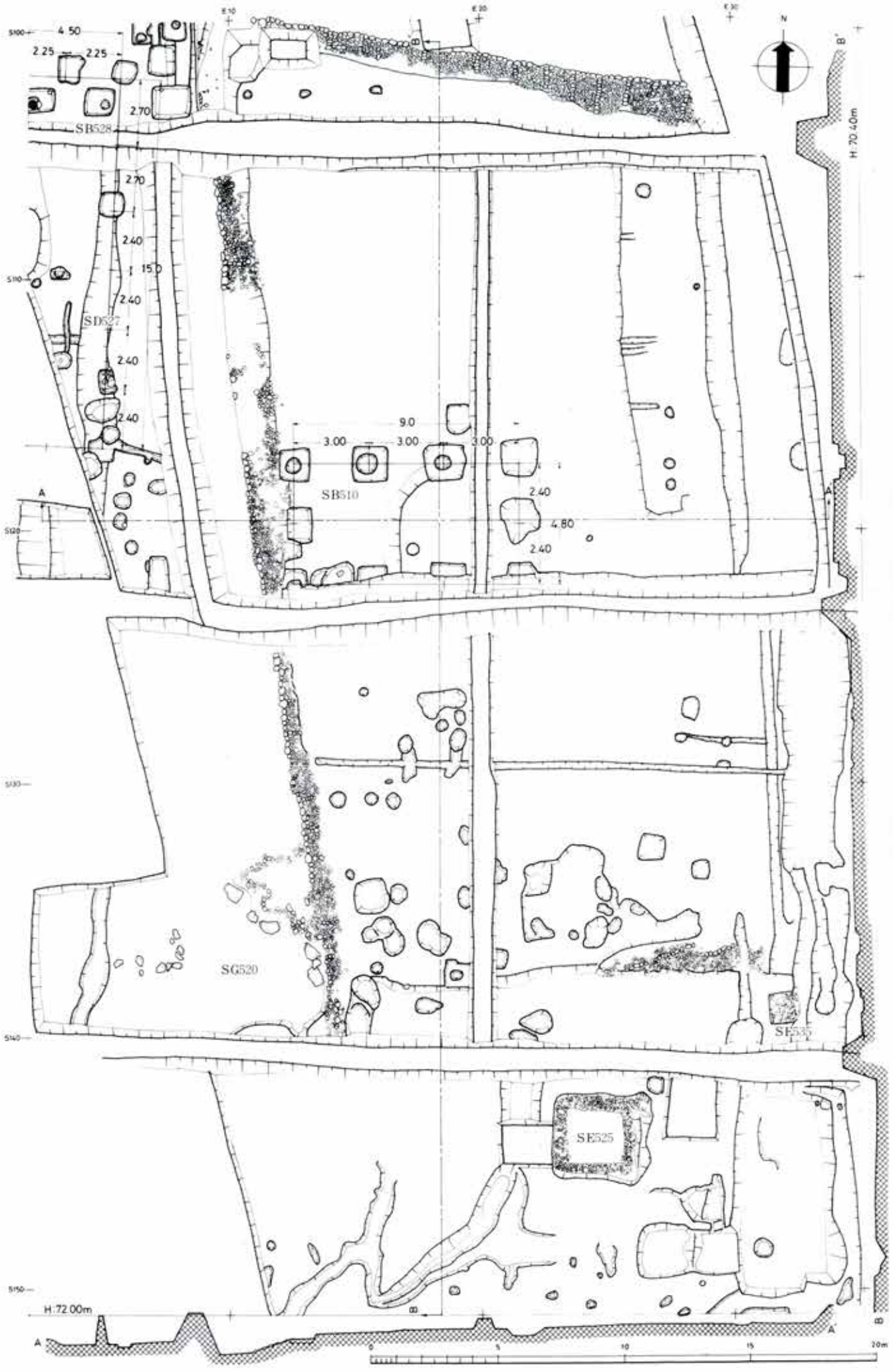
6AFB—H区実測図

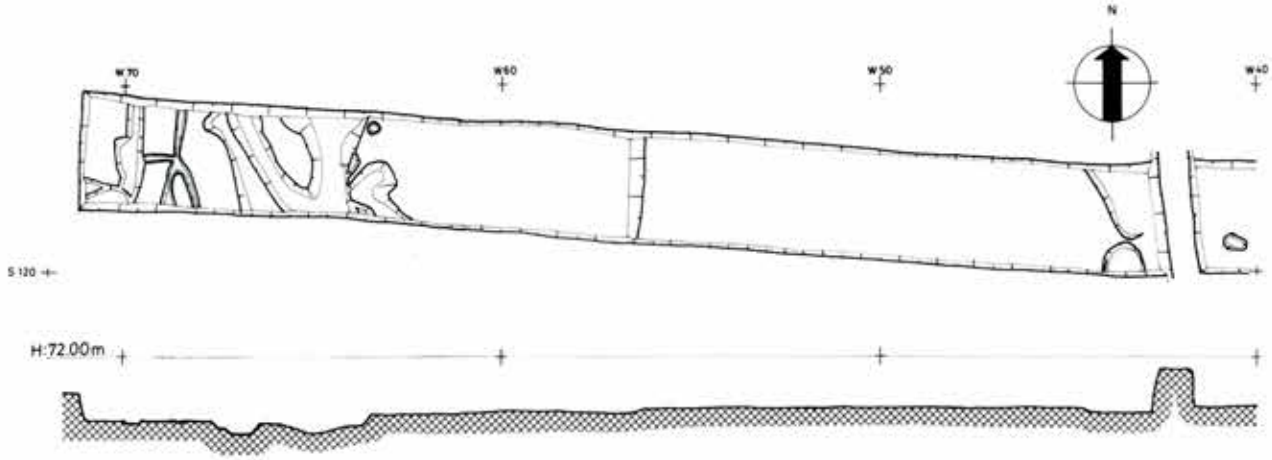
PLAN 6

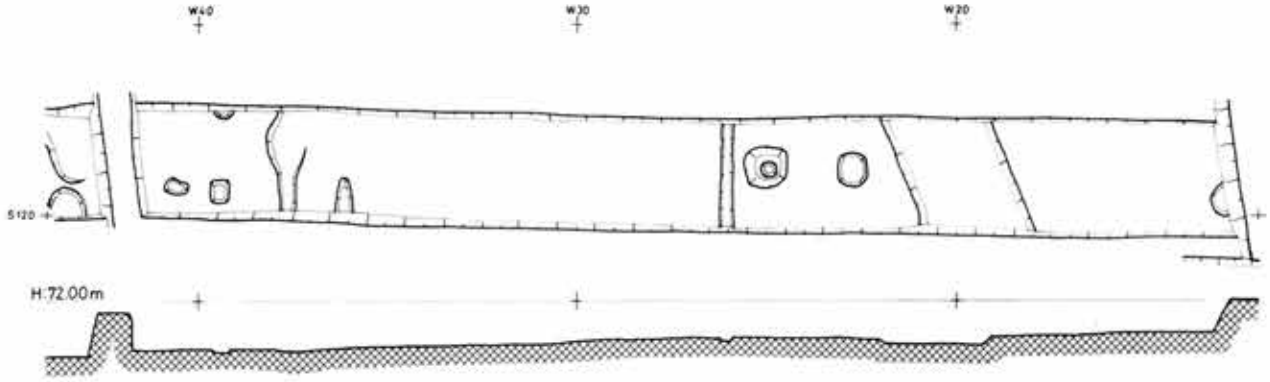


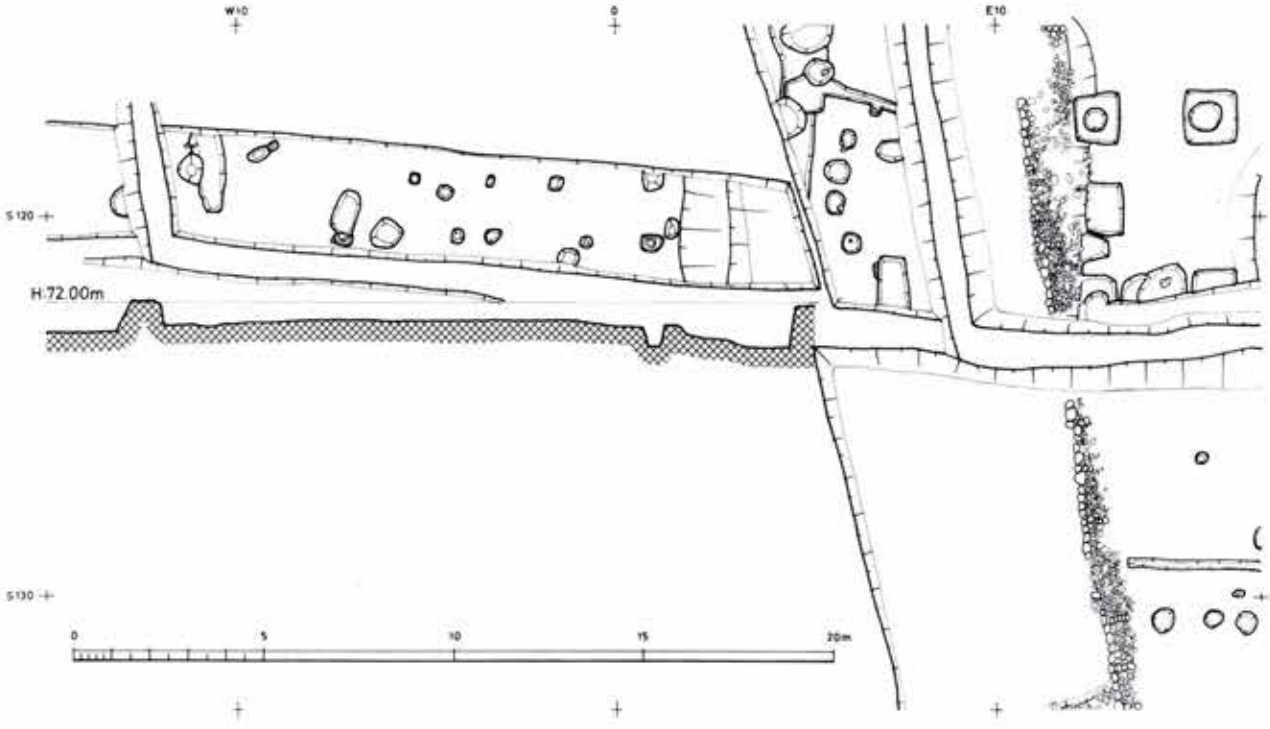

N
E 0
E 10
E 20
S 80
S 90
S 100
A
A'
B
B'
SB504
SB502
SB501
2.25
2.25
2.25
11.25
2.25
2.25
3.00
2.25
10.05
2.25
2.55
H:72.60m
H:72.60m
0
5
10
15
20m

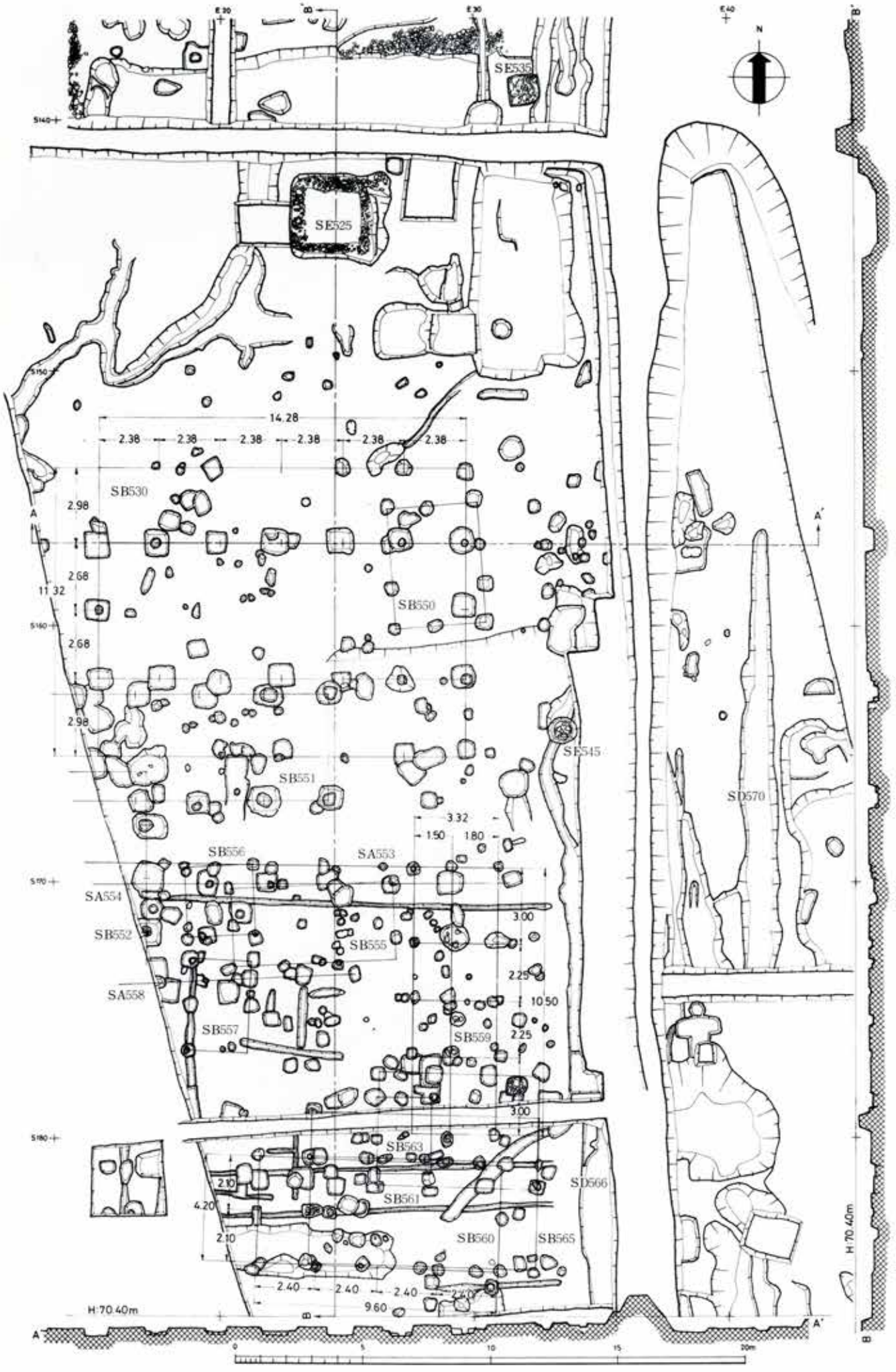

N
0
E10
E20
S80
S90
S100
A
A'
B
B'
SB504
SB502
SB501
2.25
2.25
2.25
11.25
2.25
2.25
3.00
2.25
10.05
2.25
2.55
H:72.60m
H:72.60m
0
5
10
15
20m

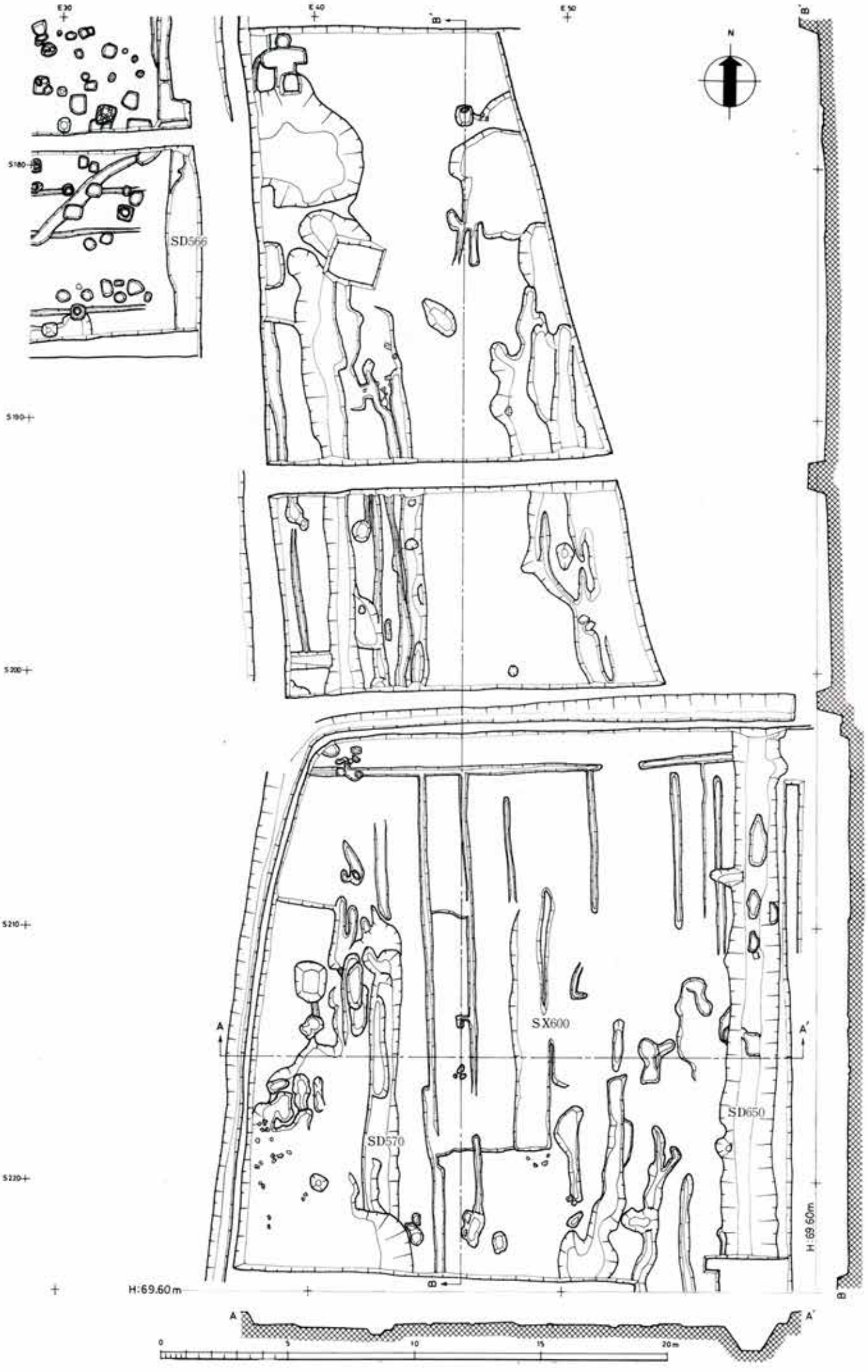

SB528
SD527
SB510
SG520
SE535
SE525
4.50
2.25
2.25
2.70
2.40
1.50
9.0
3.00
4.80
H:70.40m
H:72.00m
N
A
A'
B
B'
0
5
10
15
20m

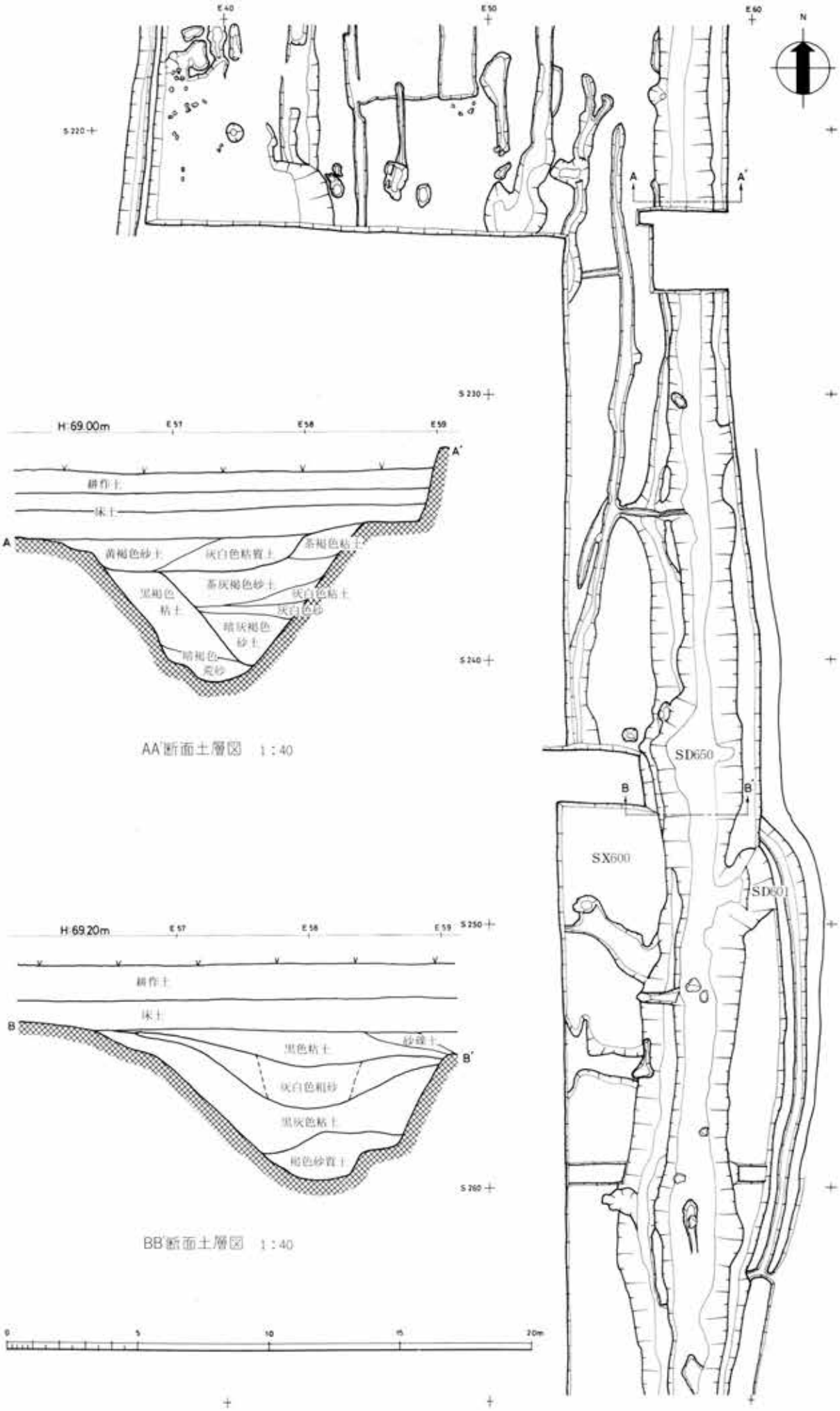

N
W70
W60
W50
W40
S120
H:72.00m


W40
W30
W20
S120
H:72.00m


W10
0
E10
S120
H:72.00m
S130
0
5
10
15
20m


SE535
SE525
SB530
SB550
SE545
SB551
SD570
SB556
SA553
SA554
SB552
SB555
SA558
SB557
SB559
SB563
SD566
SB561
SB560
SB565
14.28
2.38
2.98
2.68
11.32
3.32
1.50
1.80
3.00
2.25
10.50
2.10
4.20
2.40
9.60
H:70.40m
N


E30
E40
E50
B
B'
N
S180
SD566
S190
S200
S210
S220
A
A'
SX600
SD650
SD570
H:69.60m
H:69.60m
0
5
10
15
20m

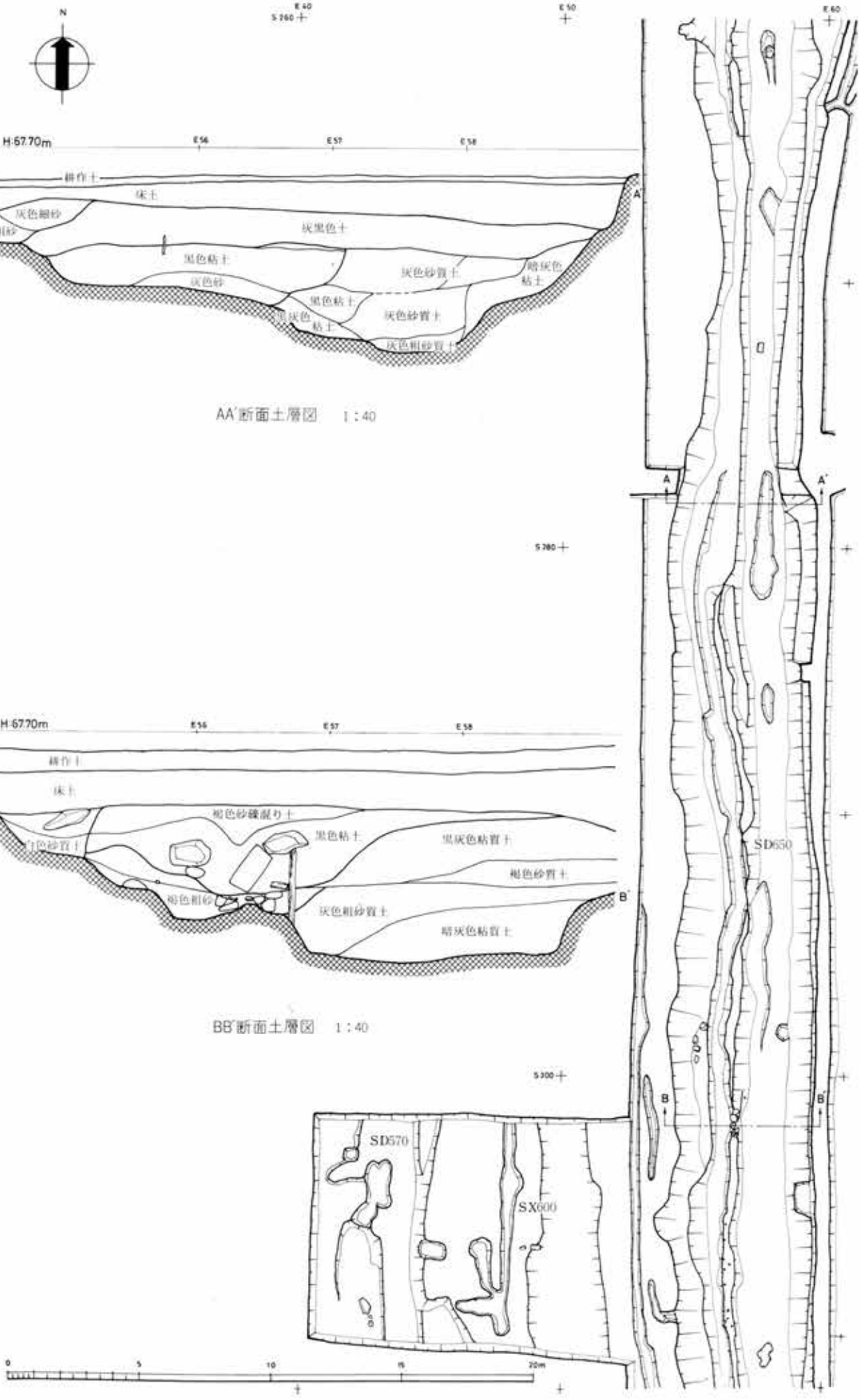


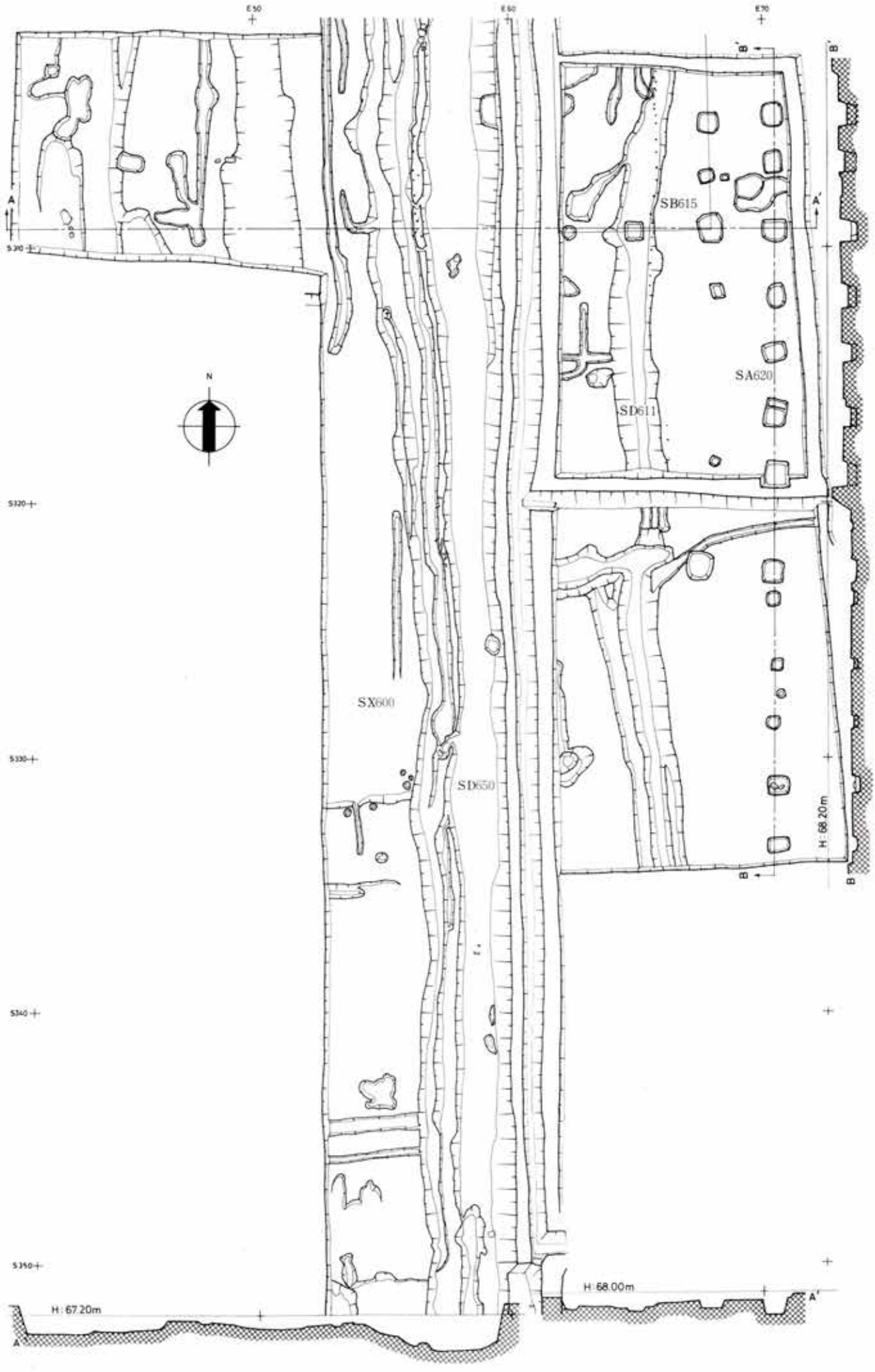
AA'断面土層図 1:40

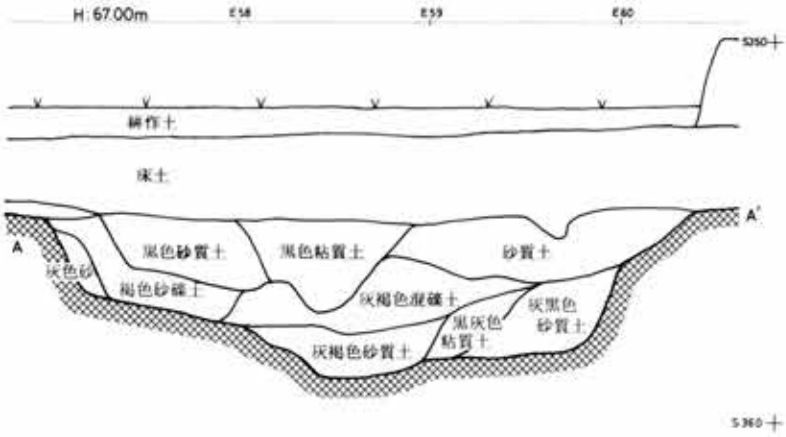
BB'断面土層図 1:40

AA'断面土層図 1:40

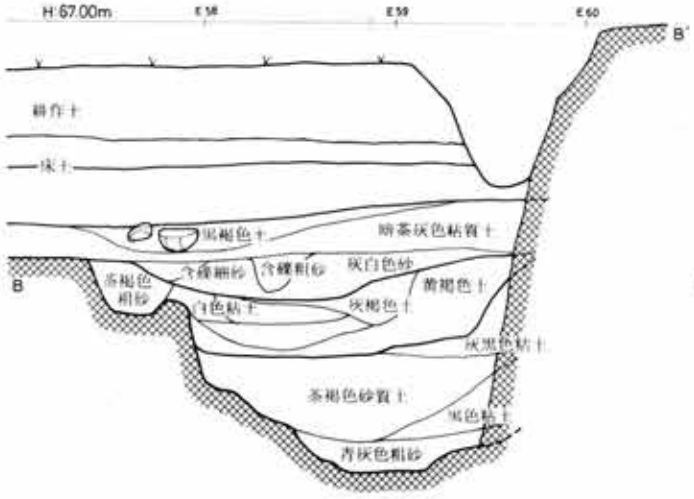
BB'断面土層図 1:40



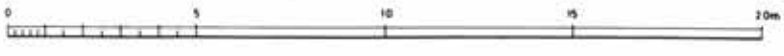

E50
E60
E70
SB615
SA620
SD611
SX600
SD650
N
S320
S330
S340
S350
H:68.20m
H:68.00m
H:67.20m
A
A'
B
B'

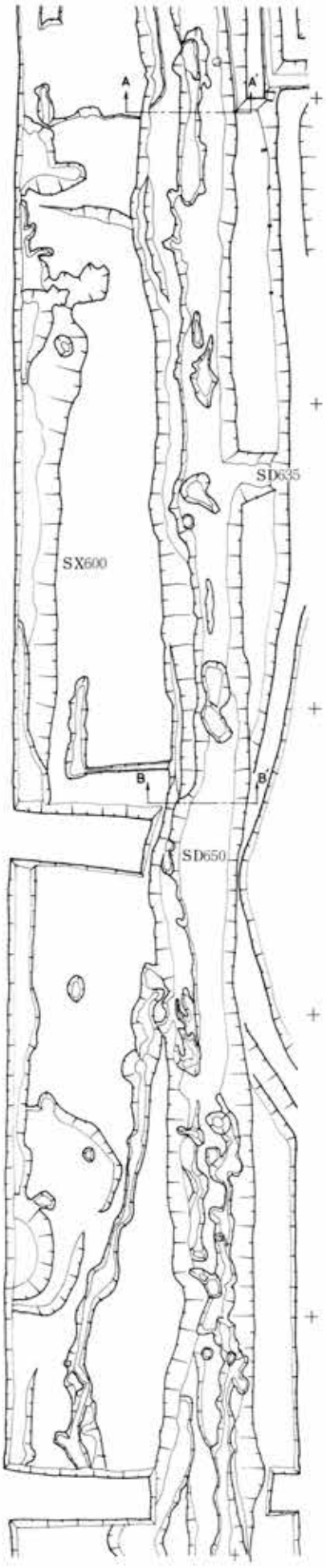


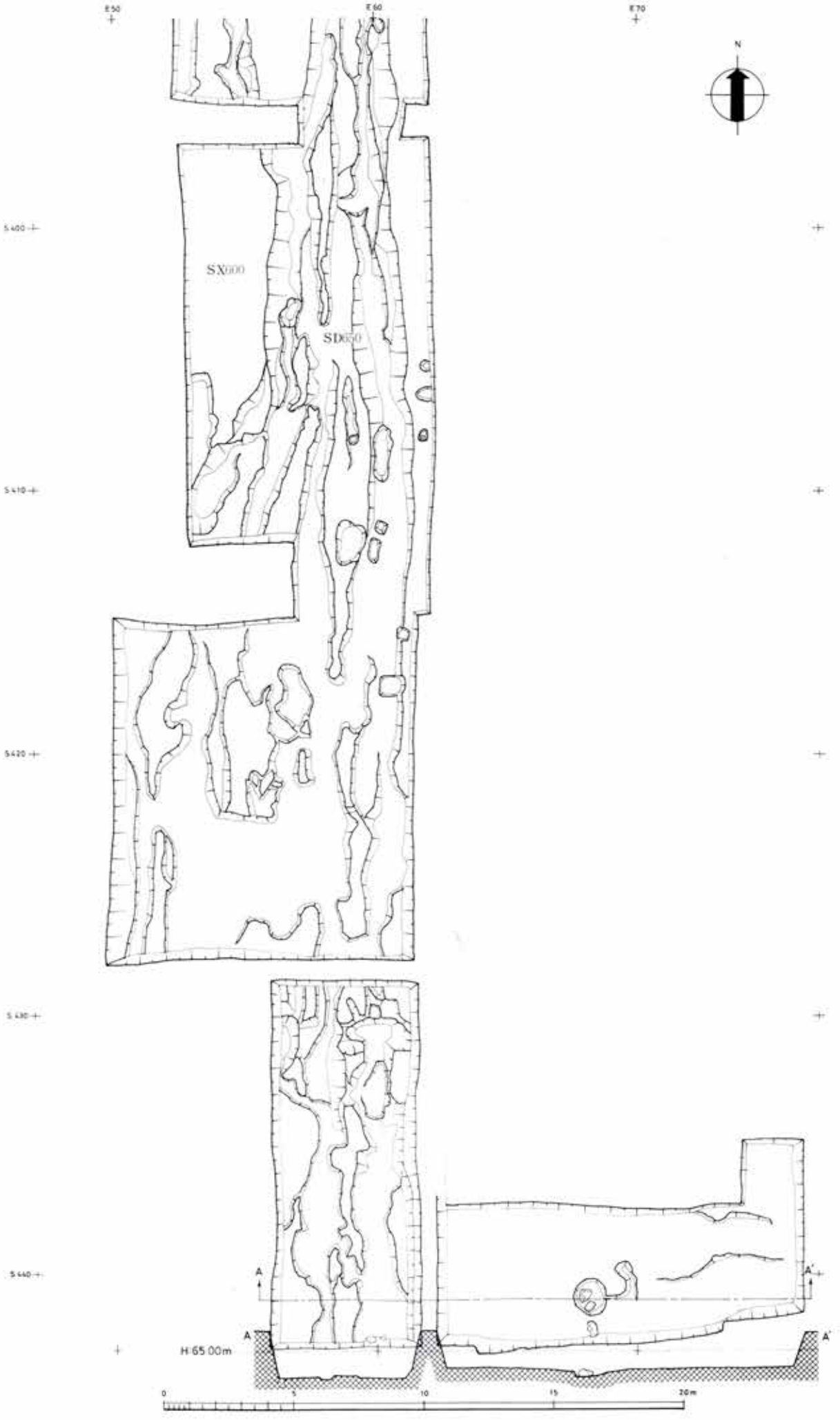
AA'断面土層図　1：40

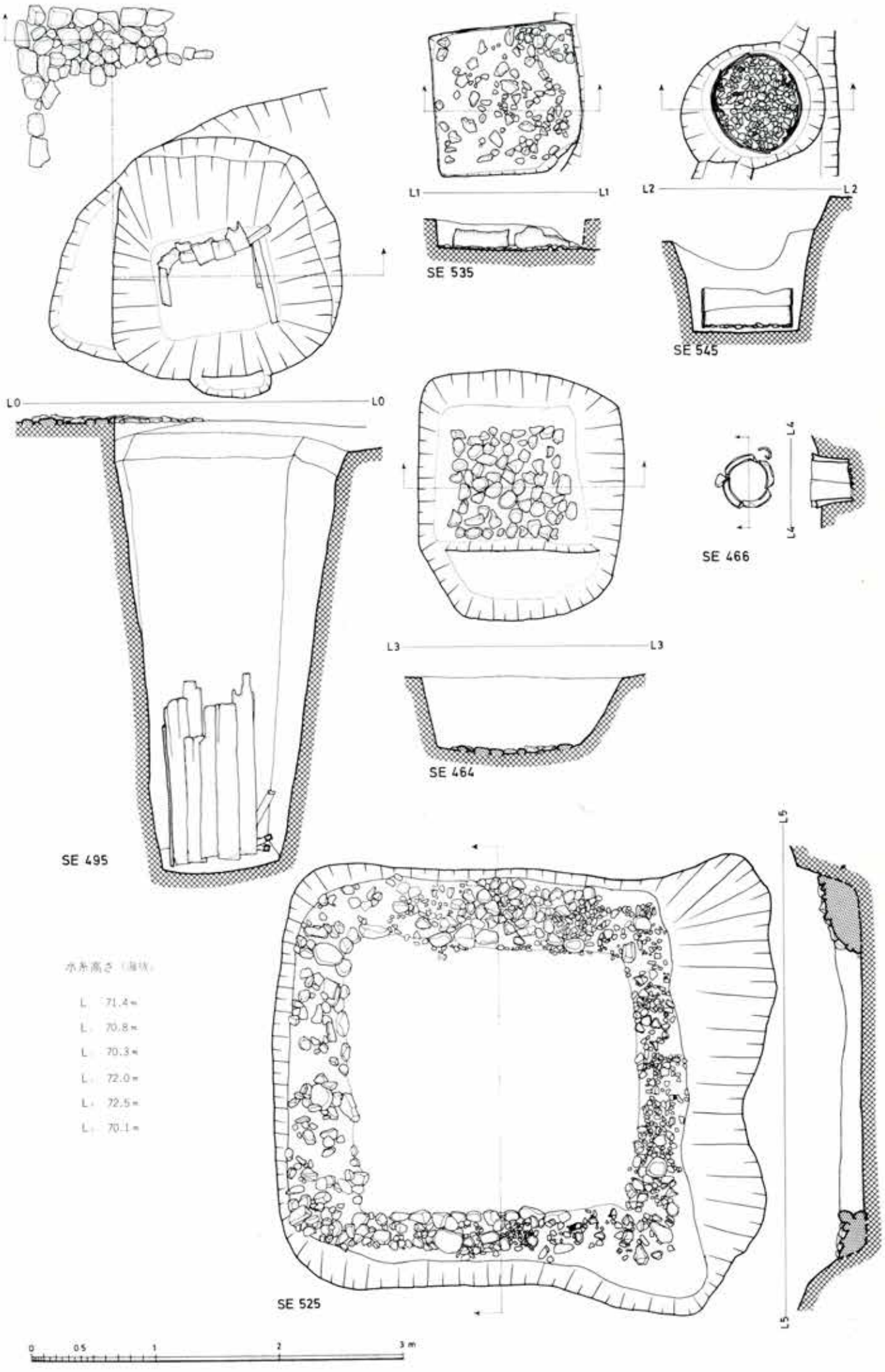


BB'断面土層図　1：40



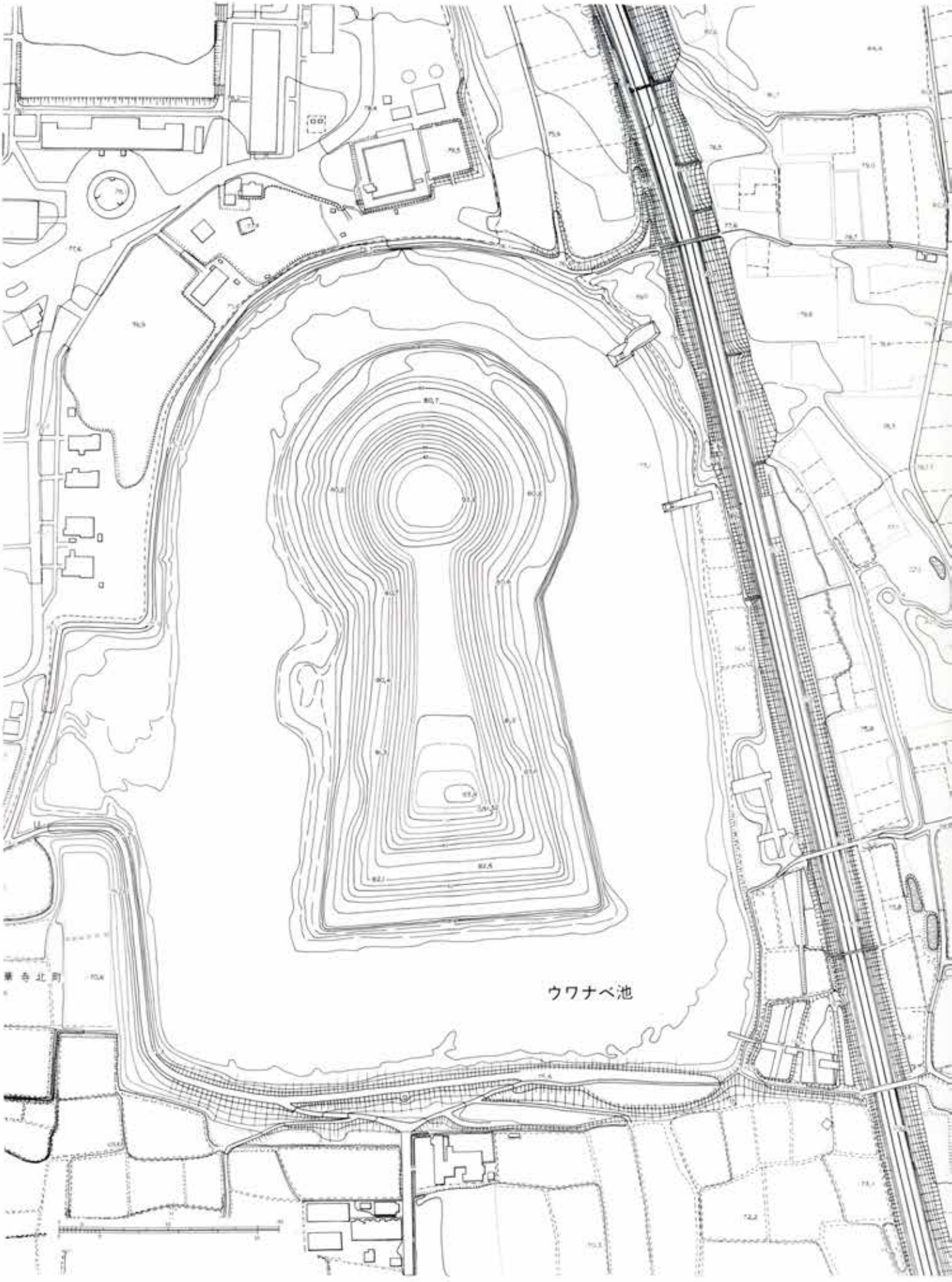


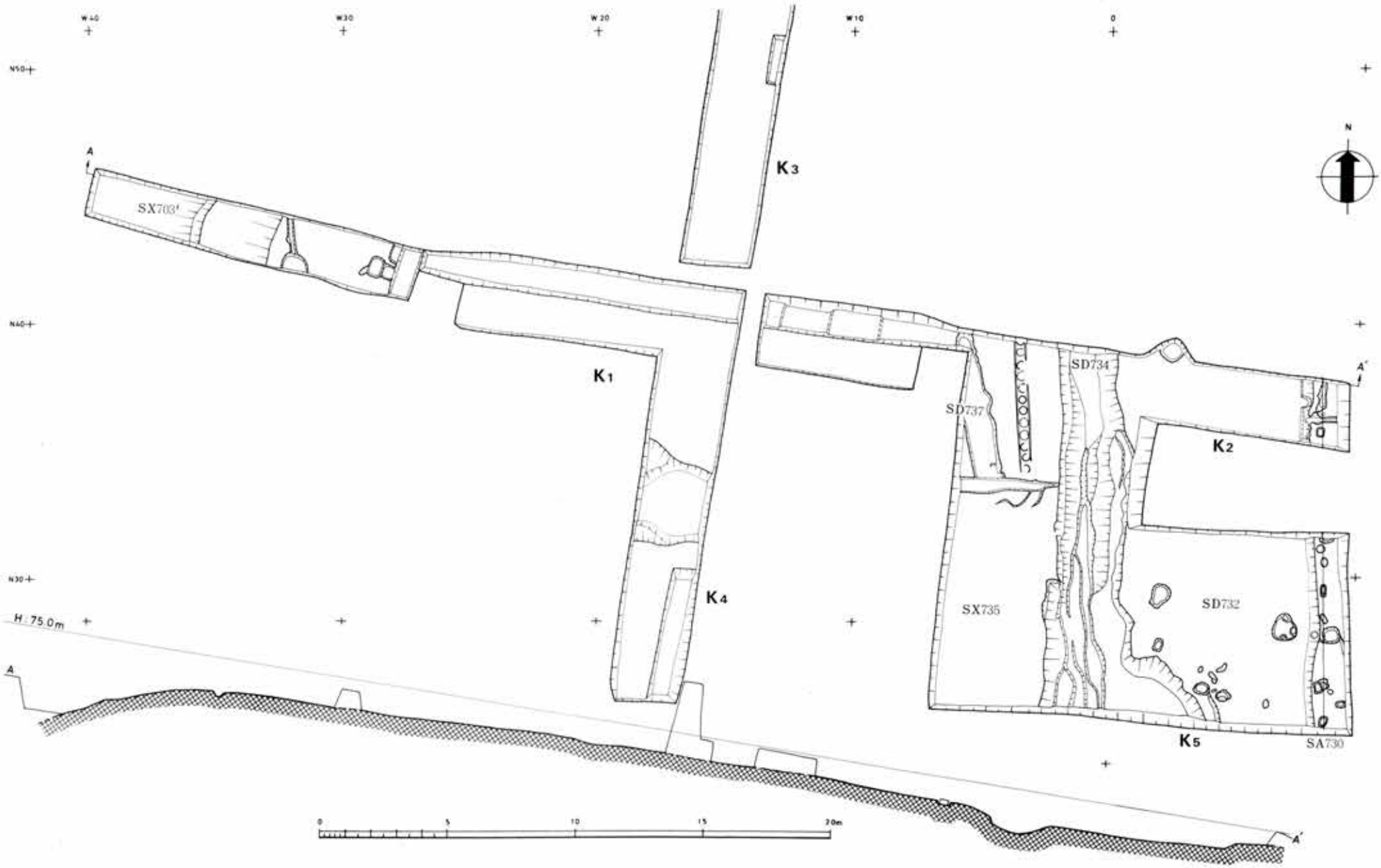

E50
E60
E70
N
S400
S410
S420
S430
S440
SX600
SD650
A
A'
H 65.00m
0
5
10
15
20m

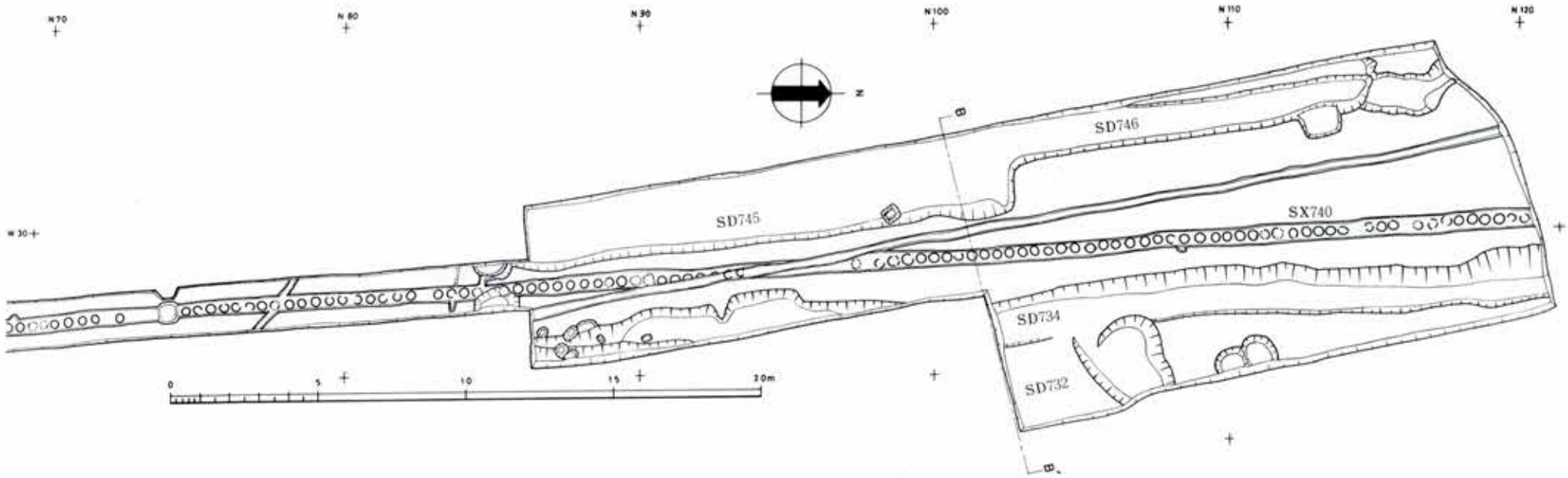

L1
L1
SE 535
L2
L2
SE 545
L0
L0
SE 495
L3
L3
SE 464
L4
L4
SE 466
L5
L5
SE 525
水糸高さ（海抜）
L 71.4m
L 70.8m
L 70.3m
L 72.0m
L 72.5m
L 70.1m
0
0.5
1
2
3m

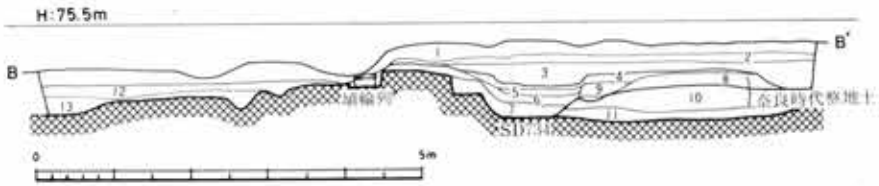
ウワナベ古墳地形図

PLAN 18

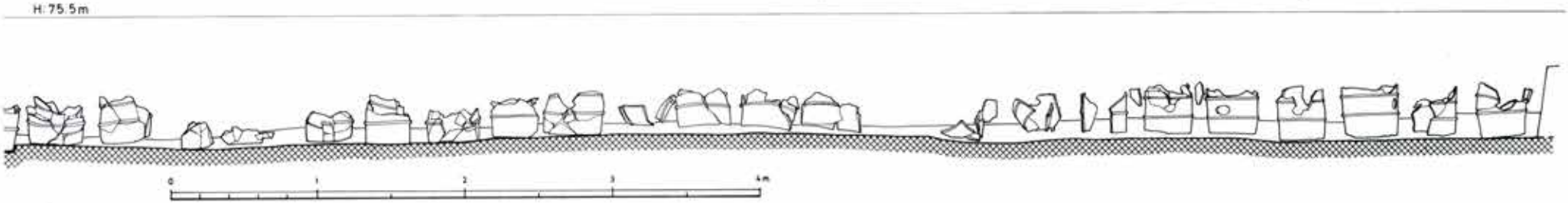


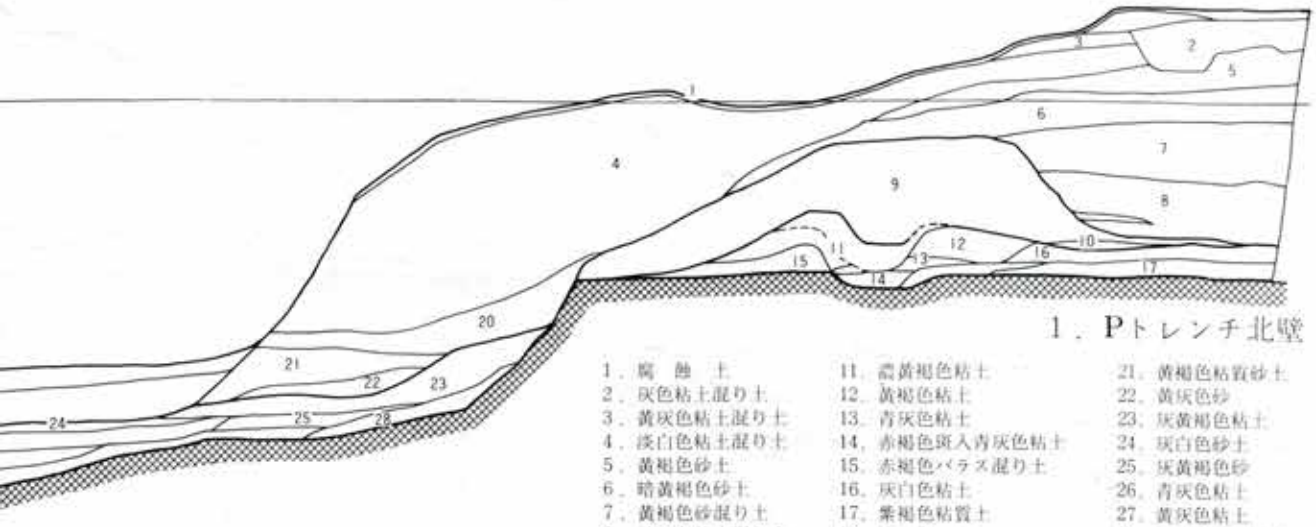

W40
W30
W20
W10
0
N50
N40
N30
N
A
A'
SX703
K3
K1
K4
K2
K5
SD737
SD734
SX735
SD732
SA730
H:75.0m
0
5
10
15
20m





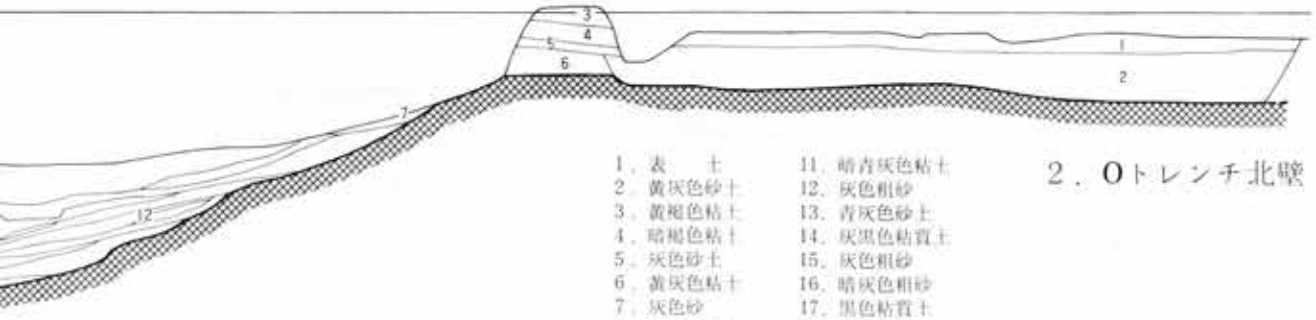
1. 耕　土
2. 床　土
3. 黒色土
4. 黄灰色砂
5. 灰褐色砂礫土
6. 暗灰褐色砂
7. 褐色砂質土
8. 暗褐色木炭混り土
9. 青灰砂
10. 赤褐色粘質土
11. 灰青色土
12. 淡褐色土
13. 灰褐色土





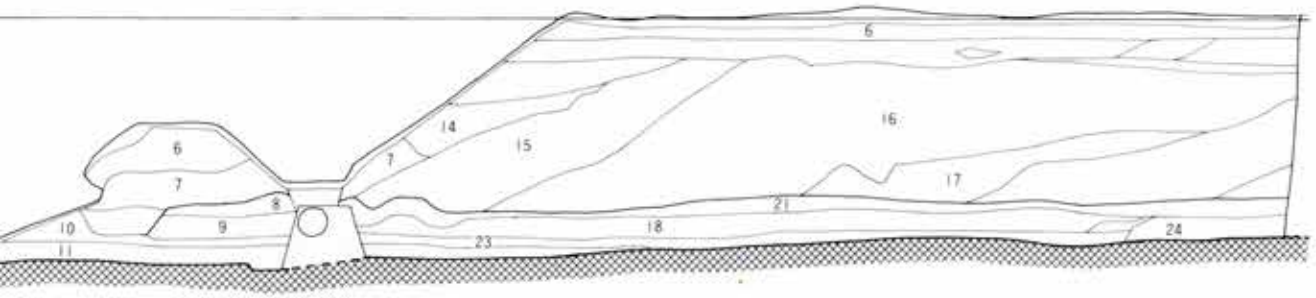
1．Pトレンチ北壁

1．腐　蝕　土
2．灰色粘土混り土
3．黄灰色粘土混り土
4．淡白色粘土混り土
5．黄褐色砂土
6．暗黄褐色砂土
7．黄褐色砂混り土
8．淡灰色粘土混り土
9．暗黄褐色土
10．黄灰色砂土
11．濃黄褐色粘土
12．黄褐色粘土
13．青灰色粘土
14．赤褐色斑入青灰色粘土
15．赤褐色バラス混り土
16．灰白色粘土
17．紫褐色粘質土
18．腐　蝕　土
19．青白色粘土
20．灰色粘土混り黄褐色土
21．黄褐色粘質砂土
22．黄灰色砂
23．灰黄褐色粘土
24．灰白色砂土
25．灰黄褐色砂
26．青灰色粘土
27．黄灰色粘土
28．灰白色バラス土
29．灰白色砂土
30．灰色バラス土



2．Oトレンチ北壁

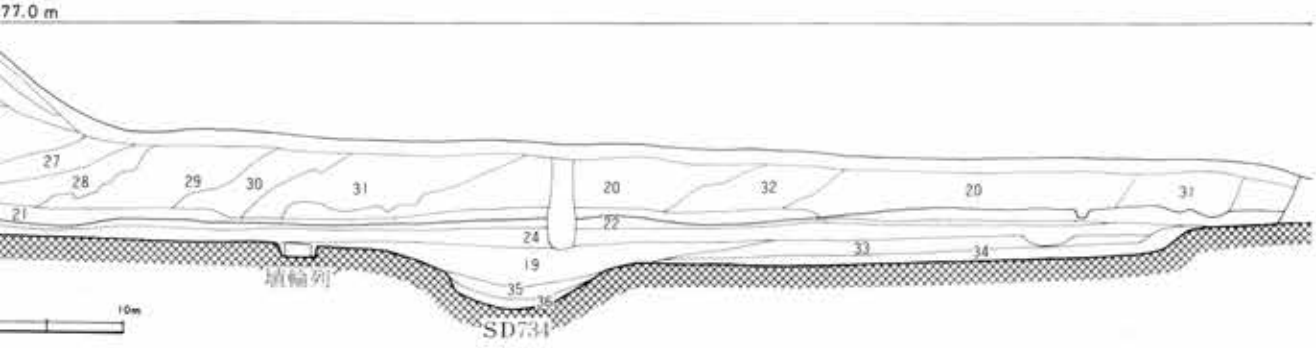
1．表　　土
2．黄灰色砂土
3．黄褐色粘土
4．暗褐色粘土
5．灰色砂土
6．黄灰色粘土
7．灰色砂
8．青緑色粘土
9．青灰色粗砂土
10．濃緑色粘土
11．暗青灰色粘土
12．灰色粗砂
13．青灰色砂土
14．灰黒色粘質土
15．灰色粗砂
16．暗灰色粗砂
17．黒色粘質土
18．灰色粗砂
19．灰色バラス土



3．Kトレンチ北壁

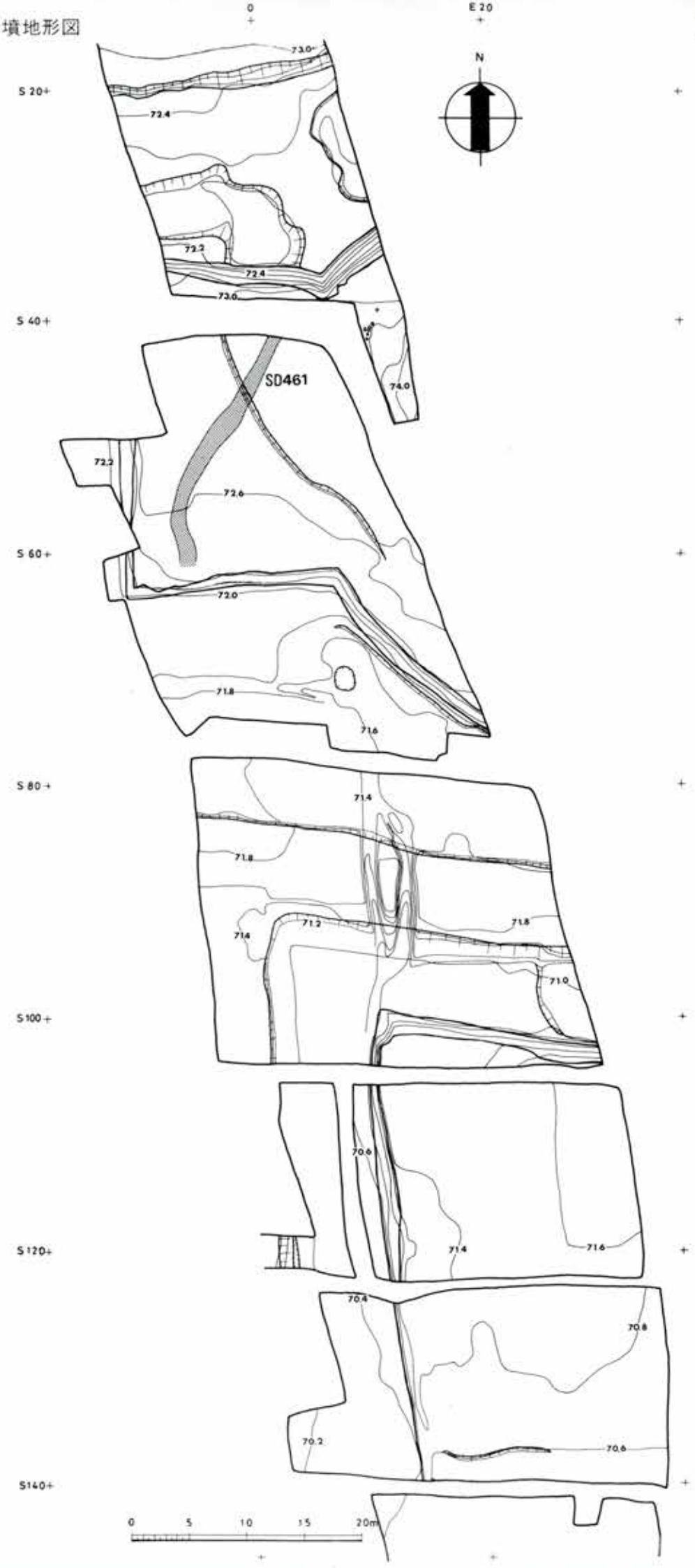
21．黒色土（旧耕土）
22．赤褐色土（旧床土）
23．黄灰色粘質土
24．灰褐色土（旧床土）
25．茶色砂質土
26．黄褐色バラス土
27．茶褐色土
28．淡褐色粘質土
29．腐蝕土混り褐色土
30．茶褐色土
31．灰色腐蝕土
32．灰色土
33．暗褐色土
34．暗褐色粘質土
35．暗灰色粘土
36．灰褐色砂

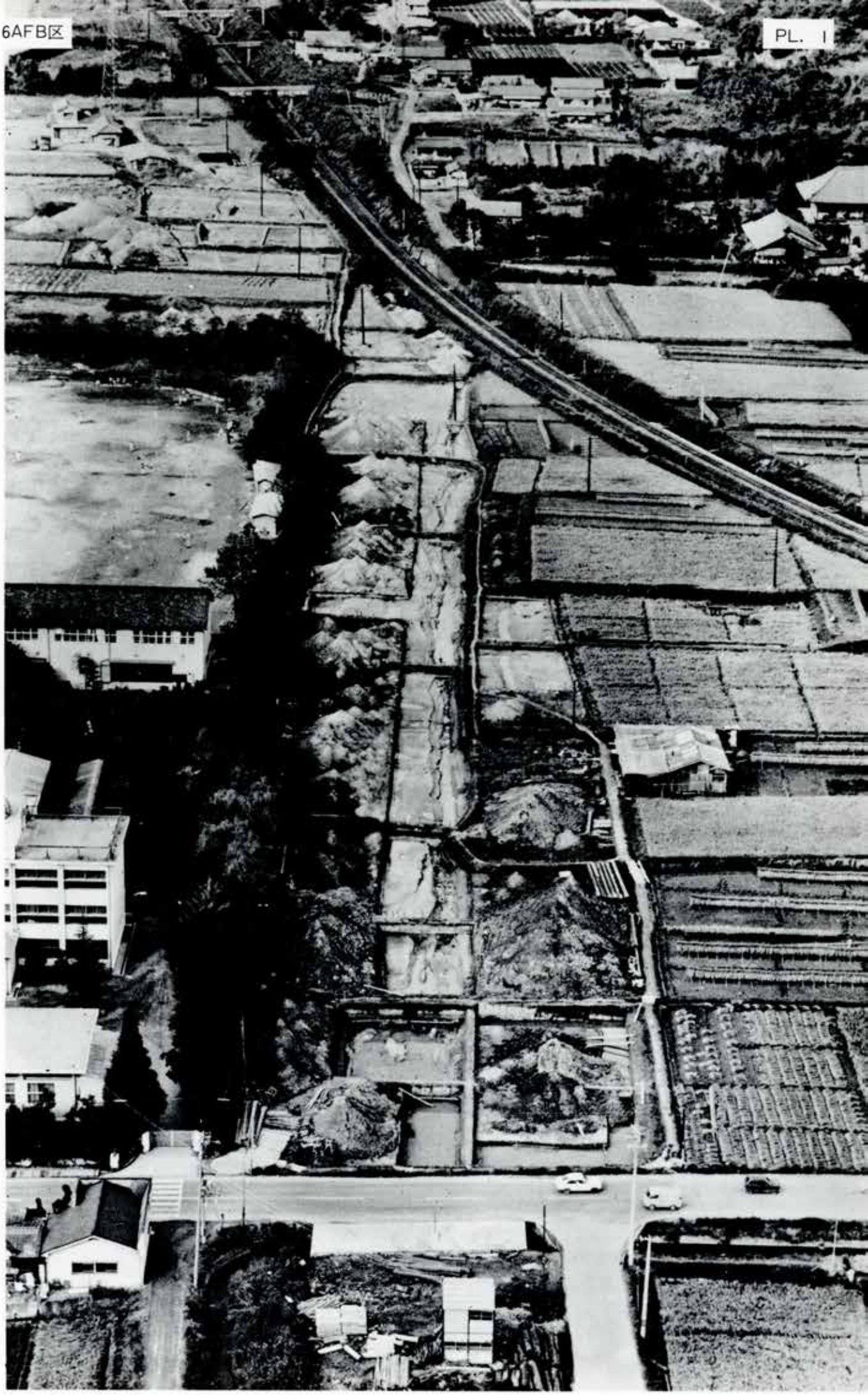
77.0 m



平塚1・2号墳地形図

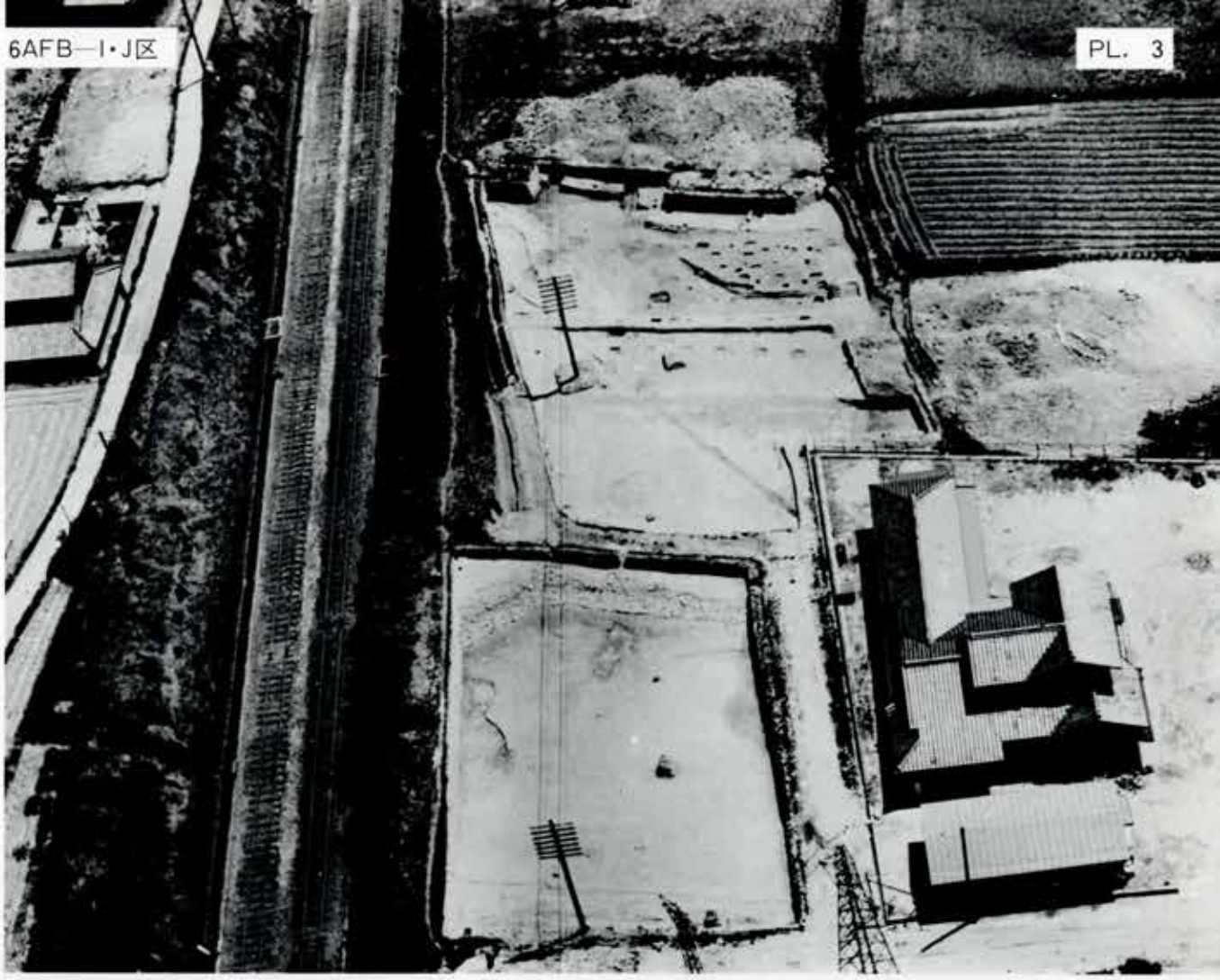
PLAN 22

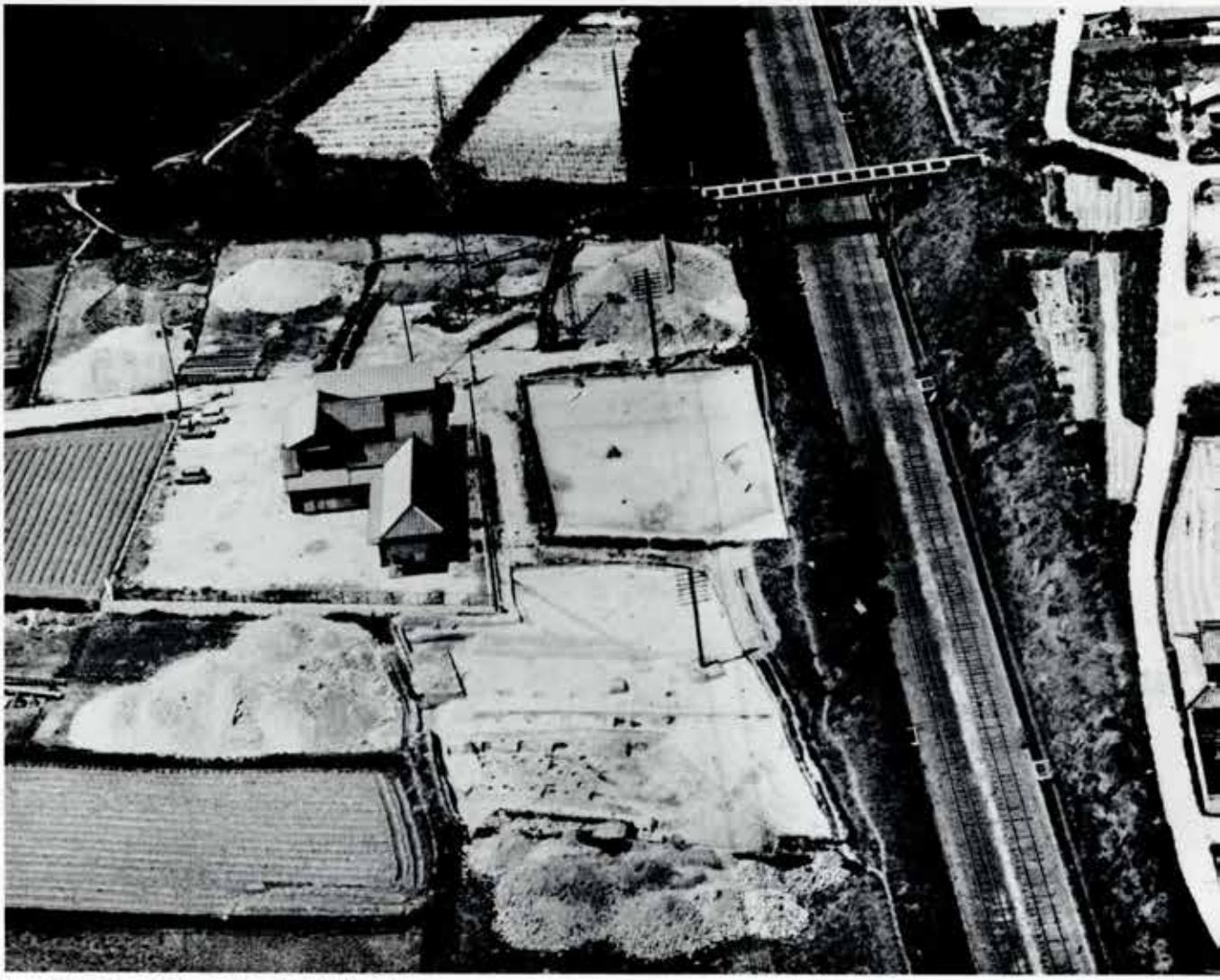




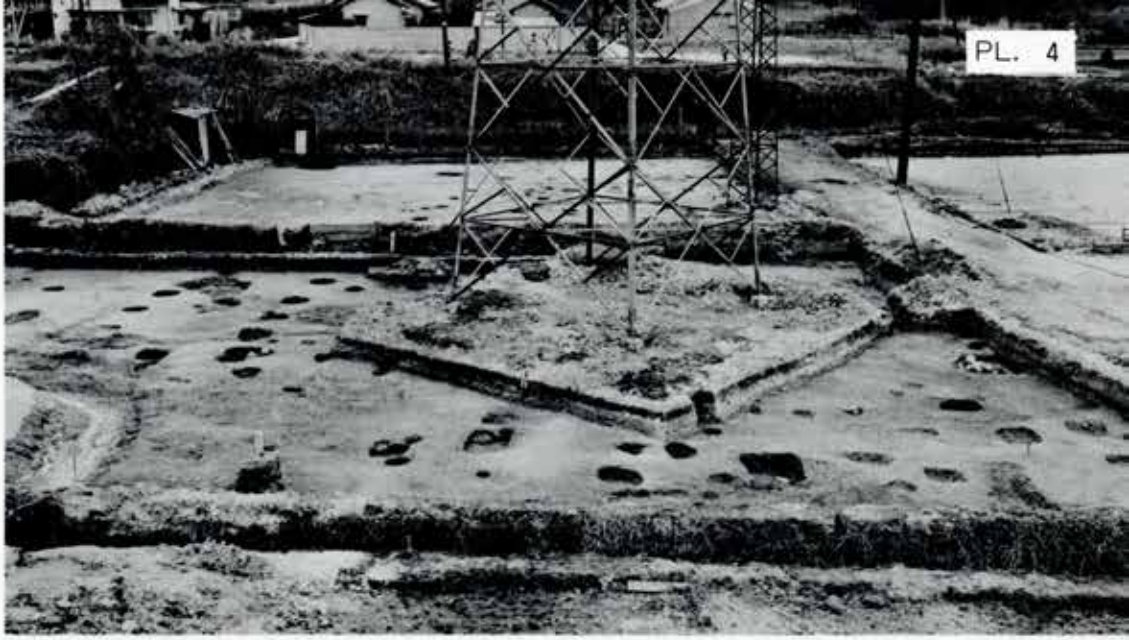
全　景　南から

全　景





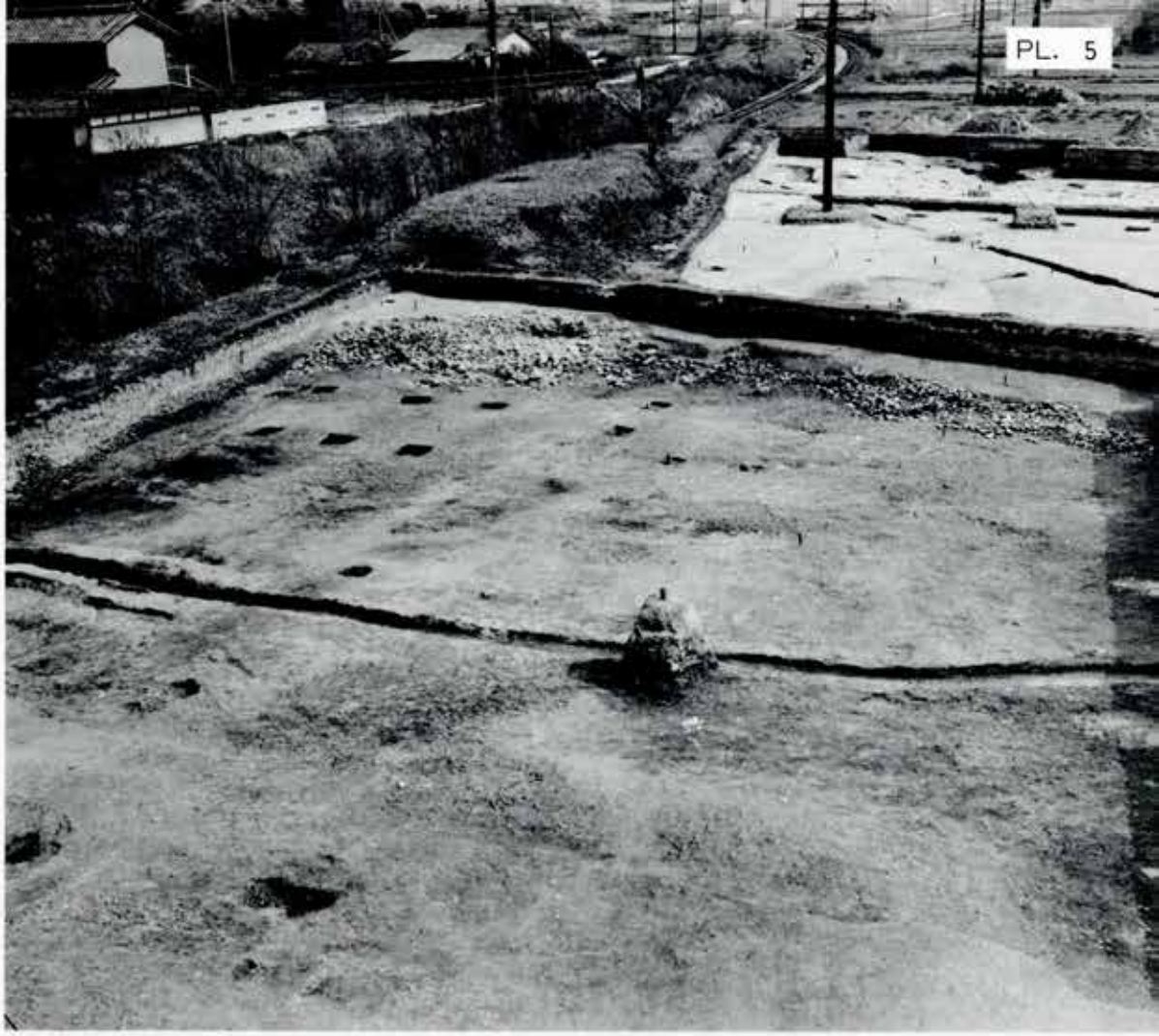
1．I区全景　北から　2．I区全景　南から



1．全　景
西から

2．SB437建物
北から

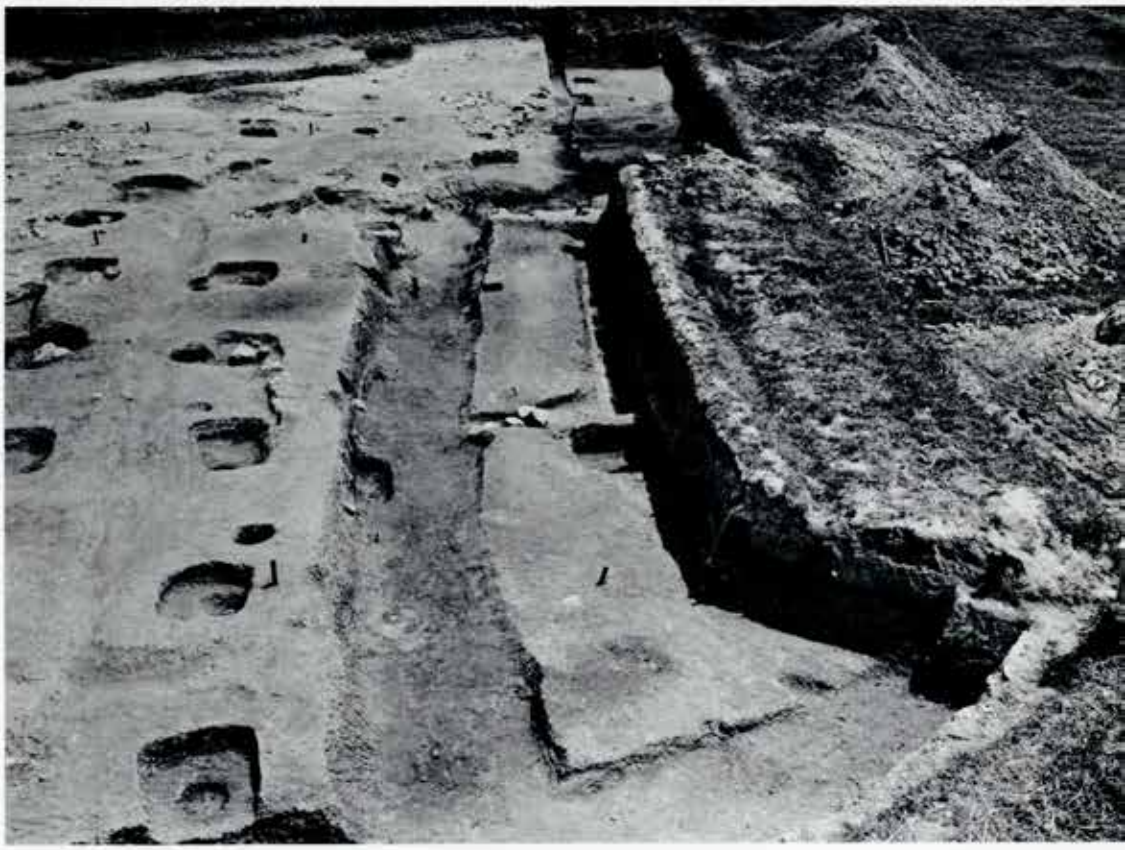
3．SD441溝
SB444建物
東から



1．SD453溝・SB455建物　北から　　2．SB455建物　西から

1．SB470建物　南から　　2．SB470建物・SD485溝　西から

1．SB471建物
SB482建物
SD477溝
北から

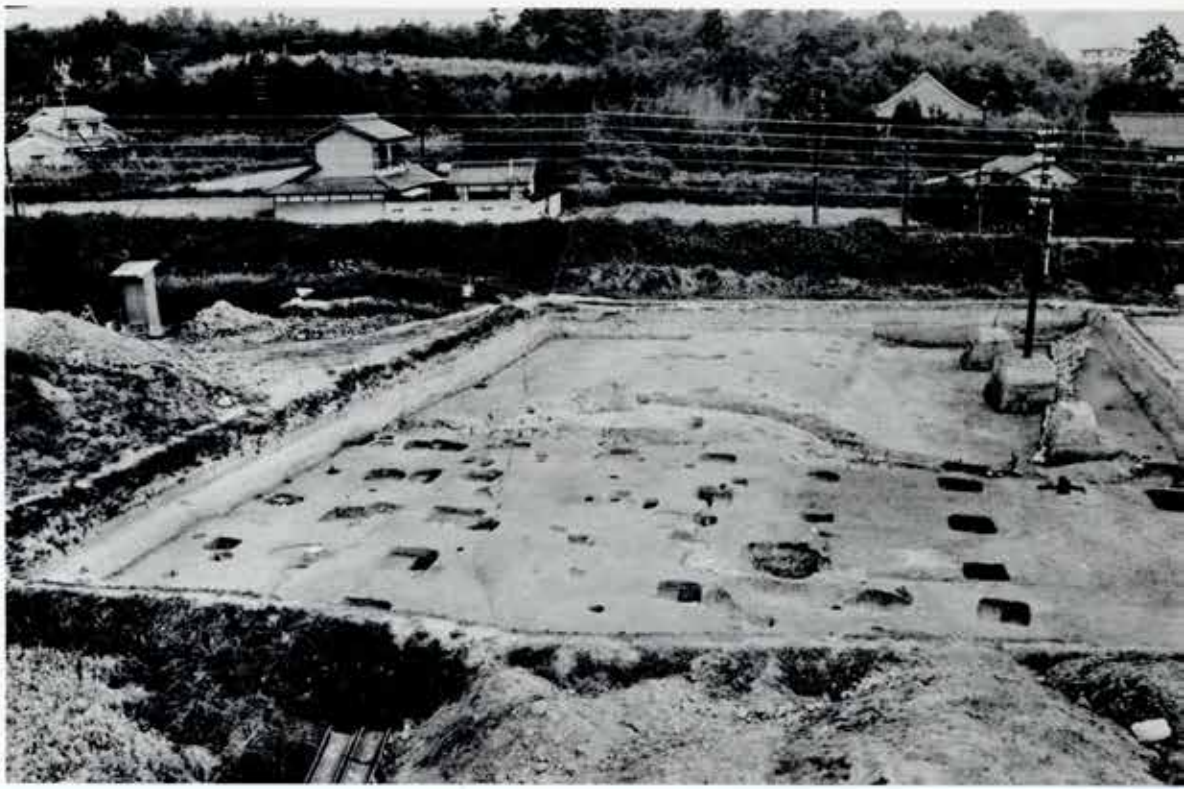


2．SD485溝
西から

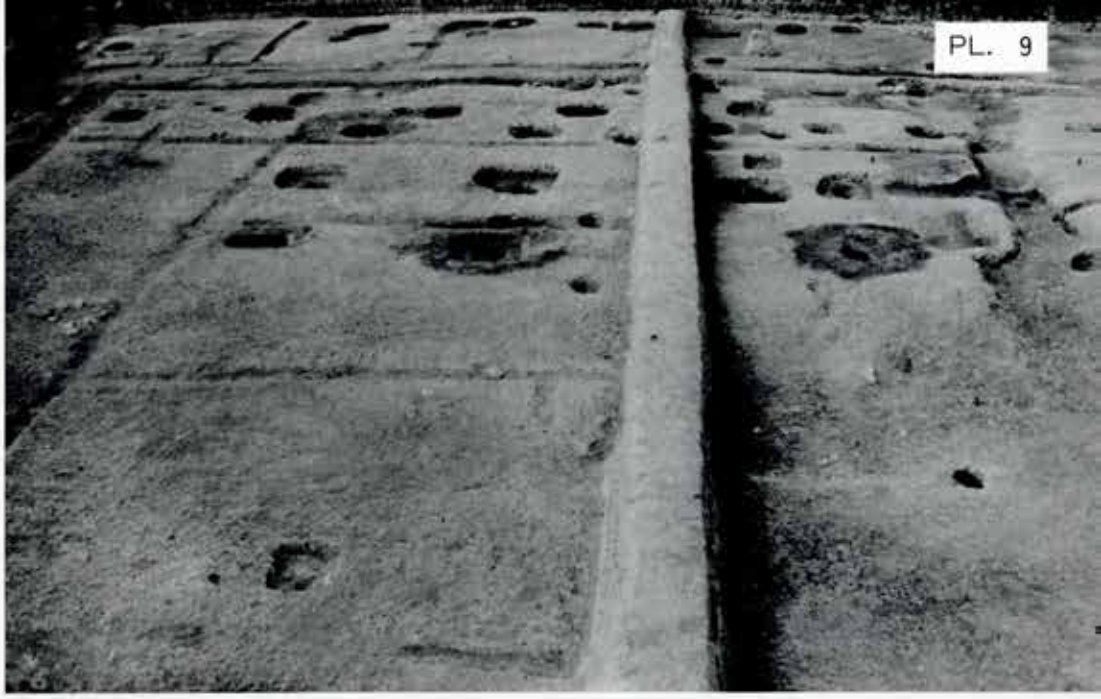
3．SD485溝
東から

1．上層遺構全景
西から

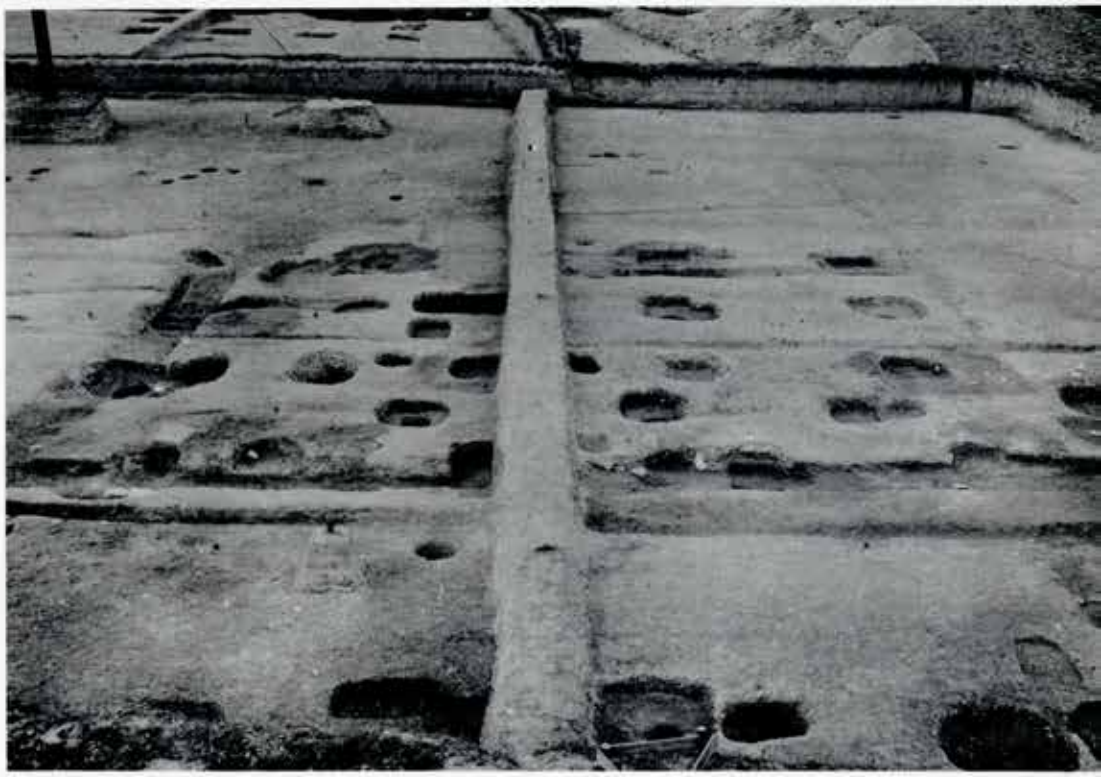
2．中層遺構全景
西から



3．下層遺構全景
西から



1．SB501建物
SB502建物
SB504建物
南から



2．同　上
北から

3．同　上
東から

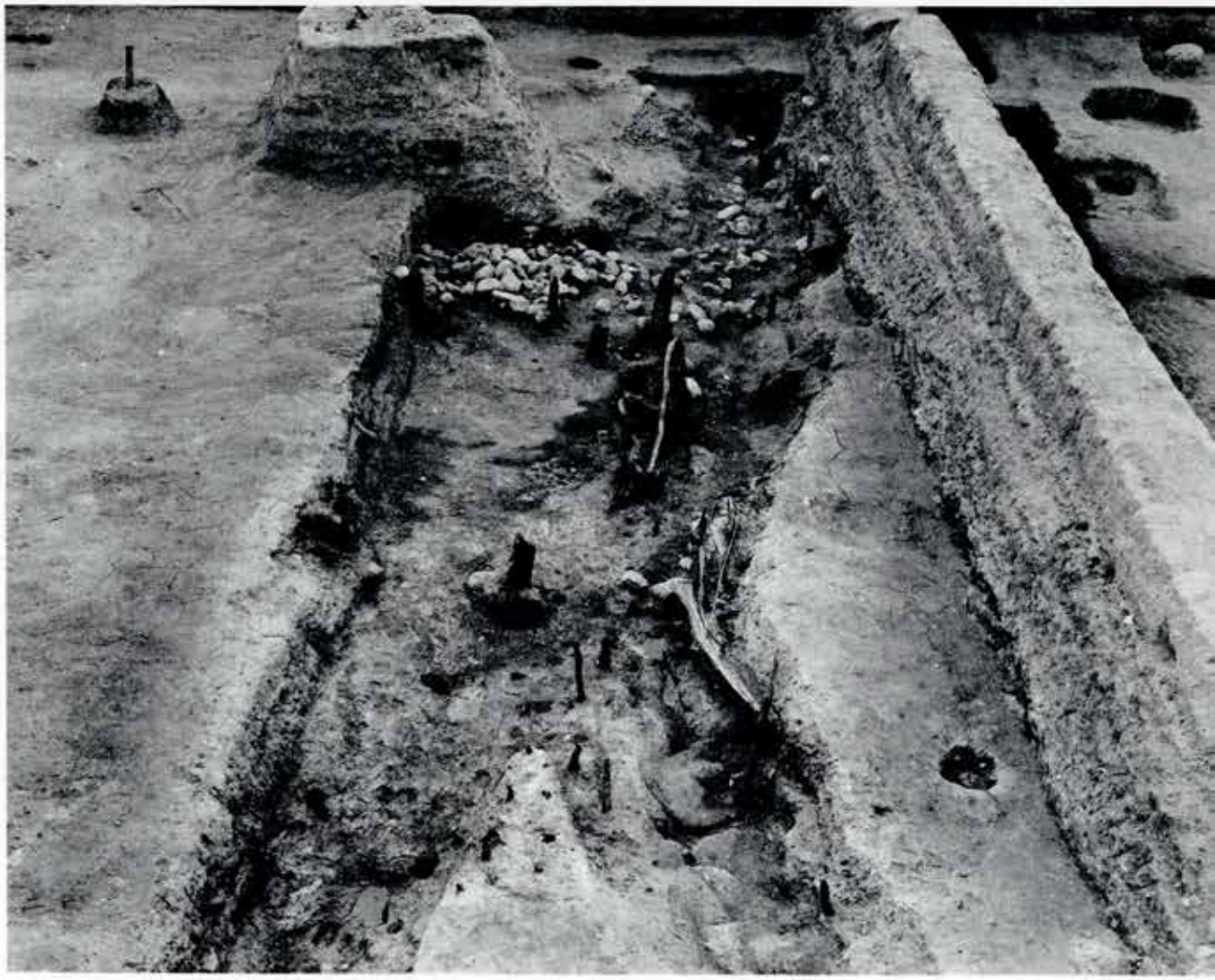
1．SB480建物
SB490建物
SD485溝
北から

2．同　上
東から

3．同　上
西から

1．SB481建物・SB482建物　東から　　2．SB490建物　西から

SD485溝全景　北から



1．SD485溝部分　南から　2．同　上　北から

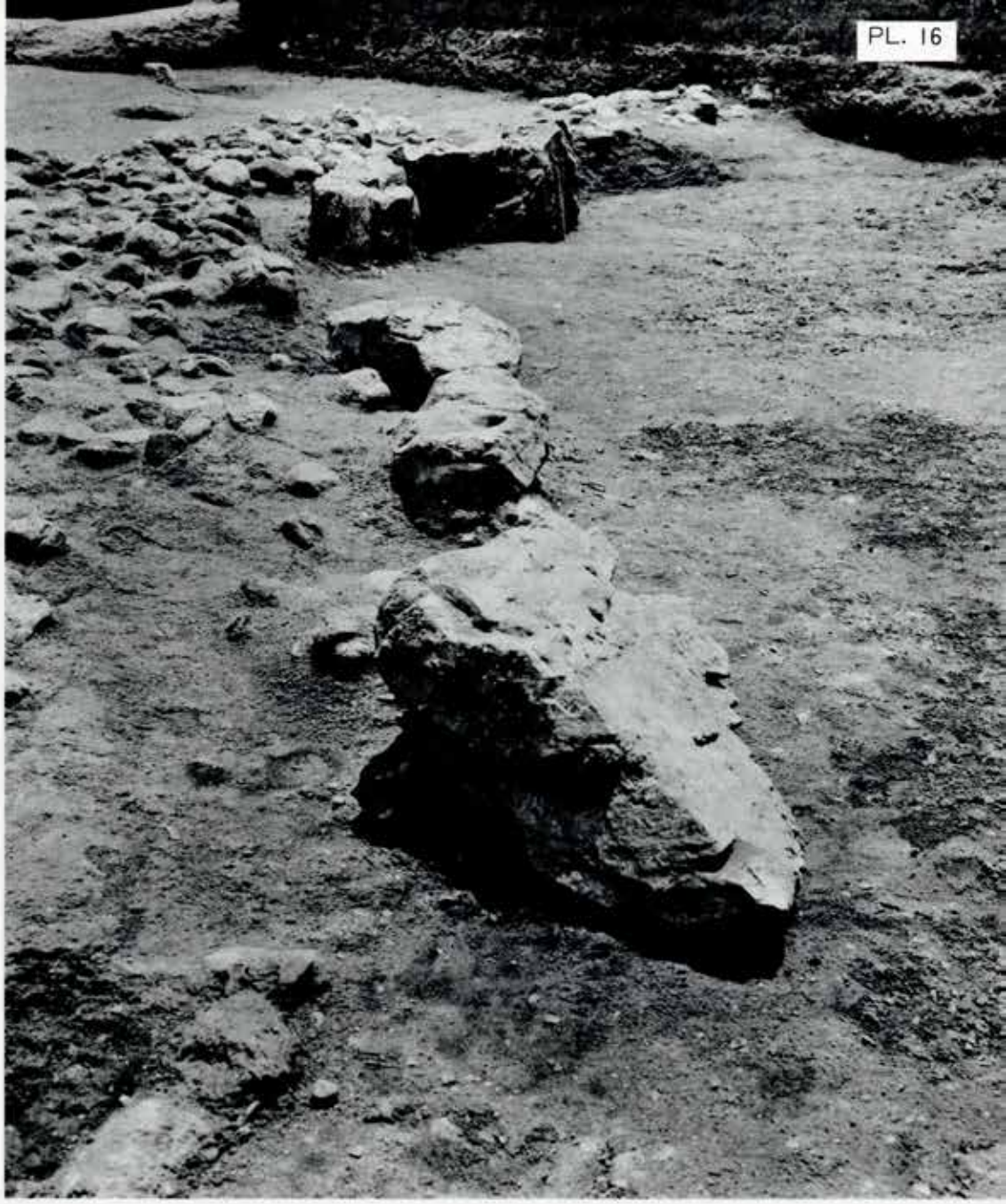
1．SB510建物
南から

2．同　上
西から

3．同　上
東から

1．SG520園池
西から

2．同　上
東から



1．SG520園池部分
北から

2．同　上
西から

1．全　景
西から

2．SB530建物
西から

3．SB550建物
南から

1．全　景
西から

2．SA553柵
SA554柵
SB556建物
南から

3．SB560建物
SB565建物
東から

1．SE495井戸

2．同上細部

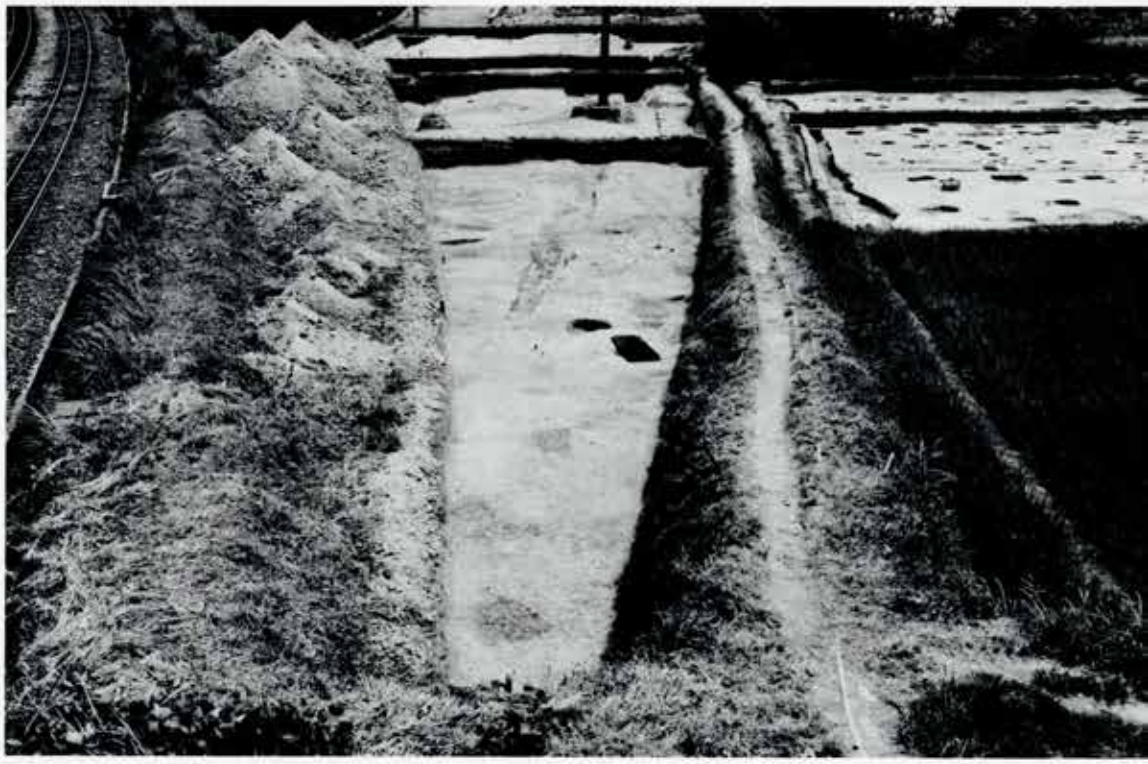
3．SE466井戸

1．SE545井戸

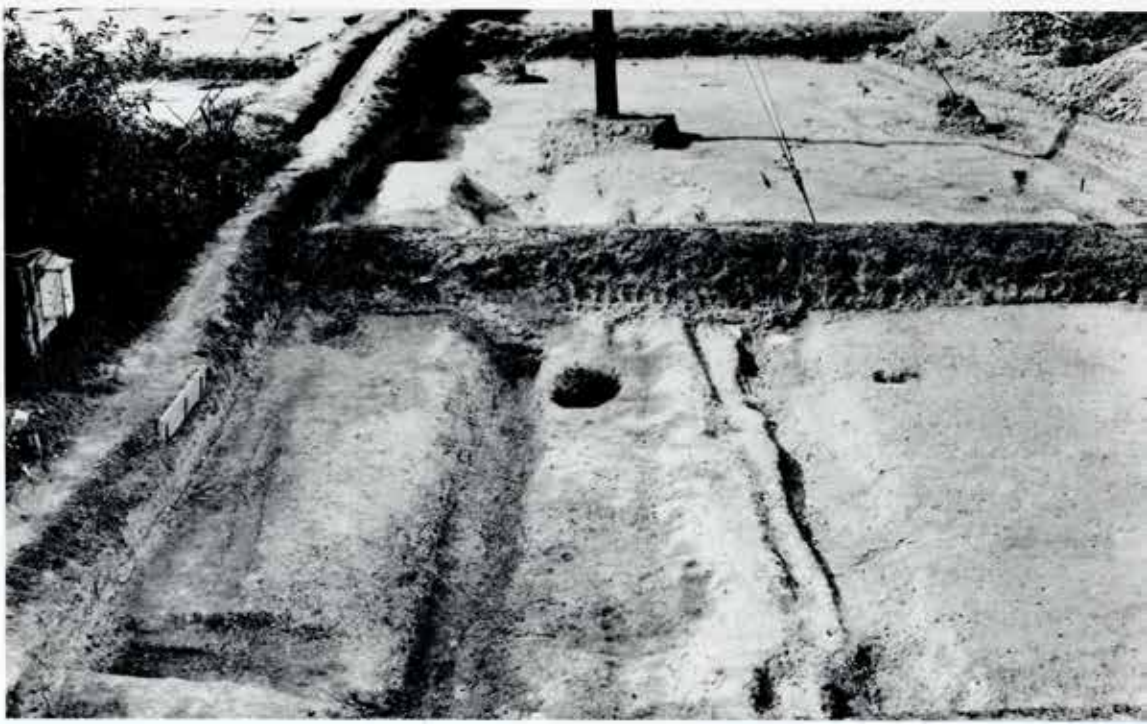
2．SE464井戸

3．SE525井戸

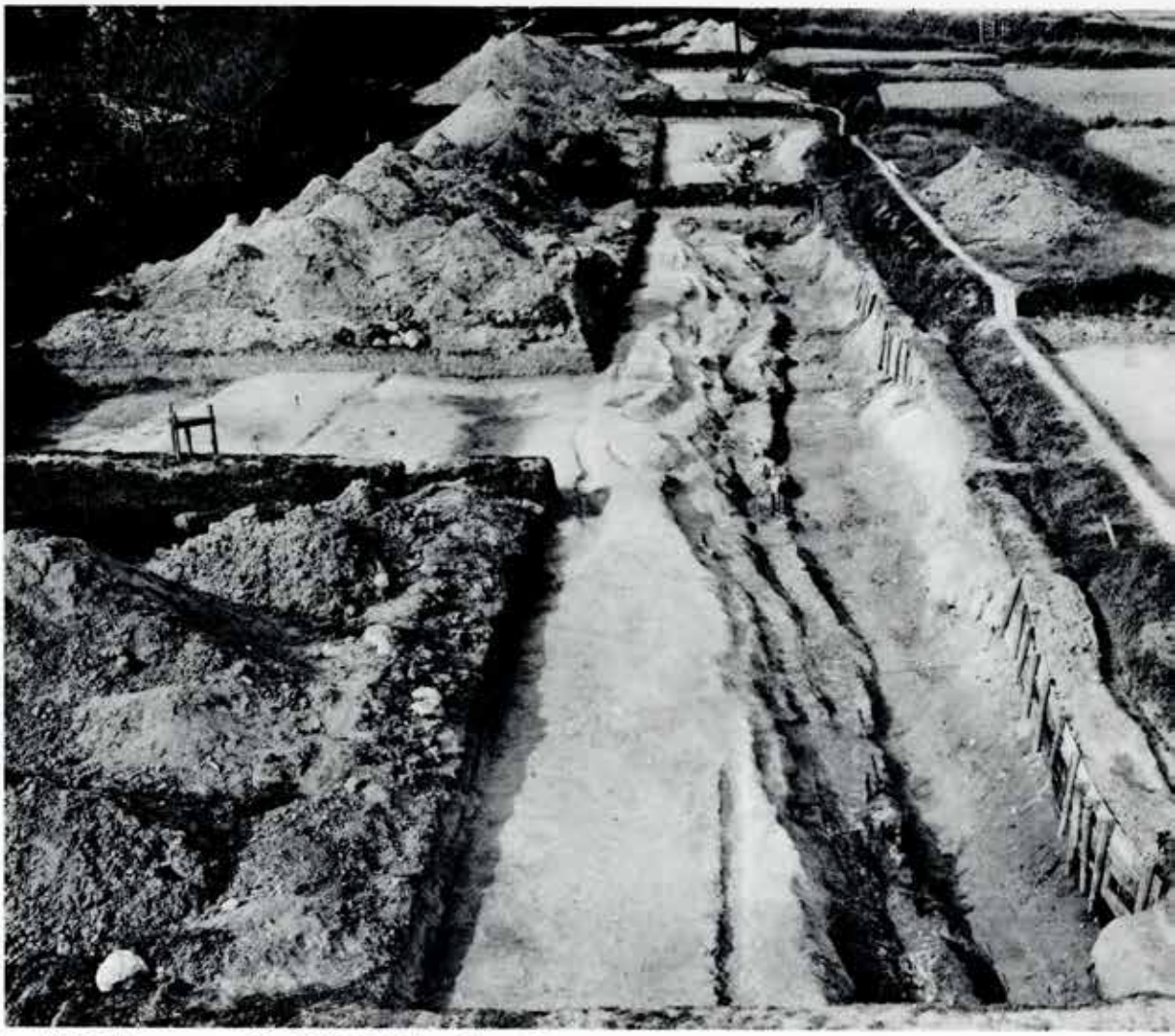
1．SX600大路
SD650溝
南から



2．SX600大路
北から

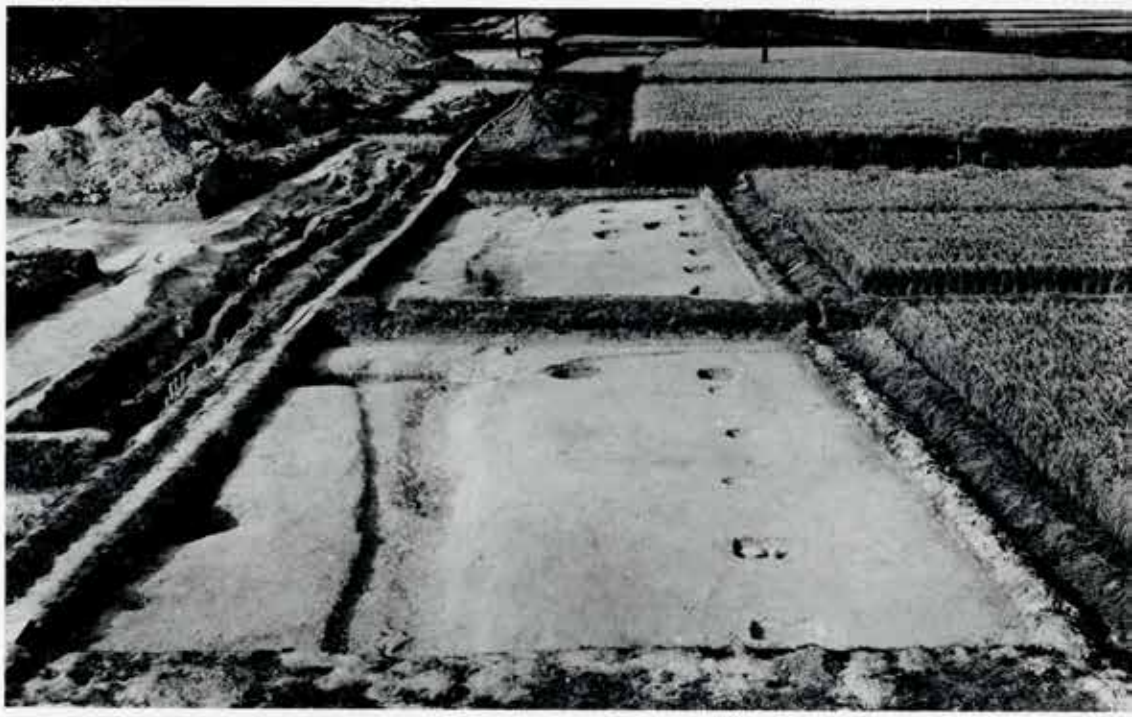


3．SX600大路部分
南から



1．SD650溝 北から　2．SX600大路・SD650溝 南から

1．SX600大路
東から



2．SD611溝
SA617柵
南から

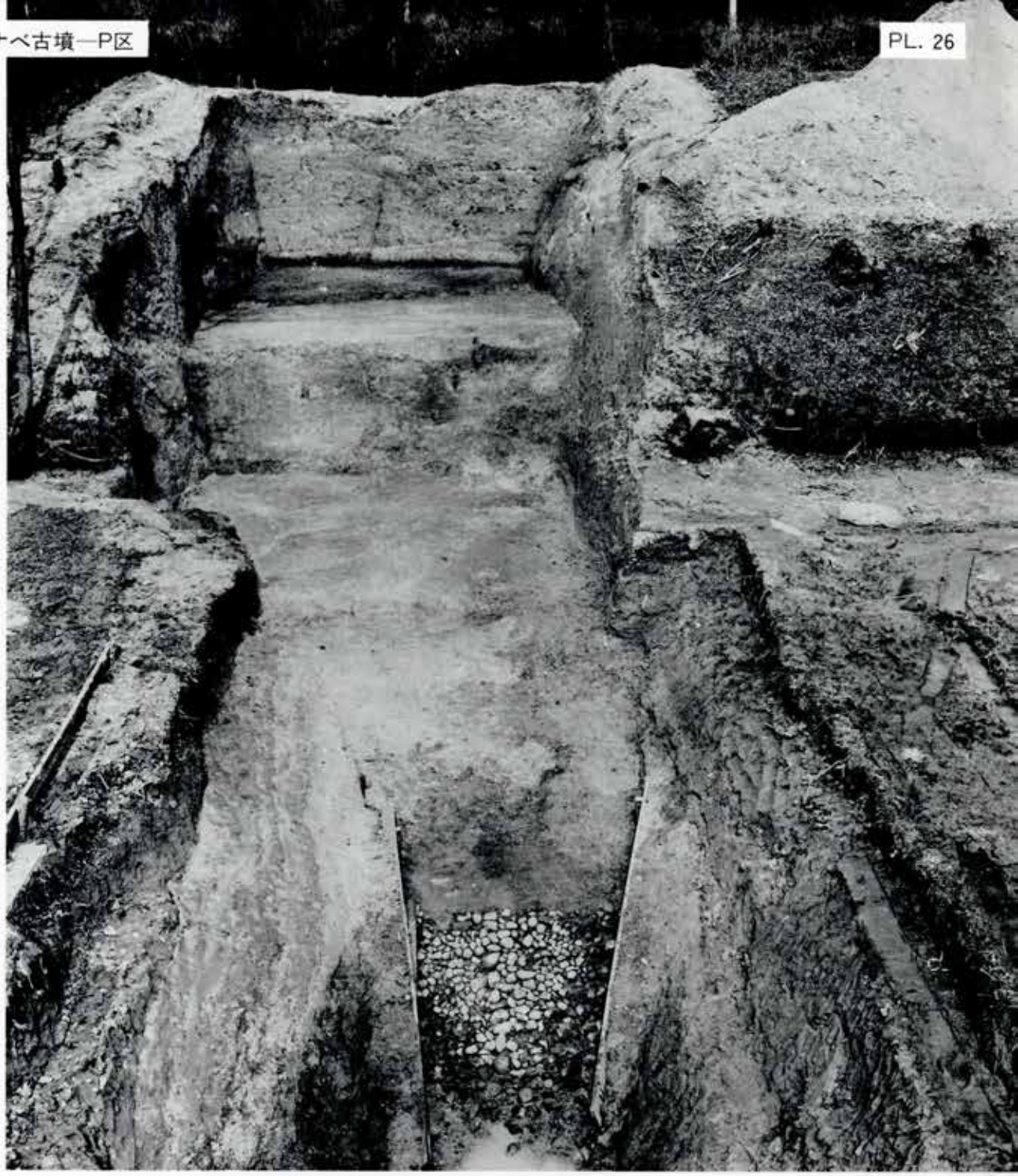
3．同　上
北から

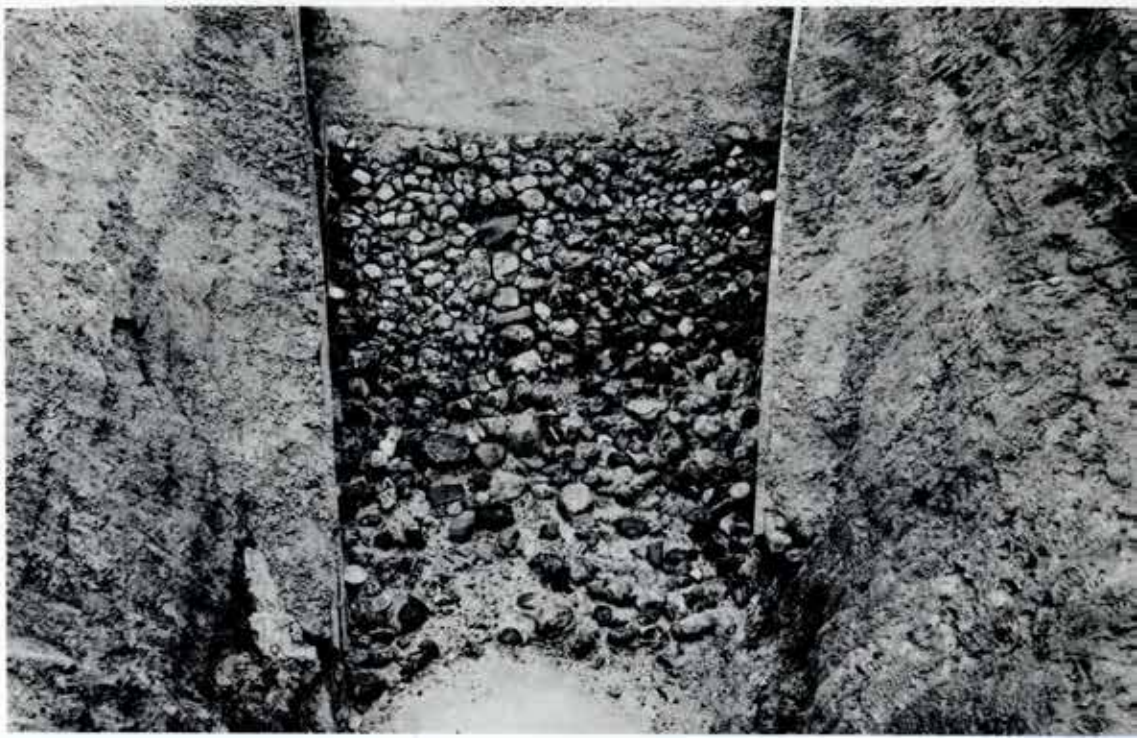
1．SD650溝部分
北から

2．同　上
北から

3．同　上
南から

1．全　景　東から　　2．全　景　南から



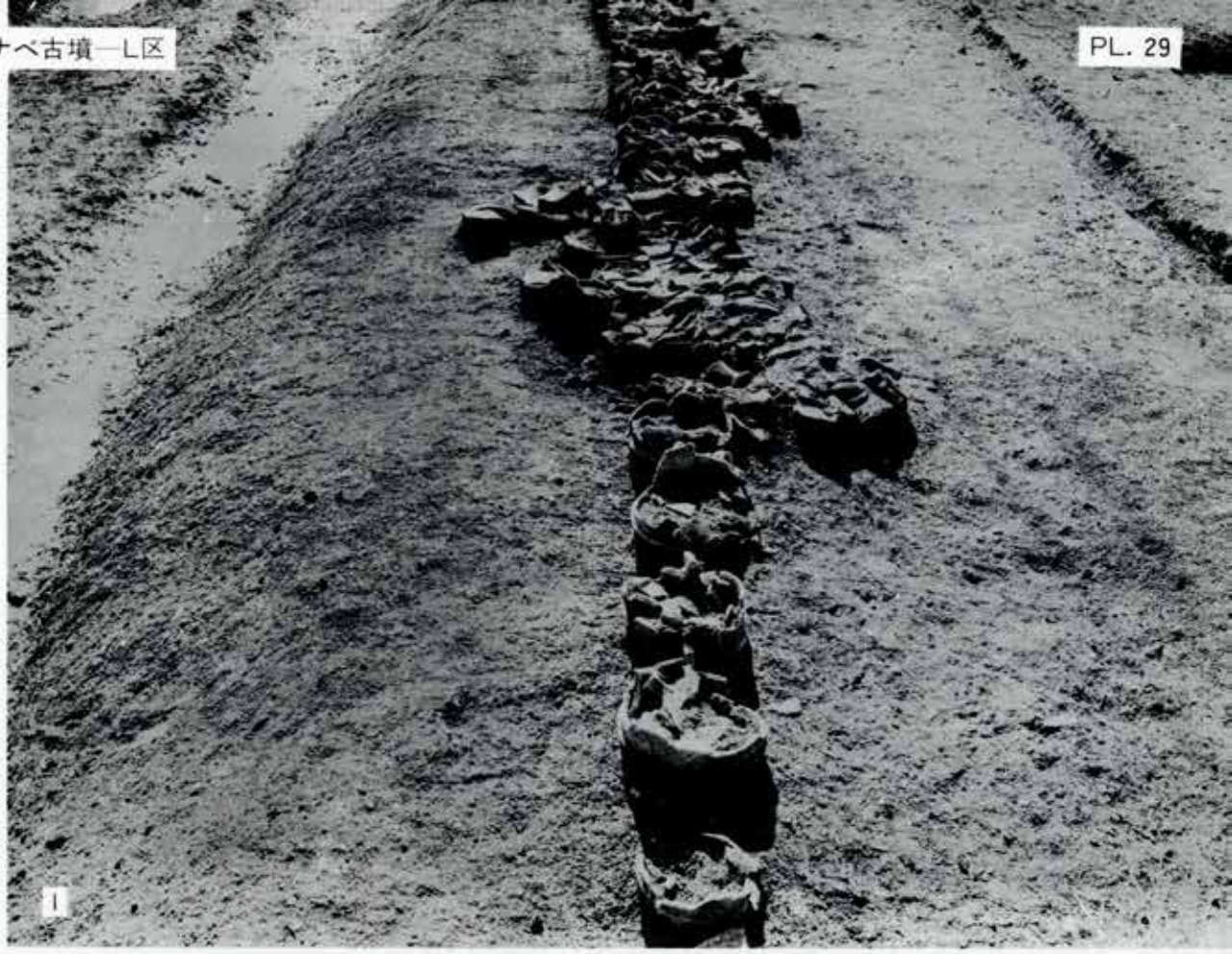


1．外　堤
西から

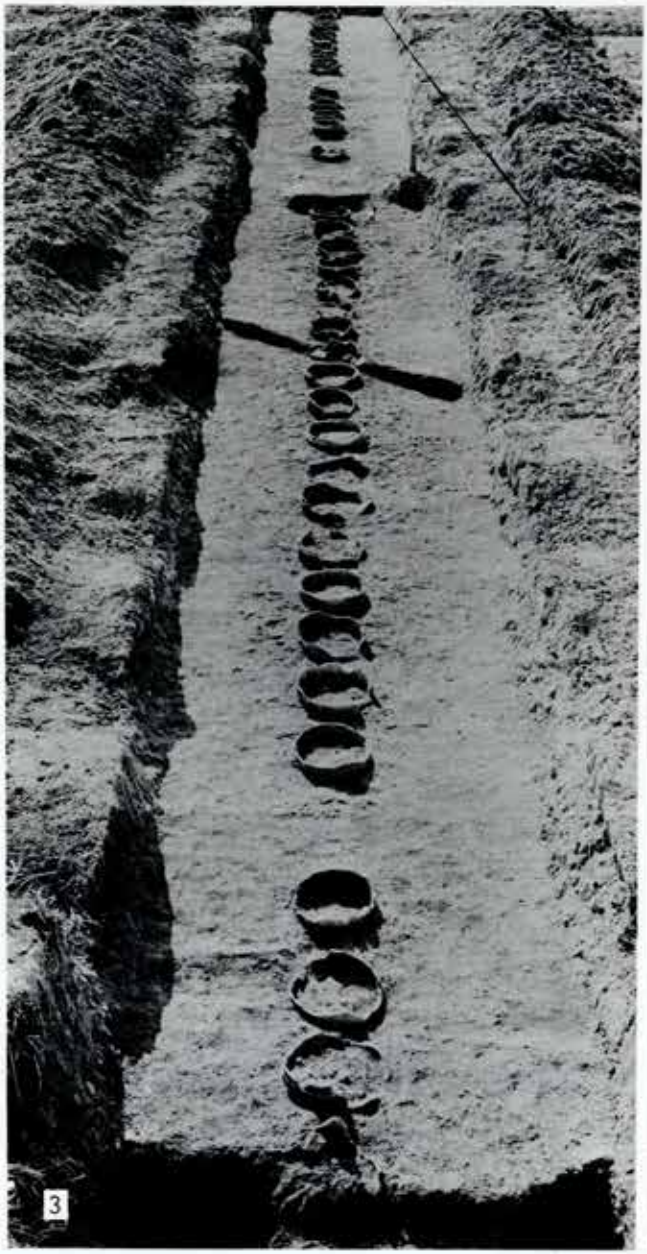
2．同上葺石
西から

外　堤
西から

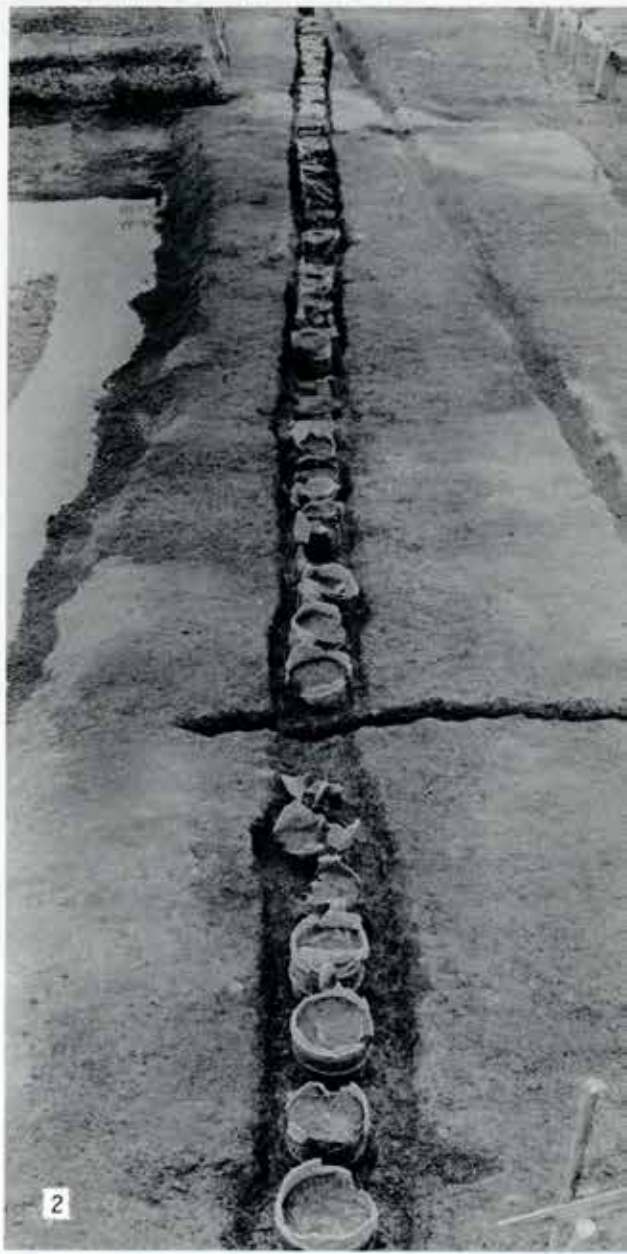
外堤・外濠　北から



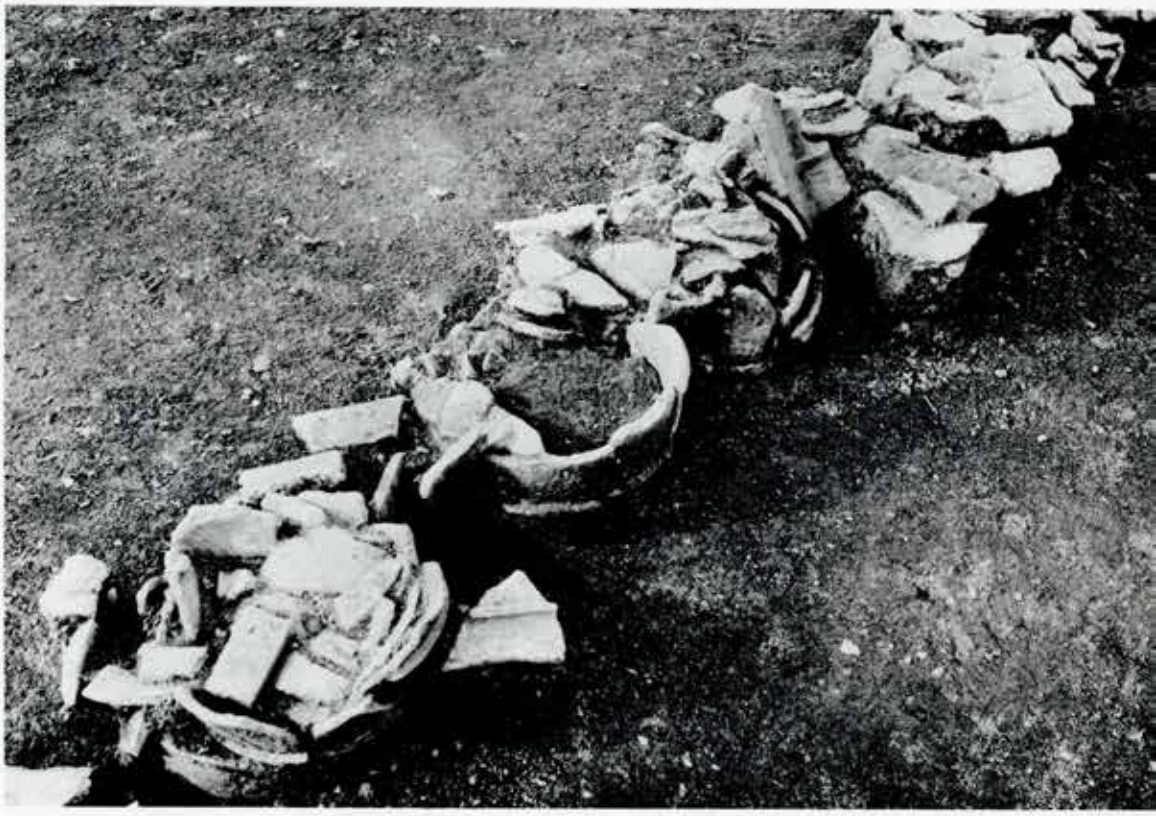
1．外堤・埴輪列
南から



2．同上据付痕跡
3．埴輪列
北から



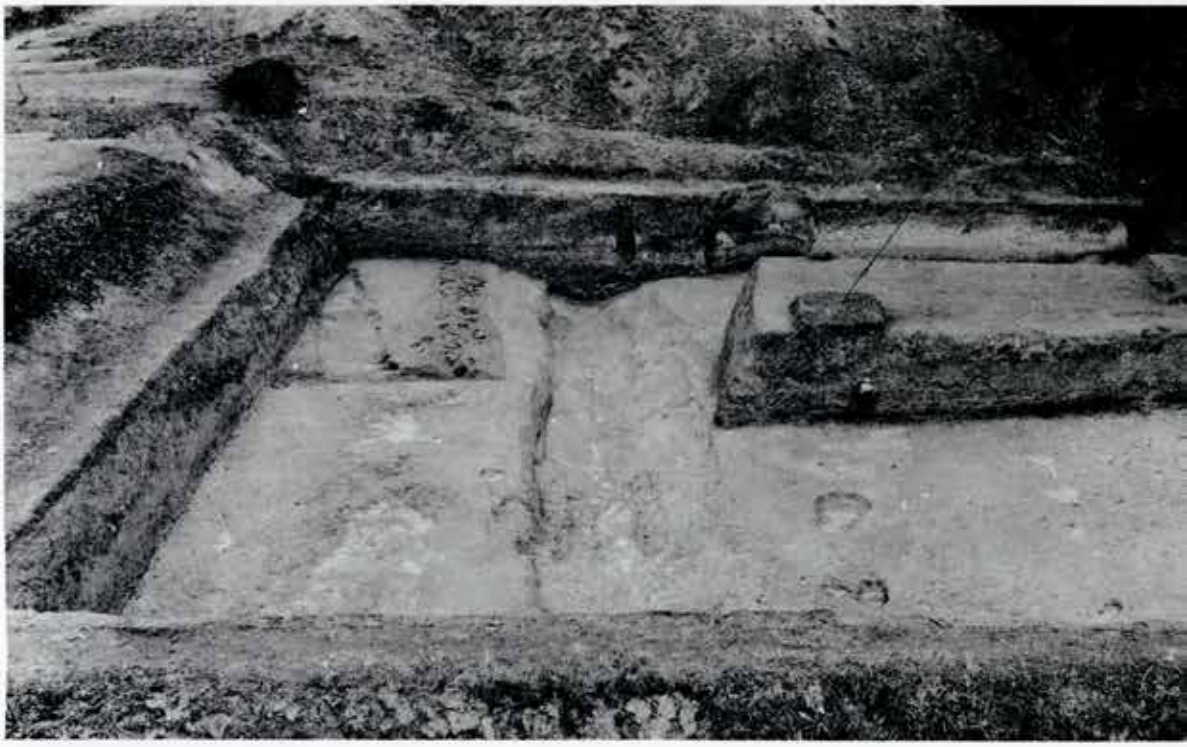
1．外堤・埴輪列
東から



2．埴輪列細部

3．埴輪据付細部

1．外堤・外濠
西から



2．同　上
南から

3．埴輪列
南から

1．墳丘・北濠
北から

2．墳丘・くびれ部
北から

3．墳丘・南濠
西から

平塚1号墳

1．墳丘・南濠
南から

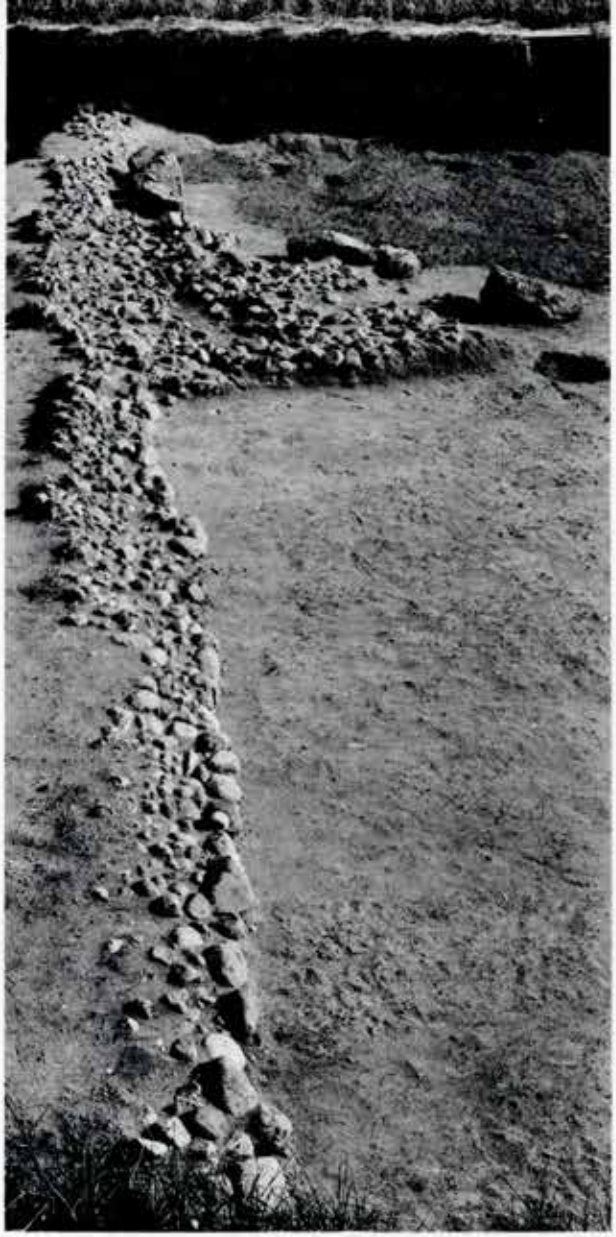
2．くびれ部埴輪列
西から

3．墳丘北斜面葺石
北から

1．墳丘・周濠
北から

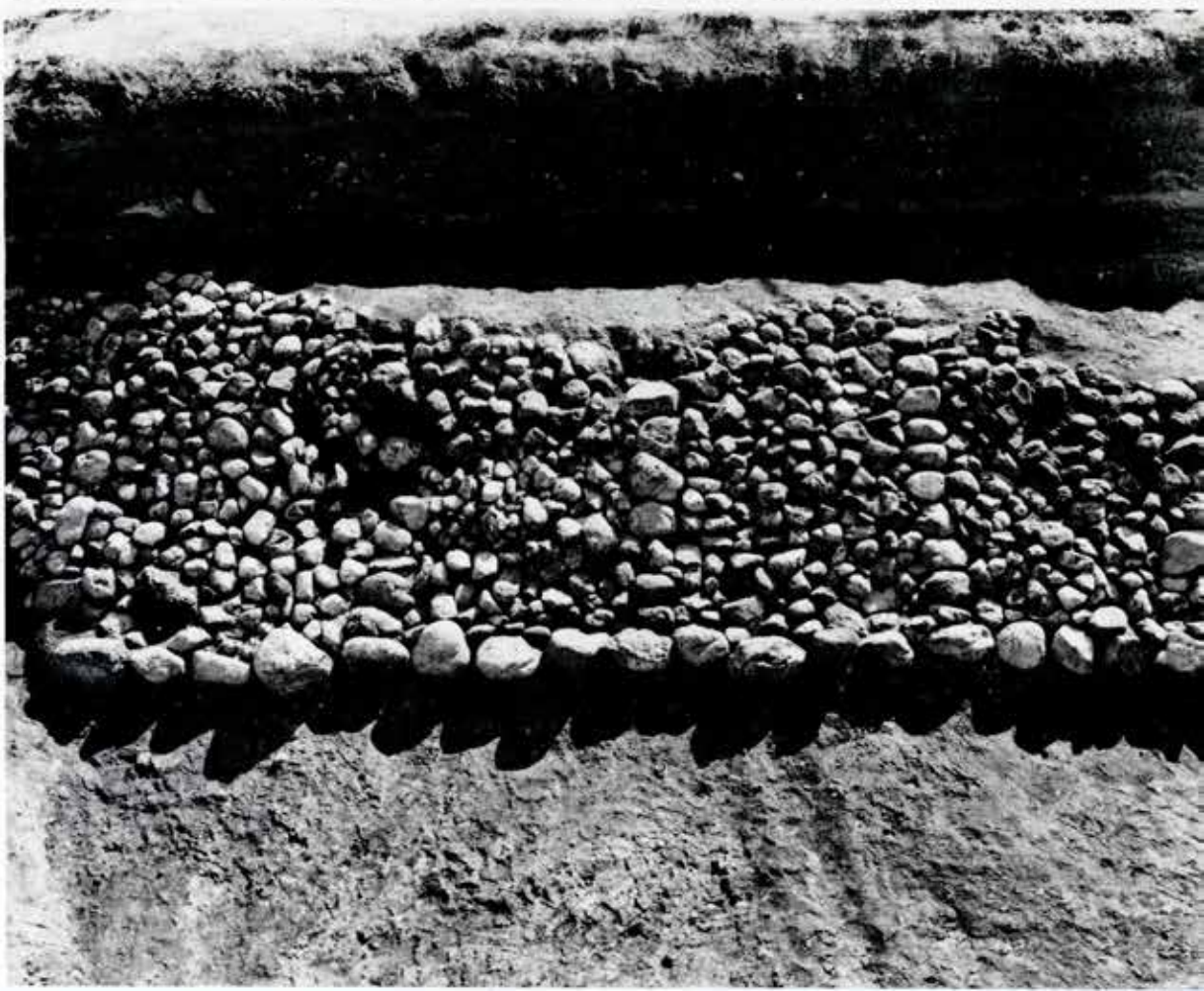
2．墳丘・西濠
西から

3．同上部分

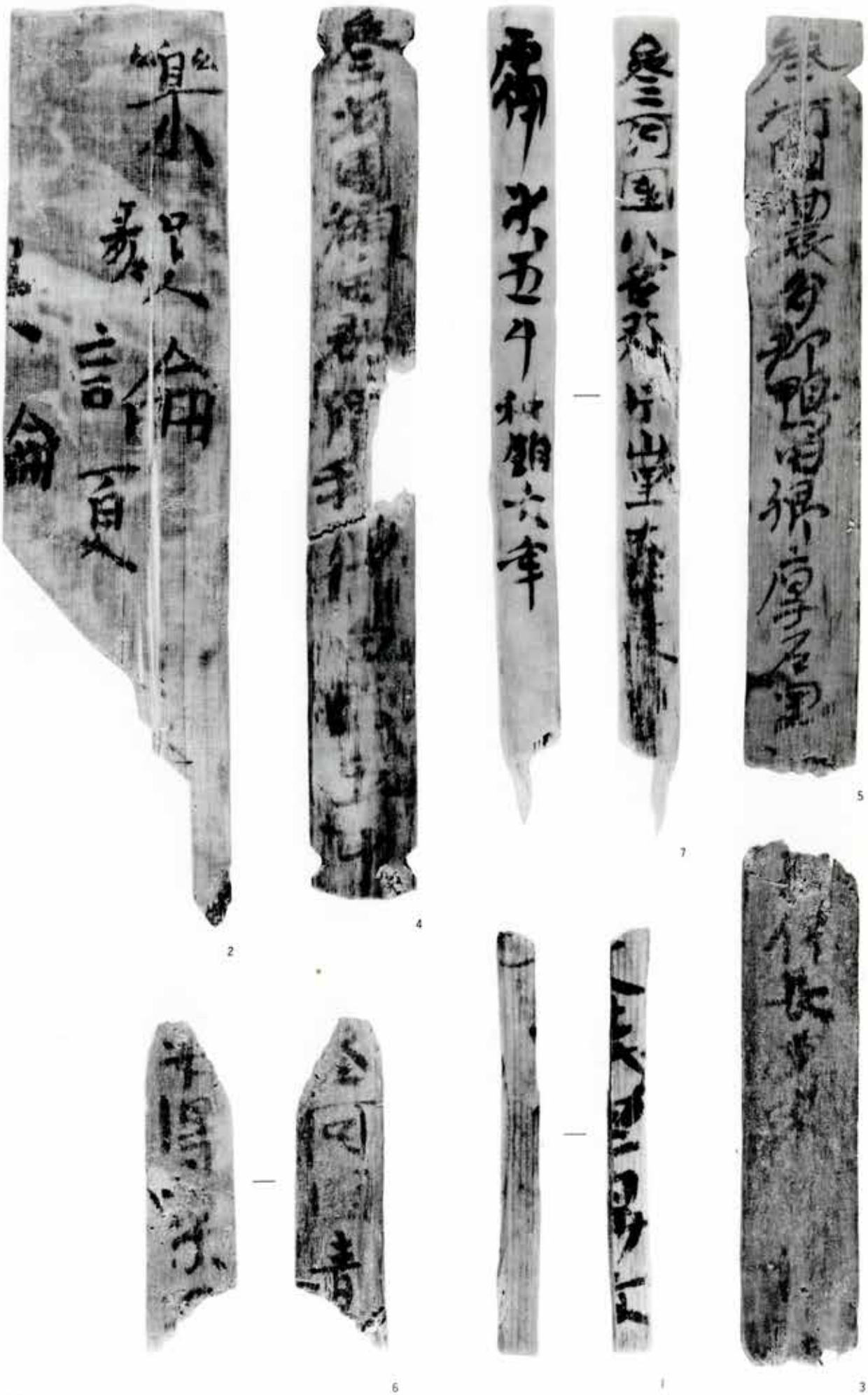


1．墳丘西斜面葺石
北から

2．墳丘北斜面葺石
東から



3．同上部分

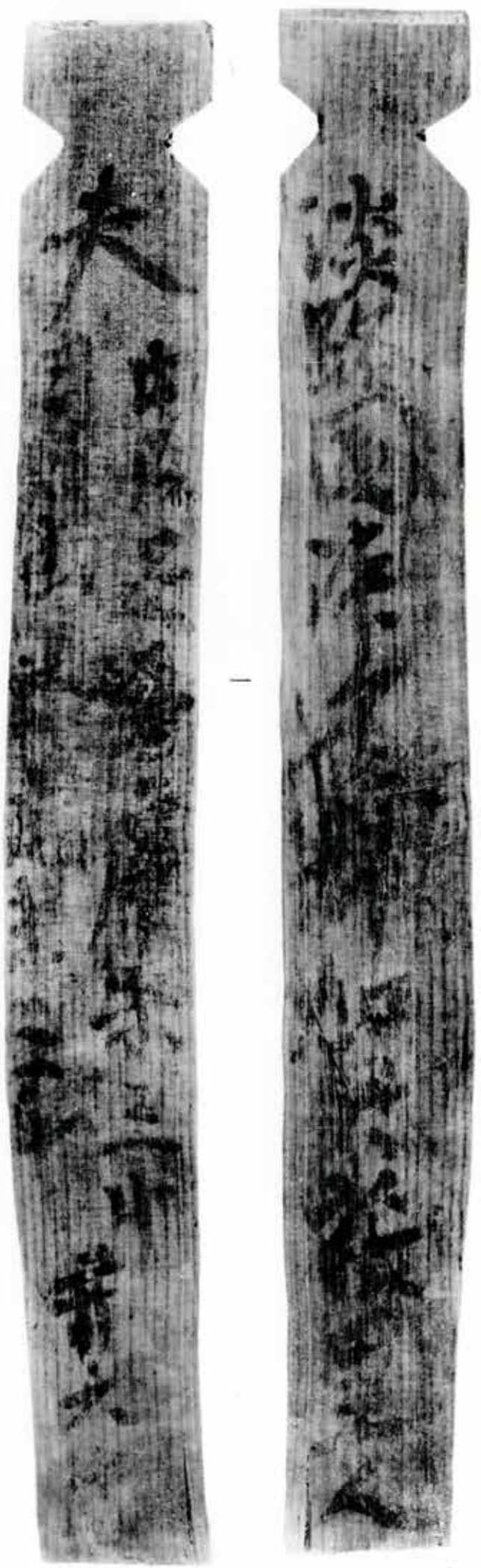

2
4
7
5
6
1
3

11

9

10

8



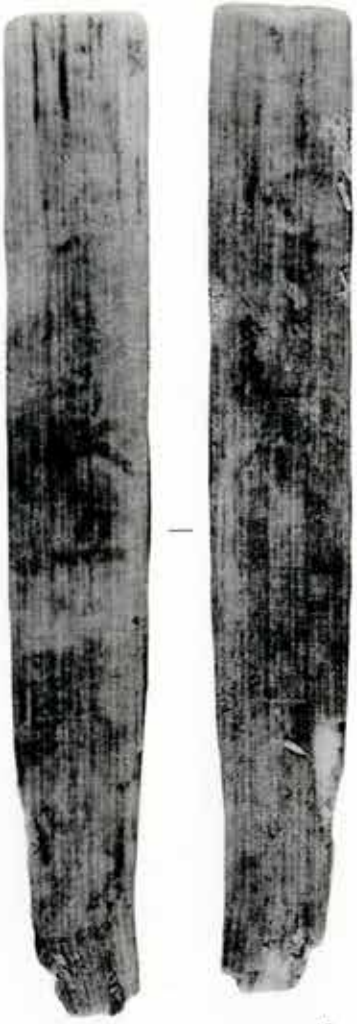
13

12

1 : 1

20

18



16

17

14

25

1 : 1

27

15

23

24

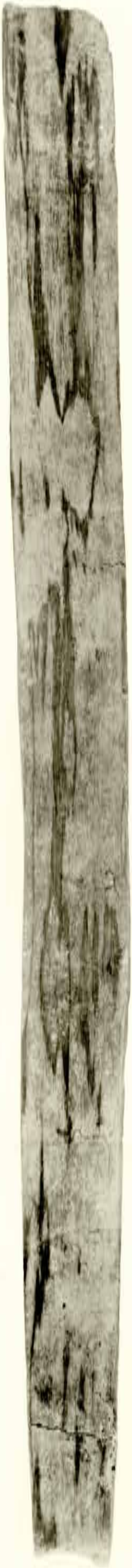
26

22

19

1:1

28



46

34

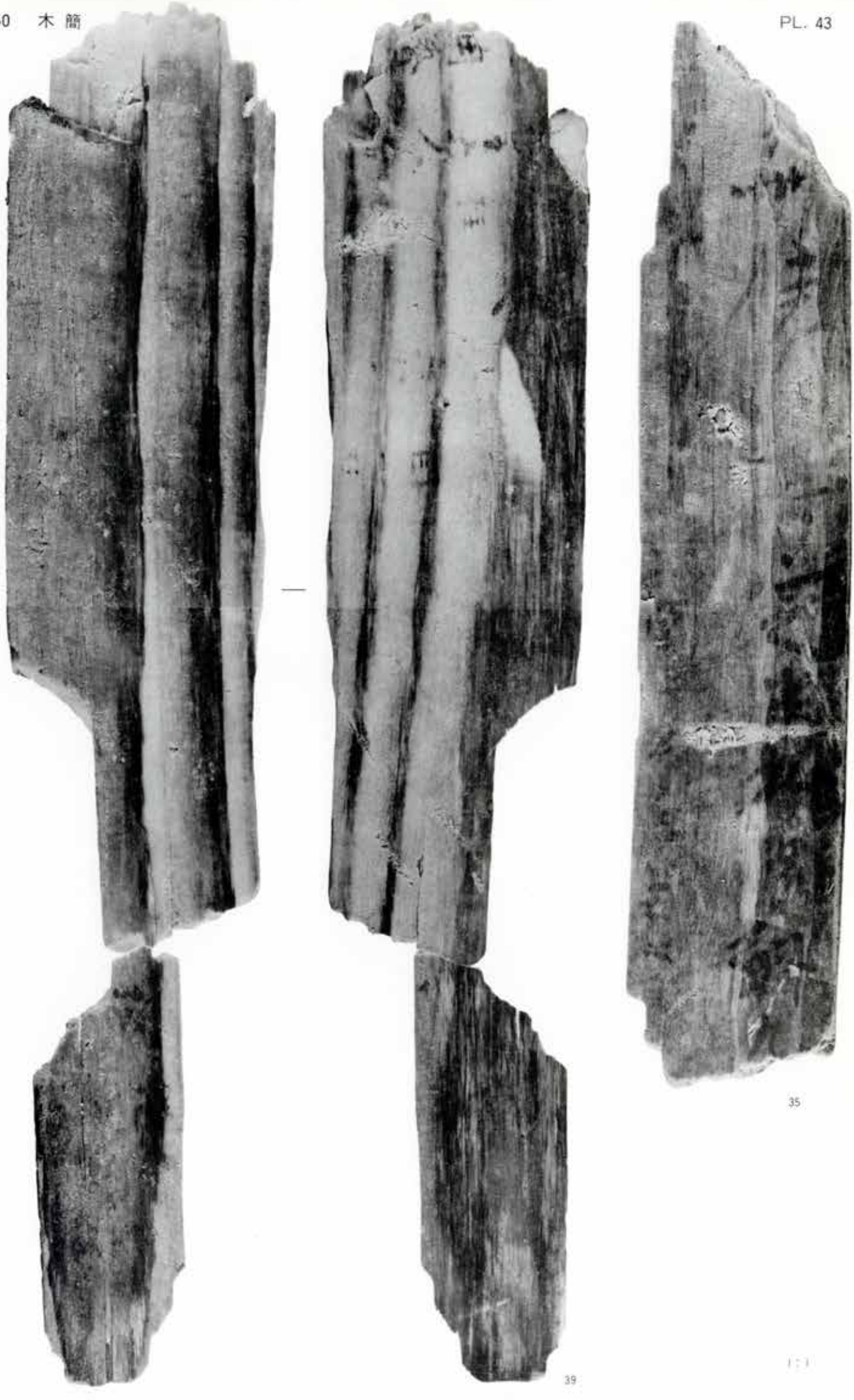
SD650

30

29

31

1:2



35

39

42

36

40

43

33

37

41

51

52

47

38

50

48

49

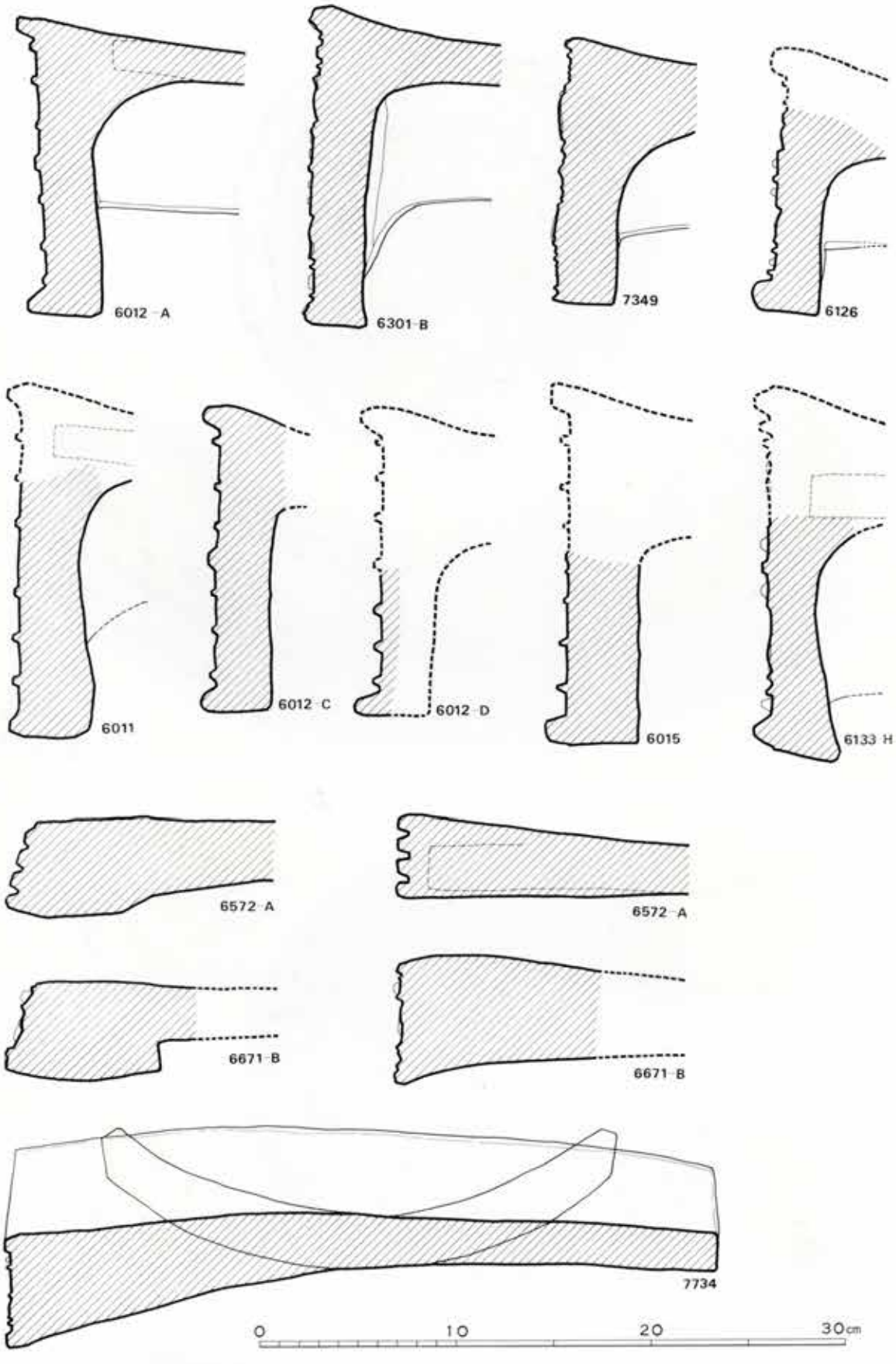
45

44

6012—A
6572—A

6301—B
6671—B

1 : 2


6012 - A
6301 - B
7349
6126
6011
6012 - C
6012 - D
6015
6133 - H
6572 - A
6572 - A
6671 - B
6671 - B
7734
0
10
20
30cm

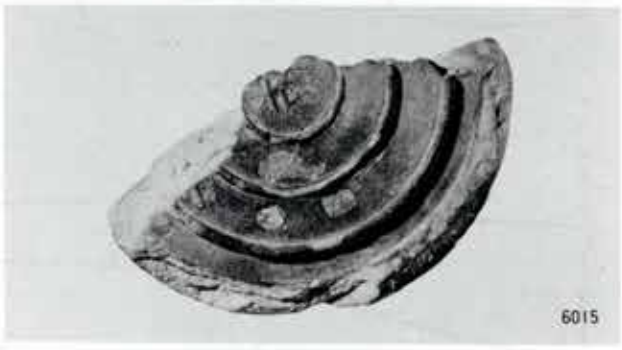
1 : 2

7349
7734

6012—C

6011

6012—D

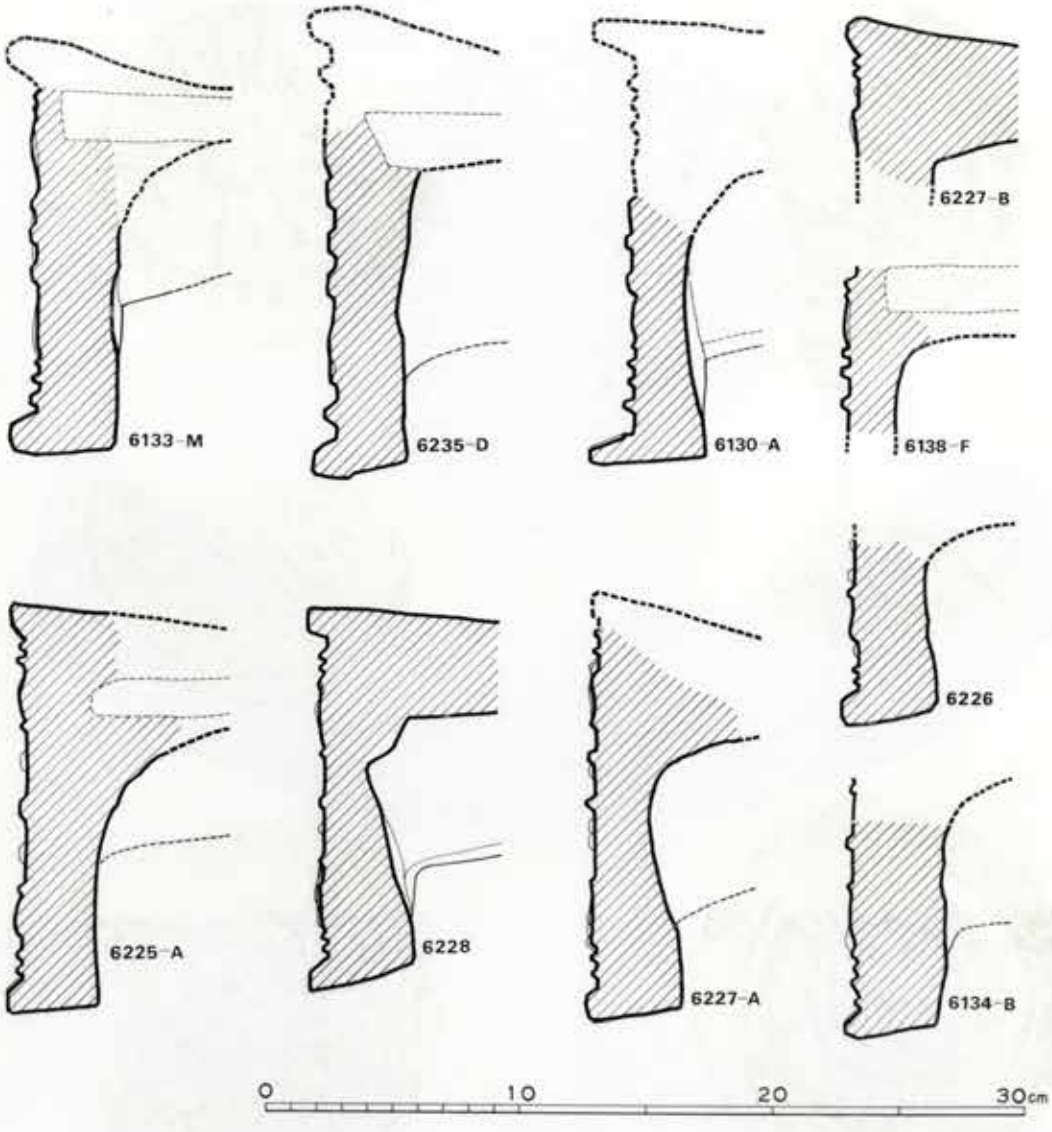


6015

6126

6133—H

1 : 3

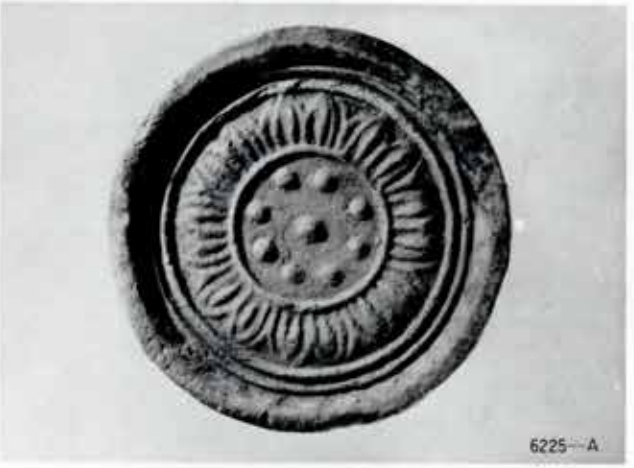

6133-M
6235-D
6130-A
6227-B
6138-F
6225-A
6228
6227-A
6226
6134-B
0
10
20
30cm

6130—A

6133—M

6138—F

6134—B


6225—A

6227—A

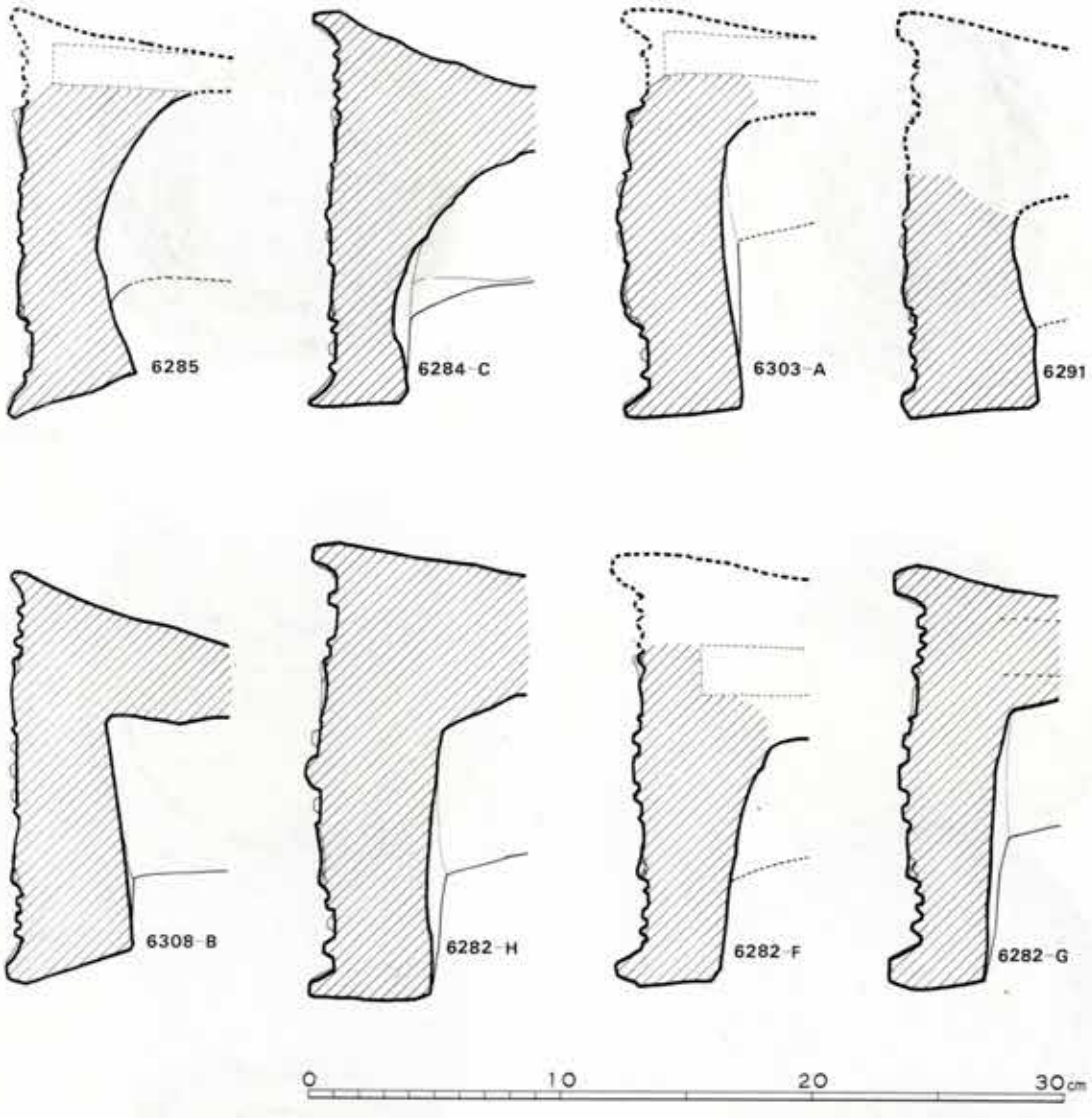
6226

6227—B

6235—C

6228

1 : 3


6285
6284-C
6303-A
6291
6308-B
6282-H
6282-F
6282-G
0
10
20
30cm

6285

6284—C

6282—G

6282—F

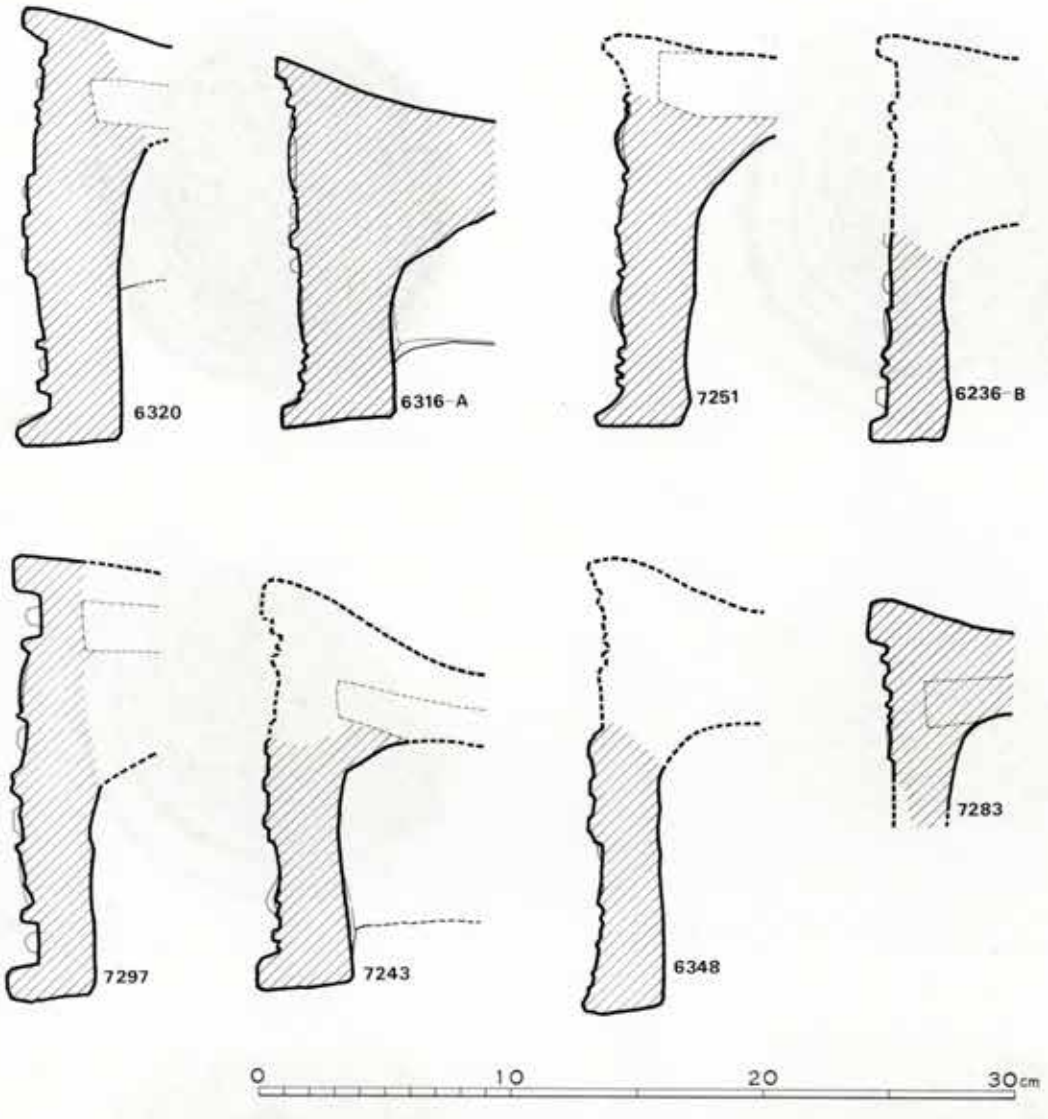
6291

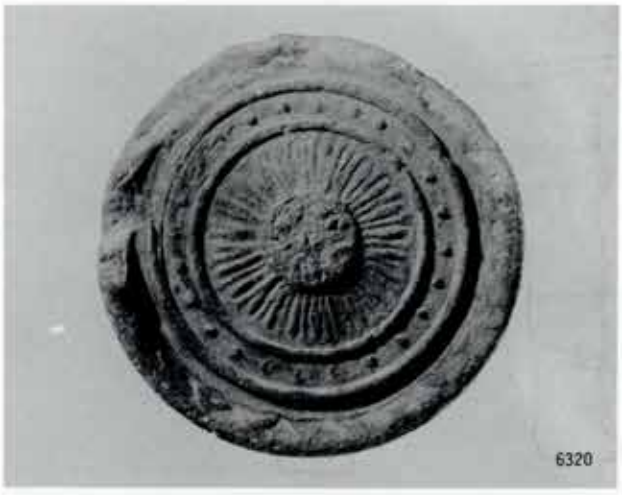
6282—H

6304—F

6308—B

1 : 3


6320
6316-A
7251
6236-B
7297
7243
6348
7283
0
10
20
30cm


6320

6316

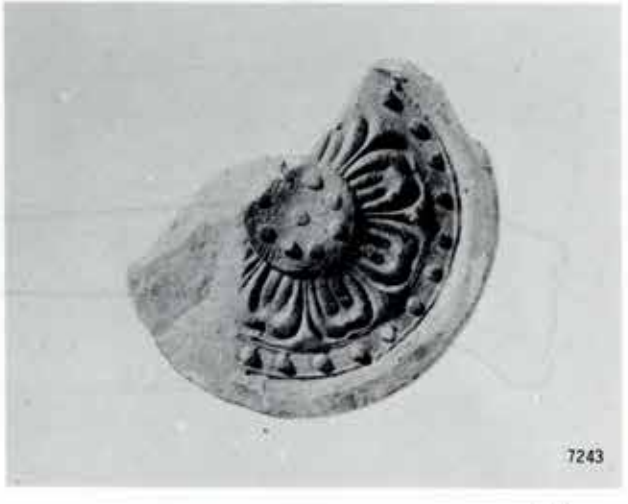
6236—B

6348

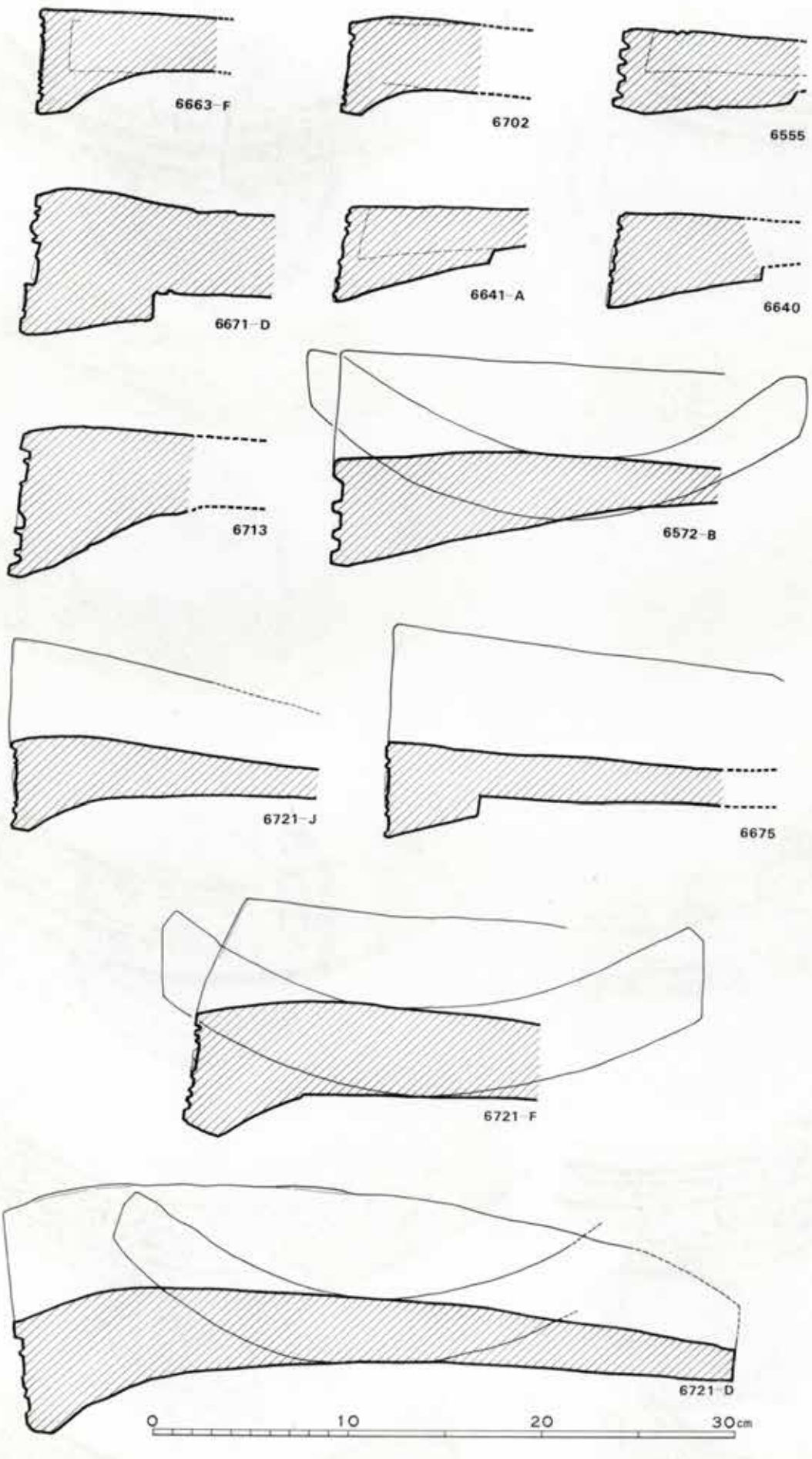
7297

7251

7283


7243

1 : 3


6663-F
6702
6555
6671-D
6641-A
6640
6713
6572-B
6721-J
6675
6721-F
6721-D
0
10
20
30cm

6555

6572—B

6640

6663—F

6641—A

6675

6671—D

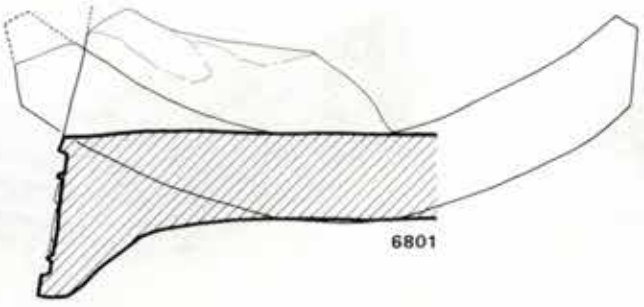
6721—D

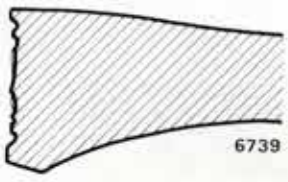
6713

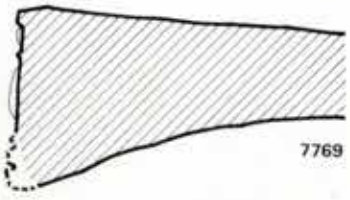
6721—F

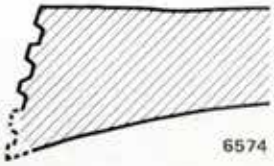
6702

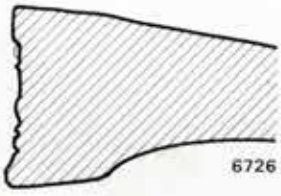
6721—J

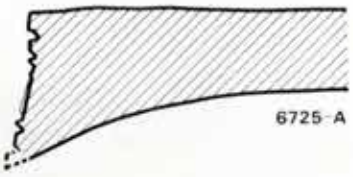

6801

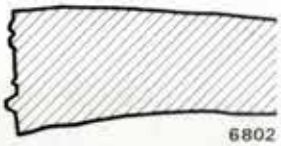

6739


7769


6574


6726


6725-A


6802

0
10
20
30cm

6725—A

6801

7769

6739

6726

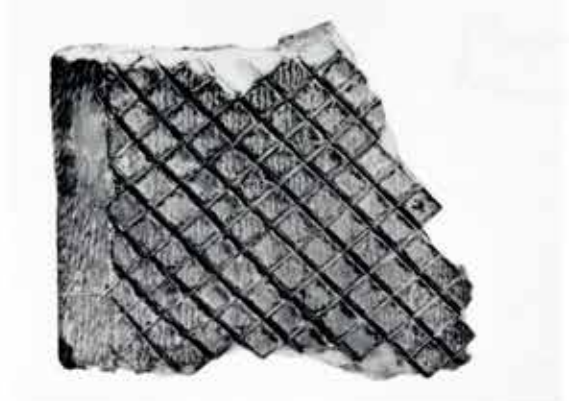
6802

6574

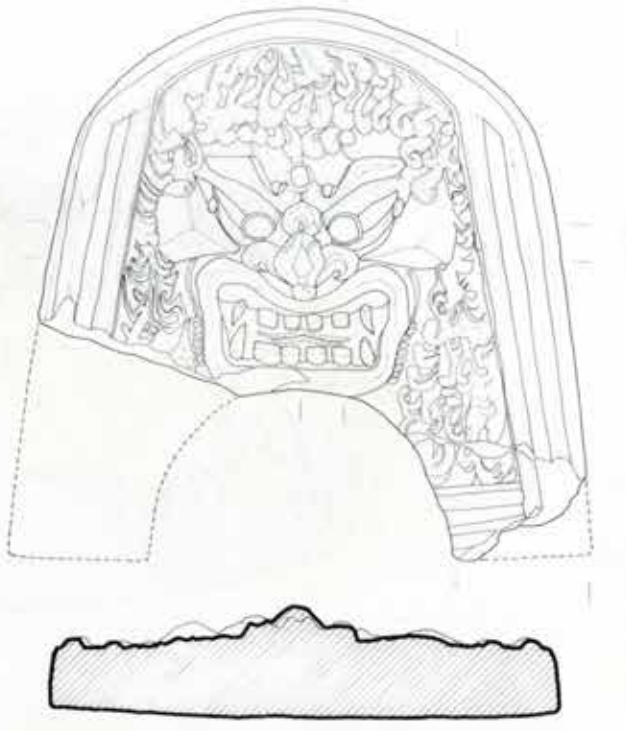
1 : 3

1 : 4

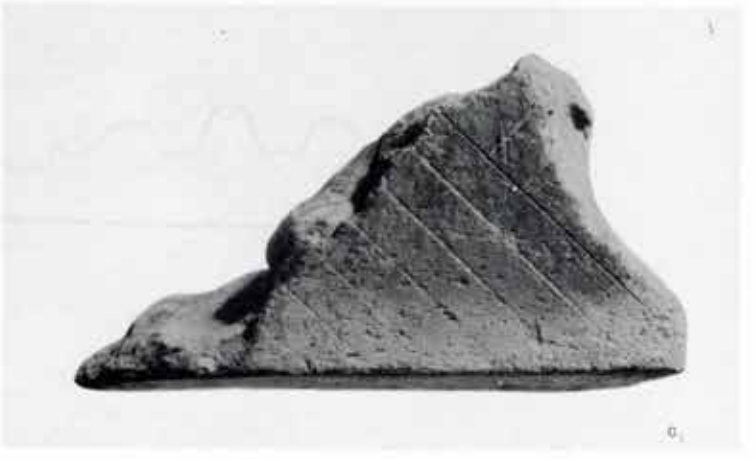
1 : 1



1 : 3



0
10
20
30 cm

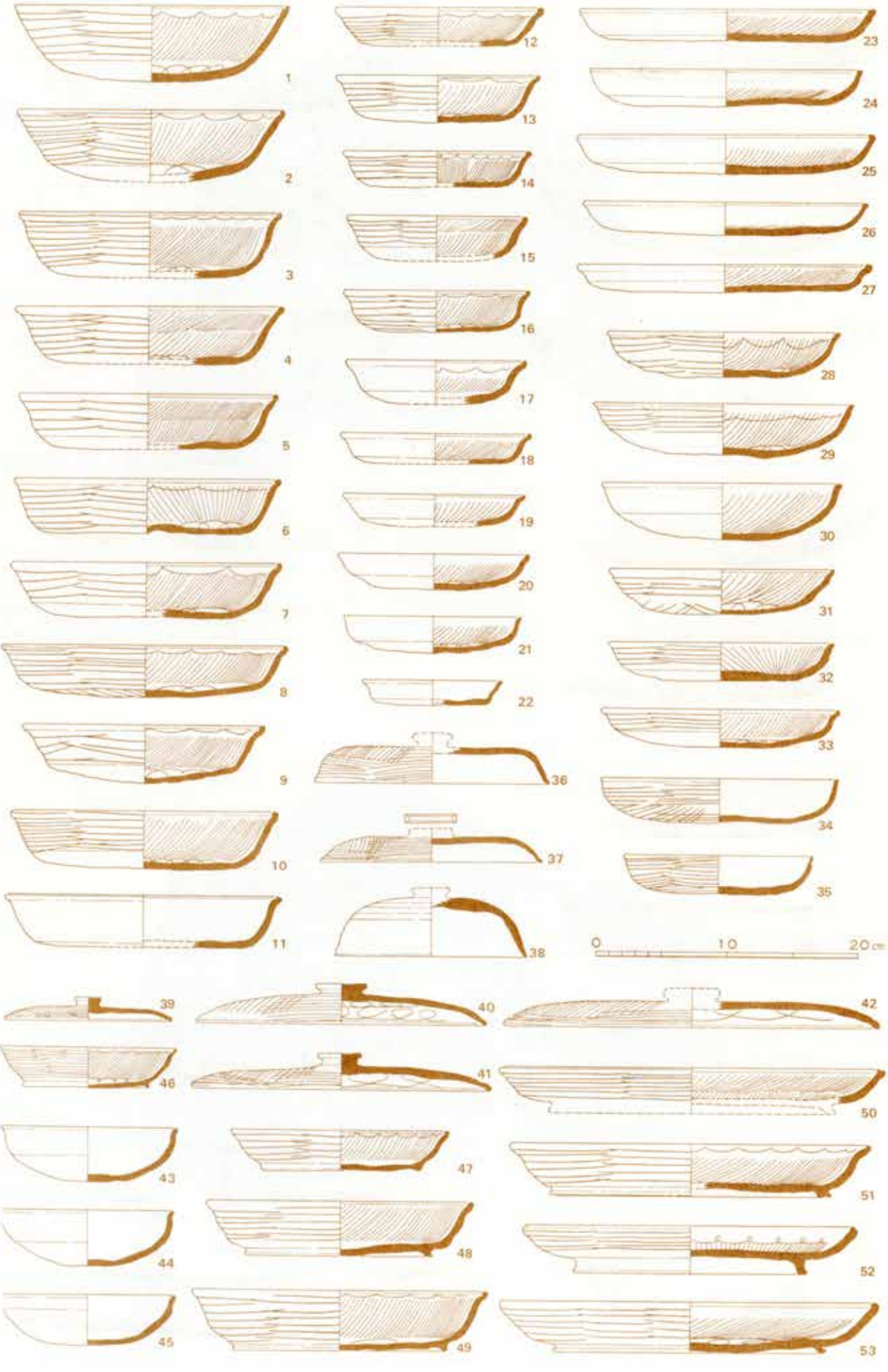


1 : 2

1 : 3

1 : 3

SD485


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
10
20cm
39
40
42
46
41
50
43
47
51
44
48
52
45
49
53

29

28

30

31

32

33

21

20

1

8

10

6

11

13

35

34

62

25

43

24

44

26

1:2.5

SD485

39

42

36

40

47

48

57

59

63

69

38

68

76

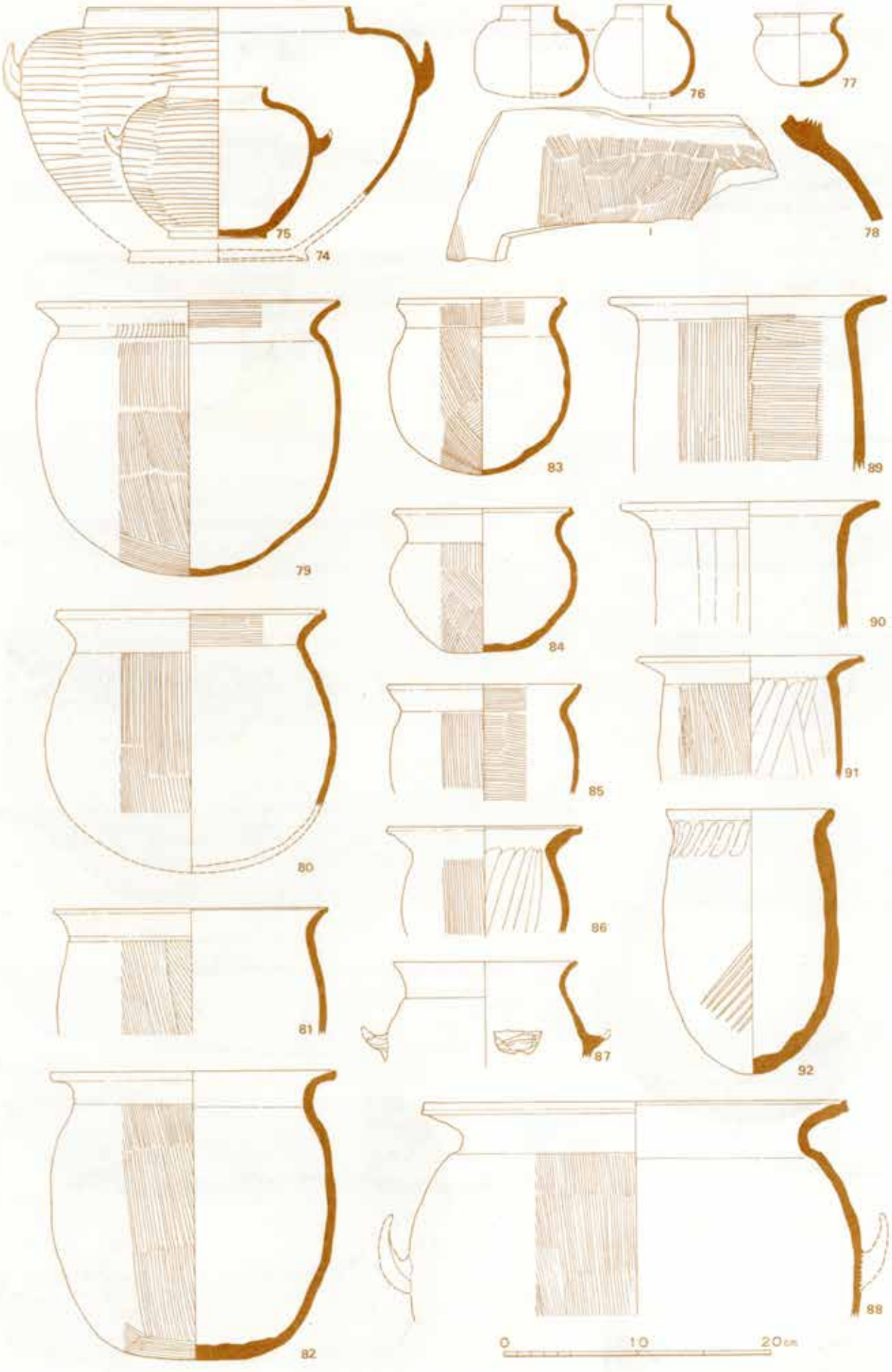
67

53

54

1 : 2.5

SD485



SD485　土師器

PL. 57

92

64

65

75

82

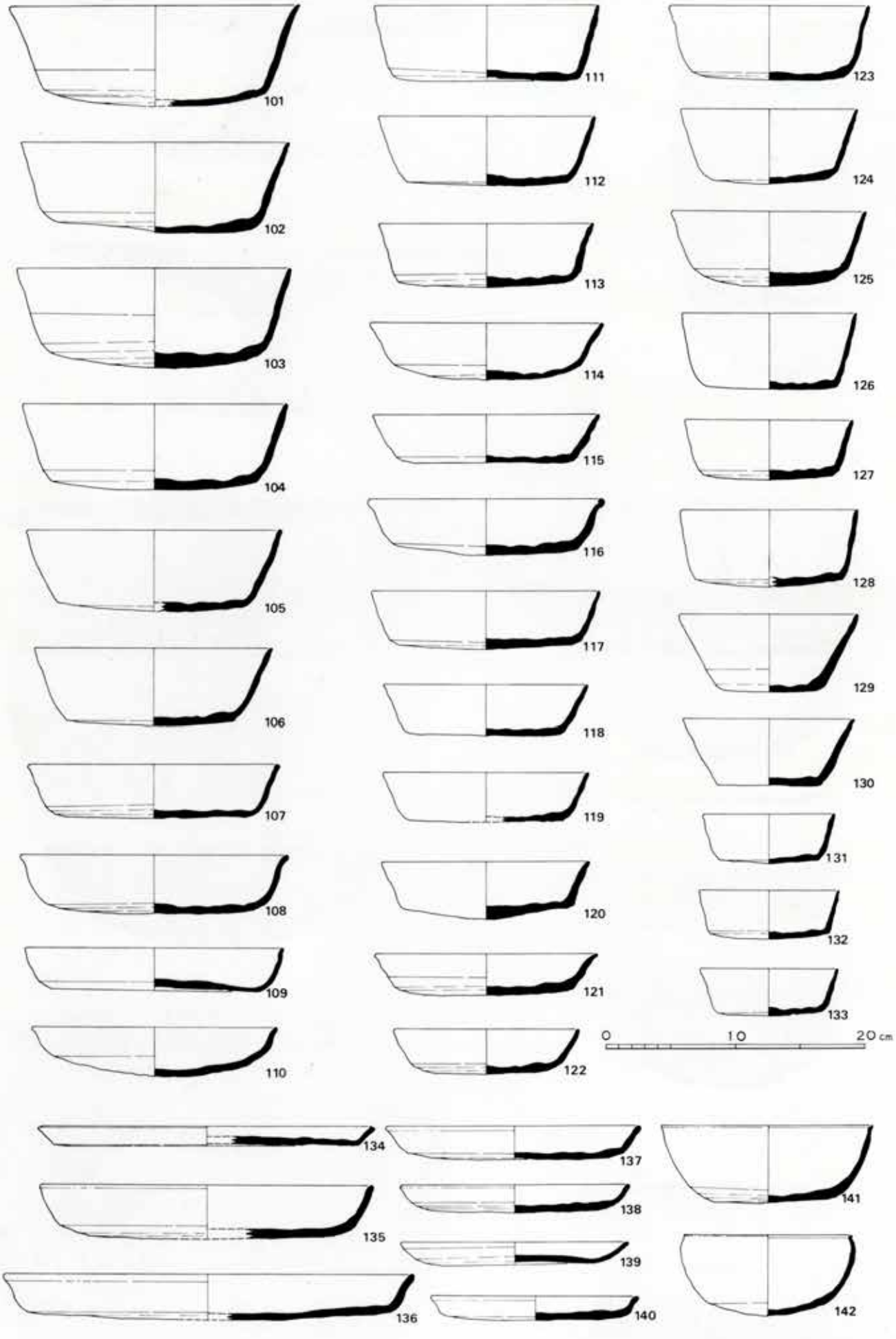
84

86

79

1 : 2.5

SD485


101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
0
10
20 cm
134
135
136
137
138
139
140
141
142

129

141

126

142

128

139

137

107

109

136

108

117

120

127

113

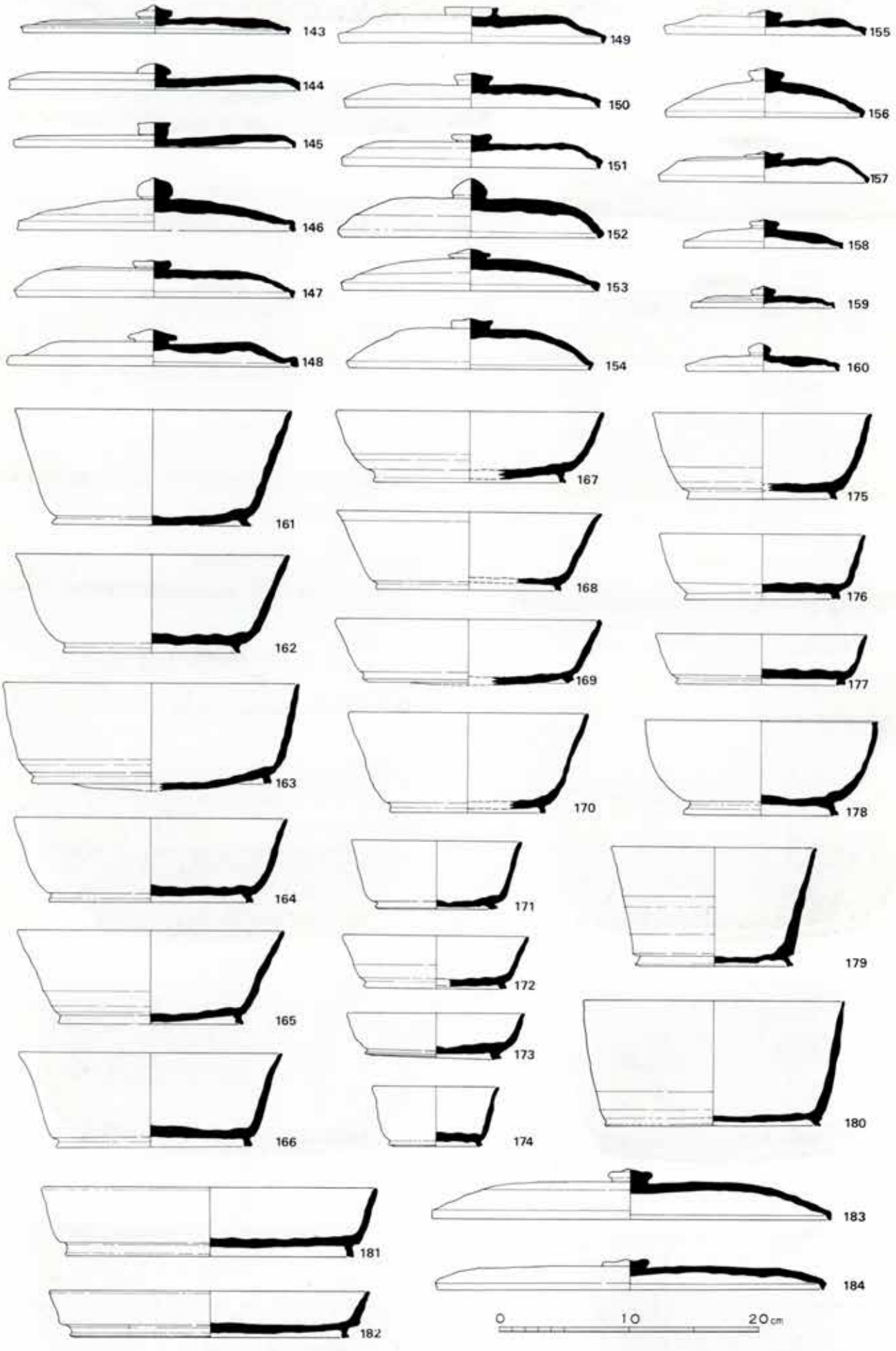
111

112

1:2.5 103

101

SD485


143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
0
10
20cm

159

184

153

144

145

154

152

149

147

150

143

151

148

165

161

166

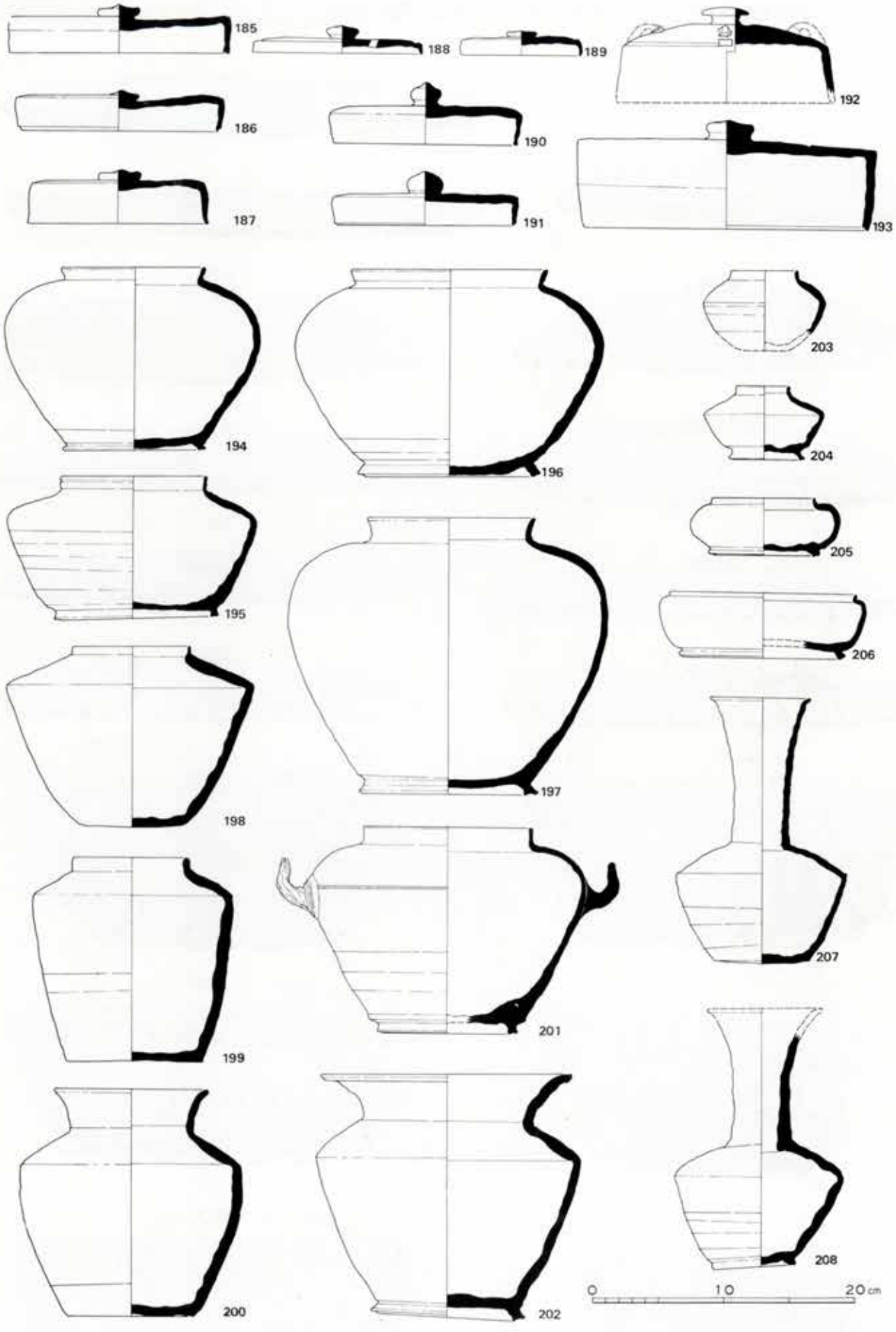
164

179

180

1 : 2.5

SD485


185
188
189
192
186
190
187
191
193
194
196
203
204
195
205
206
197
198
207
201
199
208
200
202
0
10
20 cm

SD485　須恵器

PL. 60

174

171

176

177

178

185

190

186

191

188

189

203

204

205

193

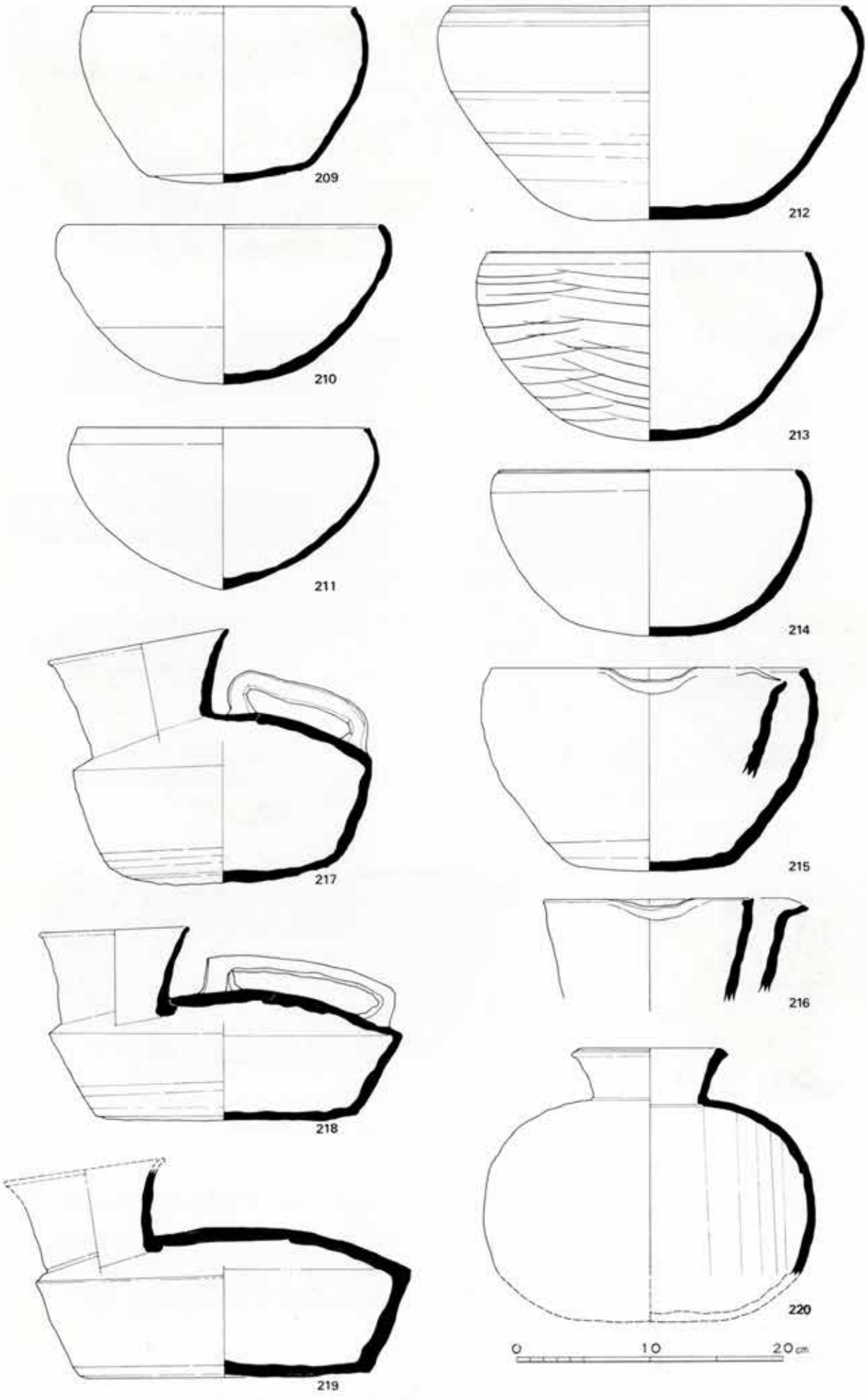
136

182

235

1 : 2.5

SD485



SD485　須恵器

PL. 61

207

208

199

1:2.5

200

215

209

211

213

212

198

219

195

217

196

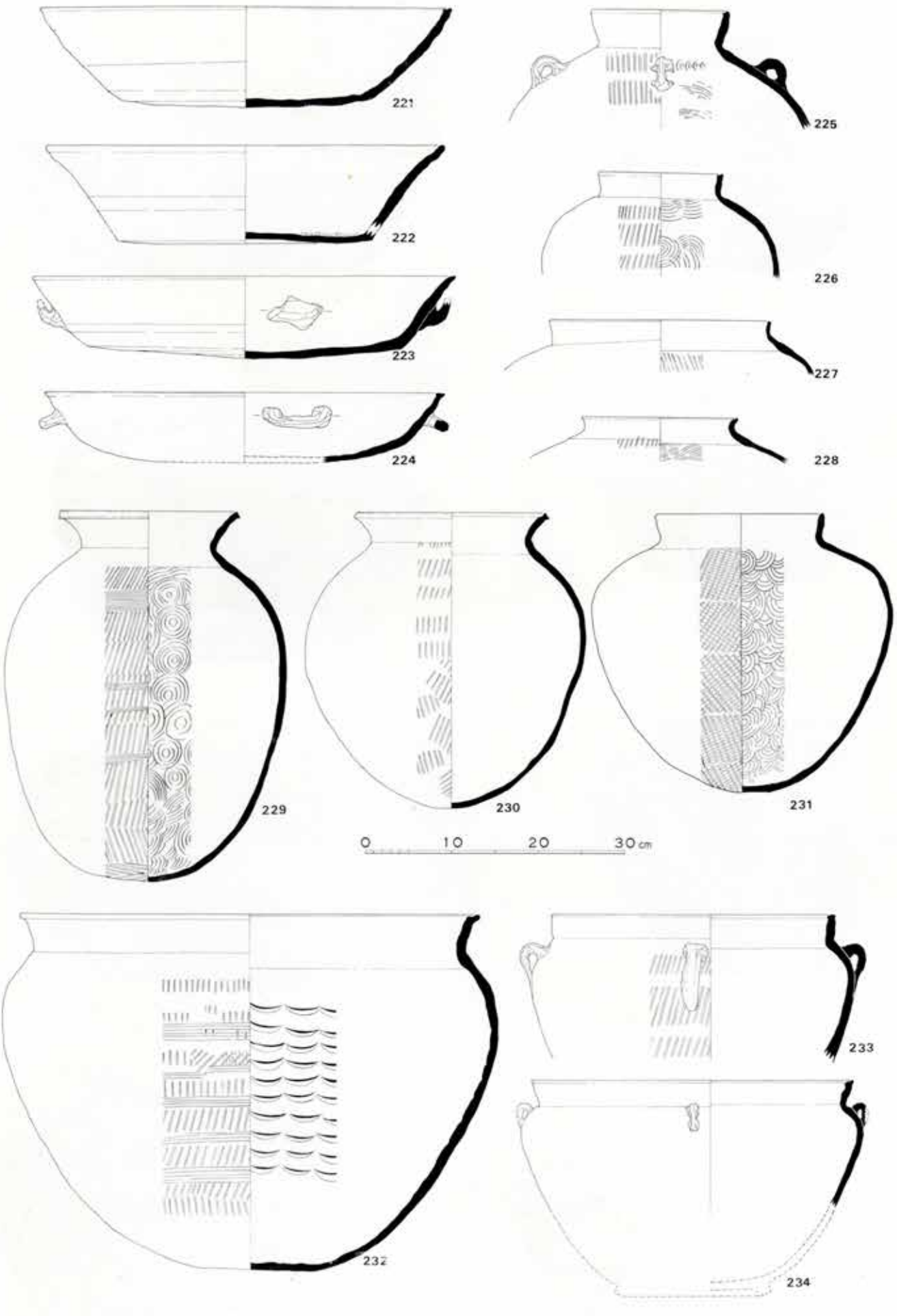
218

201

1 : 3

197

SD485


221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
0 10 20 30 cm
232
233
234

221

222

223

230

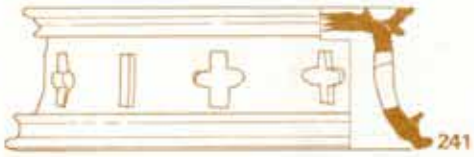
225

231

229

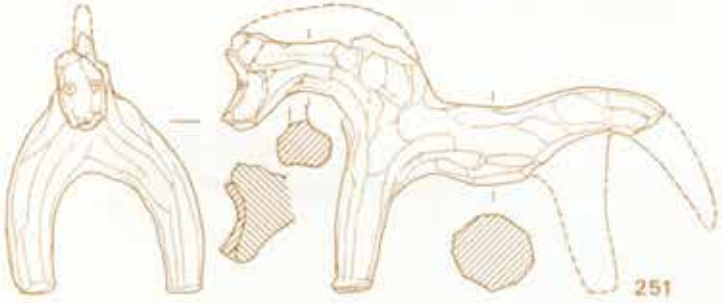
1 : 2.5

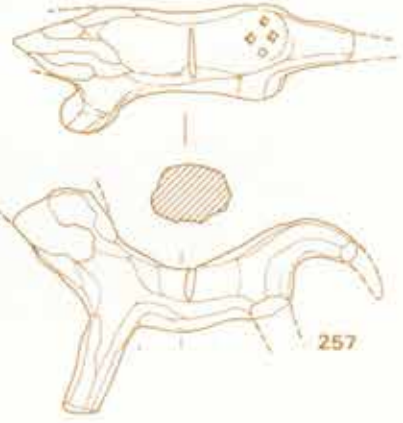
SD485

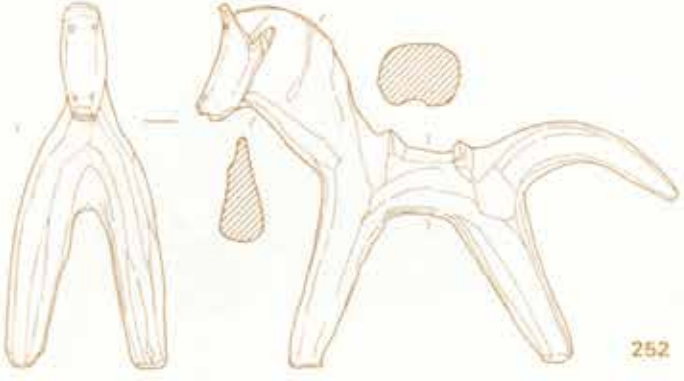

241

242

243


251

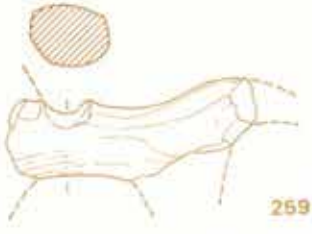

257

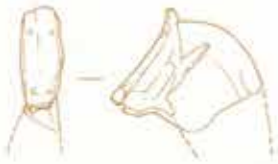

252

258

253

255


259


254

256

260

241

253

243

251

252

1 : 2

10

3

8

18

6

2

13

36

14

1

21

30

47

12

27

28

40

29

118

93

38

72

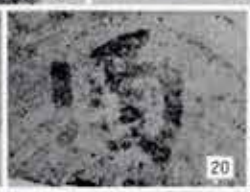
92

91

90

124

58


20

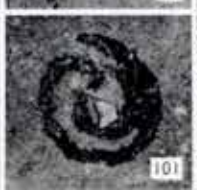
41

94

50

62

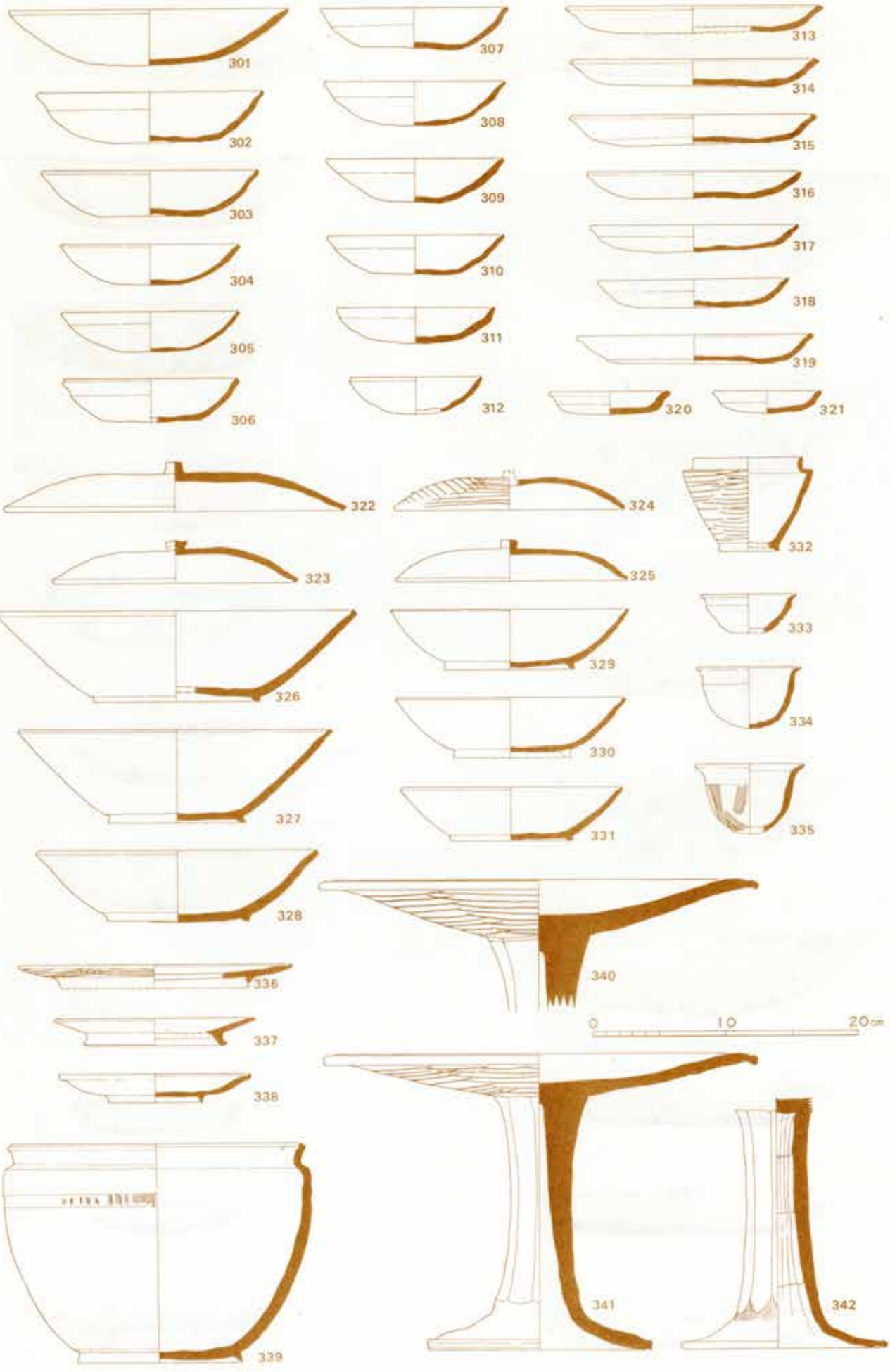
80


101

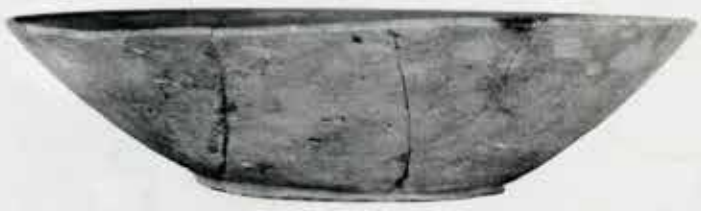
121

120

SD650A


301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
0
10
20cm
341
342

322


326

327

328

329

301

316

317

319

314

325

302

303

306

305

310

309

311

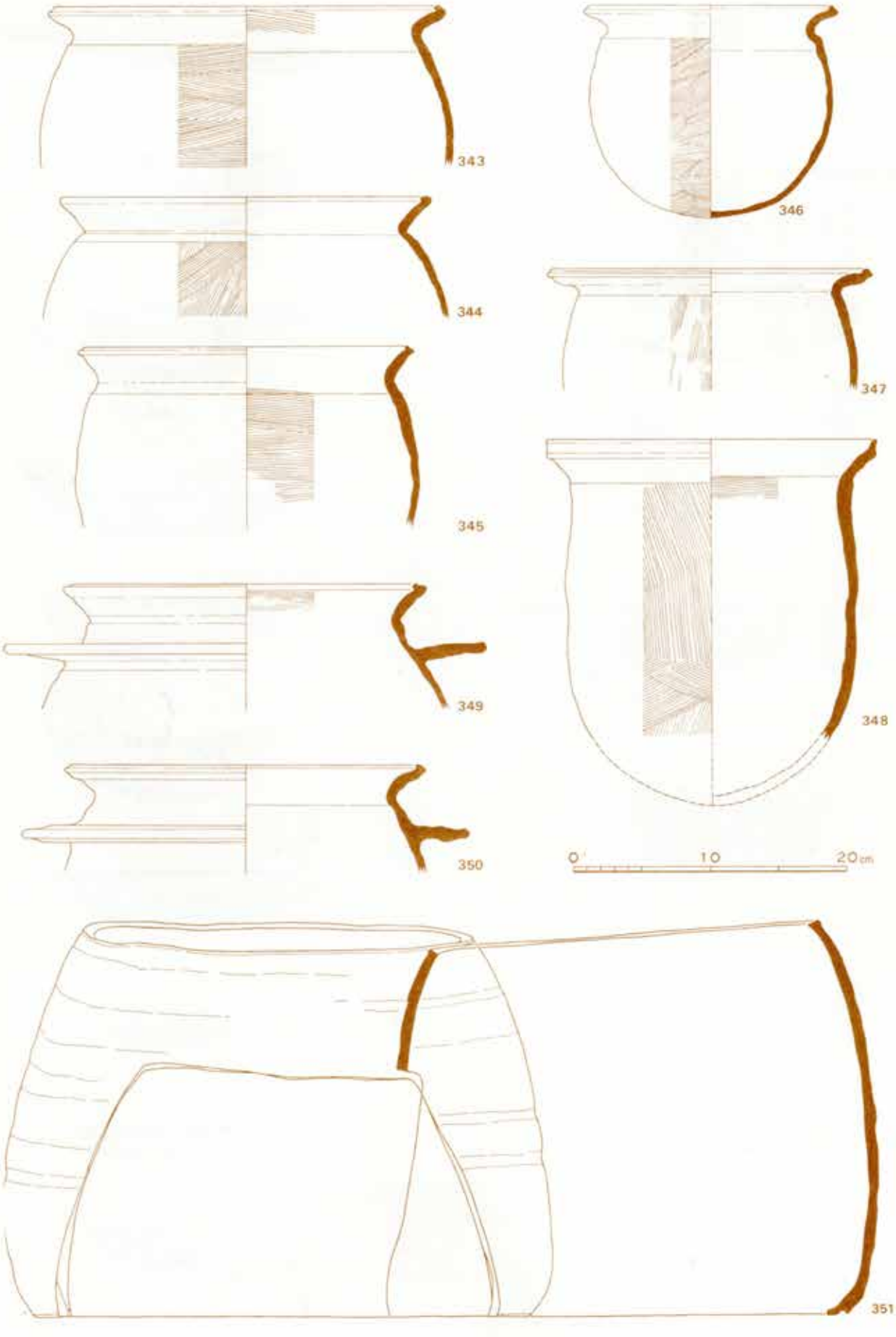
321

320

337

338

SD650A



342

341

334

339

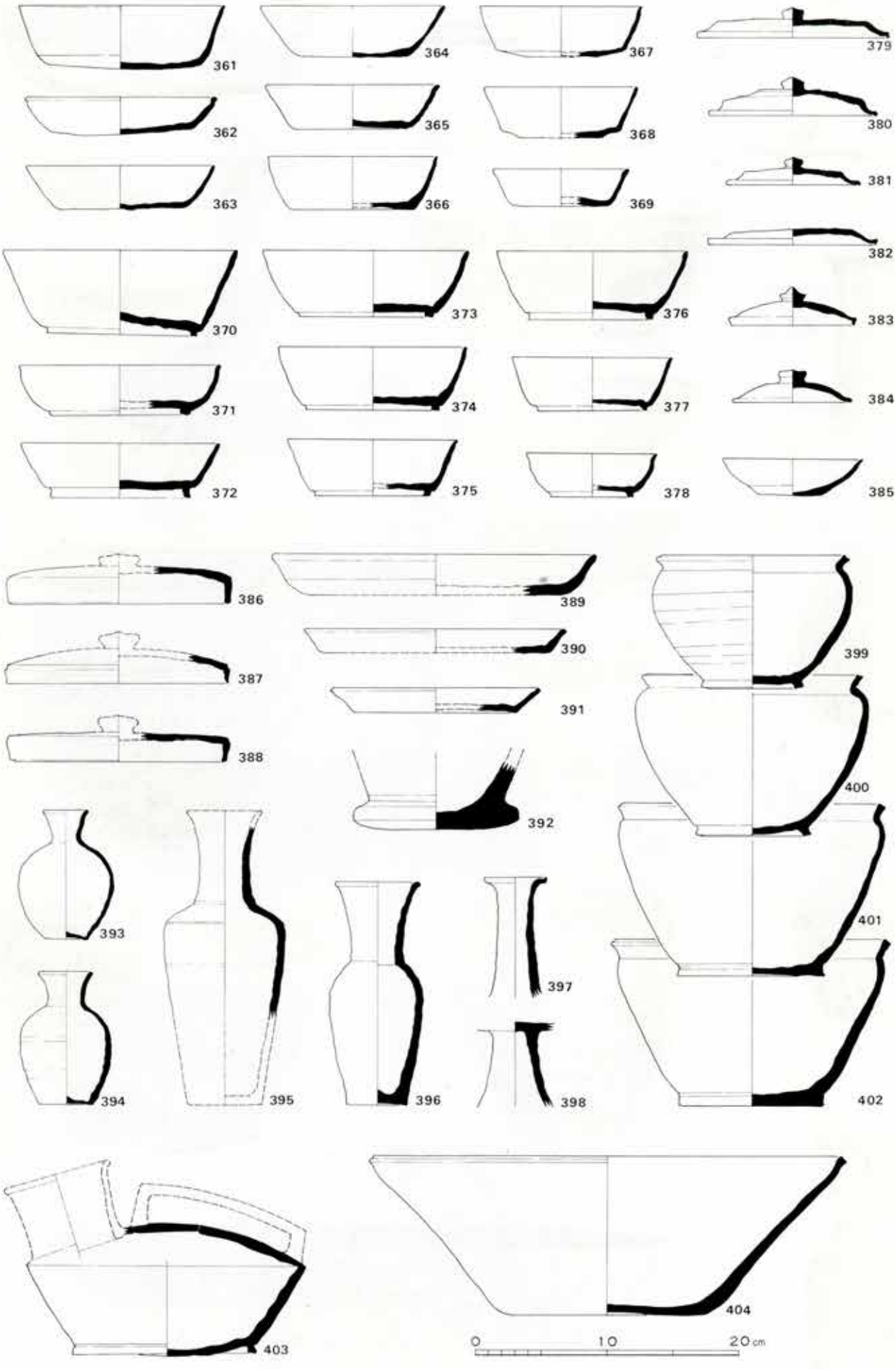
332

1 : 3

1 : 4

351

SD650A


361
362
363
364
365
366
367
368
369
379
380
381
382
370
371
372
373
374
375
376
377
378
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
399
400
401
402
393
394
395
396
397
398
403
404
0
10
20cm

SD650—A 須 恵 器

PL. 68

383

380

361

384

382

362

397

370

363

371

367

377

391

393

385

399

394

408

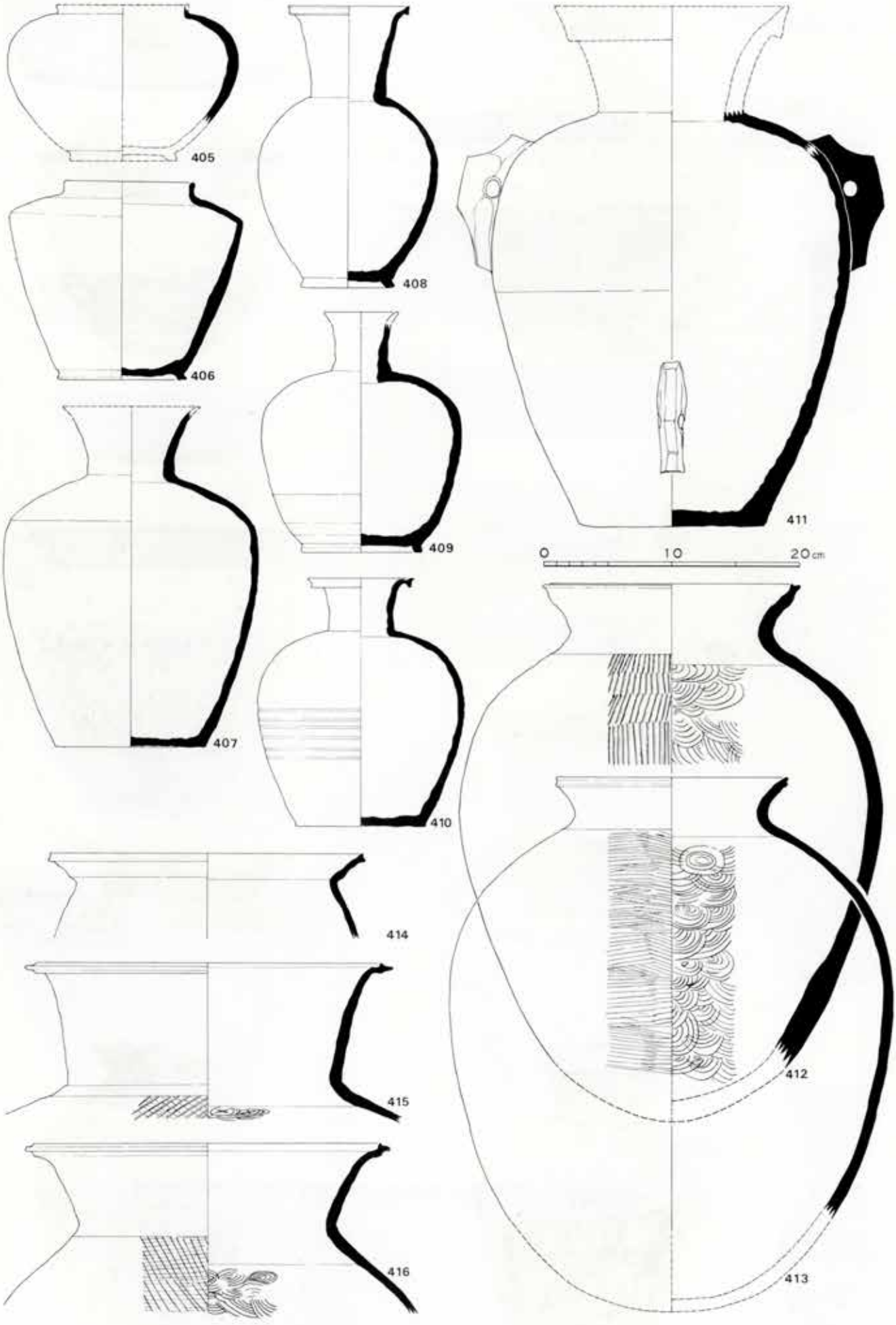
401

396

404

1 : 3

SD650A



410

409

403

406

415

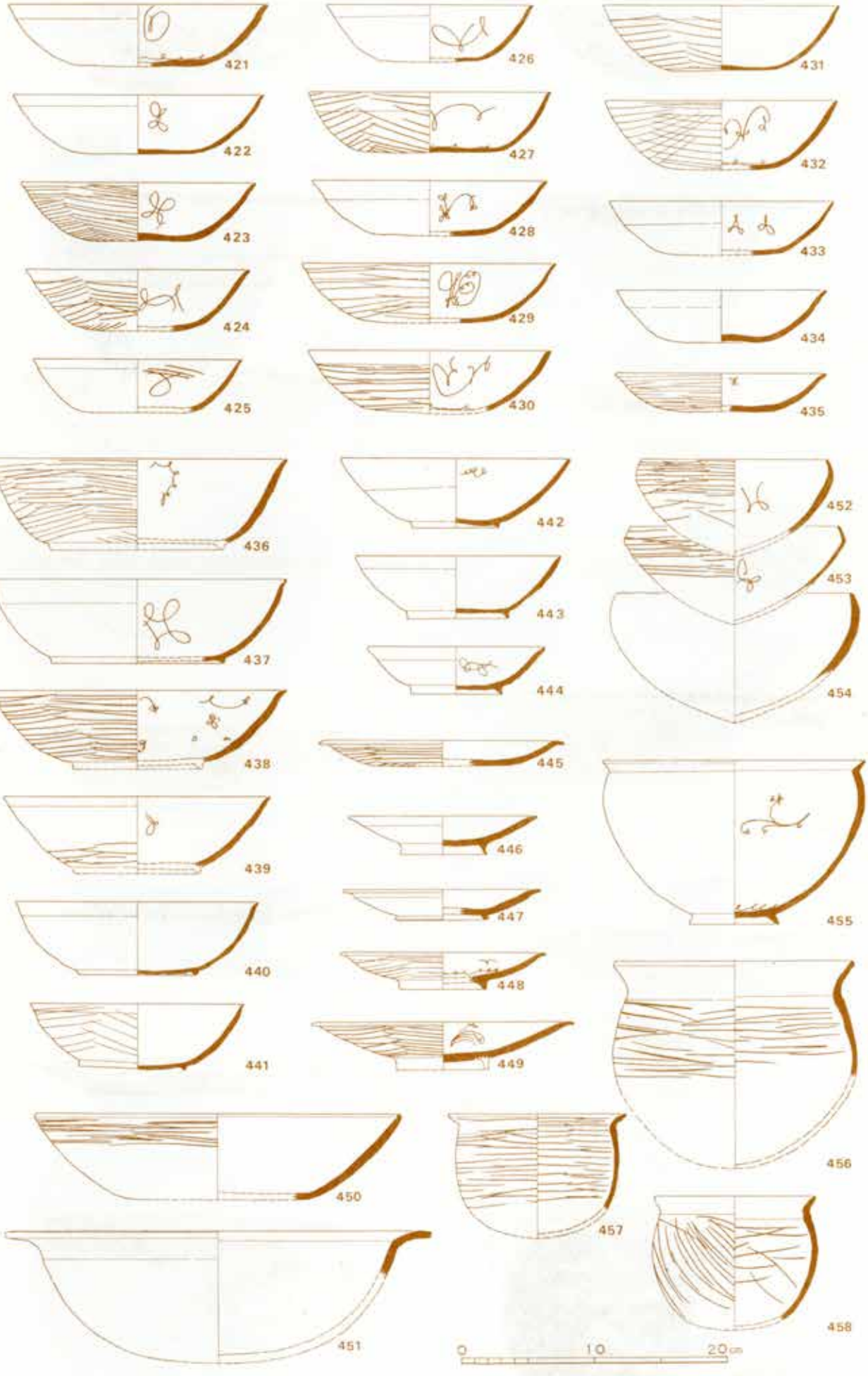
416

411

412

1 : 3

SD650A


421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
0
10
20cm

441

430

443

421

444

422

448

423

453

428

452

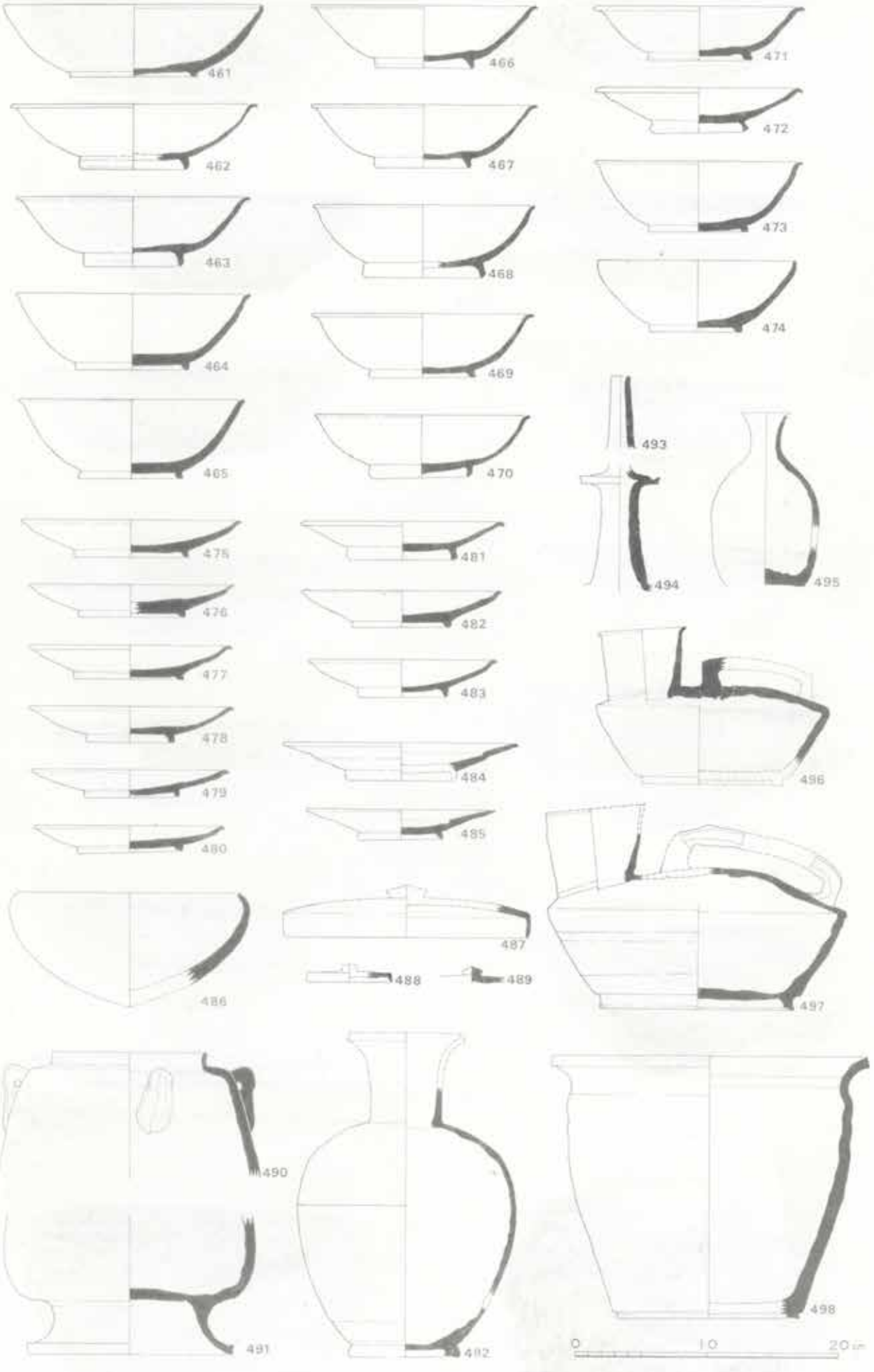
434

445

456

455

SD650A


461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
0
10
20 cm

493

485

476

477

494

483

490

491

496

497

461

463

466

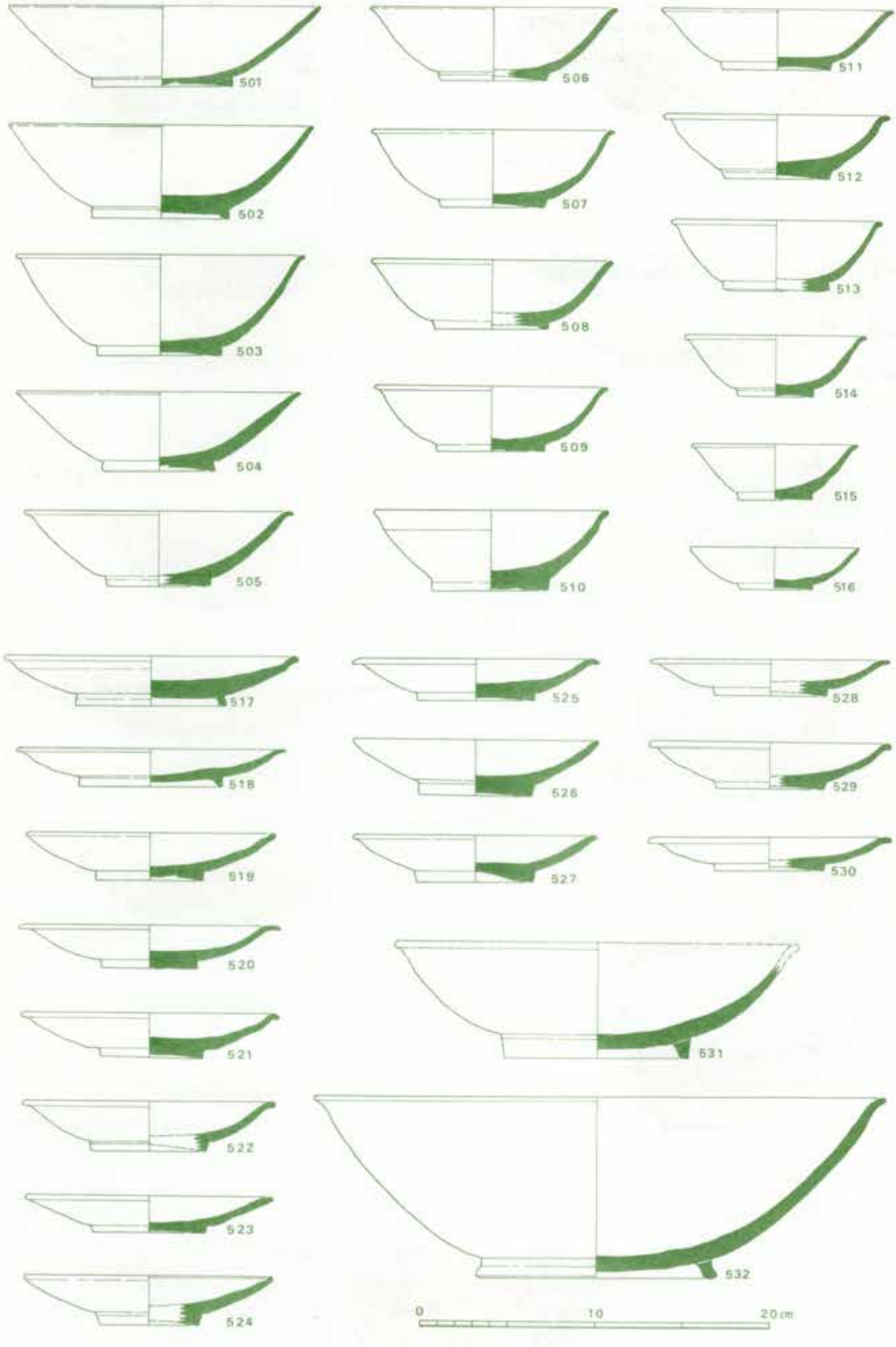
465

474

486

498

SD650A


501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
0
10
20cm

SD650—A 緑釉陶器

505

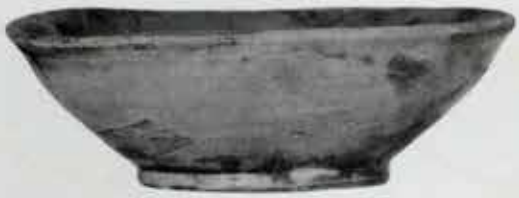
501

506

502

507

504



510

521

509

525

514

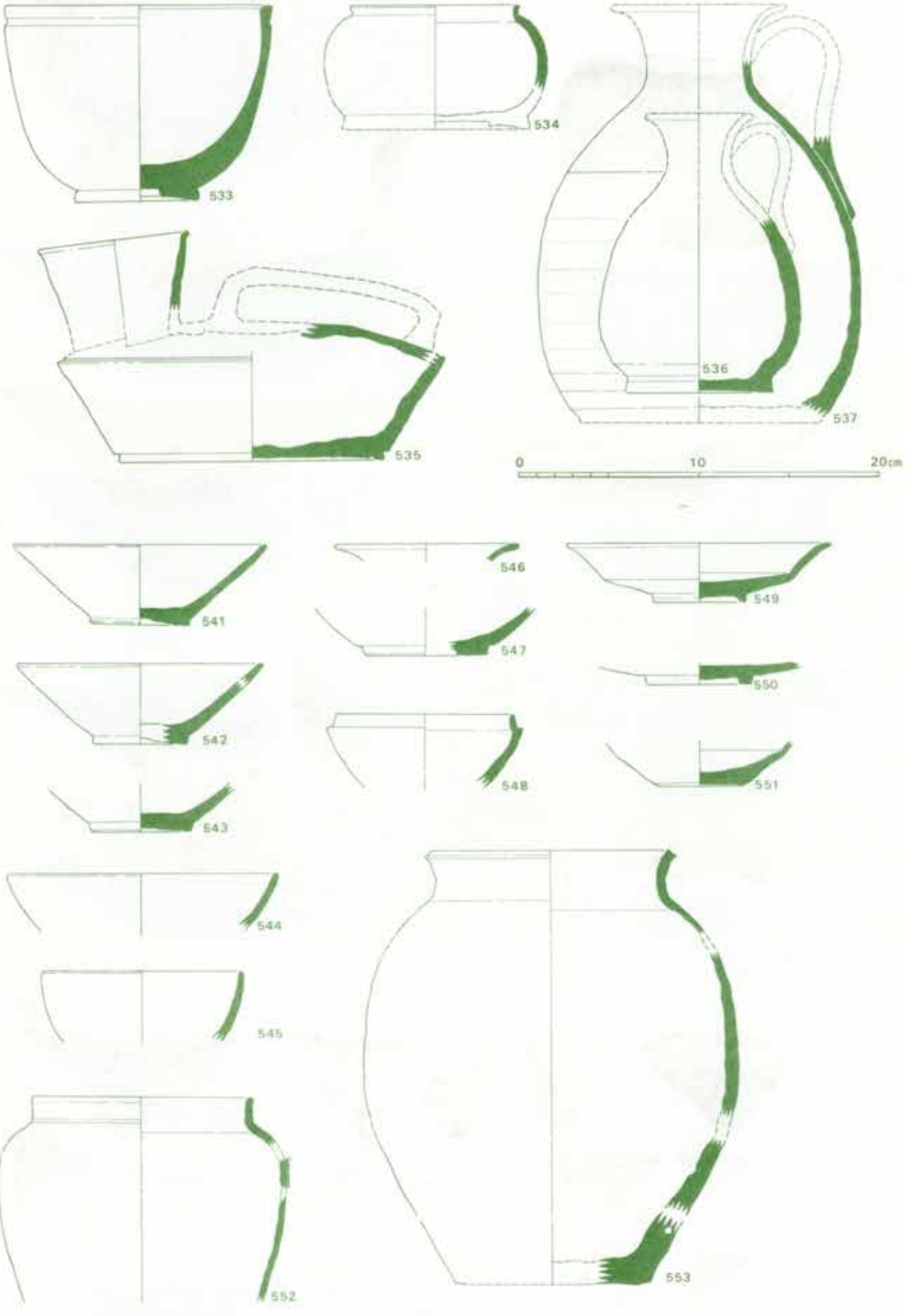
519

1 : 2

1 : 3

532

SD650A


533
534
535
536
537
0
10
20cm
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553

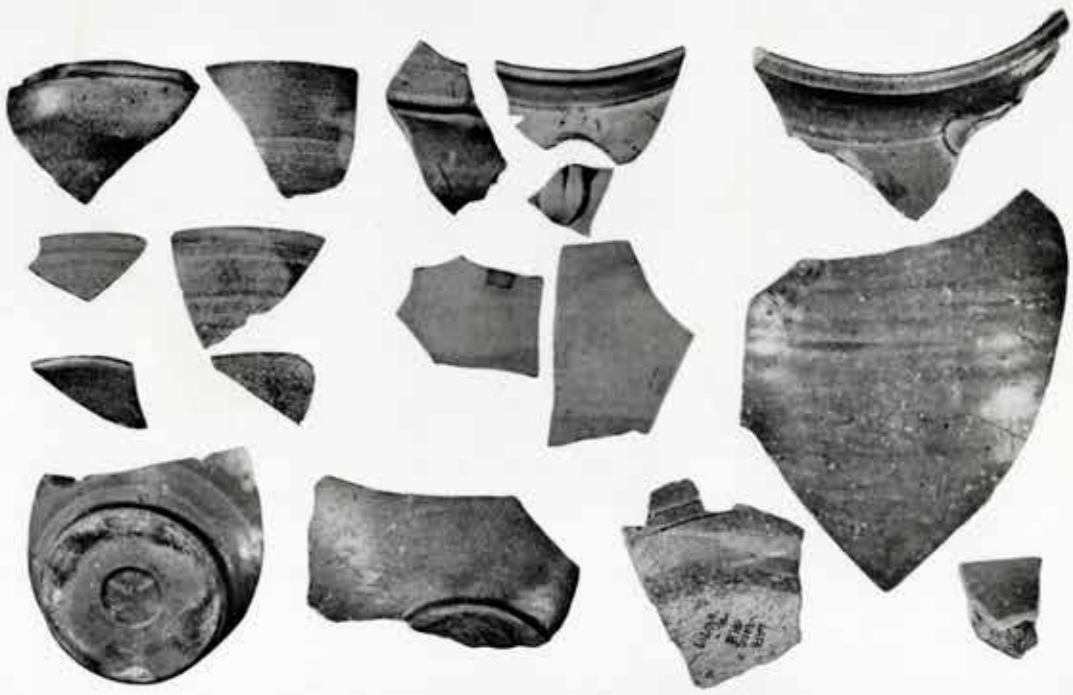
534

533

549

541

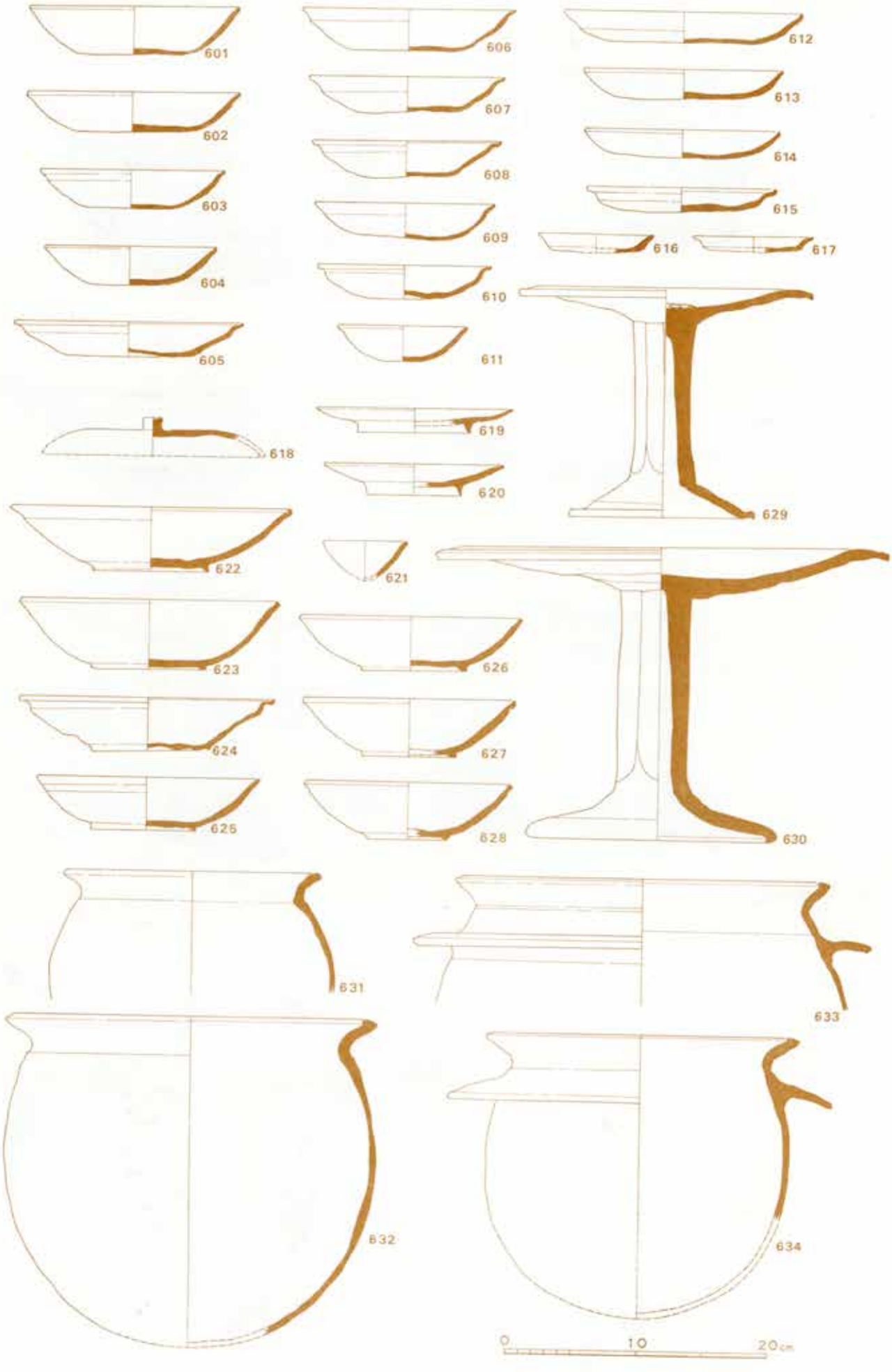
白 磁



青 磁

1 : 2

SD650B


601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
0
10
20cm

SD650—B 土 師 器

PL. 74

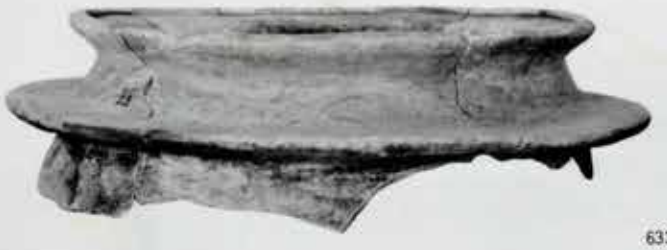
623

624

625

620

634


633

601

607

603

609

610

629

621

612

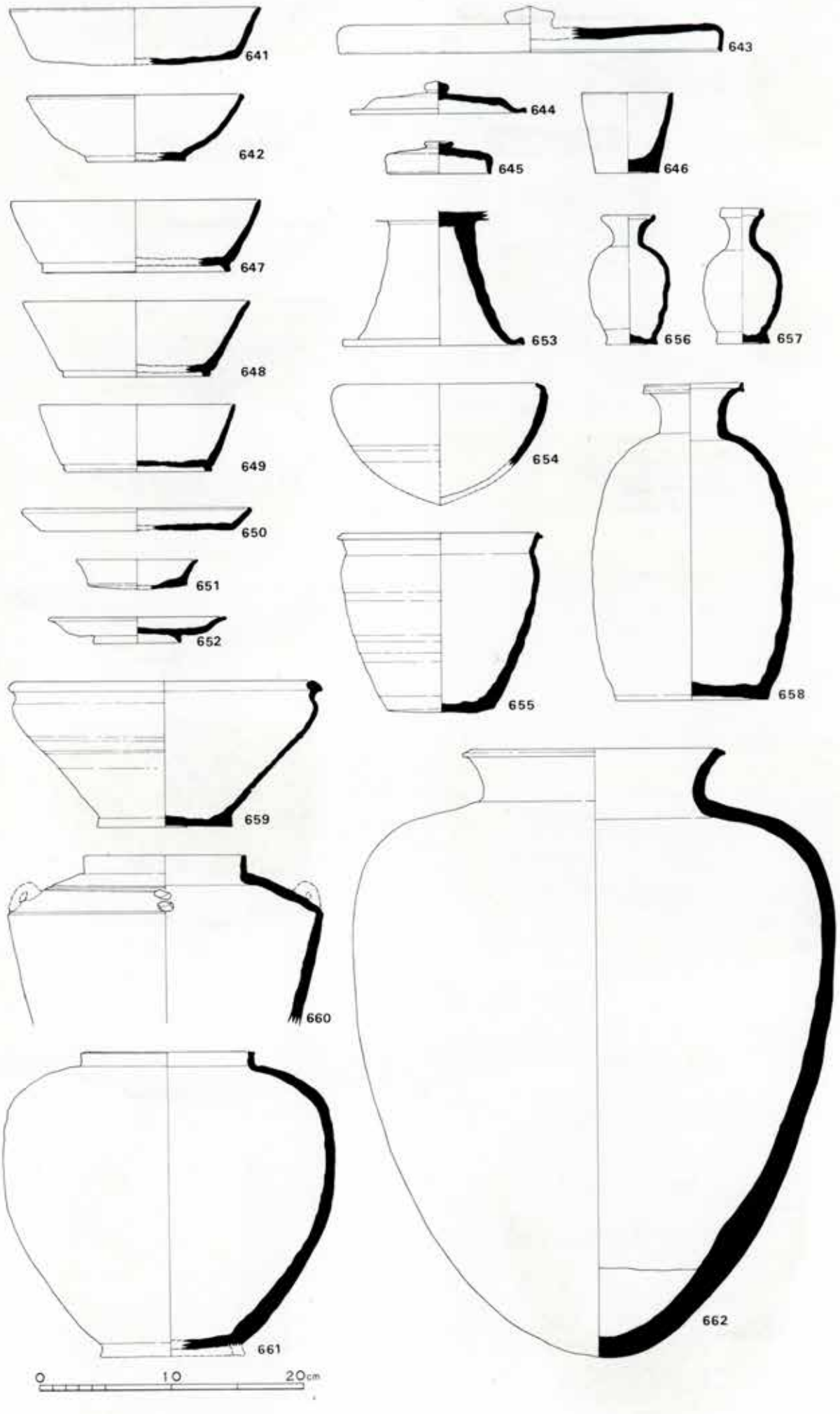
613

614

1 : 3

630

SD650B


641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
0
10
20cm

656

644

645

657

646

659

660

662

641

642

648

649

652

655

658

SD650B

671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
0
10
20cm

671

673

679

677

698

680

681

685

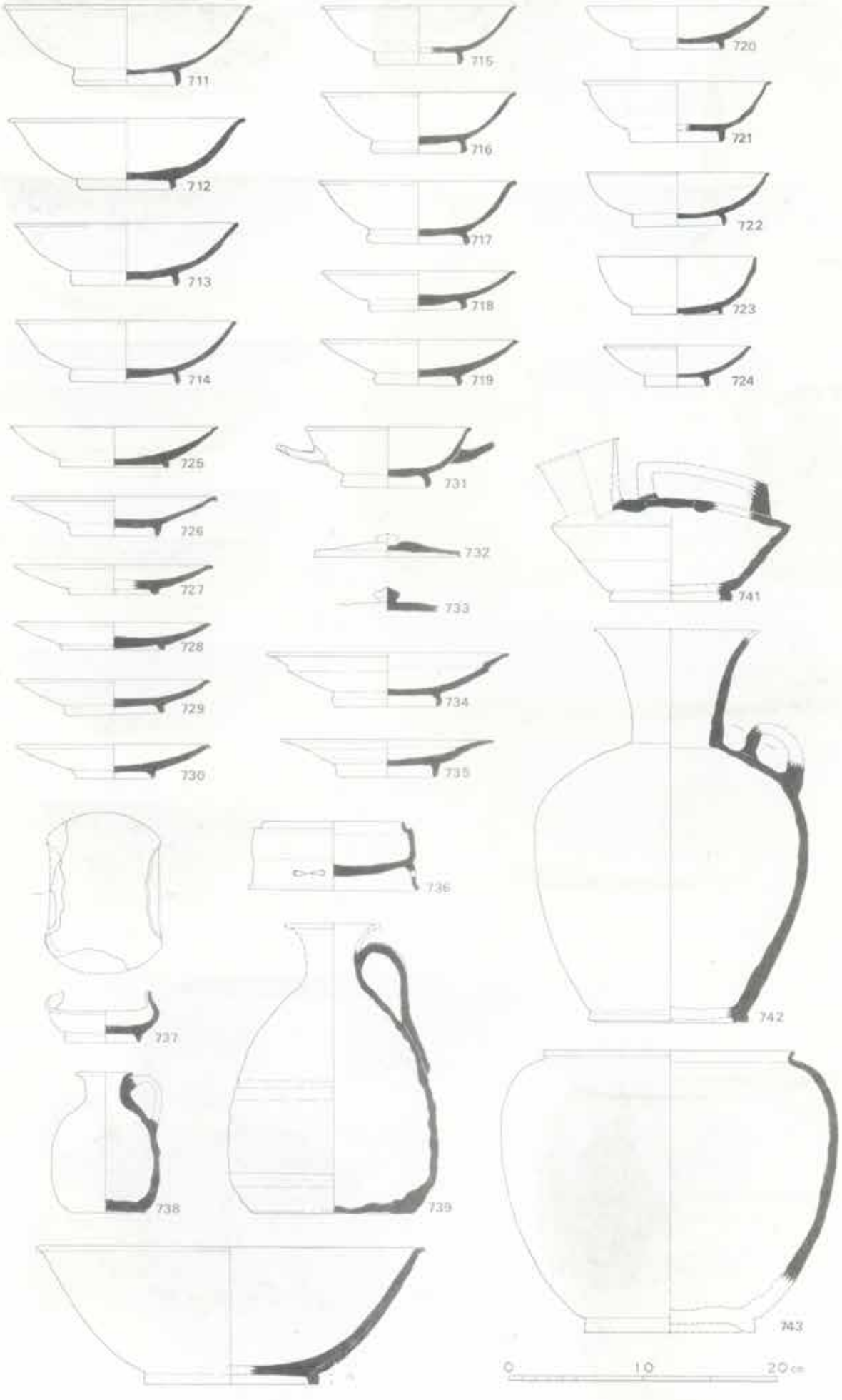
686

690

694

701

SD650B


711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
741
742
743
0
10
20cm

SD650—B 灰釉陶器

PL. 77

737

736

735

728

730

738

739

714

717

740

724

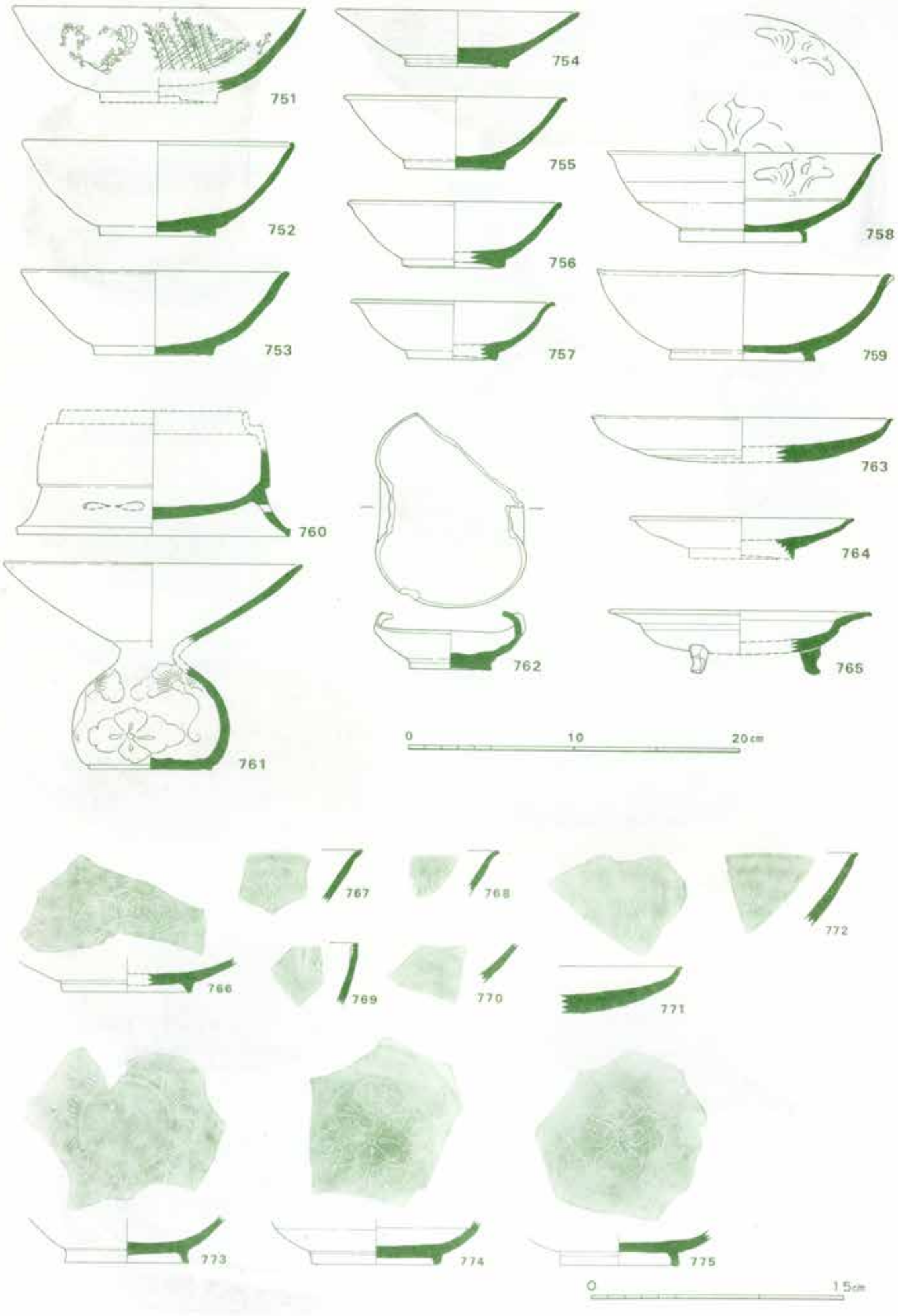
731

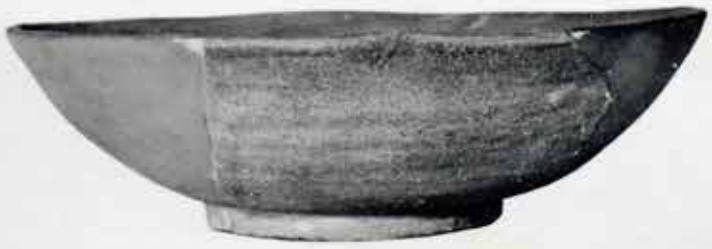
1 : 3

743

742

SD650B


751
754
755
752
756
758
753
757
759
760
763
764
762
765
761
0
10
20cm
767
768
772
766
769
770
771
773
774
775
0
15cm

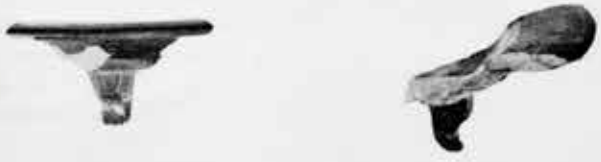


759

762

760

761



765

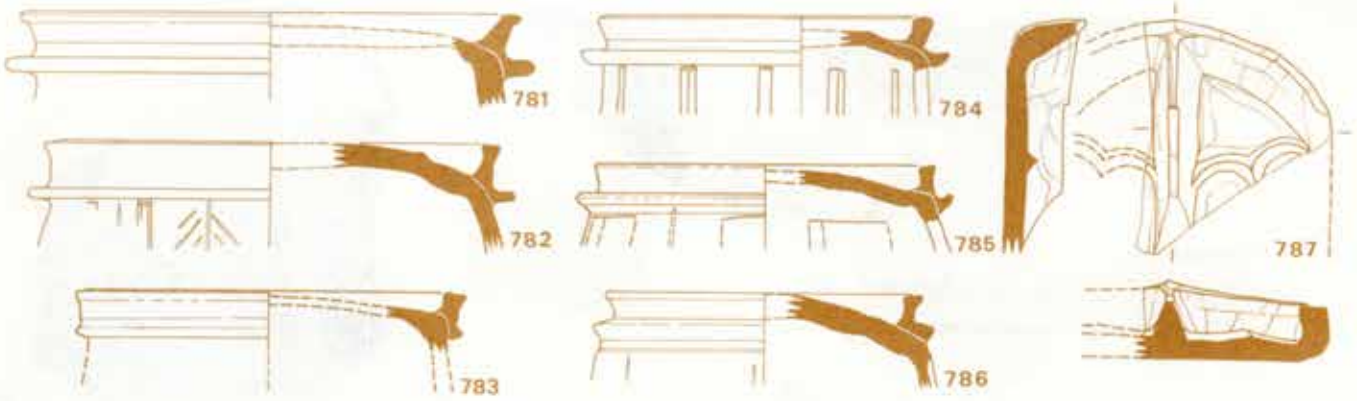
758

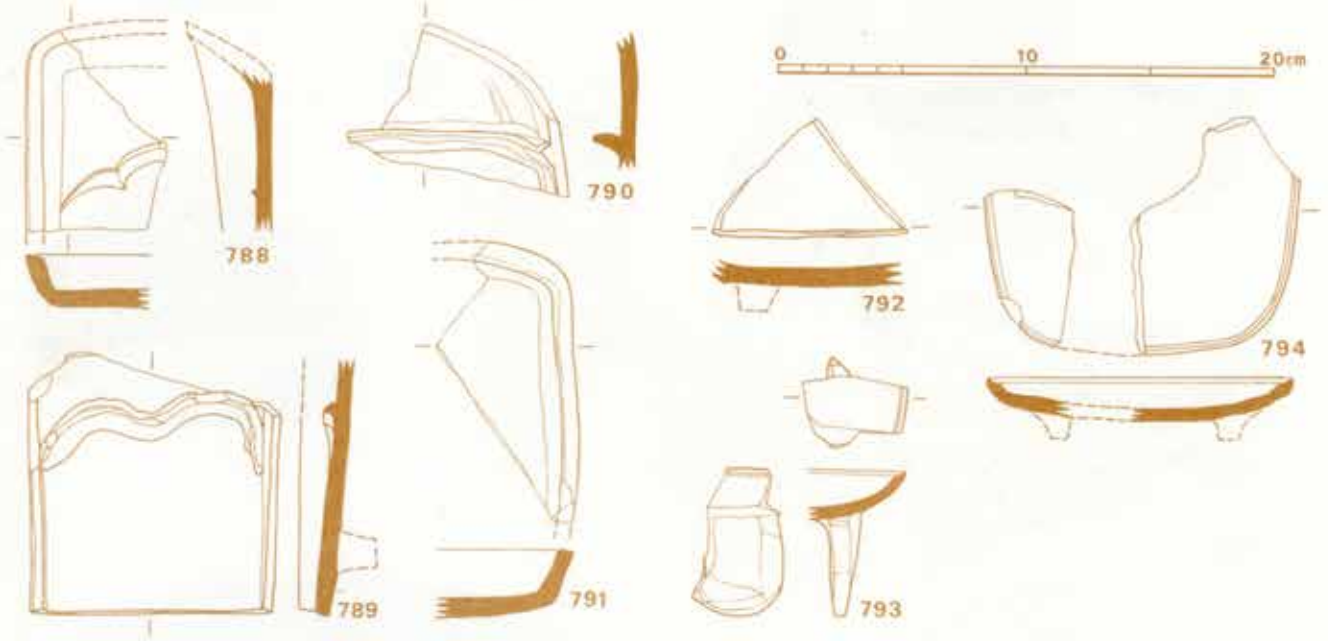
751

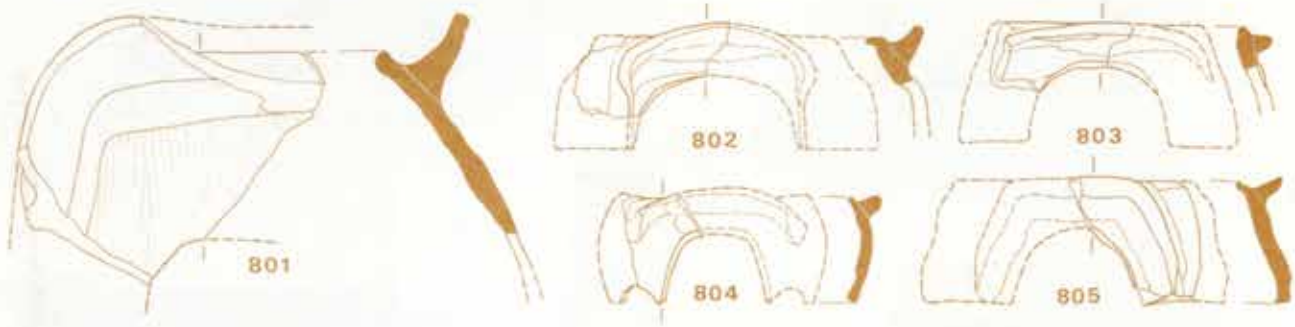
753

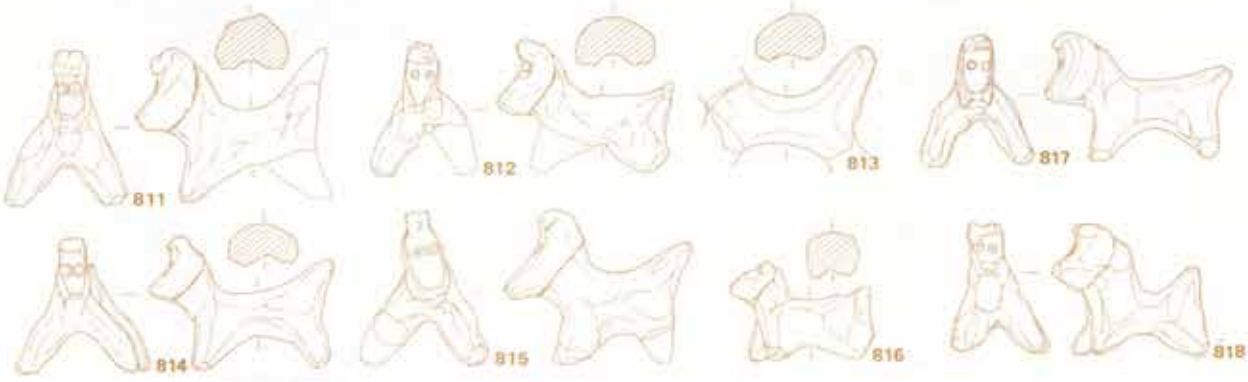
752

1 : 2


781
782
783
784
785
786
787


0
10
20cm
788
789
790
791
792
793
794


801
802
803
804
805


811
812
813
814
815
816
817
818

SD650　硯・土馬

781

784

782

783

785

786

788

787

791

790

793

789

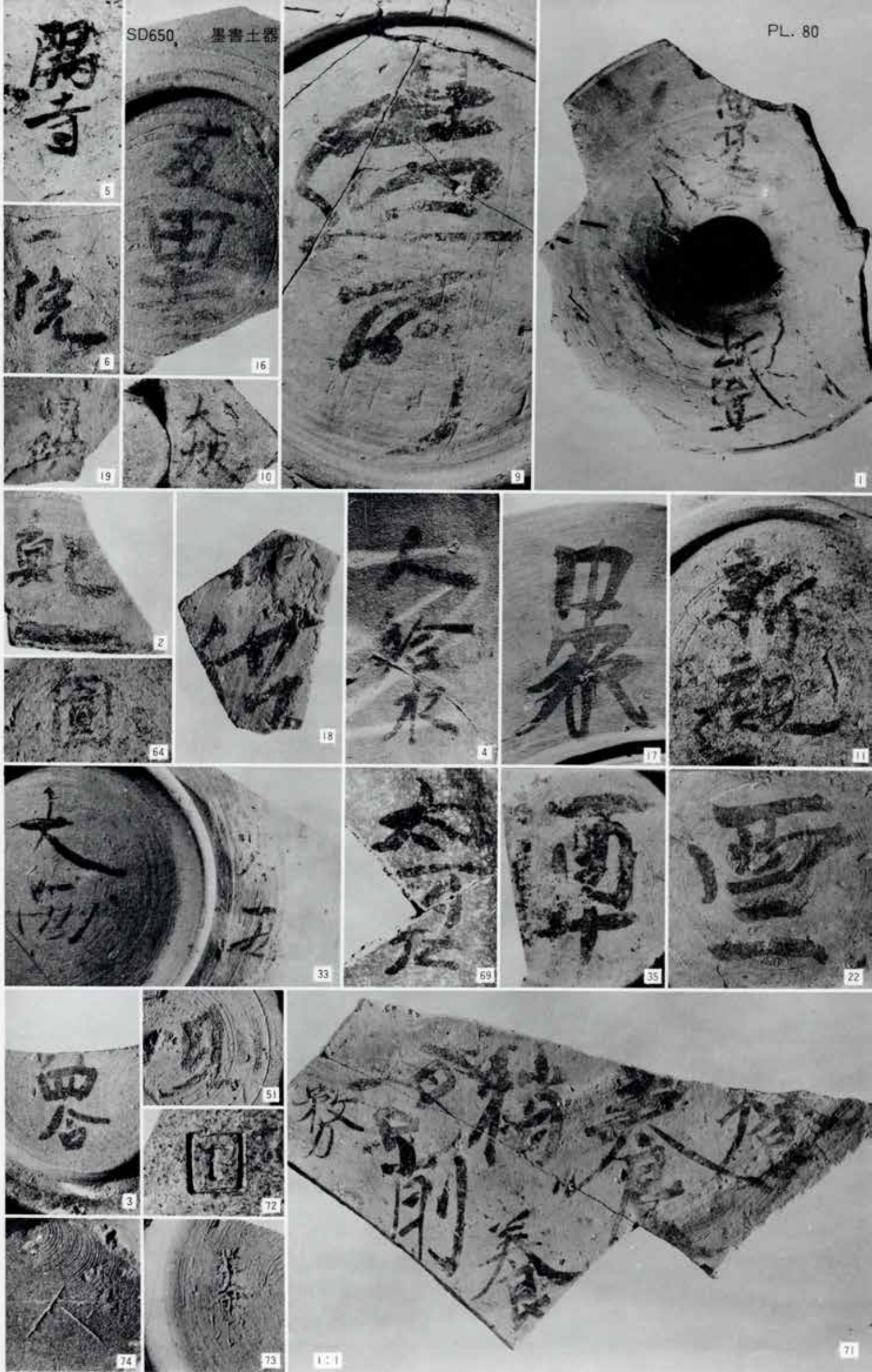
811

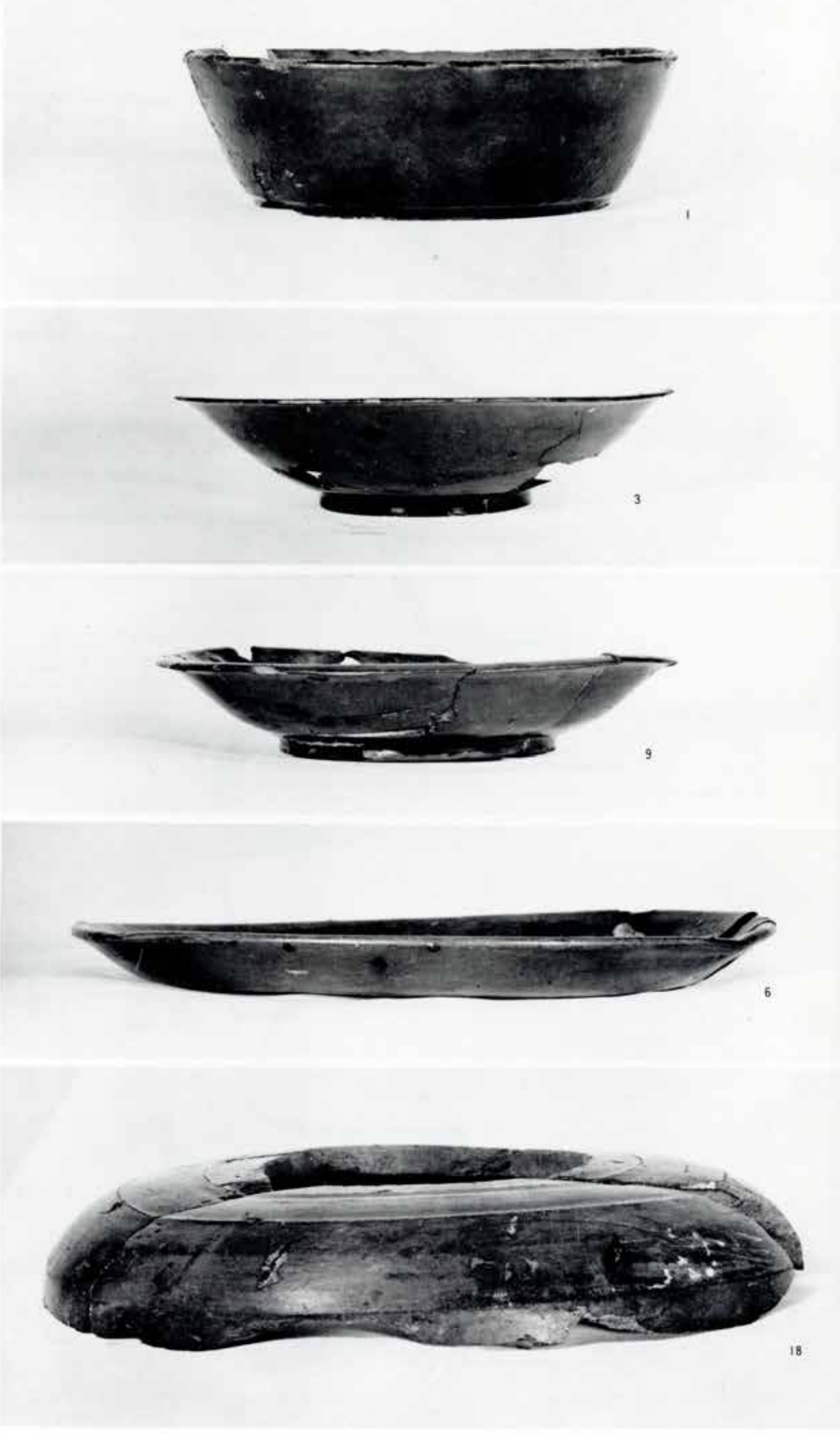
814

817

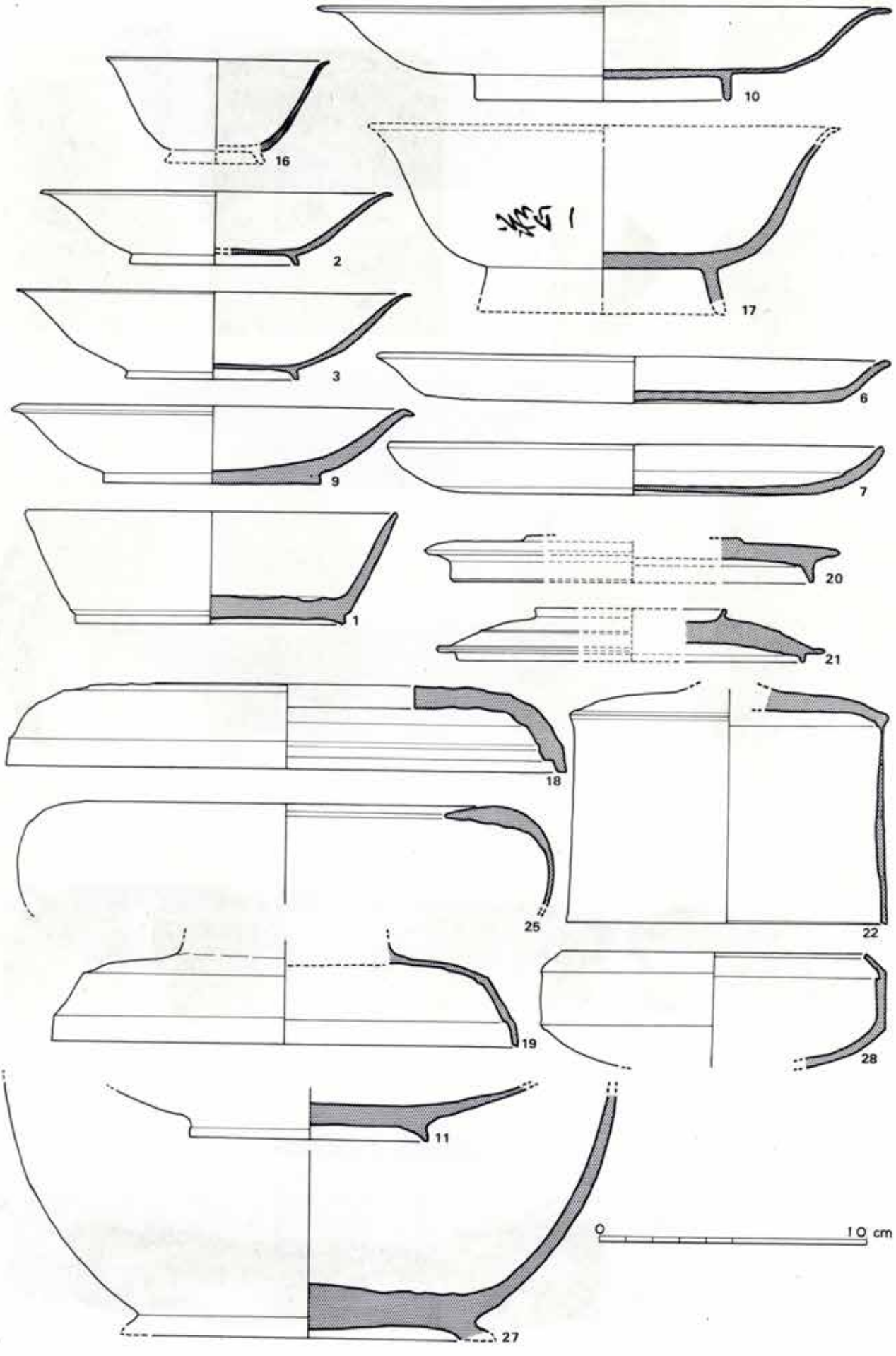
818

1 : 2

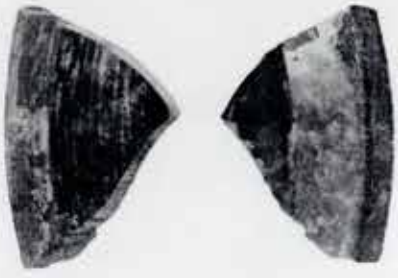

5
6
16
19
10
9
1
2
64
18
4
17
11
33
69
35
22
3
51
72
74
73
1:1
71



1 : 1.5


10
16
17
2
3
6
9
7
1
20
21
18
25
22
19
28
11
27
10 cm

28



24

22

20

19

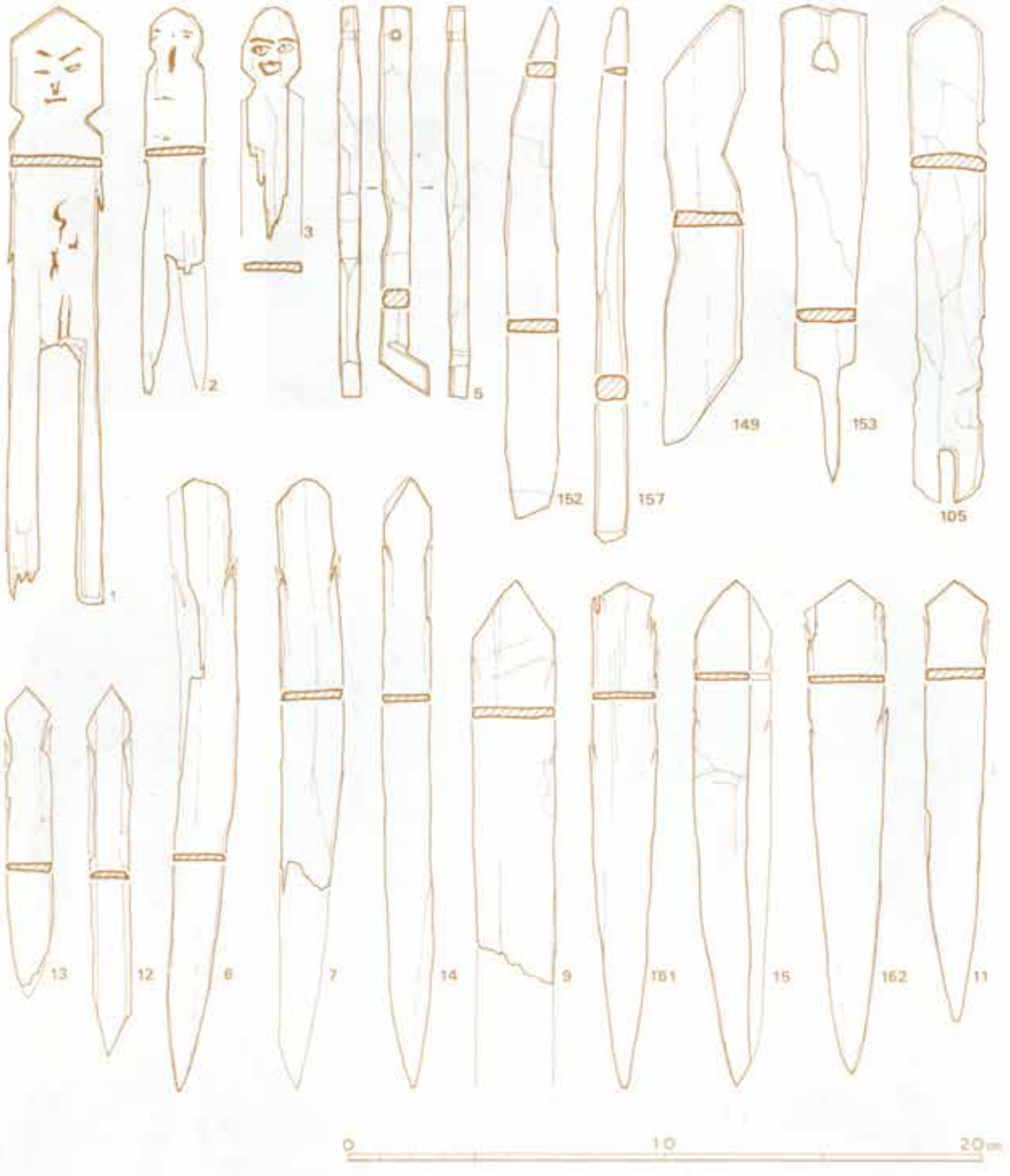
16

21

1 : 1.5

25

1 : 2


1
2
3
5
152
157
149
153
105
13
12
6
7
14
9
161
15
162
11
0
10
20cm

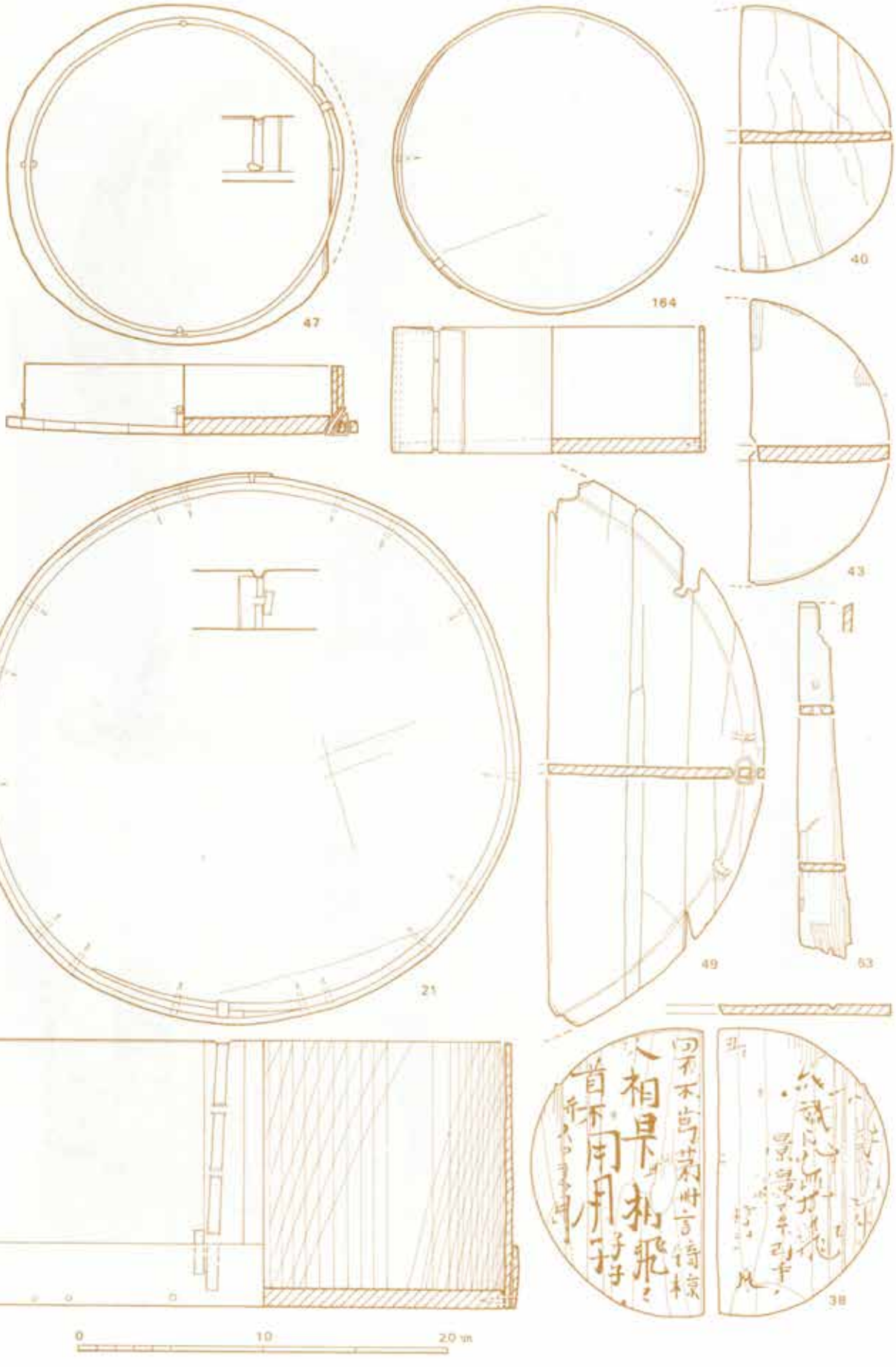
161　162

3

2

1

1 : 1

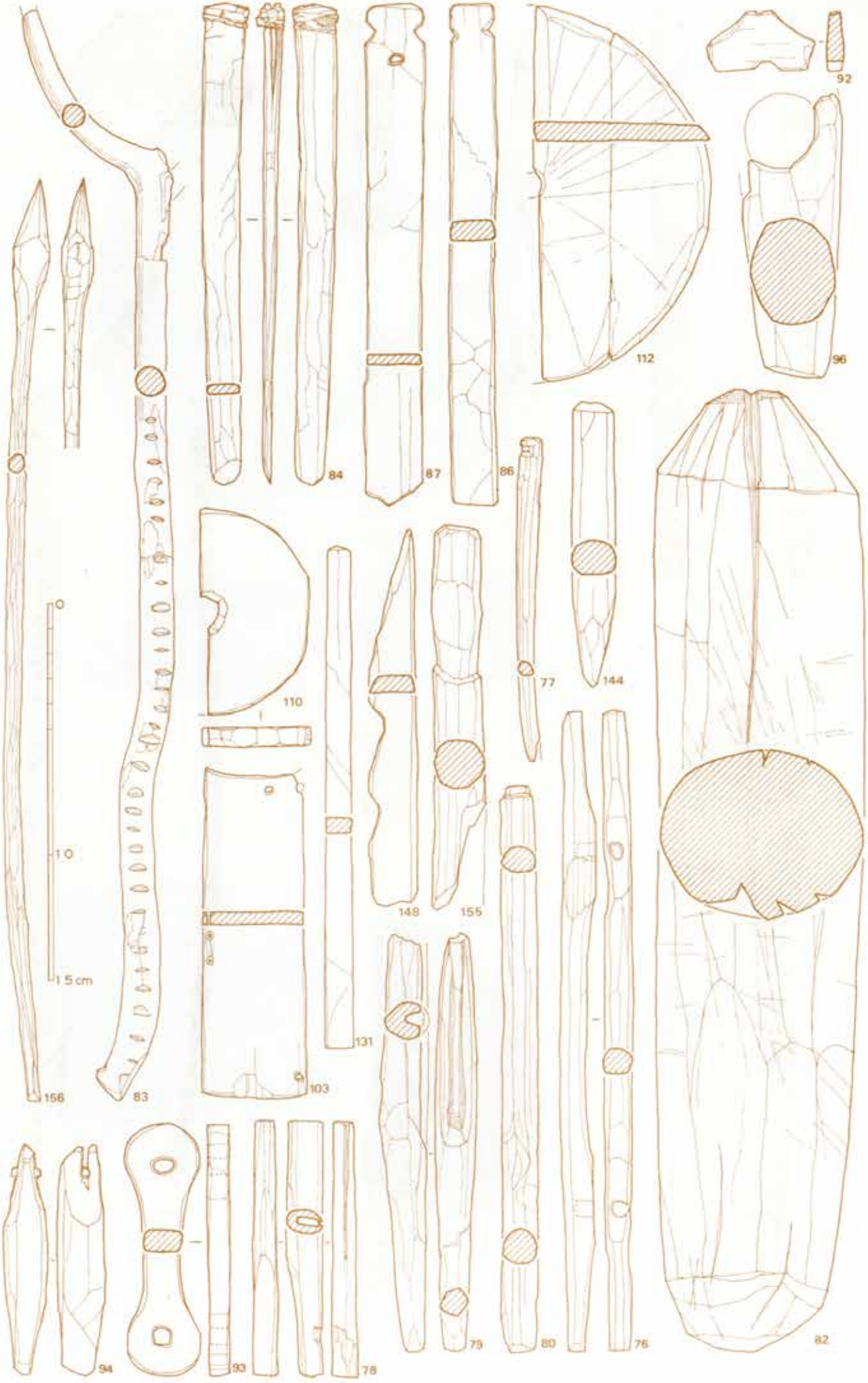

47
164
40
43
21
49
53
38
0
10
20 m

1 : 2

47

1 : 3

21


0
10
15cm
156
83
84
87
86
112
92
96
110
103
131
148
155
77
144
94
93
78
79
80
76
82

92

78

93

84

80

86

87

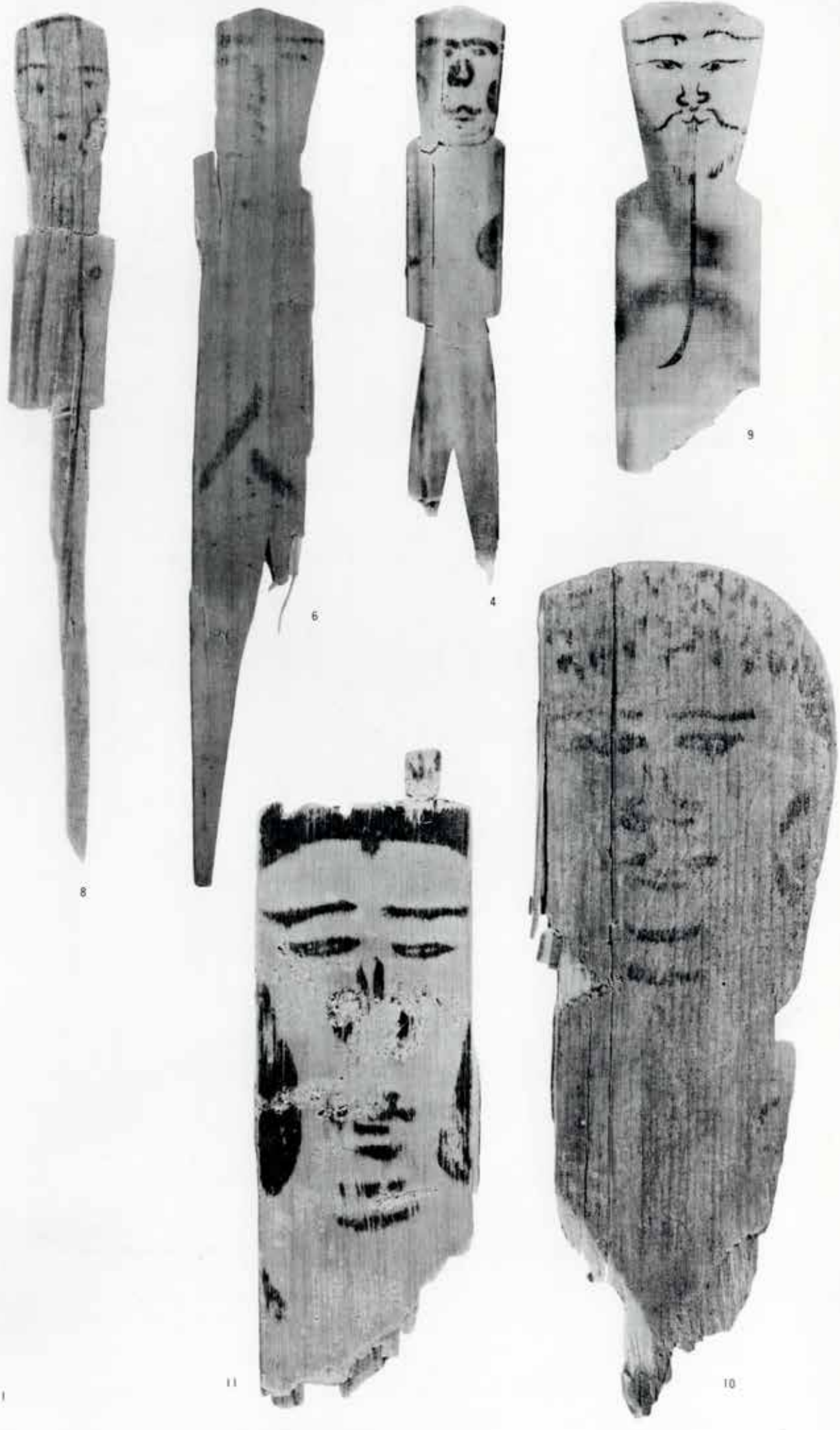
82

112

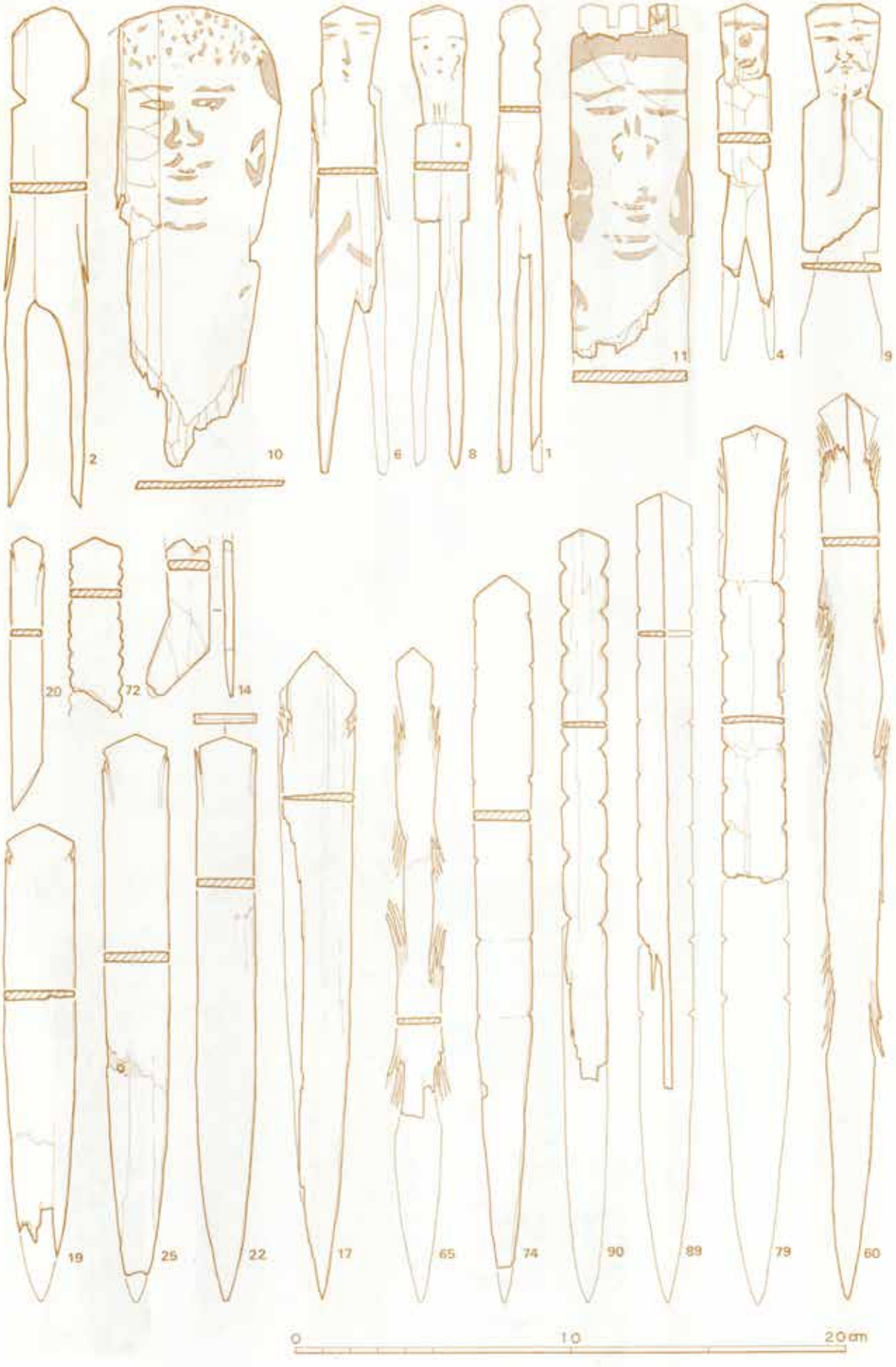
156

83

92 1:1　82 1:3　他 1:2


8
6
4
9
11
10
1:1

SD650



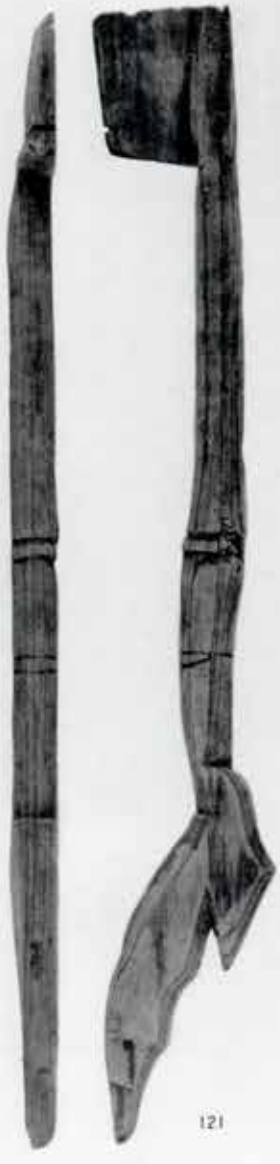
65

90

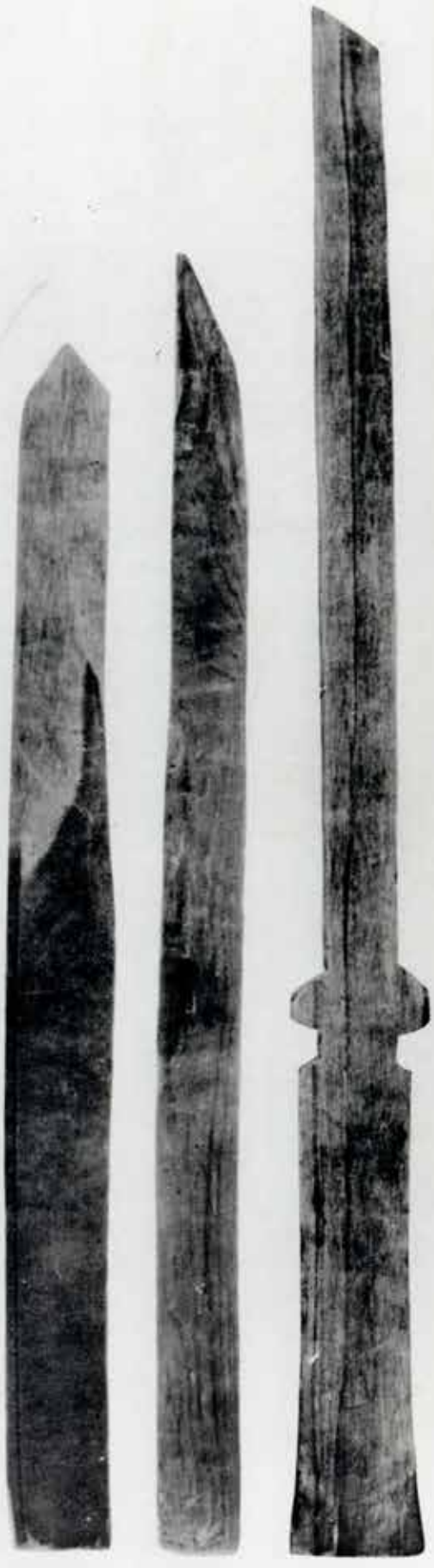
22

60

1 2



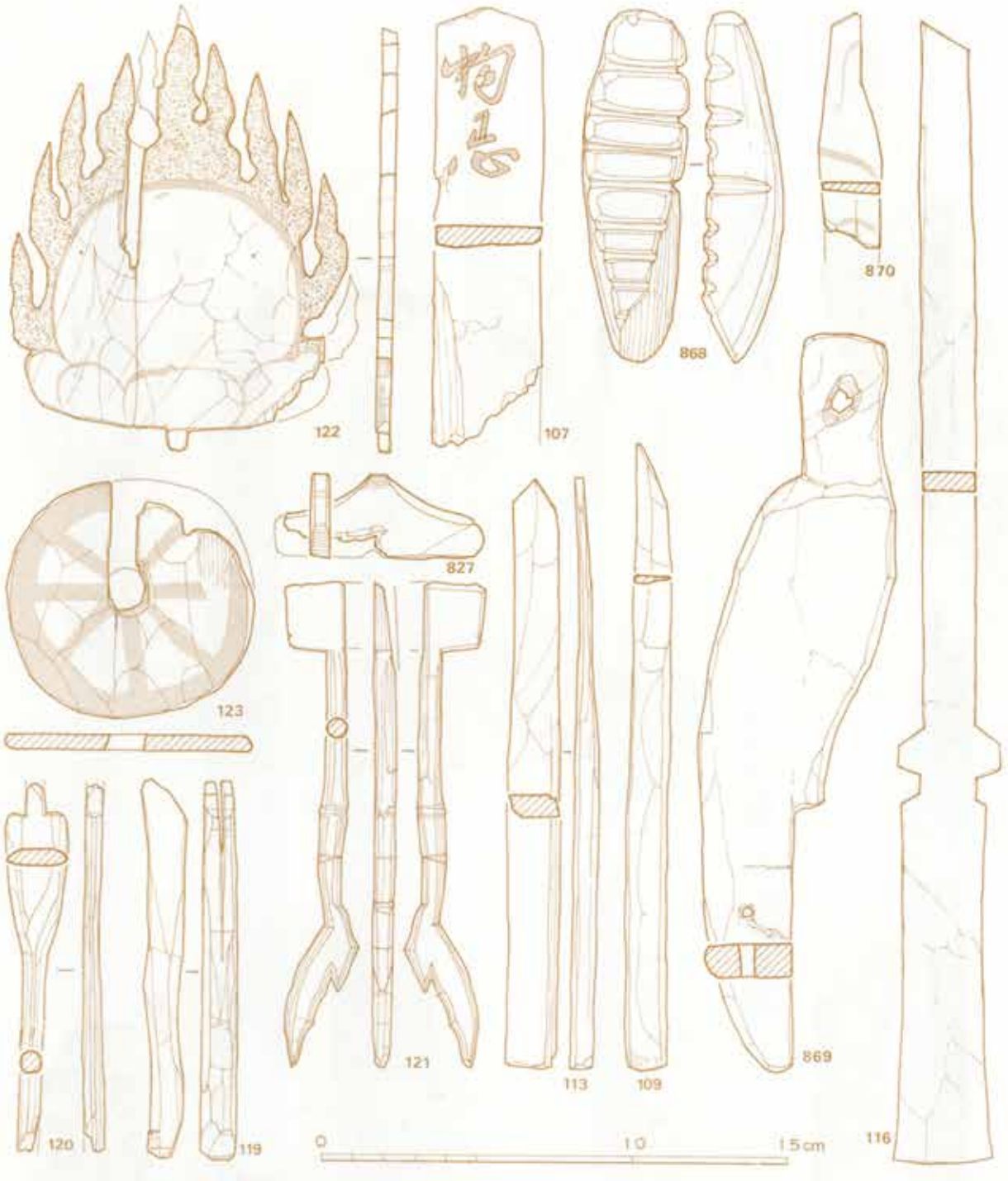
121



113 109 116

109 113 121 1:1 116 1:1.5 他 1:2

SD650



869

122

119

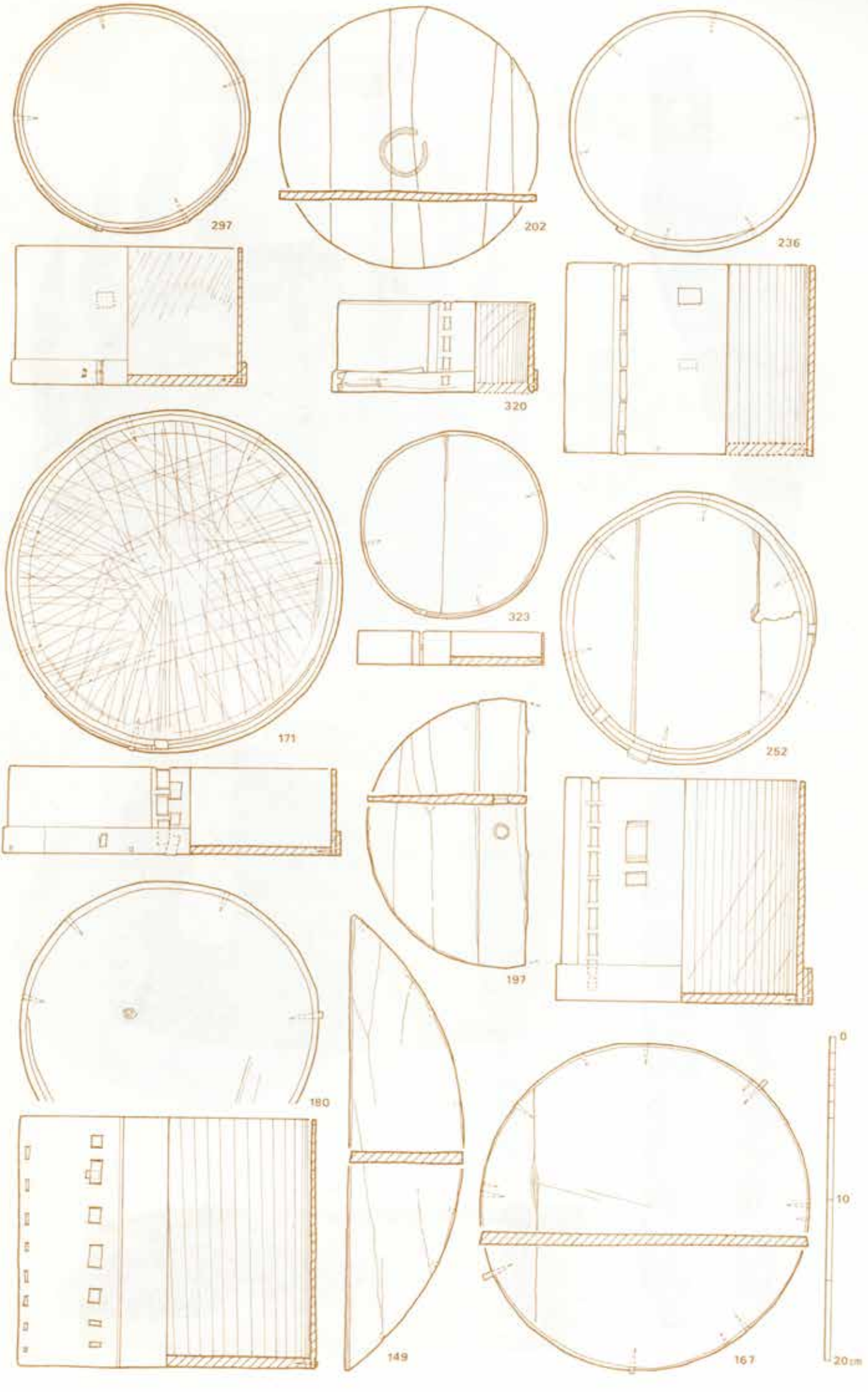
120

123

827

869　1:2　他　1:1

SD650



SD650　木製品

PL. 89

297

323

180

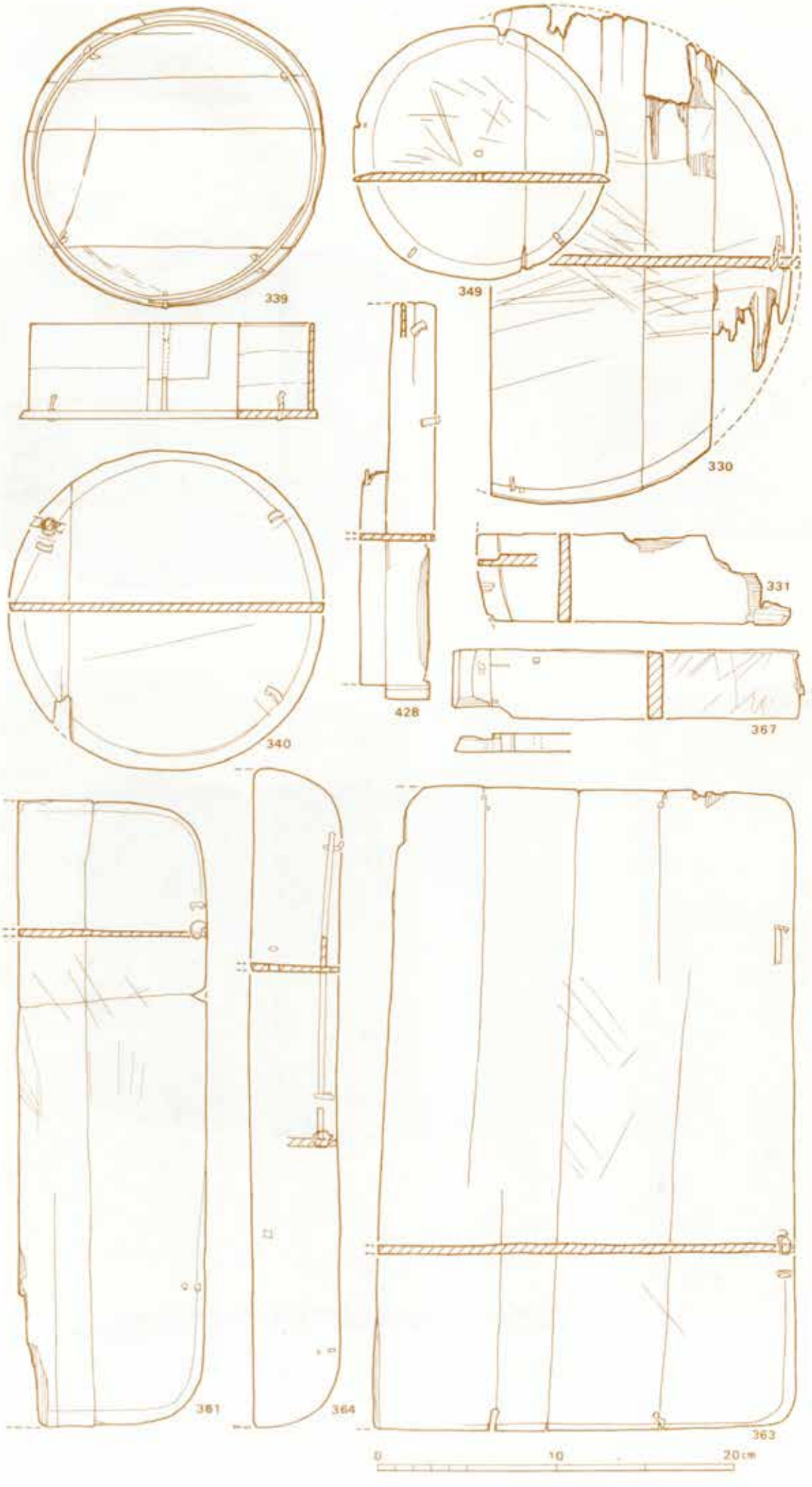
320

136

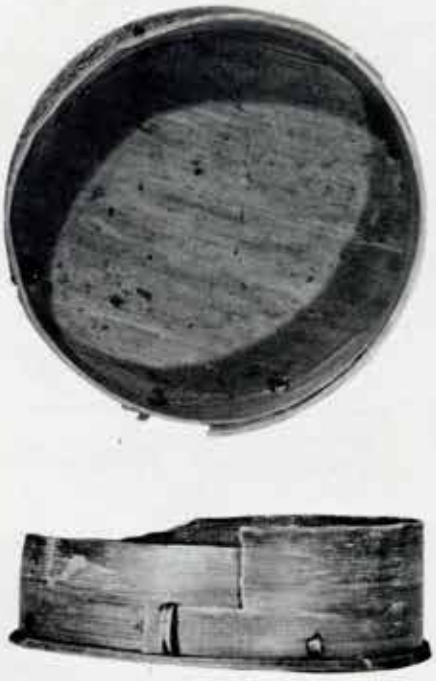
171

1 : 2

SD650



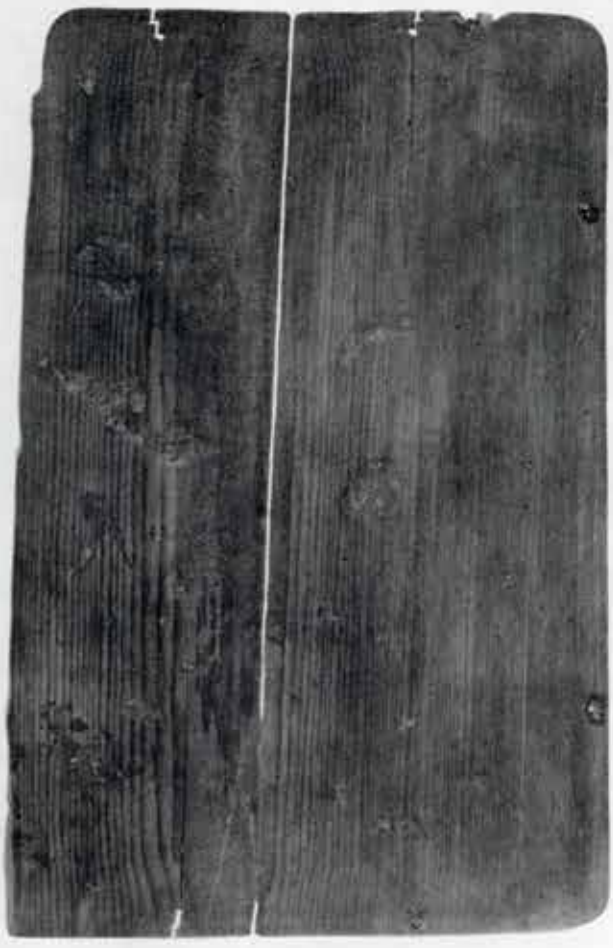
340



339

361

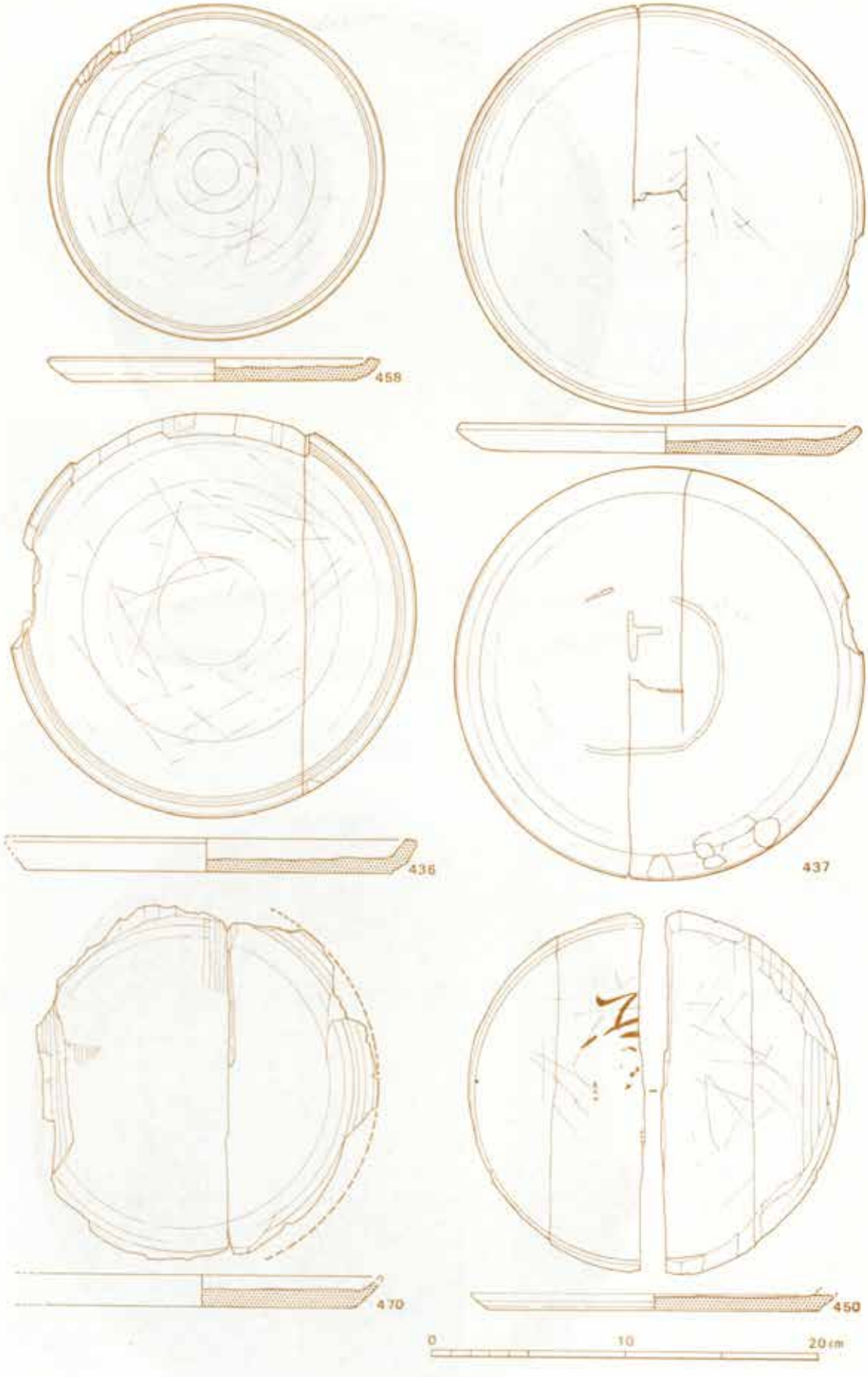
364



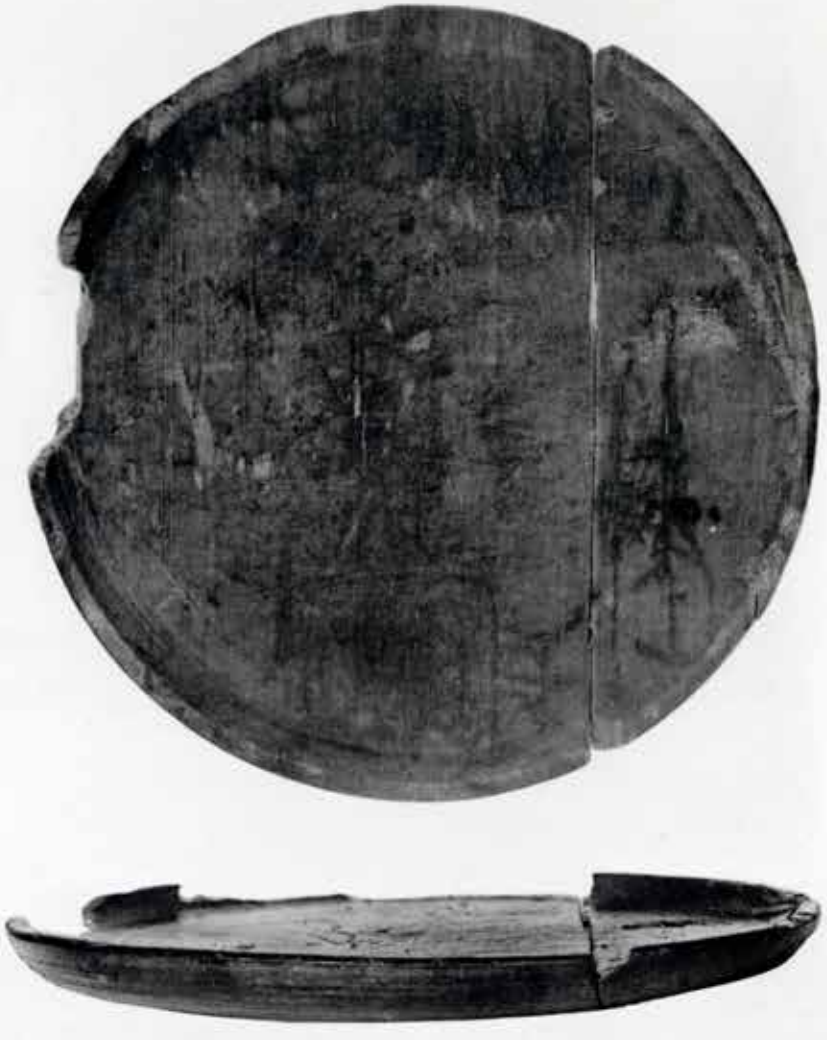
363

1 : 3

SD650



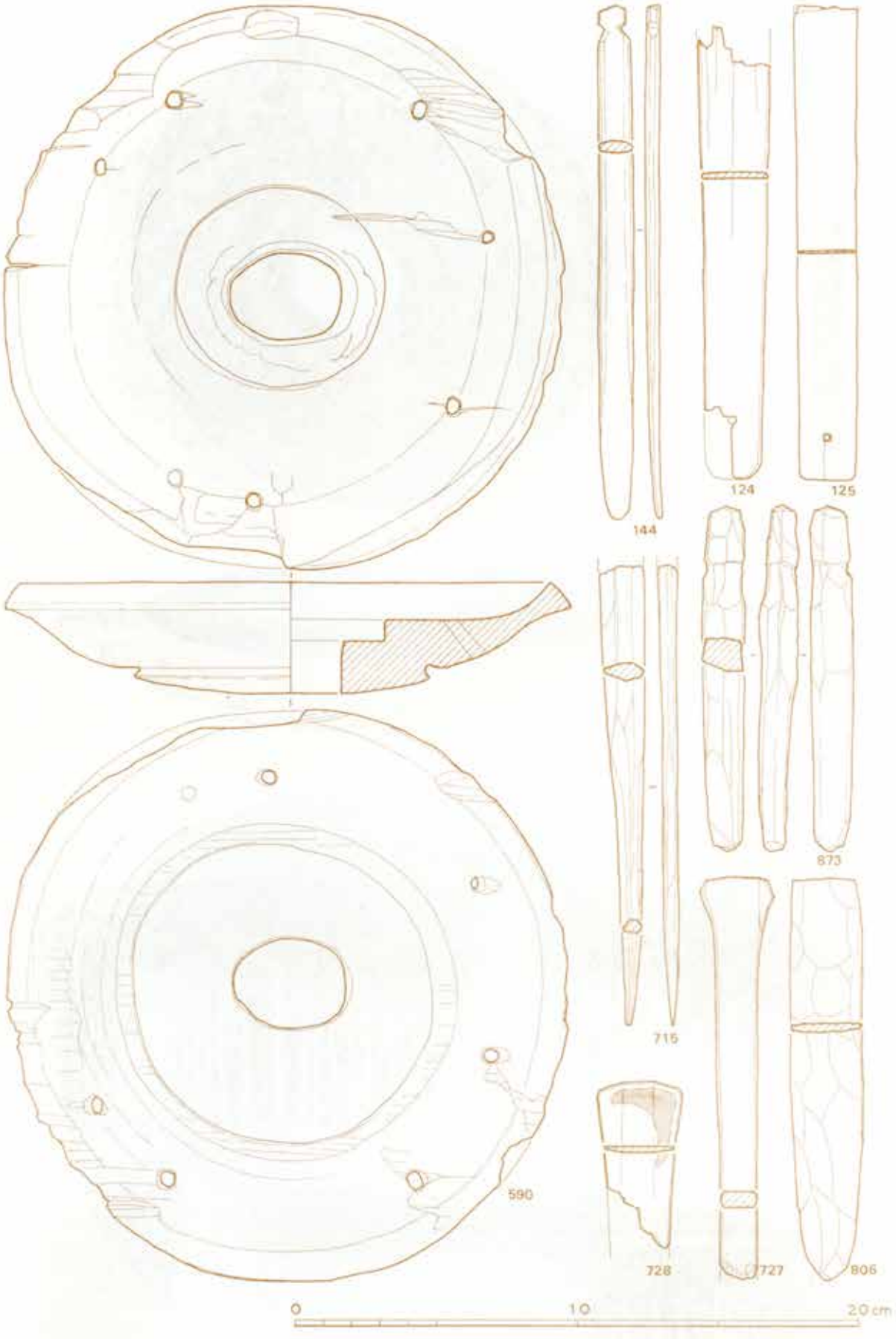
458



436

1 : 2

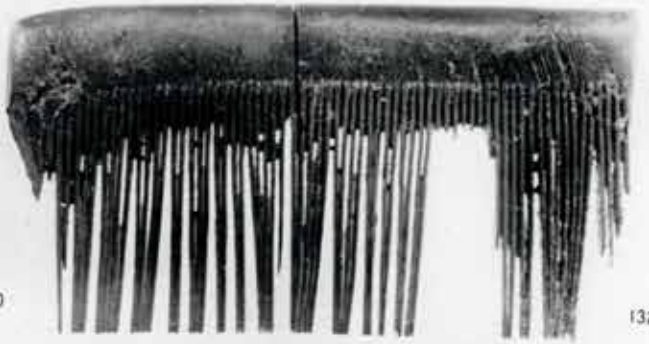
SD650



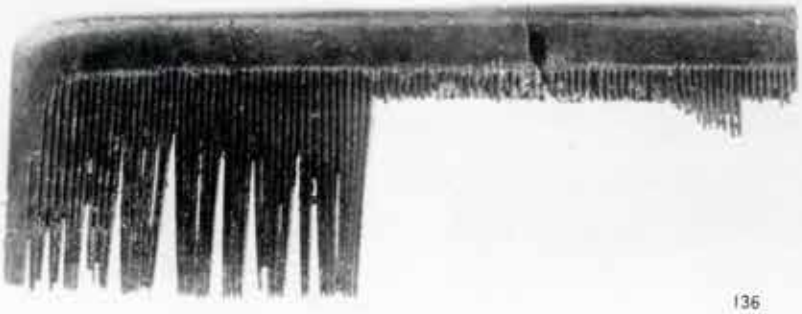
144

590

130



132

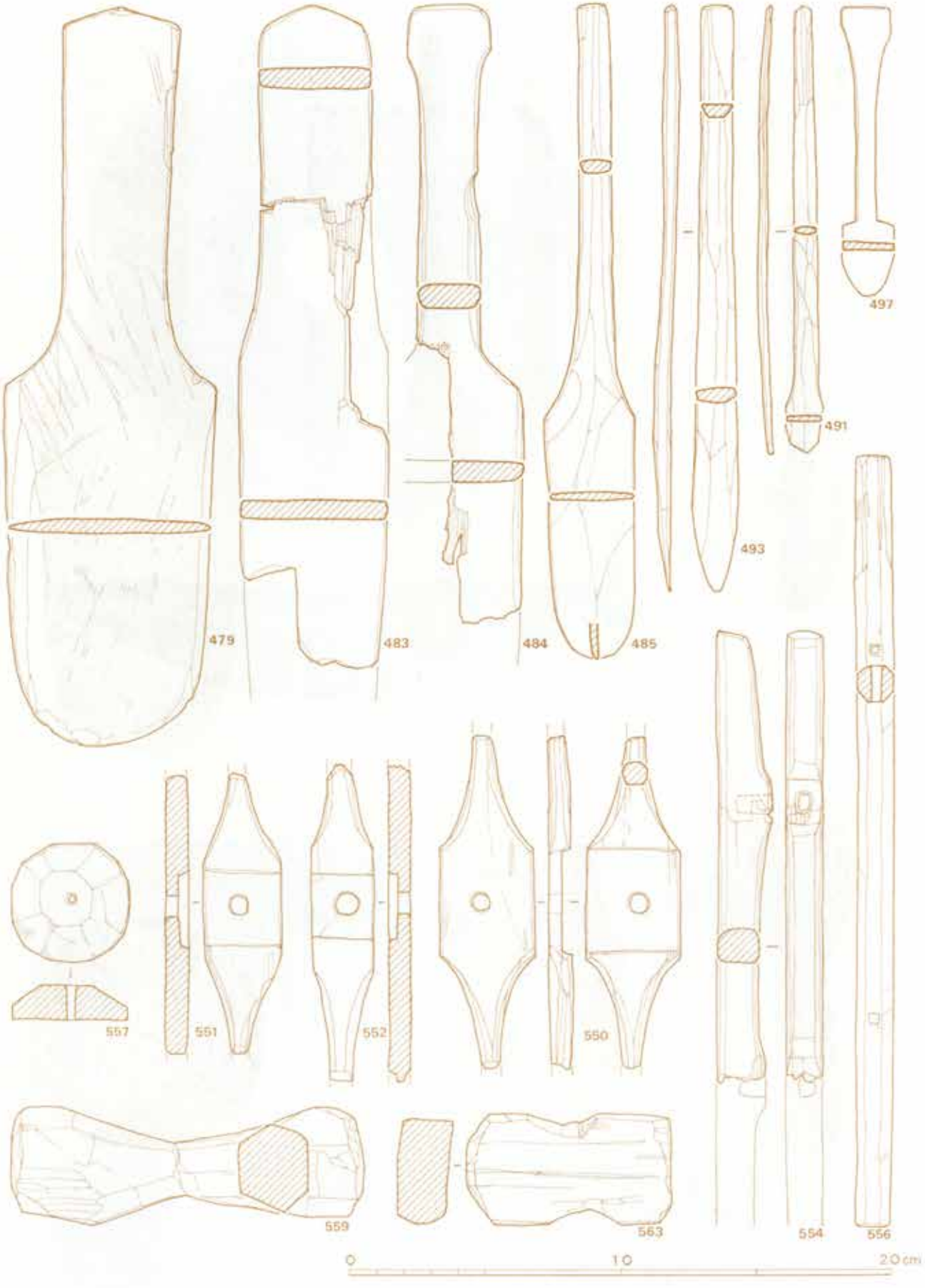


136

140

144・590　1:2　他　1:1

SD650


479
483
484
485
493
491
497
557
551
552
550
559
563
554
556
0
10
20cm

497

491　493　485

479

559

550

557

497・557　1：1　　他　1：2

SD650

573
570
568
575
577
571
566
567
565
581
583
582
584
734
574
576
0
10
20cm

581

583

582

584

573

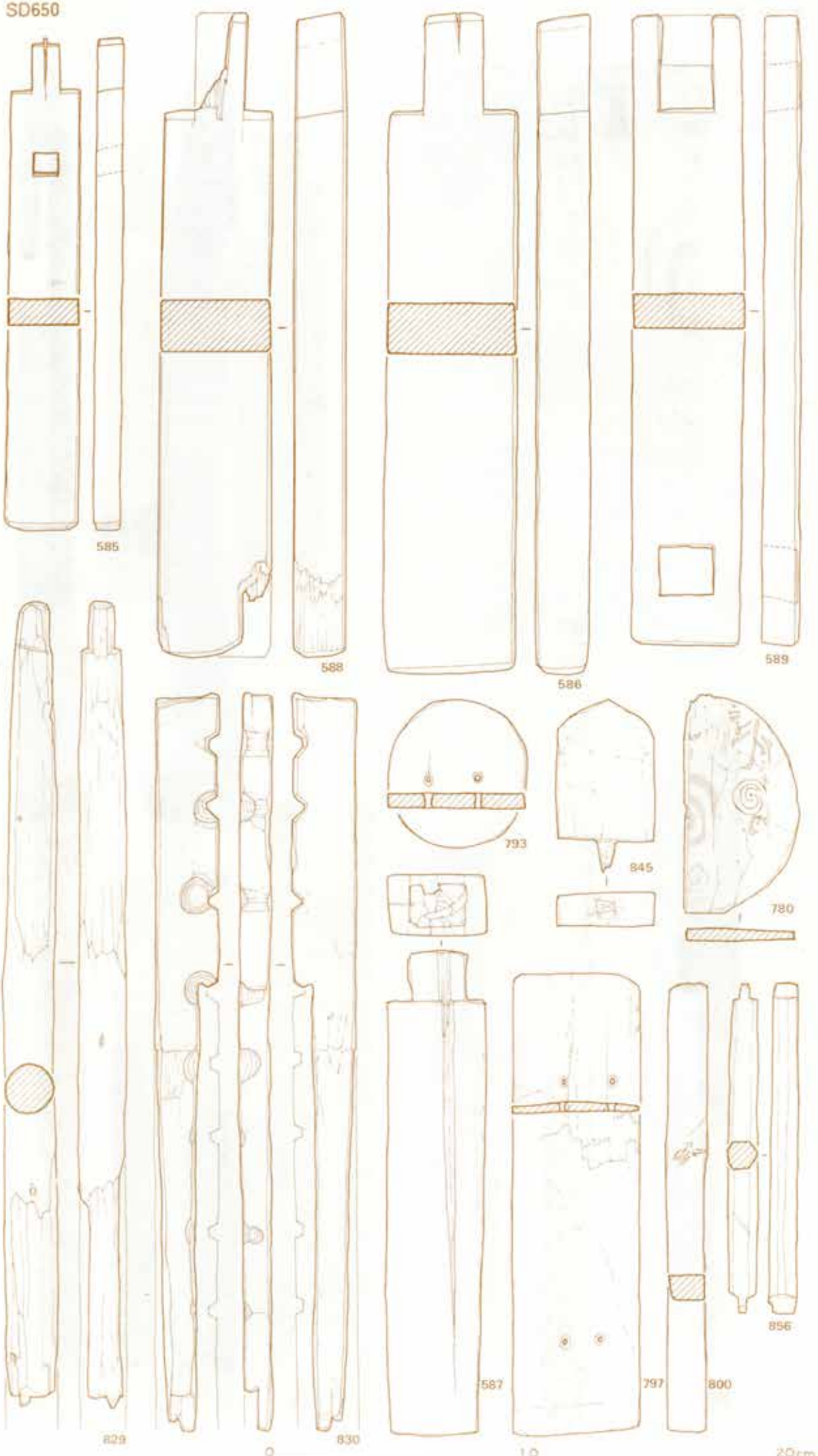
576

670

571　567　565

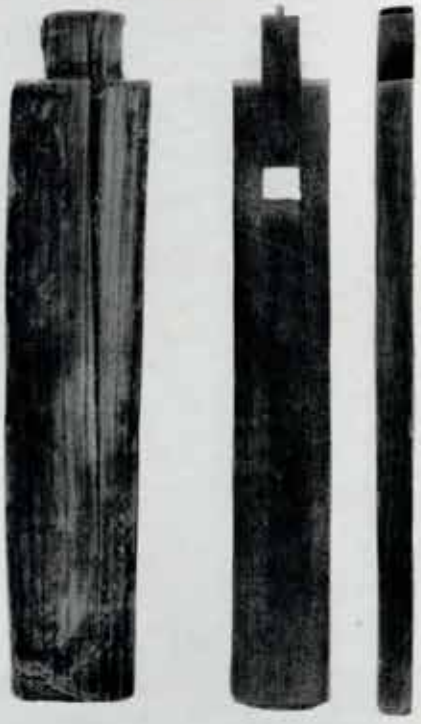
576・670　1：3　他 1：2

SD650



845

780



587

585

800

830

829

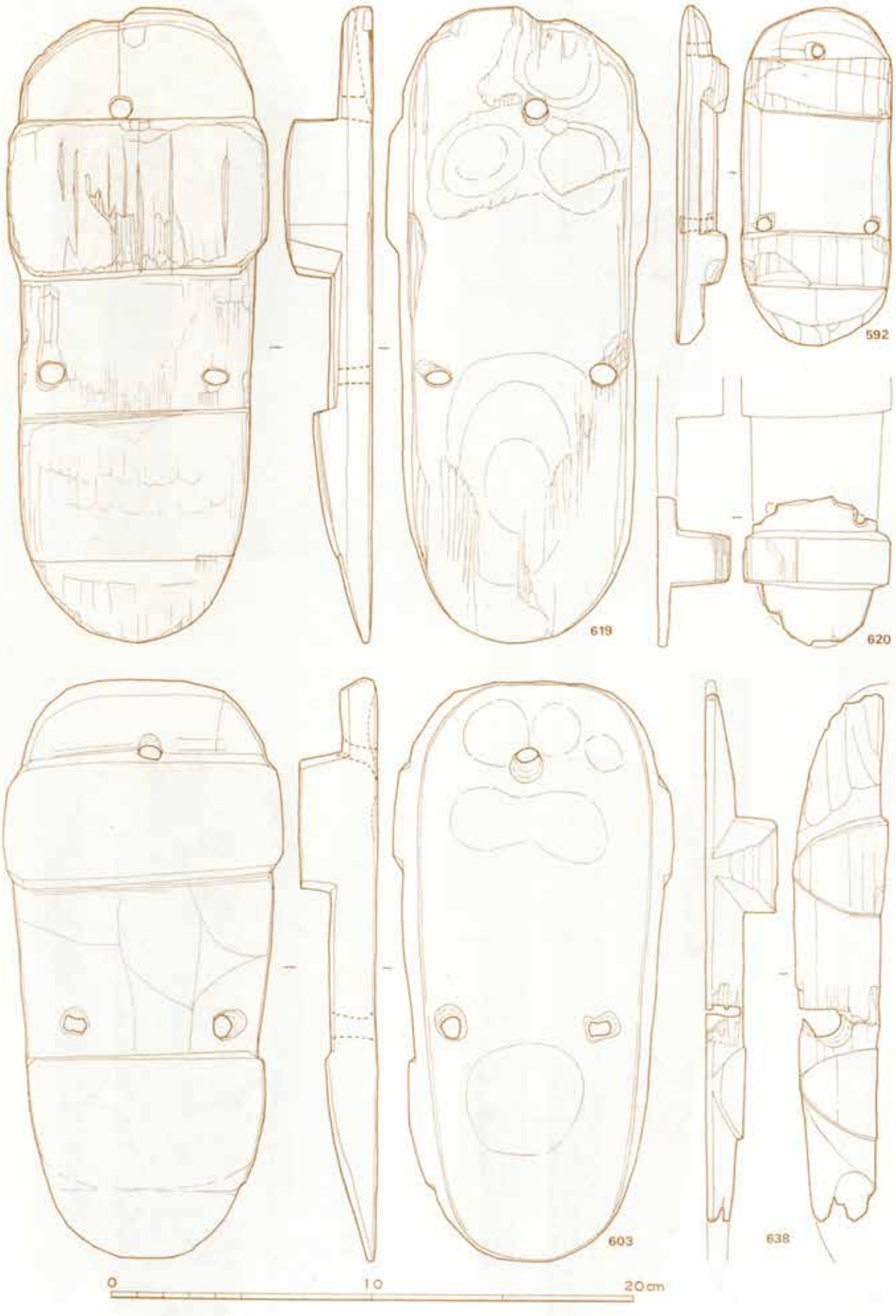
589

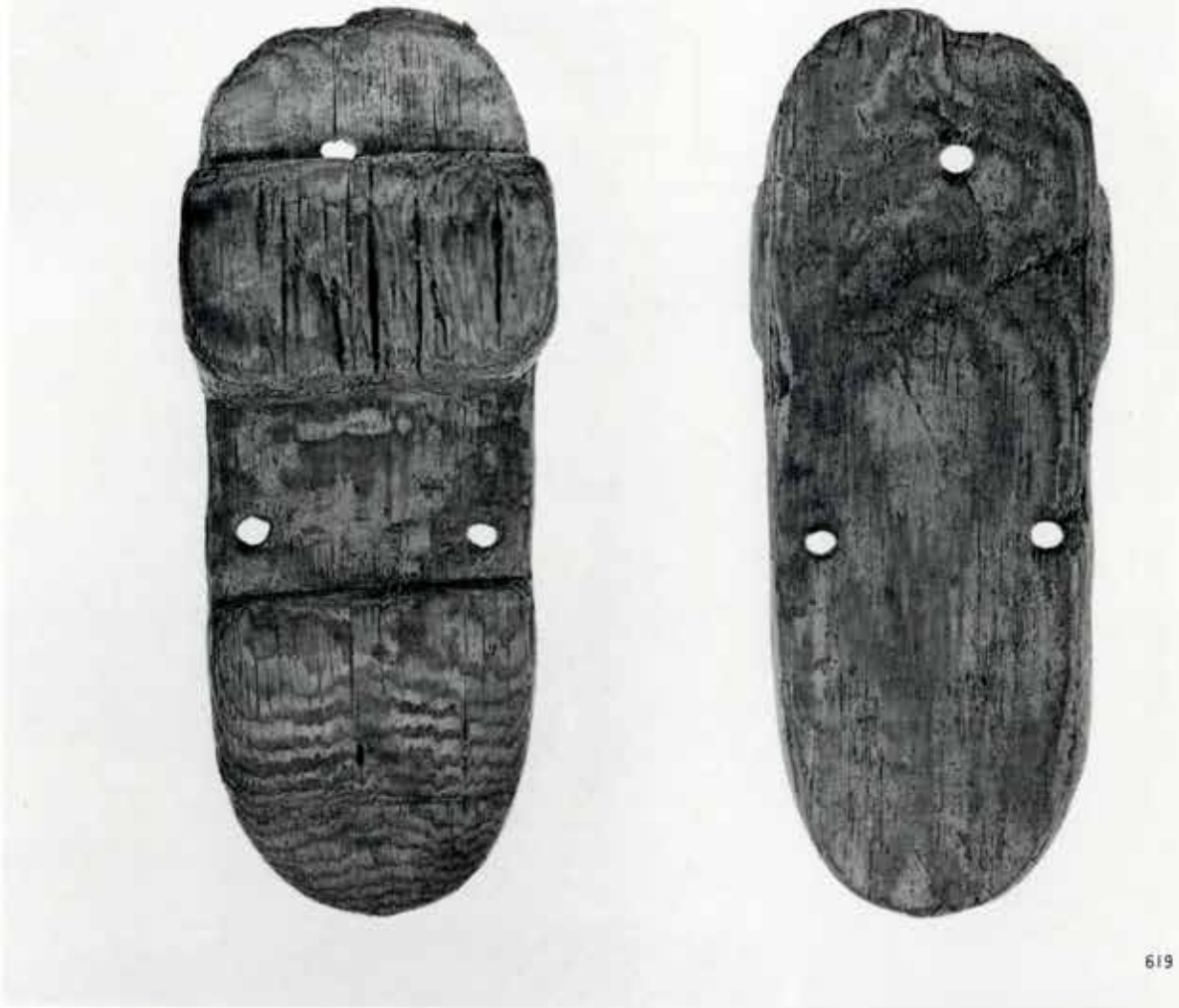
586

780・800　1：1

他　1：2

SD650



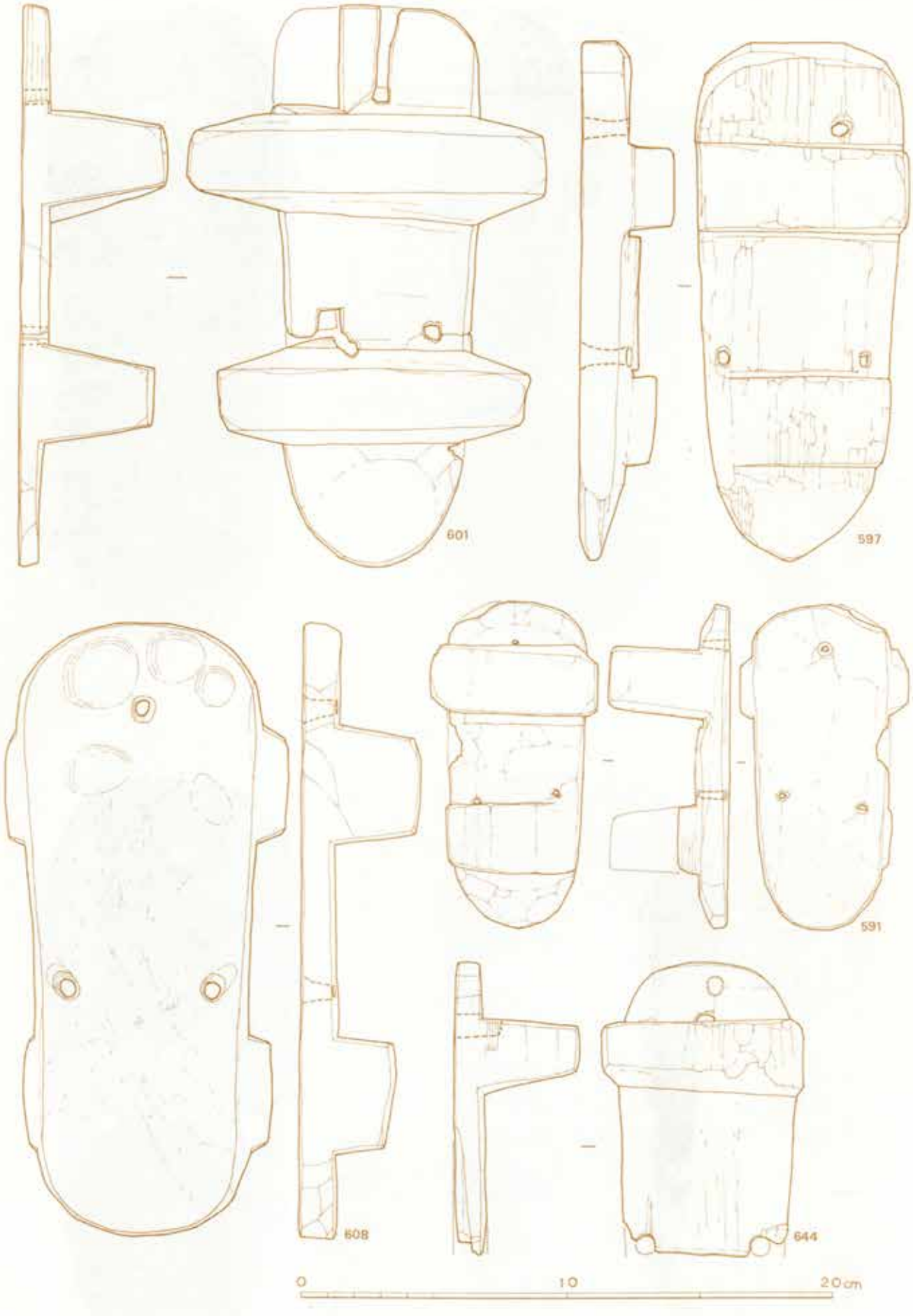


619

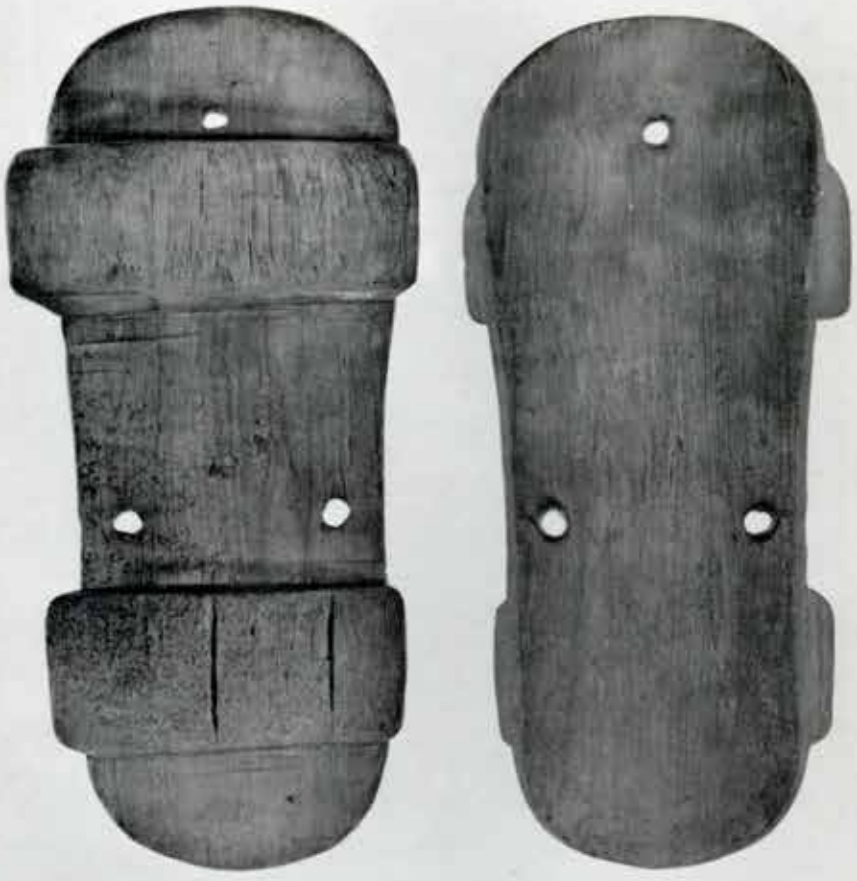
603

1 : 2

SD650



597



608

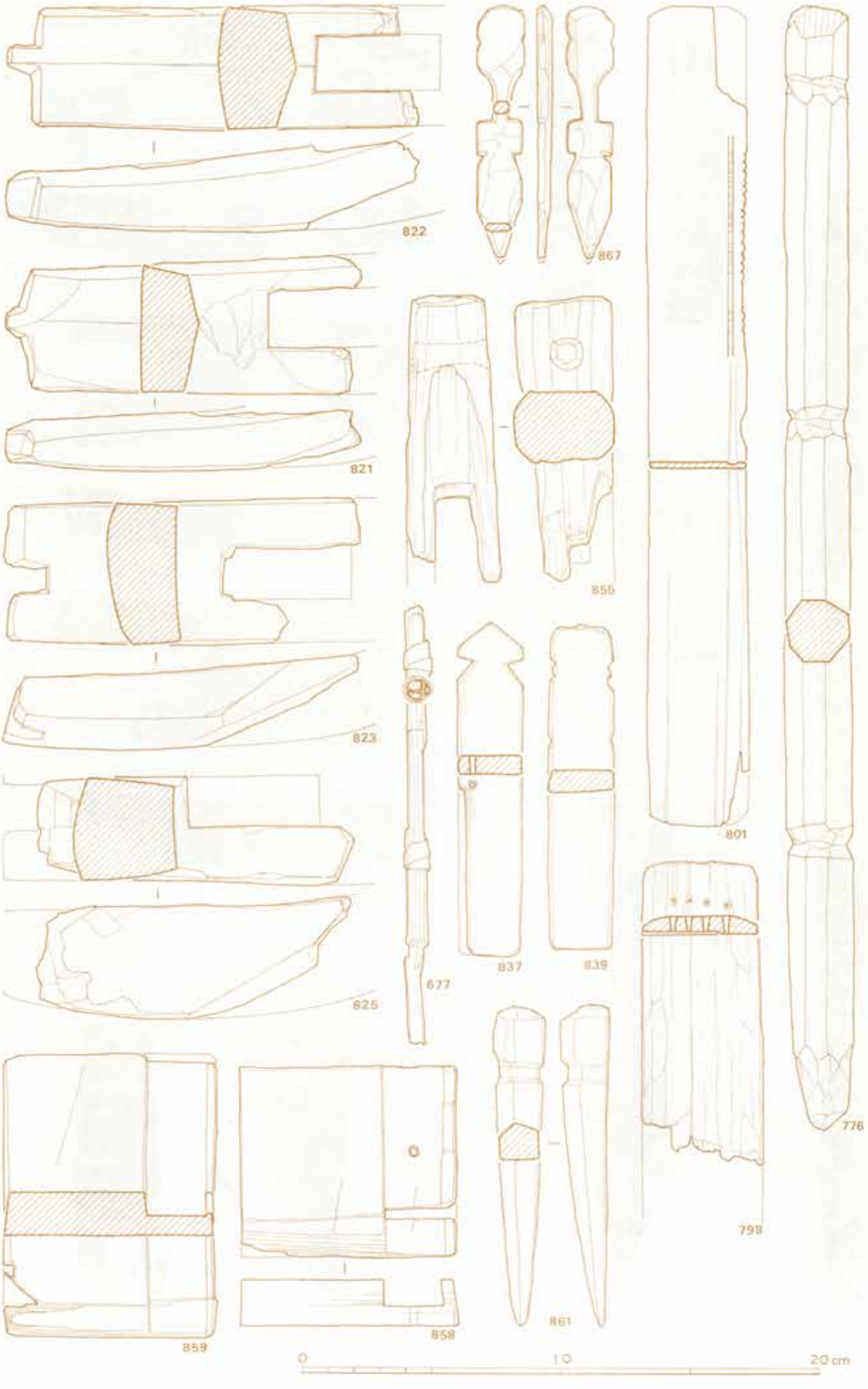
602

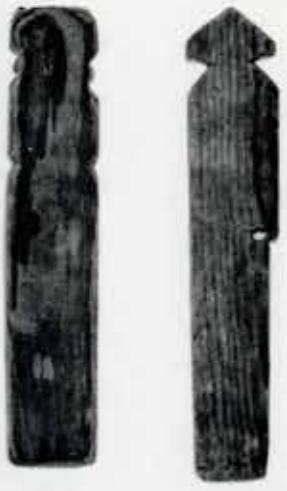
591

644

1 : 2

SD650


822
867
821
855
823
837
839
677
801
776
825
798
859
858
861
0
10
20cm

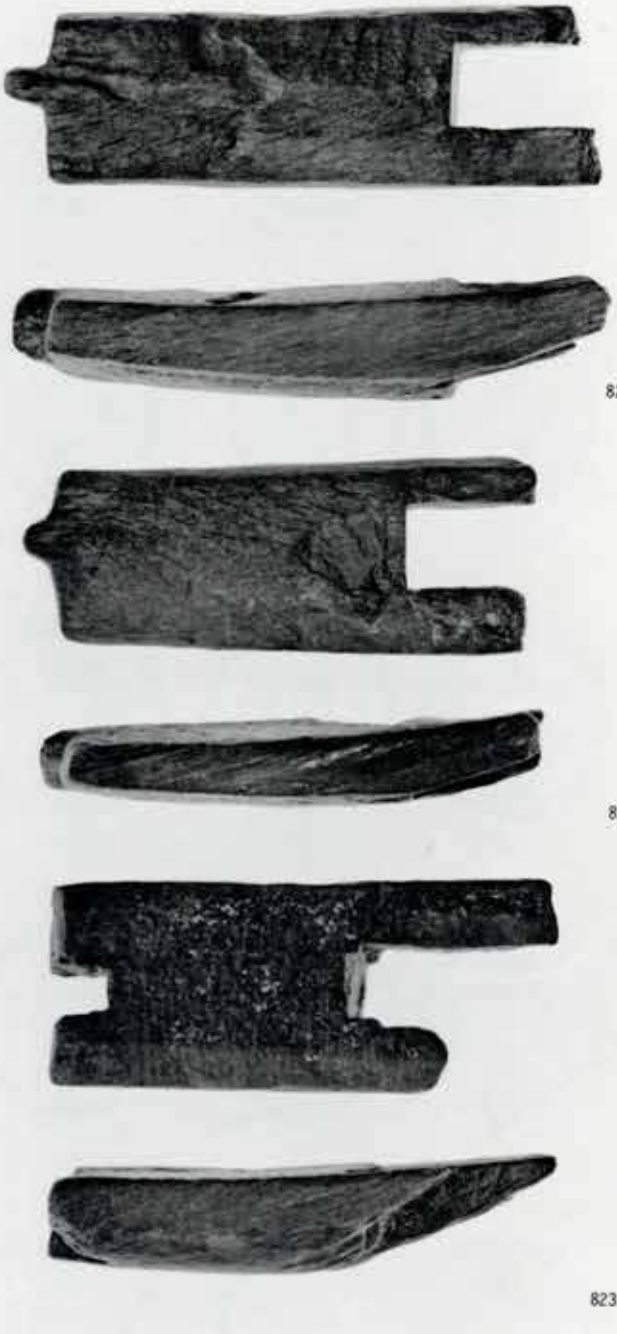


839　837

858

776

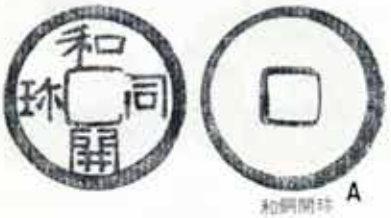
867



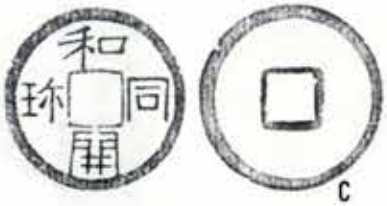
822　821　823

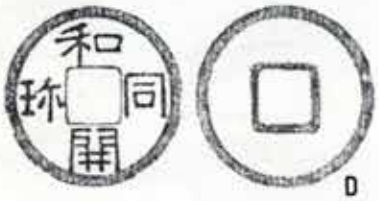
855

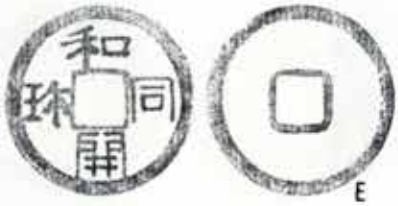
867 1:1 他 1:2

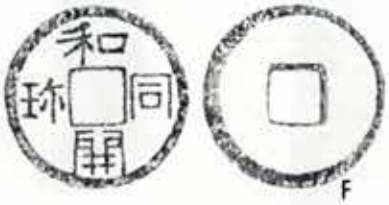

和銅開珎 A

B

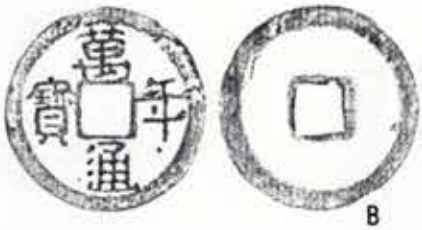

C

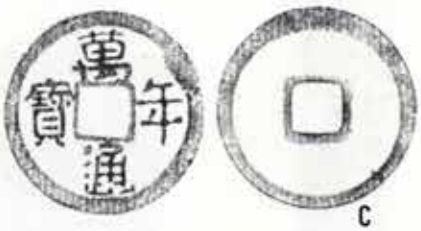

D


E

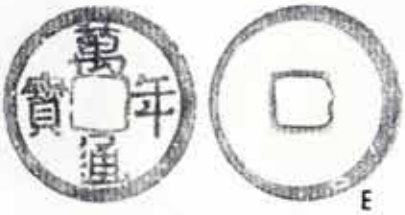

F

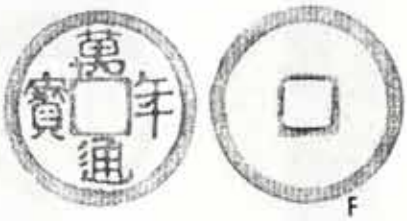
万年通宝 A

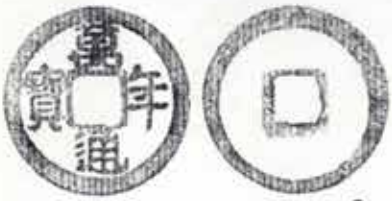

B

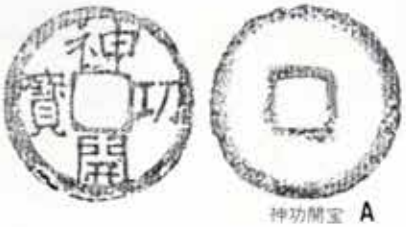

C

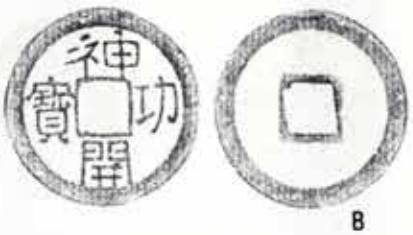
D

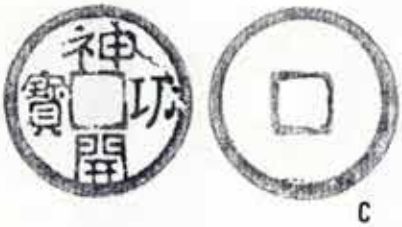

E

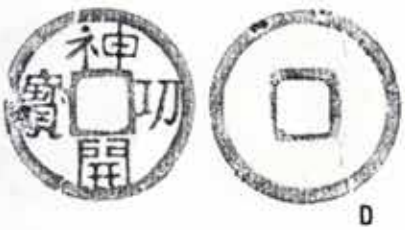

F

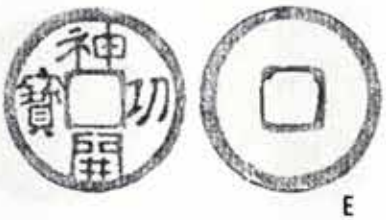

G

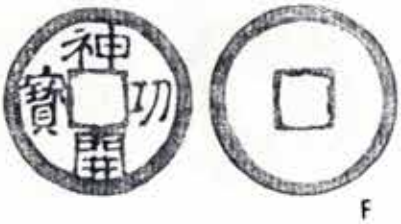

神功開宝 A


B

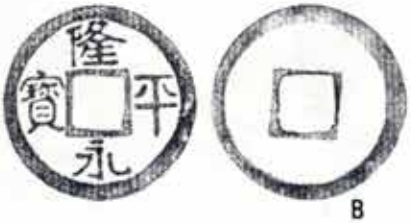

C


D


E


F

隆平永宝 A


B

1:1

和銅開珎A

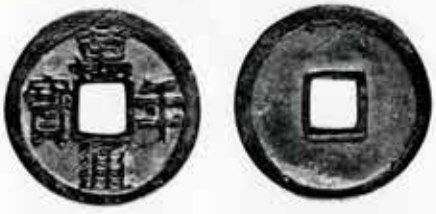
和銅開珎B

和銅開珎C

和銅開珎D

和銅開珎E

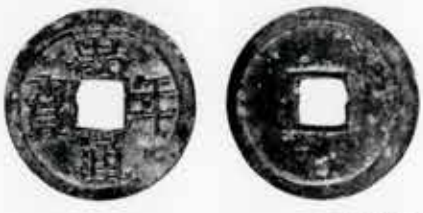
和銅開珎F


万年通宝A

万年通宝B

万年通宝C

万年通宝D


万年通宝E

万年通宝F

万年通宝G

神功開宝A

神功開宝B

神功開宝C

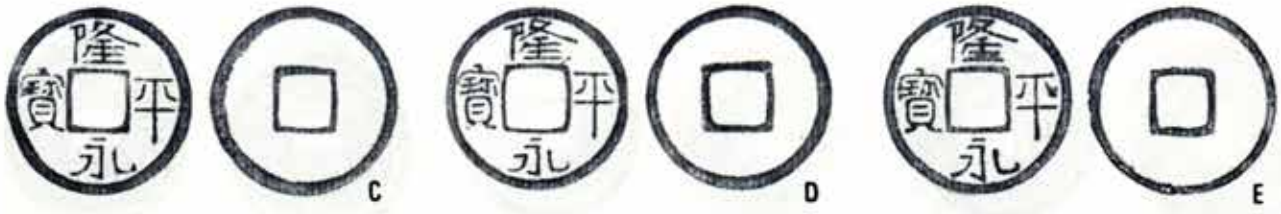
神功開宝D

神功開宝E

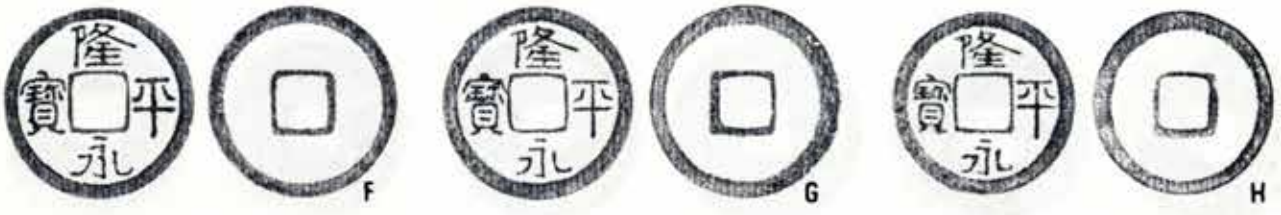
神功開宝F

隆平永宝A

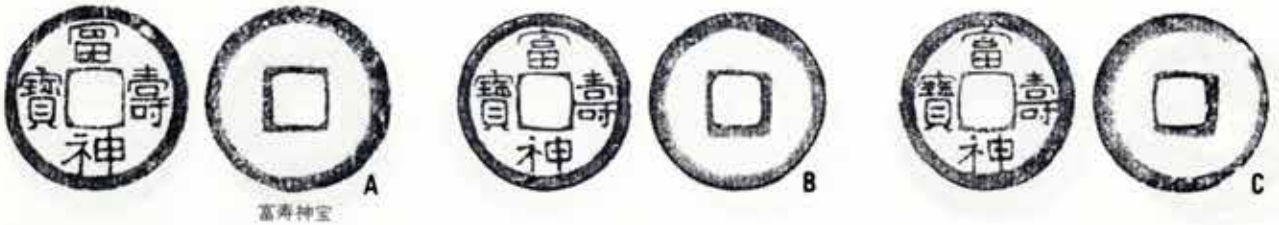
隆平永宝B



C D E

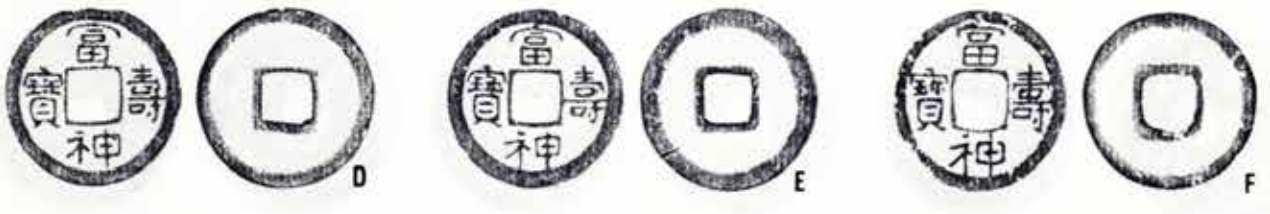


F G H



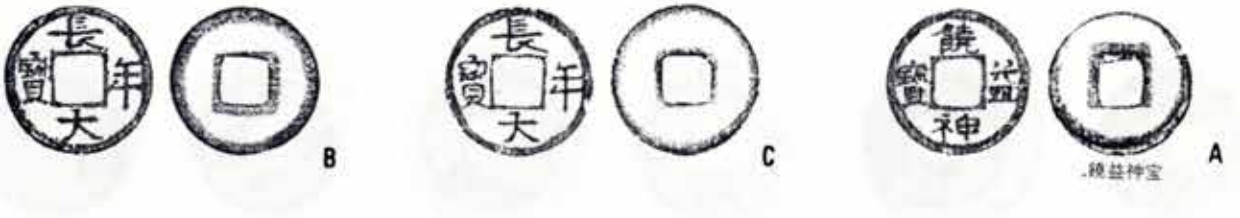
A B C

富壽神宝



D E F

G 永和昌宝 A 長年大宝 A



B C A

饒益神宝

B A B

貞観永宝

1:1

隆平永宝C

隆平永宝D

隆平永宝E

隆平永宝F

隆平永宝G

隆平永宝H

富寿神宝A

富寿神宝B

富寿神宝C

富寿神宝D

富寿神宝E

富寿神宝F

富寿神宝G

永和昌宝A

長年大宝A

長年大宝B

長年大宝C

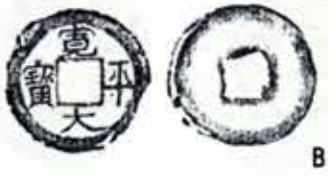
隆益神宝A

隆益神宝B

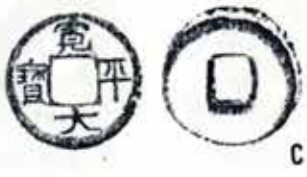
貞観永宝A

貞観永宝B

A
寛平大宝



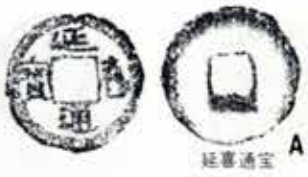
B



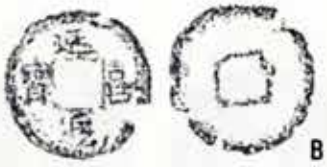
C

D

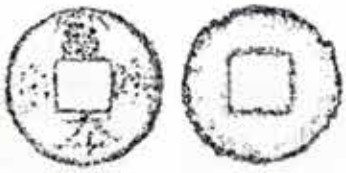
E

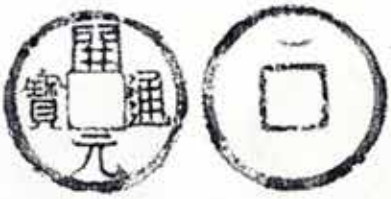


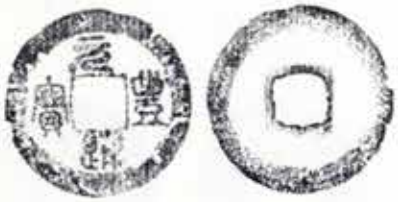
A
延喜通宝



B







1:1

寛平大宝A

寛平大宝B

寛平大宝C

寛平大宝D

寛平大宝E

延喜通宝A

延喜通宝B

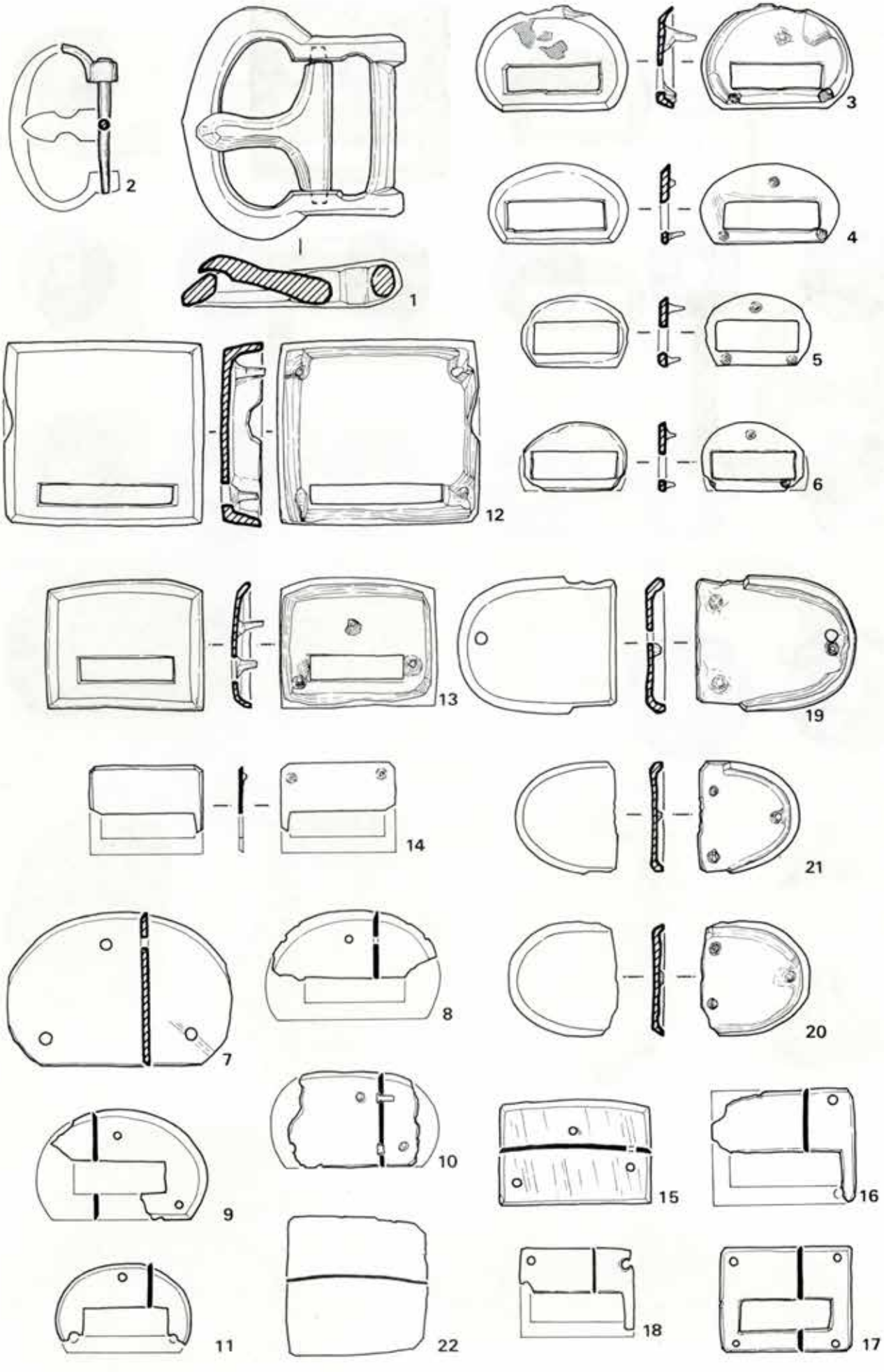
不　明

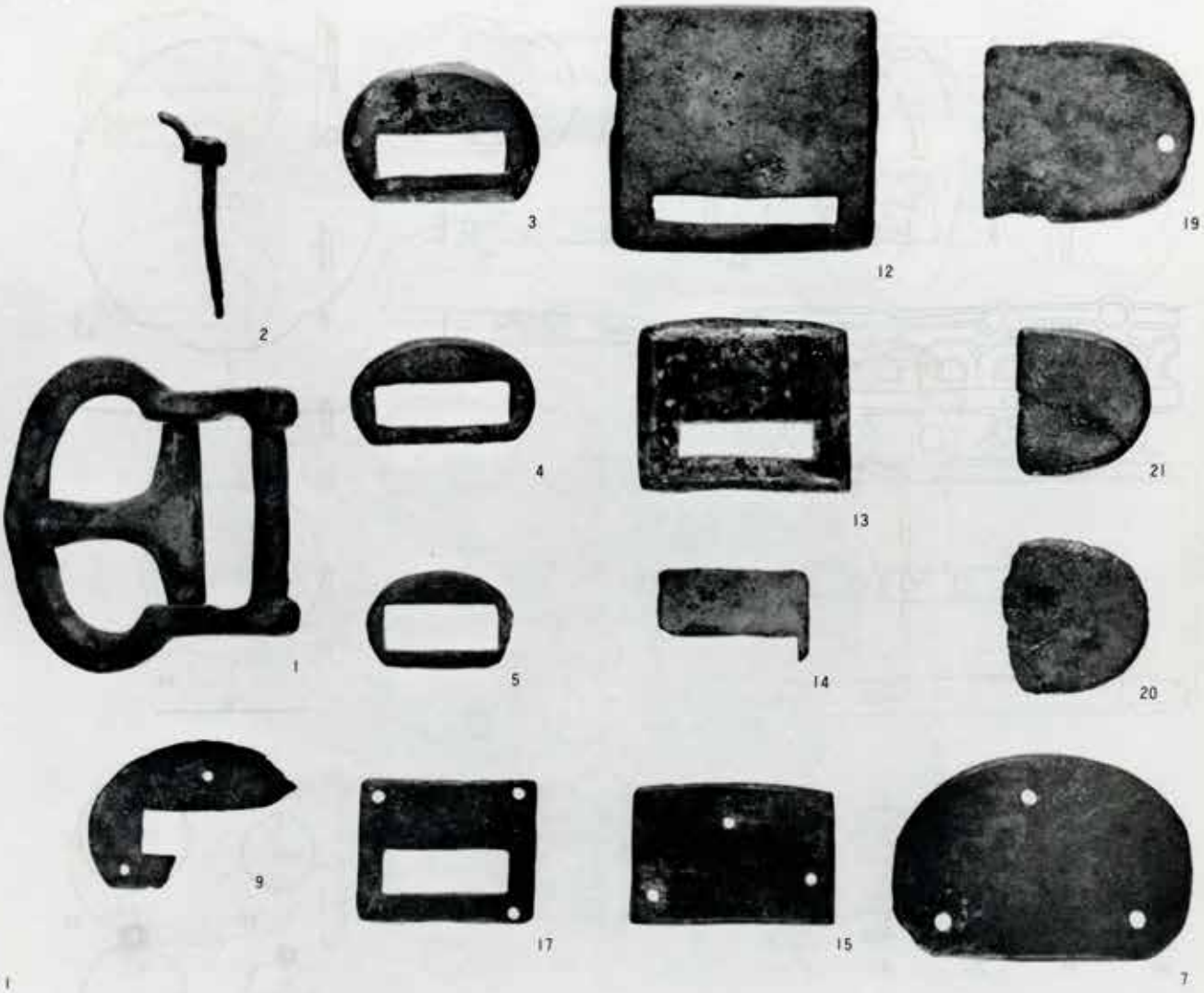
開元通宝

元豊通宝

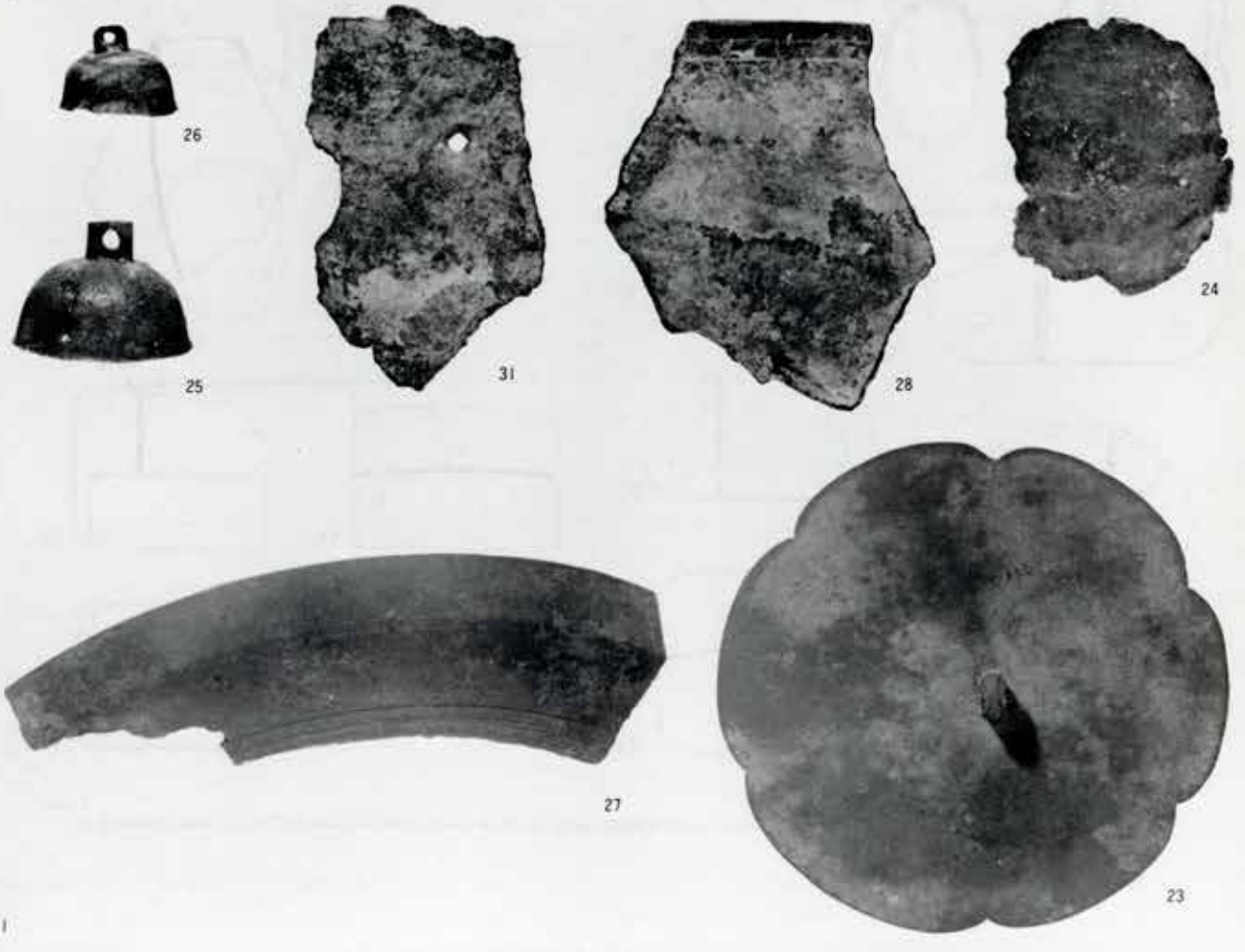
1 : 1

SD650



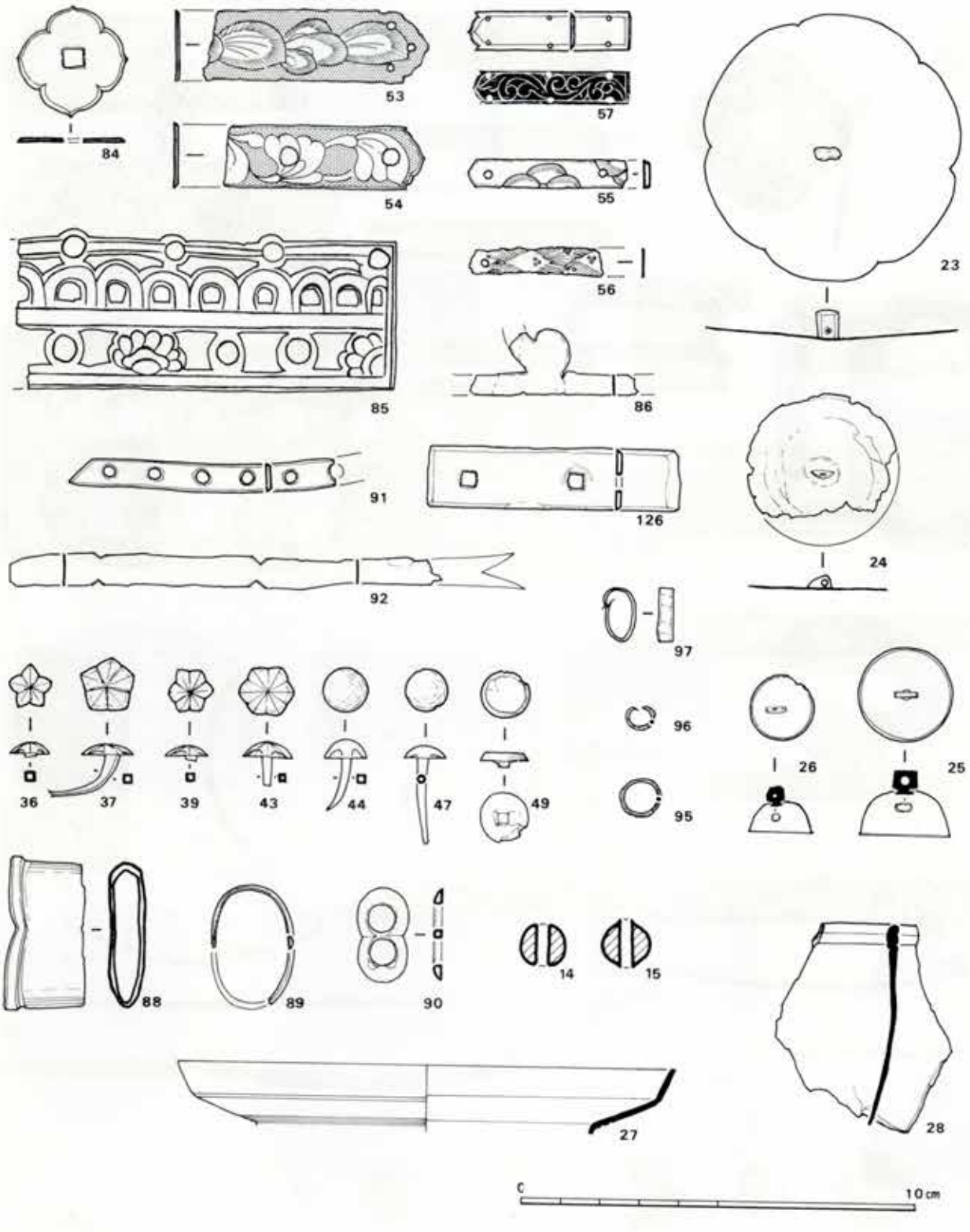


1 : 1



1 : 1

SD650


84
53
54
57
55
56
23
85
86
91
126
24
92
97
96
95
36
37
39
43
44
47
49
26
25
88
89
90
14
15
27
28
0
10cm

14

84

15

57

54

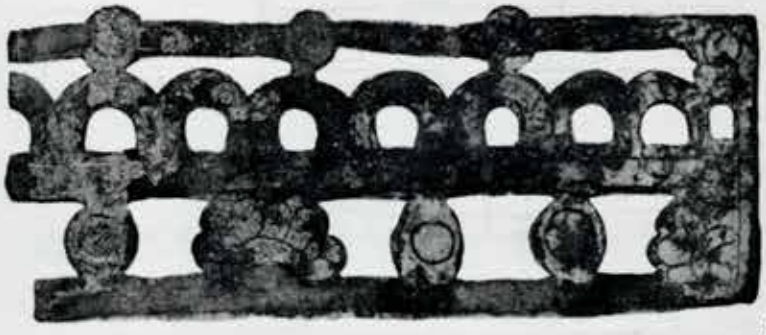
56

53

55

58

62


85

126

91

86

90

95

97

89

88

92

106

105

102

108

98

36

37

39

43

44

47

49

1 : 1

144

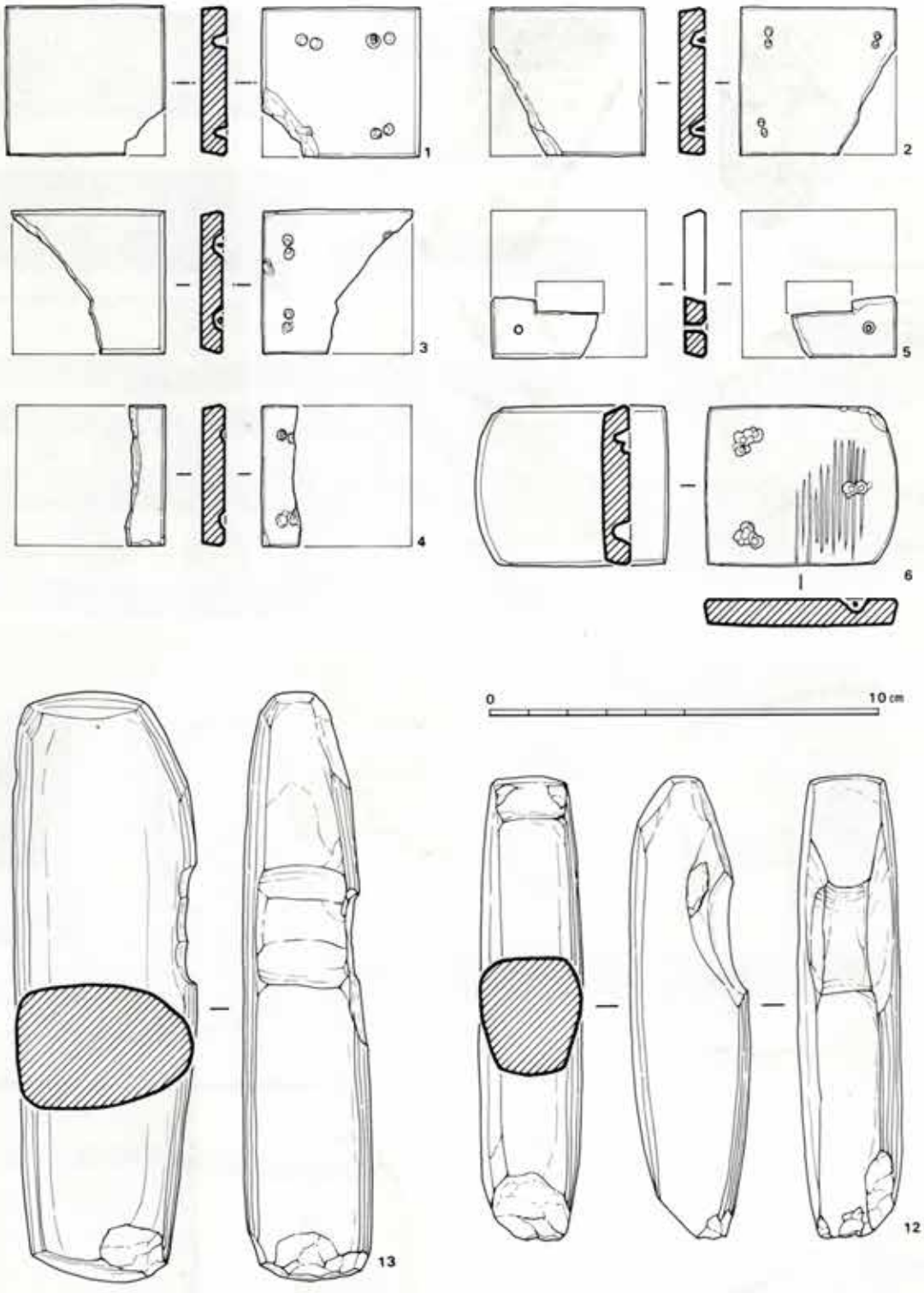
145

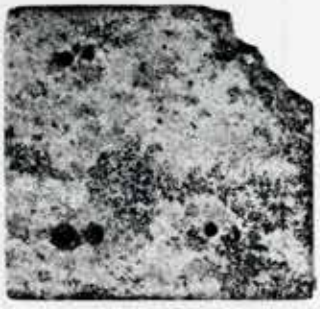
146

147

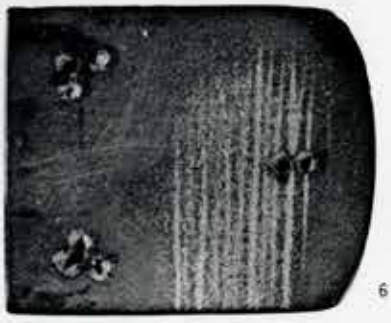
1 : 2

SD650





2



6

7

5

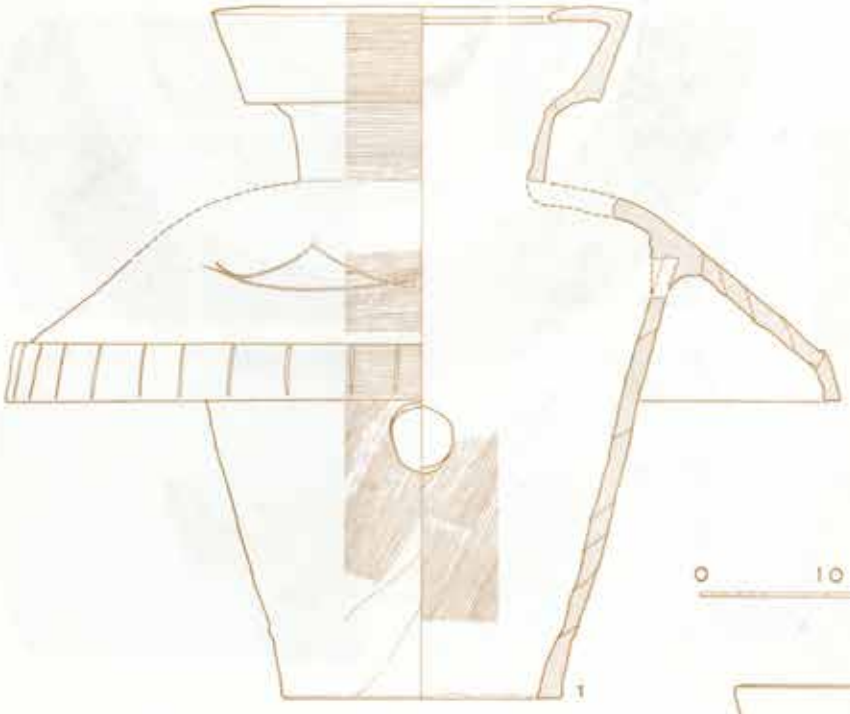
3

11

12

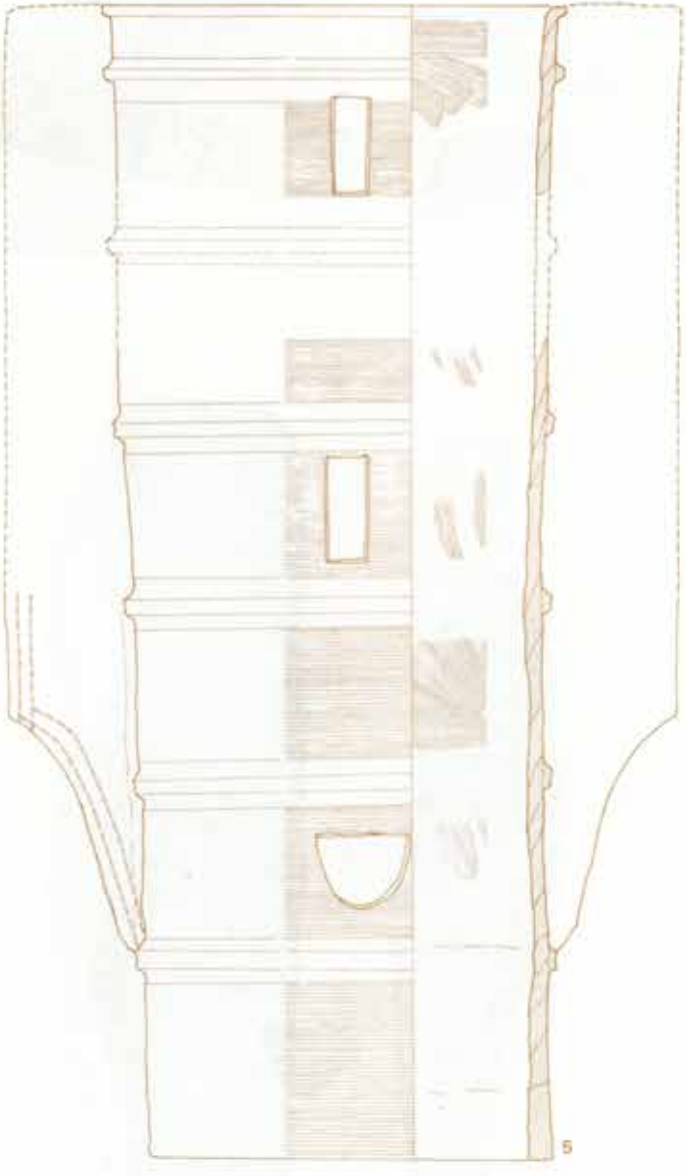
13

1・2・3・5・6　1:1　7・11　1:2　12・13・1:1.5

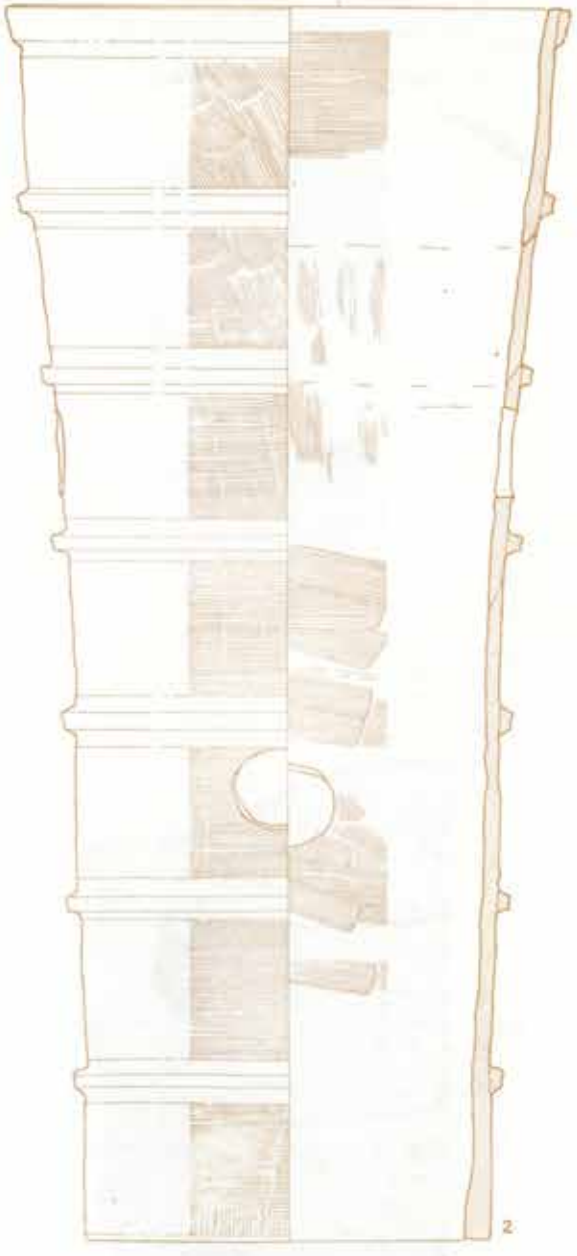


1

0 10 20 30cm



5



2

ウワナベ古墳　埴　輪

1:3

6

1

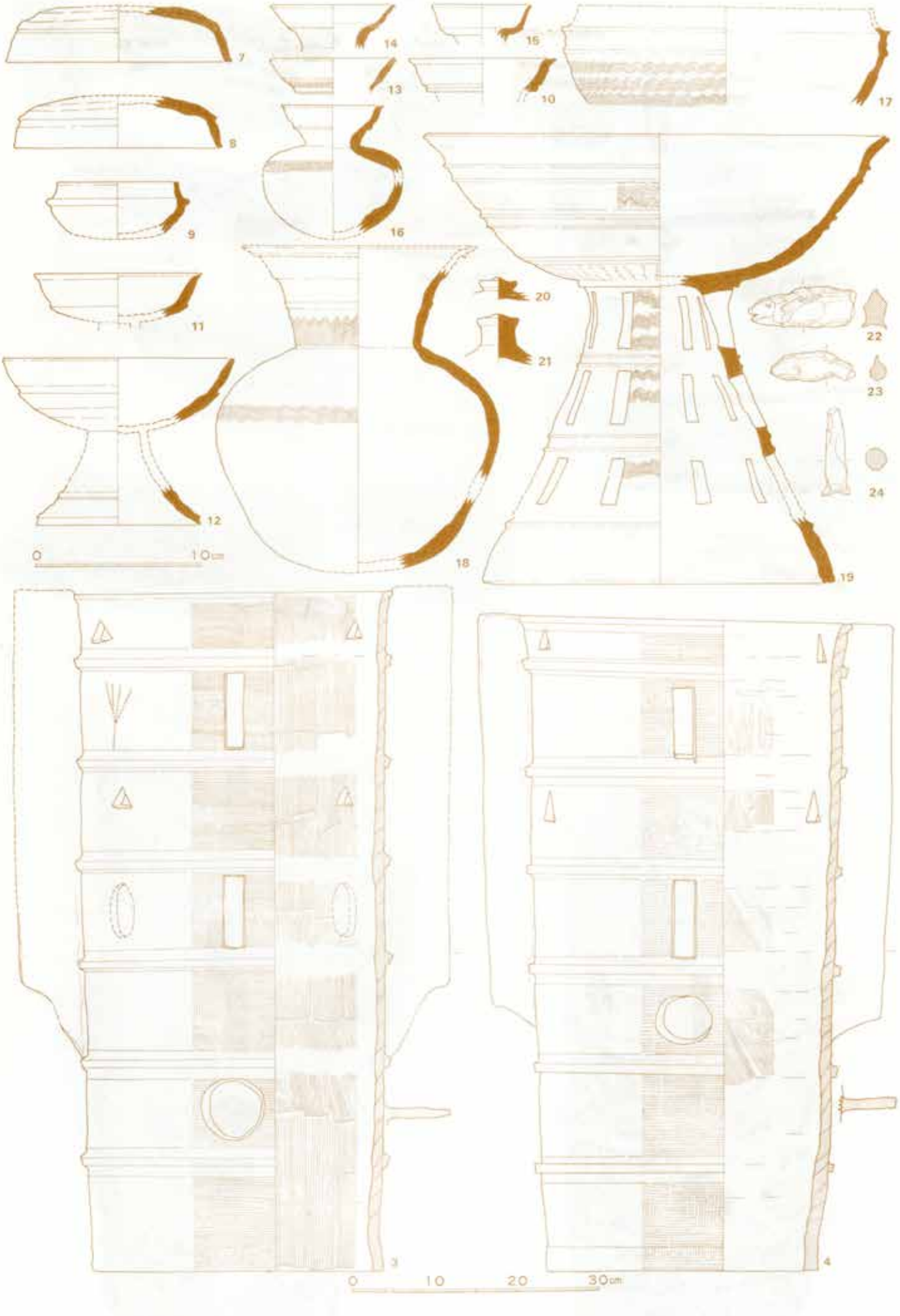
1

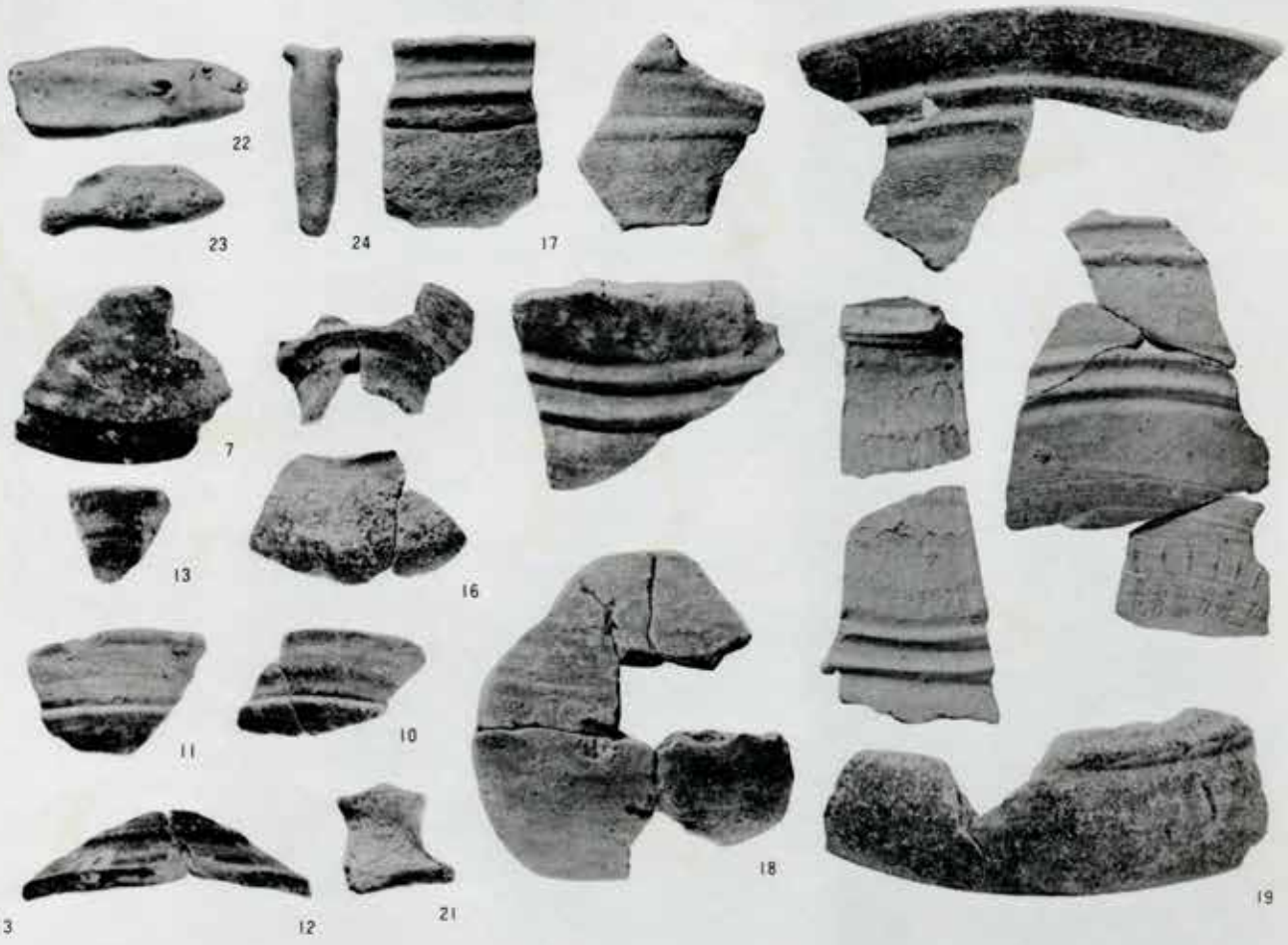
1

1:6

2

5

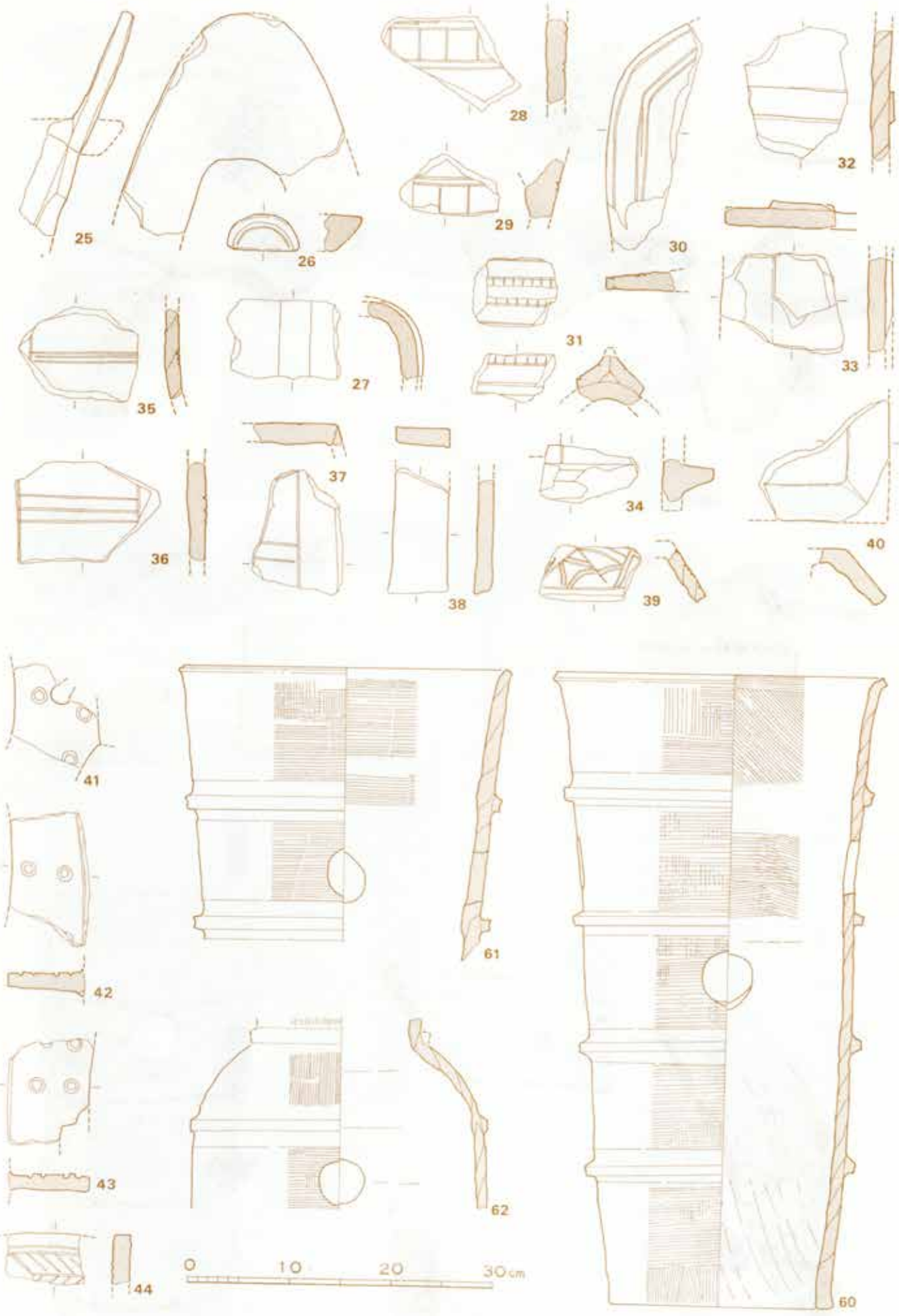

7
14
13
15
10
17
8
16
9
11
20
21
22
23
24
12
18
19
0 10cm
3
4
0 10 20 30cm


22
23
24
17
7
13
16
11
10
12
21
18
19
1 : 3

1 : 6
3

4

平塚1号墳


25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
60
61
62
0
10
20
30cm

25

1：3

32

38

26

27

29

44

1：3

36

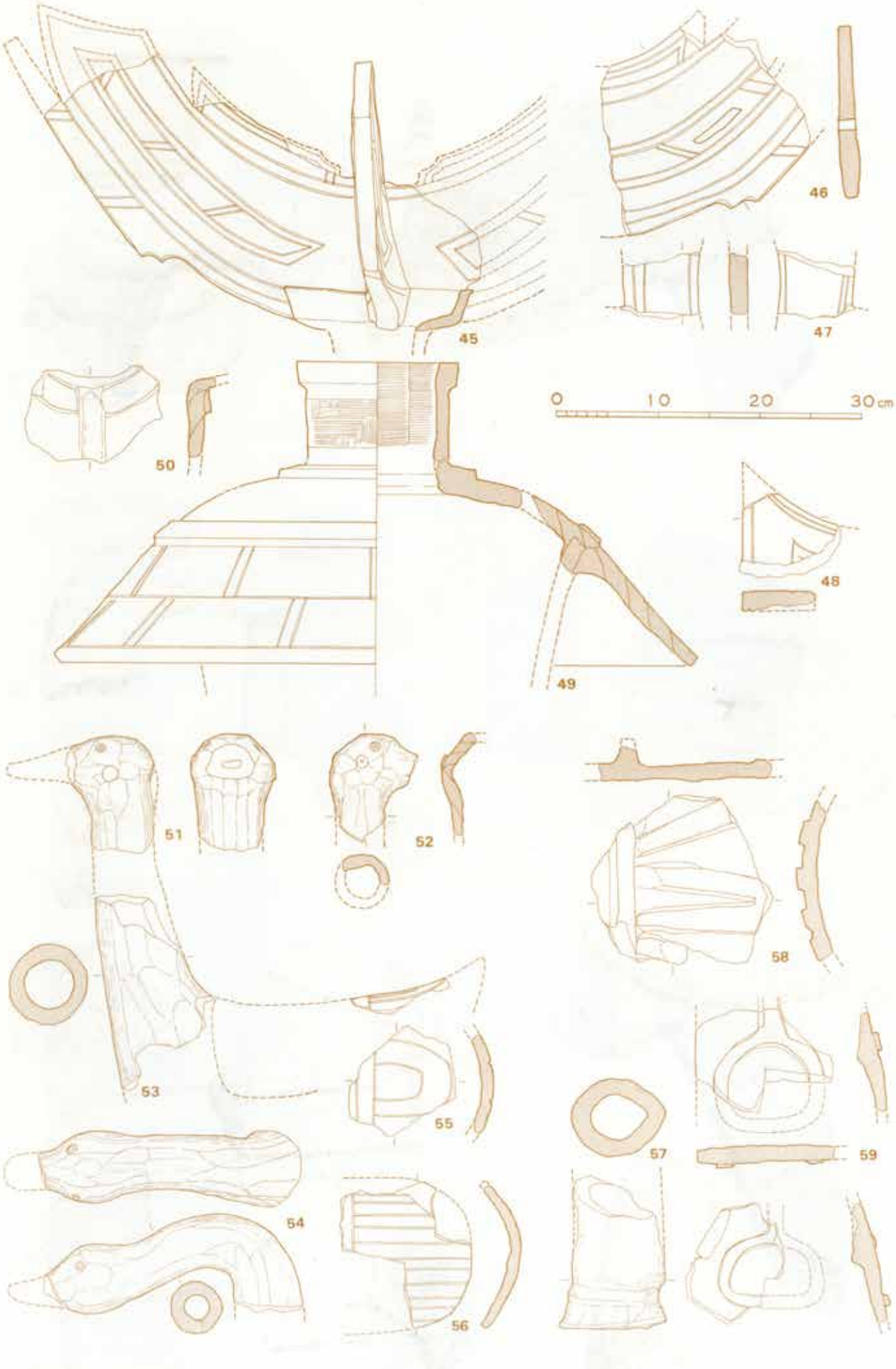
30

40

1：3

60

1：6


45
46
47
0 10 20 30cm
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

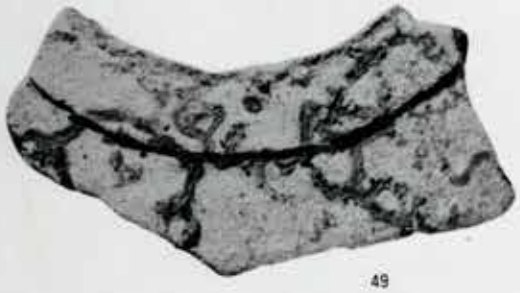
45

49

50

1:4

46



49

49

1:3

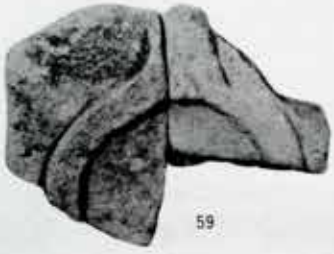
54

52

51

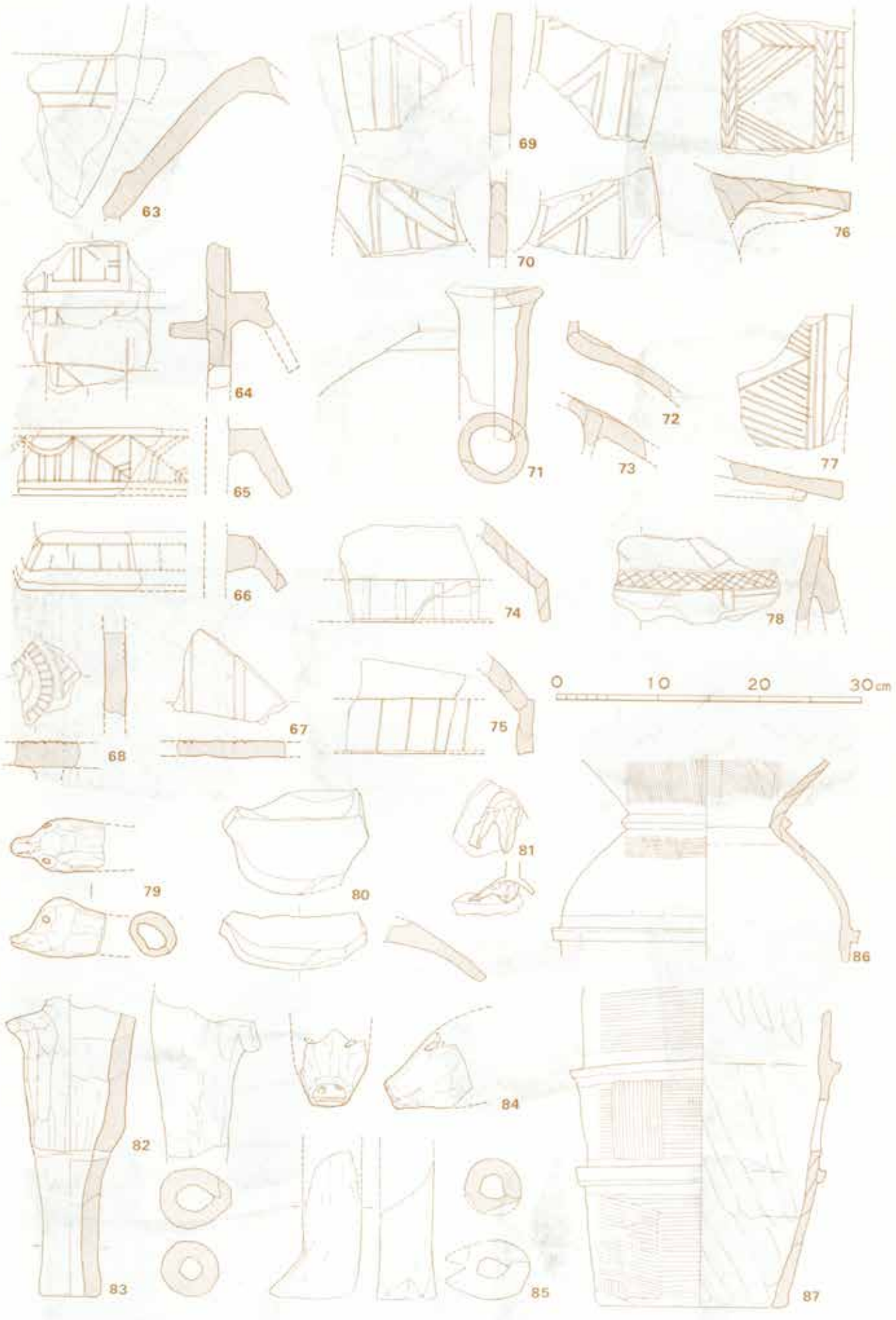
58

55

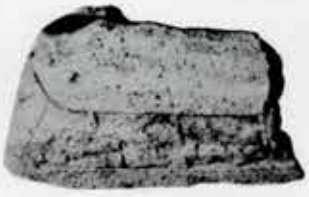


59

57


63
69
76
70
64
71
72
73
77
65
66
74
78
67
75
0 10 20 30cm
68
79
80
81
86
82
84
83
85
87

64


66

65

78

70

69

75

74

77

76

82

79

84

83

85

1 : 3

87

1 : 4

昭和49年12月20日　印刷
昭和50年1月31日　発行

奈良国立文化財研究所学報　第23冊

平城宮発掘調査報告 VI

—平城京左京一条三坊の調査—

版権所有者　奈良国立文化財研究所
奈良市春日野町50番地

編集・発行者　奈良国立文化財研究所

印刷者　株式会社奈良明新社
奈良市橋本町36